# 火拳は眠らない

生まれ変わった人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
火拳は眠らない

【Ｎコード】
Ｎ３５５３Ｑ

【作者名】
生まれ変わった人

【あらすじ】
マリンフォードで幾多の命が散った。彼もまた例外ではなく……だが、運命はそれを良しとはしなかった。彼は…ポートガス・Ｄ・エースは再び立ち上がる。これは『真・恋姫†無双』と『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』のクロスオーバーであり、はっきり言ってチートです。これに抵抗がある人は戻るをお勧めします。感想は誰にでも書けます。

# プロローグ（前書き）

それでは、出だしからどうぞ！！

# プロローグ

「こんなどうしようもねえ…俺を……」

戦場の舞台、マリンフォード。

とある海賊の逮捕が引き金となった事件。

世の歴史に刻まれる、海軍と四皇海賊の一人である白ひげとその海賊団と傘下の海賊連合軍との戦い。

「鬼の血を引く……この…俺を……」

その戦いは終幕へと向かっていた。

「愛してくれて……」

あまりに大きすぎる犠牲をもって……

「ありがとう……！」

戦争の幕が引いた。

『うあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

戦場に一人の悲しみが響き渡った。

その男……モンキー・D・ルフィ…通称『麦わらのルフィ』は泣いた。

その傍らに一人の亡骸を置いて……

海賊王ゴール・D・ロジャーの息子……

麦わらのルフィが助けると決めた唯一無二の兄貴……

白ひげ…エドワード・ニューゲートの愛すべき息子……

その男は静かに……微笑みながら……

計り知れない愛を受けながら……逝ってしまった……

ポートガス・Ｄ・エース……通称『火拳のエース』

赤犬の猛攻から弟…『麦わらのルフィ』を庇い…

その生涯を閉じた……

「あらん？」
「どうした？　貂蝉」
「それがね卑弥呼。外史に何者かが行った……様な気がするの」
「ほう？　久々の闖入者か？」

外史と正史の秩序を見守る番人は行動を起こし……

「あ、ねえ祭」
「どうした？　策殿」
「うん。今ね…流れ星が…」
「ほう……何かの前触れか……乱世の兆しの……」
「若しくは孫呉復興の兆し……かもね」
「？　策殿。なにやら嬉しそうじゃのう」
「うん。これから何か面白い……何か良いことがある……って私の勘がね♪」

「あら？」
「どうなされましたか？　蓮華さま」
「……いや、ただ流れ星が見えただけだ…」
「左様ですか…」
「それより思春。もう一手願えるか？　我等孫呉の力となるために…！」
「御意に…」

牙を研ぎ澄ませる英雄たちと世界はひたすら彼を待つ。

――親父……ルフィ…

神は言った。

彼はまだ死ぬ定めではないと……

# プロローグ（後書き）

違和感とかあったら感想までどうぞ。
感想は誰でも書けます

# 死からの誕生（前書き）

とりあえず様子見の二話目です。

# 死からの誕生

永い……夢を見ていた……

いや、本当に歩んできた自分の人生を夢だというのはおかしい。

しかし、今となっては夢と言っていいほど簡単に頭の中で反芻している。

ロジャーの息子というだけで世界から耐え難い差別を受けてきた。

しかし、そんなおれに手を差し伸べてきてくれた奴もいた。

サボ…ルフィ…ダダン…ジジィ…おれを育ててくれた奴…

それに……オヤジや白ひげ海賊団の皆も…おれを家族として迎えてくれた…

そんな皆がおれのために助けに来てくれた時は嬉しかった…

ありがとう…

「あらん？　まだ諦めるのは早いわよん♪」

……何だ……何か聞こえる…

「それにしても奇なることよ。何ゆえこの者が…」

何の……話を……

「多分……これから行く世界が彼を必要としてるのよん」

……連れていくなら早く連れて行けよ…

地獄にでも何でも…どこにでも……

「う……あぁ……」

おれは暖かみを感じ、目を開ける。

しかし、久しぶりの光をおれの目は受け付けず、また閉じてしまう。

しばらく目を閉ざし、慣れるのを待つ。

それから頃合いになったと思った時、おれは目を開けてみる。

ゆっくりゆっくりと開けてみると、そこは豊かな森の中だった。

木はざわめき、木の葉の隙間から太陽の光が差し込んで来る。

そんな豊かな森の中でエースは倒れていた。

背中からは土の暖かみと柔らかさが伝わってくる。

（ここは……どこだ……？）

さっきまで自分がいたところには少なくとも土は無かった。

それなのに、今いる場所には火薬の匂いと死臭が全くしない。

そこまで頭が現状を把握してきた時、エースはハッとした。

（おれは生きてる！？　そんな…だって…！）

エースは体を反射的に起こし、胸に手を当ててみる。

（！…どうなってんだ！？）

エースは重大かつ有り得ないことが自身に起こっていることに気付いた。

何故なら……

（傷が……赤犬に空けられた穴が…）

消えていた。

胸に空いていた穴…死を免れられない穴が…『そこ』には無かった。

体中からは痛みが湧きあがってくるというのに一番大きかった穴は無かった。

これは一体…どうなってやがる…

まさか……今までのことは夢だったのか…

（まさか！　そんなことあるわけがねえ！）

あってたまるか！！

エースはあまりにもかけ離れた『現実』に混乱する。

頭を抱えながら今の自分が陥っている事態の重さ、非常識さと闘う。

いくら（偉大なる航路）グランドラインでも死んだ人が生き返るなど聞いたことが無い。

たとえあったとしても、それが自分に降りかかったことだとは到底

信じられなかった。

「何が……どうなってんだよ……」

エースが頭を抑えてうずくまっていた時…

ガサ

草を踏み分ける音が聞こえた。

「誰だ！」

「…！！」

エースは痛む体を我慢して警戒しながら怒鳴る。

すると、一人の気の弱そうな少女がエースの視線の先で立っていた。

エースは臨戦態勢に入るが、少女はいきなりのことでどうしたらいいか分からないようで、目に見えて動揺していた。

そんな様子の少女を見てエースはオロオロしている少女を疑問視する。

（……こんな奴…戦場にいたか？）

それどころか手に持っている物もおかしかった。

少女の手にはカゴ。

そのカゴからは緑、赤、黄色といった物が見え、形だけ見ればすぐ

に分かった。

あの少女が持っていた物…それは、色とりどりの野菜だった。

「……野菜か…？…それ…」

「え！…あの…はい……」

消え入りそうな声で返事する少女を見て、エースは殺気を出すことが馬鹿馬鹿しくなって警戒を解いた。

「悪いな。少しビックリしちまってな」

「は……はぁ…」

さっきとは別人のように柔らかい口調のエースに少女は未だ驚愕しているといったところだった。

（……悲観するよりもまずは…）

エースは少女を見る。

（情報収集だな）

side　程普

ビックリしたぁ…

だって山で食べられそうな木の実とか山菜をいつも通り摘んで帰る最中にいつもとは違うことが起きた。

だって…帰ろうとしていた所で突然男の人が私に怒鳴ってきた。
その人は上半身裸で数珠みたいな赤い首飾りを付けていた。
一言でいえば珍しい格好の人だった。
しかし、男の人が構えを見せた瞬間、私の中の何かが警報を鳴った。
それは私との力の差を簡単に示した。
（この人…強い…）
この時、私の武器は自宅に置いていたことを思い出した。
（そんな……こんな時に…）
この時、私はアタフタしていたのだろう。
目をキョロキョロして慌てていると、男の人の殺気が薄れていくのを感じた。
「……野菜か…？…それ…」
え？　聞く所そこなの？
とりあえず私はその質問に答えた。
すると、男の人の警戒が消えたことを肌で感じ取れた。
「悪いな。少しビックリしちまってな」

本当に悪いと思っているのかさっきとは別人みたいにくだけて話す目の前の人に脱力してしまった。

この人、お腹すいてるのかなぁ？

そんな事を考えていると、男の人が話しかけてきた。

「あのよぉ…ちょっと聞きたいことがあんだけどよ」

「あ…はい。いいですけど…」

「へへ…サンキュ。じゃあな…聞きてえんだけど…ここはどこだか教えてくれねえか？」

「……へ？」

えっと…この人は何を言ってるのでしょうか…？

ここは江東の……袁術さまの領内なんですが……

「いや、変な質問だとはおれも思ってるけどよ、何も聞かずどうか答えてくんねえか！？　この通り！」

そう言って男の人は両手を合わせて頭を下げてきた。

ここまで頼まれるなら教えてあげよう…

「ここは江東の袁術さまの領内なのですが……」

私がそう教えると、男の人は下げてた頭を上げた。

だけど、何やら首をかしげています。

わ…私は何かおかしなことを言ったのでしょうか？

「こ…こうとう…？　えんじゅつ？……じゃあ質問変えていいか？」

「ええ、構いませんけど…」

「じゃあな…この島は新世界にあるのか？」

……はい？

「あの……えっと……新世界って……何ですか？」

困惑しながら私がそう言うと、男の人は口をアングリ空けて驚愕していた。

「……じゃあ……この島はグランドラインの島なのか？」

「ぐらうんど……らいん…？」

「……な…なら……イーストブルー……ノースブルー……サウスブルー……ウェストブルー……この中のどこか…なのか？」

「え？……え？……」

いーす……どこですか……そこ……

「すいません……いーすなんとかって何ですか？」

「……冗談だろ？」

「あの……至って真面目なんですけど…」

なんでしょう…男の人の目から光が消えていっている気が……

「じゃ……じゃあ…白ひげは？……海賊王に最も近い男ってのは…

……知ってる……よな？」

し…白……おひげ？

ひげって男性の鼻の下にできる毛……ですか？

それに海賊……？

最近までは河賊という義賊ならいたのですが……

「すいません……仰ってる意味がよく分からないのですが……」

とりあえず正直に言ってみると、男の人の顔が老けちゃいました。

え……！？　これ……私のせい……なんですか？

それとも私の応対に不都合なところでも…！？

必死に頭の中でこの状況を打破する方法を考えていたその時…

ぐぎゅうううぅぅ～…

「「……」」

なんだろう…おっきな音が男の人から聞こえた気が…

しかもこの音……

「……とりあえず家に来ます？」

「……」

男の人は未だ老けた顔でゆっくりと頷く。

どうしよう……こんなしわしわになって…

とりあえず野菜とか食べたら元に戻るだろうか？

それに家に着くまでこのままなら襲われる心配も無いし、家の武器も持って来れるだろう…

とりあえず、私が先行して歩くと男の人も後をついて来た。

（このまま死ぬと思うんだけど…）

一抹の不安を抱きながら私は家に向かった。

## 死からの誕生（後書き）

どうでしたか？　一応オリキャラを入れてみました。
明日の夜にもう一話いきます。

## 受け入れるべき現実（前書き）

今更……答えが見えてる質問ですが……北郷くんを出しますか？

## 受け入れるべき現実

ガツガツガツ　ムシャムシャ…

「……」

ガッガッガッ…ガツガツ…

「……」

ムシャムシャ…ゴクン…モグモグ…

えーっと……程普です。

今の状況は家に響く音だけで分かる人もいるでしょうが、説明させてもらいたいです…

私が連れてきた男の人が私の家の食料をどんどん食べています。

この村は自然に囲まれていて山の幸とか猪、農作物を主体にしているから食料には困っていません。

唯一の悩みは税が高いことですが、この辺境の村に袁術さまの手がのびることはそれほどありません。

ですから出せる食料も結構多めだったのですが……既に四人分はい

きましたね…

次々と食料が消えていくのを呆然として眺めていると……

「ぐっ！」

「え？」

男の人の頭が急に落ちました。嘘!?　さっきまであんなに食べてたのに…！

「大丈夫ですか!?　どこか怪我でも…！」

私は叫びながら男の人を揺する！

私が最悪の状況を想定して医者を呼びに行こうと考える。

（とりあえず顔色を見ないと！）

私はそう思って男の人の顔を自分に向ける。すると…

「グオー……クカー…」

「……え？」

男の人は気持ちのいい顔で鼻ちょうちんをふくらませながら寝ていた。

「なんで!?」

私は思わずそう叫び、更に一層揺さぶる。

「ちょっと起きてくださいよ！　まだ話すら聞いてないんですか！」

怪我人を揺するのも非常識だとは思うけど食事中に寝るのも非常識だと思い、必死に起こそうとする。

「ん……もう朝か？」

「まだ昼です！！」

何だか忙しい人だ。でも悪い人とは到底思えなくなってきた……

あ、そう言えば…

「あの～…そういえばあなたの名前を……」

「ん？　あ…そうか……悪いな…恩人に対して失礼だったな」

「いえ、私も忘れてたのですから構いませんよ」

そう言うと、男の人は咳払いをして口元を吊り上げる。

「おれはエースだ。ポートガス・Ｄ・エースだ。以後、お見知りおきを…」

「あ、はい。私の性は程、名は普、字は徳謀と申します」

そう言って頭を下げると、男の人…えーすさんは私をマジマジと見つめてきます。

「あの…何か…？」

「あ…すまねえ。少し変わった名前だなって思ってな…」

「そうですか？　私からすればえーすさんの方が変わってると思うのですが…」

「？　そうか？」

多分、エースさん…でいいよね？　エースさんと紹介し合った後、私はエースさんに聞いてみました。

どうしてあんなところにいたのか…と…

すると、エースさんも何が何だか分からないようなのです。

起きたら既に山の中で倒れていたというのです…

信じられない話だったのですが、嘘を言ってるとは思えない。

そこから話を聞いてみると、エースさんは色んな海を渡っていたようです。

そして、私が聞いたことも無いような海を冒険していたのことです。

最初は嘘かと思っていたんですが、話してるエースさんはまるで子供のようだったので本当のことだと思い、同時になんだか微笑ましくなっちゃいました。

しかし、私も知らないことばっかりだったので答えられずにいると、エースさんも老けるとはいかないけど目に見えて落ち込んでしまいました。

「そっか……何も知らねえんだな…」

「はい……すみません…」

「いや、あんたが気にすることじゃねえ…世話になったな程普」

「あ…はい…お気になさらず…」

そう言うと、エースさんは立ち上がって礼儀正しくお辞儀した後、家の出口に向かいます。

「どこ行くんですか？」

「ここにはもう情報が無いんだ。これ以上お前に迷惑かけられねえよ」

「まさか…この村を出るつもりですか！？」

「あぁ」

「それは駄目です！　村の外には賊の隠れ家があるんですよ！？そろそろ暗くなるから危ないですよ！！」

すると、エースさんはまた笑って言う。

「心配すんな。おれはやられたりしねえって」

「いいえ！　危ないんです！　賊は千人以上いるんですよ！？　エースさん一人じゃ勝てませんよ！」

「いや…でもここで世話になるわけには…」

「それでも駄目ですっ！！！」

会ってから間もない人にここまで怒るのは初めてです。

だけど、今まで話してきて思ったことはエースさんは決して悪い人では無いということです。

そこはほとんど勘なのですが、私が追い出して死なせていい人ではありません。

私は出口を塞ぐようにエースさんに立ち塞がり、じっと見つめるとエースさんは汗をかいて目に見えて困惑していました。

それでも私はエースさんの顔を見て睨んでいると、エースさんはうなだれた。

「分かった……分かったよ……お前の言う通り村は出ねえよ…」

それを聞いた瞬間、私は嬉しくなって思わず笑ってしまいました。

それに気付いて、慌てて口を塞ぐけど、幸いにもエースさんはまだうなだれていたので見られずにすみました。

「だけど、一飯の礼くらいはさせてもらうぜ」

「はい。ですから、しばらくは私の家で寝泊まりさせていただきます」

満足気に言うと、エースさんも苦笑いしてお手上げといった様子だった。

何とか思いとどまらせることができて、私は胸を撫でおろした。

ｓｉｄｅ　エース

やっぱりおかしい……

山の中でもそうだったけど、オヤジのこと知らないって…

それに海の名前まで知らないって…どんな田舎だよ。それに自惚れじゃねえがおれの名前、ポートガス・Ｄ・エースの名前も知らない…

まるでそんな物は存在しないって言ってるみてえに…

多分マリンフォードのことも聞いても無駄だろうな…

それとここらの地域…江東とか言ってたな。そんな土地の名前なんか聞いたこともねえ…海図にもおれの記憶にもそんな名前の土地なんかあったか？

（く～…考えれば考えるほど分からねえ…）

エースにとって常識とは『常識なんて存在しない』とのことだ。

つまり、この生きている限り何が起こっても不思議ではないということだ。

今回もその例にならって事態を進めている。

しかし、こんなことはエースにとっても異質なことだった。

まるで今まで自分がやってきたこと…自分だけではない仲間が最初

から存在してなかったかのように…

（いくら何でも有り得なさすぎる…）

そもそもおれは死んだはずだ…そこは間違いない。

エースは体の痛みを感じながら思う。

おれは戦った。皆と一緒に…そして死んだ。だとしたらここが死後の世界って奴か？

そう思いながら鼻歌混じりで料理をしているポニーテールの少女・程普を見ていると、溜息を洩らして考えを改める。

（…地獄の使者にしては家庭的すぎる…か）

だとしたらおれは死んだ後生き返った…って訳か？　おとぎ話よりもタチが悪い…でも……

エースは自分の手で胸を撫でる。

（オヤジたちが助けてくれた命……無駄にならなくてよかったぜ…）

エースは自分が助かったことに心から安堵した。

もし、ここで死んでしまったら何のためにオヤジたちが命をはってくれたか分からなくなる。

それに、処刑台の上で誓った。どんな運命も受け入れると……

もう一度誓おう。今のこの状況を受け入れ、生を受け入れようと…

この先、またオヤジたちと会えるか分からない。けれど生きよう……

またゼロからの始まりだ。

「エースさん。ご飯できましたよ？」

「おう。んじゃ食器はどこだ？　おれが出すぞ」

目的ができるまで……しばらく休むのも悪くねえな…

自分の現状は何一つ分かっていない。

それでも……彼は進み続ける。

そこに道がある限り……

## 受け入れるべき現実（後書き）

次回もまたお楽しみに！

## 天に祈りを…（前書き）

遂にあのキャラが出てきます。
それと、これからテストが本格化してくるので更新が遅れるかもです。
それでもこの作品をよろしくお願いします！！
それと改善してほしい点は例と説明を添えて感想までお願いします！

# 天に祈りを…

こんにちは。程普と申します。

最近までわたしは家で一人で住んでいました。ですが、今や家にはもう一人の同居人が増えました。

「よし、かかって来い程普」

「はい！」

今、目の前で構えも見せずに挑発しているのはエースさん。

何でも海を渡ってきた異国人とのことです。

最初の内は怪我をしていたので家に置いていました。

村の人もエースさんには驚いていたけど、エースさんは気さくな方だったのですぐに村の人と馴染んでしまいました。

それに家の手伝いをしてくれて最近ではそんな生活にも慣れました。

そして今、わたしは自慢の手甲をはめてエースさんに構えております。

どうしてそうなっているかというとそれは数日前にまで遡ります。

わたしが早朝に鍛錬していた所をエースさんに見つかりました。その時、わたしがエースさんに勝負を挑んでみました。

初めて会った時、エースさんが見せた気迫を思い出したからです。
間違いなくエースさんは強いと思い、そんな人にわたしがどれだけ通用するのか試したい…そう思い、怪我が完治していない所を悪いと思いながらも頼んだら承諾してくれました。

世話になっているお礼だそうです。

そんなエースさんに感謝しながらわたしは全力で挑んでみました。

結果は……惨敗でした……

わたしの攻撃は全て避けられ、受け流され続け、結局は体力が無くなってしまいました…

エースさんは一切攻撃してなかったとはいえ、汗どころか息の乱れも見られず、笑って介抱までされちゃいました…

攻撃されずに負けたことがとても悔しかったので、また翌日挑んでみましたが結果は同じでした。

しかし、そこでエースさんはわたしに助言をしてくれました。

その話を聞いてみるとどうも心当たりがあることばかり。客観的に見なきゃ分からないことを的確に教えてくれました。

この時から時々エースさんからご教授いただく為に鍛錬に付き合ってもらっています。

そして、戦い続けて今に至るわけです…

「行きます！！」

わたしの声にエースさんは笑みを崩さずに態勢も変えずに待つ。

返事を待たず、エースさんに突っ込んで拳を振り上げた。

「また負けちゃいました……」

わたしは疲れている体を引きずってエースさんと帰路を辿っています。

またまた結果は同じでした。

「お前は直線的で攻撃の威力は高い。だが、いくらなんでも直線的すぎて逆に避けやすいんだ」

「じゃあどうしたら…」

「お前は巧みなフェイントを身につけた方がいい」

「ふぇいんと……ってなんですか？」

「フェイントってのはな、例えばまっすぐ拳で殴る……とみせかけて蹴りをお見舞い、もしくは殴るとみせかけて殴らずに相手の無駄な防御を誘うとか……要は相手を騙す技法だ」

「騙す……ですか？」

「ああ。その騙しを攻撃に組み込めば戦闘力も大分違ってくるぞ」

「でも……それって難しいことなんじゃ…」

「まあな。だから最初は意識して慣れさせることからやってみろ」

「はい！　分かりました！！」

本当に勉強になります…ですがそうやって教えてもらったことをわたしなりに実践してみても中々エースさんには敵いません。

わたしって才能が無いのでしょうか……

「まあそう簡単に強くなりはしねえよ。焦らずいこうぜ！」

エースさんはわたしの心を読み取ったのか笑いながらわたしの頭を

撫でてきた。

「むぅ……子供扱いしないでください」

わたしはむず痒くなってそんなことを言ってしまうけど、正直あまり嫌ではありません。

こうやって頭を撫でられるのはわたしが物心ついた時以来だからちょっと懐かしいんです……

「あら程普ちゃんにエースちゃん。また鍛錬？」

「おお、エースか！　今日も元気か！？」

「あ、お婆ちゃんにお爺ちゃん。おはようございます」

「おう！　おれは元気だ！　じいさんとばあさんはどうだ？」

「元気に決まってんだろ！　くだらねえこと聞くんじゃねえよ！」

「はっはっは…！　それもそうか」

途中で村のおじいちゃんとおばあちゃんと出会って挨拶を交わす。

この二人もエースさんを気に入っています。

それを証拠に笑い合っての挨拶はとても平和で微笑ましいです。

「ところで、今日も鍛錬してたのかい？」

「はい…でもわたしはまだまだです…」

「ほう…村の中で一番強いお前にそう言わせるなんてな…さすが程普ちゃんの旦那だな！」

「ぶっ！！」

わたしはおじいちゃんの一言を聞いて吹いてしまった。

「ち…違いますよ！　エースさんは数日前に怪我をしてやってきて…その…困ってたから家に置いてるだけなんですよ～！」
「あらあら…それにしては顔が真っ赤よ？」
「お…おばあちゃ～ん！！」

これはエースさんが来てから新たに生まれた問題です。

わたしとエースさんの夫婦説が生まれてしまいました…

最初は村の皆はエースさんを怪しんでいたけど、警戒を解いてくれたのはさっき言った通りです。

しかし、今度は信頼しすぎ、わたしとエースさんが一緒に住んでいるが判明すると『程普とエースは婚約した』などという身に覚えの無い疑惑をかけられました。

もはや村人の老若男女問わず全員が知っている。

近所の子供にまで噂され、同い年の男の人は何故か奇声を上げていた。一体なんだったんだろう…

そんな噂されたわたしは赤面ものであったのに、もう一人の当事者のエースさんといえば…

「そりゃ面白い噂だな。だが、程普はどっちかつうと妹みてえなもんだな」

笑って夫婦説は否定。その代わりにわたしを妹だと言って頭を撫でてくるのだ。

それはそれで恥ずかしいし、複雑な気分になるのですが……

「あらそうかい？　やっと程普ちゃんにも春が来たと思ったのにねぇ…」

「まだ若干寒いから春じゃないと思うんだが？」

「そういう意味じゃ……まあなんにせよだエース。しっかりと程普を守ってやんな！」

「おう！　絶対護ってやるよ！」

エースさん……そういうことを恥ずかしげもなく、しかも大きな声で言わないでください……

「ん？　程普。お前少し顔赤いぞ？」

「え！？　いや…なんでもないですよ！」

「そうか…？　さっきので疲れたんなら食材集めは今日休め」

「ええ大丈夫です。大丈夫ですとも…」

「そうか……無理すんなよ？」

誰のせいだと思ってるんですか……

こうしてわたしの慌ただしい朝は過ぎていくのでした。

side　エース

今日も奇妙な体験をしてから数日がたった。

村での生活も慣れ、連中とも上手くやっている。

『な。エース。おめえさは程普と夫婦って言われてっけども、そこんところどうなんだべ？』

『どうもなにも、おれはただ程普の家で居候している身だ』

『そ…それだけか？』

『ああ』

『そ…そうか…よかった…』

時々、村の男全員と話し、一定の確率でおれと程普との関係が話題に上がる。

やっぱ新顔のおれは信用されてねえのか？

村の女には『家にもどうぞいらしてください！』とか言って程普に怒られてる奴もいた。。

「どうしました？　エースさん」

「いや、何でもねえ。お、キノコ見っけ」

「それ毒キノコです」

今は食料収拾に精を出している。

こうして二人で山での食料集めも日課となっている。

程普が見てない所で能力で焼いて食ってるのは内緒だ。

「そろそろ帰りましょうか？」

「だな。今日は大量だしな」

こうしておれ達は帰って飯を食うのが日課となっていた。

今日までは……

おれ達は他愛のない会話に華を咲かせながら村へと帰る。

「それにしてもよく採りましたね」

「そうか？　まあ、自分の食いぶちくらい自分で何とかしなくちゃな」

「そうですか」
「ああ、料理はお前に任せっきりだからな、これくら……い…」
「エースさん？」

おれはいつもと違う違和感を感じ、立ち止まる。

（何だ……これは……）

何となく感じる違和感を探っている内にその正体を掴んできた。

（これは…匂い…焦げた匂いか…）

違和感…焦げ臭い匂いに何か言い知れぬ物を感じ取り、村の方向を見据える。

「…走るぞ……程普」
「？　どうした…って何を！？」

おれは返事を待たずに食料を程普に預けて走る。

「え！？　ちょ…エースさーーーん！！」

何か言ってるようだが待ってる暇はない。

嫌な予感を振りほどくようにおれは先を急ぐ。

side　程普

エースさんが走りだしたのを急いで追いかけていくと、何か変な匂いが漂っていることに気付いた。

それは何かを焼いている匂いだった。しかも匂いの中には鼻をつんざす様な匂いも混ざっている。

吐き気に耐えながら森を抜けると、景色が広くなった。

そのおかげで見てしまった。

村の方角が赤く光っているのを……

目撃した瞬間、わたしの頭がグラついて倒れそうになる。

でも遥か前方で走っているエースさんを見て正気に戻る。

わたしだけ気絶するわけにはいかない！

わたしは折れる膝を叩き、また走った。

しばらく走り、いつもより長い距離を走ってるのかと思うくらい走った気がする。

その間、わたしは想い続けた。

（嘘だ…嘘だ…嘘だっ！）

違ってほしいと思いつつも村に近付くにつれて嫌な鼓動が胸を打つ。

そして村の入り口に辿りつくと……

「……嘘…」

炎に包まれる村を見た瞬間、目の前が真っ黒になってしまった。

side　甘寧

「思春！　状況は！？」
「現在、集落が賊に襲われた模様です。今しがた賊は退却したそうです」
「そうか……私たちも行くぞ！　まだ生存者がいるかもしれない！」
「で…ですが蓮華さま。まだ賊の残党が潜んでる危険があります」
「それでも！　ここで人を救えなければこれから先、何も救えないわ！」
「蓮華さま…」
「だから思春…頼む…」
蓮華さまの熱意がヒシヒシと伝わってくる…
「御意に…」
私の言葉に蓮華さまは頷き、兵に医者の手配、村人の救出を命じる。
そもそもここに来たのも元々は税の徴収のため。
愚かな袁術の怠慢で山に隠れた村のことは忘れられていたのだ。
そのため、袁術の呪縛がかかっている蓮華さまが袁術の下請けとして村を訪れて徴収しに来たというのに……
念のため護衛に付いてきて本当によかった…
「それでは思春。行くぞ」
「はっ」
蓮華さまのお傍で狼藉を働く輩の出現に備えて剣を構える。

「ひどい……」
「……」

蓮華さまの仰る通り、家屋は燃やされ、人の亡骸が転がっている。
強姦された後であろう腹に刺し傷のある女性、頭を鈍器でわられた老夫婦…他にも老若男女問わずか…

「下衆共が…」

私は耐え難い怒りを抑えて剣を握る。
村を蓮華さまと巡回していた。
人気もなく、生存者も村から出たと思っていた。
その時……

「動くな」
「「！！」」

前方の暗闇から静かな声が聞こえた。
静かで……怒りに満ちた声だった。

「誰だ！！」

私は蓮華さまの前で構える。
敵かもしれない見えぬ相手に敵意をむき出しにする。

そして膠着状態が長いようで短い数秒間続いた時にその声の主は現れた。

怪我した童を抱いて……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エースは倒れている村人を見つけて介抱していた。

だが、ほとんどの者は既に……

エースはそれでも諦めず、呆然としていた程普の正気を戻す。

そして、二人で捜索を続けていた最中にエースは見慣れない二人を遠目で発見し、今に至る。

「…お前等……村の奴じゃねえな…何者だ…」

「……お前こそ何者だ…」

「おれか？　おれはポートガス・Ｄ・エース。村の居候だ」

「居候？」

「ああ。今度はおれが質問するぜ。正直に答えろ」

エースは相手に質問の機会を与えずに淡々と話を進めていく。

そして鋭い目で二人を睨む。

「お前……お前等がこの村を襲ったのか…？」

エースは子供を抱える手を震わせて聞く。

「…それは私も聞きたい。お前は…」

釣り目の女性がエースに質問で返そうとした。

その時…

「お前等がこの村を襲ったのかって…こっちが聞いてんだよ」

「「！！」」

エースの鬼気迫る迫力に二人は身を震わせる。

武器を持っている女性でさえも一瞬怖気づいたほどだ。

守られている女性は震えを止められずにいるが、護衛の女性は震えを堪える。

彼女を支えるのは武人としての意地。

そして主を護る覚悟と忠誠心。

だから彼女の最優先事項の護衛のため、彼女は最善の行動をとる。

「…私たちは賊ではない。ここの領主の代わりに村人の救出に来た軍だ」

嘘偽り無く、全てを話すことだった。

「……信用できるのか？」

「……我が剣…魂に誓って…」

甘寧は逆手に持った自慢の剣を突き出す。

再び両者共膠着状態になる。

しばらくそんな状況が続く。

かと思われたが…

「…分かった。あんた等は信用しよう…」

エースは踵を返すのを見て女性たちも一先ずは安堵する。それと同時に鋭い空気が消えた気さえする。

それからエースの後を追いかける。

とりあえず程普と合流しようとするエースに女性たちが話しかける。

「あの…」

「何だ？」

「お前…ぽーと…がす…」

初めて聞く名前に口が回らない女性にエースは『エースでいい』と言う。

「それじゃあエースでいいんだな？」
「ああ。そういうあんたは？」

エースの一言に女性は思い出した様に言う。

「まだ名乗ってなかったな。私は孫権、字は仲謀だ。それで、こっちが私の護衛の…」
「甘寧だ」

甘寧は名乗るだけで終わる。

そして、歩いていると程普に会う。

「あ！　エースさん！」
「よう。あ、こいつまだ生きてるぜ」

エースは気絶している子供を程普に見せる。それを見た程普はホッとするも、すぐにエースの背後の孫権たちに気付く。

「あの…エースさん…その人達は…」

そこでエースが紹介しようと口を開きかけた時、前に出た孫権が手で制す。

「我が名は孫権。領主袁術の使者として来たのだ。こっちが甘寧だ」
「領主さまの使者でしたか。わたしは程普と申します」
「程普か…我等は税の徴収のために来たんだが……」

孫権は瓦礫と化した村を見て悲しみの色を浮かべる。

「……それ所では無いようだな…」
「……はい…」

程普も泣きそうに目が潤んでいる。しかし、程普は泣くのを堪えて報告を続ける。

「ですが、残りの生存者の居場所には見当がついています」

それを聞いた時、エースを含め、孫権と甘寧も驚きを隠せなかった。

「そりゃどういう事だ?」
「この村は知っての通り、山に囲まれていて山との馴染みが深いんです」

程普は山の一点を見つめる。

「ですから、もし賊にこの村が見つかった時のための隠れ家を山の中に…」

それを初めて聞いた面々は感心と歓喜の色を浮かべる。

そして、孫権は表情を引き締めて程普に聞く。

「程普。その隠れ家に案内してくれるか? 中には医者が必要な民もいるかもしれん」
「分かりました。付いて来て下さい」

程普は孫権の申し出を引き受け、誘導のため先行して山に続く道に入る。

しかし、孫権の背後を付いて行こうとしていた甘寧はエースが立ちすくんでるのに気付く。

「おい。来ないのか」

「……」

甘寧の声に反応したのか、エースは何も言わずに立ち上がって孫権たちの方向に歩いて行く。

「……」

甘寧はそんなエースを見て、何かを漠然と感じていた。

それはあまり良い物とは言えない。

しかし、結局は気のせいだと判断して一行の後を追う。

ｓｉｄｅ　程普

慣れた山を練り歩いていると、隠れ家を見つけました。

そして、中を覗くと予想通り村の皆がいてくれました。

そのことに心が軽くなったけど、まだ胸の痛みが大きい…

そんな中、一人の人影がわたしに近付いてきた。

「おお……無事だったか…程普…」

「お爺ちゃん…」

人影の正体はお爺ちゃんだった。

いつも大きい声で笑っていたお爺ちゃんが凄く……悲しそう…

そこでわたしはお婆ちゃんがいない事を辺りを見回して気付いた。

「お爺ちゃん。お婆ちゃんは…？」

「……」

お爺ちゃんは何も言わずにある一点を震える手で指をさす。

わたしはその方向を見ると…そこには……

「……そんな…」

お腹からおびただしい量の血を出してるお婆ちゃんを見つけました。

「嘘……なんで…」

わたしはその光景を夢だと思いこみながらお婆ちゃんに近付いて手を伸ばす。

（そうだ……これは夢だ…さっきまで笑ってたから大丈夫だよ…）

わたしは目の前で息を荒げるお婆ちゃんを見つめながら全く見当外れも甚だしいことを思っていました…

ですが…

「……」

お婆ちゃんのお腹を触った時の手触りで…目が覚めました…

生温かい…真っ赤に輝く命の証がお婆ちゃんから漏れている。

「あ…ぁ…」

わたしは何も言えなくなってしまった。

お婆ちゃんが……死んじゃうよ……

わたしは遂に立てなくなってへたりこんでしまった。

「あんた……袁術さまの使者だって…？」

「ああ。そうだ」

わたしがへたりこんでいる中、お爺ちゃんは孫権さまに詰め寄った。

孫権さまが軍の人間だと知ると、お爺ちゃんは土下座を始めた。

「お願いします！！　おれの…おれの妻を助けてくださいっ！！

医者を呼んでくださいっ！！！」

「……すまん。医者の手配はしたが、いつ来るか…」

孫権さまも辛そうに唇を噛みながら答える。

だけど……

「お願いしますっ！！　金でも食料でもなんでも献上しますから妻を…！　お願いしますっ！！」

「……すまん…」

お爺ちゃんは土下座を続ける。

頭を強くこすりつけて血が滴れるのも構わずに…

孫権さまも体を震わせて謝罪を続ける。

お爺ちゃんの行動で周りの人の精神も切れかかり、いつもは豪快な大人の男の人も…笑顔を浮かべて遊んで大人たちに微笑みをくれた子供たちも……皆…泣き続ける。

孫権さまは兵隊の人に指示を出し、甘寧さんは押し寄せてくる村の人達を残った兵と一緒に抑えようとしている。

こんな時、わたしも手伝わなければならない…

そうしなきゃ……いけないのに……

「なんで…なんで…」

そんな光景を見てわたしの視界もぼやけてしまう。

「こんな……時に……」

わたしが強くなろうと思ったのはこの世の中から戦を無くしたかったため…泣いてる人たちを救いたかったから……

なのに……

「もう……やだ……」

かみさまって……いるのかな…

いたから……こんなことしたのかな……

わたしたちが……悪いこと……したのかな……

「……助けて……」

神様でも…軍隊でも……悪魔でも……誰でもいいから……

「……助けてよぉ…」

皆の……仇を……連れ去られた人たちを……

自分では無理だと分かっているから願わずにはいられない…願うことしかできない……

自分は無力で……ちっぽけだから……

程普は……自分の無力を嘆く少女は助けを求めた。

いるかも分からない神様に…

力をもっている軍隊に……

幻想の中の現れぬ救世主に……

自分たちを見下ろす天に……

助けを求めるしかなかった…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エースは隠れ家の外から真っ赤に光っている村を静かに見据えている。

静かに……しかし、胸の内に燃えたぎる衝動を抱いて…

そんな時、隠れ家から勢いよく飛び出してきた子供を見つけた。

エースは即座に子供を羽交い締めにして動きを止める。

「離してくださいっ！！　僕の…僕の妹が…お母さんがっ！！」

エースはその子供に見覚えがあった。

よく、母親と父親と一緒に家事や農作業を手伝っている子供だった。

他の子供たちと遊ぶ時にはちっちゃな妹の手を引いて遊ぶ、親孝行で妹想いの長男だった。

だが、その子の目には最早真っ赤に燃えた村しか映っていない。

歯をむき出しにして暴れるのを止めない。

憎しみはここまでに人を変えてしまうのだ。

「止めとけ。お前が行った所で、殺されるだけだ」

エースは上から黙らせるように威圧感を乗せて言うも、少年は止まらない。

「それでもっ！　奴等に僕の妹とお母さんが連れてかれて…！！僕が守らないと！！」

このままだと少年は凶行に走るだろう。

エースは今はいない父親…白ひげを思い出す。

（こういう奴が現れた時……オヤジは……）

新世界の航海中に恐怖で発狂する新人船員が出ることは珍しくなかった。

そんな時、白ひげがとった行動は、ただ怒鳴るでもなく、慰めをかけることでもなかった。

ではどうしていたか？

それは……

「だから僕が奴等……を…」

少年は急に口が動かなくなった。

何故なら急に心地よい暖かさが体を覆ったからだ。

何故？

それは少年がエースに抱きしめられていたからだ。

不安を怒号でかき消すでもない。

慰めで誤魔化すでもない。

不安や悲しみ、怒りを己の体で一緒に包みこんでやる。

こうして不安が再び襲ってきても、今度は守ってやる。

偉大な父親がやっていたように……

しばらく、エースは少年の体を抱きしめ、少年の雰囲気が落ち着くまで抱きしめ続けた。

そして、少年が落ち着いたのを感じると、優しく言った。

「……お前の父親は？　中にいるのか？」

「……」

頷く少年にエースは『そっか』といって少年を離す。

そして少年の目を見て言う。

「お前の母ちゃんと妹……生きてるのか？」

「……」

少年は首を縦に振る。

それを見たエースは屈んでいた体を起こしながら聞く。

「……その賊がいる場所って分かるか？」

「……はい…よくお父さんとお母さんが……村の西北の洞窟には近付くなって……」

少年は指をさして言うと、エースは何も言わずに山を降りようとする。

しかし……

「待ってください！　どこに行こうとしてるんですか!?」

少年の必死な質問にエースは先程とは違った明るい口調で答える。

「なーに。少し野暮用を思い出してな…朝には戻ってくるから心配すんなよ」

多分、その答えに少年は全てを察したようだ。

すぐにエースの元へ向かおうとすると……

「来るな」

冷たい声で少年を止める。

少年は何も言えずにその場で立ち止まってしまう。

そんな時、エースは言った。

「すぐに皆で戻ってくるからな。少し待ってろ」

ニカッ…と満面の笑みでそう少年に言い聞かせる。

その表情を見て少年はもうエースを止めることができなくなってしまった。

男同士で伝わる何かをエースから受け取ったからかもしれない。

エースは再び山を降りようとすると……

「絶対……絶対皆で戻って来てください！！」

少年の切なる想いを背中に受けてエースははっきりと言った。

「当たり前だ！！」

その言葉は少年に届き、風に乗って天に舞い上がっていった。

やがて隠れ家が見えなくなった所まで山を降りると、エースの体から炎が現れた。

炎は両手から始まり、やがては両腕を包んだ。

最早、その炎以外に言葉はいらない。

灼熱の炎はしっかりと燃え続ける。

決して弱まることもなく静かに燃え続ける。

まるで時が来るまで力を蓄えているかのように……

その能力者の心を写す炎を纏いながら、男は一人、村の北西に向かう。

## 天に祈りを…（後書き）

次回はエース無双でいきたいと思っています！
では、また次回にお会いしましょう！！

## 復活の火拳（前書き）

更新が予想通り遅れました。
しかもテストは二月中旬まで続くので、それまでは更新が滞ります。
誠に申し訳ありません。
私の目標、それは最終回で『ｍｅｍｏｒｉｅｓ』の音楽をイメージソングにすることです！
それでは今回もどうぞ！

# 復活の火拳

村の北西の洞窟では宴が行われていた。

黄色い布を頭に巻いた男たちが酒を飲み交わしている。

酒を飲みながらご飯、野菜、肉といった食料を食らっていく。

村を襲った賊……黄巾党の食べている物は買った訳でも自分たちで育てた訳でもない。

全て村から奪ったものだ。

我が物顔で飲み食いする黄巾党を連れ去られてきた女子供は男たちを射殺すように鋭く睨む。

しかし、その村の女性も賊の慰み物として引っ張りだされ、陰部などをまさぐられ、女性としての尊厳を踏みにじられる。

表情も一変し、襲われて泣き叫ぶ女性を見て体を恐怖で震わせる。

それを見ている黄巾党は下卑た笑いを浮かべて犯される女性を見る。

自分たちが味わう征服感と満たされる性欲を満たすためだけに女性を犯す。

女性の悲鳴に幼い少女たちも脅える。

いつも村で遊んでいる時の表情とは一変し、恐怖で顔を涙と鼻水で濡らして震えている。

奴隷として売られるために連れて来られた少女たちにとって目の前で起きていることは惨劇としか言えなかった。

大人の男の歪んだ欲望を目の当たりにして大人子供関係無く失禁する者もいる。

失禁することは恥じゃない。

自分たちにいつ下るか分からない惨劇を見せられているのだから仕方の無いことだからだ。

こうして、洞窟の中では狂気に満ちた悪魔の宴が行われていた。

「ったく……いいよな。中の奴等は…」
「全くだ…早く交代時間になんねえかな～…女の体を堪能して一服してえぜ」
「頼みの綱は村に戻った奴等がまた女をかっぱらってくることだな」
そんな話を洞窟の前の見張りを任されている男二人がぼやく。
外まで宴の笑い声が響いてくる。
男たちは宴をしている仲間に僻みながら見張りを続けていると…
「ん?」
「どうした?」
「おい……前から誰か来てねえか?」
「どれ…」
二人の男たちは目を凝らして闇を見つめていると、確かに何かの影があった。
森の木にさえぎられながらも月の光で人影だと分かったらしい。
「女を連れてきたか?」
「お、そりゃいいねえ」
森から来たということは村に行って残った女を攫いに行った部隊だろう。
男たちはそう思って声をかけに行った。
そして、段々と姿が見えてくると、その男は黄色い布を頭にかぶっ

ていた。

しかし、その男は何も持っていない手ぶらだった。

様子がおかしいと思った二人は首を捻りながら男の方に向かっていると信じられないことが起きた。

急に男の両手から炎が出現した。

「なっ！」

何も無い所からの炎の驚愕も一瞬のことであった。

「神火　不知火！」

男は両手の槍状に変化した炎を二人の賊に投げる。

その槍は男たちに当たり、声も出させぬ間に男たちを吹き飛ばす。

男が倒れる所を男は無言で通り過ぎる。

そのまま男は野太い笑い声が響く洞窟に入っていく。

side　程普

「はぁ…はぁ…」

わたしは全力で村の中を走っている。

目的はエースさんだ。

しばらく泣いていたわたしは何とか気持ちを立て直し、孫権さまを手伝おうとしていました。

だけど、孫権さまに向かう途中であることに気付きました。

エースさんの姿が見えなかったのです。

わたしは隠れ家の中を必死に探し、外にいるんじゃないかと思って外に出た。

そこにはエースさんはいなかったけど代わりに村の子が一人で燃えている村をじっと見つめていました。

わたしは男の子の前で屈んで『どうしたの?』と声をかけた。

多分、村を見て悲しみにふけっているいると思いこんで元気づけようとしました。

だけど、それは間違っていた。

いや、間違ってただけなら良かった。

男の子からとんでもないことを聞いてしまった。

エースさんが皆を助けてくれる。

それを聞いた時、血の気が引くのを感じ、我を忘れて男の子に問い詰めた。

男の子は半ば狂乱のわたしに怖気づいていたけど、それでも全部話してくれた。

男の子とエースさんの間に起きていた出来事を聞き終わった直後に脇目も見ずに村へ走った。

山を下っている最中も頭の中ではエースさんの身を案じてばかりでした。

そして、村に着くとすぐにエースさんの手掛かりを探す。

（エースさん……どうか…早まらないで…）

わたしは燃え盛る村を右往左往していると……

「誰だ！」

「！！」

うろついていた黄巾党の一人に見つかってしまった。

わたしはすぐに構えをとる。

男は剣を握ってはいるが、あまりにも隙だらけだ。

（これなら……）

わたしは勝利を確信し、男を見据える。

しかし、そこでおかしいことに気付いた。

男が襲って来ない。

襲って来ないというより足が動かないという風に見える。

それを疑問に思っていると、以外にも男の方から沈黙を破ってきた。

「お…お前がっ！！　な…仲間を…！」

「？」

男の言葉に思案していると男が衝動にまかせて闇雲に襲いかかってきた。

わたしは驚きはするけど焦りはしなかった。

何故なら男の動きがはっきりと目で追えているからだ。

それに動きも遅い。

わたしは男に走り、先手として男の懐に潜って腹を殴る。

「たぁ！！」

「ぐふ！」

男が前のめりになって下がった顔に手甲を付けた拳を叩きつける。

「はぁ！」

すると、男は鼻から大量の血を出して吹っ飛ぶ。

倒れた男が動かないのを確認するとわたしはすぐに走った。

さっきの賊の言葉を気にしながらもエースさんを探すために走る。

そして一角の角を曲がって…そこの光景が目に焼きついてしまった。

「こ……これは…」

信じられない…

そう思うしかなかった。

何故なら、そこには数十人の賊がボロボロになって倒れていたからだ。

その光景を見た時は状況も分からずに混乱しそうでしたが、すぐに一つの心当たりが浮かんだ。

「まさか……エースさん……？」

確かにエースさんは強い。

この賊がさっきわたしと出会ったのと同じ実力ならエースさんしかこんなことできる人が思いつかない。

わたしもできると言えばできるだろうが、この状況はわたしが作ったものではない。

（ここまで強かったんだ……）

わたしは倒れている賊を見渡していると、一人だけ身ぐるみを剥がされているのがいた。

そいつもボロボロになっている。

でも、何故彼だけが……

わたしが考えていると、一つの可能性が浮かんだ。

こんなことできるのは誰？

身ぐるみを剥ぐことができるのはわたし以外に賊を倒せる人だけ…

何故一人だけの身ぐるみを剥いだ？

そもそも何故ここに戻って来たのか…

それは……

「まさか……！」

絶対にあって欲しくない可能性が頭に浮かんだわたしはすぐに村の北西へと全力で走る。

一方、村の北西の洞窟では……

「ふあ～…」

洞窟の地下の牢の前で一人の男が見張っている。

男の後ろの牢の中では暗い顔で俯いている女性やすすり泣く少女たちがいる。

村から攫われた人たちは悲鳴を上げていたが、見張りの男の剣幕に脅え、今では静かになっている。

やっと静かになった人質の見張りに飽きて欠伸をしていた。

その時…

「よぉ…様子はどうだい？」

一人の男が見張りに近付いてきた。

「ん？　お前は？」

「いやなに、少しここの見張りを代わってやろうと思ってな」

いきなり現れた男の言葉にすぐに反応する。

「おお、そうか！　それはありがてえ！」

疲労で考えようとも思いだそうとも思わない見張りはすぐに男の言葉を鵜呑みにする。

男は牢に近付いて人質を見ながら聞く。

「なあ。結構大人しいじゃねえか？」

すると、見張りは忌々しげに答える。

「ああ。あまりにうるさかったから少し脅かしただけだ」

その言葉に聞いた男からは笑みが消え、肩をほぐしている見張りの背中を見る。

「そんじゃあ後は頼んだ…」

見張りは振り向きながら男をみようとする。

しかし、それはできなかった。

何故なら……

「ああ。後は任せな」

男が自分を見下ろして笑っているのが見えた。

その瞬間、腹の痛みで見張りの意識が闇に墜ちたからだ。

急にやって来た男が仲間の腹を殴って気絶させるのを見た人質たちは呆気にとられていた。

男が牢の方を見た時、村人は体を震わせた。

村人にとっていきなり現れて仲間を気絶させた男は得体の知れない者だった。

それによって恐怖感が少しずつこみ上げてきた。

しかし、それも一瞬のことで終わった。

何故か?

それは……

「お前等…家族が心配してるぞ？」

黄色い布を取って現れた顔は最近になってやっと見慣れた顔だったから。

ｓｉｄｅ　エース

おれはすぐに村の奴等を発見し、牢の門番を気絶させる。

牢の鍵を門番から奪って牢の鍵を開けた。

出口までの敵は既に倒してあるからすぐに出口に向かってもらおうと思っていた。

しかし、出てきた奴等の話からするとまだ全員じゃねえ。

上で男に連れてかれたのが５人くらいいるらしい。

とりあえずそこにも向かうことにする。

着替え直したおれはすぐに残りの村人たちを見つけた。

洞窟内は二本の松明で照らされている。

下っ端は全員酒を飲むことに夢中になっている。

しかも村人は全員リーダーと思しき男の近くで固まっている。

おれは早速行動した。

あらかじめ石を二つ拾っておいて、３０秒くらいは目を瞑って暗闇に備える。

そして、それぞれの石を松明に当てて倒す。

すると、松明の火が消えて洞窟内が暗闇に染まる。

「なんだ!?」

首領の男が突然の事態に声を荒げる。

暗闇になり、視界が悪くなったことと食事最中の襲撃で頭が回っていないことから賊たちは動けずにいた。

そんな中、エースは暗闇の中をスムーズに動き、人影を避けて首領の近くに到達する。

首領の傍にいた一人の手を取って固まっている九人のところへ走る。

「このまま逃げるぞ」

到着して彼女たちにそう言うと女性たちは戸惑ってしまう。

しかし、声で正体が分かったのか少し安堵する。

「ここから壁を伝えばすぐに道に出られる。そこからは一本道だからすぐに出られる」

エースの提案に全員が頷くのを見ると、すぐに行動に移る。

女性たちは暗い空間の壁を伝って道に出ようとする。

エースは賊の誰かが壁側に行かないように見張っている。

誰か一人でも行こうものならエースの鉄拳を食らう。

そうとも知らずに壁に向かう賊はエースに殴られて気絶する。

そうしている間に村人たちの目が慣れてきたのかスムーズに出口に向かっていた。

しかし、それは賊にとっても同じ事だった。

賊の一人が女性を見つけると何人かで連れ戻そうとする。

だが、それをエースが許す訳がなかった。

エースが賊を倒している間に村人全員は道に辿りついてそこから逃げる。

それを確認したエースは口を吊り上げてほくそ笑む。

そんな時、首領は落ちた松明に火を点けて辺りを照らす。

洞窟内は微かに照らす光はパニックに陥っていた賊を次第に落ち着かせた。

そこで、エースを指さす男がいた。

「お…おれは見たぞ！　こいつが女共を逃がしてたんだ！！」

その瞬間にほろ酔い気分だった賊たちの空気が一変し、怨嗟の眼差しをエースに向ける。

手には今しがた村人を切り捨てた剣を手に取る。

目は血走り、明らかな殺意をエースにぶつける。

しかし、当の本人は大量の殺気を当てられても余裕の笑みを崩さない。

「何言ってやがる？　こっちは仕返しただけだ」

エースは飄々とした態度で挑発する。

その態度に黄巾党の殺気も更に膨れ上がる。

特に首領は額に血管を浮かべ、今にも飛び掛かりそうである。

「小僧…俺たちの宴を邪魔して…生きて帰れると思っているのか…？」

すると、エースの周りを多数の賊が囲む。

賊が陣取る場所の地面が見えないほどだ。

賊は自分たちの有利な状況にニヤけた笑みを浮かべている。

「どうだ？　今お前を囲んでいるのだけでも千人だ」

首領の勝ち誇ったような言葉に手下たちは遂に全員で笑い出した。

だが、それでもエースは恐怖どころか動揺の色さえ見せない。

それに対して首領はエースが恐怖で動けないと思っている。

そう結論付けて襲い掛かろうと合図をおくろうとした。

その時……

首領の

動きが

止まった。

「……」

首領だけではなく、他の賊たちも止まっていた。

それもそのはずだった。

何故なら……

「…んだこりゃ…」

小さな光の玉が辺りをフワフワと浮いていたからだ。

黄巾党は急な出来事に呆気にとられている。

その中で何人かは見た。

一見幻想的に魅せる玉がエースの手から次々と出てくるのを……

「蛍火……」

そして、その事実が周囲に伝わる前に遂に起こった。

「火達磨！！」

光の玉は輝きを増し…

華々しく爆ぜた。

ｓｉｄｅ　程普

わたしの体が休息を必要としているのにも関わらず、わたしは洞窟に走る。

わたしの危惧していたことが的中してしまった。

エースさんは黄巾党の一人から身ぐるみを剥いで侵入したようだ。

その予想が当たったと分かったのは逃げてきた村のみんなからの証言からだった。

エースさんの鮮やかな計画と強さを以て為し得た救出。

心の中でエースさんの実力を再認識して驚いていたのですが、その情報には続きがあったのです。

エースさんが村の皆を逃がすために殿に残ったとのこと…

それを聞いたわたしはとても信じられませんでした。

しかし、逃げてきた人の中にエースさんの姿が無かった。

それを知ったわたしは村の皆の制止を振り切ってエースさんの元へ向かう。

そして、やっと…

「着いた…」

息を整えながら洞窟へ向かうとそこには黄巾党二人が倒れていた。

しかし、その二人にはおかしな傷があった。

「……何かで貫かれてる？……しかも傷も焦げてる？」

わたしは二人の体を調べてみると、何かで貫かれ、焦げた傷があった。

これは……槍の類？

だけどエースさんは無手…身に着けていた刃物で刺してもこうはならない…

だけど一番不可解な点はこの焦げ跡…

（高温の槍で突いた…？…それじゃあエースさんは…）

程普がそんなことを考えていたその時…

――――ドガアアアアン――――

「！！」

突如、洞窟内からけたたましい轟音が響いた。

その際に辺りが揺れ、程普は腰を落としかけた。

だが、何とか堪えて洞窟内を見据える。

すると…

「なっ！」

中から尋常ではない量の黄巾党が走って来た。
わたしは無意識に戦闘準備に入る。
（ただでは死なない！）
本能的に死を覚悟しながら暴徒に立ち向かう……筈だったが…
「…え？」
だれが予想できただろうか。
黄巾党はわたしに目もくれずに逃げていく。
おびただしい数に対してわたしは一人だ。
到底普通の行動とは思えない。
しかし、それでも誰一人としてわたしのことを見ていない。
いや、よく見ると脅えている者がほとんど……全員かもしれない。
わたしは賊の一人を捕まえて強引に近くに引き寄せて問い詰める。
「何だ！？　この中で何が起きている！！」
強い口調で問い詰める。
しかし、賊は震えながら叫んだ。

「化物だ！！　奴の妖術で他の奴等が…！」
「化物？　妖術？　それは一体…」
「ひいぃ！　ゆ…許してくれえええぇぇえぇ！！」

訳のわからない事を口走り、わたしの手から強引に抜け出して逃げて行った。

だめだ…多分他の奴に聞いても話にならない…

わたしは痺れを切らし、何よりエースさんのこともあったから洞窟の中に入った。

押し寄せる賊が大分減ってきたのを確認して機を見て洞窟に入り、進んで行く。

多少の黄巾党とぶつかることはあるが、あまり支障はない。

わたしは洞窟内を直進していると、一つの違和感に気付いた。

（熱い…）

洞窟内が外よりも断然熱いのです。

まるで外と中とでは季節が違うように…

そんなことを思いながら更に直進していくと、大広間に出ました。

すると…そこでは信じられないことが起きていました……

これが、初めてエースさんの秘密の一つを知った瞬間でした……

side out

先程まで宴会で賑わっていた。

しかし、それも今では見る影もない。

辺り一帯は火の海に包まれている。

人は燃え盛る業火を避けるように固まっている。

一人を除いて…

「これは挨拶代わりだ」

火の海から一人、賊たちに歩を進める人物がいた。

エースだった。

「て…てめぇ…な…なに…しやがった…」

未知なる恐怖で舌がまわらない首領はエースに問う。

それに対してエースは指先から火を出して律儀に答える。

「おれはメラメラの実を食った炎人間だ」

意外な答えに下っ端を含めた賊たちは何一つとして聞いたこともないワードで混乱していた。

しかし、一つだけ分かっていることがあった。

それは…

「教えてやるよ…お前等の前にいるのは……海賊だ…」

相手は普通じゃない…

「そろそろ…無駄な問答は止めようぜ？」

殺らなければ…殺られる…

「全員でかかれえぇぇぇ！！！」

『『『うおおおぉぉぉ！！！』』』

首領の号令で賊たちは一斉にエースに突っ込んでいった。

しかし、先手を打ったのはエースだった。

「陽炎！！」

エースは炎を纏って賊たちに突っ込んで行く。

『『『ぐあぁぁぁ！！』』』

巨大な火の玉に当たった暴徒の一部はいとも簡単に吹き飛ばされる。

「オラオラオラ！！」

賊のど真ん中で止まり、今度は拳に火を纏わせて素早い連撃を喰らわせる。

それによって数十人を撃退した。

「もっとだ！　もっと大勢で奴にかかれぇ！！」

怒号に従うように一斉に５０人くらいで襲い掛かる。

それにも関わらず、エースは拳と足に炎を纏わせて体術で応戦する。

賊の攻撃は当たるどころか掠りもしない。

時にはバク転で避け、跳躍して回避していく。

トリッキーな動きで避け、灼熱の一撃を放つ。

それを繰り返し、５０人どころか１００人ぐらいを倒す。

しかし、まだ数は半端でない。

エースはいい加減に勝負をつけようと考えていた。
しかし、エースの背後から一人、剣を振り上げてきた。
エースはそれに気付いており、避けようとした。
その時…
「やぁ！」
突然現れた影が掛け声と共に背後の賊を跳び回し蹴りで吹き飛ばす。
エースはそれを見てギョッとした。
「て…程普!?」
意外な人物の登場にエースは目を見開いた。
「大丈夫ですか!?　エースさん!」
一方、程普はエースに駆け寄って身を案じる。
「そんなことはいい！　なんで来た!?」
エースは程普に言い寄るが、程普も負けてはいなかった。
「それはこっちの台詞です！　なんで一人で行ったんですか!?
わたしがどれだけ心配したか…！」
エースと程普がギャーギャー言い争っていると…

「何してやがる野郎共！　さっさと行かねえか！」
「で…でも頭…あの男一人でもやばいのに今度は二人に…」
「うるせえ！　その内疲れてくんだろ！　数はこっちが有利だ！分かったならさっさと行け！！」
「ひぃ！！」

首領の怒号に部下が再びエースたちを見る。

それに気付いたエースは出口とは別の通路を見て、まだ騒いでいる程普の口を塞いで言う。

「程普！　一旦あそこに逃げるぞ！」
「むぐ！？　ん～ん！」

口を塞がれて喋れない程普は首を横に振って抗議するが、エースは走った。

程普も一瞬遅れてエースの後を追う。

「逃がすな！　殺せ！！」

首領の合図で暴徒が一斉に狭い通路になだれ込む。

その矛先のエースたちはただ狭いだけの通路を走っていた。

後から追いかけ、やっと追い付いてきた程普が必死の形相でエースに訴える。

「この先はだめですよエースさん！」

「なんで！？」
「だってこの先は何もない、分かれ道も無ければ行き場のない…行き止まりなんです！！」

この時、程普は絶望していた。

この先は元々村で使っていた食料の貯蔵地。

当然、出口などない一方通行だ。

この狭い通路では賊に囲まれることは無く、一定の数だけ相手にしていけばいい。

しかし、少なく見積もっても７００はくだらなかった。

全滅させるとしたらどれだけかかるか…

最早頼みの綱は外の孫権さまが兵を送ってきてくれるだけ…

そう思いながら走っていた時、遂に行き止まりに立ち止まってしまった。

「そ……そんな…」

この時、わたしは泣きそうな声を出していたに違いない。

（ここまで…なの…？）

まだやりたい事やってないのに……素敵な人と出会って……色々したかったのに…

わたしは絶望に突き落とされた気分でした…

彼の声を聞くまでは…

エースさんはわたしの頭をいつもの感じで撫でてきた。

その事にわたしが呆気に取られてエースさんの顔を見ると…

「心配すんな。おれは仲間を死なせる気はねえよ」

不敵な笑みを浮かべて答えるエースさんを見たら、不思議とさっきまでの絶望感がどこかに消えていました。

それどころか胸の鼓動がいつもより強く感じ、高揚していました。

そんなやり取りをしていると、後方から暴徒が辿りついた。

その更に後ろから首領が得意気に笑って出てきた。

「どうだぁ？　こんな狭いとこならチョロチョロ動き回れねえぞ？」

「……」

「最後のあがきで妖術でも火でも出してみろやあぁぁ！」

首領は剣より大きい斧を手に取ってエースに向ける。

しかし…沈黙を守ってきたエースは全員の斜め上をいく発言をする。

「お前等…なんでおれがここまで連れてきたか知ってるか？」

全員が思った。

連れてきた？　どう見ても逃げてきただろ。

エース以外の人は全員そう思い、エースの苦し紛れだと思う。

だが、エースはここで笑みを浮かべて右手に炎を溜める。

「なっ！？」

程普はそれを見て驚愕の声を上げる。

「それはな……この通路じゃあ逃げ場も隠れる場所もねえ」

「？」

「つまり、おれももうちっとだけ本気を出せる訳だ」

『『『！！！』』』

「もう村の食料や品物を燃やさねえ程度に加減しなくてもいいって訳だ」

その言葉は誰もの予想を越えたものだった。

本気？

じゃあ……今までは……

ここで大広間の惨劇を黄巾党は振り返っていた。

あれだけの惨事を起こした力が本気じゃない？

「は…ハッタリだ！　そんな馬鹿なこと…「だったら試してみるか？」！？」

エースは無表情で…怒りを込めた眼差しを黄巾党に向ける。

「見ず知らずのおれを受け容れてくれた奴等の痛み……倍にして返すぞ」

静かに言ったその言葉は黄巾党の戦意を喪失させるどころか刈り取った。

手下たちは武器を捨て、身を翻して逃げる。

「助けてえぇぇぇ！！」

「こんなの聞いてねえよ！！」

「あ……あぁ…」

首領もエースからゆっくりと後ずさっていくが……

もう……遅い…

エースの手の炎はより一層燃え上がり…放った。

「火拳！！」

エースは拳を突き、巨大な炎の拳を放った。

通路一杯に炎が隙間なく押し寄せる。

黄巾党を次々と業火の中へ引きずり込み……

「これで…終わりだぁ！！」

エースの激昂と共に炎の勢いが強まり…

炎の拳は通路を抜け、大広間の机や椅子を焼き……

全てを無に帰した。

これは始まりだった。

歴史に残るであろう大戦の直前の産声。

後の伝説の誕生であった。

## 復活の火拳（後書き）

本格的な原作キャラとの掛け合いは後二話ぐらいだと思います。
それではまたいずれ会いましょう！

## 始まる（前書き）

急いで書いたので内容はアレですが、楽しんでくれれば幸いです
それではどうぞご覧あれ！

# 始まる

ｓｉｄｅ　程普

わたしは今、真っ暗な世界にいる。

正確には真っ暗になっているのはわたしの瞼が落ちているだけ。

突然の輝きに目を閉じ、しばらくはそのままでした。

けれど、目が見えなくても分かることがある。

第一に、わたしがいる空間がとてつもなく暑い。

第二に、周りから焦げ臭い匂いがする。

最後に……わたしが最後に見たエースさんの手…

触覚、嗅覚、視覚を頼りに得た情報はそれだけだった。

特にエースさんの手からの炎はわたしの常識を粉々に砕いた。

そんな事を思いながら慣れてきた目を開けると、そこには信じられない風景が広がっていた。

通路にはちらほらと火が点いており、全てが文字通り灰となってしまった。

数刻前までは黄巾党で埋もれていた通路が…

まさか…それもこれも全部エースさんが…？

「おーい？　何ボーっとしてんだ？」

エースさんは固まっていたわたしの顔の前で手を振って呼びかけてきた。

そこでわたしは考えるのを止めてエースさんを見る。

そこにはいつもと変わらないエースさんがいた。

それを確認したわたしは少し気持ちが落ち着いた。

そうだよ。直接エースさんに聞けば済むことじゃない。

きっと……いや絶対教えてくれると信じて聞いてみる。

「あああああああああのこここここれって何が起きやがりやがったんですか！？」

「？　言葉になってねえぞ？」

いけないいけない…一回深呼吸して…

スー…ハー…スー…ハー…

よし…今度こそ…

わたしは呼吸を整え、今度こそ落ち着かせる。

「ちったぁ落ち着いたか？」
「……はい。ですから今聞きたいことがあるんです」
「……」
エースさんは少し困ったように頭を掻いて一言。
「…帰りながら話すけどいいか？」
「はい。キリキリ話してもらいます」
「んなコエー顔すんなって」
そりゃ怖くなりたくなりますよ。
内心で毒づきながら言う。
でもまぁ、これで全てが分かるはずだ。
これからぶっ飛んだ話を聞く事になるだろうけど……
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
エースたちは狭く、長い通路を戻っている。
通路は焼け焦げ、黒い煙を出している。

その中を歩きながらエースは話す。

「さて、まずは何が聞きたい？」

エースは気軽に聞くが、いざとなると程普は少し怖気づいてしまう。

もし、この話を聞けば自分の中の常識が崩れてしまいそうだったから…

人というのは未知なる物に対して好奇心を持つのと同時に警戒心と恐怖心を抱くものだ。

それは決して悪い事ではなく、むしろ生きるための本能と言っても過言ではない。

程普はそんな自分の本能に翻弄されていた。

しかし、全てを判断するのは全てを聞いてからだ。

そう思った程普は思い切って聞いてみた。

「……エースさんの体から出していた火は一体…」

オズオズと聞いた最大の謎をエースに投げかける。

それに対してエースは……

「あれはメラメラの実の能力だ」

意外にもあっけらかんと答えた。

「へ？　めらめらの実って……木の実ですか？」

「まあ木からできるかは別として概ねそれで合ってるぜ？」

そう言うエースは人差し指を炎に変えて程普に見せつける。

程普はそれを見て驚愕し、目を見開いている。

今にも飛び出してきそうな目をそのままに、カタコトで更に聞く。

「こ…こ…これって…妖術みたいな物……なんですか？」

「妖術……ていうか呪いって呼ぶ奴もいたな」

「呪い……そんな物がエースさんに…」

「こういう風にしちまう実を悪魔の実って呼んでた」

「悪魔……」

言い得て妙だ。

程普は落ち着いてきた頭でそう思った。

人に異能を植え付ける呪いをかけるのだから。

程普はその後も好奇心に任せて聞いてみた。

「その悪魔の実ってどこで採れるんですか？」

「さあな。おれは海に浮かんでたのを拾って喰ったからな。どこから来たのか…そもそもどうやってできてるのかも分からねえんだ」

「へぇ～…」

程普は不思議と感心してしまった。

普通なら呪いを危険視するはずなのだが、妙にそれほど恐怖とかは無かった。

それは多分、エースの普段の行いと人柄である。

エースは危険を顧みずに村人たちを助けたり、その他にも村の中でも色々と手助けもしてくれた。

そして、村人たちと楽しく談笑している時のことを思い出していた。

程普はその時のことを思い出していた。

よく考えれば、エースさんが怖いなんてとんでもなかった。

確かに力や炎には驚いた。

けれど、エースとはその力を無闇に行使せずに今まで過ごしてきた。

もし、よからぬ人物であったなら村に住みついた時に力を使っていたはずだから。

それを思うと、心も軽くなった気がして機嫌も良くなった。

「♪～」

「？　どうした？　上機嫌になって」

「えへへ…何でもないですよ」

頭上に？を浮かべるエースに対して程普は「あっ」と声を出してエ

ースに言う。

「それよりも…その力はあまり使わない方がいいと思うんです」

「どういうことだ？」

「ここではエースさんのように火を使う人はあまりいないですから…もし使ったら周りも大騒ぎになって、下手したら妖術師として処刑ってことも…」

「そっか……メンドくせーな…」

不満そうに呟くエースを不安に思っていると、やっと出口に辿りついた。

外を出てみると、ほんのり明るかった。

その明るさは村からの出火などではなく、朝日だった。

山から頭だけ出ているお天道様はまるで二人の生還を祝福しているかのようだった。

「それで……二人だけで賊の元へ乗り込んだという訳か？」

「勝手な行動は困るのだが？」
「……はい」
「すみませんでした」キリッ
「すみませんで済むか！　二人だけで１０００の賊に挑むなど何を考えている！！」

甘寧の辛辣な言葉にエースの礼儀正しい謝罪し、孫権は激怒、程普は縮こまっている。

何故こうなっているかと言うと、エースと程普が隠れ家に戻ってくると捕えられていた村人たちがエースたちに押し寄せて帰還を喜んでくれた。

それだけだったらまだ良かったのだが、捕らわれていた村人が孫権たちにエースたちのことを話していた。

そして、孫権は二人の無謀に激怒し、説教しているという。

「でも助かったから良いだろ？」
「お前たちは運が良かったんだ！！　相手が統率も信頼も無い賊だったから助かったんだ！！」

エースの力は勿論話せることではない。

そこで、程普は次のように話した。

エースが人質を救出した直後、程普が助太刀に入って洞窟から逃げた。

そして、隠れ家とは反対側の山の中へ逃げ込んでやり過ごした。

と言う事にしていたのだが、孫権が放った間諜によると黄巾党が全滅していたのだ。

孫権と甘寧は驚愕したが、程普は冷や汗をかき、エースは特に驚きもしてなかった。

その意外な結果に孫権は次のように結論付けた。

賊の見張りや首領の能力不足を抗議した下っ端に首領は激怒して武力行使に及ぶ。

そして内乱が起こり、結果は全滅。

簡単に言えば仲間割れによる自爆である。

「まったく……これが軍だったら斬首ものだぞ？」

「でも相手も全滅でおれ達も助かったから万々歳といこ…ムグッ！」

「すみません！！　本当にすみませんでした！」

呆れる孫権に飄々と口答えするエースの頭を地面に抑えつけて一緒に謝らせる程普。

彼女の涙腺は今にも切れそうだ。

そんな程普に孫権は溜息を吐く。

「……以後、こんなことはしない方がいい。分かったな？」

「孫権さま……はい！！」

孫権の優しい注意に程普は満面の笑みを浮かべる。

ここで円満に全てが終わった。

……かと思ったが……

「お待ちください孫権さま」

突如、側に控えていた甘寧が孫権に話しかける。

「どうした？　甘寧」

「私用ですみません。ですがもう少し時間をくれませんか？」

「？　ああ、構わんが」

普段、甘寧は望みや無駄口は叩かない。

そんな甘寧を知ってる孫権は少し驚きながらも甘寧の頼みを聞く。

程普はまだ叱られるのかとビクビクしながら甘寧を見る。

「おい、お前」

しかし、程普の予想は違った。

甘寧は未だに頭を地面に張り付けているエースに声を掛ける。

それに対してエースは起き上がって応える。

「どうした？　おれに何か用か？」

「……聞きたいことがある」

甘寧の鋭い目を見たエースは不敵な笑みを浮かべる。

「お前は賊共の身ぐるみを剥いで賊の住処へ侵入した……それでいいな」

「ああ、間違っちゃいねえな」

「では村で倒れてる賊はお前がやったとみていいんだな？」

「ああ」

そう答えると、甘寧は剣を取り出しながら言う。

「今から私と手合わせしろ」

唐突に何を言うのですかこの人は……

と、まあこんな感じで誘われたエースは渋々試合を行うことになってしまった。

断ると不審に思われるから一応やることになった。

そして、今は程普と稽古をしている広場で準備をしている。

エースの近くには程普、その向かい側の甘寧には孫権が付いている。

「エースさん。くれぐれも穏便に…」

「分かってるよ。能力は使わねえから」

程普とヒソヒソ話していると、そこに来客が来た。

「ちょっと…いいか？」

「！…あぁ、孫権さま」

急に話しかけられた程普は驚くが、孫権だと知って安堵する。

その孫権も気まずそうだった。

「その…エースに一言な…」

「おれに何だって？」

エースは首を傾げる。

「その…甘寧の急な申し出に受けてもらって……すまない……」

孫権が謝罪を述べるが、エースはそれに対して気にしない様子で言う。

「どうだっていいさ。おれもお前等には世話になったし…何も死ぬ訳じゃねえんだろ？」

「え…えぇ…」

エースは満面の笑みを浮かべながら言うと、孫権は少し顔を赤くしながら答える。

その横では程普は何気なく見ているつもりだが、どこか焦燥する所もあった。

「用意できたぞ」

そんな時、甘寧は短く言う。

「よし、んじゃあ行ってくるか」
「エースさん。くれぐれも…」
「ああ。分かってるよ」

エースは手を振りながら甘寧の元へ向かって行った。

ｓｉｄｅ　甘寧

私はどうしても気になった。

賊の住処に単身で乗り込んだ実力を…

初めて会った時、私をも震えあがらせた圧力の正体を…

奴の人と為りを……

もし、悪しき心を持っていると判断すれば刺し違えるつもりで奴を斬らねばならん。

昨夜の奴の行動が私の評価に入ってはいるが万が一ということもある。

ここまで行くと過保護と思われるだろうが、この荒れ狂う世の中で警戒しすぎるなんてことは無い。

むしろこの方が丁度いいと思っている。

……とは思うのだが…

蓮華さまが奴と話しているのに気付いて止めに行こうとしたのだが…奴の笑い顔を見ると警戒していることに馬鹿らしさを感じてしまう。

どうも奴には邪悪さをあまり……全くと言っていいほど感じない。

それでも私は確かめなければならない。

奴が信用に値するかどうか。

「用意できたぞ」

体の慣らしを終えて広場の中央に立つと、奴も私の前に歩を進めて

きた。

「どちらかが一撃を入れるだけだ」
「おれもそれでいいぜ。この後やることがあるんでね」
「減らず口を…」

わたしはそれなりに殺気をぶつけているはずなのに平然どころか挑発か……やはり只者では無いな…

やはり……見極めなければならん…

この男が将来我等とどう相対するか…

私は剣を構え、奴の首筋目掛けて一閃する。

そこらの賊なら終わる一撃を男は後ろに一歩退いただけで避ける。

やはり避けるか…ならこれなら！

剣を腹部に突き刺す様に鋭い突きを放つ。

「ふ…」

しかし、その突きさえも避けてあろうことか蹴りを繰り出してきた。

「ぐっ！！」

甘寧は反射的に剣で防いだが、その力は意外と強くて重い。

そのため後方へ飛ばされるまではいかないが、砂煙を上げて何とか堪えた。

強い！　何て出鱈目な力に機動力だ！！

無手の者が剣などの武器を持った者を相手にするには相当の実力を求められるというのに…！

甘寧は驚愕するが、エースにとってはどうという事はなかった。

エースは今までに四皇の『赤髪のシャンクス』『白ひげ』、そして『鷹の目』といった猛者のいる世界で生き残ってきたのだ。

それに比べれば甘寧との殺し合いですらない試合は子供だましもいい所である。

それに加え、エースは子供の頃とはいえ、今や三億の賞金首の『麦わらのルフィ』と一緒に幼少時代を修業につぎ込み、一度も負け無し。

しかも若干１０歳で街の不良達や野獣、そして本物の海賊を相手にした驚異的な戦闘力を発揮。

その際、数百万人に一人しか持たないという『覇王色の覇気』を無

意識的とはいえちらつかせた。

そんな怪物を相手にする甘寧もまた猛将にして優秀。

しかし、それは『この世界』だけでの話だった。

甘寧の相手にしては分が悪すぎた。

くっ！　攻撃が当たらない！

ヒュッ　スカッ　ヒュッ　スカッ

男は私の剣撃を受けるのではなく避けるだけ。

しかし、その動作の一つ一つに無駄がない。

後転し、跳躍し、体を捻るなどといった普通ではまずしない回避を平然とやってのける。

その上攻撃も重く速い！　こいつは猿か！！

私が内心で毒づいていると、男は顔面に拳が近付いてきた。

しまった！

私はまた反射的に避けたが、拳が止まった。

その後、息をつかせぬままにもう片方の拳で再び私の頭部を狙ってくる。

くそ！　誘われた！！

一度避けてしまった私の体を動かすのは無理だった。

その為、勢いに任せて体を地面に転がして回避。

何とか追撃を避け、再び奴を視界に入れようとするがいない。

どこだ！？

私に別の影が覆いかぶさる。

しまっ……！

振り向いたが最後……私は自分の獲物を取られてしまった。

世界は広い。

井の中の蛙とはよく言ったものだ。

私は勝てなかった。

しかし、嫌な気分では無い。

むしろこの出会いに感謝したい所だ。

戦いの中で感じ取ったこ奴の人柄。
戦いからその者の心の現れ方が顕著に出る。
私は思った。
こいつは……こいつなら我等の……

side　孫権

突然、思春の頼みで行われた模擬戦。
普段から頼み事をしない腹心の願いはどうしても聞き入れたくてエースに頼んでみた。
そうしたらエースは意外にも快く引き受けてくれた。
私たちへの礼だそうだ。
良心につけこんで闘わせるのに気が引けたけど丸く収まってよかった。

思春は殺さないと言ったから大丈夫だろう。

そう思って静観することにした。

そもそも思春がそこまでして闘う理由が分からなかった。

確かにエースが強いことは村人達から聞き、村に転がっていた賊を一人で倒し、単身で住処に乗り込む胆力は大したものだ。

そんな人物だからこそ普通なら警戒するのだが、どうも彼からは邪気どころか悪意も感じない。

そこまで警戒する必要あるかしら？

飄々とはしているが子供っぽい面もある。

上手くは言えないが、悪人ではないと勘でそう思った。

……私もお姉さまのこと言えないわ…

そう考えている内にエースと思春の戦いが始まる。

最初に仕掛けた思春は首目がけて剣を振る。

私はその時、声を上げそうになったけどそれは喉の奥で止まった。

エースは思春の鋭い一撃を紙一重で避ける。

普通の兵なら一撃で決まる一撃をいとも簡単に回避する。

私は息を飲んだ。

思春は我が呉を誇る屈強な猛者……その一撃を避けた…

そこから私の目は釘付けにされた。

縦横無尽に跳躍し、機を見ての反撃。

あの思春が押されるなんて……

その時、私の勘は確信へと変わった。

思春にも劣らない実力。

その実力に底を感じられない。

それでいて無邪気で誠実。

正に英雄。

私は彼と思春の戦いを夢見心地で見ていた。

私はこれまで運命というものを知らなかった。

だが、それを今日ここで知った気がする。

これが人生最初の運命の出会いかもしれない……

私がそう思っている最中、何かが転がる音で正気に戻り、意識を現実に向ける。

そこでは思春が武器を取り上げられ、勝負は決していた。

「もう満足かい？」

エースは武器を取り上げながらそう告げる。

代わって甘寧はしばらくは顔を俯かせると、今度は大きく深呼吸する。

呼吸を終えると立ち上がってエースと向かい合う。

「ああ。私の完敗だ」

その割に甘寧の表情は穏やかだった。

自分が知らなかった世界、実力。

勝負に負けて悔しいという気持ちは確かにある。

しかし、エースという人間の出現は甘寧に大きな影響を与えた。

それは人としてまだまだ強くなれると解釈した。

そして、新たな目標の出現。

まさに切磋琢磨の材料として充分すぎる。

そんな気持ちを胸に甘寧はエースから獲物を返してもらう。

「すごいな。まさか甘寧に勝つなんてな」

そこへ見ていた孫権がエース達に労いの言葉をかけに来る。

「そうなのか？　確かに並の奴よりは断然強いけど…」

「ああ。甘寧は我が軍きっての猛将だ。誇りに思うべきだ」

孫権はエースの実力を称えていると、甘寧は孫権の傍に寄ってきて跪く。

「申し訳ありません。この甘興覇。醜態を晒しました」

「いや、思春もよくやった。私が見てきた中で一番の大立ち回りだったぞ」

「敗者に勿体なきお言葉……これから精進いたします！」

「ああ。期待しているぞ？」

「はっ！！」

二人が臣下の礼を繰り広げている中、エースはその光景をボンヤリ

と見ていた。

『なあエース。今から家族の契りを交わそうじゃあねえか？』
『家族の……契り？』
『ああ。お前を拾ってもう随分とたつが……お前はおれとじゃれてばっかだったろ？』
『じゃれる……こっちは殺す気だったんだけど…』
『グラグラグラグラ…！　おれにとっちゃああんなモンじゃれるくらいにしか見えなかったな！』
『……まあいいか…で？　どうすんだ？　その契りってのは』
『な～に、ただ盃を交わす。それだけだ』
『ああ～…でもそれはルフィ…いや、弟とやったぞ？』
『ほう…それは何を誓った盃だ？』
『何って……兄弟の…』
『それならおれ達とは家族の盃を交わそうじゃあねえか』
『家族？』
『ああ、この船に乗せた以上、どんな馬鹿でもおれはそいつと契りを結ぶのさ』
『そうしねえとこの海賊団に入れねえよい』
『マルコの言う通りだ。だからエースよぉ…杯を持て』
『ああ。分かった』
『おれ達も杯を持って酒を注げー！！』
『『『おおーーーーー！！！！！』』』
『毎度毎度騒がしいな…オヤジ…』

『グラララララ…ちげえねぇ…よしお前等ぁ！！　杯は持ったなぁ！？』

『『『おおーーーーー！！！』』』

『今日からポートガス・Ｄ・エースをおれの息子…おれ達の家族に迎える！！　もし、エースの身に危機が訪れたら全員で立ち向かえ！！　そうすればエースも助けてくれる！！』

『『『おおーーーーー！！！』』』

『一人の痛みは家族の痛み！！』

『『『一人の痛みは家族の痛み！！！』』』

『今日もまた誓おう！！　おれ達家族の絆をまた一つ繋げると！！』

『『『今日もまた誓おう！！　おれ達家族の絆をまた一つ繋げると！！！』』』

『その胸に刻め！！　おれ達の新たな家族…ポートガス・Ｄ・エースの名を！！』

『『『いぇーーーーーーーーーーーーーーーい！！！！！！！！！』』』

『これからよろしくなーエースゥ！！』

『よっしゃあ！　今から宴だぁ！！』

『『『ひゃっはーーーーーーーーーーー！！！！！！！！』』』

『ぷ…くくく…』

『？　どうしたエース』

『だってよぉ…さっきからあいつらの顔…ぷ…くくく…わっはははははは…！！！』

『ふ…グラララララララ…！！』

「…さん？　…ースさん」
「……オヤジ…」
「エースさん！！」
「うお！！」

突然、目の前で叫ばれたエースは驚いて後ろに飛び退いた。

「程普……いきなり耳元で叫ぶなよ…」
「何言ってるんですか…ずっとエースさんに呼びかけてたのに…」
「そ…そうか…？」

少しむくれる程普にエースもこれには少し反省した。

とは言っても、さっきの孫権と甘寧の様子から昔、家族の契りを交わして笑い合った日のことを思い出していた。

かと言ってそんな事言えなかった。

そんな事言うものじゃなかったし、言っても過去に戻れる訳じゃなかったから…

「エースさん？」

エースの憂いを帯びた表情に程普は疑問を抱きつつも話しかけてみる。

しかし、そんな声に第三者の声が重なる。

「待たせたな」

「あ…いや、いい」

甘寧を引き連れた孫権がエースの元にやってくる。

しかし、エースのぎこちない様子に孫権も首を捻る。

「どうした？」

「いやなに…お前等の主従関係って固いなって…」

「主従……か…」

そう言うと、孫権は少し首を横に振って言う。

「確かに私は王を目指しているが……私達は思春たちを臣下とは思ってない」

「ほう…じゃあどういう風にお前等は成り立ってんだ？」

「そうだな……少し変わってるけど…笑わないか？」

「ああ。そんなこと笑うものじゃねーしな」

それを聞いた孫権は安心し、穏やかな表情で言う。

「…家族」

「！！」

その答えを聞いた時、エースに衝撃が走った。

その繋がりはかつての……

「姉さまがね……主従なんて堅苦しくて嫌だって言うから…私も昔からそう聞かされて育ったから…」

甘寧を愛しく見つめる孫権には慈愛が溢れていた。

部下を道具でも無ければ家臣ではなく、家族として優しく見守る孫権に仲間の面影を見た気がした。

しかし、エースはすぐにそんな考えを止める。

その後しばらくは穏やかでいて、どことなく喋りづらい雰囲気が流れる。

「あ…そうだ…」

そんな空気を払拭させるかの様に孫権は思い立ったように話す。

「エース。あなたこれからどうするの？」

「おれ？……とりあえず今日ここを発とうと思ってな」

「え！？　今日ですか！？」

程普が驚く様子からエース自身で決めたことだと思いながら孫権は話を続ける。

「それで、あなた達さえ良ければ我等孫呉の陣営に迎えたいのだけ

ど」
「！！」
「…」

孫権のまさかの誘いに程普はビックリで心臓を口から出しそうになる程だった。

しかし、エースは無表情で黙っている。

「どうかしら？」

孫権は少し不安そうに聞いてくる。

程普としてはこんな話は一生あるかないかのことだから完全に舞い上がっている。

下請けとはいえ国の人間からのスカウトは珍しく、家筋やコネクションで決まる今となっては余程有能でなければ有り得ないことである。

元々程普は国に士官し、世直しをするべく己を磨いてきた。

相当な上位に着くまで何年かかろうとやり遂げる覚悟だった。

そんな大望を胸にしていた時の勧誘は程普にとって金よりも価値があるものだった。

程普は二つ返事で話を了承しようとしていた。

しかし……

「悪いがおれはいい」

エースの勧誘を蹴る言葉に程普は言葉を失った。

程普だけではなく孫権もそうであり、甘寧に至っては鋭い目でエースを睨む。

主の誘いを断ったからなのだろう。

「…よかったら…訳を教えてもらえないかしら…」

「訳も何も…おれみてえな荒くれは国なんてモンに関わる気はねえ」

全く答えになってない答えに程普はエースの説得をする。

「これはすごいことなんですよ!?　国の人直々に勧誘受けるなんて!　ですから考え直してください!」

「これだけは譲らねえ。おれは国に従うなんてゴメンだ」

「エ…エースさ～ん…」

頑なに拒み続けるエースに程普はほとほと参っていた。

孫権としても何とかエースを思い留まらせたかった。

そんな中、甘寧は…

「し…思春!?」

「エ…エースさん…」

エースの首筋に剣を突き立てていた。

甘寧の目は更に鋭くなっており、まるで冷たい刃のようだった。

「貴様……蓮華さまのお誘いを断るとは……それなりの理由があるのだろうな…」

「…随分と行儀の悪い部下がいたもんだ。どっかの裏切り者みてえにな…」

鈴の音と共にゆらゆらと首元にチラつかせているのにエースは全く動揺を見せず、むしろ不敵な笑みを浮かべている。

そんなエースに甘寧はより一層強くする。

「貴様ぁ…」

「もういい思春！　収めろ！！」

「ですが！！」

とうとう内輪揉めに発展しそうな状況に程普はオロオロしていた。

そんな中、居心地の悪くなったエースは溜息を洩らす。

そんな態度に甘寧の勘忍の緒も切れる。

「貴様！！　この状況で「おれの友達は国に殺されたんだ」！！」

「「！！」」

甘寧の怒号に覆いかぶせたエースの言葉は全員に衝撃を与えた。

特に孫権には大きすぎた事実だった。

「サボっていう奴がいてな……そいつがお偉いさんの前を横切っただけで……殺された……」

「「「……」」」

「だから…おれは国っていうものはあまり好きじゃねえんだ…」

エースの身近で起きた事に三人は何も言えなくなってしまった。

この世への絶望もあれば国に対する怨嗟も存在する。

腐った宦官の賄賂、汚職、政権争い、重税を課すなどといった問題も多く存在している。

そんな中、国を憎んでいる人の可能性を考えることができなかった孫権は自身に叱責した。

目の前の人の気持ちを考えずに愚かなことを言ってしまったのかもしれない。

自分達の利益を優先させてしまった。

これでは周りの腐りきった奴等と変わりない。

そう思った孫権はエースに頭を下げた。

「れ…蓮華さま！！」

孫権の腹心は止めさせようとするが、孫権自身に止められる。

「ごめんなさい……私…あなたの気持ちを考えずに自分の利益を優先させてしまった…」

「……」
「蓮華さま…」
「孫権さま…」

孫権の誠意の籠った謝罪に皆が聞き入られる。

そんな中でも孫権は自身の胸の内を伝える。

「だけど分かって欲しいの……私があなた達を誘ったのは私欲のためじゃない。私達の大望を叶えたいから」
「大望？」
「ええ。この世の戦、腐った宦官を無くして皆が住みやすい太平を築くことだ」
「……」

エースは熱弁している孫権を見て思った。

嘘はついていない。この目は本気だ…と。

エースは孫権の目から胸の内に宿す強い意志を感じ取った。

それを知った上でエースは答える。

「それでもおれはどうしても国に手を貸そうとは思えねえ」
「……そう…」
「だけど……」
「？」
「国じゃなくてお前等『自身』は結構好きだぜ？」

エースがいつもの笑みで孫権を見ると、孫権は豆鉄砲を食らった鳩

のような表情をする。

「え…それって…つまり…」

「国の言う事は聞かねえ。けどお前等の頼みなら別だぜ？」

「それじゃあ…！」

孫権が一変して明るい口調で答えを聞こうとした時、エースは手で制す。

「ただし、次に会えたらの話だけどな」

「？　どういう事だ？」

「さっきも言った通り旅に出ようと思ってな。まだここの事なんて全く知らねえから」

「それでこの大陸を見聞するという訳か…」

「ああ。その最中で運命がおれ達を巡り合わせれば…そん時は条件付きでだ」

「ええ！　それで構わないわ！！」

孫権は満面の笑みで喜ぶ。

しかし、それはエースの気持ちのいい笑いでは無く、見ている人に癒しを与える様な微笑みだった。

「それで、あんたはそろそろ剣をどっか置いてくれ。もう試しただろ？」

「……気付いてたのか？」

「あんたからは殺気が感じられなかったからな」

そう言われ、甘寧はエースから剣を離してしまう。

「ふ……やはり気付かれてたか。もし気付いてなかったら私の接近を許すなど有り得んだろうがな」
「その割には途中でそれも忘れて激怒したろ」
「なっ！！」

甘寧は図星を突かれたのか顔を真っ赤にさせる。

「あ…あれも全てお前を試すためにだな…！」
「そうかぁ？　その割には剣が震えていたような…」
「ふっ！」
「おっと」

突如、甘寧はエースに剣を振るうが、エースは跳んで避ける。

しかし、甘寧は顔を赤くさせたまま剣を振るい続ける。

しかし、その悉くを避けられる。

「このっ！　ちょこまかと！！」
「おっと。ほいっと」

そんな鬼ごっこを程普と孫権は苦笑しながら見物していた。

結局、甘寧が力尽きるまで続いた。

こうして、エースは言った通り、村を出て旅に出ている。

もう村も豆粒にしか見えない程遠ざかっている。

さっきまで村人たちに揉みくちゃにされてたのも、いつかは良い思い出になるかもしれない。

村の方にはまだ孫権と甘寧もおり、村に護衛を付ける手続きを行うために後三日は残るようだ。

急な見送りの時も来てくれたのだから、本当に良い奴等だったな～…とエースは思っていた。

が、しかし……

「……本当にいいんだな？」

「はい。今回の件で改めて実感したんです。今の世の中を…」

「そうか…」

程普まで一緒に付いて来ることになった。

なんでも、世の中を見なければ今の世の中を知ることができないからだとか…

そこで、エースと一緒に行けば丁度いいのでは…ということだ。

「だけど…わざわざおれと一緒じゃなくてもいいんじゃねえか？」
「それはそうですが…まだまだエースさんから教わりたいことがたくさんあります…何より…」
「？」
「エースさんが能力を当たり構わず使うことが心配なんですよ！！」
「そんなに信用できないか？　おれ」

程普の辛口批評に若干落ち込む。

程普はそんなエースをスルーしてある事を思い出す。

「そういえば、わたしの真名はもう教えましたっけ？」

しかし、エースにはそんなこと分からない。

「真名？　なんだそれ」
「真名を知らないって……やっぱり何もかもがエースさんとは違う世界なんですね…」

感心した様に呟き、程普は「コホン」と言って答える。

「真名とはですね、その人の本質を表す本名であり、親しい者以外は知っていても呼んではならない神聖な名前なんです。もし、許されてないのに呼んだらどんな相手でも首を切られても文句は言えないんですよ」
「うは～コエー。そういや孫権も甘寧も別の名前で呼び合ってたしな…危うく呼ぶとこだったぜ」
「やっぱり付いてきて正解でしたよ」

笑うエースをジト目で見るも、すぐに本題に入る。

「それでですね、今からわたしの真名を授けようと思うんですが…」

「お！　許してくれんのか！？　ありがとよ！！」

さっきの話を聞いたのにも関わらず、尻込みもせずに喜ぶ。

「（クス）…ええ。こちらもお世話になりましたから」

程普は子供のように喜ぶエースに微笑ましさを感じながら告げる。

「わたしの真名は鈴仙と申します。これからは鈴仙と呼んでくださいね♪」

「ああ。おれの名に真名なんてねえ。だからいつも通りエースでいいぜ」

「はい！」

こうして心を許し合った二人は新たな冒険に向けて歩を進める。

そこから始まる何かを求めて…

そこから始まる絆を求めて…

今、伝説が動き出した。

本来有り得なかった物語が始まった。

## 始まる（後書き）

やっと次回から原作キャラと絡みます。
次回はあの三人組が！？
程普プロフィールはすぐはっつけますんで

## 御遣い（前書き）

今回からテストで更新が止まる…はずです。
多分二月の下旬か中旬になります（かと言って上旬になるかも）
ですが、私は必ず戻ってくる！！　それまでしばしのお別れです！
！　これから頑張っていきます！！

ちなみに今回も展開が急です

## 御遣い

エース達が旅立ってもう数日が経とうしていた。

今は山の中で野営の最中。

満天の夜空の下を焚火の火が赤く照らす。

「もう焼けたかな？」
「まだじゃねえの？」

川で採った魚と山の幸を焚火で調理してる中、エースは考えていた。

覇気

エースの周りでは覇気という力を使う者が多かった。

白ひげと出会った時、何故自分にダメージを与えさせたのかを聞いてみた。

聞いてみれば、それは覇気を使ったからだという。

覇気には三つの色が存在する。

武装色の覇気…身体に纏わせて攻撃すると攻撃力が倍増。さらには自然系（ロギア）、動物系（ゾオン）、超人系（パラミシア）の能力に関係なく、実体にダメージを与える事ができる。更には鎧を纏うように防御力を上げることもできる。

白ひげはエースに使って倒したのが武装色の覇気である。

見聞色の覇気…相手の動きを先読みしたり、強さ、居る場所を探ることができる。空島ではこれを心網（マントラ）と呼んでいる。

以上の二つは鍛え上げれば習得可能である。

しかし、修業では手に入らず、才能でしか身に着けられない色がある。

覇王色の覇気…数百万人に1人の王の資質がある者しか身につけることができない正に才能。一睨みするか、素通るだけで一定の覚悟が無い者は気絶する。修業すれば特定の人物を選んで気絶させられる。エースは10歳の時に無意識に出した。

基本覇気は武装色か見聞色のどちらか片方しか極めれないが覇王色の覇気を持ってる人は3色全て極めれる。覇気はその人物の強さに比例する。

新世界で生き残るためには必須と言っても過言では無い強力な能力。

白ひげ海賊団では船長『白ひげエドワード・ニューゲート』、白ひげ海賊団1番隊隊長『不死鳥マルコ』、白ひげ海賊団3番隊隊長『ダイヤモンド・ジョズ』、白ひげ海賊団5番隊隊長『花剣のビスタ』が覇気を使っていた。

自分がまだ未熟だった事を思い知りながら同胞と肩を並ばせて白ひげを王にするためにエースは修業法を聞き出して修業していた。

しかし、修業中に起きた惨事、黒ひげマーシャル・D・ティーチの仲間殺し。

白ひげ海賊団４番隊隊長サッチを殺した黒ひげに怒りを燃やしたエースは仲間の制止を振り切ってティーチを追った。

それ以降、修業はやっていない。

その為、エースの覇気はとても不安定で戦闘で使えるレベルには達していなかった。

しかし、この地で目覚めたエースの覇気に異変が見られていた。

強くなっていた。

まだまだ戦闘で使える程ではないが、明らかに覇気が強くなっていた。

時々、相手の二秒先の動きが見えたり、遠い場所から『声』が聞こえるようになる時もあった。

最初は気のせいだと思っていたが、そのことをはっきり自覚したのもつい最近。

山の中を一人で散策中、熊に襲われそうになった時だけ睨みを利かせた。

すると、熊は怖気づいたと思ったら急に泡を吹いて倒れた。

これにはエースも驚き、その後から試してみた。

その結果、意識して睨めば十回に一回は成功するようになっていた。

その事に疑問に思いながらも少し嬉しかった。

まだ強くなれる。

今は見知らぬ地にいるが、また強敵に会うかもしれない。

なら、修業しておいて損はないだろう。

そう思って現在修業中である。

「もういいでしょう」

「そだな」

考えに耽っていた所で魚が焼け、しばしの食事夜空の下で堪能した。

夕食も終わり、今日も終わろう時間にエースは寝転がりながら言った。

「なあ。鈴仙」

「はい？」

呼ばれた鈴仙は調理した後の片付中なので背中越しに答える。

「なんでおれ等野宿してんだ？」

その一言に鈴仙は固まり、手を止めた。

「最近じゃあ賞金首捕まえて金集めてんだから宿くらいはなんとかなるだろ？」

「……」

鈴仙の体が震える。

「それなのに野宿ねえ…しかも魚の量も少なかったしな～」

「へぇ……そうですか…」

鈴仙の声にはとてつもない何かの感情が込められている。

「今から飯行かねえか？　どうも腹減って眠れそうにねえんだよ。あ、どうせなら飲もうぜ？　お前酒はいけるだろ？　で、その後…」

「……（プツン）！！」

ここで鈴仙から何かが切れる音が聞こえたからエースは鈴仙を見てみる。

「どうし「誰のせいだと思ってるんですか誰の！！！！」うお！？」

鈴仙が鬼のような形相でエースに凄んできたため、エースは起き上がって高速で後ずさった。

それでも鈴仙はエースに近付いて凄んでくる。

「そのお金を持ってるのに茶店で食い逃げしようとしてたのはどこの誰ですかっ！！」

「いや…あれは…癖っていうか…「食い逃げが癖！？　その癖のおかげで村から追い出されたんですよ！！」うぐぅ…」

鈴仙の過去最高とも言える怒りにエースもタジタジになる。

「これじゃあお金あっても使えませんねぇ！！　さあどうしましょう！？」

「れ…鈴仙…今回はおれが悪かったから…とりあえず「しゃらっぷ！！」分かった！　ごめん！！」

「ゴメンで済めばどれだけよかったか！！　見てください！！　屋根が無いから夜空の☆が良く見えて綺麗ですねぇ！！」

「分かった！　今度からできるだけ「あぁ！？」二度としねえから！！」

そんな議論を続けていると…

グオオオォォ

遠くで熊があらわれた

エースはそれに気付いた

たたかう　　どうぐ
ポ〇モン　　にげる

飯だ！！（注：たたかう）

「よっしゃあ晩飯だあああぁぁ！！」
「え…エースさん！？」
「……こっちか！！」
「あの、エー「ウオオオオオオオオオォォォ！！！！！」…」

エースは耳をすませながら鳴き声のあった方へと全力で走る。

その様子を鈴仙は一人固まって見ているしかなかった。

エースたちとは少し離れた所では三人の少女が野営をしていた。

「あ～あ…今日はこないな所で野宿かいな…」
「う～…少し冷えてきたの～…」
「仕方あるまい。路銀が切れたのだからな」

こちらも焚火で山菜を焼いて食べようとしている。

一人は関西弁で上半身はビキニだけであるため豊満すぎる胸が隠れるどころか強調されている少女。

もう一人はラフでありながらお洒落な服のポニーテールの眼鏡をかけた少女。

そして、最後は見える素肌には傷跡がついた銀髪の少女。

その三人は焚火を囲んで腰かけていた。

「それにしてもこんなド田舎にまで来る必要あったんかい？」

「ここらの役所ってとっても小さいの～。だからちょっと沙和たちには…」

「いや、今はとにかく名を上げなければならない。そのためにはどんなに小さくても国に士官できる所がいい」

「そらそうやけど～…」

「凪ちゃん、真桜ちゃん。もう焼けたの～」

三人の雑談中に山菜が焼けたのを確認すると、三人はそれぞれ山菜を食べる。

「にしても肉は無かったんかいな。正直これだけはキッツイで？」

「仕方無いさ。ここらへんで動物を見なかったからな」

「そうでもねえぜ？　探せば意外と見つかるもんだ」

「そうか？　やっぱりもうちょっと探しとけば…って誰だ！！」

銀髪の少女が突然の知らない声に警戒し、その方向を辿るとそこには熊がいた。

「なっ！！」

「ぎゃあぁぁ！！　熊が喋ったで！！」
「二人とも！！　そんなことより死んだフリなの！！」
「沙和！！　そんなのは迷信だ！　くそ…こうなったら…！」

三人は熊から離れるように一点に集まっている。

その中で銀髪の少女が足を振り上げると…

「落ち着けってお前等…ふぅ…」
「へ？」
「は？」
「ほえ？」

熊の下からエースが顔を出した。

それを見た三人はギョっとした。

「熊から人が生えたで！」
「何！　どこだその熊！」
「それはお兄さんなの～」

そう言っている間にエースは熊を下ろす。

重量感溢れる音で熊がどれだけ大きいかが伺える。

「あの…あなたは…」
「あ、食事中に失礼。申し遅れました。何とも美味しそうな匂いに誘われてやって来たおれの名はエースです」
「いえ、私の名は楽進と申します。どうもお気づかいなく」
「凪。乗せられとるで」

背筋を伸ばしてお辞儀をするエースに銀髪の少女の楽進はお返しにお辞儀をする。

楽進に対して関西弁の少女はツッコミを入れる。

エースは熊を指さして聞く。

「なあ。ちょいと火ぃ貸してくんねえか？　こいつ焼くから」

「は…はぁ。それだけなら構いませんが…」

エースのマイペースさに楽進はあまり強く言えなくなっている。

そんなエースに三人は向かい合ってヒソヒソと話し合う。

「あの…どうする？」

「いや、そんなん聞かれても…」

「でも…悪い人じゃなさそうなの～…」

三人は熊の肉を焼いているエースを見る。

「なんだ？　お前等も食うか？」

「「「……」」」

急に出てきて熊の肉を焼いているエースを微妙な視線で見る。

エースをどう扱うか決めあぐねている様子だ。

「あ……あの…」

楽進が思い切って話し掛けて突破口を探ろうとすると……

「エースさん」

エースの後方から地鳴りが起きたのかと思わせる程の低音が聞こえてきた。

その声に全員は動けなくなるが、エース本人だけが首をギギギとブリキ人形のように後ろに回す。

すると、そこには腰に手を当てて額に血管を浮かばせた鈴仙がいた。

しかし、背後に何かおぞましい何かを背負っている。

エースはそれに戦慄しながらも焼けた肉を食べることは忘れない。

その傍で三人の少女は動けずにいた。

そして、遂に鈴仙が再びキレた。

「話の最中にわたしを置いてどっか行くなんてひど過ぎます！　エースさんを見つけるまでどれくらい苦労したか分かります！？」

「わ…分かった…おれが悪かったから少し…」

～しばらくお待ちください～

痴話喧嘩も終わって双方（ていうか鈴仙が）落ち着いた所で三人の少女と話せるようになった。

「エースさんがお世話になりました。わたしは付き添いの程普と申

します」
「いえ、こちらこそ折角のお肉をご馳走になるのですからお互い様です。私のことは楽進とお呼びください」
「おーい！　お前らも食おうぜー！」

鈴仙と楽進がお辞儀し合っている時、エースはもう二人の女性と自己紹介を済ませ、関西弁の少女を李典、ポニーテールの少女を于禁と呼んでいる。

さっき叱られたとは思えないほどスッキリした性格に鈴仙は額に手を当てて苦笑する。

もう何も言うまいと諦めたのだろうか。

楽進は鈴仙に同情しながらエース達の元に集める。

「聞いたか凪。兄さんって海から来た異国の人なんやて」
「確かにエースさんの服装は見たこと無いの～」
「ちゅうか半裸やけどな」

そんな世間話をしている中、鈴仙は気になったことを聞いてみた。

「楽進さん達も野宿するつもりだったんですか？」
「はい。お恥ずかしいながら路銀が底をついてしまって……」
「それでもこの山の中で野宿は危険過ぎませんか？　人のこと言えませんが…」
「私たちもそう考えたので民家に頼み込んで置いてもらおうと思ってたのですが……」

楽進は不服そうに眉間に皺を寄せた。

それは楽進だけでなく李典と于禁も同様だった。

その様子にエースと鈴仙は顔を見合わせて不思議がっていると…

「村で食い逃げを働いた者のおかげで村人に外部の人間に対する信用が消えて……」

「ウチ等も門前払いくらったちゅう話や」

「「……」」

怒りを滲ませた楽進と李典の話を聞いたエースと鈴仙は何も言えなくなった。

きっと…いや絶対正体が知れると問答無用で襲い掛かってくるだろう。

そう核心させるほどだった。

「もし見つけたらギタギタにしてやるのー！」

「そんでもって縛り上げて川に流して死なせずにじっくりといたぶるんや」

「最後に二度と日の光を拝めないよう牢に入れてやりますよ」

「あはは…やっぱり食い逃げは許せませんよね～？」

「……」

怒る三人に同調し、鈴仙はエースをジト目で睨む。

それに堪えられなくなったエースは明後日の方向を見て黙り込む。

「「「？？」」」

そんなエースを事情の知らない三人は首を傾げて見る。
それを知っている鈴仙はニヤニヤして見ている。
しばらくして、鈴仙はエースを許してやろうと助け舟を出す。
「ここで会ったのも何かの縁ですし…今晩は一緒に寝ませんか？」
「一緒……ですか？」
その鈴仙の提案に楽進は顎に手を添えて考えた結果…
「なるほど、これだけの人数なら二人くらい見張りに置いて…」
「交代で寝れるの」
鈴仙からの提案に三人は納得し、賛成の様子である。
「そんじゃあおれが最初に見張ってやるよ」
「そうですか？　それなら私も…」
楽進も一緒に見張ろうと提案しようとするが、それをエースは制す。
「おれなら一人で充分だ。だからお前等は寝てろ」
「いえ、他人に任せて自分だけっていうのは…」
「なら気にすんな。おめえ等には迷惑かけちまったからな。これくらいはやってやるよ」
「で…ですが……」
根が真面目な楽進は食い下がろうとするが、エースも負けずに譲る気が無い。

「凪、折角の兄さんの好意は素直に受け止めるもんやで？」
「真桜！　しかし…！」
「その嬢ちゃんの言う通りだ。勿論、おれが眠くなったらお前等の誰かを起こしておれは寝る。それで文句ねえだろ？」
「……分かりました。そう仰るなら」
李典とエースの説得で楽進は折れた。
それを見て鈴仙は思った。
（なんだかんだ言って、やっぱり責任感強いんだなぁ…）
ほぼ一週間共に生活してきて、エースの性格は分かってきたつもりだった。
普段はマイペースで少し問題がある時があるけど、自分のことは自分でやる責任感の強い人。それでいて打算的ではなく純粋に人と関わるから人当たりもいい。それでいて友人が襲われるのには我慢できない熱血な所もある。
まとめて言えば誠実な青年なのだ。
（本当に海賊だったのかな……）
そんなエースが海賊だったと聞かされた時は信じられず、それは今でも変わっていない。
（でも…）

鈴仙にとってはどうでもいいことだった。

エースの過去がどうであれ今この時を一緒に過ごしているのはエースだから。

そう思って考えるのを止めた。

「よし、じゃあ行ってくる」
「はい。では私達はこれで」
「気いつけてな～」
「おやすみなの～」

肉を食べきって背伸びするエースは楽進たちの声を受け取りながら背を向けた。

その時……

「……あれ？」

于禁が小さく声を上げてエースの背中を凝視する。

「沙和～、ちょっと焚火跡片づけるの手伝って～な」
「……」
「おい沙和」
「……」
「于禁さん？」

于禁が全く反応しないことに気付いたエース以外の三人は不審に思って于禁に近付こうとする。

すると……

「あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

突然、森を揺らすくらいの絶叫を放った。

その大音量にエースは勿論全員の耳に直に入り、苦悶の表情を浮かべる。

「なんやねん沙和…静かにしいや…」

「急に何事だ沙和！」

「あぅ～…」

「なんだよ…ったく…」

全員が耳へのダメージで朦朧としている中、于禁はエースの所に詰め寄り…

「ねえお兄さん！！　背中の絵をもっと見せてほしいの！！」
「？　刺青のことか？」
そう言ってエースは白ひげのドクロマークを見せると于禁は肩に提げていたポシェットを漁って一冊の本を出した。
素早く本を開いてエースのドクロと書簡を交互に見る。
一連の行動に全員は唖然とする。
すると……
「間違い無いの！！　凪ちゃん真桜ちゃんこれ見て！！」
「「？？」」
訳も分からず、于禁の本を覗き見る。
しばらく何気なしに読んでいた二人だったが…
「「！！」」
ある一ページを見た瞬間、表情を変えてエースを凝視する。
「？」
「ど…どうしたんですか…？」
訳も分からないエースと鈴仙は三人を見つめるしかできない。
「まさか……本当に……」

「ホンマかいな……」

しかし、後から見た二人は驚きを隠せないまま本を見る。

痺れを切らした二人は三人に話しかけようと近付く。

すると、ここで予想外なことが起きた。

突如、楽進が本を落としてエースに跪く。

「「！！」」

突然の行動に二人は驚くしかない。

そんな中、楽進は跪いたまま話す。

「急で不躾なお願いで申し訳ありません！！　ですが…お願いします！！」

楽進は顔をエース達に向ける。

しかし、その表情は先程までとは違って畏怖の念が込められていた。

楽進の豹変ぶりに付いてけていないエース達に楽進は再度叫んだ。

「私達に力をお貸しください！！……『天の御遣い』様っ！！！」

そう言うと、辺りから強風が吹き寄せ、本のページがめくられていく。

そして、風が止むと、ある一ページで止まった。

『大陸の混沌、それは止まること叶わず戦乱の時代へ歩を進める
略奪、飢饉、汚職、悪政、戦が絶えぬ暗黒時代へと世界は進む
その世に彼は……天の御遣い……最強が放たれる
全てを焼き尽くし、全てを零に戻すであろう
真の歴史はここから始まる……未だ見ぬ世界はそこから…』

そのページには上記に上げた言葉と共に……
白いひげを結わえた
笑みを浮かべた髑髏が
不敵な笑みを浮かべていた

## おまけ1「もし、光が外史に渡ったら…」（前書き）

この小説を始める前に温めていたネタです。製作途中だったので十分でできました。僕はまたこれからテスト勉……キツイ…

それと、オリジナルのニロインの一人、程普の真名とイメージを大幅に変えます。やっぱり格ゲーのはイメージしづらいのでそこらのゲームから引っ張り出してきます。変更はこの作品の本編が始まる時、来週までにやっておきます。来週の日曜にまた見に来てください。

## おまけ1「もし、光が外史に渡ったら…」

とある地点のとある村。

そこでは幾人かの少女が戦っていた。

一人は青い髪の夏侯淵…真名を秋蘭。

巨大な鉄球を振り回す少女の許緒…真名を季衣。

体中に古傷をつくった楽進…真名を凪。

豊満な胸を隠さない、豪快な関西弁が特徴の李典…真名を真桜。

二刀流を携え、女の子独特の格好の于禁…真名を沙和。

その五人はその場で結託し、黄巾党と戦っていた。

最初、本軍がその状況を聞き、救援に向かう。

あまりに分が悪すぎる。

指揮官が優秀でも数が多すぎる。

だから陳留から軍を大量投入した。

大群を率いるは陳留の勅史の曹操…真名を華琳。

華琳の右側に控えるは夏侯惇…真名を春蘭。

左側には荀イク…真名を桂花。

三人は秋蘭を救出すべく村に向かった…

のだが…

「……もう一度言って…」

「…はい……我々が戦闘を開始した直後に……黄巾党が爆発しました……」

「……秋蘭…まさか貴女からそんな報告を聞くなんて…貴女も疲れてるようね…」

目頭を押さえて唸る華琳に春蘭も桂花もうろたえる。

そんな中、秋蘭はすぐ近くで控えていた凪に言う。

「……黄猿殿を連れて来てくれないか…？」

「はい…！」

凪は素早く動いた。

黄猿？

誰だ？

殿…男なのか？

皆がそんな事を考えていると…

「こっちやで。おっちゃん」

「早く来るの～」

聞き慣れない声が聞こえ、曹操たちが声の発信源を辿ると…

「心配しなくても逃げないよ～」

思考が吹き飛んだ。

（（（……巨人か？））））

後からの登場組は思わず見上げた。

身の丈2メートルの大男が腰を曲げ、顎を撫でながら華琳達をジロジロ見る。

「な…なんだ…」

「ちょっ…見ないでちょうだい！」

春蘭と桂花はプレッシャーを感じるが…華琳は堂々としている。

「…君が…この軍の頭か～い？」

「あら？　何故かしら？」

「何故って…君がこの中で威厳があるからだよ～」

「見る目はあるのね」

華琳と黄猿が話していると、横から春蘭と桂花が割り込む。

「貴様！　華琳さまに近寄るな！」

「そうよ！　あんた黄巾党かもしれないじゃない！　その服も黄色いから！」

「違うよ～…だってほら…」

黄猿は背中を向け、コートの『正義』の字をみせる。

「ほら…こんな感じだよ？　わっしは」

「「もっと怪しい！！」」

「ヒドイよね～」

そんなやり取りをしていると、春蘭は我慢の限界を超えた。

「ええーい！　もういい！　切り捨ててくれる！！」

「なんでそうなるのぉ？」

あまりの理不尽さに黄猿も面倒になっている。

華琳も忠臣に呆れ、止めようとするが…

「コワイねぇ～…剣…抜くんだぁ…」

『！！』

身体が震えた。

殺気を向けられた春蘭だけでなく、周りにいた桂花や華琳にまで伝わってしまった。

（何だ！？　これは…！）

春蘭は自分に何が起こったのか理解できなかった。

しかし、その疑問もすぐに氷解した。

殺気を追っていくと、その先には黄猿。

（この男…）

未だ笑みを浮かべる黄猿に華琳は思った。

強い。

今まで会ってきた猛者の中にも想像を超える強さを持った者もいた。

しかし、その強さも今、更に濃厚な強さに埋まっていく。

そんな重い空気の中、黄猿は言う。

「じゃあさぁ…」

黄猿は殺気を収める。

すると、周りの緊張が切れ、地面に膝を付く者が出てくる。

そんな中、黄猿は言う。

「一回…斬られてあげるよぉ」

「！！」

「なに！？」

男の一言に衝撃を受けた。

「……あなたは自分が言っている事を理解しているの…？」

「勿論だよ～。それで？　やるのぉ？　やらないのぉ？」

華琳と話した後、黄猿は春蘭にいつも通りの笑顔で挑発する。

その態度に春蘭は…

「……どうなっても知らんぞ！！」

その一言に春蘭が黄猿に斬りかかる。

「！　春蘭！！」

華琳が止めるが、もう遅かった。

既にモーションに入り、黄猿の首を切断した……

はずだった……

「……え？」

「な！？」

「！？」

華琳、春蘭、桂花は驚愕した。

なぜなら、切断したはずの首は傷が付く所か無傷のまま通り過ぎた。

「な…何よ……これ…」

「そんな……手応えも…無い……」

「……」

三人は黄猿に畏怖の籠った視線をぶつけるが、本人は飄々としながら華琳に聞く。

「そういえばさ～、黄色い布を頭に巻いた奴等って……全員死刑でいいんでしょ～？」

「え……えぇ……」

そう言った瞬間、黄猿の体が光ったと思ったらその場にはいなかった。

しかし、すぐ近くの民家の裏が光る。

「おぉ～…仲間にでも置いて行かれたか～い？」

そこには十人くらいの黄巾党がまだいた。

どうやら隠れてやりすごした、と思っていたらしい。

賊たちは黄猿の出現に頭の回転が追いつかずに呆然と見ているだけであった。

そんな賊に黄猿は……

「速さとは重さ…光の速度で蹴られたことはあるかぁい？」

そう言って賊の一人を蹴り飛ばす。

すると、蹴られた賊は民家を次々となぎ倒しながら華琳たちの傍まで飛ばされ、止まる。

全身の形は最早原型を留めてはおらず、首、腕、膝、足がありえない方向に折れ曲がっており、まるで踏み潰された人形の様になっていた。

「「なっ!?」」

「ひぃ!!」

華琳と春蘭は賊を見て驚愕し、桂花は人とは思えない形のそれに悲鳴を上げた。

そして、民家を倒した際に起きた砂埃が晴れていくと……

「ここの人は出会い頭に突き刺す人が多いんかねぇ～?」

そこには五人の賊に刺されて平気を装う黄猿がいた。

そして、黄猿は何も言わずに人差し指を突き出して賊に向ける。

ピシュン

それは一瞬だった。

黄猿の指から出たビームは賊の胸を貫く。

「がは!」

そう言いながら賊は剣を離して倒れる。

剣はそのまま音を立てて地面に落ちる。

「うわぁ！！」

残りの賊達は黄猿から跳び起きて逃げた。

もはや恥も外聞も無く叫びもした。

「光から逃げられるとでも……思ってるのかぁい？」

そう言って光る足を振り上げてビームを放つ。

すると、ビームは賊に当たり、大爆発を引き起こし、周りの民家と共に紙のように吹き飛ばした。

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

その場にいる全員は戦慄し、指を動かすことさえ忘れていた。

その時…

ピシュン

「！！」

「なっ…！」

「ひっ！」

突如、黄猿が光と共に春蘭たちの前に現れた。

それには全員が動けなくなった。

恐怖。

見たことも無い術、剣で突き刺しても死なない体、そして家を軽々と吹き飛ばす脅威の力。

それを目の当たりにした華琳たちのショックは計り知れなかった。

「あ……あなたは……一体……」

「わっしはピカピカの実を食った光人間。ロギアだよ～？」

「ろ…ぎあ…？」

相手が何を言っているか分からない。

本来ならここで春蘭が嘘をつかれてると思って噛みつくはず。

しかし、今の春蘭には恐怖で倒れないように堪える余裕しかない。

そこへ黄猿の追い討ちが来る。

「もしよかったら～、君たちの素性も教えてくれないかね～？」

「……知ってどうするの？」

華琳はなんとか聞き返すが、黄猿は構わずに続ける。

「わっしの仕事は悪人をやっつけるのが仕事だからね～。……もし君たちも市民を脅かす存在ならば……」

その瞬間、黄猿の表情により一層深い影が差した。

『『『！！』』』

それと同じように更に濃い威圧が華琳たちを襲う。

「全員……ここで…死ぬよぉ…今……ここで死ぬよぉ……？」

それを聞いて思った。

嘘をつけば殺される。

華琳はサングラス越しの目を見てそう思った。

私の素性を見てもらえば襲ってはこないだろう……

それにこの力……欲しい…

……仕方無い……少し危険で早計だが……これで行くしかない。

「…それならば私の城に来ない？」

「「華琳様！？」」

案の定というか、春蘭と桂花は信じられないといった表情で私を凝視する。

まあそれが当然かもしれない。

まだ彼の…黄猿の人柄を把握した訳ではないが、少し分かった。

だから大丈夫なはずだ。

「おぉ～…いいのか～い？」

「ええ…私の部下も貴方を斬ってしまった…そしてこの村を救って

くれた…少しのもてなしはさせてもらうわ」
「それは助かるね～…え～っと…」
「私の名は曹猛徳よ。曹操と呼んでも構わないわ」
「そっか～曹操ちゃんか～。ならわっしの事も教えておくよ～？」

黄猿は飄々と答える。

「わっしは海軍本部大将の黄猿ぅ。黄猿のボルサリーノだよ～」

こうして後の『乱世の奸雄』は大陸で噂の『光の正義者』と共に歩みを進める。

## 程普プロフィール変更（日曜に来た人はこれを読んでください）

性は程、名は普、字は徳謀、真名は鈴仙

・プロフィール

江東（こうとう）の山に囲まれた集落の生まれ。幼い頃に両親を賊に殺され、天涯孤独（てんがいこどく）。それ以来村の皆から多大な愛を受けてすくすくと育つ。そのおかげで性格は優しくて明るい。村の皆にとっての憧れとなっている。そして、村を守りたい一心で強くなることを決意。毎朝山の中で修業をしている。しかし、彼女には夢があり、士官して世の中を内側から変えたいと思っている。もう一つの夢は好きな人と出会って幸せに暮らすこと。

そんな乙女な面もあれば、おっちょこちょいで偶（たま）に凡ミスをするドジを見せる。そして意外と甘えん坊のためエースからは妹と認識されて不服な様子。

・容姿

水色がかったロングヘアとブレザーにミニスカート、ネクタイ着用している見た目は女子高生。胸は孫権と同じくらい。

顔は美しいというよりも可愛い。

・戦闘スタイル

我流による体術。力で叩くというより、技と速さで斬る、と言った感じ。

・ぶっちゃけ

鈴仙の容姿はそのまんま東方のうどんげの兎さん

・ぶっちゃけ２

オリキャラを別のゲームから引っ張り出したヒロインとかにしたなら想像しやすいでヒデブ！！

・お悩み

どうも評価を見て思ったけど、どうやら僕には文章力が無いとのこと。自分で見てもどこが悪いのか分からないのでアドバイスできる人はじゃんじゃん出してください！！

・アドバイス書き方

例文、例文を使っての説明を書いてください！！

・調子乗ったお願い

どの画像転載サイトでもいいからこの作品の風景（例：孫策とエースが肩を組み合っているとか）を描いて欲しい……です……すいません、図に乗り過ぎました…

それでは作者の愚痴に付き合ってくださって蟻が十ーーーーーー！
！！！！

これからもこの作品をよりよい作品にしていくよう頑張る所存です
！！

それでは次回にお会いしましょう！！

## おまけ2「もし、氷も外史に渡ったら…」（前書き）

十日前に予約しておいたものなのでで感想やらすぐには出せませんが、これでも見ててください。
おまけは今のところこれだけです。
次回の本編来週の日曜の朝十時！！

## おまけ2「もし、氷も外史に渡ったら…」

「……何も無いね～……」

背の高く、青いスーツの男は荒野の真ん中を自転車で走っていた。

男は気付いたら荒野の真ん中で立って寝ていたが、環境が変わり、目を覚ましてみると、そこは海軍本部ではなく、見知らぬ大地に立っていた。

知らぬ間にバーソロミュー・くまに飛ばされたのだろうか…とりあえず適当に探索していたのだが……

「あらら…」

途中で見つけたのは村だった。

しかし、その村は燃えていた。

その上、遠くからでも黄色い布を頭に付けた何者かが剣を持って徘徊しているのが見える。

「…とりあえず恩でも売っとこうかな～」

「下がれ下郎！！」
「桃香お姉ちゃんに近付くななのだ！！」
「二人とも！　気を付けて！！」

炎に包まれている村の中では二人の少女が後方に逃げそびれた村人達と桃色の髪の女の子の劉備、真名を桃香を守るべく、剣を持った輩に抵抗の意を示す。

「おい聞いたか！？　どうやら足手まといを抱えて俺等と！　しかも二人でやるつもりらしいぜ！？」

男達の下卑た笑いが響く。

「貴様等…！」

歯を強く噛みしめながら、黒髪の少女の関羽、真名を愛紗は男達を睨めつける。

「安心しな…おめえ等と後ろの胸のでかい女は殺さずに……俺達が遊んでやるよ！！」

男は剣を振りかぶって愛紗達に飛びかかっていくと…

「ぐあああああぁぁぁ！！！」

突如、男は肩を押さえて倒れた。

「お…おい！　何があった！？」

仲間が介抱すると、肩に何かが刺さっているのを確認した。

「……氷？」

男達と同様、愛紗達も驚きで目を見開いていると…

「残念ながら、二人じゃ無いけどね～」

上空から間延びした声が聞こえたと思ったら、後方の桃香と村人達の側へ降り立った。

「！　何者だ！」

愛紗が武器を男に構える。

「いやいやいや…折角助けてやったのにそれは無いんじゃないの？」
「ほえ？…じゃあさっきのっておじちゃんが？」
「そうだよ～…おれもこの黄色い奴をやっつけに来たってこと。分かったかい？　お嬢ちゃん」
「お嬢ちゃんじゃなくて張飛なのだ！」

そんな会話をしていると、後ろから桃香が話しかけてきた。

「あの…それじゃあ私達を助けてくれるんですか？」
「お……あんた悩殺ビッグボインだね。今夜ヒマ？」
「話を聞いてください～！」

桃香が文句を言っているが、お構いなしに調子を崩さず賊へと歩いていく。

「まあ、市民を助けんのもおれの仕事だしね」

それを聞いた愛紗は一応信用して武器を下ろした。

「そうですか…先程はしｔ「詫びは後にしといた方が良いよ」…そうですね」

そう言って賊を見ると、全員の顔が怒りに満ちていた。

数も３００はくだらない。

「流石にこの数…私達が相手をしますからあなたは援護をお願いします」

愛紗がそう言うも…

「いや……もっと効果的な戦法がある」

男はバッサリと愛紗の意見を切り捨てた。

「どんなの～？」

隣で、赤髪の幼女の張飛こと鈴々が聞いてくる。

「こうするのさ」

男は手ぶらで、賊へと歩いていく。

「ちょっ！…何を…！」

「あんた等はそこにいな」

愛紗の制止の声も聞かずに、立ち止まる。

「…てな訳で、時間も勿体ないからおれ一人でやるからよろしく」

その返答に、賊の中で体躯の大きい男が斧を持ってやって来た。

「てめぇ……俺達を嘗めてんのか？」

「まあそう言うなって。あんた等が降参してくれるなら命だけは見逃してやるよ」

更に巨漢の顔が真っ赤になる。

「誰が…！」

その怒りに任せ、怒鳴ろうとした時…男は巨漢の顔面を鷲掴みにしていた。

「それじゃあ……殺すぜ？」

男が静かに呟くのを賊は聞いた。

「炎に囲まれてる中、オブジェになるのも奇妙な話だねぇ…」

飄々と言いながら腕に力を入れる。

「アイス……タイム…」

男がそう呟くと、信じられないことが起きた。

なんと…巨漢の体が段々凍っていくからだ。

「あ……が…」

寒い…痛い…何だ?

一体何が……

そこで男の意識は切れた。

何故なら、男は完全に凍っていたからだ。

『……』

その場の全員は、今起こった現象に言葉が出ない。

「ふん」

そんな沈黙の中、男は巨漢の凍った体を蹴り、粉々に破壊した。

「さて……次は…」

男がそう言って賊を見ると…

『うわあああああああぁぁぁぁぁぁ!!!』

一斉に賊が男に剣を突き刺した。

「いやあああああああああぁぁぁぁ!!!」

桃香はそれを見て悲鳴を上げる。

「はぁ…はぁ…」

賊は無我夢中で息を整える。

やった。

賊は心の中で安心しきっていた時、何者かが賊の一人の頭を掴んだ。

「っ！？」

「あらら…ひどいことするじゃな～い」

自分を掴んでいる腕の先からは剣に刺さっている筈の男がにやけていた。

「な…な…」

「おやすみ」

男がそう言った後、賊の男は一瞬で凍ってしまった。

『うわあああああぁぁぁぁ！！』

すぐ近くで絶命したかも分からないが、剣を突き刺していた賊達は恐怖のあまり剣を慌てて抜いて離れる。

すると、刺されていた男は剣を抜かれた拍子の衝撃に粉々に砕かれ、ただの氷となってしまった。

しかし……

「んあああああぁぁぁ…」

気だるそうな声が聞こえたと思ったら、信じられない現象が起こった。

なんと、氷の破片が独りでに集まり、それが人の形を形成していくのだから。

その光景は、先程の砕けたシーンを逆再生しているかのようだった。

「…怖いのだ……」

「よ……妖術……なのか…？」

愛紗達は夢見心地でそんな浮世離れした光景をただ眺める。

そんな光景に賊は涙と鼻水で顔を濡らし、震えながら逃げる。

「うわあああああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

「化物おおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

「助けてえええええええええぇぇぇぇ！！！」

剣を握るのも忘れて賊達は身を翻して逃げた。

仲間を押しのけ、転んでも這いつくばってにげようとする者もいた。

そんな光景を目の当たりにしながら男はメンドくさそうに手をゆっくり地面に置くと…

「アイスエイジ（氷河時代）」

何が起こったのか分からなかった。

桃香、愛紗、鈴々、村人は我が目を疑った。

そうなるのも無理はない。

何故なら……

今まで炎に包まれていた場所が…

白銀の世界に様変わりしていたのだから…

その光景はあまりに異質。

あまりに幻想的。

そんな中、桃香は不意に聞いた。

「あなたは……何者……ですか……？」

その問答に男は大して表情を変えず、答える。

「おれは海軍本部の大将青雉。助けてやったからなんか飯ちょうだい」

軽い感じで答えた男は新たに時代のピースの一部となった。

これが蜀の仁徳と大陸で噂の『氷点下の正義者』との会合であった。

# 信念の象徴（前書き）

これでもまだまだテストは続いてるので感想の返信はまた後ほどに！

# 信念の象徴

ｓｉｄｅ　エース

「少し落ち着いたか？」
「はい…お見苦しい所をお見せして申し訳ございませんでした…」
おれは地面にうずくまって首をさすっている楽進を助け起こしているところだ。
おれをいきなり天の御遣いだとか言って頭下げた時はマジで驚いた。
テンション上がりまくって詰め寄る楽進を抑えるために手刀を食らわせて大人しくしてやった。
それで今に繋がってる訳だ。

「にしても偶然って凄いな～…まさか匂いで釣られてきた兄さんが御遣いって…どないやねん…」
「なんだか幻想的じゃないの～」
「二人共！　御遣いさまに失礼だろ！」

楽進が二人に注意するが、正直おれも訳が分からない。
天の御遣いってなんだ？
こいつ等おれを天使か何かと勘違いしてんのか？

「エースさんが天の御遣い……確かにそれっぽい感じが……となる

と…」

鈴仙は離れた場所でブツブツと呟いてるし…

いや、それよりも聞きてえことがある。鈴仙は放っておいて三人に聞いてみる。

「その話なんだが…おれから聞いていいか？」

「はい。答えられるならば…」

じゃあお言葉に甘えて聞いてみるか。

「それじゃあ、お前等はこれに見覚えはあるか？」

おれは背中のドクロを見せる。

だけど、結果は鈴仙と同じ様に首を横に振る。

やっぱり白ひげ海賊団を……いや、海賊の話が一度も出てこない…

思えばこの前の孫権もおれの名を聞いても反応が無かった……

…ダメだ。考えるほど分からねえ。

とりあえずこれは保留にして…

「じゃあ、このマークの載っているその本。それをどこで？」

「これは貰ったの～」

「貰った？」

「うん。この前ね、路銀稼ぎで働いていた所の女将さんがくれたの」

「……」
「なんでも、最近都の管賂って占い師がくれた本だけど～、その本が親戚の間で巡って…」
「ウチ等のとこに来たって訳……」
「…たらい回しの本かよ…」
しかも胡散臭いな…こいつ等よく信じようと思ったな…
でも…管賂か…
「その管賂ってのが今どこにいるか分かるか？」
「そうやな…ウチ等もつい最近聞いたことやし…管賂も都にいるとしか…」
「そうか…」
「申し訳ありません。知っていれば教えたのですが…」
「いや、それなりに情報が手に入ったからいいぜ」
にしても管賂か…何か知ってそうだな……会ってみる価値はありそうだ…
「あの…御遣い様…」
「…ん？　おれ？」
「はい。そうですが…」
おれが考えてると楽進が遠慮がちに話し掛けてきた。
…つーか…
「その御遣いって止めてくれねえか？　一瞬誰に話してんのか分からなかったぜ」

「いえ、しかし…」
「おれにはちゃんとエースって名前があんだ。名前で頼むよ」
「……分かりました。エース様」
「いや、様って…」
「いえ、天から参られたのですからこれくらいは…」
なんか渋々って感じだし、折れる気配も無さそうだからもういいか。
おれは早くも諦めた。
だけど、それでも楽進は話を続けてきた。
「エース様。実は折り入って話が…」
「ん？」
楽進の表情が引き締まったと思ったら…
「私達を御伴にしてください！！」
また急なこと言ってきたな…
「え！？」
「ちょお凪！？」
「えぇ！？」
これには当然、全員の疑問がハモった。
「……急にどうした？」
おれは疑問をそのまま楽進にぶつけてみる。

すると、楽進は我に帰ったかのように『失礼しました』と一礼してきた。

そこで楽進はコホンと改まっておれ達と向き合う。

「説明が足りませんでしたね。申し訳ありませんでした」

「ていうか過程もすっ飛ばしたの～」

于禁の言うことがもっともだ。

「でも、なんでエースさんにそんな…」

鈴仙ももっともなことを聞くと、楽進は頷いてから訳を話す。

「実は…私達は今、仕えるべき主を探しているのです」

「仕える？」

「はい、私はもちろん真桜…李典と于禁はこの国を憂いているのです」

「なるほど…それでどこかに雇って欲しがってるのか」

そう言うと三人は頷いて肯定した。

でも、それでなんでおれが必要なんだ？

「おれはこれから調べてえことがあってとてもじゃねえが国に仕えるなんて暇はねえ。それどころかどうなるかも分からねえ。とてもお前等の役には立てるとは思えねえんだが？」

「いえ、それでも構いません。むしろそうやって歩き回ってもらった方がいいのです」

「「「？」」」

楽進には何か秘策があるのか？

そう思っていると……

「あ！」

「どうした？　鈴仙」

急に大声を上げた鈴仙に何かと思って呼びかける。

すると、楽進は鈴仙を見て言う。

「どうやら程普さんは気付いたのですね」

「はい……でも、これってそう簡単にいきますか？」

「はい…というより私達にとってこれが一番可能性が高いのです」

二人の意味深な会話におれ達には全く伝わらない。

首を捻るおれ達に鈴仙と楽進は気付き、詳しく話してくれる。

「つまりですね、エースさんの『天の御遣い』って名前を利用させてもらうんです」

「はい。元々エースさんが御遣いであろうと無かろうと関係ないのです。重要なのはその背中の刺青なのです」

「？　こいつが？」

おれは背中のドクロに触れる。

「はい。まだ天の御遣いの噂はあまり知られていませんが、後々噂

も大きくなるでしょう」
「だけど、噂が広まり始めたころにその刺青を背負ったエースさんが歩き回れば…」
「そういうことかいな」
「なるほど～」

なるほど、つまりおれは餌ってわけか。

特別な名前を背負った奴に人は惹きつけられる。

簡単に言えば、おれと一緒にいれば必ず国からのスカウトが来る。
それを狙って自分の力をアピールして取りつく…てとこだな。

なんか癪だな…そういうの…

「もし、それを元に国の人間が来ても…おれはどうなる？」
「そこは考慮させていただきます。何もエースさんに迷惑をかけるつもりは無いので」
「……」

つまりおれに付いて来るだけでそれだけか。

確かにもし国の連中が来てもおれが逃げればいいだけだ。

それだけなら問題はねえ。

それだけなら……な……

「確かにお前の話ならどっちにも干渉はしねえな」
「はい。ですから……」

「ああ、この話……」

でも、一つ言わせてもらえば……

「断らせてもらう」

譲れねえモンがあるんだよ…

「「「「！！」」」」

おれの返事に三人どころか鈴仙まで固まる。

「え？　なんでやの！？」

「沙和達に協力してくれないの！？」

李典と于禁が非難に似た抗議をかけてくる。

そんな二人に乗じるように楽進も詰め寄ってくる。

「そんな！　何故ですか！？　双方に損なことは無いんですよ！？」

「せや！　アンタは何もする必要はあらへん！　ただそれだけやで！？」

「少しくらい協力してくれても良いと思うの！！」

そこへ三人と同じ様に鈴仙まで加わってくる。

「エースさん。何も断るほどのことじゃあ……」

確かにお前等の話ももっともな所もある。

だが、一つだけ納得できねえ所があるんだよ…

「お前等の話じゃあ、このドクロを村に見せびらかすって訳だよな…？」

「ええ、それだけでいいんです！　なのになんで「なら言ってやろうか？」！？」

納得できねえなら聞かせてやるよ……

おれの一言で静まった面子におれは…このドクロに秘められた意味をおしえてやる。

「いいか…？　おれにとってこいつはな…特別なんだよ」

「特別？」

鈴仙にも話してない内容だから全員首を傾げる。

それでもおれは続ける。

「これは…おれのオヤジを示す紋章でな……おれの仲間は全員このドクロを体に付けてたんだ」

「……」

「お前等にとってそれは同じ所属を表すだけの目印を示すだけだと思っているようだが、それは違う……これにはもっと深い意味が込められてるんだ」

「深い……意味？」

三人が聞き入っている中でおれはドクロをなぞって答える。

「おれの……誇りだ…」

ｓｉｄｅ　楽進

私達は天の御遣いと思しき人に会って舞い上がっていたのだろう。

私はすぐに御遣い様…エースさんに私達の協力を持ち掛けた。

天の御遣いの標である背中の刺青を大々的に見せびらかし、役人達の目に止まる様にする。

それなら双方には何も非はない。

今まで観察してきたが、中々に人が良いと思い、交渉に踏み込んだ。

しかし、答えは拒絶だった。

その事を聞かされた私達は納得がいかなかった。

何故断るのか？

確かに受ける義理は無いだろうが断る理由も分からない。

相当頭に血が昇ったのだろう。

エースさんに詰め寄って問い詰めた。

とにかく納得できなかったのだ。

しかし、私達はその直後の言葉で正気に戻った。

「おれの…誇りだ…」

その時のエースさんは愛しそうに刺青を指でなぞる。

なにより目から強い光を感じた。

エースさんの真剣な表情を見た私はさっきまで言いたかった事を言えなくなった。

それは真桜と沙和、それどころか程普さんも私と同じ様に静かになってしまった。

今のエースさんの威圧感がなせる業だ。

そのままエースさんの話を聞くことしかできない。

「おれの背負うこのドクロは…おれの信念の象徴だ」

「…信念」

「おれはこのドクロを誇りに思ってる。だからこれを背負うことに悔いも恥もねえ」

エースさんの熱意がヒシヒシと伝わってくる。

「だから、これだけははっきり言っておく」

エースさんの威圧が一層増し…

「このドクロを見世物にすることだけは絶対にしねえし、したくねえ」

「！！」

強い意志が私達にのしかかってきた。

それで気付いた。

私は…自分勝手だった。

いくら国を憂い、士官したいからと言って人の気持ちを蔑ろにするなど…

今の話からするに、エースさんの背中の刺青は伊達や酔狂で付けた物なんかじゃない。

何か大きい物と一緒に背負う覚悟をしたのだ。

その覚悟を見せびらかすのでなく、心に留めている。

彼にとってはとても大事な事。

それを私は私欲のために利用しようとしていた。

大事な物を利用される怒りを私はまだ分からない。

やられた人の心をどれだけ踏みにじったのかも分からない……

自分で血の気が引くのを感じた。

私は…とんでもない事をしてしまった…！

私は事の重大さを理解した瞬間、彼に頭を下げた。

「申し訳ありません！！　私、何も考えずに私欲に走ってしまいました！！」

「ウチも…悪かったさかい…堪忍してください…」

「沙和も…ゴメンなの…」

真桜も沙和も私と同じ様に罪悪感が生まれたのかエースさんに謝る。

「いや、お前等がおれの事情を知らなかったからいい。けど、お前等の提案は却下させてもらう」

当然……いや、許してもらえただけで充分だった。

私達はそれほどの事をしたのだから…

「「「……」」」

それ以降、私達はなにも言えずに頭を下げ続けた。

エースさんはそんな私達を無表情で見下ろす。

私達は非難されるのを承知で頭を下げた。

そんな私達にエースさんは…

「確かにその提案には協力できねえ…だけど…」

私達の頭を一人ずつ撫でた。

「「「……」」」

私達はその行動の真意が分からず、なんて聞こうかと思った。

しかし、エースさんは私達に構わずに続ける。

「少しくらいは手を貸すくらいならできるだろ？」

「え？」

口を吊り上げて笑いながら言う。

「要はお前等が軍に入れる様に強くなりゃいいんだろ？」

「えっと……あの…」

「それならおれも修業してえからよ。一緒にやろうぜ？　な？」

笑みを浮かべたその人の行動も心も読めない…

一度は彼を侮辱した我等を彼は何故……

「あの……エースさん…」

「ん？　何だ鈴仙」

「…エースさんは楽進さん達を…怒ってないんですか…？」

程普さんが私達と同じ考えだったのか、エースさんに聞くと当の本人はあっけらかんと答えた。

「そりゃあ最初はこのドクロのこと知らねえのに勝手なこと言うなって思ったけどよ……」

そう言いながら私達を見る。

私達は思わず体を震わせてしまうが、エースさんはしばらくするとより一層笑って頭を撫でた。

「こいつ等もう謝ったから別に気にしてねえよ」

「…そうですか」

程普さんも苦笑ではあるが、すんなりと受け入れてくれた。

どうやらいつものことであるかのように…

「よし、じゃあもう今日はこれでお開きだ。鈴仙も明日は気合い入れて相手するからな」

「え”!?……できればお手柔らかに…」

「そん時、おれと戦いたかったら相手してやっから。今日はもう早く寝な」

「え…あ…あの…」

私が喋ろうとした時、エースさんが焚火を消したおかげで何も見えなくなってしまった。

その直後、エースさんのいた場所から足音が聞こえ、足早に闇の中へ遠ざかってしまった……

「さ、もう寝ましょう」

何も見えない闇の中から程普さんの何気ない声が聞こえた。

「…なあ程普さん」

「なんですか？　李典さん」

「その……ウチ等兄さんに謝った方がええ……よね？」

「沙和達が失礼なこと言っちゃったし…」

真桜も沙和も私と同じで煮え切らない様子だということが声で分かる。

しかし、程普さんは何気なく言ってきた。

「あのエースさんが根に持ってるとは思えないけど……じゃあ明日の朝にもう一度謝ってみたらどうです？」

「え？　朝…ですか？」

「ええ。私は今エースさんから修業をつけてもらっているんです。ですからさっきエースさんも言った様に皆で行きませんか？」

修業……か…

私はしばらく思案した結果、その方が良いと思った。

「分かりました。その時はお邪魔させていただきます。真桜と沙和もそれで良いな？」

「分かった。今回はウチも不完全燃焼やしな」

「早起きは苦しいけど……その時は起こしてほしいの～」

沙和に若干の不安が残るが、明朝に全員で謝罪に行くことを決定した。

「それじゃあもう横になりましょうか」
「はい」
「分かったで～」
「ふあ～……今日は疲れたの～…」

明日の朝遅れない様に今日は早めだが、もう寝ておこう。

「「「「おやすみ～（なの）」」」」

その後は寝るために一言も喋らずに横になる。

それにしても…天の御遣い……不思議な人だった…

最初は少し…ほんの少しだけど変な人だと思ったけど…

でも背中の刺青を撫でる時のあの人からは何か大きい物を感じた。

理屈などで言い表せることではないけど…とにかく凄かった。

私はそう思うのと同時に襲ってきた眠気に意識を委ねた。

その時、はっきりと感じた。

冷たくなっていく体とは反対に彼が撫でてくれた頭がポカポカしていたことに。

その暖かさを感じながら私は夢の中へと旅立った。

## 謝罪と新たな想い（前書き）

やっとテスト終わったー！　ヒーーハーー！！！
ていうか新たなワンピース映画もあと少し！　関係無いけど「トリコ」もめっちゃ好きです！　ゼブラも大好きです！
関係無かった話でしたが、続きをどうぞ！

## 謝罪と新たな想い

辺りは淡く、暖かな光が線となって浮かび始めたころ。

「…進さん。楽進さん」

「ん……んぅ…」

鈴仙は未だに寝ている楽進たちの体を揺する。

すると楽進は目を擦りながら起き上がる。

「ぁ……程普さん…」

「おはようございます。これから修業に行ってきますけど、どうですか？」

凪はしばらく虚ろだったが、やがて覚醒する。

「はい！　すぐに準備します！　沙和、真桜！　二人とも起きろ！」

「ん…なんや？」

「まだ早いの～…」

「寝ぼけてないで早く目を覚ませ！　昨日行くって言っただろ！」

大声で怒鳴ると二人は眠たそうに起きる。

「大声ださんといて～な～…分かっとるさかい…ふあ～…」

「あ～う～…」

「寝ぼけてないで行くぞ！……すいません、お見苦しい所をお見せ

しました…」
「はは…そんな無理に行かなくても大丈夫ですよ？」
「いえ、昨日の無礼の謝罪はやらせていただきます」
楽進はそう言って二人の首根っこを掴んで持ち上げる。
鈴仙は苦笑いを浮かべ、そのまま森の中へと入っていく。
その後を楽進は二人を引きずって追い掛ける。
しばらく森の中を進むこと数分もすると、少し広い空間に出た。
木々は円形に地形を形作り、中心を避けているのかと思うくらいだ。
その中心でエースは準備運動をしていた。
「お、来たか」
「はい、おはようございます」
「おはようさん」
「おはようなのー」
エースは軽い感じで呼びかけると、楽進と先程まで眠そうにしていた李典と于禁の三人はエースに挨拶する。
すっかり目も覚めた様だった。
そして、三人はすぐにエースの前に集まり…
「「「すいませんでした！！」」」

一斉に頭を下げて謝った。

その様子にエースは面を食らっていた。

「…どうした？」

エースが戸惑いながら聞くと、楽進たちは顔を上げて答える。

「昨日のことですが…あの件は本当に申し訳ありませんでした」

「ウチも…」

「沙和もなの…」

三人はそう言って頭を下げる。

それを見たエースはしばしキョトンとする。

そして、その表情のまま言う。

「お前等何言ってんだ？　昨日からもういいって…」

しかし、楽進の声がエースの返事を遮る。

「いえ、あれくらいの謝罪など謝罪に入っておりません！　私達はあなたの誇りを餌にしようとしたのですから！」

「……」

「だから…申し訳ございませんでした！！」

「……」

これじゃあどっちが責められてるのかが分からなかった。

本当に昨日のことは既に気にしていない。

でも、何かしない限り謝り続けてくるだろう。

どうするか…とエースが悩んでいた…が…

それはすぐに閃いた。

「そうだ！　じゃあ今日だけおれの修業に付き合ってくれ！」

「「「……え？」」」

急に予想外なことを言いだしたエースに全員の視線が集まった。

「最近さ、修業は進んでんだけど……結構時間かかっちまってな、正直なとこ鈴仙だけだといつ完成するか分かんねえんだ」

「それって……わたしが頼りないってことですか…？」

「お前いつもおれに一発も当てられてねえだろ？」

「むぅ～……」

むくれる鈴仙を宥めながら楽進達の前に来る。

「どうだ？　おれの練習相手になってくれねえか？　それで昨日の件は水に流す、それでいいな？」

「「「は…はぁ…」」」

三人はエースのペースに乗せられて何も言えず、頷くことしかできなかった。

とりあえず三人は寝ていた場所に戻ってそれぞれの武器を取りに行った。

三人はすぐに戻ってきた。

楽進は鈴仙と同じ手甲。

李典はドリルのような槍。

于禁は二刀流であった。

「よし、そんじゃあ全員で掛かってきな」

チョイチョイと指で挑発するエースに流石の楽進たちもムッとなる。

「…少しウチ等を見くびっとらんか？」

「とても心外なの…」

「構わねえさ。むしろこれでも足りねえかと思ってんだけどよ」

そう言うと楽進は構えを見せる。

「……あまり見くびらない方がいいですよ」

「わかってるよ。……お前等の実力を見越してのことだ。遠慮無くこい」

エースの挑発に楽進たちの表情をきつくし、一斉に跳びかかった。

「今日はこんなもんでいいだろ」

エースは欠伸をしながらズボンの砂埃を叩いていた。

そして、エースのすぐ近くでは……

「はぁ…はぁ…」

「ぜぇ…ぜぇ…」

「うえ～……」

「……」

楽進、于禁、李典、鈴仙が地に伏せて呼吸を荒げていた。

そんな四人を置いといてエースは手をグッパグッパと握ったり緩めたりする。

（武装色も一通りはできる……だけど意外と難しいな……見聞色と一緒に地道にやっていくしかねえな……）

四人の相手で覇気を慣らそうとしていたものの、やはりそう簡単にはいかないようだった。

とりあえず、覇気のことは焦っても仕方ないから基礎をやろう、ということで落ち着く。

「おーい。とりあえず飯にしようぜ？　腹へっちまった」

「「「「……」」」」

呑気に言うエースに誰も反応しない。

それもそのはず、いつも鈴仙と一対一でやっていたのに急に四人とやることになったのだから手加減を間違えた。

そして、ついルフィと同じノリで修業を三時間やったのだから動けなくなるのは当然である。

「仕方ねえ…また熊採ってくるから準備は任せたぜ～」

手を振りながらエースは森の中へ入っていく。

エースの姿が見えなくなった後、森の中では少女たちの息切れの音しか聞こえてこない。

「凪ぃ…沙和ぁ…生きとるかぁ…？」

「あぁ……なんとか…」

「もう…死んじゃうの……」

「ていうか強すぎやろ……息一つ乱れないって…」

「はぁ……程普さんはいつもあの方とあんな修業を…？」

「はぁ…はい…といっても一方的にあしらわれてばっかですけど…」

はは…と苦笑いを浮かべる程普を見て楽進はエースの底力に驚嘆し

ていた。

鈴仙と一緒に闘ったけど、決して鈴仙は弱く無い。

それどころか自分と互角なのではないかと思う。

更に、連れの李典と于禁も武人の端くれ。

まず賊に後れを取ることは無いと言っても良い。

その四人でまとめてかかっていったのにも関わらず完敗。

しかも相手は全く疲れた様子もない。

底が知れない。

そんな風に楽進は思っていたが……

グゥ～～～～～～

「「「「……」」」」

腹の虫を誤魔化すかのように各々起きて、元の場所に戻って行った。

「？　なんだって？」

エースはまた捕ってきた熊の肉を頬張る。

しかし、その頭上には？が浮かんでいた。

その理由とは…

「私をあなたの弟子にしてください」

前方で頭を下げている楽進である。

勝負に負けた楽進はエースに弟子にするよう頼み込んでいる。

自惚れている訳では無いが、自分でそれなりに強いと思っていた。

少なくとも賊に後れを取ることは無いくらいに。

しかし、目の前の男に自身の武を以てしても勝てなかった。

いや、相手にもならなかった。

自分よりも高みにいる武人に会えるなど滅多にない。

不躾を重ねるようだが、こんな機会はもう来ないかもしれない。

だからこうして頼み込んでいるということだ。

その様子を他の三人はポカンと目を丸くして凝視する。

そして、エース本人はというと……

「……」

「……（ゴク…）」

肉を食べながら楽進を見ている。

試されていると思い、エースの目を真っすぐに見つめる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ぐぅ…くかー…」

「「寝たー！！」」

エースの食事中の昼寝を初めて見た三人は驚愕のあまりツッコミを入れた。

そろそろ慣れてきた鈴仙は「また…」と溜息を漏らした。

三人がかつてない反応にうろたえていると…

「つまりお前はおれと一緒に修行したい訳だな？」
「「「起きたーーー！！」」」
いつの間にか起きていたエースにまたビックリ。
「アカン…この人一流のボケ殺しや…」
「真桜ちゃん…感心するところズレてるの…」
「……」
義理の祖父と弟と同じペースに三人もタジタジだった。
しかし、ここでエースは気にせず続ける。
「それくらいなら構わねーぜ。おれとしても人数は多い方が都合が良いし、旅も楽しくなるしな」
エースがそう言うと、鈴仙はムッと頬を膨らませる。
「…それって、わたしといるのがつまらないってことですか？」
拗ねた口調の鈴仙にエースは否定する。
「ちげえよ。もちろんお前といても楽しいけどよ、やっぱ人数もいた方が賑やかになんだろ？」
「……はい」
そこまで言われると鈴仙も何も言えなくなり、ただ頷くだけだった。
そしてエースは楽進と向き合う。

「だから、楽進の修業を付き合う代わりにおれの修業も付き合ってもらう。これでいいか？」

すると、楽進も満面の笑みを浮かべる。

「いいんですか！？」

「まあな。ただし行き先はおれが行きたい所、でいいな？」

「はい！　これからよろしくお願いします！！」

楽進はエースが弟子入りを許してくれたことを感謝し、頭を勢いよく下げる。

それを見たエースは穏やかな笑みを見せる。

「んで早速だけどよ、さっきお前の戦いを見て思ったんだけどよ…」

「何か気になることが？」

「ああ…お前はな…」

早速、楽進と今朝の模擬戦の反省を始める。

それを李典、于禁が眺める。

「凪の奴楽しそうやね」

「凪ちゃん真面目なのー」

「まあそういうことで程普も仲ようして…」

「……真桜ちゃん？」

「し～…あれ見てみい…」

急に小声になった李典の指先を見てみると、その方向には鈴仙がい

た。

鈴仙はただ無言でエースと楽しげに話す楽進を見ている。

しかも、無表情でありながら目が笑ってない。

纏っている雰囲気も何やら不穏な感じがしていた。

一方、その鈴仙は胸の内でうごめく何かを感じていた。

（何だろう……とても痛い…）

無意識に胸に手をやる鈴仙を見て李典たちは呟いた。

「こりゃあ…ちょいと複雑な珍道中になるで……」

「恋心を持つと苦労するのー」

二人は若干面白がりながら今後の旅に思い馳せていた。

## 謝罪と新たな想い（後書き）

思えばエースもお人よしですね。燃えた軍艦から海軍と重要機密を救ったほどでしたから…

## 買い物（前書き）

結局は拠点と同じです。
拠点ではこんな感じでグダグダなのでご了承ください
遂に鈴仙が幻想入り？

## 買い物

山の中での弟子入りからまた数日。

現在では楽進と鈴仙の修行相手を務めつつ、自分の修行の練習相手として利用している。

簡単に言えばギブ・アンド・テイク精神である。

そして、今は…

「たぁ！」
「おっと」

鈴仙の正拳を左手で受け止め…

「はっ！」
「ふ…」

楽進の回し蹴りを右手で受け止める。

「おら、避けてみろ！」
「「！！」」

エースの声に咄嗟に腕で防御しようとするが、エースはそれよりも速く二人の正拳と蹴りを払う。

「うわ！」

「きゃっ！」

払いのけられて体制が崩れる。

エースは片手で逆立ちをしながら開脚、そのままカポエラの要領で二人に蹴りを仕掛ける。

「わ！」

「ぐっ！」

鈴仙は首を後ろに退いての回避、楽進は両腕でガードした。

しかし、エースは避けてよろける鈴仙を見て起き上がり、足払いをかける。

「え？…ふにゃー！！」

払われて宙に浮いてる時は呑気な声を出したが、背中から落ちると衝撃で奇妙な悲鳴を上げる。

「はぁ！」

刹那に続く様に楽進は正拳をエースに突く。

「ふ…」

しかし、エースは冷静に、口を吊り上げて楽進の攻撃を避けて腕をガッチリ掴み……

「うわあ！！」

楽進を一本背負いの要領で投げる。

「不意打ちで声出したら意味ねえだろ？」

エースは汚れた手を払いながら不敵に笑ってアドバイスをおくる。

「「きゅ～…」」

しかし、楽進も鈴仙も目に渦巻きマークを表しながらノビているため意味が無かった。

「…やり過ぎたか？」

そんな二人に悪いと思いながら目を回している二人を抱えて戻っていく。

「エース兄さんはもうちっと手加減できんの？」

「そうなのー。女の子の体にアザを作らせちゃダメなのー」

「そ…そうなのか？」

そこら辺で捕ってきた魚を頬張るエースは李典と于禁の押しに少し

困惑気味だった。

「止めろ二人共。私は自分で決めた事だ。エース様に非は無い」

そう言って楽進はエースの隣で腰を下ろして焼けた魚を頬張る。

「そうか？　凪が良いならそれで良いけどな」

エースが楽進の真名を呼びながら笑う。

それもそのはず、エース達と三人は互いに真名を交換しあっているからだ。

エースの弟子入りが決まった後、楽進は今までの無礼、我が儘の詫び、そしてエースの弟子ということで真名をエース達に預けた。

その際、李典と于禁も真名を認めてくれた。

理由は凪と同じだったが、なによりエースの性格も気に入ったということだった。

余談だが、真名を預かった時のエースの喜びようは凄まじく、宴まで行った。

「私から弟子になったのです。嫌なことは何もありません。それどころか私の我が儘に付き合ってくださって感謝の言葉しかありません」

「んな堅くなんなよ。おれも修行になってるからな。おれも助かってるよ」

「エース様…ありがとうございます！」

凪は満面の笑みでエースに頭を下げる。

「……」

その光景を複雑な心境で見つめる鈴仙。

ちなみに鈴仙もエースの隣を陣取っている。

（こんな風な位置）

エ＝エース　鈴＝鈴仙　凪＝凪　真＝真桜　沙＝沙和　火＝焚火

沙　真

火

凪エ鈴

そんな感じで隣でエースを見ているとある事に気付いた。

「あ」

エースの顔に食べカス。

鈴仙は少し迷った。

食べカスを見つけた時に真っ先に思いついた事を実行に移そうと思った自分が恥ずかしかった。

しかし、これならエースとの距離を狭める絶好の好機。

（鈴仙…行きます…！）

鈴仙は今持っているだけの勇気を振り絞った。

「エ…エースさん…あの…ほっぺに…」

「ん？」

エースが鈴仙の方を見る。

その瞬間、鈴仙の手がエースの頬を撫でた。

「あの…その…食べカス……」

そう言いながら顔を真っ赤にさせ、エースとは目も合わせようともしない。

そんな鈴仙にエースを除いた三人は呆然としている。

そして、当のエースは……

「お、はは…サンキュ」

無邪気な笑みを鈴仙に向ける。

「……／／／／／／／／」

赤い顔がより一層赤くなり、顔もまともに見れなくなってしまった。

それを見た真桜と沙和はニヤニヤしてエースに言う。

「なんやエース兄さあぁん。華に囲まれてえ幸せやねえ～…ぐふふ…」
「ん？　はな？」
言われたエースは辺りを見回す。
「華って……なっ！！」
それに習って凪も見渡すが、やがて真桜の言ったことを理解して顔を真っ赤にさせる。
「なっ…何を言うか！　私はエース様の弟子っていうだけで別に…」
「あー！　凪ちゃんの顔真っ赤ー！」
「嘘つかんとぉ…ほれ、全部ぶちまけてまいな」
「真桜！！　沙和！！　いい加減にしろ！！」
「「きゃー！！」」
顔を赤くさせたままの凪が怒鳴っても全く怖くない。
二人はわざとらしく抱き合ってわざとらしい悲鳴を上げた。
「それで～…エースさんは凪ちゃんと鈴仙ちゃんのどっちが好きなのー？」
「！　沙和！！」
「ふみゅう！？」
沙和の一言で凪は怒鳴り、鈴仙は奇妙な声を出して驚く。
その渦中にいるエースはウーン…としばらく首を捻るが、ニッと笑って…

「おれは二人共好きだぜ！」

エースは二人の肩に腕を絡ませて引き寄せる。

「！！」

「あう！？」

引き寄せられた二人は途端に赤い顔を更に赤くさせる。

二人の顔がエースの体に触れる。

知っての通りエースの上半身は何も着てもなければ羽織ってさえもいない。

もちろん、エースのゴツゴツした筋肉質の逞しく温かい体を顔に押し付けられた二人は……

「エ……エースさん…こんな……こんな……所…で……（／／△／／）」

「エエエエエエエエエエエエエエエエエース様！！　いいいい一体なななななな何を／／／／／／／／！？」

異常なほどの動揺を見せた。

それを見ていた真桜と沙和はより一層はやしたてる。

「エース兄さ～ん。中々積極的やないの～？」

「見ているこっちもアツいのー」

本人達はからかうつもりで言ったのだが、からかわれてるはずのエースはというと…

「熱いのか？　だったらもう消してもいいぞ？」
「あつい、の意味違うで」
「あぅー…」
「きゅー…」
「それよりも早く二人を離した方がいのー。鈴仙ちゃんと凪ちゃんが死んじゃうの」
「へ？」

エースが両サイドの二人を見ると、二人は顔を深紅にさせて目を回していた。

「お前等！！　どうした！？」
「いや、アンタのせいや」

真桜のツッコミも聞こえてないのか、すぐに二人を地面に寝かせた。

「大丈夫か！！　一体何が起こった！」
「わわ！　エースさんは何もしないでなのー！！」
「何でだ！　仲間が倒れたんだぞ！！」
「だから兄さんはじっとしててほしいねん。大丈夫。ただノボせただけや」
真桜が諭すように言うと、エースは少し落ち着きを取り戻す。

「…分かった」
「今からウチ等は水汲んでくるから兄さんは凪たちを見ててや」
「ああ。頼んだ」

真剣な表情で焚火を消すエースを一瞥した真桜と沙和はすぐに近場の川へと向かう。

「これから面白くなりそうやね♪」

「も～。そんなこと言っちゃいけないのー♪」

エースとは裏腹に二人は腹が立つような笑みを浮かべていた。

ｓｉｄｅ　凪

穴があったら入りたい…

私は今とても恥ずかしい…

どうやら私と鈴仙殿は少しの間気を失っていたようだ。

私達が目を覚ますと、真っ先にエースさんの笑顔が飛び込んできた。

最初は何が何だか分からなかった。

しかし、完全に思い出した時の私は……わー！　わー！

何を考えているんだ私はっ！！

エース様は私の師！　それだけだ！！

そうだ！　そもそもエース様が私などにそのような感情を抱くはずがない！！

「おお！　やっと街かぁ！！」

いきなりエース様の嬉しそうな声で正気に戻った私は道の先を見やると、視界には村があった。

そこまで来てたなんて……どうやら私は相当気がアレだったらしい…

というか鈴仙殿も私の隣でまだ顔を赤くしている。

……こんなに美人で強く、可愛らしい人がいるのだ。

到底私など見向きもしないだろう……

「凪ぃ！　鈴仙！　早く行こうぜ！」

「なーにしとんのや！」

「早く宿に行きたいのー！」

三人に呼ばれて私と三人に呼ばれて正気に戻った。

「「はい！　今すぐに！」」

そう言って私達は三人の後を追いかける。

「はは…！　屋根のある部屋は久しぶりだなぁ！」
「あ～…もうアカン。疲れた～…」
「疲れたの～…」

そう言って三人は一緒になって寝っ転がる。

「三人共、みっともないから止めてください」
「エースさん、真桜ちゃん、沙和ちゃんも気持ちは分かりますが…」

私と鈴仙殿が荷物をまとめながら注意する。

「まあ、それもそうだな。おれは上着を一着買いに行きてえと思ってたしな」

そう言って床から跳び起きた。

「それならわたしも行きます」
「おう。凪たちはどうすんだ？　おれたちと来るか？」

エース様の問い掛けに私は少し考えるが、私達には自分の都合があるのを思い出した。

「すみません。私たちは自分の都合がありますので」
「おれたちと来りゃいいじゃねえか。な？」
笑顔で誘ってくれるのは嬉しいが、これ以上迷惑はかけられないし、かけたくない。
「私達は食料の補充に行ってきます。分担すれば効率よくいけるでしょう」
そう提案するとエース様は納得してくれた。
「そうか…じゃあおれと鈴仙で行ってくるな？」
「ええ。私達はもう少し休んでから行きます」
「分かった。じゃあ行こうぜ鈴仙」
「あ、すぐ行きます」
先に行ったエース様を鈴仙殿は荷物をまとめた後、すぐに追い掛ける。
その際に見えてしまった。
鈴仙殿の赤みがかった笑顔を……
「……なあ凪ぃ」
「……」
「凪ちゃん？」
「……」
「「凪（ちゃん）！！」」
「うわ！　何だいきなり！！」
「いきなりやないで。さっきから呼んでるのに上の空やったやん」

「え？」

そうだったのか？

……二人には恥ずかしい所を見られてしまったな……

「凪ちゃん。本当はエースさんと行きたかったんじゃないのー？」

「いや…そんなことは……」

本当は行きたかったが……私なんかと行っても面白い訳がない……

「…そんなことよりも私達も買い物に行くぞ。私は先に外で待っている」

これ以上エース様のことについて言われたくなかったから私は何も聞かずに外へ出た。

ｓｉｄｅ　三人称

凪が部屋から出た後、残された真桜と沙和は大きい溜息を盛大に洩らした。

「全く……奥手もあそこまでいくと呆れるで…」
「どうする～？　このままだと…」
「分かっとる。でも、ウチ等はなんとか隙を見つけてくっ付けさすことしかできへんで？」
「やっぱ凪ちゃん自身の問題なのー…」
そう言って二人で再び溜息を吐く。

「これ以上待たすとアレやし、はよ出よか？」
「さんせー、なのー」
そう言って二人は凪の後を追う。

ｓｉｄｅ　鈴仙

賑やかとはいかないけど街を練り歩く。
そこらには故郷の村には無かった物がたくさん売られていてちょっと面白い。
だけど……今は……

「おお！　中々面白い物が売ってるなー！」

今はエースさんと一緒に……

「……／／／／／／／」

「？　どうした？　顔赤いぞ？」

「え！？　いえ！　なんでもありませんよ！？」

「？？　体調悪いなら戻って休んどけよ。ここはおれだけで充分だからな」

「大丈夫です！　ええ大丈夫ですとも、うふふふふ…」

「そうか。んじゃあ行くぜ」

ほぉ～……気付かない内に顔に出てたな～…危なかった～…

わたしは一段落して落ち着くとあることを考える。

……なんでエースさんをこんなに意識しちゃうんだろ？

初めて会ってから家に泊めて何日か過ごしていたから？　鍛錬に付き合ってくれたから？　村の仇をとってくれたから？

……本当に気付いたらこうなってた……

今まで良いなって思った男の人はいた。

だけどここまで…自分で言うのも難だけど動揺するとまではいかなかった……

そりゃあ顔はもちろん良いけど、それだけじゃないんだと思う。

強いことでも、特別な力を持ってることでも、天の御遣いと言う特別な名前を持っていることがわたしをこんな風にしたんじゃない……

「ほう……結構な品揃えだな」

「へい。自慢ではありませんがこの街で服を扱うたった一つの店ですので都からの品や流行りの服まで全て揃っております」

「へへ…なら一安心だ」

気付くとエースさんと一緒に呉服屋に着いていた。

そこまで私は考えにふけていたのだろう…

エースさんに着いて店の中に入る。

「わぁ……綺麗…」

思わず呟いてしまうほどだった。

周りには見た事も無い服が所せましと並んでいた。

色んな帽子や装飾品が並んでいた。

そんな光景を見ながら歩いていると、一つの装飾品に心が向いた。

それは白い兎の付け耳だった。

普段ならちょっと珍しがる所だろうが、何故だかわたしの意識はその兎の耳に行ってしまう。

それが可愛いということもあるが、何だか……それを付けて初めて

わたしという存在…鈴仙という存在が確定させる……なんかそんな気がする……

「おや？　その装飾品をお気に入りで？」
「え？　ええ…ちょっと可愛いなぁって…」

見惚れていたのだろうか、店主の接近に気付かなかった。

「何とお目が高い。これは都の洛陽から届いたものでありまして…中々似合う方が見つからずにさまよう耳と噂されているものです」
「は…はぁ…」

なんかその噂はちょっと……って思っていると店主の人がわたしの体をマジマジと見ていた。

「あの～……何か気になることでも…？」
「いえ、少しお客様の服が珍しくて…」
「わたしの…？　この服ですか？」
「はい、二重に着こなしながら快適な動作を見せ、窮屈さを思わせない。また、それでいて厚着なのに女性の魅力を引き立てる…」

うわ～…すごい迫力かもしながらわたしの服の見聞を始めちゃった……ちょっと動けないな～…

「一体この服はどこで…？」
「はぁ…わたしが小さい頃に村のお婆ちゃんが落ちてた服を見つけて…その服の手触りとか色とかを真似して作ったそうで…」
「なんと！？　でしたらその服は今も！？」
「いえ…その服自体も村の外れでボロボロの状態で落ちていて…それにこの前村も黄巾党に攻められちゃって…多分もう…」

「そうでしたか……すみません…無神経に…」
「いえ、その村も村の人達の仇もある人がとってくれて…そりゃあ少し良いかなって…」
「ほう……思い人ですかな？」
「ぶっ！！」

な…何を言ってるのこの人っ！！　そんな…わたしとエースさんはそんな関係じゃ…

「まあとりあえず、もしよければその服の手触りを拝見させてくれませんか？　少し職人魂が疼いて…」
「え！？　あ…あぁ…いいですよ…」
「それでは……ほう…結構固い生地でできている…内側は…ふむ…手触りがいい…成程これは…」

その間、わたしは店主の人に捕まって動けなかった。

そんな中、何気無しにさっきの兎の付け耳の値段を見てみる。

うわぁ……結構高いや……こんな中無駄使いもできないし……諦めよう…少し残念だけど…

「おーい。オヤっさん。おれはこれを買うぞ」

そう言っている内にエースさんの買い物が終わっていた。

店主はそれに応えるようにわたしの服から手を離す。

「ありがとうございました。大体の材料の見当がつきました。これでわたしも同じ物を作れます」

「…良かったですね」

でもこの耳……はぁ…

わたしがちょっと…本当にちょっとだけ落ちこんでいると…

「鈴仙。お前は先に外で待ってろ。すぐに行くから」

「分かりました」

とりあえずわたしは外に出て待つことにした。

しばらくすると、買ったであろう上着を羽織ったエースさんが袋を一つ持って出てきた。

「おう。待たせたな」

「いえ、それよりも似合ってますよ？」

どうやら上着だけのものは無かったらしく、羽織はふくらはぎの所までに達している。

だけどエースさんの丈の長さで引きずることは無いだろうな。

「ありがとな。まあおれとしては寝る時に冷えなければなんでもいいけどな」

「とてもそうには見えないんですけど…」

それなら前も帯か何かで止めてください。

羽織っているのにエースさんの腹筋が露わになって……その……すごいと思います……

「おお、それと…」
「？」
「ほら」
「え？」

エースさんがわたしに袋を渡してきた。

これって……

「わたしに？」
「まあな。それよりも開けてみろよ」
「う…うん…」

何が何だか分からず、言う通り袋を開けてみる。

すると……

「……嘘…」

そこにはわたしが気になっていた兎の付け耳の装飾品が入っていた。

え…これ……なんでエースさんが…？　エースさんには何も言ってないのに…

わたしの頭に少しの疑問と共に、それを上回る高揚感が駆け巡っていた。

すると、エースさんの答えで一つの答えが氷解した。

「おめえ、それの話を店員にしてただろ？　おれも見てたし店員も教えてくれたしな」
「え……でも…値段が…」
「心配すんな。おれの金だし店員も安くしてくれたしな……なによりこれはおれからの礼でもあるしな」
「…お礼？」

すると、エースさんはわたしにしか見えない様に、わたしに密着して手を火に変えた。

「おれのこの能力はおれの所でも異質な方でな……大抵見た奴は逃げるか襲いかかってくるかだった」
「……」
「本当はお前に見せるのは気が引けた…けどお前はこんな物見ても怖がらずにいつも通りに接してくれたからな」
「当たり前だよ…それまでのエースさんの行動見てたら怖さなんて感じなかった…から…」

初めて見た時は…そりゃあ怖いと思ったけど、それがエースさんだと思ったら怖さなんてどっかに行っちゃって……

今では本当に頼もしいとまで思ってるよ？

その後、エースさんはいつもの無邪気な笑みとは違う、優しげにハハ…と笑って言う。

「だから嬉しかったんだ。嬉しかったんだよ」
「……うん」
「それにお前には結構面倒かけた所もあったしな。これはその礼だ」
「……うん／／／／／」

やっぱりダメ……平然とい続けようとしてたのに……

そんな顔して……反則だよ……

そう思いながらわたしは袋を受け取ると、もう一つの疑問も氷解したような気がした。

ああ……そっか……

わたし……エースさんのそういう純粋な所が……

「ちょっと……改まって……恥ずかしいな……」

「そうか？　仲間に感謝するのに恥ずかしがる必要ねえだろ？」

……こういう鈍い所も良い所……なのかな…？

だとしたら、わたしにもまだ絶好の機会ではないか？

最近、凪ちゃんが少し怪しいから…

可愛い人がエースさんに好意を持つのは……仕方無いかもしれないけど…

できれば……その中で一番でいたい……

こうしてわたしは少しの間、エースさんの隣を独占できてすごく幸せだった。

途中で耳を付けたら何か頭の中に見た事も無い光景が浮かんできた。

その時見えたのは『永遠亭』の看板が掛かれた建物の外で、わたしと顔も髪型も髪の色も着ている服まで同じそっくりさんが同じ兎の耳を付けた妹と思わせる子にからかわれてたのを見た。

一瞬、訳が分からなかったけど一旦置いといてエースさんに似合ってるか聞いてみたら似合ってるって言ってくれた。

や…やった…

その時、浮かれたわたしは幻のことなんて忘れ、エースさんに呼ばれるまで昇天してしまっていた。

～おまけ～

グゥ～

「そろそろ腹減ったな…どっかに食いに行くか？」
「そうだね。どこに行こっか？」
「おれは美味い所ならどこでもいいぞ？」
「はいはい。じゃあわたしは……ニンジン…」
「？　お前ニンジン好きだっけ？」
「えぇっと……なんだか急に食べたくなって…」
「そうか？　じゃあニンジンがあるとこ探すか」
「うん」

こうして昼は過ぎていった。

## 買い物（後書き）

なんかもう…なんだこれ？

キャラ崩壊がひどかったですね…善処します…

## 火事（前書き）

そろそろ能力使わんと～…と思って作った。
これからも誤字脱字などよろしくお願いしまーす！

それと今頃になってゴッドイーターを始めました！　難易度３のヴァジュラ、シユウ２体は鬼畜すぎる…それとグボロ・グボロ、シユウ、コンゴウ２体は無理ゲーすぐる…

# 火事

ｓｉｄｅ　凪

「はあ…」

…何もやる気がしない…

私は今、宿に戻って寝転がっている。

真桜と沙和には忘れ物と言って待たせてるからいない。

相当身勝手な理由だが、今は何もする気が起きない…

何故だ？

調子が悪いのか？

いや、多分違う。

なんだか…気持ち悪い…

私は正体の分からない怠さを我慢し、また真桜たちの元へ戻る。

ｓｉｄｅ　三人称

「～♪」

「なんだ？　随分とご機嫌だな」

「えへへ～。そうかな～？」

鼻唄を鳴らしながら鈴仙はエースの隣を陣取っている。

傍目から見ても浮かれまくっている。

その証拠に耳もピョコピョコと可愛らしく動く。

（鈴仙の機嫌で動くのか？）

耳に若干の疑問を抱くも、やがてどうでもよくなり、そのまま散策を続ける。

すると……

「お、兄さんやないの」

「やっほー…なの」

正面から真桜と沙和が手を振ってやってきた。

「真桜！　沙和！」

エースが二人を呼んでいると、鈴仙は一人足りないのに気付く。

「あれ？　凪ちゃんは？」

「凪ちゃんは忘れ物を取りに行ったのー」

「ふーん…」

そんな話をしていると、沙和が鈴仙の付け耳に話題を変える。

「そういう鈴仙ちゃんもどうしたのー？」

「え？　これ？」

「せや。それどうしたん？」

「え…はい…それは……」

鈴仙がモジモジしながらエースをチラチラ見る。

その視線に気付いたエースが代わりに答える。

「それはおれが買ったんだ」

それを聞くと、真桜と沙和は意外そうに言う。

「へぇ～…なんか意外だわ～…」

「うん。エースさんならもっと厳つい物を買うと思うの」

「おれのセンスじゃねえよ。鈴仙が見てたのを買っただけだ」

「「ほっほぉ～…」」

野次馬二人がニヤニヤしながら鈴仙を見る。

鈴仙はそれにたじろぐ。

「な…なに…？」
「いやぁ～…兄さんも案外分かっとるやん…て思って…」
「いいなぁ～…愛が詰まった贈り物なのー」
「あ…い？」

呆然と聞いていた鈴仙だったが、言葉の真意に気付くと一気に顔を紅潮させた。

「な…なに言ってるんですか！？　エースさんはそう言うつもりじゃなくて……そう！　エースさんからのお礼でしょ！？」
「ああ。それはおれからの感謝だ」
「ほら？」

取り繕う様な鈴仙に二人は依然としてニヤニヤを止めない。

「ホンマか～？（笑）」
「本当なのー？（笑）」
「う～～…エースさんからも何か言ってやってよ～…」
「？　いいじゃねえか。そんな隠すことでもねえんだし」
「そういうことじゃなくて～…」

鈴仙が二人に対処できなくなってきた所で更なる追撃が襲う。

「……鈴仙。アンタ口調変わったとちゃう？」
「…え？」
「そうなのー。沙和たちにはそうじゃないけどエースさんにはまた別なのー」
「……ホント…？」

鈴仙の一言に真桜たちは目を丸くする。

「なんや自分気付いてなかったんかい？」
「ええ…おかしいなぁ…普段はしないのに…」
鈴仙の最後の呟きを聞いた真桜たちがまた嫌な笑みを浮かべる。
「それはあれや。鈴仙が兄さんに全てをさらけ出したちゅう話や」
「さら…！！」
真桜の一言に鈴仙がまた…うろたえるも、二人の話は続いていく。
「そう…そして本当の自分を見せ、やがては心の内も全てさらけ出し…」
「そして耳元であま～～～く…『お前が……欲しい』と囁くんや」
「ひぁ……エ……エースしゃんが…わた…わたしを……」
真桜と沙和が抱き合いながらのシチュエーション再現を目の当たりにして鈴仙は赤い頬に手を当てて恥ずかしがる。
そんな話をしていると、野次馬も聞き耳を立てる。
男は鼻血を滝の如く流し、女は血走った目を全開させ、鼻息を荒くして無言で続きを催促する。
「そして甘い誘いに誘(いざな)われた白い仔兎はやがて…大人の花を咲かせる準備を……」
「ハァ…ハァ……ゴクッ」
『『『ゴクッ』』』↑周りの痴女共
『『『（ボタッ…ジョボボボ…）』』』↑周りの男共の赤い体液

人が生きてる内にこんな馬鹿共の光景を何回拝めるだろうか？

真桜と沙和のミュージカル劇員顔負けの演技で自分とエースを連想させて興奮する鈴仙。

美少女もここまで来れば可愛さの微塵も無く、変態にしか見えない。

もっとも、周りの野次馬も人の事は言えない。

「そして……あぁ！　私は遂に…遂に大人になったの……そして…妙に大人びた兎は他の仔兎たちに聞かれました…『どうしてそんなに大人になったの？』…と…」

『『『…ゴクッ』』』↑鈴仙＆野次馬オールスターズ

遂にミュージカルもクライマックス。

それを予感して周りのボルテージも上がる。

そして、その予感は適中する。

「兎は答えた…『私は殿方と特別な時を過ごしたの…』」

「『特別な時ってー？』」

「そして女の雰囲気が一変し、より大人に、艶やかに、まだあどけない仔兎の耳元でそそる様に言いました…」

「『は・じ・め・て・の・よ・る』…と…」

『『『キャーー！！！』』』鈴仙ｗｉｔｈ野次馬（女）

『『『ブヒィィィィ！！！』』』↑野次馬（雄豚）

村が奇妙な奇声に包まれた。

しかし、それを不審に思う者は誰もいない。

「そんな…わたしと…エースさんが…男と女の仲に…」

鈴仙は鼻血を出しながら虚ろになり…

――懐かしいわ～。旦那との初夜…

――まだあの頃はピチピチだったわね……

――あの頃の女房はまだ可愛かった……

――くそっ……俺もいつかは…

――ブヒィ！！　ブヒィ……！！

周りでは愛執の情、僻みなど様々な感情が渦巻いていた。

「はわわ…凄い話…」

「あわわ～…だ…大胆～…」

誰かの呟きも周りの喧騒に掻き消されていった。

一方、問題のエースはと言うと…

「これは…肉汁の宝箱や～→」

「あら、あんた中々嬉しい事言ってくれるね…ほい、じゃあもう一個おまけね」

「お、ありがとなオバちゃん」

鈴仙とは離れた所で肉まんを頬張っていた。

side　凪

おかしいな…街を歩いてるのに人が見当たらない。

さっき歩いてたら人がいたのに…

まあ街から忽然と消えた訳ではないのは分かる。

何やら声が遠くから聞こえてきたからだ。

その歓声の中に家畜の声も聞こえた。

大丈夫なのか？

そう思っていると、前方から鈴仙殿、真桜と沙和が来るのが見えた。

「おお、凪やないの」

「忘れ物はもういいの？」

「ああ、待たせて悪かった」

本当は少し休んでたことは伏せておいて…というか鈴仙殿の頭の兎耳は…

「鈴仙殿。それは？」

すると、鈴仙殿はそれを触って答える。

「これですか？　これは…その…／／／／」

顔色が劇的に赤くなった。なんだ？

そんな疑問に真桜が一歩前にでてきて代わりに答える。

「実はな～…これは…かくかくしかじか…てな訳や」

「そうか…良かったですね…」

「あ…はい…」

鈴仙殿はさっきとは違って歯切れが悪いが…私はそれに構う事無く妙な感覚に襲われる。

それは形容し難いドロドロした物が胸の内でうごめく感じだ。

なんだこれは？

今まで生きてきた中でこんな感覚に襲われた事がない。

なんだか…苦しくて…嫌な感覚だ…

「真桜、沙和。もう買う物は買ったのか？」

「え…う…うん…完璧やで」

「もうすること無いのー」

「そうか、じゃあ後は…」

自分の気持ちを隠す様に話を続けようとすると…

「なんだこんなとこにいたのか」

私達はエース様と合流した。

ｓｉｄｅ　真桜

しもた…完全に舞い上がって下手こいたわ…

凪の前で鈴仙のこと話してもうた…

話を全て聞いた凪は表面上冷静に見せるが、ウチと沙和なら分かる。

伊達に長い間付き合っとらん。これは完全に苛立っとる……

「真桜ちゃん…」

「…分かっとる。今は下手に茶化さん方がエエで……」

「だよね～…」

凪や鈴仙に聞こえない様に沙和と話す。

というか意外や…あの堅物の凪を数日でここまでオとすなんて…

まあ、とりあえず障らぬ神に祟り無し…今は刺激させんとこ…

沙和と暗黙の同意を立てる。

そんな時…

「なんだこんなとこにいたのか」

…兄さん…いくらなんでも間が…

ついつい悪態をついてしまう。

…でも、これは突破口になり得るんやないか？

危険は大きいけど同時に上手くいった時の成果も大きい。

もうこうなったら兄さんに全て任せる。

男を見せてや！

ｓｉｄｅ　凪

「エース様」

私はエース様を呼んでいた。

それに応えて手を振ってくれる彼を見て思わず顔が綻んでしまう。
そのことに気付いてすぐに表情を引き締める。
このまま何も無い様にすれば気付かれないだろう。
「どうした？　顔赤いぞ？」
「そ…そのようなことは…」
落ち着け私！　一旦落ち着こう私！　まずは赤い顔をなんとかしよう！　氷だ、いつものように氷の様に冷たい精神を思い出せ私！
「今までどこにいたの？」
「お前等の話長かったから肉まん食ってきた」
「ああ…通りで…」
鈴仙殿はホっと溜息を吐く。
何かエース様に聞かれては不味いことでもあったのか？
「とにかく帰るか。もう用事も済ませたしな」
「そうですね。行きましょう」
私はエース様に同意して一緒に歩くと、後の三人も追い掛けてくる。
「それが買った服ですか？」
「ああ。最近野宿ばっかだったからな。こういうのも必要じゃねえかなってよ」
「そうですね。良く似合ってますよ」
「そうか？　ありがとな」

エース様の屈託の無い笑顔を見ると、さっきまでの感情が嘘の様に消えていた。

自分でも不思議に思う。

初めて知り合って数日しか経っていない相手にここまで感情を左右されるとは…

修行不足…という物ではない。

もっと根本的な…まるで人の性というべきか…

この感情が何であるか分からない。

だけどこんな時間を過ごしていたい。

そんな事を思っていた。

だが、そんな願いもちょっとしたことで崩れる物だった。

「大変だー！　火事だー！」

「「「「「！！」」」」」

村人の叫びに反射的にエース様たちは反応する。

確かに、注意してみると焦げ臭い。

そして、さっきまで見えなかった黒煙まで立ち上がり始めてきている。

待てよ…この方角…まさか…！？

「凪！？」

私はすぐに火事の元へと走る。

なんだか嫌な予感がしたからだ。

私は一心不乱に走り続けると現場にはすぐに辿り着いた。

予感も的中してしまった。

予感通り、燃えていたのは私達の宿だった。

激しく燃え盛る炎を取り囲む野次馬もいる。

そんな野次馬の後方で燃え盛る宿を見ていると…

「いやぁぁ！　離して！！　まだ中に子供がぁ！！」

「落ち着けって！　今行ったらあんたも焼かれちまうよ！」

野次馬を無理矢理押し退けて業火の中に飛び込もうとする婦人とそれを抑える数人の男性を見つけた。

中にまだ子供が！？

「おい嬢ちゃん！！　何を…！！」

私は衝動に任せて焔の中に飛び込んだ。

ｓｉｄｅ　エース

おいおい…冗談だろ…？

よりにもよっておれ達の宿が燃えてやがる……

真桜達もおれと同じ様に目に見えて驚いている。

まあ、原因は分からねえけど燃えたのが荷物だけで良かったぜ…まあ今ならおれが飛び込んで確保できるけど鈴仙との約束もある。

それに手持ちもまだあるし、黄巾党って奴を倒せば金も入ってくるから困ることは無え。

……にしても海賊だったおれが賞金稼ぎをすることになるとはな…つくづく分からねえモンだ。

そんな風にしんみりしていると、ギャラリーから騒ぎが起こった。

どうやらガキ一人取り残されたらしい。母親らしき人物が取り乱している。

しょうがねえ…バレねえ様に誰もいねえとこから入るか。

などと思っていたその時…

「おい嬢ちゃん！　何を…！！」

そんな声と共に火事に突っ込む一人の影を捉えた。

あの後ろ姿は…まさか…！

「凪！」

おれと同じく正体に気付いた真桜が声を張り上げる。

あいつ…早まりやがって…！！

内心舌打ちしながらおれはすぐに後を追い掛けるために助走を付けて野次馬を飛び越える。

「ちょっ…」

「飛んだ！？」

「エースさん！？」

沙和、真桜、鈴仙と一緒にギャラリーも何か言ってるが、知ったことじゃねえ。

おれは燃える業火の中に入る。

ｓｉｄｅ　凪

熱い…肌が焼ける…急いで子供を…

私は炎と煙が立ち込める宿を足早に散策する。

ーーーうえええん…

良かった…まだ生きてる…

小さく聞こえた泣き声から場所も分かる。幸いにもそう遠くは無かった。

その甲斐あって戸が崩れて丸見えになっている部屋の片隅で泣いている男の子を見つけた。

歳は五、六なのかとても小柄だ。

あれなら背負っていける。

そう思い、男の子に声をかける。

「大丈夫か！？」

「くっ…！？」

つい声を荒げて怖がらせたのに罪悪感を覚えるが、今はそれどころではない！

「今からここを出よう。母上殿も心配しているぞ？」

「うぅ…かかさまぁ…」

「そうだ。かか様に会いたいだろう？」

「……（コク）」

先程より優しく言ったのが功を制したのか素直に頷き、背中を向けて屈むとその意味を理解してくれた。

ゆっくりだけど背中にしがみついたのを確認して頬と共に気が緩む。

それがいけなかったのだろう…

突如、炎の波が部屋に入り込んだ。

「！！」

私は咄嗟に横に跳んで事無き得た。

危なかった…ここが部屋の中だったのが幸いした…入口の傍で炎をやりすごせた…

もし通路に出ていたら逃げ場もなく……

「けほ…こほ…」

しかし、そんなことを考えてる場合でもない。

子供の体力も……いや、私にも言えるように体力が持たない……

とりあえず、また波が来る前にここを出よう。

私は部屋を出てできるだけ走る。

通路は既に火の海と化している。

それでもまだ床は崩れておらず、通路自体はそう長くは無い。

このまま私が入ってきた所まで行こうと意気込み、通路の曲がり角を見据える。

あそこを抜ければ…

しかし…

そこを曲がろうとした瞬間、曲がり角の向こうから新たな火の波が向かってくるのが見えた。

「！！」

またしても咄嗟にかわし、通り過ぎた火は壁に当たって霧散した。

しかし…

「あ……う…」

痛い…さっきので足を燃やされた…

足に力を入れようとすると激痛が走る。

「…！！」

ここで悲鳴を上げてしまえばこの子に不安を与えることになる。

「はぁ…はぁ…」

だが、不安よりも先に命が危ない。

こんな熱い中にどれくらい入っていたのだろうか…私の視界も霞んで…

「あぁ…」

…不味い……どうやら私もそろそろ限界が近い…

速く…動ける内に出口へ…

そう思って私は痛みを堪えて曲がり角を曲がると…

「なん…だと…」

何と言うことだ…天井が崩れて通路が塞がれた…

さっきの爆発で壊れたのか…

くそ……これではこの子どころか私まで…

ドカーン

「！！」

またこの音！　不味い！　後ろからか！！

振り返ってみると、また火の嵐が私達に襲いかかってくるのを見た。

本当に不味い！！　こんな所に隠れる場所もないのに…！！

打つ手が無いと分かった私はそれでも諦めきれずに打開策を模索しようとする。

しかし、それと同時に心のどこかで自分の死期を悟っていた。

その証拠にもう目と鼻の先の炎もゆっくりと動いてる様に見える。

あぁ…これが走馬灯という奴なのか……

私は……国を変える何かをしたくて腕を磨いてきた…

そんな私に真桜と沙和も付いてきてくれて…

ごめん……後は頼んだ……

短い謝罪も終わり、せめて子供だけでも守るかのように背中から下ろして抱きしめる。

しかし、それはあまり意味を為さない。

まさに蟻が津波から我が子を守るために立ちはだかるような物だ。

しかし、彼女は抱きしめずにはいられなかった。

少しでも…幼く尊い命が生き残る方法を確立するために…

そこで…再び時は動きだす。

地獄の業火が私達を葬らんとこの身を飲みこむ

筈だった。

「陽炎(かげろう)！！」

突如、通路を塞いでいた瓦礫が音を立てて爆発し、極太の炎が飛び出してきた。

私は炎に挟まれたかと思い、益々力強く子供を抱き寄せる。

しかし、その炎は私の横を通り過ぎ、一方の炎と衝突した。

その炎はいともたやすく炎をかき消した。

「まったく…」

そんな光景と共に最近聞き慣れた声が響いてきた。

「世話の焼ける弟子だぜ…」

そして、炎の中から彼が……現れた。

「呆れた無茶しやがって」

危機感の欠片もない様子でエース様が……炎の中から現れた。

ｓｉｄｅ　三人称

エースが追いかけた直後、いきなり入口が瓦礫で塞がったのを見た時、エースは間一髪だったと内心で肝を冷やした。

野次馬の面前で能力使って騒ぎが起こると面倒だったが、今では辺り一面火の海。

人っ子一人いない状況はエースにとってまたとないチャンスだった。

エース自身も炎であるため、火事なんてものは障害の内には入らず、スムーズに凪を見つけることができた。

とりあえず、凪の場所を予測し、瓦礫を壊すために陽炎で壊した。

すると、その近くに凪がおり、今にも炎に呑まれそうではないか。

当然、エースは勢いに乗って炎をかき消す。

しかし、仕方無かったとはいえ、凪に見られた。

鈴仙が心配してとりつけてくれた約束も破ってしまったことに罪悪感がよぎる。

でも、仲間を失うことに比べればそんなことは何てことはなかった。

エースはすぐにぐったりとしている子供を見て状況を判断する。

「凪、これでそいつとお前の口を塞げ」

「……」

「凪、色々と言いてえことはあるかもしれねえが今はそんな時じゃねえ」

「あ…はい！」

再びかしこまった凪に安堵するも、凪に羽織を渡す。

凪も指示通りに子供と自分の口を千切った羽織で塞ぐ。

しかし、凪自身ももう体力の限界が近く、フラフラだった。

そんな時、またしても後方から爆発が起きた。

凪とエースが後ろを見ると火の嵐が襲いかかろうとしてきていた。

「エースさ…」

「炎上網（えんじょうもう）！！」

凪が思わず叫んでも、エースは再び腕を燃やし、その炎で巨大な壁を作って火の嵐を防ぐ。

「……」

凪は初めてエースの能力を目の当たりにして虚ろながらも驚きを隠せない。

しかし、そんな彼女を差し置いてエースは凪の体を羽織りで縛り始める。

「エース様…なに」

それ以上声が出せなかった。

凪の体力が限界であったからだ。

「やっぱりな。脱水症状を起こしてやがる」

エースの懸念していたことが起こってしまった。

通常、人は気温が暑くなると熱くなった体を冷やすために汗をかく。

しかし、その汗にも限りがあり、汗が無くなると体も冷やせずに体は熱くなっていく。

そして、体温が４２℃を越えると体の血液のタンパク質が固まって非常に危険である。

やがて、筋肉の塊である心臓も固まり、活動を停止するのである。

実質、凪の汗の量が有り得ない程少なかった。

炎であるエースは汗をかかずとも大丈夫なのだが…

エースは苦しく呼吸する凪を羽織で縛って自分の背中におぶる。

子供ももちろん忘れずに。

「火銃（ヒガン）！！」

エースは銃を指で型取り、指先から炎の弾丸を飛ばす。

そして、壁に打ち込んで円形状になぞるように穴を開ける。

（後で鈴仙に謝っておくかな）

などと考えながらエースは火銃をぶつけた壁を蹴り倒すように壁に突っ込む。

火銃でなぞった部分が連鎖的に壊れ、エース達は太陽の当たる涼しい外に出た。

side　鈴仙

「凪…」
「凪ちゃん…」

今、真桜ちゃんと沙和ちゃんは私の隣で凪ちゃんを心配している。

確かに凪ちゃんのことはとても心配です…

エースさん……

「大丈夫ですよ…」
「「え？」」

二人が「なんで？」といった表情で聞いてくる。

しかし、わたしは確信している。

「きっと…いえ、絶対エースさんが助けてくれますよ」
「いやな……確かに兄さんがすごいのは知ってるけど……」
「あんな熱い所じゃあいくらエースさんでも…」

まあこれが普通の反応ですよね…

でも、エースさんは炎人間だから大丈夫だから絶対凪ちゃんも…

バガーン

『『『！！！』』』

「悪い！　遅くなった！！」

ですよねー。

予想通りというか…目立ち過ぎ…

でもエースさんは凪ちゃんと子供を抱えてるのを見るとやっぱりホッとしてしまう。

べっ別に信じてなかったわけじゃないんだからね！？

…とまあひとまずはこれで良しとしましょう。

真桜ちゃんも沙和ちゃんもそれに周りで見ていた村の人達や母親らしき人から歓声が沸き起こる。

「凪！！　よかっ…」

「お兄さんすごー……」

「すげえぞ兄ちゃん！！　かっこいい…ぞ…？」

？　あれ？　なんだか周りが静かになっていってる気が…

「に…兄さん…」

「あわわわわわ……」

真桜ちゃんも沙和ちゃんも静か…というより顔が青ざめていく。

まさか…エースさん達が怪我を…！？

そう思ってエースを見た時、私は固まってしまい、多分…いや、絶

対に顔を青くしただろう。

何故なら……

「よう。ここに医者はいねえか？」

『『『腕が燃えとるーーーーーーーー！！！！！』』』

この時、エースさんの左手から肩にかけて燃えている体を見て私までもが絶叫してしまいました……

きゃーーーーーーーーーーーー！！！

## 火事（後書き）

ナルニア物語を見てゴッドイーターを進めながら終えました。

ゲームって体力使う……

# 真相と今後（前書き）

最近帰郷とゴッドイーターで更新が遅れましたが、とりあえずどうぞ！

# 真相と今後

ｓｉｄｅ　エース

「エースさん！！　もうちょっと周りの目も考えてくださいよ！！」
「悪かったって……周りにはバレてねえだろ…？」
「誤魔化すのにどれだけ神経使ったとおもってるんですかーーー！！」

案の定、鈴仙から説教を喰らっちまった…

まあ、流石に久々のノリでやっちまったおれにも非はあるけど……
問題は…

「頼みますエース様！！　どうか行かないでください～！！」

おれの腰に凪がひっついてる。

どうしてこうなったかというと、火事が起きた五時間前に遡る。

～五時間前～

おれは凪とボウズを救出し、外に出てみると、なんだか静かだな…

でも、んなことよりも凪とボウズの手当てだろうが。

何もしない村人たちに内心毒づきながらとりあえず聞いておこう。

「よう。ここに医者はいねえか？」

『『『腕が燃えとるーーーーーーー！！！！！』』』

いや、そんなに騒ぐ前に医者呼べよ。

とりあえずおれは辺りを見回して…っと一番前に出てるのが母親っぽいな。

「ほれ、ボウズなら煙の吸い過ぎなだけだ。すぐに手当てしてやんな」

「あ……ありがとうございます…それよりも…燃えてる…」

「ん？　ああ…宿ならまだ燃えてるけどいずれ消えるだろ」

『『『いや、オメーが燃えてんだよ！！』』』

「ていうか医者呼んでやんな。早くしねえと手遅れになっちまうぞ？」

『『『もっと重傷な奴がいんだろ！！』』』

「何っ！？　まだ中に誰かいんのか！？」

『『『オメーの話だよ！！』』』

なんだこの村の奴等は!?　村ぐるみでコント集団やってんのか?

んなことよりも…!

「真桜ー!　沙和ー!」

何故かあいつらもおれを見て動かねえから呼ぶ。

おれはそこに向かって…

「チェストーーー!!」

向かっていったけど、鈴仙が人ごみ押しのけておれに水をぶっかけてきた。

「ぶわ!?」

いや!…何してんだコイツ!?

「鈴仙!　お前何を…!!」

「エースさん大丈夫ですか!?（棒読み）」

「大丈夫って…何が?」

「大変!　腕火傷してますよー!（棒読み）」

「おい…うお!?」

そのまま鈴仙に腕を取られて連れてかれた。

その時は凪を落とさないことも忘れない。

勿論、途中で呆けてた真桜と沙和も捕まえて…

そんでおれ達は今、一旦街から外れたわけだけど…

「まったく……少しは自覚持ってなきゃだめだよ…」

「いや～…ついいつものようにやっちまった」

「笑うとこじゃないよ…」

溜息を吐く鈴仙に少し悪いと思った。

「まあ、凪が無事で良かった。それで良いじゃねえか」

「……エースさんが嫌われるんだよ…？」

鈴仙は浮かない表情でおれの腕に包帯を巻く。

これはおれが火傷したというカモフラージュだけどな。

「んな顔すんなって。おれは嫌われるのに慣れてる。お前には迷惑かけねーよ」

安心させるために鈴仙の頭を撫でてやるけど、それでも表情が晴れ

ない。

それどころか泣きそうになる。

「……ふえ…」

包帯を結ぶ手が震えるのが伝わってくる。

参ったな…ルフィみてえな単純な奴なら扱いも慣れてんだけどよ…こいつみてえなのはどうしたらいいんだ?

「あの～…お二人さん?」

そんな様子を見ていた真桜が遠慮がちに尋ねてきた。

「とりあえず…色々教えてほしいの…」

沙和も同じく遠慮がちに聞いてくるけど正直、この二人…三人になら教えても問題は無いと思う。

それにこの雰囲気もなんとかしてえしな。

「その話なら凪が起きてからでいいだろ。あいつはおれの能力を見たしな」

鈴仙以外の二人は首を傾げる。

そんな所へもう一人の声が響く。

「それなら心配には及びません」

「「凪！」」

すぐ傍で寝かせられていた凪が目を覚ましていた。

「凪ちゃん。大丈夫？」

「意外と早く起きたな。気分はどうだ？」

「大丈夫です。エース様が私を助けて下さったおかげです」

穏やかに応える凪に対してエースはいつもの通りに切り出す。

「何か聞きてえってツラしてるぜ？　今なら答えてやる」

すると、凪の穏やかな表情が引き締まる。

「そうですね…私は知りたいです。あなたが炎となって私を助けたこと、炎の壁を造って爆発を防いだこと、指先から炎を飛ばしたことについて、です」

「「え？　え？」」

凪の質問に真桜と沙和は頭に？を浮かべる。

鈴仙が何か言おうとするが、エースによって御される。

そして、エースは手を凪達に向けて…

「これが答えだ」

一言告げて自分の腕を燃やす。

「な！？」

「うわ！！」
「ふえー！？」

凪、真桜、沙和は大層驚く。

そんな彼女達のために色々話した。

自分は元はただの人間であり、海賊だったこと、悪魔の実を食べたこと、悪魔の実を食べて自分は炎人間になったこと、そんな悪魔の実が世界中にあることなど……

全てが逸脱した話に彼女達はなんともいえない表情だった。

主に、驚愕が大半を占めていた。

それもエースは予想できてはいたが…

「…なんや…エラい話やな…」
「本当にそんなことあるんだー…」

真桜と沙和は唖然とするが、凪はそのまま思案顔か…当然っちゃあ当然だな。

いくらこいつらでも鈴仙のように思うわけねーか…

「まあ、そんなおれが怖いならおれと別れる…どうするにせよお前等の自由だ」

突き放す様だが、ここははっきりさせた方がいい。

仲間のままでいきたいなら禍根なんて残しちゃいけねえのさ。

おれがそう言うと、凪達はしばらく考え込み…

「エースさんは……無闇に人を襲ったことが…？」

真剣な表情で凪が聞いてくる。

こういう時は正直に答えるのが一番だな。

「少なくともおれは男だ。男として生まれたからには弱い奴から奪ったり、力に屈する様になるつもりはねえ」

これがおれの本心。

力でねじふせられ、ほどこしで生かされるなら死んだ方がマシ。そもそも弱い奴を支配するなんざハナから興味がねえ。

おれは自由に生きるだけだ。

「……その言葉に嘘偽りは？」

「この背中のドクロに誓って」

「……」

おれの答えを聞いた凪はしばらくおれに鋭い視線を浴びせ…

「……ふぅ…」

フッと表情を戻した。

「それを聞いて安心しました」
「そんな簡単に信じていいのか？」
「はい。今のあなたの目は嘘をついてるとは思いません。それに…」
「？」
なんだ？　急に凪の目が輝いたんだけど…
そう思っていると、凪が急におれの手を握ってきた。
「私は確信しました！　私と子供を助ける慈愛の心！　そして天界の術！　やはりあなたは天の御遣いなんだと！」
凪がおれの手を握って力説する。
「お～凪ぃ。いつもより積極的やな～」
「大っ胆～」
すっかりいつも通りの真桜と沙和のちょっかいに珍しく凪は引っ掛からない。
「む…」
鈴仙の目つきが鋭くなったのに気付かないまま、ひっつく凪を引きはがそうとする。
「おいこら！　分かったから離せ！　真桜と沙和も手伝え！」
「いいんやないの～？　凪は嬉しそうやでぇ？」
「女の子が甘えてくる時は受け止めてあげるのー」
「おもしろがってんじゃねえテメー等！！」

こんな凪が珍しいのか二人は凪を見ておもしろがってやがる。

「…く～…（わた、私だってそんな思いっきり握ったことないのに…！）」

鈴仙が涙目で頬を膨らませて睨んでくる。

垂れていた付けウサ耳もピンと張っている…ていうか本当にアクセサリーか？　それ…

恐くはないけど、別の意味で厄介だった。

「お願いします！　このまま是非、私を強くしてください！　あなたの全てを私に教えてください！」

「ああ、それなら問題ねえぞ？」

「（ブチッ）」

この時、何かがキレる音がしたのは聞き違いじゃないだろう。

「エースさん！　そんな簡単に安請け合いして、わたしはどうなるの！」

「お前にも教えるって。そう怒るなよ」

「怒ってない！　大体エースさんは…！」

「エース様！　何卒よろしくお願いします！」

こうして時間が過ぎ、今に至る訳だ。

そして、話は急転直下を迎え…

「こうなったら、どちらがエースさんに相応しいか勝負しましょう」

「臨むところです」

鈴仙と凪が拳を握って戦闘体制に入る。

「なんでこうなった？」

二人の奇行に頭を悩ませていると、真桜と沙和がニヤニヤして近付いてきた。

「それだけ愛されとるっちゅうことや」

「憎いね～。この～♪」

「へっ、それでも限度がある。あいつらはがっつきすぎだ。修業に順番もねえだろ…」

せめて仲良くしてもらいたいんだが…

「いや、そういうことだけじゃあらへんよ」

「そうだな……あいつらの闘い方は同じだからな……ライバル意識があるのも分かるけどな……互いに高め合ったことに越したことはねえんだけど……」

「兄さん…ホンマに気付いとらんの？」

「？　何が？」

「いや、こりゃあ凪もやけど二人共苦労する思ってな」

まあ確かに二人は強く、真面目だけどあそこまで仲が悪いんじゃな～

「どうやったら二人は仲良くなるんだ…？」

「全然分かってないのー」

なんでだ？　なんか間違ってるのか？

……まあ後から考えて直していくしかねえな。

それより……

「オメエ等はおれのことなんとも思ってねえのか？」

「いや～…最初は……正直な、怖かってん」

「でも～…なんかピンとこないというか…いつもと変わらないというか…」

「せやな～…いつもの兄さん見てると警戒するのもバカらしゅう思って…」

「それにお兄さんは天の御遣いだからー」

「逆に納得してもうて…」

……やべ…不覚にも少し嬉しい…

少しは覚悟してたつもりだったけど……やっぱこうやって仲間に受けいられて変わらずにいてくれるのが何よりも嬉しいし、どんな宝にも代えがたい物だな…

「お前等ぁ…」

「「？？」」

感極まっておれは両腕を真桜と沙和の首に絡めた。

「おれ、やっぱお前等のこと好きだわ！」

「「おぉう！？」」

二人は抱きついた衝撃を堪えた後、顔を赤くさせておれの背中を叩く。

「兄さん！！　ちょお落ち付き！！」
「苦しいのー！！」

二人がジタバタしておれから離れる。

「なんだよツレねえな」
「いやぁ、別に嫌な訳無いんやけど…」
「こんなところを二人に見られ…」

その瞬間、何かの塊がおれ達のすぐ横を通り過ぎ、爆発した。

シュン　ドカーン

「「「……」」」

おれ達が固まっていると、おれ達の後ろから声が聞こえてきた。

「真桜…沙和…！」
「二人は一体何を…？」

ゆっくりと、しかし、威圧感が増している二人は腕を組んで笑っていた。

「凪…鈴仙…ちょお落ち付いて…」
「二人共…エース様と……何をしていた？」
「凪ちゃん…そんなドスを利かせないでほしいの…」
「アラアラ…マサカコンナトコロニモ“テキ”がイタンデスネ？」
「アカン…鈴仙が嫉妬のあまり壊れたで…」
「そんなことよりも真桜ちゃん……」

「分かってる……このまま一気に…」

二人が脱兎の如く逃げようとするが……

「猛虎蹴撃！！」

凪は足に光の弾を作ってそれを蹴る様に足を振るって飛ばす。

「ぎゃあ！！　凪！！　ちょお待たんかい！！」
「問答…無用！！」
「鈴仙ちゃんも壊れたのー！！」
「沙和！！　撤退や！！」
「ガッテンなの！！」
「「逃がさない！！」」

こうして凪達の鬼ごっこが始まった。

やっぱこいつ等面白くて……良い奴だからな

……何が何でも守ってやる…

今度こそ…おれが守ってやるんだ…

自惚れかもしれねえが、それができるのはおれしかいねえから…

これからも目的も見えずにダラダラと放浪するかもしれない…そんな中、仲間になる奴とも出会うかもしれない。

おれは……そいつ等無しじゃあ生きていけない……鬼の子だから…

失わせねえ…

だから、今だけは……

「はっはっは……何してんだよお前等！」

「「元凶が笑うな（なの）ーーー！！」」

「「逃げるな！！」」

少しくらい……楽しんでも罪にはならねえよな…

こうして決意を再び固めたエース達の夜は更けていく。

「「エース様（さん）にもお話させていただきます！！」」

「え”？」

海賊の受難も一晩続くのであった。

## 真相と今後（後書き）

近頃リリなののクロスも考えてしまう……

私って恋姫→リリなの→恋姫→リリなの……といった波でやりたい作品が変わってしまうんです……今は恋姫ですが…

どんなクロスかは次回の後書きに載せてみます。

それではまた

## 周りの反応（前書き）

今回はすげえ短いです。
しかし、これから長編になりますが、読んでる人も読んでない人も応援及び感想をお願いします。

## 周りの反応

「愛紗ちゃ～ん。疲れた～」
「桃香様…まだそんなに歩いては…」
「お姉ちゃんはダメダメなのだ」
「うぅ～…」

荒野の真ん中を歩く三人組の少女たちは一つの思いを胸に歩みを進める。

その目的は革命。

腐敗した国に憂いを抱き、行動を起こしたのが彼女達である。

しかし、彼女達に社会的地位は無い。

故に、現在では国に士官するための旅を続けている。

そこで名を上げ、いつの日か……

「そういえばここから北西の村で天の御遣い様がいたんだって」
「天？　あぁ…自称大陸一の占い師の予言…でしたっけ？」
「うん。どこからともなく火を出してドカーンって黄巾党っていう盗賊をやっつけてくれるんだって」

ピンク髪の少女が両手で誇張する。

そんな子供っぽい姉を見て黒髪の少女は呆れて溜息をもらす。

「聞いたことありますが……とてもそんなことができるとは思えません」
「でもでも、皆そう言ってるからいるんだよきっと！」
「はぁ…でも…背中に白いひげを結わえた骸骨…ですから…」
黒髪の少女はイメージするも、とても天からの使者とは思えなかった。
そこで虎の髪飾りを付けた幼女が元気に言う。
「でも、その御遣いって人、火事から子供を助けたって聞いたのだ」
「やっぱりいい人なんだよ！！」
「まあ…鈴々もそう聞いただけだから…まだそんなの分からないのだ」
「鈴々の言う通りです。直接会ってもないのに決めるのは早計かと」
「うーん…人助けしてくれてるから良い人だと思うんだけど…」
ピンク髪の少女が首を捻っていると、黒髪の少女は思い出した様に言う。
「それに、その噂では黄巾党の間では恐怖の象徴として呼ばれている二つ名があるんです」
「二つ名？」
「どんなのなのだ？」
「えっと……確か……」
これからの世代を担うために国の礎を一から築く若き王も…

「天の御遣い？」
「はっ。どうもそう噂される者が賊を討伐しているらしいのです」
「へぇ……秋蘭。その者の足取りは？」
「華琳様！　その様な者がいなくとも我等だけで充分です！！」

大声で主と思しき金髪のツインテールの少女に力説する黒髪の少女。

しかし、主の少女は彼女をイジワルそうに諭す。

「あら春蘭？　妬いてるの？」
「うぐ……それもありますが（ボソ）……どう考えても怪しいです。火を操るなど」

そんな二人に青い髪の少女が述べる。

「それこそ賊達の誇張も入ってるかもしれん」
「そうだろう？　充分怪しいだろう？」
「そうね…今はどうでもいい話。だけど実際に見てみたいわね…そいつ…」
「正気ですか？」
「ええ。春蘭と秋蘭はその御遣いがなんて呼ばれてるか知ってる？」

そう聞かれると、二人は首を傾げる。

知らないと知った主は答える。

「民からは畏敬の、賊からは畏怖の念を込められて呼ばれている名は……」

乱世を予感し、着々と準備を進める英雄も……

「天の御遣いを捕まえるわよ♪」
「…雪蓮？」
「ちょっ冥琳…そんな怖い顔しないでよ～…」

ある屋敷の庭では自由奔放そうな女性が眼鏡をかけた参謀の女性に凄まれている。

「策殿…仕事のやり過ぎで…おいたわしや…」
「ちょっと祭～？　私はそんなヤワじゃないわよ。失礼しちゃうわ」
「ほほ～う。それならまだ仕事にも余裕があるということだな？」

話を振った妙齢の女性はからかう様に言ってきたから言い返すも、参謀からも含みのある笑みで反撃を食らい、顔を引き攣らせてしまった。

「あはは…と、とにかく私は天の御遣いに会いたいの！！」
（（逃げたな））

わざとらしく繕う女性に二人も呆れる。

「それで？　なんでそんなことを…」

「知りたい？　どうしても知りたい？　どうしよっかな～？」
「…話せない理由なら、部屋に監禁して椅子に縛り付けて仕事へ精を絞り上げる方が有益だと思うのだが？」
「じょ…冗談よ冥琳…教えるから落ち着いて？」
「して、何故そのようなことを？」

妙齢の女性の助け舟で参謀からの追求を逃れた女性は心の中で礼を述べながら唐突に喋る。

「冥琳と祭は天の御遣いの特徴は聞いた？」
「あぁ…最近噂になっている背中のひげの骸骨…」
「どこからともなく炎を出すのじゃろ？」
「「胡散臭い（のう）」」

二人は馬鹿馬鹿しいと思っているようだけど、女性はおどけた表情から一変し、妖しい笑みを浮かべる。

「…最近、蓮華から手紙が届いてね…読んでみて？」

女性が一通の手紙を渡すと、二人は更なる疑問を募らせる。

「これが？」
「百聞は一見に如かず。いいから見てよ」

二人はとりあえず言われた通りに紙を開いて中身を読んでいく。

「……ほう…」
「これは…」

何気なく読んでいた二人は目を丸くする。

二人は内容に興味を持った様だ。

「どう？　凄いでしょ？」
「なるほど…大体お前の考えてることは分かった…」
「なんで呆れるのよ～。結構良いと思ってるのに～」
「だから捕まえるのか？　それよりも仕事してもらいたいのだが？」

二人が喋っている中、妙齢の女性が手紙を見て感心に似た声をもらす。

「それにしても権殿自らが武人を推薦するとは……」
「しかも、なんとその人物は最近話題の天の御遣いの疑いあり！！
ってね♪」
「あの思春を丸腰で降すなど……並の武芸者では済まされますまい」
「それを聞いてピーンってきたの！　これはもう呉に引っ張るしかないってね」
「祭殿、雪蓮を煽るのを止めていただきたい」

参謀が溜息を吐いて悪ノリに制止をかける。

それに対して女性は不敵に笑って返す。

「でもね、私はこの御遣いの子と一番近しい位置にいると思うの」
「確かに…一度顔を合わせている蓮華様からなら相手も多少信用するじゃろうな」
「そういうこと。そしてその後は…」
「その御遣いの血を我等孫呉に受け継がせる。そうだろう？」
「さっすが冥琳ね～。分かってる～♪」

心底楽しそうな親友に苦笑する参謀。

苦労人オーラを醸し出す彼女を尻目に女性は嬉しそうに…新しいオモチャを見つけた子供の様に話す。

「それでね、その子って賊からは…」

牙を隠し、しかし確実に研ぎ澄ませる覇王も……

「どうじゃ貂蝉。新たな遭難者は」

「んふふ～…私のタイプよ～ん。ちょっと会ってくるわねん」

「居場所は分かるのか？」

「大丈夫よ～ん。最悪の場合は黄巾党から聞けばいいんですもの～」

「ほう…儂も少し興味が湧いた。その者の名は？」

「えっとね……」

「くそ……どこの馬の骨とも知らん奴が外史に入りやがって…」
「どうします左慈？」
「もちろん始末しろ。できれば俺が自ら殺したかったがな…」
「相手のことは何も分かってないですから……とりあえず僕でも送っておきましたよ？」
「ふん……だったら奴がどの世界から来たか早く割り出せ」
「はいはい……まったく、せっかちな男は嫌われますよ？　まあ、私はそんな左慈が好きですから／／／」
「だったらその好きな相手に殺されるのも本望なんだろ？　今すぐ殺してやるから来い」
「おっと、それは魅力的ですが、まだまだ私は殺されずにあなたを……アッーーー！！」
「（相方じゃなかったら今殺せたのに…）聞け。ターゲットのことは聞いてるな？」
「ええ。そいつは世間からは…」

世界と世界の狭間に位置する番人達も……

皆、その男に注目している。

表舞台に立つ準備は整いつつある。

これから起きるのは歴史を揺るがす戦いの嵐。

能力の無い者が消え、有能な者だけがモノを言う時代。

とある場所で、賊達は縄張りを張っていた。

近隣の村を襲い、奪った食料で腹を満たし、連れ去った女性で欲望を満たす毎日を続けていたのだが……

「そんな……仲間が……二百人もいたのに……」
「悪いな……これもおれ達が生きるためなんだ」
「お……お前は一体…」
「おれか？　そうだな……あえて言うなら…」

男は口を吊り上げ、よく聞こえる様に言った。

――――――火拳――――――

この名はこれからの荒れ狂う時代の中でどう響いていくのか……

まだ誰にも分からない…

## 周りの反応（後書き）

やべえ…これ疲れる…

## 新たな出会い（前書き）

まだ連載して間もないのにもう評価が１０００を突破……誠に…誠にありがとうございましたあああぁぁぁぁぁ！！

これからも皆さんの期待に応えられるような作品にしていきたいと思っております！！

## 新たな出会い

エースの秘密を知って丸二日経った。

そんな中、凪達はというと……

～鈴仙&凪・朝5時～

「「はっ！！」」↑急いで起床

「「ふっ！！」」↑着替えに0．5秒

「「うおおおおおおおぉぉぉ！！！」」↑エースの元への一番乗りレース

寝床にしていた洞窟の出口のエースを見つけ……

「今日は雨だから修業は無しな」

見事なヘッドスライディングを決めた。

「洛陽？」

「はい。どうやら管賂を見たという触れ込みがあったそうで…」

「そうか。大分目的に近付いて来たな」

「ですが、相当離れていて…ここから歩いて五日はかかりますよ？」
「そうか……だったら尚のこと急ぐしかねえな」
エースの目的が固まったところで勢い良く立ち上がる。
「「「「ちょっと待った！！」」」」
が、その勢いも四人の声によって遮られる。
勢いを殺されたエースはよろけてしまった。
「……どうした？」
若干、戸惑うエースに全員が声を揃えて答える。
「「「「まずはお金！！」」」」
ということで現在、エース一行は現在稼ぎ中。
もっとも、鈴仙と凪は飲食店でウェイトレスをしている。
真桜と沙和は何かと心配だと必要物資の調達に行っている。
そしてエースは一人で近隣の賊退治へと向かった。

本来なら賊退治だけでも金には困りはしないのだが、これからの洛陽に長旅を開始するので効率良くいこうとの意見になった。

そして、今に至る。

「新入りー！　この炒飯を奥の席へ一つ！！」
「はい！！」
「もう一人は回鍋肉を脇の席の客に！！」
「今行きまーす！！」

凪達は普段着の上に少しフリルの入ったエプロンを着て忙しそうに立ち回っている。

少し慣れてない様子の凪からは初々しさを感じる。

愛想の良い鈴仙からは何故だかキラキラして見える。

つまり、二人が魅力的に光っているということである。

「いや～残念だな～。程普ちゃんも楽進ちゃんも今日だけなんだって？」
「はい。私のお供が旅を急いでおりますので」
「くぅ～…そりゃ残念だ…」
「この子達がいなくなったらこの店になにが残るんだよ！？」
「うっせい！　元々は味で勝負してんだよ！！」

そんな世間話で店が笑いに包まれる。

それを見ていた二人にも笑みが浮かぶ。

これが自分達の望む世界。

何気ないことでも笑顔が生まれるこの瞬間を楽しんでいた。

しかし、そんな時間を乱す者がいた。

「おいこらぁ！！　こっちの注文はどうしたぁ！？」

「す…すいません！！　ですが、こちらのお客様が先に…」

「ふざけるなぁ！！　アニキが注文したのは最優先に運んで来いやぁ！！」

ゴリラ体系の男とその部下の会話で店の中が静かになる。

誰も関わりたくないと言う方が正しい。

その様子を見る限り、この近くで名を上げている賊なのだろう。人は数の前には何もできない。

そんな光景を見せられた凪と鈴仙は不快感で眉を顰める。

「まあいい、だったらその間にお前等二人が俺達の相手をしろ」

下卑た笑みを浮かべたゴリラが鈴仙と凪を指名する。

しかし、二人は感情を殺した風に淡々と答える。

「生憎ですが、今は店の手伝い最中ですから」

――ここはいいから逆らわない方は…！

――断ると何されるか分からないぞ…
――もうダメだ…

店のあちこちから声が聞こえてくる。

それを聞いて気分がいいのか賊達はニヤニヤ笑っている。

しかし、それでも二人の態度は変わらない。

聞く謂われもない要求に淡々と返すだけである。

「いいえ、私達には他の待っている人がいますので」

その瞬間に店内は青ざめ、賊達は馬鹿みたいに笑う。

「はっはっは…！！　なんだまだ女がいるならそいつも呼んで来い！！　一緒に可愛がってやる！！」

「いいえ、残念ながら男の人です」

そう言うと、賊は笑うのを止めて落胆の色を示す。

「んだよ…シラけるなぁ…」

「どうせアニキよりもひょろっちい貧弱野郎なんだろ？」

ピキ↑額に青筋

そんな不吉な音も聞こえていない手下が二人に歩み寄る。

「おらぁ！　さっさとアニキに酌…」

そして二人の手首を掴もうとするも……

「「ふん！！」」

「ぶぐお！！」

二人の鉄拳が手下の顔面にヒットした。

手下は顔面を陥没させ、鼻血を飛ばしながら後方に跳んでいく。

そして、綺麗な楕円の軌跡を描き、ミサイルの如くテーブルへ頭から突っ込む。

凄まじい音と共にゴリラ男の前のテーブルが崩れる。

「てめえ等！　何しやがる！！」

椅子を倒しながら怒声を上げる。

そんな様子にも二人は動じない。

そんな二人を見て賊は無駄だと分かり、溜息と共にとんでもない言葉をぶつけてきた。

「くそっ…そっちの女はともかく、ついでにその傷女も可愛がってやろうと思ってたのによ…」

「…！」

凪を見ながら吐いた台詞に凪の顔も歪む。

「人が下手に出てりゃあ調子に乗りやがって…思えばそうやって全

身に傷ができるくらいの狂暴な女が大人しくしてる訳…」
「ちょっとあなた!!　いい加減に…!」
凪に対する暴言に鈴仙は我慢できずに臨戦態勢に入る。
しかし、それでも男の暴言は止まらない。
「いいから酌しろって言ってんだよ!!　さっさとしねえとこんな店潰すぞ!!」
「なんだと…!!」
あまりの暴言に凪も怒りに拳を握る。
「てめえは来るんじゃねえよ!!　この狂暴な傷…」
その時、一人の声が響いた。
「止めろ」
静かで、しかし店内の騒音を上回る強い意志の籠った声が店内に響いた。

ｓｉｄｅ　？？

つい先程、私は私による私のためだけの極上メンマ丼をおいしくいただいていた。

それを食べた時の香り、食感、そして味を堪能して私は幸せを感じていた。

しかし、そんな気分もすぐに天から地に墜とされることになる。

無粋な輩が酔いに任せて暴れ始めた。

え？…何故酔ってるか分かるかって？　それはあの男の席に酒が置いてあるからだ。

そんな酔っ払いは店で働いていた女性二人を強引に招いてきた。

私は助けに入ろうかと思って槍を構える。

しかし、二人の動き、そして胆力を見て留まった。

「星ちゃん？　止めないのですかー？」

連れの者が聞いてくるが、黙って頷く。

ただ者ではない…

並の人間なら怖気づく怒声に堂々としている。

それにさり気も無く、自然に足幅を広げていつでも瞬間的に動ける様な態勢を作る。

成程……できる…

そんなことも分からずに一人歩み寄る。

あ…顔面に一発。見ていて痛そうだが、痛快で爽快な一撃であった。

私も少し気分が晴れた。

しかし、その後の男の発言で更なる不快感が生まれた。

傷の付いた女性に対しての暴言。

その内容は人間として…同じ女性として聞き逃せない物だった。

男が勝手にふっかけてきたことであるのに、勝手なことしか言わない男に腹が立った。

……もう我慢はしない。

私は今度こそ男に灸をすえるために立ち上がろうとしたその時……

「…！！」

身震いがした。

寒気、強い闘気、激しい怒り、荒ぶる感情を感じた。

しかし、それも一瞬だった。

一瞬感じた強い気配を元に視線で辿ると、そこには薄い上着の男がいた。

その男はゆっくりとした足取りで店に入り、男の前にまで近付いて見上げる様に正面に立つ。

「これ以上言うと…分かってるな?」

男は睨みを利かせて男に言い放つ。

「なんだてめえ!?　用ねえならすっこんでろ!!」

そんな男の言葉に益々睨みを利かせる。

そこから男の強い思いを感じ、私でさえも動けなくなっている。

「そうはいかねえな。そいつ等はおれの仲間なんでね」

「あぁん?　てめえがこいつ等の連れのひょろっちい男かぁ?　俺の方がいい男じゃねえか?」

「「寝言は死んでからにしろ。この筋肉野郎」」

自画自賛する男に女性二人が額の青筋を増やす。

しかし、罵倒された男は動じずに睨みを利かせたままである。

睨んだまま男は続ける。

「おれのことを悪く言うなら、おれはヘラヘラ笑って見逃してやる…」

その後、男の威圧が更に上がり、素人でも感じられるほどの怒りと、憤怒の表情を浮かべる。

それに対して、賊も顔色を若干変え、男は目を吊り上げたながら賊にぶつける。

「どんな理由があろうとも、おれの友達、仲間を侮辱することは許しはしない…」

「ひっ！！」

まるで男の威圧に気圧されたかの様に熊の様な巨体が倒れて尻もちをつく。

そんな賊に興味が無くなったのか、踵を返して賊も見ずに言い放つ。

「分かったら今すぐ失せろ」

そう言って店から出ようとするが、賊も嘗められたことに腹を立て、憤怒の形相で飛び起きて男に殴りかかる。

「ふざけんなこの野郎！！」

固く握られた拳が男の顔に吸い込まれる様に向かって行く。

しかし、それは不発に終わる。

何故なら、もう二人の事件の中心人物が飛び出し……

「はあああああああぁぁ！！」

「やあああああああぁぁ！！」

兎の耳を付けた女性が賊の右顔面を、左顔面を銀髪の女性が飛び蹴りを……って、もう遅いか……

「ぎゃふん！！」

賊の顔が醜く歪む。

断言しよう

あれは痛い！！

背後にドンッ！　と出ている間に男は地面に顔から突っ込んで落ちた。

そして、女性二人の着地も美しいほどに決まった。

「あれ？　エース様は何故ここに？」

「ああ、用なら既に済ましてきた」

「もう終わらせたのなら、沙和ちゃんと真桜ちゃんと先に戻ってて？」

「あいつ等を捕まえんのか……チョロチョロして捕まえにくいんだよな…まいったな…」

男と二人の女性は何事も無かったかの様に世間話をしている。

男の方の雰囲気も打って変わって柔らかくなっている。

あの男が垣間見せた強力な威圧感……雰囲気からして、相当な死線を越えてきてるのが分かる。

どう考えても相当な手練だ……一戦交えてみたいな……

「てめえ等……もう…許さねえぞ…はぁ……」

しばらくすると倒されていた賊が血を垂らしながら起き上ってきた。

随分とフラフラながらも三人を見据え、苦しそうな…しかし、余裕そうな表情で呟く様に言う。

「おれ達に因縁ふっかけて…こんなことして俺達の頭が黙ってると…思うなよ?」

「頭?」

「ああ、ここから北西の穴蔵に…俺達の本拠地がある……そこには三百の部下とそれを纏める頭がいる…」

「北西?」

三人は顔を見合わせて確認し、男はそのまま続ける。

「もう許さねえ……こんな村ごとてめえ等を「お～い。ちょっと待った」何だ!!」

男に遮られた賊は腹立たしそうに声を荒げるが、よく見てみると三人が含みのある笑みを浮かべていた。

「その頭って……どんな奴だ?」

「知りてえかぁ？　いいだろう。体躯は熊の如し、頭の斧から逃れられる奴はいねえ。それに頭は…（以下略）」

賊が特徴を喋っている間、男は外に出て何かしている。

「あれ～…そんな奴見たと思ったんだけどな～…」

ゴソゴソと音を立てている所、もう予想はできた……もう大丈夫だろう。

「…の様な人だ分かったか！？」

「お、いたいた」

しばらく続いていた大将自慢と共に男の用事も終わった様だ。

男は良い笑顔で一人の熊みたいな男を引きずって来た。

「例えば、こんな感じの奴か？」

「そうそう。血まみれだけど、こんな感じで熊の様にでかくて、それに体と同じくらいの斧を背負って……あれ？」

得意気に笑っていた男の表情が固まった。

そう言って男が下ろした血達磨の大男を見ると、賊の顔色が段々と青ざめてきた。

「……お…頭…」

小さく呟いたつもりだろうが、静まった店に響くには丁度いい音量だった。

「三百だっけ？　よく数えてねえから分かんねえけど、今そいつ等も運んでるから」

その一言で賊は何かを悟った様に慌てて外に出る。

それに釣られて私もいち早く出てみると……

「「！！」」

……驚いた…陳腐な言葉だが…これは驚いた。

巨大な荷車に大量の血達磨になった人間が乗せられ、紐で落ちない様に固定されていた。

「あば…あばばばばばば……」

口を大きく開け、鼻水を垂らし、目を飛び出して驚愕する賊を見て間違いないだろう。

もうこの男に味方はいない。

「じゃあ、お前と奥でノビてる奴を除くと２９８人ってとこか？」

店から出てきた男の声で賊の体が震える。

ギギギと有り得ない音を鳴らして振り向いているが、まあ……賊ながら憐れだな。

「もう一度言う。失せろ」

ポキポキ

拳を鳴らして警告する男に遂に賊は全ての状況を悟ったようで…

「す……すいませんでしたーーーーーーー！！！」

脱兎の如く逃げ出した。

「アニキ待ってーーーーー！！！」

その後から気絶していた筈の部下まで逃げて行った。

気絶したフリをして隙を窺っていたのだろう……

「星殿。あの二人を追わないので？」

私の連れが提案してきたが、構わんだろう。

「構わんだろう。あの二人だけでは最早何もできんよ？」

「それはそうですが……」

「それよりも稟、私達の席に三人ほど招きたいのだが、構わんか？」

「え…えぇ。それなら構いませんが」

「風も、大丈夫か？」

「は～い。こうなるかと思ってもう少し広い席へ移動させてもらいました～」

流石は風。ノンビリしている様で案外人の考えていることに敏だな。

「そりゃまあ軍師希望ですからねー」

ふ…そうか…ならばお言葉に甘えさせてもらおう。

まさかあの様な御仁に出会えるとは…どうやら面白くなりそうだ…

ｓｉｄｅ　三人称

「もう終わったんですか？」

「まあな、３００くらいならこんなもんだろう」

賊共が去って行った後、エースはいつも通りの姿勢で振る舞う。

すると……

――わあああぁぁぁ！！

「うお！？」

「「きゃ！」」

店内から歓喜の声が上がった。

――兄ちゃんすげえな！！

――いやあ、スッキリしたぜ～

――ねえねえ、あの人結構かっこよくない？

後半の所で、鈴仙と凪はイラっとしたが、とりあえず無視した。

エースとしてもこういった声援には慣れていなかったから、とりあえずその場を離れようとした。

そんな時…一人の白い浴衣に似た服を着た女性が近付いてきた。

「少しよろしいですかな？」

「ん？」

突如、後方から聞こえてきた声にエースが振り返る。

「おれに何か用か？」

少し挑発気味にいってみるが、女性はそれを笑って受け流す。

「なに、少しあなたに興味を持っただけ。別に他意はありませぬよ」

「……」

エースはその女性の目を見、女性もその視線を受けとめる。

しばしの膠着状態が続いたが、フっとエースの視線が柔らかくなった。

「どうやらその様だな」

「だから言ったであろう？」

女性の口調も柔らかくなり、エースも警戒を解いた。

「わりいな。少し頭に血が昇ってた」

「構わぬよ」

エースは少しおどけて謝り、女性も頬を緩ませながら返す。

そんな時、横目で見ていた凪達が尋ねる。

「あの…それで、興味とは…？」

「？　ああ、お主達か。その話なら私達の席でするとしよう」

「いえ、生憎ですが、私達にも店の手伝いが…」

凪の問いに女性は笑みを崩さないまま、軽やかに答える。

「それなら心配無用。先程、私の連れが主人から許可を貰った。無論、席も三人分空いてますぞ？」

「でもおれとこいつ等も金なんて持ってねえぞ？」

ここまで用意周到だと逆に何かあるんじゃないかと勘ぐってしまった。

「そっか、それならお言葉に甘えさせてもらおうか」

しかし、エースは気にするでもなく、素直に頷く。

そんな彼を見て、また、主人も見る。

そこで主人も頷いてくれたので、二人も付くことにした。

彼女達が頷いたのを見て、女性は満足気に笑う。

「それでは、こちらです」

そう言って先導し、三人を席へと案内した。

## 新たな出会い（後書き）

この前のリリなのの作品ですが……今はまだ恋姫に心がいっているので止めておきます。

でも、もし、リリなのを書きたくなったら活動報告とかこの作品で宣言しておきますので

それではまた近い内に掲載します！！

## 雨のち晴れ、ときどき迷走（前書き）

今回はすっげえ長くなってしまいましたので、楽しんでくれたら嬉しいです。

そういえば、すっげえ弱いけど女心に敏な北郷一刀さん、チート級の強さをもっているけど女心、恋愛にかんしては救い様が無いエース…萌将伝のサイトの様に申し上げますと、結婚するとしたらどちらがいいですか？（女の人は率直な意見で、男の人は自分が女と想定してみてください）

これは単なる暇つぶしなので答えてもなくてもどちらでも構いません。

ですが、遊び半分と怖い物見たさでやってみます。

私は一刀くんも結構良い奴とは思いますよ？

それに仮にエースにそういう話したら自分の血のことについて気にしそうですが……

このランキングでは華佗、貂蝉、卑弥呼、蜀魏呉の一般兵、董卓軍の一般兵、といった全勢力の一般兵も可能、もちのろん黄巾党もでした…

先程までいざこざがあったとある飲食店。

しかし、それも治まり、今ではまた賑やかになっていた。

「「「「「……」」」」」

「モグモグ……」

そんな店の一角には大人数用の席に六人。

その内二人、ブレザーとチェック柄ミニスカートの服の兎の付け耳を付けたロングヘアーの鈴仙と、銀髪で後ろ髪を三つ編みの体中に傷がある凪は給仕用のエプロンをしている。

その中の三人は、白い着物に酷似した露出の高い服の藍髪の趙雲、眼鏡をかけた委員長キャラの戯志才、ウェーブがかった金髪のロングヘアーの頭に奇妙なオブジェを乗せた程イクである。

そして最後の一人、料理を一心不乱に食べるエースである。

女五人、男一人のシチュエーションは同じ男として、とても、とっても羨ましいこと山の如しだが、エースの様子は何の変わりは無く、友達感覚にしか思っていない。

「そんで？　おれのどこら辺に興味を持ったんだ？」

「ふむ、一つ言わせてもらうなら…あなたは只者では無い…それで

はだめだろうか？」
「へ～…」

エースは奢られた飯を次々と腹の中に入れていく。

「それならなんでわたし達も？」
「うむ、お主達からも常人とは比べ物にならない闘気を感じたから。それだけでなく腕も確かだと確信したからだと言っておこう」
「確信…ですか？」
「ええ、先程の賊と対峙した時の胆力、戦闘態勢、極めつけは賊二人を殴り倒した腕力と脚力とその他色々と…」
「あぅ……」
「……」

二人は顔を赤くさせて俯く。自分の武を評価されたのと思い返せばはしたないことだったと思ったこその照れと羞恥心があった。

「ということは、貴方達もどこかに士官するおつもりで？」

戯志才は思ったことを聞いてみる。

「ええ、まあ…」

正直これからどうなるか、また、したとしてもどこに士官するのかが分からない。

二人は曖昧に返事することしかできなかった。

「もしそうなったら風達のだれかと、いつぞや、どこかで会うかもです～」

程イクがのほほんと正論を述べる。

「そうなったら今ここにいる誰かが敵となり、味方となる可能性がある訳だ。なんとも奇妙な縁になりそうだな」

「はは…今私達も仕えるべき主を探している。さしずめ、ここにいる全員は迷える子羊ってところです」

「……てことはお前等は色んな所を旅してるって訳か？」

「まあ…そうですね」

「そうか……だったら…」

エースは食べることを忘れないまま三人に聞いてみる。

「管賂って占い師のこと聞いたことあるか？　できれば会ってみてえ」

すると、三人は各々思うことがあるらしく、思案顔で答える。

「たしか……最近になって流れ始めた『灼熱の御遣い』の話ですよね？」

「？　天の御遣いじゃないんですか？」

戯志才の答えに凪が聞いてみる。

それに対して趙雲が代わりに答える。

「何でも、最近噂されるようになってきた『天の御遣い』。その御遣いが炎を操り、賊共に裁きの業火を下す……と言う話が出て来ましてな…」

「「……」」

それが全て本当だと知る二人は何も言えないでいる。

「……」

エースは食べながら自分のことだと呑気に認識していた。

「それに知っていますか？　その御遣いは自分のことを『火拳』と自称しているのを」

「「『火拳』？」」

どうやら二人は初耳だったらしく、エースを見るが、彼は相も変わらず食事を口の中に押し込んでいる。

「火を操る拳法と書いて『火拳』と呼ぶそうなのです～。なんだか強そうですね～」

「だが、内容のほとんどが現実味の無いのがほとんど。噂というのは勝手に誇張されますから」

「「あはは…」」

二人はとにかく笑うしかなかった。

「それはそうと～お兄さんはどうして占い師に興味を？」

「ん？　まあ…その予言で直接聞きてえことが…な…」

そう言うと、三人は意外そうだとでも言いたげな表情を作る。

「ほう…とんだ物好きだな」

「……確かにな」

エースは笑いながら返す。

と、ここで程イクは思い出した様に言う。

「ところで星ちゃんはどうして三人を招いたのですか～？」

そこで趙雲は思い出したようだ。

「おお、そうであった。実はお主達に頼みたいことがあってな」

「「「？？」」」

首を傾げる三人に趙雲は当然の様に言う。

「今から相手してもらえないだろうか？」

「「……は？」」

槍を取り出して誘ってくる。

それに鈴仙と凪は呆けるが、エースは気にせずに飯を頬張り続ける。

「えっと……何故そんなことを…？」

「理由は至極単純。お主達と闘いたいからだ」

「いえ、ですからなんで…」

いきなり手合わせを乞うてきた趙雲に二人は困惑し、対応に困っていた。

そんな中、エースはこっそりと戯志才と程イクに聞いてみた。

「なあ」

「「はい？」」
「趙雲っていつもあんななのか？」
それに対して戯志才だけが苦笑いを浮かべ、程イクは変わらない様子だった。
「ま…まあそうですね…星殿は生粋の武人ですから…」
「あんな嬉しそうな星ちゃんは久しぶりなのです～」
「ふ～ん…」
エースは他人事の様に聞いていると…
「エース……で良いだろうか？」
趙雲があらかじめ名乗っておいた自分の名前を呼んできたのに反応する。
「ああ、ここらじゃあ珍しいって言われるけど、おれの名はポートガス・D・エース。つってもなげえからエースで頼む」
「随分と珍しいですよね？　字も無いんでしたっけ？」
「異国の人ってそんな名前の人が多いんですか～？」
「まあな、おれの周りにはそんなのが多かったからな」
戯志才と程イクの質問にエースは肯定する。そして、趙雲と向き合う。
「んで？　おれに何か用でも？」
エースの問いに趙雲はニヤリと不敵に…というより妖しく笑みを浮かべる。

「無論、元々はあなたを見て興味を持ったのだよ」
「……ちなみにどの辺が？」

そう言うと、趙雲は姿勢を正し、自身が思ったことを正直に答える。

「まずあなたが賊に威圧した時ですかな」
「威圧って……あれ失敗だったんだけどよ（ボソ）…」
「？　何か？」
「いや、何でもねえ。…つまり…おれが威嚇した時に何かを感じたんだな？」
「ええ、何か……重く、濃密な覇気……とでも言うのだろうか？」
「それを感じたのか？　おれから」
「間違い無く」

エースの確認に趙雲は絶対の自信を持って応える。

実際、趙雲の言っていることは間違っていない。

エースはあの時、覇王色の覇気を意図的に放って賊を気絶させようとした。

しかし、無意識に当たり構わず解放するのと、意識して特定の人物に向かって解放するのには、その覇気の威力は違っていた。というより、まだエースは覇気の扱いにおいて素人であり、技術的な問題はおろか経験も足りていないため、コントロールができていない。

ティーチと闘い、負けたことをこの世界に来て以来から後悔した日から積極的に修業には励んでいる、

その内、覇気をマスターすることも夢ではない。しかし、経験だけは絶対必要であり、これればかりは時間をかけるしかないのだ。

趙雲の話からすると、エースは間違いなく覇気を飛ばせていた。しかし、コントロール不足のため、極端に薄い覇気しか出せず、趙雲のように勘の鋭い者しか感じられなかったのである。

ちなみに、凪と鈴仙のところまでは覇気は届いておらず、二人はまだエースの覇気に気付いていない。

エースはそう見直し、今後の修業に対する情熱を燃やしながらも話を続ける。

「それは分かった。それでおれ達と闘いたいなんて思った訳か…」
「分かっていただけましたかな？」
「つってもな…こんな街中でドンパチすんのか？」
「心配無用。良い場所を知っております。もしかしたら貴殿等を宿泊させてやれるかもしれぬぞ？」

そう言われると、エース達の目が若干輝く。

「そ…それはまた魅力的な…」
「ていうかおいしすぎません？」

趙雲の条件に二人の心は疑惑と誘惑の両方を抱き、天秤にかけている。

「ちょっ…星殿…水鏡さんの許可も無しにそんな…」
「稟ちゃん。ああなった星ちゃんを止めるのは無理ですよ～」
「……星殿。後で謝ってくださいね？」

「無論」

戯志才と程イクが戦闘狂の勝手な行動に注意を呼び掛けるが、趙雲の鶴の一声で片付いてしまった。

もはや楽しんでいるのは趙雲だけだった。

「それで、受けてくださいますかな？」

「お願いしますお兄さん。星ちゃんの我が儘なのは分かってますが、こうなると止められませんので」

「風、私を馬か何かと勘違いしてないか？」

「……」

「……」

「…ぐぅ～」

「寝るな！」

「はっはっは…！　お前等おもしれえな～！」

趙雲と程イク二人の漫才にエースはハマっていた。

その横で凪と鈴仙はデジャヴを感じていた。

そんなエースを見て趙雲はコホンと顔を赤くしながらのどを鳴らし、再び繕う様に聞く。

「それで、頼みを聞いてくれますかな？」

趙雲はエースに真剣な眼差しを向ける。

「……」

「……」

「……」
「…エース？」
「…ぐお～」
「「寝たぁぁぁ！？」」
「おぉ！？」

趙雲と戯志才もまさかのエースの行為に驚愕とデジャヴを感じた。

それもそのはず、まさか自分達の連れの他にも唐突に眠りにつく人がいるとは思っていなかったのだろう。

「お兄さん。いきなり寝るなんてはしたないですよ」
「風が言えたことでもないでしょ！」
「……ぐぅ～」
「だから寝るな！」

程イクも都合が悪くなり、眠りにつく。

その後、エースと程イクを起こしたり、二人して食べながら寝たりと忙しかった。

しかし、四人のフォローもあり、なんとか食事も話もつけられた。

その代わりに、エースの食事代という莫大な利益を負うことになってしまったが、それを不憫に思った鈴仙と凪も一緒に負担してくれたことはエースは知らなかった。

それから六人は残りの二人を回収に向かい、その後、真桜と沙和にも趙雲達を紹介した。

「色々と省きすぎじゃねーか？」
（時間と労力の限界です）
「ならしゃあねーな」
「誰と話してるの？」
「さあ？」

そんなこともあり、一同は目当ての場所の水鏡塾へと向かう。
その途中でエースは気になっていたことを聞いてみた。

「これから行く所は女性用私塾だったよな？」
「ええ、この街では賢人と名高い水鏡殿が個人で経営している塾です」
「……女しかいねえのか？」
「……数多の女性の中、一人だけの殿方はその中から一人だけ自室に誘い（いざな）…」
「……戯志才？」

突如、顔を赤らめながら熱弁し始めた戯志才にエースは心配そうに呼んでみるが、効果は無かった。

凪、真桜、沙和、鈴仙はその豹変に気持ちの対応ができずに引いていた。

そんな戯志才を見て趙雲は頭を抱え、程イクはいつも通りながらエースを手招きする。

「お兄さん、お兄さん。早くこっちに来ないと大変ですよ」
「？　何が？」
「…風は一応忠告はしましたから～」
「？」

程イクの意味深な忠告にエースは頭上に？を浮かべる。

「そして一人…また一人と未熟な華達はエース殿の部屋……禁断の園に足を踏み入れ……」

戯志才の表情が段々と淫らになっていくのを見たエースまでもが引いてしまった。

そして……

「……ぷはっ！！」
「「「「！！」」」」

戯志才が鼻血を噴出させたことに凪、真桜、沙和、鈴仙は驚愕する。

「あ～…手遅れだったか…」
「稟ちゃ～ん。チーンしますね～。はいチーン」

趙雲と程イクは慣れた感じではあるが、微妙な様子であり、程イクは慣れた手つきで鼻をかんでやる。

そんな奇妙な光景から目を離して若干呆れている趙雲に聞いてみた

かった。

「あの……何ですかコレ？」

ありえない量の鼻血を出して倒れる戯志才を見て趙雲に聞いてみる。

すると、溜息混じりにハァ…と趙雲は答える。

「稟は常人と比べて高度な思考能力があってな…」

「へぇ…軍師にとっては魅力的な能力ですね…」

「で、それがどないしたん？」

聞く限りではそれと鼻血を出すことがどう繋がるのか甚だ疑問である。

思考能力と鼻血はどう関係してるのか？

「……その類まれな思考能力は文学だけに非ず」

「へ？」

「稟は艶本でも鼻血を出すほど性関係に弱い半面、興味が強い。その様な者が性問題について全力で思考を回したら……」

「「「「あぁ……」」」」

ここまで言われてやっと趙雲の言いたいことがなんとなくだが分かった。

要は性についてのことになれば豹変し、深くまで妄想してしまう。

しかし、性への耐性は極端に弱いのにリアルな妄想をしていき過ぎた興奮状態に陥り……ということだった。

「凪ちゃんよりひどいのー」
「沙和。後で厠に一人で来い」
「ちょ…！　ただの冗談だから許してほしいのー！」

そんな話が続く中、一人だけ微妙な立場にいる者がいた。

「…大丈夫ですか～？　お兄さん血まみれですよ～」
「…そりゃあ血飛沫をかぶったからな……」

戯志才の鼻血をモロに被ったエースは血にまみで立ちすくんでいた。

おかげでエースの上着のブルーが真っ赤なレッドに染まっていた。

「あら～…ビチャビチャですね～…」
「せめて何が起こるかを教えてもらいたかったんだけどな」
「風は忠告しましたよ～？」
「…とりあえず早く塾とやらに案内してくれ……」

周りの人からの奇怪な目で見られるのに耐えきれないエースは趙雲達を急かして案内させ、目的の塾へと向かった。

――――きゃあああああぁぁぁぁ！！

街が夕暮れの紅に染まる頃、女性の悲鳴が街中に響き渡った。

「ようこそ、水鏡塾へ」

「「「「「あ、いえ、こちらこそ」」」」」

場所変わってエース達は目的の水鏡塾の創設主兼、講師を務める大人の女性の水鏡本人と向かい合っている。

大人の女性の鏡と言える姿勢、対応も絵になっている。

自分達とは程遠い魅力と雰囲気に呑まれたエース達は正座し、水鏡にお辞儀をする。

「すみません水鏡殿。星…趙雲殿の無茶な提案を聞いてくださって…」

「そう言われると耳が痛いな…」

皮肉る様に言う戯志才に趙雲は体を小さくする。

「戯志才さん。私は構いませんよ?」

「はぁ…申し訳ございません…」

「あの…宿泊代なら出しますが…」

遠慮深く言う鈴仙に水鏡は首を横に振る。

「あなた方は金銭的な問題で働いてらしたのでしょう？」
「ええ…まぁ…」
曖昧な返答に対して水鏡はにこやかに答える。
「それなら遠慮はいりません。それにこちらにはあなた方にはお礼を申し上げなければなりません」
「お礼？」
そう言うと、水鏡は一礼して再び全員に向き直る。
「この近辺の賊の殲滅は私達の街、この塾にとって大きな功績なのです」
「賊って…懸賞にかけられていた…」
そう言ってると、部屋のふすまが開き、小さな子供が数人入ってきた。
「「センセー！」」
「あらあら…今はお客様がいらしてるの。急に入ってきてはいけないの」
元気よく入ってきた子供を抑える。
すると、子供達は大人しくなって素直に謝る。
「「ごめんなさいセンセー…」」
「はい。それとお客様にもね？」

子供達はエース達に向き直って可愛らしく頭を下げる。

「「ごめんなさい」」

凪達はそれを見て微笑みながら許してあげる。

その後、水鏡は子供達を招いてあげると子供達は嬉々として水鏡の膝に乗ったりと甘えたりする。

水鏡は「もう…」と子供達のやんちゃっぷりに呆れながらも子供達の純粋さに顔が綻ぶ。

「相手はたった３００…最近頻繁化している賊の集合体の中では少数ですが、この街には賊を対処する兵はおろか指揮する役人もおりません」

「でしょうね…ここは辺鄙な村ですから、有力な人材も朝廷から収集されているのでしょうな」

「はい、ですからお恥ずかしい話…懸賞をかけて人材を集めるしかなかったのです」

「ちゅうことは…水鏡さんが兵の募集をしとったん？」

真桜が気になっていたことを聞いてみる。

それに対して水鏡は頷く。

「はい・私が度々襲ってくる賊相手に指揮をとって何とか持ちこたえておりましたが……それも限界に来ていたのです…」

「なんと…水鏡さんには軍師の心得があったのですか…」

凪は水鏡の話に感嘆の声を洩らす。

「ええ、あらゆる兵法書もこの塾にはあるので…それに地の利はこちらにありましたから…」
「いえ、それでもすごいですよ…」

この場の全員が鈴仙と同じことを思っているだろう。

指揮官でもない人が少ない兵を率いて暴徒を抑えているのだから。
その手腕は只事ではないと素人目からしても分かるだろう。

水鏡は子供達を撫でながらゆっくりと話す。

「ですが、策だけでの守りではもはや限界にきたいました。そんな時にあなた方が賊徒を抑えてくれましたから…なんとお礼を申し上げていいのやら」
「いえ、私達も望んでやったことですから…」
「ふふ…そうですか…」

水鏡が膝の上の子供達が話に付いて行けずに眠りについたのを確認すると、水鏡はゆっくりと子供達を下ろしてやる。

「この塾は元々この子達の様に戦で親を亡くした孤児のための孤児院…男も女も関係はないのです…」
「……」

水鏡は子供達を愛おしそうに見つめる。

凪達はそんな水鏡を見て、彼女を聖母だと一瞬だけ錯覚してしまった。

「ですが、賊は女の子を慰み物に…男の子を奴隷として売ってしまうので、この塾に来るほとんどが女の子ですから、ここは“女性”の塾だと勘違いされてしまったんでしょうね…」

「……」

エース達が黙ってしまったことに気付き、水鏡は苦虫を噛んだ様に表情を歪めてしまう。

「で…ですが、もうそんな心配はありません。問題の賊は消え、この村を脅かす物は事実上無くなりましたから」

「はい…」

できるだけ明るく振る舞ったつもりだが、中々雰囲気が元に戻らないのに対し、水鏡は別の話しに変えることにした。

「そ…そうだ！　皆さんお風呂にはいりませんか！？　長旅で疲れているのでしょう！？」

「あぁ…そこまでいいのか？」

「構いませんよ？　もう生徒も全員入ったはずですから…」

手を合わせてにこやかに微笑む水鏡にエースはニカッと笑って応える。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうぜ？」

「ふふ…分かった。では…私達もお邪魔してもよろしいか？」

「ええ。困った時はお互い様ですよ…」

エースの子供の様な明るさと水鏡の大人の朗らかさに場の空気も軽くなった所で話はお開きになった。

と、そこでエースは今まで気になっていたことを聞いてみた。

「ところで…水鏡さんよぉ…」

「はい？」

「……ふすまからチラチラ覗いてくるの……あんたの生徒かい？」

そう言って全員がふすまの方を見てみると、そこからヒソヒソと声が聞こえてくる。

「……この塾に若い男の人がくるのは珍しいですから…」

「ふーん……それにしても結構な数だぞ？　そんなに男が来ないのか？」

「いえ…書物の配達とかには来るんですが…」

「ですが？」

「あなたの様なかっこいい男性の来訪は無いんですよね♪」

「「む…」」

にこやかに応える水鏡に凪と鈴仙が不服な声を上げて眉にシワを寄せる。

それを、水鏡と趙雲は見逃さなかった。

「はは…嬉しいこと言ってくれるじゃねーか」

当の本人は冗談だと受け止め、笑い飛ばしながら立ち上がる。

「よし、そんじゃあ先に入れよ？」

「え…それならエースさんが先に…」

「いいんだよ……おれは時間に縛られずにのんびりと入りてえんだよ」

エースがそう答えると、水鏡はにこやかに答える。

「それでは布団も用意しておきますね？」

「いえ、こちらこそ重ね重ねお世話になります」

エースも直立不動でお辞儀をして返す。

「それでは星ちゃんも、お兄さんとの手合わせは明日でいいですね？」

「そうだな…ここでの決闘は禁止されていたのだ…そうさせてもらおう…」

明らかに落胆する趙雲の肩を叩いて励ます程イクをククッと笑ってから部屋を出る。

――――あ…出てきた！

――――あの…お部屋はコチラです！

――――あ、ズルイ！　私も案内する！

「はは…元気な奴等だな」

エースとしては好意として受け止めて礼を言う。

それを聞いていた凪と鈴仙は何とも言えない気持ちと共に溜息を吐く。

「う～ん…ちょっとキツキツやな～」
「真桜、この部屋一つしか無かったんだ。文句は言うな」
「いや、そりゃあそうなんやけど…」

風呂から出た女子組は塾に一つしか無かった空き部屋に八つの布団を敷いている。

その布団で部屋の床は埋め尽くされていた。

「本当はエース殿は別の方がよろしかったのですが…」
「仕方あるまい。一人だけ野宿させる訳にもいかんからな」
「元々星ちゃんが呼んだのですからね～」
「何…役得ではないか…」
「何を言っておられるのです…」

程イクがのほほんと言った発言に趙雲はスラリと受け流す。

それに対して凪は呆れる。

「ところで楽進ちゃんと程普ちゃんに一つ聞いてもいいですか～？」
「「何ですか？」」

程イクは支度をしている凪と鈴仙に聞いてみたかったことがあった。

「二人はお兄さんのことが好きなのですか？」

「「…（ズコッ…）」」
「ぶお！」
「わー！」

程イクの一言に二人は持っていた布団をぶちまけ、二次災害として真桜と沙和が飛んできた布団の餌食になってしまった。

「ほぉ…図星か…」
「ほぉほぉ……これは興味深いですね～」
「え？　そうなんですか？」

趙雲と程イクは目を細めてニヤニヤしながらからかい、戯志才は目を大きく開いて驚く。

それに対して二人は大人な対応を……

「だ…だだだだだだだだだだれがあの…その…ムキー！！」
「そんな…！　エース様が私を愛するなど……って何が愛するだ！！　私のバカッ！！」

できなかった……できなかったどころか自爆した。

「なるほど…ここまで分かりやすいのも珍しいな…」
「青春してますねー」

慌てふためく二人を生温かい目で見守る二人。

「せやねー。こんな調子やけど、まだ出会ってそんなに経ってないのに…これや…」
「ねー。親友としては嬉しい限りなのー」

いつのまにか回復していた真桜と沙和も三人の輪に入って面白がる。
趙雲はそれを聞いてうすら笑いを浮かべて未だに妄想にふける二人に近付く。
「それじゃあ…詳しく聞かせてもらおう…か！」
「「うぐ…」」
趙雲は二人に手刀をくらわせて夢の世界から連れ戻す。
「二人共、のぼせるのは構わんが、もう準備は済んでおる。一旦は床につこうか？」
「は…はい…」
「そ…そうですね…」
首をさすりながら敷かれた布団に一旦は潜りこもうとする。
「あぁ…ちょっと待った」
しかし、それを趙雲は止めた。
一体何事か…と思っていると、趙雲は凪と鈴仙を別々の布団に誘導し…
「お主等の位置はあらかじめ決めておいた」
戯趙程真
沙凪空鈴
→

（布団の位置：戯＝戯志才、趙＝趙雲、程＝程イク、真＝真桜、沙＝沙和、凪＝凪、空＝空いた布団、鈴＝鈴仙と思ってください）

「あ…あの…これでは…」

「…エース様もこの部屋で寝るんですが…」

至極単純な答えに辿りついた二人は顔を赤くさせて趙雲に聞いてみる。

それに対して趙雲は澄ました顔で一言。

「何か問題でも？」

「「……／／／／／／／」」

何を今更…とでも言いたげな趙雲に最早何も言えなくなってしまった。

そんな様子を戯志才は苦笑し、それ以外のメンバーはある意味良い笑顔で彼女等を見つめる。

そんな笑顔を恨みがましく睨みながら黙って定位置の布団に入る。

それを確認した面子は布団に潜るが、凪と鈴仙以外の全員で一斉に掛け布団から顔を出す。

「二人共、はよ起き。兄さんが来る前に寝るつもりかいな？」

「そうしたいんだ私は！」

「私はもう疲れましたから！」

真桜の言葉にも耳を貸さずに二人は布団を被ったまま出て来ない。

そんな二人をどうするか迷っていた時、程イクが目配せをしてきた。
その時、何のシンパシーが伝わったのか、全員は程イクに任せることを無言で了承した。
そして、程イクは二人に語りかける。
「…私は今お二人に聞いてみたいことがあるのですよ～」
「「……」」
「言いたくないのなら構いませんが、その前に言っておきたいことがありますから～」
盛り上がった布団に程イクは丁寧な口調で話す。
「お二人は今、自分が抱いているお気持ちを恥じているのですか？」
「「……」」
「たしかにこのご時世、いつ死ぬかも分からないからこそ己の特技を鍛えることが必要不可欠。正直、色恋沙汰に意識を向ける時間も暇もありません」
今や大陸は波乱と混乱に満ち、各々が生き残ることに躍起になっている。
その中で生きるためには自身の腕と運が必要であり、裕福に暮らしている人はほんの一握りくらいしかいないだろう。
そんな時だからこそ遊んではいられない。
二人はそう思っていた。

そんな程イクは二人に言葉を送る。

「だから……私達はお二人が羨ましいのですよ…」

穏やかな笑顔を浮かべて二人に囁く様に、優しく言う。

「お二人はお二人の好きな人がおり、お兄さんと一緒に旅をしてる。あなた達はそれだけでは不満ですか？」

ここまで言うと、二人は顔を出して首を横に振って否定する。

それを確認して程イクは続ける。

「こんな時代だからこそ、守りたい物があるあなた達が羨ましいのです。その気持ちを大事にすることは恥ずかしいことでも悪いことでも無いのですから…人を愛するのに理由がいるとは風は思っておりませんよ？」

人は生きている内に必ず、愛する者ができる。

その人を愛することは生物としての性であり、男女両方の望みでもある。

そんな時、なんで愛しただとか考える必要があるだろうか？

そして、その気持ちは膨れ、増幅していく。

いき過ぎた気持ちはやがては重圧になる。

いき過ぎた我慢は身を滅ぼす。

「ここは一つ、もうちょっと素直になってみませんか？　会って間もないですが、お兄さんなら喜ぶと思いますよ？」

「「……」」

「と…まぁ…風の独り言はここまでとして…色々と聞いてもいいですか？」

「「……はい…」」

しおらしくなった二人を見て程イクは思った。

計画通り…

程イクはひっそりと黒くほくそ笑んだ。

人はおだてられ、羨ましがられ、自慢できることについては解放的になる。

二人は色恋に後ろめたさを持っていた訳では無く、自信が無かっただけだった。

自分には相応しく無いと…

ならば、それに対して自信をつけさせればどうなるか…

“自信”は即座に“自慢”に変わるものであり、そのことについては心がオープンになるのだ。

これは一種の催眠法と言っても過言でもない。

「ではでは～…お兄さんのどういった所が気に入っているのですか？」

ここでも軍師クオリティー…かは分からないが、直接“好き”とは言わずに“気に入っている”と誇張し、喋りやすい配慮を忘れない。

それに乗っかった二人は小さく、顔を真っ赤にして答える。

「「……色々と…」」

「そうですか～…何でそう思ったのですか～？」

まずは凪が答える。

「えっと……雰囲気もありますが…強くて…それに以前は私を助けてくださって…」

「兄さんの肌に密着してたんよー。そん時」

「ま…真桜！」

凪の語りの横から茶化す真桜に顔を更に赤くさせて割と本気で怒鳴る。

そんな時、全員から、人差し指を口の前に立ててシィ～と注意をくらい、小さくなってしまった。

「ほうほう…じゃあ程普ちゃんはどうなんですか～？」

程イクは矛先を鈴仙に変えた。

振られた鈴仙に視線が集まり、本人は戸惑うが…諦めて正直に話す。

「えっと……やっぱり優しいこともあるんだけど……やっぱりわたしも雰囲気…かな？」

「あ～…後は…普段は大人っぽく振る舞ってるのに時々子供っぽい所も…」

「あ…あるある…それと自分は勘が良いって自分で言ってるのに…」

「あの人ときたら…」

「「なんか鈍い」」

いつのまにか鈴仙の話に凪も加わり、勝手にヒートアップしていくことになる。

尋問していた筈の五人は置き去りにされてしまった。

「……ここまでいくとは計算外でしたね～」

「いやはや…こういうのも悪くないのではないか？」

「ですね～」

真桜と沙和を見ると、苦笑しながらも生き生きとする親友を見て嬉しそうな様子である。

それよりも程イクはと趙雲は話の中心人物のエースが気になり始めていた。

聞いた限りでは、エースとは出会ってそれほど経ってはない。

それなのに、ここまで心を許している様子である。

こんな世の中、ここまで心を許せる存在がどれだけいるだろうか？

ましてや、心身共に強い武人相手にだ。

それは性格だとか強さだとかそういった物ではなく、もっと根本的な要因か魅力があるからではないのか…

それが何なのかが気になり、知りたいと興味本位で思っていた。

（明日こそは手合わせしてもらおう）

（今度ゆっくり話してみましょう）

二人がそう思っていたことは本人しか知らない。

一つ気持ちの整理がついた時、程イクはもう一つの疑問が浮かんだ。

「そういえば稟ちゃんはもう寝たんですか～？」

程イクはさっきから静かな戯志才を見てみる。

恋バナをしているのにあの妄想癖の戯志才が静かなのはおかしい。

そう思っていたが、すぐに分かった。

「うぅ～…」

鼻に詰め物を詰めて鼻血を食い止めている戯志才が横たわっていた。

「あぁ…話の邪魔になりそうだったからな。すんでのところでオとしておいたのだが」

「良い仕事しますね」

結局、彼女達の修学旅行のノリは深夜まで続いた。

外に風が吹いた。

塾内の庭は一際広く、穏やかに青々とする木々と思いつく限りの色を宿す花で囲まれている。

その頭上には見事な満月が浮かび、朝から続いていた雨雲が晴れ、満月から離れているように見える。

風によって周りの植物がざわめき、来訪者にワルツを見せ、クラシックを奏でる。

そんな幻想的な広場の真ん中に来訪者…エースがいた。

上着を脱いで背中のドクロが剥き出しになっている。

その広場の真ん中でエースは一人、腰を下ろしていた。

（……結局この島……いや、この世界は一体…）

エースが考えていたのは今の自分がいる場所だった。

今まで凪達と旅してきて思った。

黄巾党、朝廷、勅使などい聞き覚えの無い単語。

海賊、海軍本部、七武海が誰にも知られていない。

それに今まで会ってきた中で、悪魔の実の能力者も一人もいない。

自分を知る者も…一人もいない…

自分を……愛してくれた人達も……誰一人……

この世界には存在しない……

この世界では誰からも邪険にされない……

誰からも心から愛されない……

（おれは……一人だ……）

エースの心に何とも言えない虚脱感が溢れる。

敵がいないことは好ましい、会うのは絶対にゴメンだ。

だが、自分を知っていた人物とはもう二度と会えない…

そんなことは自分がインペルダウンに収容されていた時に覚悟を決めていたはずだったのに…

「出会いがあれば別れもある……的を射ているな……」

今まで出会ってきた人達の顔が頭をよぎる。

「今のおれには……痛すぎる…」

満月を見上げて力無く一人ごちる。

そんな時、幻想広場にもう一人の来客が現れた。

「素敵な場所でしょ？　ここは…」

水鏡はエースの上着を抱えていた。

突然の珍客にもエースは反応を見せずに、力無く笑みを浮かべる。

「ご婦人が一人で見知らぬ男と会うもんじゃねえぞ」

「あら、長生きしてないわ。人を見る目はあるつもりですよ？」

エースの忠告にも水鏡はいたずらっぽく微笑んで腰かけるエースの隣まで歩み寄る。

「良い所でしょ？　私の花鳥風月を想像して何年もかけて作ってみたの」

「まあな、グランドラインや新世界でもこんな光景はお目にかかれるかどうか……」

「……その『ぐらんどらいん』や『しんせかい』というのは天の世界ですか？」

水鏡の言葉にエースは引っ掛かった単語を見つけた。

「天？　なんだそれ？」

「最近の噂の中心の『天の御遣い様』は天の世界から世を治めるために送られた火を司る神の遣い……だと言われてるんですよ？」

「なんだそりゃ、前よりもひどくなってんじゃねえか」

あまりに増幅しすぎたお伽話にエースも苦笑いを浮かべるだけだった。

それは呆れからじゃない。

自虐だった。

「おれが神の遣いか……世界最悪の血を……鬼の血を受け継ぐ鬼の

子が…世界を救うなんてな……物語としては上出来じゃあねえか？」

それを横で聞いていた水鏡は何も言わずにエースの話を聞く。

エースの話が終わり、辺りには草木の奏でしか響いていない。

そんな中、水鏡は広場を囲む花壇の傍まで歩み、花を優しく撫でながら、ある話をする。

「この花壇にはですね…色々な花があるんですよ……菖蒲（あやめ）、あかしあ、通草（あけび）、朝顔（あさがお）、紫陽花（あじさい）など……まあ…手当たりしだいって感じですけど…」

水鏡は恥ずかしそうに答えるが、エースは黙って聞いている。

水鏡の真意が分からないといったことの方が大きいのだろう。

「この中でもね…お気に入りの花があるんです…」

そう言って水鏡はエースを手招きする。

不思議に思いながらもエースは歩み寄る。

近くに来たことを確認すると、水鏡は二つの花を指差す。

どちらの花も鮮やかな紫だったが、花びらの形が違っていた。

水鏡は多数の花びらを振りまく花を指差す。

「この花は紫苑と言って…花言葉は『遠方にある人を思う』、『思

い出』、『君を忘れない』です。それでこっちは……」

今度はもう一つの花を指差して言う。

「この花は桔梗。花言葉は…『変わらぬ愛』」

「……」

ここまで言われると何が言いたいのかが何となく分かってきた。

「あなたがどんな人生を送ってきたのかは私にも分かりませんし…理解できるとも思っていません…誰にもできないでしょう」

「まぁ…な…」

「ですが……」

「？」

「あなたを愛してくれた人は必ずいたはずです」

「！！」

水鏡の言葉にエースは大きく目を見開いて驚愕する。

それはつまり、さっきの独り言を聞かれたのだと判明し、バツが悪そうに手で隠す様に顔を覆う。

エースは人に弱い自分を人に見せるのがきらいだった。

そのために水鏡と顔を合わせ辛くなってしまった故の行動だった。

それを見抜いた水鏡はクスクス笑って続ける。

「あなたが鬼の子だと言われようが、あなたは愛してくれる人がいたんですよ」

「……だけど…そんな奴等もここにはいねえ……いねえんだ…」

エースはできるだけこの話を終わらせたかった。

今の現実を受け入れるのが堪らなかった。

だけど、それから逃げてはいけないと踏みとどまる自分がいた。

しかし、その話も終端に向かっていた。

「確かにその人達はもういないと思う……だけど、今のあなたの周りはどうですか？」

「……」

「…人はいつでも自分のことに関しては無関心であり、無知に近いのです……時々でいいですから自分の周りを見渡してみることをお勧めします」

そう言って水鏡は屋敷の方へと戻って行った。

「……」

一人取り残されたエースは何とも言えない表情のまま床に転がった。

眼前には見事な満月が顔を覗かせている。

しかし、その月はいつもよりも近く感じ、手を伸ばせば届くと思った。

（おれの周り……仲間……か…）

最近できた仲間の顔が浮かび、やがては消える。

しかし、その口元は吊り上っていた。

この月見は色んな意味でエースの心に残った。

このことは生涯、忘れることはないのだろう……

どんな時代の荒波に呑まれようが……彼は忘れない……

「ほう…水鏡塾か…」

「へい、その私塾は若い女の育成が盛んでして…」

「うひょー！　そそるぜー！」

街からある程度離れた場所で黄色で統一された集団が移動している。

しかし、あまりに下品で、醜悪に満ちた声で高々と笑いを上げる。

「お前達もよくそんな穴場を見逃してたな」

賊の頭らしき人物が一人の男に首を向ける。

その男は昼間に凪達にボコボコにされたゴリラ男だった。

顔に包帯を巻いて痛々しいが、その表情は邪悪さと憎悪で染められている。

「それより頭。俺達を入れる約束は…」

「もちろん、守ってやる！　お前の話が事実だと分かればなぁ！」

頭の言葉に男はクックッとほくそ笑んだ。

この集団もまた元農民で構成された黄巾党の片割れ。

略奪し、相手を蹂躙する快感と力に振り回された成れの果てとも言える。

この集団の総勢は１００と壊滅された賊衆とは取るに足らない数だが、路頭に迷うよりはマシということだ。

エース達にぶっ飛ばされた男は同じ黄巾党のよしみだということと、一つの提案を持ち掛けて仲間に入れてもらおうという魂胆だ。

女の調達場所。

黄巾党にとって街の拠点である水鏡塾は邪魔でしかない。

特に村近くに拠点を置いていた黄巾党にとっては正に邪魔だった。

そのせいで今まで街に攻めることも、塾の女共を指をくわえて見てるだけしかできなかった。

しかし、それも今日で終わる。

黄巾党が壊滅したと油断している今が好機。

自分達をコケにした兎女と傷女も、あの男にも地獄を見せてやる…

男は惨たらしく殺し……女共は犯しに犯し…人格が崩壊するまで堪能してやる……

狂気の波がエース達に牙を向ける。

黄巾党到着まで……

あと……

一時間

## 雨のち晴れ、ときどき迷走（後書き）

あともう三話で本編にいこうかと思っています。

鋭意製作中ですので、楽しみにしてくれたら嬉しいです。

ですが、暇だった時、勢いでこの小説書いてたら指を痛め、腫れた…ぎゃぁぁぁぁぁ！！！

## ご愁傷様（前書き）

ついカッとなって書いた。どんな話でもよかった。

男は心底辛そうに俯きながらそう語った。

# ご愁傷様

村の明かりが消え、静寂が街を包みこむ。

昼の喧騒は消え、人っ子一人見当たらない。

しかし、街の外には何かがうごめいている。

その地面には赤い液体と動かない人影が倒れている。

「よし、準備はできてるな?」

「へい、門番も全員始末しました」

「よし、なら…」

大柄の男はなるべく音を立てさせない様に部下を誘導させて門をくぐっていく。

ここまでは順調。

最近は軍と交戦続きで食料も底を尽きかけていた。

そんな時の吉報。

兵の少ない食料と女の宝庫。

いくら知に優れてても力づくならそこらの女と変わりはない。

まさか相手がこんなにも少人数で一点集中で襲いかかってくるとは思ってないだろう。

「さあ……宴を始めるか…」

知らぬ間に垂れた涎を拭き、門をくぐり、闇の中へと身を潜めた。

「かぁ～…くぅ～…」

エースは狭い部屋の中で眠りについていた。

他の全員もエースのいびきを物ともせずに休息を取っている。

「……」

趙雲以外は……

趙雲の視線の先にはエースがいた。

待ち遠しい。

試したい…この人がどれだけ強いのかを……そして知りたい……自分とこの人とではどれくらいの差があるのかを……

趙雲の心境は、遠足の前日に楽しみで眠れない子供だった。

理由としては子供のソレとはいささか物騒だとはツッコマないでほしい。

「ふふ…」

不意に上げてしまった笑いを途中で止め、再び寝ようと試みたその時……

ゴトン

「…？」

遠くから音が聞こえた…気がした。

「……」

趙雲はゆっくりと掛け布団をどかして立ち上がった。

「おい…何してやが…る！」
「イテッ！　すいやせん…」
「たく……もっと静かにしろ……」

エースと水鏡が話した庭園にうごめく幾つかの影があった。

その人影は皆、頭に黄色い布を巻いている。

「でも、結構ちょろいもんですね」
「ああ、こんな簡単に入れてくれるなんて…話がうますぎて疑っちまうぜ」

互いに笑いながら胸を躍らせる。

「そうか、それならお帰り願おうか」

そんな中、闇の向こう側から凛とした声が響く。

「誰だ！？」

暗闇の中から声が聞こえたのに警戒する賊達は粗末な剣を抜く。

視界を断絶させる暗闇の中から足音が聞こえ、音も大きくなっていく。

賊達の緊張はマックスにまで上がる。

そして、暗闇を抜け、庭園の舞台に上がってきたのは……

「こんな見事な満月の夜に、ズカズカと押しかけてくるのは無粋ではないか？」

月明かりのスポットライトに照らされた趙雲だった。

白い衣服を身に纏い、朱色の槍を構えるその姿は、そのまんまの意味で輝いていた。

そんな趙雲を見た賊は剣を収めて安堵した。

「なんだ、女かよ…」

「おい、それよかいい女じゃねえか？　胸もでけえし顔も上玉だ」

「クク…どうやらついてるようだな。おい女、わりいことしねえからこっちに来い」

「へへ…アニキ、そりゃあからさますぎですぜ」

趙雲が女だからと油断し、賊は欲望を隠そうともせずに趙雲に近付いて行く。

それに対して趙雲は……

「……落ちぶれた賊に物の雅を説くのが間違いだったな」

落胆の色を見せるのも一瞬、趙雲は槍で一閃。

すると、近付いて来た賊は吹き飛ばされ、頭のすぐ傍まで吹き飛ばされた。

それを見た賊達はその光景に目を疑い、危険を察知して剣を再び抜く。

「てめえ!!　何しやがる!!」

その怒号に対し、趙雲は槍を肩に担いで囲まれている状況にも関わらず、飄々と返す。

「生憎、私には貴様等の様な下郎に捧げる身体もありはしないのでな」

「こ…このアマ…!」

「それにここは貴様等の様な下衆共が足を踏み入れていい場所ではない。早々にお引き取り願おうか」

「!　この野郎!!」

趙雲の挑発に耐えられなくなった賊が集団で襲いかかってくる。

粗末な剣を振りかぶった賊達が趙雲に振るおうとしたその時……

「猛虎蹴撃っ!!」

「はぁ!!」

闇の中から光る弾と人影が現れ、賊達を一掃する。

飛びかかった仲間が何かに妨げられ、倒されるのを見て他の賊の足がすくむ。

そんな中、次々と暗闇の中からその正体が露わになる。

「他人の敷地に忍び込むなど不届き千万!!　この虎の一撃で貴様等賊共を叩く!!」

「ここから先は踏み込ませません!」

凪と鈴仙が現れた。

その二人の姿を見た一人が大声を出して二人を指差す。

「あ!　てめえ等…兎女と傷女!!」

「貴様…!!　昼間の…!」

「なんでここに…」

二人が昼間の料亭で暴れていた大男だと気付き、何故ここにいるのかと疑問に思っていた。

その答えには趙雲が答えてくれた。

「なるほど……大方、女人の集まる場所を餌に取り入ったのだな……」

「ああそうさ!　そして、てめえ等にも礼を返してなかったからなぁ!!」

憎しみの感情を二人に向けていると、更に他の声が聞こえてくる。

「ちょおオッサン。さっきの傷女って……まさか凪のことじゃないやろなぁ?」

「もしそうだったら、沙和達が黙ってないの」

暗闇の中からドリル状の大きい槍を構えた真桜と、二刀流の沙和が出てきた。

しかし、二人の出現にも意を介さず、賊は怒りをぶつける。

「うるせぇ！　んなこたぁどうでもいいんだよ!!　てめえ等を犯すのは後のお楽しみだ！　それよりもあの男出しやがれ!!　ぶっ殺してやる!!」

鼻息を荒く、顔を真っ赤にさせて怒る男にその場の全員が呆れる。

「はぁ…あのな…あんたみたいな小悪党が兄さん倒せる訳ないやろ…」

「相手はもっと選んだ方がいいの～」

その中でも、凪と鈴仙の反応が顕著だった。

「どうやら貴様はあの方との差を理解できんようだな」

「多分、一生無理かと…」

次々に投げかけられる言葉に男の沸点は一気に振り切った。

「だったら力づくでやってやるよ!!」

男の号令と共に、多数の賊達が五人に襲いかかる。

五人は姿勢を低くし、賊達と対峙する。

「これで全員ですね～」

程イク、戯志才、水鏡は塾の中で生徒達の誘導をしていた。

現在、エース達全員は一際広い、水鏡の部屋にいる。

「もう一度点呼させてください。だれか一人でも欠けていないか確認します」

「ええ」

戯志才と水鏡が確認を取ろうとする。

その時…

「よっ」

入口から軽い口調でエースが三人に声をかけた。

三人はいきなりの声に身を震わす。

「！！……エース殿でしたか……」

「どうでしたか？　お兄さん」

「おお、お前等の指示通り、裏口から戦力を見てきたけど……たったの１００くらいだったな」

「そうですか……それなら星殿達なら充分ですね」

「はい、これだけ騒ぎが起きてるのですから…この街の警備隊もすぐに来るでしょう」

三人は淡々と答えるが、水鏡には一つの懸念があった。

「ですが、相手が賊とはいえ、裏口から回り込まれれば危険です」

「そうですね～…対賊用に見つかりにくい扉とはいえ、入られたりしたりしたら…」

「このまま見つからなければいいのだが…」

三人が思案していると、エースは口を吊り上げて答える。

「ああ、それはもう手ぇ打っといた」

「？…手を打ったとは？」

「そのまんまの意味だよ」

エースが後頭部に頭を組んで寝っ転がる姿勢を見せる。

それを見ている三人は首を傾げ、そんなことをするのも無駄だろうと思い、思案を止めて趙雲達の無事を願う。

この塾は水鏡が現場監督を請け負って建てた建物。

賊の対策もいくつかしてある。

その例として上げるなら、立地場所と裏口である。

立地場所はいくらか高い場所で、街の門と外の広場を見渡すことができる。

エースはそこから敵の大体の戦力を計った。

そして、その賊が攻め込めないように裏口と壁の色が丸っきり同じ。

要は、カメレオンみたいに隠してあるのだ。

それで幾らか時間を稼げる。

しかし、エースは直前にミスを犯した。

戦力確認のため、不意に裏口を開けると……

「……」

「……よぉ兄ちゃん。わざわざ入口を教えてくれたのか？」

既に賊が数十人も闊歩していた。

エースはやっちまった…と言わんばかりに頭を掻いて自分の迂闊さを後悔する。

「よし、このままどいてくれるなら見逃してもいいぞ？」

得意気に笑う賊にエースは気持ちを切り替え……

「誰が聞くかバカ」
「は？…グフゥ！！」
男の顎に強烈なキックをお見舞いさせた。
吐血しながら倒れる仲間を見届けると、怨嗟の念を燃やし始め、エースに剣を抜く。
しかし、多数の強烈な念を一身に受けてもエースは動じず、不敵に笑う。
「ワリィな…ここから先は一方通行だ」
裏口を閉めて向かい合う。
「ちょっと……ケジメつけさせてもらうわ」
それを機に、賊達はエースに跳びかかった。
「あぁ…」

「ば……化物……」

結果、推定３０人の血達磨の賊達が山の様に積み上げられ、裏口をスッカリと塞いでいた。

「喰らいや！」
「せーい！」

真桜の螺旋槍は賊を貫き、沙和の二刀流は賊を切り裂く。

「ほぅ…」

趙雲は二人の実力に少しだけ嬉しい誤算を感じた。

「李典！　于禁！　お主等も良い物を持っている…な！」

複数の賊を一槍で全て吹き飛ばす。

趙雲の問いに真桜達は答える。

「たりまえや！　ウチ等とて兄さんに無理矢理修業されとるんねや！！」
「強くならないと、沙和達が死んじゃう…の！」
「ふ…左様か！」

三人で敵の攻撃を避け、受け止め、反撃しながら軽口を叩き合う。

「三人共！　あまりふざけないでください！！」
「まだ敵の数さえ分かってないんですから！！」

三人に激を飛ばすのは、凪と鈴仙の格闘派。

凪は拳に氣を溜め、威力を倍増させ、武器さえも砕き、相手を無力化させる。

鈴仙はスピードと柔軟さを生かし、相手の頭上を飛び越えながらの蹴り、足払いなど、予測もできない攻撃を相手の死角から仕掛けて倒していく。

力で砕き、速さで翻弄し、技で斬る。

二人で足りない部分を補い合う完璧な布陣が二人の間でできていた。

これもエースとの修業の成果でもあり、競い合う二人ならではの戦法である。

そんな二人に三人は頼もしさを感じていた。

「ふふ…それなら賊が消えるまで叩けばいいだけ」
「凪ちゃんと鈴仙ちゃんがいるから楽なの～」
「ていうかもう二人で全滅させた方がいいんちゃう？」
「「絶対無理！！」」

そんな軽口を叩き合う内は余裕であることを示していた。

それを見て頭もイライラしている。

「おい！　何チンタラしてやがる！　さっさと始末しやがれ！！」
「む…無理ですよ～…もうそろそろこっちの数もヤバくなってきやしたし…」
「くそ！…裏口に回った奴等からの報告はまだか！？」

念のためにあらかじめ忍び込ませていた部隊がいたのだが、突入して時間も大分経った。

苛立ち、焦燥、不安。

そんな感情に支配されてきた賊達に更なる追い討ちが頭上で待っていた。

「わりいな。お前等のお友達は今頃おねんねしてるぜ？」
『『『！！』』』

全員が声の先……木の上の枝に視線を向ける。

すると、そこには木にもたれかかるエースがいた。

「エースさん！？」
「あ！　て…てめえ！！」

賊達はともかく、凪達もエースの出現に驚愕した。

「おいてめえ！　いますぐ降りて来い！！　ぶっ殺してやる！！」

男は昼間の恨みを思い出し、怨嗟を込めた怒号を張り上げる。

それに対し、エース達は……

「エースよ。風達はどうした？」

「あぁ、もう心配することじゃねえと思ってよ。加勢しようと思ってたけど…もう大丈夫だな…」

「無視してんじゃねーーーーーーー！！」

男を完全に無視してエース達は話を進めていく。

「もう大丈夫とは？」

「いやな、裏口から見たんだけどよ、こいつ等の戦力って１００くらいしかなくてよ」

（ギク…）

「１００って…また粗末な…」

「多分、大人数で対抗するより少人数で騒ぎを起こさずにいけば上手くいくと思ったんとちゃう？」

「まあ、戦力はそれだけなのだからそれしか打つ手が無かったのだろう？」

（ギク…ギク…）

「そんで、裏口にいたのは３０くらい……で、ここで倒れてるのは４０くらい…だから後３０ってとこか」

（……）

凪達の予測は全て核心を突いているのに、賊の表情が段々と悲惨になっていくのが分かる。

というより、賊にはどうしても納得できないことがあった。

「それよりてめえ！　なんで裏口に行った奴等を知ってやがる！！

ていうか何でてめえは…！」

ここにいるのか。

本当は分かっている。しかし、認めたくはなかった。

自分達にとって都合の悪い状況など受け入れたくなかったのだ。

そんな心の葛藤を余所に、エースはアッサリと答える。

「さっきも言った通り、もう遅いからおねんねさせてもらったぜ」

一人残らず…な…

最後に言った言葉まで聞いてしまった賊達の顔色が一気に青ざめた。

それと同時に、つい最近味わった恐怖感が蘇っていた。

最近までは６００という圧倒的な数で大地を闊歩していた。

しかし、その大軍団もほぼ壊滅にまで追い込まれた。

飛将軍・呂奉先によって…

突如現れた規格外。

見た事も無い勢いで仲間を倒していく様はまさに鬼神。

命からがら逃げてきたのは記憶に新しい。

しかし、そんな脅威が今まさに目の前で口を開けて待ち構えている。
もはや引き返すこともできない。
もう二度と無いだろうと自分に言い訳し、不安から逃れるために蓋をした辛い経験。
それから逃れた結果が今につながった。
それを察したのか、後方の賊達は音を出さずに逃げ出していく。
それを目にしたエースは…
「…おれはもう出なくていいな…」
弱い者イジメになると思い、賊達に向かって心の中で合掌した。
「それでは…早々に引導を渡してやろう」
趙雲の一言で目の前の現実に引き戻された賊達は武器を握る気力さえも失い、武器を落としていく。
ー――いや…あの…もうこんなことしないから…ってちょっと待ってってギャアアァァァァァ！！
その夜、悲惨な悲鳴と打撃音がＢＧＭとして街中に広まった。

「重ね重ね…本当にお世話になりました…」

早朝、まだ辺りが薄暗いほど早い朝の庭園にエース達はいた。

水鏡はすぐ傍にある人“だった物”から目を逸らしながらエース達に頭を下げる。

それに対して、エースは気さくに笑って返す。

「なに、あんたもおれ達を泊めてくれたし、飯まで世話になったからな。気にすんな」

「ふふ…そうですか」

笑い合う二人だったが、突然、水鏡は何かを思い出した様に両手をポンと叩き、懐から一枚の何重にも折られた紙を出してエースに手渡す。

不思議に思ったエースは紙を広げてみる。

すると紙の中には押し花が挟まっていた。

花に感心の無いエースでもその花を知っていた。

「…紫苑と桔梗か……」

「はい。よく言えました」

水鏡の子供を褒めるような口調に溜息を洩らす。

しかし、不快ではなかった。

エースにとってこの二つの花の花言葉は特別だったからだ。

そんなエースに水鏡はもう一度言い聞かせる様に伝える。

「時々は自分と自分の周りを見直すことをお勧めします」

「…わーったよ」

微笑んで言う水鏡の真意にエースは気付き、ついつい笑いながら曖昧に返事する。

「それと、一つ頼んでもいいですか？」

「ん？　ああ、構わねえよ」

二つ返事で承諾するエースに水鏡はニッコリと微笑んで伝える。

「それでは、もし旅の最中に諸葛亮、鳳統と名乗る二人の子……そう言っては本人は怒るんだけど、その名を持つ二人に会ったら伝言をお願いします」

「なんて？」

「『時々でいいから辛くなったら帰ってきてね』…と…」

「…あぁ、会ったら言っとく」

「ありがとうございます」

礼儀正しくお辞儀する水鏡にエースもお辞儀で返す。

「何から何まで…本当にごちそうさまでした」

「エース様…それはご飯の礼しかしておりません」

突っ込まれたエースを水鏡はクスクス笑う。

こうして、エース達は水鏡女私塾を旅立った。

エース達も水鏡も互いの姿が見えなくなるまで見送っていた。

そして、エース達の姿が見えなくなると、水鏡は静かに呟いた。

「…あなたは決して鬼の子じゃない……人の本質を決めるのは“血”ではなく、“その人の中身”です……もっと自分を誇ってください……“灼熱の御遣い”様」

その言葉は風に乗り、エース達が向かって行った方に流れて行った。

それを見届けた水鏡は身を翻し、塾の中へと戻る。

これからの未来に羽ばたく宝石の原石を育てるための一日を送るため…喝を自分に入れて…

――――……

「……」

「？　どうなされましたか？」

「いや……何でも…」

風と共に何かを聞いた気がした。

それは気のせいかもしれない。

けれど……

「おれ……」

「？」

「水鏡みたいな奴…結構好きだな」

「「！！」」

ニシシと笑って何気なく答えたエースに凪と鈴仙は衝撃を受ける。

「おや、エースは水鏡殿のような高齢の女性が好みか？」

そこに第三者の茶々が入るが、エースは手を振ってやんわりと否定する。

「そんな感じじゃなくて……なんつーか……良い奴だったからな！」

「…良い奴…まあ…分からないことではないのだが…」

「とにかく、おれは水鏡のこと気に入ったな！」

満面の笑みのエースに、凪と鈴仙はこころなしかホッとする。

真桜と沙和はそれを見て楽しんでる様子だが、それよりもエースには気になることがあった。

「それより、お前等はなんでおれ達に同行すんだ?」

そう言うと、趙雲、程イク、戯志才に聞いてみる。

三人は各々理由を述べる。

「ふむ、私はこれから北方に行くのでな…一人で行ってもいいのだが、お主達と行くのが面白そうでな」

「私は…風と共に仕えるべき主を探しておりますから…」

「風も稟ちゃんと同じですね～」

「ふ～ん…まあいっか」

あまり詮索もしないエースに三人は少し苦笑する。

しかし、エースと旅していた四人は首を横に振る。

どうやら、彼はそういったことは気にしないらしい。

三人はそう感じた。

(まあ……私が同行したのはそれだけでは無いのだがな…)

(星ちゃんの冗談にも全く反応無し……珍しい人ですね～)

その中の、趙雲と程イクはじっとエースの背中を見つめていた。

～おまけ～

しばらくエース達と歩いていると……

――――誰が高齢ですって？

「っ！！！」

趙雲は不気味な声を聞いた気がして、咄嗟に後ろを振り向く。

「…星殿？」

「何かありました？」

他の面子が心配する中、趙雲は辺りを警戒する。

しかし、人の気配が無いのを確認すると、エース達に向き直る。

「いや…何か聞こえたと思ったのだが…私の気のせいだ」

「？…そうですか」

趙雲がいつになく、早歩きで先行するのをエース達は疑問に思った。

その頃の水鏡塾では…

「あれ？　先生。本を持って何してるの？」
「いえ、ちょっと外の空気を吸っていただけですよ」

水鏡は生徒に呼ばれると、本を外に供えてある。木製のテーブルに置いて甘えてきた生徒に向き直る。

そして、そよ風が吹き、本がめくれると、あるページまでめくれて止まる。

そこには…

『即席の“音弾（おとだま）”、“吼え弾（ほえだま）”の飛ばし方』と書いてあった。

## ご愁傷様（後書き）

エースは次回も能力は使いません。

ですが、新たな展開もあります。

それでは次回にお会いしましょう！

## 新たな輪（前書き）

作者は本編に入ろうと焦っていて、文章が残念になってます。

今回はそこんところに注意を

# 新たな輪

私塾からの一件から数日が経った。

エース達は現在、都に向かいながらそれぞれの身の振り方を模索中。

それにより、大体の進路は決まっていた。

趙雲は北方の公孫賛の客将となるべく、戯志才達と共に後二日で別れる予定である。

それでも、趙雲達が来てからはとても充実していた。

「いやはや…精が出るな」

趙雲はエース達から聞いていた早朝訓練の見物をしていた。

「そりゃそうだろ。おれも強くなりてえからな」

「なるほど、毎日これを？」

「ああ、こればかりは時間をかけねえと」

「もらった！」

「隙あり！！」

趙雲は腰かけて模擬戦中のエースに話かけ、エースはそれに答えて

いる。

その瞬間、凪は背後からパンチ、鈴仙も前からパンチ……と見せかけて足払いを仕掛ける。

しかし、エースは鈴仙の足払いをジャンプで避けながら…

「隙なんかどこにある？」

体を反転させながら後ろ回し蹴りの要領で凪のパンチを弾く。

「くっ！　まだ…」

「遅い！」

「なっ！　うわ！！」

凪が追撃をしようと片方の腕を振り上げるが、その前に着地したエースが素早く凪に足払い。

足払いで勢い良く転んだ凪の次は鈴仙。

「もっと体の回転を速くしろ！　隙だらけだ！」

「え！？　キャッ！」

エースは鈴仙のブレザーを掴んで背負い投げの要領で投げる。

「ぐっ！」

背中を強打した鈴仙が苦しげな声を上げる。

「よしっ！　今日はここまでだ！」

「「あ……ありがとうございました～…」

エースは笑顔を浮かべながら二人を助け起こす。

一方、コテンパンにされた二人は体力も尽きかけてフラフラである。

しかし、まだ二人は良い方である。

本当の問題はすぐ近くで倒れていた。

「「……」」

「エースよ。この二人、魂が抜けかけてるのだが？」

「大丈夫大丈夫（笑）。いつもこんな感じだ」

「はは…厳しいな」

エースの屈託の無い笑顔に趙雲も釣られて笑ってしまう。

そんなやり取りをしばらく続けた後、趙雲は槍を構えた。

「よし、今度は私だ」

「そっか…じゃあ早くやろうぜ」

趙雲と向き合ってエースは人差し指でチョイチョイと挑発する。

趙雲はそれに介さずに自分の間合いを保つ。

両者の間に静寂が流れる……

そして、静寂は破られる。

「……趙子龍……いざ参る！！」

号令と共に、勢いよくエースに槍を放つ。

エースは冷静に首だけを動かして紙一重でかわす。

しかし、それだけでは趙雲の追撃は止まらない。

「まだまだ！」

「うお！！」

趙雲は体制を立て直すでもなく、そのまま高速の突きを連続で放つ。

エースはそれを跳んだり、体を捻ったりと不規則な動きで避けていく。

趙雲は闘ったことの無いタイプ、強い戦闘力を持つエースを相手に仕留めきれずにいた。

「ふっ！　いつまで猫被ってるつもりですかな！！　早く本気を！！」

「ちぃ！！（どうする！？　ここで能力使う訳にゃあいかねえし…）」

エースは未だに自分のことを趙雲には知らせていない。

と言っても、エースは教えてもいいと思ったのだが、いきなりそんな人間離れした能力のことを慣れてない人に教えると色々と面倒なことが起きる。

能力については相手が真名を教えてくれるくらいになってからの方がいいとのこと。

それにより、エースは趙雲の様な猛者を純粋な体術で対処しなければならないのだ。

「ハイハイハイハイーー！！」

「…随分と骨の折れる注文をしてくれたな……あいつ等…」

自分を心配してくれる相手に毒づき、エースは拳を改めて固める。

趙雲はそれを見て、遂に本気を出すのかと意気込み、力を溜めるために突きを止めて距離を取る。

（……まぁ…できねえことはねえ……試してみるか…）

エースは深呼吸をして頭の中をクリーンにした。

要はリラックスしている。

「？」

力を入れたと思ったら今度は力を抜いて精神統一。

そんなエースの行動を趙雲は理解できなかった。

（…諦めた？……いや、一瞬とはいえ力を溜めた……思わず力んだのか…？）

趙雲は距離を保ちながら思慮する。

久しぶりに出会った能力未知数の強敵。

そういった者と出会ってきたこと自体は珍しいことではないが、目の前の男からは今までにない何かを感じていた。

（エースの性格からして臆することは有り得ない……だとしたら、やはり力んだのか……だとしたら一体何を……）

正体不明の強敵を相手に、いつも自身の武に誇りを抱く趙雲でさえもエースに突っ込んで行くことをためらわせた。

（力んだとしたら何かをしようとしたはず……駄目だ…分からん…）

趙雲の額に汗が滲む。

槍を握る手にも汗が染みだし、胸の鼓動も早くなっていくのを感じる。

そんな膠着状態が続いていると、エースは深く深呼吸を始めた。

「！　はぁぁぁぁ！！」

その一瞬の“動”を一つの隙だと見なした趙雲は自分の出せるハイスピードをリミッターを外して突っ込む。

気分が高揚している趙雲の意識も身体能力も興奮状態に陥っており、いつも以上の力を発揮させている。

今の趙雲の動きを見切れる者はどれくらいいるだろう。

休みを取っている凪達にも趙雲の姿がブレてしか見えてなかった。

「あああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

趙雲は神速と誇っても当然な突きをエースに放つ。

……しかし、その突きは静かに、アッサリと避けられた。

「まだまだぁ！」

避けられると予測していた趙雲はすぐに槍を止め、エースに叩きつける……

しかし…ここで趙雲の斜め上をいく事態が起こった。

「…突きからの薙ぎ払いと見せかけて右わき腹に突き」

エースが呟く。

「……え？」

微かに聞こえたエースの言葉に、彼女にしては珍しい間の抜けた声をあげてしまった。

既にモーションに入っていた動作は自分で止められる訳も無く、横一閃のフェイントからエースの右わき腹への突きを繰り出していた。

趙雲は咄嗟にそのコンビネーションを考えていた。

いつもより強くなった自分が考え得る最高の一手だと……

しかし、一つだけ予想とは違っていた。

それは……

「最後は……惜しかったな」

槍の切っ先は空を斬り、自分の腕をエースが掴んでいた。

そこからはもう勝負は決していた。

趙雲は全てを悟り、全身から力を抜いて一言。

「惜しかったなどと……嫌みにしか聞こえんがな…」

「へへ…そいつぁ悪いな」

趙雲は皮肉るが、対するエースも不敵に笑って返す。

しかし、趙雲の表情には悲壮感などなく、スカッとした爽快感が現れていた。

その様子が見て取れたエースは不敵な男の笑みから一変し、ニカッと笑って子供の様な笑顔を浮かべる。

「よし、メシにしようぜ」

「……ふふ…、そうするか」

こうしてまた、新たな一日が始まる。

朝のトレーニングを終えたエース達は自分達が寝ていた場所へと戻ってきた。

その姿を起きたばかりの戯志才と程イクはエース達を見つけて挨拶する。

「エース殿に星殿も、皆さんおはようございます」
「おはようございま～す」
「風、二度寝はしないように」

眠そうな相方を注意する戯志才にエースと趙雲は嬉々として近付く。

「相変わらずだな、程イクは」
「はぁ…見てるこっちも眠くなりそうです。あ、そういえば…」

苦笑する戯志才だが、彼女も気付いたことがあった。

「楽進殿達は？　一緒に行ったはずですけど…」
「そう言えばそうですね～…」

程イクも一緒になって探していると、趙雲は何事も無いかのように後ろを振り向いて顎で指す。

戯志才達がそこを覗くと……

「「「「……」」」」

息絶え絶えになって地面に倒れている。

「……ま…まぁ、いつものことですね…」

「はは…でも、こいつらも最初の頃よりはマシだぜ？」

他愛のない雑談を交わしながらあらかじめ用意しておいた朝食にありつく。

「私達も行くぞ」

「「「「は…は～い……」」」」

趙雲は四人の死人を引っ張っていく。

「そろそろ危ないですね」

「ですね～…」

朝飯を食べた直後の戯志才と程イクは悩まされていた。

今後の旅の路銀に…

「え？　この前のエースさんが稼いだ懸賞金はどうしたんですか？」
「それが……それと私達の元々蓄えていたのを合わせても…」
戯志才の言葉に全員が苦しい表情を浮かべる。
その中でも程イクと戯志才の雰囲気は一段と暗かった。
「最近、エース殿の捕える賊の懸賞金も少なくなっている……しかも食材、日常品の値段高騰……そろそろですね…」
「はい～…早めに身を固めないとなりませんね～」
「？　身を固めるって？」
二人が言っていることにエースは疑問を持ち、他の皆も首を傾げる。
聞きたそうにしていると、戯志才達は説明を始める。
「村にとって賊の出現はとても脅威なことなのは知ってますよね？」
「ええ、賊がいつ進行してもおかしくないですもんね？」
「そうです。そんな賊の懸賞を街は下げてる…下げざるを得ない所まできてるのです」
そこまで言われて大体理解できた。
単純な言い方で言えば不況なのだ。
「ですが、さらに商品の価値の高騰ですね～……黄巾党によって商人が襲われて品物が碌に街に届かず、限られた品物で商売しなければなくなり、値段を上げるしかないのです」
「ですが、そんなことしたら買えない人が……」

「はい、楽進ちゃんの言う通り、お金が無い人はその場しのぎの仕事で毎日を生きていくか、餓死するか、はたまた生きるために黄巾党になるといった三通りがありますね～」

賊の存在だけで多大な被害が広がる。

それによって世間にインフレが起こる。

だが、貨幣の価値は変わらず、変わったのは商品の価値であるのだから、これは大問題なのである。

そういった流れで黄巾党が増えているのが、この大陸の現状なのだ。

それを悟った面々に軍師二人が答える。

「ですから、一刻も早い打開策を立案し、施行させなければならないのです」

戯志才の一言に沙和を始め、エースまでも感心した。

やはり軍師見習いといっても実際にその実力の一角を見せられると感心する。

「ですが、誰でもいいと言う話ではないのです。時間は今でも経っているのですから、早めに有力な諸侯を見つけて取り入れてもらうのが一番の近道なのですよ～」

その一言に全員が納得し、自分の道を考えさせられる。

自分はこれから何がしたいのか…これからどんなことになっていく

のか…などといった思考が頭をよぎる。

エースはもうやることは決めていたから考えてはいなかった。

しかし、他の面子にとってはそれは死活問題であった。

というのも、エース以外の皆はこの世界の地で生まれ、育ったのだから当然である。

「「「「「「「「……」」」」」」」」

「……」

急に静かになってしまった雰囲気にエースは自分の思っていることを言う。

「まぁ……なんだ……今悩んでも仕方ねえだろ？　今は探すべき奴を探すのが先決。考えるのは後、違うか？」

その一言に全員はエースを見、やがてフッと笑ってしまう。

「そう…ですね…少し早計でしたね…」

「ふむ……これもこの時代に対する焦燥か……」

戯志才と趙雲は自分達の早とちりをエースに指摘され、少し恥ずかしそうに苦笑する。

それに続いて周りも自分の早とちりに気付き、一緒に苦笑する。

そんな状況を見てエースは状況維持のために一つ案を出す。

「よし、じゃあすべきことが決まったってことで、これからの食料を買っちまおうぜ」
「…食料……ですか？」
「あぁ、このまま金をチマチマと節約するより一気に買っちまおうぜ」
「うーん…そうすると結構荷物が増えて重くなるんちゃう？」
「いや、案外それはいいと思いますよ～？」
「え？　本当？」

エース自身も咄嗟に言ったことだったが、その案に意外にも程イクが賛成する。

「ここから先、治安も悪くなってくると思うので、部外者である私達が他の村に入るのが難しくなりそうですからね～。しばらくは買い物できなくなってしまう可能性も出てくるかと…」
「なるほど…それじゃあ荷物の心配だけを考えれば…やっぱりここで一気に買った方がいいってことですね？」
「程普ちゃん正解です。と言っても、商品の高騰もありますので、荷物量は心配無いかと…」

程イクの言葉に戯志才も頷く。

それを確認したエースは急に立ち上がる。

急に立ち上がったエースに皆は、どうしたのかと思いながら視線を追う。

すると、そこには良い笑顔のエースがいた。

「んじゃ、おれが行ってもいいか？」

「……」

すっごい、本っ当～～～～に良い笑顔でキラキラ輝いているエースがそこにいた。

エース達はこの二日間あまり人とは会わず、時々出くわす山賊くらいにしか会っていない。

そのため、エースも態度にも口にも出さないが、心の底では少し参っていた。

好奇心旺盛な彼にとって退屈はまさに敵である。

そんな中、やっと見つけた街。

上手い食べ物、見た事も無い食べ物などといったまだ見ぬ楽しみが一気に湧いてきた。

あまり滞在しないことは承知の上だが……

とにかく、エースは一刻も早く山という環境から出たいだけなのだ。

それを知ってか知らずか、凪がオズオズと釘を刺しておく。

「あの…エース様…何も遊びに行く訳じゃないんですが…」

「分かってるよ。ほんの少し気晴らしにいくだけだ」

「かぁ…分かってるならいいのですが……」

とは言ってもどこか心配そうな凪。それは凪だけではなく、鈴仙達もそうであった。

普段はしっかりしていて頼りにはなるのだが、今のエースを見てると、我が子を初めてのお使いに出す母親の心境を味わっていた。とても極端な例だが…

「それならば風が付いてくのですよ～」

そこへ、目を細めた程イクが挙手し、エースの同行を願い出た。

「程イクさんもですか？」

「はい～。お兄さんを一人で行かせるのに心配してるのは皆さん共通のことですし～」

「おいおい。なんでおれに行かすのが不安なんだよ？」

「皆さんはお兄さんに危険が来ないか心配なのですよ～」

「……」

程イクの一言にエースは納得できない。

しかし、その一言は華麗にスルーされてしまう。

何だか腑に落ちないエースだったが、あまり気にしないことにした。

また、程イクの同行に全員が納得し、後の者はエースの買い物の間に身支度を整える用意をすることになった。

「街まではどれくらいなんだ？」
「そうですね～…風の記憶が正しければあともう少しですね～…」

現在、エースと程イクは街に向かうために山を下りている。

エース達は先を急いでいるため、街に寄ることはルート上で考えれば無いのだけれど。

「それにしても、結構遠いな。街は……見えてきたけど豆粒ぐれえだな」
「ですね～…ふぅ…」

程イクは僅かに小さな溜息を吐く。

エースはそれに敏に反応する。

「どうした？　疲れたか？」
「いえいえ、ただ、あんなに小さな街を見てちょっと辟易しただけですから」
「ああ、そういうことか」

確かにちっさい軍師の卵にとって山を下りることは結構体力を使うしな……

登山家にとって一番辛いのは登りよりも下りることだって聞くし…

そう思ったエースは程イクの前に来て…

「ほれ」

一言だけ言ってしゃがみこむ。

「…どうしましたか～？」

「なに、お前疲れたのかと思ってな」

普通に答えるエースに程イクは相変わらず目を細めて答える。

「お気持ちは嬉しいのですが、そうするとお兄さんが疲れるのでは？」

「な訳ねえだろ」

鼻を鳴らしながら答えるエースに程イクは少しからかってやろうと思ったのか、ニヤニヤと笑って返す。

「そうですか～、お兄さんは風の温もりを感じたいのですか～？」

「…はい？」

程イクの含み笑いにエースは首を傾げる。

「確かにお兄さんは男ですから、女の子に惹かれるのは当然といえば当然ですね～…」

「……」

「それにしてもお兄さんも結構物好きですね～」

「……？」

「自分で認めてしまうのもちょっと複雑なんですが、風は結構子供

っぽいと言われてしまうのですよ～」
「そりゃ…まぁ…ご愁傷様」
「……お兄さんは風の言いたいこと理解してますか？」

からかってるつもりの程イクだったが、エースの素っ気ない反応を見てるにつれて程イクは自分の言葉が通じてるか心配になった。

聞かれたエースはしばらく顎を手でつまみ、首を傾げて一言。

「まあ、おめえが小さいのは個性だってことだ」
「……」

やっぱり伝わってなかった。

それどころか強烈なカウンターを喰らった気分だった。

「そりゃ小さいからってそのまま体力が左右されることもあるけどよ、これから鍛えたりすれば何とかなるって」
「……」

しかも全然見当違いだった。

程イクは溜息を洩らすのを見て、エースは首を傾げる。

やがて程イクも諦めてエースの背中にしがみつく。

「お、その気になったか」
「……お兄さんには邪心も、欲も何も無いということが分かったので、安心しただけです」

エースは頭に疑問符を浮かべながらも、とりあえず山を再び下ろうとした

その時……

「おい……兄ちゃん達……」

突然、知らない声が聞こえた。

エース達は山を下りようとした足を止め、声の方向を向いてみると一人、身をやつした男が包丁を持って佇んでいた。

「悪いが……金目の物を置いていきな」

包丁をチラつかせて警告に似た脅迫を試みるが、当然の様にエースはそれを一蹴する。

「悪いな…おれ達も金は必要なんでな」

「……そうか」

エースの答えに男が小さく呟くと、周りからゾロゾロと大人数で同じ様な風貌の男達が出てきた。

髪はボサボサ、衣服はボロボロの一団がエースの周りを囲んでいた。

「もう一度言う兄ちゃん……金を置いて行きな」

男は最終警告と言わんばかりに包丁をエースに向ける。

周りの男達も包丁を手に取る。

それに動揺することもなく、エースは男から目を離さない様にしながら背中にしがみつく程イクに耳打ちする。

「しっかりしがみついてろ」

「…（コク）」

程イクは少し動揺していまうが、すぐに取り繕って頷く。

それを確認し、程イクの捕まる手が強くなったのを感触で確かめると…

「おい」

「？」

「おれから目を離すなよ？」

そう言った瞬間、エースは男の方へ走り、一気に距離を詰めて男の懐に入った。

「…！」

咄嗟のことで反応できていない男にエースは一言。

「おせえ」

エースは男の鳩尾にパンチをかまして悶絶させる。

「…は……ぁ…」

「「この…！」」

エースが男が崩れるのを見て振り向くと、二人の男が襲いかかってきた。

しかし、エースは驚異的な跳躍で男達の攻撃をかわす。

「「！！」」

かわされた男達は勢いお殺せずに前のめりになる。

そして、エースは二人の男の頭に両足を乗せて着地する。

すると、前のめりになっていた男達は顔から地面に叩きつけられる訳で…

「「べふ…！」」

男二人も変な声を上げて倒れる。

「くそっ！」

もう一人の男がエースの背後から包丁を突きたててくる。

背中には程イクがしがみついてるのを思い、エースはマズいと思った。

背中の程イクの衣服を掴んで一言叫んだ。

「わりい！　程イク！！」

「え？…ひゃう！！」

一瞬、何を言ってるのかと思ったら、急に無理矢理引きはがされて上に放り投げられた。

程イクが上空に飛ばされた直後、男の包丁がエースの上着を貫いた。

しかし、それは上着だけだった。

「おいおい、おれの仲間まで巻き込むなよ」

「なっ!?」

瞬時に上着を脱いだエースは上着を力任せに引っ張って包丁を奪い取る。

「ふっ」

「があ!」

短い呼吸と共にエースの回し蹴りが男の顔に当たり、男が崩れる。

「おっと」

「……!」

それと同時に投げた程イクを両手デキャッチすると、程イクは少し声が漏れた。

「くっ…!」

他の男達もエースに襲いかかろうとするも……

「止めときな」

『『『!!!』』』

エースの睨みと警告によって全員の動きが止まる。

男達全員が動けなくなったのと先程倒した四人も起きるのを確認すると、エースは告げる。

「これ以上の闘いはお互いにとって何の得もねえ。ここは引いておきな」

『『『……』』』

エースは程イクを下ろし、上着で奪った包丁を拾ってしばらく観察する。

エースは一見すれば隙だらけだというのに男達は攻めようともしない。

動けない。

男達はエースの実力の一端を目にしただけで戦意はほとんど喪失してしまっていた。

「なるほどな…」

何か呟いた後、包丁の観察を終えたエースは男達の方に視線を向ける。

「お前等……山賊になったばかりだろ？」

『『『！！！』』』

エースの指摘に男達がざわめく。

その反応から、エースの言っていることが真実だということが分かる。

「さっきの闘いもまるでなっちゃいねえ。動きも中途半端で注意力も散漫だし。何より武器も包丁ってのもおかしなもんだぜ」

エースが確かめる様に淡々と話していく。

そして、その反応を観察して推測を確信に変える。

「なるほど～、この人達もこの時代の被害者なのですね～」

先程から成り行きを見ていた程イクが会話に入ってくる。

それに、彼女は確認しておきたいことがあった。

「それで、お兄さんはこの人達をどうするのですか？」

「どうするって？」

「この人達はどんな理由があれ、山賊になったのですからこれから向かう街の人に突き出すことも可能でしょうね～」

程イクの言葉を聞いた時、男達の体が震え、目から光が消えていた。

ただ自分達が生きていきたいだけなのに…

生きる方法が思いつかなかった故に追い剥ぎになった。

ただ、普通に生きていきたいだけだったのに……

国に捕まれば、斬首は免れない。

まだ、死にたくない……

男達はそれしか考えられなくなっていた。

もはや、正気を保ってるのがやっとの男達の前で、エースは少しばかり考えた。

腕を組んでから「よし」と声を上げた。

エースが悩んだ時間はたったの１０秒くらい。

しかし、男達にとってその１０秒は自分達の一生を決める濃密で悠久な時間に思えた。

そして、エースは告げた。

「ここから登る道、見えるか？」

何か見当違いな話題を……

『『『……』』』

「道、見えるのか見えねえのかどっちだ？」

「あ…あぁ……あの道だろ？」

訳も分からない話題に困惑していた男達の一人が我を思い出してエースの指した道を指差す。

「そうだ、そこを登っていけば五人、おれの知り合いがいるから。

そこで待ってろ」
「あ……あの……」
「大丈夫だ。そいつらも全員お前等より強いけどよ、エースの紹介とでも言っておけば大丈夫」
「いや、そういうことじゃなくて…」

マイペースに話すエースに男達が苦戦しているが、エースもお構いなしに話していく。

「お前等は食いモンとかあんのか？　他の奴等も」
「えっと……とりあえず俺達全員分の…一日分が……」
「よし、だったらそれ全部持っておれの知り合いと合流しておれ達の帰りを待ってろ。いいな？」
「いや…何を…」
「んじゃ、行こうぜ程イク」
「分かったのです～」

勝手に話を進めたエースは呆然とする男達を置いて山を下って行った。

「お兄さん」
「ん？」
「一ついいですか？」
「何を？」

しばらくまた程イクをおぶって山を下りていると、背中越しで程イクが問いかけてきた。

「お兄さんは……最近噂の“灼熱の御遣い”なのですか？」

それを聞いたエースは少し表情が歪んだ。

「……背中のドクロを見たのか？」

「はい～。上着を脱いだ時にチラッと…」

「う～ん…そうか…」

エースはまたしても鈴仙達との約束を破ってしまったことにバツが悪そうに頭を掻く。

それに対して程イクは話を続ける。

「案外アッサリと認めるんですね～」

「まあ…お前に今更隠してもしょうがねえしな…」

「左様ですか。何で黙っていたんですか？」

「ああ、それは鈴仙達が黙ってた方がいいって……」

「そですか」

「それと一つ頼んでいいか？」

「はい？」

エースは険しい道を軽快に跳び越えながら程イクに言う。

「ちょっとな、趙雲達にも黙っててほしいんだ。これ以上、鈴仙達との約束は破りたくねえ」

「あらら……そうですか……」

程イクはしばらく考え、何かを閃いた。

「それなら……風からもお願いがあるので聞いていただければお力になりますよ？」
「……はは…お前は悪魔か？」
「いえいえ、軍師見習いですよ」
「そうかよ……」

エースは弱みを握られ、できる決断は『はい』か『イエス』のどっちかしかなかった。

「分かったよ……とりあえず言ってみろ」
「ふふ……それではですね～……」

うなだれたエースに満足したのか程イクは口元に手を置いて笑いながら要求を一つ押し付けた……

「はは…意外と安かったな」
「そうですね～。この辺境の街にはまだ不況も浸透してなかったですし…運が良かったですね～」
「まったくだ。これであいつ等の小言を聞かされずに済むぜ」

笑いながら言うエースだったが、ここで程イクに聞いてみる。

「ていうか……さっきの要求で聞きてえことがあるんだけどいいか？」

「はい？　なんでしょうか？」

「いや、なんていうか……あんなのでいいのか？」

「はい。風はあれ以上もあれ以下のことは望んではないので」

「ふぅん……まあいいけどな」

そんな話をしている間に道の向こうから兎の耳がピョコっと現れた。

「お、兎か？」

「いいえ、あれは程普ちゃんですよ」

ヤンワリとしたツッコミに「あ、そっか」と笑いを上げて速度を上げる。

「おーい！　待ったかー！！」

エースはできるだけ大きい声を上げて凪達に呼びかける。

その呼びかけに気付いた面々はエース達に視線を向ける。

「「「「「……」」」」」

呼ばれた面々も何だか微妙な面持ちである。

それもそのはず、凪達の近くには見知らぬ男達が居座っていたのだから。

男達を見つけたエースはさわやかに手を振る。

「お前等も早かったな。ほれ見ろ。あの街は何か安かったからこんなに買えたぜ？」

「あの街が都から離れていたのが幸いしたのです～」

「は…はぁ……」

「よーし！　んじゃ飯だ！」

「あ……もうですか？」

ここでエースは鈴仙達に向き合う。

「今日はこいつ等の分も頼むわ」

「「「「「はぁっ！？」」」」」

エースが男達に指差すと、凪達はもちろん、男達も驚愕した。

何言ってんだこの人！？　こんな時代にそんな、他人を気遣う余裕なんてないだろう！！

皆がそう思ったに違いない。

「いや、エース殿…聞きたいことが色々とあるので始めに聞いておきます……この人達は一体……」

「拾った」

「いや、そんな捨て犬みたいな……」

どこまでいってもマイペースなエースの話からは要領を得ることができないらしく、全員が程イクにアイコンタクトを送る。

それに対して程イクはというと……

「ぐぅ～…」
「「「「「「……」」」」」」
逃げた。
とりあえずは男達の正体は保留にしておくとして…
「おぉー！　お前等も食料結構あんじゃねーか!?」
「へ…へい…」
「……どうなってるのー？」
「「「「さぁ…」」」」
本当に訳が分からない。
なんか釈然としない気持ちのまま、昼食をとることになった。
「なるほど…要するに、お前等は元・国の兵だったんだな？」
「へい…兵とは言っても伝令兵や衛生兵とかなんで…」
「なるほど…落ち延びた兵か…」
現在はエース達と男達…元軍人と飯を突いていた。
その間に色んな情報を聞き出していた。

その最中に男達がエース達を襲ったと聞いた時、戦闘態勢に入った趙雲達を止めたのは記憶に新しい。

そんな訳で、警戒の薄れる食事にまで場を誘導したエースの判断は最良だったといえる。

そして、少し場が落ち着いている所で趙雲は本題に入る。

「それで、エースはこの者達をどうする気なのだ？」

趙雲がエースの真意に踏みこむ発言に全員の意識がエースに向く。

それと同時に空気がトゲトゲしくなったのだが、エースはそんなこと気にせずに飯を頬張っていく。

気にしないどころかかとんでもないことを言いだした。

「どうするっておめえ……こいつ等仲間にしようと思ってな」

ブーーーーーーーーーーー！！！

程イク、趙雲、戯志才以外の全員が口に含んでた物を吐き出した。

「うわ！　きたねっ！！　何してんだお前等！」

「ゲホッ！　ゴホッ！……それはこっちの台詞なんだけど…」

鈴仙他、三人組もむせる中、エースは飛んできた食べカスを拭きながら淡々と答える。

「そりゃおめえ、そろそろおれ達だけでの旅も限界がきてるし、こっからは人手も多い方が便利かと思ってよ」
「たしかにそれも一理はありますが……」
「にしても…全部で２０人くらいやで？　食事代とかどないすんの？」
「まぁ…おれが何とかするさ」
「何とかって……」

気楽に答えるエースに真桜も他の皆も頭を抱える。

今でも結構危なめなのに、更に人が増えていくのも問題である。

しかし、そう言ったところで退く様なエースではない。

どうやって説得するか。

そんな解決法も見つからないことに頭を悩ませてると……

「あの～…」

置いてけぼりになっていた男の一人がエースに遠慮がちに聞いてくる。

それに反応してエース達は男に視線を向ける。

その視線に一瞬たじろぐも、すぐに立て直して問う。

「話を聞く限りじゃそこの兄ちゃんが俺達の身柄を……預けるみたいな…」
「その通りだけど、何か問題でも？」

「いや、その前に一つ聞いていいですか？」
「あ？」
エースが耳を傾けるのを確認すると、男は確かめる様に聞いてきた。
最初はその質問に目を丸くしたエースだったが、すぐにそれは笑顔になる。
「そんな深い理由はねえよ。さっき言った様に少しお前等に手伝ってもらいてえことがあるのも本当だ。それ以外の理由としたら……」
「？」
エースは少し考え、伝える言葉を選んで話す。
「おれとお前等は似たモン同士だからだな」
「俺達と……兄ちゃんが？」
「ああ」
エースは食べ終わった食器を片づけながら続ける。
「世間から見捨てられ、路頭に迷ってる所なんかが特にな…」
『『『……』』』
「だから分かるもんもある」
『『『？』』』
「お前等……仲間が欲しいんだよな？」
『『『！！』』』
優しい笑みを浮かべて言われた言葉に男達は体をビクッと震わせる。

それを見たエースはそのまま続ける。

「何となくだけどよ、お前等を見てたら昔を思い出しちまってよ…」

『『『……』』』

「傷の舐め合いって取られるかもしれねえけどよ、そういう奴見ると他人には思えなくてよ」

「に…兄ちゃん…」

エースの言葉に男達は涙目になっている。

今まで国のために働いてきたのに、金が無くなってきたら真っ先に切り捨てられた。

別の働き手を探してもその場しのぎにしかならない。

最近では賞金稼ぎくらいしかちゃんとした金も入らない。

しかし、戦闘不向き３０人集まった所で賊には勝てない。

まさに、八方塞がりであった。

しかし、そんな自分達に温かい声をかけてくれた。

「どうする？　ここで別れるか、おれに付いて来て一緒に闘うか、決めるのはお前達の自由だ」

それを聞いた時、男は決めた。

自分達はまだ人だ。

誰からも見向きもされない小石なんかじゃない…

何も考えない獣になりたくない！

「…兄ちゃん」

「…」

何も言わないエースの前で男はひざまづいて土下座をする。

それに倣って他の男達も同じ様に頭を下げる。

それは男全員が同じ決意をしたと表していた。

「…俺達は一度は命を諦め、生きるためには何でもやると心に決めた…つもりだった」

「……」

「だけど、俺達は兄ちゃんの言葉に揺さ振られる弱い半端者の集まりだ」

「だろうな」

エースは確かに男達を半端者だということを否定しなかった。

されど軽蔑もせず

男達は男達なりに生きる道を見つけたこその山賊行為。

無責任に答えれば仕方のないこと。

だが、それが本人の望んだ道かと言えば話は別である。

本人が納得しなければ、いずれなにもかもが狂う。

エースとしては自分の同類がそんな末路を辿るのは極力避けたいとも思っていた。

「だけど、もし…もし許されるなら…あんたの下につきてえ…」

そんなエースが男達を見捨てるだろうか？

「…ふ」

エースが…仲間を見捨てるだろうか？

「お前等……」

ゆっくりと男達の前にまで歩み寄って言う。

「これからは強くなってもらうからな」

そう言って荷物をまとめるエースの背中を男達はしっかりと目に焼き付ける。

そして、男達は心の中で一礼する。

千以上の意味を込めて……

そんな光景を今まで凪達は不思議な光景を見ているようだった。

上に立つ者として恥じぬ器量。

人を惹きつける魅力。

圧倒的な力を以て敵を抑える力とは別の強さ。

その時……

「！！」

程イクの頭の中に不思議なヴィジョンが浮かんできた。

それはどこかで見た光景。

しかし、はっきりとは覚えていない霧の様だった。

ただ、顔も分からない誰かが燃えて、太陽となる光景。

覚えてるのはこれだけだが、なぜ今思い出したのか。

「皆を照らす日輪……ですか……」

この時、程イクの心が何かと共鳴し、これからの彼女の運命を決めるターニングポイントになるとは誰も予想できないことだったのは言うまでも無いだろう。

この後、エースは新しく加わった部下の世話を自分がするというこ

とで、いつも料理を作ってくれる鈴仙やその他の皆に頭を下げて許してもらった。

今まで旅をしてきて中で一番我情けないと思った時だったという。

そして、そのおかげでその晩は断食を余儀なくされた……

そして

別れの日がやってきた……

「もう行っちまうのか」

「あぁ…お主達と別れるのはとても名残惜しいが、ここは私の信念を優先させてもらう」

「私もです。エース殿との旅は……まぁ…刺激的でした…」

「あぁ、それはもう忘れてくれ。ぶり返す度に鈴仙がうるさくて…」

言った後、エースは慌てて自分の口を塞ぐが、時すでに遅し。

腕を組んだ鈴仙が後ろで般若の形相でエースに凄んでいた。

「わたしが……何ですか…？」

「いや……ははは……」

顔を引き攣らせるエースに鈴仙は表情を一変させ、頬を膨らませてそっぽを向く。

「いいよ別に、どうせわたしは口うるさいですよーだ」

「んなことねえって…お前がいておれもこいつ等も助かったんだからよ」

『『『はい！　程普の姐さん！』』』

そう言ってエースは後方で控えている勧誘した仲間の男達を指差す。

それに合わせて男達は全員で頭を下げる。

エースが勧誘してから数日の間にすっかり長年連れ添った様な雰囲気と風貌を醸し出しているのは触れないでほしい。

そんなエースと男達を見て少し頬が緩む。

しかし、そんな様子を悟られない様に聞いてみる。

「じゃあ……わたしがいないと……困るんだね？」

少し手をモジモジさせて聞いた言葉にエースは間髪入れずに答える。

「それはもう困る！！　これからもいてくれれば助かるからこの通り！！」

必死に手を合わせての懇願に鈴仙は少し顔を赤くさせながら腕を組む。

「そ…それなら、ず……ずっと傍にいてあげないことも……ない…よ…？／／／」

少し途切れ途切れの台詞にエースは頭を上げて鈴仙の肩に手を置く。

「そうかそうか！　そう言ってくれるとおれも嬉しいぜ！！」

笑顔のエースを見て、鈴仙は今の所はそれで良しと思い、今度は眩しい笑顔と共に答える。

「よかった」

エースもそれを見て満面の笑みを浮かべる。

その様子を見ていた男達は色々と思ったことがあった。

「……程普の姐さんってやっぱりアニキのこと……」

「好きなんだろうなぁ……」

「あぁ……やっぱりか…何か程普の姐さん…普段も可愛くて良い人なのにアニキを前にすると恥ずかしがったりと更に可愛くなるからなぁ…」

「いいなぁ……あんな人に想ってもらえるなんて……」

「しかしなぁ……それに“本気で”気付かないアニキはどうかと……」

「それに……程普の姐さんだけでなく……」

男達は凪を見る。

すると、そこには複雑そうな表情の凪がエースを見つめていた。

『『『……（とりあえず頑張れとしか言えません…姐さん達……）』』』

ちなみに、エースの部下達はエースをアニキ、凪達を○○姐さんと呼ぶようになっていた。

そして、凪と鈴仙がエースに……ということも二人の態度からして丸分かりである。

もちろん、エースの恋愛経験の弱さも……

「おやおや、私達と別れる間際に随分と妬ける物を見せてくれるな」
「エ…エース殿と程普殿、そして楽進殿が三人で…ぐほぉ！」

趙雲は状況がややこしくなる前に、戯志才に軽い手刀を喰らわせた。

そんな光景を見たエースは趙雲の言葉の意味が分かっておらずに首を捻る。

鈴仙と凪は危うく戯志才の妄想の主人公にされる直前だったということで顔の色が普段の赤よりも濃い赤になっている。

その他の人は全員苦笑している。

「…エース」
「ん？」

趙雲は崩れかけた戯志才を脇に抱え、エースに向き直る。

「たった数日だったが本当に楽しかった。お主と会えたことで自分の未熟さを知り、また強くなれそうだ」
「そうか……そいつは何よりだな」
「お前さえ良ければ私と一緒に来ないか？　お前にならいざという時に安心して背中を預けられる」
エースもこの数日をしみじみと思い出し、感慨深くなるも、やっぱり答えは変わらなかった。
「おれはいいや。おれにはおれの、お前達にはお前達の道があるからな」
「……そうか…見事にフラれてしまったな」
そう言うが、趙雲の笑みは消えない。
再び趙雲はエースに伝える。
「エース」
「何だ？」
「次に会う時は……味方であることを願っているぞ…」
不敵に笑って握手を求めてくる趙雲に、当然ながらエースも不敵な笑みで返す。
「おれもだ」
そう言って握手を二人で交わす。
二人の握手はすぐに終わった。

しかし、二人の表情はスカッと爽やかだった。

まるで別れを感じさせないほど…また再会することが分かっているかの様に…

短い時間で多くの言葉以上の何かを語りあった二人にもはや言葉などいらなかった。

「戯志才と程イクも、お前達も気を付けてな」
「は…はい…エース殿も……おげん…きで…」
「稟ちゃん。しばらくお腹をさすってはどうでしょうか？」
「そう…ですね…」

戯志才は程イクの忠告に従ってお腹をさすっている間、趙雲は凪達とも挨拶をしたらしく、荷物を持っていた。

それに続いて戯志才も凪達と慌てて別れの挨拶を交わす。

そんなこんなでやっと一段落がついた。

「それでは…」
「またいずれ……」
「お元気で～……」

こうして趙雲達は己の道のためにエースと別れる。

出会いがあれば別れもある。

されど、別れもあれば出会いもいつか再び……

互いにそう信じて別れた。

次に会う時を心待ちにして……

エース達の珍道中は続く……

「行ったな」

「うん。行ったね」

「行きましたね」

「中々面白い人達やったな」

「本当なの～」

趙雲達が地平線で見えなくなるまで見送った後、エース達も自分の旅を続ける。

だが……

その前に……

「…今一つ気になることがある気がするんだが…」

「……奇遇だね…」

「私達もそうなんです……」

エース達には気がかりが一つあった。

それは……

「……ぐぅ～」

「「「「「なぜ？」」」」」

皆のすぐ隣で寝る居眠り不思議少女のことだった。

「程イク。おーい」

「おぉぅ！？　女の子をそんな強引に起こすなんて…お兄さんもお好きですね～」

エースは寝ている程イクを起こし、冗談はスルーして聞きたいことだけ聞く。

「お前……趙雲達と行かなくていいのか？」

「ん～……もっと冗談らしい冗談じゃないと伝わらないのですか～？」

「？？」

なんか噛み合ってない会話にエースに頭を捻るので、凪達が話に加わることにした。

なぜここにいるのか、戯志才達との旅の途中ではなかったのか、など色々と聞きたかった。

「あの…程イクちゃんは趙雲さんと行かないのですか？」
「あ～…そんなことでしたか～」
「そんなことって…」
「でも、これでいいのですよ～。稟ちゃんには前もって言ってありますので」
「え～っと……つまり程イクちゃんは元から沙和達についてくるつもりだったのー？」

沙和の疑問に程イクは曖昧に答える。

「まぁ～……最初から決めてた訳ではなくてですね～。風がこの旅の途中で少し興味をそそられる物がありまして～。それを間近で見たくなりまして」
「興味？」

訳が分からないといった凪達だったが、すぐにその謎は氷解した。

「よいしょ」
「お？」
「「……」」
「「あぁ…」」

程イクは何事もない様にエースの背中におぶさる。

エースはその真意が分かってないようだったが、後の四人は……何かを悟ったという感じだった。

その中でも凪と鈴仙の視線がきついのは気のせいであってほしい。

部下達は二人の姐から醸し出されるオーラにビビって近寄る所か泣くしかなかった。

「つまりお前はおれ達と来るってことか？」

そんな異次元空間の様な空間の中でエースは空気を読み切れず、不用意に核心をついた。

「はい～。なんだかお兄さんに付いて行けば色々と面白そうでしたし、お供させていただこうかと思っているのですよ～」

「「は？」」

「そっか。お前が決めたならそれで構わねえよ？」

「「はぁっ！？」」

「それじゃあ、これから風の真名を許すのですよ。これからは風と呼んでください」

「分かった！　よろしくな風！！」

空気ブレイカーの名は伊達じゃない。

二人のマイペースは着々と事態を一転、二転と変えていく。

周りの人も事態に追いつけていない。

そして、誰も止めないまま二人の話は終わり、衝撃が今頃になって

襲う。

「という訳で、風も今日から仲間になったからよろしくしてやれよ？」

「よろしくお願いします～」

「「はあああああああぁぁぁ！？」」

まだまだ彼女達の受難は続きそうだ。

# 先遣隊・曹操軍（前書き）

やっと本編に入る……ところです！

長かった……最初の第一話はラーメン屋の中から更新したのを覚えている…ホロリ…

そんな話はどうでもいいとして、それではお楽しみください！　どうぞ！！

凄いハイペースで程イク…風の仲間入りが決まってから一夜明けていた。

いつもの様に凪、鈴仙、エースで修業をしていた。

しばらくの間、趙雲達と旅をしてきたので若干の寂しさはあるのだが……

それでも、修業の激しさに影響することは無く、むしろ勢いが強くなったと実際に見て分かる。

そして、エースは真名を許してくれた風のために見せたい物があるということで早朝の凪と鈴仙の合同修業を見せることにした。

実際、準備運動する凪と鈴仙の他にギャラリーとして風のついでに真桜と沙和も叩き起こした。

その証拠に三人はとても眠そうである。

「なあ兄さん……なんで今日だけ起こすんや?」

「沙和…すごい眠いの～…」

「ぐぅ～…」

凪と鈴仙以外の面子は必死に眠気を我慢している様子。

そんな彼女達に素振りで謝ってから言う。

「悪いな。今日は少し力入れるからよ……間違えて眠ってるお前等を燃やすかもしんなかったからな」

とても良い笑顔で言い切った。

「「……」」

「およ～？」

それを聞いた真桜達は眠そうな表情を一変させ、蒼白にして顔も引き攣る。

何も知らない風は面白い顔をしている二人を見て、これからのことに少し興味を持った様子である。

そして、戦う当の本人はというと……

「「（（（（（；゜Д゜））））ガクガクブルブル」」

聞いてもいない突然のムチャ振りに恐怖していた。

それを見たエースは元より手加減するつもりだったから、とりあえず二人を安心させる。

「心配すんな。火加減は調整すっから。そんな大技使うつもりもねえしな」

「「……」」

それを聞いて少しは安心したようだが、それでも不安は拭えない。

普段、能力は使わないという縛りのまま二人同時（時々五人）に相手してもらって一度も良い結果を出せた試しが無い。

それなのに、そんな状況で能力を使うなど最早イジメである。

そして、問題は更に別の所である。

今まで彼女達が見てきたエースの技はというと、『陽炎』『火銃』『炎上網』だけである。

正直、そこまでならまだなんとかなると思うだろう。

しかし、彼女達にとってそんな目測を見直させる技をもう一つ知っていた。

『火拳』

鈴仙が初めて見た大技であり、正直、忘れたくても忘れられないインパクトがあった。

百もくだらない賊を一瞬で燃やし尽くすなど、その威力は計り知れない。

しかもその時のが手加減したというのだから、一体どんだけ～…と言いたくなる。

一回、凪達に話したらもれなく全員が顔を引き攣らせていた。

そんなことがあり、エースとは能力を用いての闘いに未知なる恐怖を覚えていたが、まさか今になってやらされるとは悪夢もいい所で

ある。

「そういや、ちゃんとした闘いって初めてだよな？」
「「いやいや、今までので充分なんですが…」」
「よし！　準備はいいか！？」
「ちょっ！　作戦を…！」

急かされるのに焦りながら凪は鈴仙を呼んで作戦会議をする。

「よし、それじゃあ練習通りにいくのね？」
「ああ、好機は一回っきり。外したら終わりだ。上手くやってほしい」
「うん」

少しの会話だけ済ませてエースに向き合う。

それを確認したエースは構えも見せない。

「もういいな？」
「「はい！！」」
「それじゃあ……行くぜ！」

そう言ってエースは体を炎に変えて二人に突っ込む。

「陽炎！！」

突っ込んで来る火の玉を左右に分かれて逃れる。

その途中で二人は考えていた。

（エースさんの陽炎…これは受けきれないけど…）
（攻撃後には必ず隙が生まれる！）

凪と鈴仙の考えは的中し、突進してきたエースは炎化を解く。

それを見計らって二人はエースとの距離を挟み打ちの要領で左右から詰める。

「ふっ！」
「はっ！」

その後、鈴仙は跳び回し蹴りを腹部に、凪はパンチを顔に向ける。

しかし、エースはそれらを涼しい顔で腕でガードする。

受けたエースは口笛をならして呟く。

「こりゃあ効くなぁ～」
「「冗談！」」

二人は掴まれてる手と足を力でふりほどいてまた左右に分かれる。

（なるほど…固まって狙われない様にするためか…）

エースは左右の二人を見て冷静に分析する。

（しかもこいつ等すぐに反撃できるように威力をそれなりに抜いてスピードを重視しているか…）

しかし、スピードを上げても目で追えるからそれも付け焼刃だとい

うことが分かる。

スピードを気にしてパワーが散漫しているのがバレバレだ。

（だけど、こいつらも分かってるはずなんだがな……）

だからこそ分からなかった。

二人がそんな凡ミスをするとは思えなかったからだ。

何か作戦があるとは思うのだが、それが何なのかも検討もつかない。

「「はぁっ！」」

「！　おっと！」

物思いにふけると一杯喰わされるかもしれない。

そう思ってエースは再び戦闘に集中する。

「……」

「あ、やっぱり固まっとる」

「風ちゃ～ん」
「…はい…」

エース達の修業を初めて目の当たりにした風は口をまん丸にして呆然としている。

結構珍しい光景であり、眺めていたかったが、真桜達としてはエースの警告を聞いた後だったから一応、正気にもどしておいた。

「どや？　驚いたやろ？」
「はい……まさか急にお兄さんが燃えるなんて思わなかったのです……なるほど～、噂は本当でしたか～」
「誰も信じてくれないけど事実なのー」

そう言ってまた三人に目をやる。

「おらぁ！」
「うわ！」

エースの炎の纏った蹴りを凪は必死に避ける。

結局、エースは一人に絞って（もちろん手加減はして）追撃を行う様にした。

もちろん、時々後ろから攻撃してくる鈴仙にも注意は怠らない。

しかし、二人はヒット・アンド・アウェイ戦法でかかって来るため、一網打尽にはできないでいた。

（凪はおれにピッタリついているのに鈴仙は中々こねえ…）

その妙な戦法にエースは頭を悩ませていた。

しかし、それがいけなかったのだろう。

「はぁっ！」
「おわ！！」

凪の蹴りが顔面に迫ってきたので、エースは首を後ろに引いて間一髪で避ける。

「今だ！」
「は？」

その時、凪が声を上げるのと共にエースに影が覆う。

それに釣られて頭上を見ると、鈴仙がエースに人差し指を指していた。

しかもその指先はほのかに光っていた。

「これが…私達の精一杯の攻撃です！！　鈴仙！！」
「うん！……エースさん……これがわたしの新しい力…」

光が一層輝きを放つ。

そして、光は強くなり、やがて銃の弾丸の形を成す。

そして……

「月弾（つきだま）！！」

鈴仙の指先からエースへと光の弾丸が飛ばされた。

「なるほど……凪に気を引かせといて狙い撃ちってわけか……」

エースは自身に飛んでくる光の弾見て笑みを浮かべる。

凪はすぐにその場を離れるのを感じるが、別にどうもしない。

「だけど……なんか怖い感じがしねえのは、まだその技が未熟ってこったな」

エースは拳を握り、炎を纏わせる。

エースは振りかぶり……

「だけど……」

光の弾を殴りつける。

すると、辺りが衝撃によって砂煙に覆われる。

「「やった！」」

二人は合流して互いの拳をぶつけ合う。

それでも煙からは目を離さない。

二人としては、これでエースを倒せたとは毛頭も思っていない。

煙が晴れたらまた追撃を行う。

二人はすぐに突入できる様に構えていた。

しかし……

「火銃！！」

「なっ…うわぁ！！」

「ちょっ…直撃だったのに！」

煙の中から出てくる無数の火の弾丸に驚愕し、二人は突撃した体を無理矢理抑えて回避に徹する。

しかも、場所も悪かった。

凪達が避けた火は真っすぐと飛んでいき……

「ぎゃあああぁぁ！！」

「こっちに飛ばさないでなのー！！」

観客席の方に飛んでいき、真桜と沙和は体をくねらせたりと逃げ回っていた。

「ふむふむ……実に面白いですね～」
「「いつの間にいいい

功型』に特化している」
「？　凪はどっちなんだ？　時々、その氣って奴を飛ばしてるじゃねーか？」

エースは朝飯にかぶりつきながら素朴な疑問をぶつける。

それに対して、ボロボロの凪が答える。

「私は内氣功と外氣功のどっちも特化していませんが、両方共扱えるんです」
「なるほど……バランスタイプか……」
「ばらんす？」
「ああ、力は無いけど両方を使い分けられる万能型…て意味だ」
「万能……それは誇張しすぎです…」

凪、若干照れる。

「わたしは内氣功は使えないけど、外氣功は好きだよ？　指からバンバン出せて、格好いいし…それにこの氣でやってみたいことがあるんだ」
「へぇ…何すんだ？」

すると、鈴仙はエースを光る眼で見つめて熱く語る。

「エースさんの『火銃』ですよ～…両手で目にも止まらぬ速さでバンバン撃ってみたいんだよ～」
「あぁ…だから指先で撃つようにしたのか…」
「「あぁ……ゲフンゲフン！」」

嬉々として話す面々を相手にしていると、二人の咳払いが場を鎮め

た。

一体、何事かと思い、音の方向を辿ると、同じくボロボロになった真桜と沙和がいた。

それを見たエース達は少し苦笑するが、二人の目は笑っていなかった。

凪と鈴仙の修業だったのに二人を巻き込んでいたのを知ったのは修業の終わりくらいだった。

それに対して、エース達は罪悪感を抱いていた。

「はよ食って。はよ行くんちゃうの？」
「沙和は早く街に行きたいんだけど」
「「「……はい」」」

不機嫌オーラを垂れ流す二人にエース達も素直に頭を下げる。

そんな珍しい光景を風はいつもの様に目を細めて眺めるだけだった。

朝食は終わり、エース達は次の街へと足を運んでいる最中だった。

凪と鈴仙は真桜と沙和の機嫌取り。

エースは風を背負って荷物を運んでいた。

「おれを馬だと勘違いしてんのか？」
「お兄さんは力持ちですから、この割り振りは妥当だと思いますよ～？」
「…まあ分かってるんだけどよ」
最近、自分の代わりにテキパキ指示する彼女達を見て、若干、威厳を無くしたのではないかと寂しく思ったのだった。

「どうしたのですか？　微妙な顔してますよ？」
「あぁ…やっぱり？」
そんな話をしばらくは続けていたのだが、風は唐突に聞いてきた。

「お兄さん」
「ん？」
「やっぱりお兄さんが天の御遣いだったんですね」
「あぁ…まあ、そうらしいんだけどよ…おれにはそんな自覚もねえしな」
笑いながら言うエースに風は続ける。

「なんで星ちゃん達に内緒を？……と言っても大体想像はつきますよ」
「そっか…そりゃそうか…」
「でも…」
「でも？」
「もう隠さなくてもいい…と思うのですよ」
「へ？　なんで？」

エースは目を丸くして風に聞き返す。

今までの凪達の意見とは正反対な答えだったからだ。

それに軍師なら賛成すると思っていたのだけれど…

そんな思いを悟ってか、風は淡々と答える。

「今や天の御遣いの噂はあちこちで大きく…大きくなりすぎてるのです…」

「なりすぎ…？」

「暴政、飢饉に苦しむ皆さんは噂を信じ、縋りつくことで希望を得ているのです。『いつか天の御遣いが助けてくれる』と……」

「……」

「今の状況は噂程度で左右されるくらいに切羽詰まってるのです。ですから、風達もすぐに宿り木を見つけないといけないかもしれません」

何気ない様に言うが、実際は焦っているのだと感じた。

確かに、こうしている間に世の中は変わろうとしている。

そうしたら、管賂探しも困難になる。

それなら、どこかに留まって管賂を待ち伏せるのがいいのではないかと思うようになってきた。

「ほんと、どうするかな…」

「お兄さんは大変ですね～」

「…ていうかおれのことが怖くないのか？」

「ん～……全然ですね～…お兄さんを怖がるのもバカらしいので」
「そっか」

毎回毎回だけど、この世界の住人はどこか元の世界の住人に似てる気がしてきた。

常識に捕らわれない所が特に…

「まあ、そんなことよりもこれからのことを考えましょう～」
「それもそうだな」

考えても仕方ないので、今は今することに専念することにした。

次の村まで後少しだった。

それと同時に……

別れの時も近付いていた……

「こ……これは……」
「何という……」

そこには凄惨な光景が広がっていた。

黄色い軍団が襲いかかろうとしていた。

エース達は村に着いたのはよかったのだが、村人は全員避難をしていた。

エース達は現在、誰もいなくなった村の中にいた。

「…その内、ここになだれ込むな…」
「……こんな所にまで…」

黄巾党に故郷を襲われたことのある鈴仙としてはなんとしても街を守ってやりたかった。

それは鈴仙だけの話ではなく、凪達も自分達ができることを頭の中で模索していた。

「……とりあえず食い止めるしかねーな」

凪達の意志を汲み取ってか、エースも状況を判断する。

その言葉に全員が頷く。

「それではですね…沙和ちゃんはこの街の兵を探してきてください。それにここは陳留の近くですから、もしかしたら曹操さんの兵が来

てくれるかもですね～」
「分かったの！」
「真桜ちゃんは街の入り口全てに防衛柵を作ってくれませんか～？　即席の、できる限り頑丈にしてください」
「うへぇ……そりゃ無茶な……けどやったるわ！　生きるか死ぬかの瀬戸際やしな！」
「凪ちゃんと鈴仙ちゃんはここに残っている兵の指揮をお願いしていいですか～？」
「はい！」
「指揮……自信はないけどやってみます！」
「あとの皆さんは村の人達の安全確保をお願いします」
『『『分かりやした！！』』』
流石は軍師志望といったところか、普段のノンビリさは変わらずともテキパキと適切な指示をする。
凪達は素早く風の指示に従う。
そんな一段と頼もしく見える風にエースは笑みを浮かべる。
そして、風はエースにも指示をする。
「お兄さんは真桜ちゃんの手伝いをお願いしていいですか？　風は兵の指揮がしたいので」
「ん～……あいよ。仲間のためだ。それくらいお安い御用だ」
「ふふ…お願いしますね？」
「おう……と、その前に…」
「？」
風の言葉に頷き、エースは沙和の元に向かおうとするが、すぐに風

に振り返る。

それに対して風は首を傾げる。

そして、エースは言った。

「やばくなったらすぐにおれの所に逃げてこいよ。おれが守ってやる」

「……」

笑って意外なことを言うエースに風は少し言葉に迷ってしまう。

そして、微笑んで言う。

「ふふ……多分、風は皆さんと違って動けないですから、お兄さんが来てくれますか？」

本人としては本人なりにエースを気遣ってだろう。

外から見た限り、こっちの戦力は残っている兵を集めても黄巾党には及ばない。

多分、苦戦は必須。

他人の気をつかうなどできないだろう。

故に、少し突き放すつもりで返した。

その答えにエースはというと……

「じゃあ、そんときはすぐに来てやる！　だからやばくなったら知らせろよ！」

じゃあな！　と言ってエースは手を振って真桜の所へと走って行く。

状況が分かってないのか、それとも、この状況を危機とも思ってないのか…と風は思った。

だけど、そういった胆力が風に勇気を与えた。

「やっぱりお兄さんは面白いですね～」

風は呆れと嬉しさの混ざった声色で呟いた。

更に言えば、少しの好奇心も抱いていた。

「これで分かるかもしれません。お兄さんの秘密も、強さも、何もかも…」

この状況下で場違いな感情を抱いたまま、風は沙和の後を追う。

「真桜！」

「兄さん！？　どないしたん？」

「風がな、お前の手伝いしろって…」

それを聞いて真桜は早口で言う。

「さよか！　それなら柵の材料集めてもらってええか！？　全然足りそうにないんよ！」

「分かった！　どんなのがいい！？」

「木材！　石は頑丈やけどどれでは間に合わへんのや！」

「分かった！　待ってろ！」

そう言ってエースは大急ぎで街の真ん中へと向かった。

「これじゃあ足りねえな…」

木材を集め、そこらに置いてあった荷車に店に置いてあった木材や空き家と思われる家を潰して集めた木材を積んでいた。

しかし、エースとしては木材はありすぎて困る様なこともないからもう少し探そうとしていた。

そんな時……

「あ！　エースさーん！」

遠くから聞き覚えのある高い声が聞こえてきた。

その方向を向くと、そこから沙和が走り寄って来た。

「沙和か」

「エースさんは何してるの？」

「おれは真桜の手伝いだ。お前はまだ兵を集めてんのか？」

「ううん。兵はもう見つかったから風ちゃんに報告しようと思ってたの」

そう言って後ろを指差すと、その指の先にはおびただしい数の兵らしき者が歩いてきていた。

最初は黄巾党かと思った。

だが、その兵は全員、青い鎧で統一されていたから黄巾党ではないと容易に想像できた。

「こいつらがこの街の兵か？」

エースの問いに沙和は意外にも首を横に振る。

それにはエースも首を傾げる。

ここの兵じゃないならなんでこんな街に？

そう思っていると、その兵の集団の中から一人出てきた。

その足取りはゆっくりとしており、しかし、その言動が存在感を際立たせた。

それと同時にエースは何となく思った。

只者ではない…と。

そして、その影はエースの前で立ち止まった。

「いきなりですまないが、貴殿の名は？」

その人物は青い髪のクールな女性だった。

落ち着いた雰囲気を醸し出す女性に、エースは普通に答える。

「おれはエース。そこの沙…于禁の連れだ。あんたは？」

「私は夏侯淵。この軍の指揮を任された身だ」

間近で見てみると、迫力も伝わってきた。

エースはその女性の実力に感心していると、軍の中からもう一人の影が出てくるのが見えた。

しかも、その影は小さい……小さすぎた。

そう思っていると、その影もエースの前で止まった。

「秋蘭さま。この人誰ですか？」

夏侯淵の服をつまんで聞くのは風くらいの背丈デコの広い少女だった。

「季衣、本人の前で指を差すな。失礼だぞ」

「あ、ごめんなさい」

少女は夏侯淵の注意に従ってエースに謝る。

そんな少女の頭を笑って撫でる。

「はっはっは…んなこと気にしなくていいぜ。それよりお前の名を教えてくんねーか？」

「うん！　いいよ！」

そう言うと、少女は素直な笑顔を浮かべて答える。

「僕は許緒っていうんだ！」

「許緒か……おれの名はエースだ。よろしくな」

「えーす…？　兄ちゃんの名前って変わってるね」

「季衣」

夏侯淵は許緒に注意するが、エースはそれを笑って許してやる。

「いいぜ別に。この島でおれの名が変わってるのは事実だしな」

「この島……エースは外来人なのか？」

「まあな、一応そういうことだ」

そんな他愛もない話をしていると、側で聞いていた沙和が口を開いた。

「エースさんも夏侯淵さんもそんな話してる場合じゃないのー。早く風ちゃんの元に急ぐの」

「あ、わりぃ」

「うむ、すまん」

二人は自分達を今まで待っていてくれたことと、状況を忘れかけていたことを沙和に詫び、行動に移る。

「エース…と言ったな。エースもこの戦いを？」
「まあな、仲間が戦うっていうからな」
「そうか……」

夏侯淵はしばらく考えた後、エースの目を見て言う。

「私達と一緒に戦ってくれないか？　こっちは指揮する人材が足りていない」
「？　何でお前等も？」

急にやって来て一緒に戦おうなどとは正直、話がウマすぎた。
あまりにタイミングが良すぎる救援にエースは頭を悩ませるが、そこへ沙和が弁明する。

「夏侯淵様は曹操様の将軍って聞いたことがあるから間違いなく味方だと思うのー」
「曹操……そういや、風も言ってたな…」
「うん。だからこの人達は味方だと思うの」
「それもそうか……」

確かに、黄巾党ならここで有無を言わさずに襲いかかってきただろう。

それに、この女性から感じる濃密な雰囲気で妙に納得してしまった。

それに、疑っても事態は好転も何もしない。

仮に、途中で裏切られてもすぐに抑える自信がエースにはあった。

「じゃ、行くか」

「ああ、頼む」

夏侯淵率いる曹操軍はエースと沙和の後を付いて行った。

## 先遣隊・曹操軍（後書き）

次の話ではオリジナル技が出てきて、状況も有り得ないくらいになります。

次回もお楽しみに！！

# 殲滅（前書き）

今回はオリジナル技でも入れてみました。

それと小説の場の背景の色も変えてみたいのですが、希望があったら書きこんでください。

今回もまた無茶な振りが多いです

「おやおや、この方々は？」
「この人達は曹操様の軍らしいのー」

場所は変わり、夏侯淵と許緒を連れてきたエースは風と合流していた。

途中で真桜とも合流し、材料を届けてやった。

兵を案内してくれた沙和はすぐに凪達の手伝いに向かった。

その際に夏侯淵と許緒の紹介も済ませておいた。

「お初にお目にかかる。お主がこの軍の軍師か？」
「軍…と呼べる兵がいるかどうかはまだ判明してませんが、一応は軍師です～」
「そうか、私は夏侯淵。陳留の勅使、曹操の命で参上した」
「僕は許緒！　よろしく！」
「はい。よろしくお願いします～。風のことは程イクとお呼びください」

風は笑いながら二人に名乗ると、すぐに作戦に入る。

「それではですね～…時間もありませんのですぐに作戦に入ってもよろしいですか～？」
「ああ、意見を聞きたい」
「はい……とは言っても夏侯淵様の部隊は先遣隊ですか？　本隊で

すか？」
「先遣隊だ」
「そうですか～……敵の戦力のほどは分かりますか？」
「……少なくとも三千……こちらの倍はある」
「う～ん……苦しいですね～」
苦い表情の夏侯淵から出た事実に流石の風も眉にしわを寄せる。
どうやら二つの兵を足しても足りない……か…
「でもでも～、先遣隊ってことは本隊も来るかもしれないの」
沙和が思ったことを言ってみると、それに許緒が元気よく答える。
「そうだよ！　春蘭様は必ず来てくれるからそれまで持ち堪えるんだ！」
「ああ、許緒の言う通りだ。黄巾党の戦力を確認した後に伝令を送っておいた。苦戦するのは目に見えているからな」
その言葉に風はゆっくりと頷く。
「ですね～。とりあえずは東門にお兄さんと真桜ちゃんと沙和ちゃ
「いや、それなら東はおれだけでいい」…お兄さん？」
しかし、風の言葉を遮ってエースが当たり前の様に言った。
その言葉にその場の全員が衝撃を受ける。
「…お主は何を言ったのか分かっているのか？」

夏侯淵は確かめる様な心配そうな声色で聞くが、エースはそれを切り捨てる。

「分かってるさ。だからこそ、おれは一人でやらせてもらう。そっちの方が何かと都合がいいしな」

エースは早口でそう言って一人足早に向かおうとするが、それを止める者がいた。

「そんなのダメだよ！！」

「お……と…」

急にエースの前に出てきて両手を広げて制止する許緒だった。

いきなりの小さな制止にエースはよろめくが、すぐに立て直す。

一体何事かと聞こうとするも、許緒はエースの口が開く前に叫ぶ。

「そう言う考えはダメだよ……！　今日は絶対、春蘭様が助けに来てくれるんだから、最後まで頑張って守り切らないと！！！！」

「その通りだ。聞けばエースも兵を率いているのだろう？　もしものことがあれば軍の指揮にも関わる」

「それに、今日、百人の命を助ける為に死んじゃったら、その先助けられる何万の民の命を見捨てる事になっちゃうんだよ！？」

夏侯淵と許緒の必死の説得にエースは少し困っていた。

正直、余裕だろう。

エースならば三千の“一般人”くらいどうってこともなかった。

それでも、夏侯淵と許緒の反応が正しいのだが……

それでも、エースは死ぬ気など毛頭なかった。

かといってそんなことを馬鹿正直に話しても聞いてもらえそうにない。

（変な感じだけど、天の御遣いのこと話した方がよさそうだな）

そんなことを思って、自分の秘密を話そうと口を開いた時……

「う～ん……お兄さんなら大丈夫だと思うの～」

沙和が気まずそうにしながらも救いの手を差し伸べてくれた。

その言葉に夏侯淵、許緒の二人はもちろん、付き合いの浅い風までもが目を見開く。

「……どういうことだ？」

「か……顔が近いの…」

その台詞に腑に墜ちない様子に夏侯淵は沙和に詰め寄る。

一段と増した迫力を前に沙和は少しビビるが、少しずつ話していく。

「今まで旅してきて分かったけど、お兄さんは強いから…大丈夫なの…」

「……根拠は？」

「そ…それは…」

夏侯淵に詰め寄られる沙和は言い淀む。

これ以上のことは皆の中で口止めされているから。

約束を破るわけにもいかず、この状況をどう切り抜けるか頭の中で模索していたが……

「……もう言っても構わねえな」

「え？」

エースは溜息と共に上着を脱ぐ。

「お？」

「なにを…」

急に服を脱ぎ出したエースに許緒と夏侯淵は呆然とする。

そして、エースが背中を見せると二人の表情は驚愕のものとなった。

「「！！」」

「これで…いいか？」

二人の顔を見てエースは満足そうに笑ってみせる。

「それじゃ、行ってくるから。一人もおれんとこに寄越すなよ？」

「あ…ちょっ…！」

何も言わせず、聞かずにエースは東の門へと走り去った。

夏侯淵の声も届かず、エースを止めることもできなかったため、彼を追いかけようとしたが……

「……行ってしまったなら仕方ありません。夏侯淵様と許緒ちゃんは西の守りについてください」

風はいつもの感じで二人に指示をする。

それに対して二人は信じられないといった様子だった。

「程イク！？　本当に彼だけを行かせていいのか！？」

「はい……私達にはお兄さんを呼び戻す兵さえも惜しいのです…それに……本人にも覚悟がありますから…」

「し…しかし、あの者一人に任せて東が崩壊したら被害が…」

「……まあ、心配ですよね…念のために凪ちゃんを向かわせましょう」

「援軍は一人だけなのか？」

「はい、正直言えばこの状況は非常に不味いのです。ですから、もうお兄さんを信じるしかないのです」

「……そうか…」

一刻の猶予もないことは夏侯淵も分かっていた。

たとえ、バランスよく兵を配置してもすぐに突破されてしまうだろう。

それほどにまで兵力差が激しかった。

こちらの希望としては、相手が突撃しかできず、陣も組めないことくらいだった。

おびきよせて矢で牽制すれば多少なりとも相手を威嚇して時間も稼げる。

下手に戦力を分散させるより、一点集中で守りを固めた方がいいかもしれない。

そして後は……

「……天の力を信じるしかないな…」

誰にも聞こえない様に呟き、しばらく瞑想する。

これに勝たなくてもいい、負けなければいい。

とにかく……時間を稼ぐ……それだけに専念……

そして、瞑想を終え、夏侯淵は覚悟を決めた。

「……行くぞ」

「ほ～…これは壮観だな…」

現在、エースは防衛柵が建った東門の前でエースは腰かけていた。

「アニキ……大丈夫ですか…」

その傍には先程まで真桜を手伝っていた部下達がいた。

余裕そうなエースの後ろで落ち着き無く焦っている。

それもそのはず、エースの前方には黄色い集団が迫って来ている。

大量の賊が群れを成してこっちに向かってくる。

「おれは大丈夫だ。それよりもお前等は凪達の所に行ってほしい」

「そんな…いくら天の御遣いって言われてるアニキでもあんな…！」

「そうっすよ！　あんな数を一人だけでなんて…！」

エースの頼みを聞き入れようとはせず、必死にエースを思い留まらせようと説得をしていた時、一人の駆け足が聞こえてきた。

それを聞き取ったエースが振り返ると、凪が駆け足で近付いていたのが見えた。

「エース様！　こんな所に！」

凪がエースのすぐ傍にまで寄ってくると、エースはうなだれて頭を掻いて溜息を吐く。

（信用してねえのか…）

そう思っているのも知らず、部下達は凪の登場にガッツポーズをとる。

「楽進の姐さん！」

「やった！　これならアニキも動いてくれる！！」

「……おれってそんなに弱く見えるか？」

喜ぶ部下が自分をどう見てるのか気になりはしたが、今はそれどころじゃなくなった。

味方が一人でもいたら全力を出せなくなる。

エースの能力は強力すぎる故、エースは一人で戦うことを望んでいた。

もし、味方が敵と混戦していたら味方さえも燃やしてしまう可能性があったからだ。

エースは敵を一網打尽にしようとしていたのだが……

「変なこと言ったんですね…鈴仙も心配してましたよ…」

頭を抱える凪の登場で予定が狂った。

「何言ってんだ。これくらいなんてことはねえ」

「はぁ…」

凪は思った。

この人は動かない…と。

エースの頑固さを知っている凪は少し考えて……

「……私も残りますから。お前達は西の守りに力を貸してやってくれ」

『『『はいぃ！？』』』

部下達はまさかの殿発言に耳を疑った。

何を仰っているのですか！？　と聞きたかったが、なぜか言葉に出せなかった。

ただ、驚きを顔で表現するしかなかった。

「…凪の言う通りだ。早く行ってくれ」

エースは部下達を見つめて訴える。

――この場は任せろ

その意を汲み取ったかどうかは定かではないが、部下達は遠慮がちにその場を離れる。

時々、自分達を心配そうに振り向く部下を突き放した様な気分だったが、そうも言ってられないと気持ちを入れ直した。

そして、エースは立ち上がって凪の方を見て言う。

「凪……お前は残るのか…？」

それに対して、凪は堂々と答える。

「はい。お一人で戦うのは危険です……微力ながら助太刀させていただきます」

「……本気だな？」

「はい」

エースの最終確認にも凪は毅然とした態度で答える。

それを聞いたエースはもう何も言わない。

「よし……じゃあ始めるぞ。覚悟はいいな？」

「はい。いつでも」

強気発言に二人は笑い合い、近付いてきた黄巾党に凪が告げる。

「罪なき民草を脅かす悪党共！！　お前達の進軍もここまでだ！！！」

凪の声が響き、黄巾党が立ち止まる。

「貴様等賊徒の行いに民は苦しみ、脅えている！！　そんなお前達を天が許すと思うか！！！！」

否っ！！

「断じて無い！！　天はお前達を許しはしない！！　天は我等についている！！　故に聞こう！！　同じ民草だったお前達はそれを聞

いても街を侵すつもりかっ！！　罪の無い民を殺すのか！！！」

そこまで言うと、また黄巾党の群れが動き出した。

それを見て凪は表情を険しくした。

「……自分と同じ境遇の人の……仲間の心も忘れた……か…」

凪は俯いて悲しそうに呟いた。

この時、エースは凪の肩を叩こうとしていたが、凪は頭を上げて再び黄巾党に向ける。

「……大丈夫か？」

「……はい」

凪の声は小さく、微かに震えていた。

だが、エースは何も言わずに手を引っ込める。

覚悟を決めた戦士へ気遣い、エースは凪の後ろで拳を握る。

その後、凪は迫って来る黄巾党に叫んだ。

「人にして人の心を捨てた暴徒共よ！！　天の怒りを知れっ！！」

そう言った直後、エースは手から無数の光の玉を出し、黄巾党へと飛ばす。

黄巾党はそれにも目もくれずに突っ込んでくる。

悲しきこと。

暴走した賊徒にはその脅威が分かっていない。

その姿は力に洗脳された末路とも思えた。

「蛍火……」

凪も手甲を付けた拳を握り、構える。

そして、黄巾党とエース達との距離が数十メートルにまで達した時

……

「火達磨ぁ！！」

辺りが

爆風に包まれた。

戦いが

始まった。

「秋蘭様！！　西の防衛柵が一つ目が破られました！！」
「ふむ……防衛柵は後三つか…どれくらい保ちそうだ？　李典」

戦が始まってから三時間が経過していた。

西側に戦力を集中させて何とか保っていられる様な状況だった。

夏侯淵の質問に李典は悔しそうに、推測する。

「せやな……即席で作ったから…あと一刻もつやろ…」
「微妙な所だな…それまでに姉者が来てくれればいいのだが……」

どうやら、状況からして芳しいとは言えそうにない。

しかし、三時間経っても倍近くいる敵に大立ち回りしている手腕は流石と言えるものだった。

夏侯妙才……彼女もまた輝ける才能を秘めていた。

「いや、それよりも東門から何か報告はきてないのか？」
「いいえ。今の所は何の報告も来てはいませんが、賊がこの街に入っていないのを見ると敗走してるとは思えませんね～」
「そうか……そのまま現状維持してくれれば……」

たった二人の指揮で三時間も堪えたというのは夏侯淵にとって嬉し

い誤算だった。

「出陣前に私達に三十人とはいえ、こちらに戦力を回してくれるとは……これはエースの余裕ととっていいのか？」

「まあ…兄さんならあり得るな…」

エースの労いに真桜は苦笑する。

そこで、許緒は気になっていたことを聞いてみた。

「ねえねえ、今の東門には兄ちゃんと楽進ちゃんだけなんだよね？」

「そうだけどー、それがどうしたのー？」

「二人だけでここまで粘るってすごいよね？　兵はどれくらいいるの？」

「「「「ん？」」」」

「「？」」

すると、その言葉に真桜と沙和、鈴仙までも首を捻って？を浮かべる。

その様子を見た夏侯淵と許緒も首を傾げる。

「…兵は李典達も連れていたのではないか？」

「まぁ…兵っちゅうか……まあそうなんやけど、三十人しかおらんで？　そっちが兵を貸してくれたんやないの？」

「いや、私達は彼に兵の投入を断られてな、我が軍の全ては今ここに……」

ここまで言って気付いた。

何か……食い違っている……

「……あんさん、兄さんに兵…貸してへんの？」
「…あぁ、私はお前達の兵を使ってるのかと……」
「いやいや…ウチ等が連れてたんは正規の兵やないし、そもそも三十くらい…」
「「……」」
「「「……」」」

ここで気付いた。

東には兵が誰一人いない。

つまり……今、東で戦っているのは……

たった二人

「なんだと!?」

そこで、やっと夏侯淵達は気付いた。

今、東には人二人しかいない状況だった。

「ちょっ！　それってマズいですよ!!」
「エースさん……また無茶して…！」
「兄さん…それはシャレになってへんよ…」
「な…凪ちゃんが!!」

状況を把握した四人も焦りを見せる。

まさか、自分達とは正反対の場所でそんな絶望的な状況だったとは知らずに三時間経っていたのだ。

焦らない方がおかしい。

「くっ！　今すぐ増援を送るぞ！　夏侯淵隊は私と共に付いて来い！」

「許緒隊も行くよ！　付いて来て！」

二人はそのまま兵を率いて東門に行こうとした。

その時……

「夏侯淵様！！」

道の先から凪が走り寄ってきた。

「楽進！！」

「「「凪（ちゃん）！！」」」

東に配置していた武将の一人の報告だった。

（まさか…東門が…！？）

夏侯淵は舌打ちを打ちながらも、傍まで走り寄ってきた凪の報告に耳を傾ける。

「どうした！？　黄巾党が東門を！？」

自分の頭の中が嫌な予感で支配される中、凪に鬼気迫る表情で聞き

出す。

しかし、凪の報告はある意味で夏侯淵の予想を裏切った。

「いえ！　それが東門の黄巾党の後方から砂塵を確認！」

「！！　旗はあったか！？」

「はい！　『曹』と『夏侯』の牙門旗を確認！　味方です！！」

「そうか！！」

そこで、初めて夏侯淵の頬が緩んだ。

もう少し時間がかかると覚悟していたが嬉しい誤算だった。

本隊と合流できれば逆転は可能だ。

その証拠に凪の報告で兵達の指揮が目に見えて上がった。

そのおかげで東門の懸念が綺麗に飛んでしまった。

しかし、またそこで凪の口からとんでもない一言が……

「それで、もう一つご報告が！」

「どうした？」

凪からのもう一つの報告を冷静に聞く余裕も出てきたので比較的冷静に聞く。

「はい、実は私とエース様が黄巾党と交戦中にですね…少しずつですが敵が次々と逃亡を始め、先程の増援がありまして……」

凪は少し気の抜けた声で告げた。

「……東門の敵……壊滅致しました」

その瞬間、空気が一気に凍った。

夏侯淵が奮闘している中、エース達はというと……

「猛虎蹴撃！」

「火銃！！」

二人で遠距離攻撃を行い、門に近づけさせないようにしていた。

凪の氣の弾が爆散して敵を吹き飛ばす。

エースの小さな弾丸が矢と同じ様に敵を倒していく。

そんな不可解な攻撃に賊の大半は恐れを抱き、指揮も低下していた。

そのおかげで相手の進軍も止まっていたが、それでも数は減らない。

肉弾戦に持ち込んでも構わなかったのだが、そうすると必ず凪も付いてくるだろう。

それだけは避けようと、敢えて遠距離戦術を選んだが、これではジリ貧は確実。

時間と共に冷静さを取り戻して再び突出するのも目に見えていた。

そこで、エースは一つ、派手な技でビビらせることにした。

エースは手から特大の火の玉を作りだす。

一見すればエースの最大技の『炎帝（えんてい）』と似ているが、その玉は黄巾党の頭上にまで飛んでいって停止する。

サイズも、結構小さく、大きさはエースの身長くらいだった。

賊達もその頭上の火の玉に気付くも、火の玉は浮遊し続けるだけで、賊に不気味さを与えた。

そして、エースは手を動かすとその火の玉はゆっくりと賊の方へ落ちていく。

賊はその異様な光景にあとずさりを始めるが、もう遅かった。

「落火星（らっかせい）！！」

エースがそう叫んで手を握った瞬間、火の玉は炸裂し、無数の火の雨が降り注いだ。

『『『ぐあああああぁぁぁ！！』』』

賊達は悲鳴と共に火の雨に打たれる。

撃たれた賊達は燃え、地面に落ちる火の雨は小規模爆発を起こし、辺りを煙で覆う。

その周辺は高温の熱気により、寄りつけなくなっている。

そんな煙の中を物ともせずに向かって行く者がいた。

エースだった。

エースは高温の地獄とも思える灼熱地帯を笑いながら、平然と歩いて行く。

その姿を見た賊達はエースに恐れを抱き、剣を捨てて逃げ出す者が続出した。

しかも、事態はそれだけでは終わらなかった。

「あ…あいつ……『火拳』だあああぁぁ！！」

「なんでこんな所にもいんだよぉ！」

「冗談じゃねえ！！　ようやく『火拳』から逃げたのに、こんな所で会っちまうなんて…！！」

賊の中にはエースに潰された部隊の人間もいたため、彼の姿を見た瞬間にその時の恐怖が蘇り、逃亡する者が続出。

しかも、その逃亡する者が『火拳』の名を連呼する度に後方の部隊にも広がっていき、戦意喪失する者が続出。

もはや軍としての原型を留めてはいなかった。

その後、煙の中に入れなかった凪の元に戻り、状況を伝えるとひとまずは安心した。

「それにしても『火拳』の名はすごいですね！　ここまで名が功を成すなんて……やっぱりエース様はすごいです！！」

「そ…そうか？」

鼻息を荒くして詰め寄る凪に若干引きながらも、すぐに気を引き締める。

ほとんどが逃走したとはいえ、まだ敵を倒した訳ではない。

ここからが正念場と判断して凪は手に氣を溜め、エースはまた火銃の用意をしていた。

だが、その後に遠くで砂塵が見えた。

「？　あれは…」

「まさか……敵の増援か！？」

凪は舌打ちをするが、エースは落ち付いて目を凝らす。

凪も隣で目を凝らす。

すると……

「あれは…夏侯淵って奴の連れてた奴と同じ鎧だな」
「はい…それにあの軍が掲げる旗…『曹』と『夏侯』と…」
「つまり…」
「味方の…援軍です！！」

突然現れた軍が味方と知るや、凪の口調は弾んでいく。

それに呼応して状況も変わり始めていく。

更なる第三者の介入により、更に逃走を開始する者が増えた。

もはや、ここまでくれば勝負も決まったも同然。

「……やりましたね」
「ああ、中々いいタイミングだな」

二人で笑い合い、東門の戦いは無事に幕を下ろした。

１０００対２の中で被害も出さない、前代未聞の好戦績を挙げて…

…

## 殲滅（後書き）

技説明

落火星（らっかせい）…大き目の火の玉を相手の頭上に浮かせてからそれを弾けさせて火の雨を降らせる。イメージとしてはとある美食家のサンダーノイズ

## 別れは突然に（前書き）

――ガンバレー！！　ガンバレー！！――

ｂｙ　Ｍｒ．２　ボンクレー

今更ですが、被災地の方に微力ながらエールを送ります。

ニコニコの方のエースの絵を見て、泣きそうになってしまいました…

余震に負けずに頑張ってください！！

## 別れは突然に

「まったく…凪も落ち付きがねえな」

嬉々として西門に報告に行った凪の後ろ姿を口を吊り上げて見ている。

それよりも、また鈴仙達に小言を聞かされると思うと、ついつい辟易してしまう。

しかし、このまま戻らないわけにもいかないから、エースも街の中へ戻ろうとした。

その時だった。

「うおおおおぉぉぉ！！！」

「？」

煙の中から剣を持った黒髪の女性がバカみたいにバカでかく唸りながらこっちに走って来る。

ていうか、殺気をかんｚ…

そんなことを思っていると、その女性はエースに剣を振り上げてきた。

「死ねぇぇぇぇぇ！！」

「おっと」

いきなりの攻撃に少し驚きはするが、何とも直線的だったのでその一閃を余裕で紙一重でかわす。

後ろに一歩退くと剣は振り下ろした力を抑えられずに轟音を上げて地面を抉る様に破壊した。

エースはもう一歩退いて女性との距離を一メートルくらいにまで広げた。

しかし、女性の追撃は続いた。

「避けるなぁ！」

「よっと」

今度は下方から打ち上げる様な一閃をジャンプで避ける。

女性はまた避けられたことに舌打ちをして崩れかけた態勢を整えようとしている時、エースは自分の失態に気付いた。

（……急いで変な回避しちまった）

エースは宙に浮かんでいて体の自由がきかない。

つまり、着地地点も決められないのだ。

エースが悩んだのは一瞬だった。

「逃がさん！」

女性が頭上を飛び越えてるエースから目を離さない様に頭上を見上

げると、そこにはエースの足が間近に迫っているのを見た。

「なっ！」

声を上げようとしたが、コンマ一秒遅かった。

「わり」

エースの謝罪が聞こえた瞬間、顔面にとてつもない衝撃を感じた。

先遣隊を送った張本人であり、陳留の州牧である曹操は先遣隊として送った夏侯淵と許緒の身を案じていた。

先程、ようやく街に着いてすぐに黄巾党と交戦し、追い返した。

そこで、二人の生存は聞いたが、実際に姿を見るまで安心できない。

それは部下の夏侯惇も同じだったようで、そのまま東門に全力疾走で独走してしまった。

部下までも置いて行ったので、まず人に迷惑をかけるだろう。

曹操は夏侯惇へのお仕置きを考えながら、後始末を部下の荀イクに

任せて東門へと向かう。

そこに向かっていると、奇妙な光景があった。

煙だった。

大きな煙が宙に霧散していたのだ。

最初は砂煙だと思っていたが、一目見て、それが火で起こされた煙だと把握した。

砂煙にしては色も白かった上に、匂いも焦げ臭い。

それにとてつもない熱気を帯びていたため、通常でもありえないほどの汗をかくことになった。

この状況について考えるのは後にして今は部下を探すことに集中するために向かうだけ。

多少暑くても我慢すれば何ともなく、すぐに煙を抜けた。

そして、曹操はそこで奇妙な光景を目にした。

煙を抜けると東門……の前で夏侯惇が大の字で倒れていた。

「……何をしているの？」

夏侯惇の顔面の上に男が一人立っていたのだ。

ピクピクと痙攣する夏侯惇をポカーンと見ていると、エースが曹操

に気付いて目を合わせた。

「こいつってあんたの連れか？」

「え…えぇ…私の部下だけれども…」

「そうか……わりい、踏んじまった」

「どうやったら我が軍の猛将を踏むのかしら？」

とりあえず、曹操はエースの話を一旦聞き入れ、本日最大の溜息を洩らした。

まさか、義勇軍の将に有無を言わさずに襲うとは……

以前から彼女の頭の弱さには頭を悩ませてはいたが、ここまでくると見過ごせないものがある。

もし、庶人だったら曹猛徳の名に傷が付き、覇道にも傷が付くところだった。

そもそも、罪もない一般人を巻き込むのは望む所ではなかった。

まさに、今回は自分の手綱の甘さが招いたことだった。

「すまなかったわね。そのあなたが踏んでいる子は私の部下の夏侯惇。部下が不祥事を起こしてしまって申し訳ないわ」

「まあいいさ。こうして怪我もなく生きてんだし。何も損しちゃいねえからな」

「…そう……それでも部下が不祥事を起こしたのは事実。あなたには詫びを返さなければならないの」

「ふーん」

「貴いいいいい様ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

エースは腕を頭の後ろで組んで話を聞いていると、また騒がしい声が聞こえてきた。

曹操とエースが声の方を見ると、そこには鼻血を出してフーフーと猫の様に唸っている夏侯惇がいた。

「お、あんたすげえな。顔踏まれたのに鼻血だけで済んでるな」

エースは笑いながらの台詞に夏侯惇は自身あり気に答える。

「当然だ!!　私は華琳様の剣!!　お前ごときにやられる訳がない!!」

「あら、魏武の大剣は主を守っても、問題は起こすのね？」

「そんな訳なかろう!!　貴様…華琳様の声で何を…」

「春蘭っ!!」

「はひっ!!」

エースの後ろで曹操が怒声を上げると、夏侯惇は奇妙な声を上げて一気に静かになる。

怒りに真っ赤にさせていた顔が一気に青くなっていったのを見て、エースは面白いと思った。

そんな呑気なエースに反して、曹操は毅然とした態度で夏侯惇の前に歩み寄る。

「春蘭、あなたが襲った相手は黄巾党ではない。この街を秋蘭と共に護ってくれた義勇軍の一人よ」

「な!?…貴様!　なぜそれを先に言わんのだ!」

「言う前に斬りつけられた」
「この期に及んでまだ減らず口を…！！」
「いい加減になさい！！」
「！！」

再び、曹操の怒号が夏侯惇を鎮める。

犬の様にシュンとした夏侯惇を見て一言。

「この処遇は後でするから、今は口を閉じていなさい」
「…はい」

何も言い返せる気力が無くなった夏侯惇を放って、曹操はエースに向き直って笑みを浮かべる。

「私の部下が不快な思いをさせて申し訳なかったわね。詫びは必ずするからこの子を責めないでやってちょうだい。根が素直すぎるだけなの」
「なに、素直なのは分かってるし、不快に思ってもねえから安心しろよ」
「そう、そう言ってもらえると助かるわ」

エースと曹操は笑い合っていると、エースは曹操が汗をかいていることに気付いた。

「とりあえずおれの仲間も紹介したい。街の中にいると思うし、多分、夏侯淵と許緒もあんたを待ってるかもしれねえしな」
「そうね、いいわ」

そう言うと、怒られていじけていた夏侯惇は急に元気になってエー

スに詰め寄る。

「お前！！　秋蘭と季衣を知っているのか！？」

その迫力にエースは退きながらも答える。

「ま…まあな、真名は知らねえけど夏侯淵と許緒っていう曹操の部下ならこの街に…」

「分かった！！」

そう言うと、夏侯惇は身を翻し、街へと疾走する。

「秋ぅぅぅぅ蘭んんんんん！！　季ぃぃぃぃぃ衣ぃぃぃぃぃ！！」

名前を連呼しながら走る姿を曹操は再度の溜息を洩らす。

「はは…おれ等も行こうぜ」

「そうね……」

細かいことを気にしないエースのペースもあって、何も考えずにしようとした。

しかし……

「？……これは…」

エースの背中を見た時、曹操の頭の中で何かがちらついた。

そんなことがあって曹操はじっくりとエースの背中を観察すると……

「…あなたが噂の…」
「ん？　何か言ったか？」

小さく呟いた曹操にエースはどうしたのかと聞いてみた。

「いえ、何でもないわ」

その一言で返し、エースも「そうか」と言って再び街に向かう。

しかし、その間に変化があった。

「まさかこんな所で巡り合うなんて…これも天命か…」

小さく呟く曹操は先程とは打って変わって子供の様だった。

欲しい物を見つけて目を輝かせる子供の様な目を光らせていたことはエースも知らなかった。

「秋蘭！！　季衣！！　無事だったか！！」

「ああ、この通りだ姉者」
「何の問題もありませんよ！」

街の駐屯していた一角では夏侯惇と夏侯淵、許緒が互いの再会を喜び合っていた。

そんな中、そこに曹操とエースも到着した。

「秋蘭、季衣、ご苦労だったわね」
「華琳様…ありがとうございます」
「うん！　僕ねすっごい頑張ったよ！！」
「ええ、よくやったわ」

その光景をエースとその場にいた鈴仙達が傍で優しく見守っていると、今度は鈴仙達にも礼を言ってきた。

「あなた達がいなければ秋蘭達も敗走していたわ。ありがとう」

微笑んで感謝する曹操に不意を突かれ、鈴仙達は慌てて頭を下げる。

「いえ！　これくらい何ともないですから！！」
「もったいないお言葉です！！」

いきなりの大物からの激励に身が縮こまってしまった鈴仙達に曹操は満足そうに笑う。

しかし、穏やかな空気も夏侯淵の一言で変わることになる。

「ところで、二、三聞きたいことがあるのだが、いいか？」

エースに向かって言った言葉には少し複雑な感情が混ざっていた。

「内容によるぜ」

それを感じ取ったエースは不敵な笑みを浮かべる。

それを聞いた夏侯淵はそれに頷いて質問する。

「東門には兵は一人もおらず、いたのはエースと楽進の二人。たった二人だけで１０００もくだらない軍を相手に三時間も堪えるなど……とても人間業とは思えんのだ」

それを聞いた時、曹操と夏侯惇の顔が驚愕な色となる。

周りで聞いていた兵も同じ反応をするのは当然だろう。

そして、話題の中心であるエースは飄々と答える。

「悪いが答える訳にはいかねえな」

その言葉に曹操が聞く。

「それは何故？」

「こいつ等との約束だ。そう簡単に教えられる内容でもねえんだ」

「……そう。なら、私からも一つ…いいかしら？」

「なんだ？」

多分、この質問もはぐらかされるとは思うが、曹操は聞かずにはいられなかった。

「あなたが最近、黄巾党を制圧している『灼熱の御遣い』なのかしら？」
「そうだけど？」

固まった。

案外、すんなりと答えたエースに曹操は拍子抜けしてしまった。

「……意外とアッサリ答えるのね」
「もう背中見られたからな。隠す必要もねえだろ」
「それもそうね……それなら話は早いわ」

曹操は一呼吸してから言った。

「あなた達、私の元に来ない？」

エース達を勧誘する言葉に凪達は驚いた。

「え！？　我々がですか！？」
「ホンマでっか！？」
「ええ、あの戦力を相手にここまで持ちこたえるその采配と実力、どちらも申し分ないわ」

そこまで言われると、凪達の気持ちが次第に高鳴っていった。

「やったぁぁぁ！！　凪！！　曹操様からのお誘いやで！！」
「そうなの！！　これはもしかしてすっごいことかも！！」
「ああ！！　本当に私達でいいんでしょうか！？」

喜びを隠せない三人に曹操は微笑んで頷く。

「ええ、あなた達に言ってるのよ」

その言葉に凪達はもはや有頂天になっていた。

凪達の旅の理由、それは自分の仕える国を探すことだった。

その夢の一歩が今まさに、目の前ある。

しかも、相手は最近名高い“あの”曹操。

部下をこよなく愛し、武と智においては完璧とも言える。

将来有望の諸侯だった。

そして、極めつきは民を見捨てないという信条を掲げている。

そんな人からの勧誘に凪達は舞い上がっていた。

故に忘れていた。

エースの旅の目的を……

「いや、わりいんだけど…」

エースは申し訳なさそうに手を上げて注目させ…

「おれは……断らせてもらう」

しっかりと勧誘を蹴った。

「……え?」

凪は信じられないといった様子に変わってしまった。

――――今……なんて……

さっきまで喜んでいたのが嘘なくらい…にだ。

「き…貴様!!　華琳様のお誘いを断るとはいい度胸「春蘭」か…華琳様?」

夏侯惇の怒号を遮り、曹操はエースを見据える。

しかし、その表情は先程よりも険しいものになっていた。

「…理由を聞かせてくれないかしら?」

「そんなに怒るなって。別にあんたが嫌って訳じゃねえからよ」
「それじゃあ何故？」
「おれは今、別の用があって旅をしてたんだ。それが済まない内はどこの国にも入るわけにはいかねえんだ」
エースは固い決意を込めて曹操を見つめる。
しばらく互いに目を合わせたまま動かない状態が続き、周りも緊張が膨らんでいく。
そんな中、曹操は一呼吸入れて納得してくれた。
その瞬間、若干張りつめた空気が和らいだ。
「そう……それなら仕方ないわね。これは無理強いもできないわ」
「悪いな」
少し残念そうな曹操に軽く謝ると、曹操は気を取り直して鈴仙達にも聞く。
「すいません……わたしはエースさんと行きます……」
「風もですね～。お兄さんには興味がありますから～」
鈴仙は残念そうに、風はポケ～っと断る。
そして、曹操はこの面子の中で一番喜んでいた三人に聞く。
「あなた達はどうかしら？」
「……」
「な……凪…」

「凪ちゃん……」

曹操の誘いは多分、これで最初で最後。

これを逃せば二度とチャンスはないかもしれない。

真桜と沙和は曹操の元に行きたくて堪らない。

しかし、問題は凪だった。

曹操の元に行くとすれば、つまり、エースとの旅の終わりを意味する。

堅物の親友が好いている男との別れ。

一途な凪にとって、その別れはあまりにも痛いものだ。

それに気付いている二人はどうすることもできなかった。

後は凪次第だった。

「わ……私は…」

凪はゆっくりと唇を震わせながら答える。

「私……は…」

二人は正直、ここまで苦しむ凪を見るのは初めてであり、見たい物ではなかった。

同時に、エースを説得しようと二人が動いた瞬間だった。

「私は……曹操様の元へ行きますっ！！」

凪は想いを振り切る様に力の限り叫んだ。

「な…凪？」

「凪ちゃん…」

「う…うそ…」

驚いたのは三人。

真桜、沙和、そして鈴仙。

この三人は凪のことをよく知っている。

知っているからこそ、曹操の誘いを受けたのは衝撃だった。

「な…凪ちゃん…なんで…」

聞いたのは鈴仙だった。

確かに彼女は国に仕えるために修業し、互いに腕を磨いてきた。

しかし、自分と同じ様に大切な人と一緒にいられて幸せだと思っていた。

「そうだな、確かにこのまま一緒にいたい。離れたくはない」
「なら…！」
「それでは駄目なんだ！！」
「！！」

鈴仙は続けようとしたが、凪の渾身の叫びに鈴仙は体を震わす。

そして、よく見ると凪の目からは大粒の涙が流れていた。

「そんな……今のことだけを優先させて……夢を……諦めたくない……」
「凪…」
「凪ちゃん…」

泣きながら話す親友に二人も一緒になって泣いてしまう。

好きな人と離れる。

凪の心は悲しみに満ちている。

それも、次に会う時には敵として出会い、殺し合うのかもしれない。

それでも、長年の夢だけは諦めたくはなかった。

凪は二つのジレンマを味わっていた。

「……」

エースはそんな凪を黙って見守っていたが、やがて凪に近付いて肩に手を置く。

凪はそれに気付いて泣き顔をエースに向ける。

すると、そこには優しく笑うエースの顔が間近にあった。

「お前は曹操の元に行きたいんだよな？」

「……」

「それが…今のお前の夢なんだよな？」

「……」

エースの優しい問いかけに凪は泣きながらも頷く。

そんな凪を見てエースは「そっか」と言って凪の背中を強めに叩いた。

「あ…」

それに凪はよろめき、体制を立て直してエースの方に振りかえると、そこには今でも優しく笑うエースがいた。

そしてエースは……

「なら……行ってこい」

「「「「！！」」」」

笑いながら言った言葉に凪達も驚愕した。

勝手だとは思うが、彼女達には少なくともエースが退きとめてくれると思っていたからだ。

しかし、その予想は裏切られた。

それについて思わず叫びそうになった凪達の先にエースが口を開く。

「正直言うとな、このままお前を連れて逃げたい、まだ一緒にいてえって思ってる」

「そ…それなら…」

「でもよ、そんなおれのせいでお前の夢は潰したくねえし、お前のことを尊重してやりてえ」

「そ…それは…」

エースにはエースなりの考えがある。

今の話からしてエースの言ってることは事実だろうと彼女達は分かっていた。

だからこそ、何も言えなくなったのだ。

「だから、お前達とは……ここでお別れだ……」

「エース様…」

「兄さん…」

「エースさん……」

凪の他にも真桜と沙和までも涙目になってきた。

いざ、別れると実感すると今までの思い出がフィードバックしてきて悲しくなってきた。

もう、あんな破天荒な旅も修業もできなくなる。

たった数カ月のことだったけれど、とても有意義で、楽しかった濃密な時間だった。

そんな時間とも…ここで終わる。

そう思うと三人は今にも泣き叫びたくなった。

しかし、そんな中でエースだけは涙も浮かべずに笑って言う。

「この先、お前達とは敵として出会うかもしれねえ……」

「「「……」」」

「だけど……これだけは覚えてほしい」

「「「…？」」」

「おれ達の“絆”はどんな形になっても変わりはしないって…」

「「「！！」」」

エースの言葉に真桜と沙和までもが耐えきれずに涙を流す。

「おれ達の過ごしてきた時間は決して嘘なんかじゃない…その時間は確実に存在してたんだ…」

もはや、三人はしゃっくりしか出せず、何も答えられなかった。

「つまり……何が言いてえか分かるか？」

エースは三人の首に腕をからませて言った。

「おれ“達”は…きっとまた……“仲間”だって言い合える日が来る！！」

「「「！！」」」

エースが言った一言に、三人の心が軽くなった気がした。

三人は腕を解いてエースから少し離れると、エースに向き合った。

「兄さん……ごんなどきにぞんな言葉って……反則やで……」

「い”まで……ありがどうなの……」

二人は泣きながらの返事で上手く喋れてはいないが、エースはその意味を受け取った。

その中で凪はというと、再びエースの前にまでやって来て力の無い声で言葉を紡ぐ。

「もし……あなたが敵として会ったのなら……私達はあなたを…倒します…」

「…あぁ」

「……そして倒したら……捕虜としてあなたを曹操様の元で……働いてもらいます……」

「…あぁ」

「もし、そうしたら……私達の“仲間”にしますから……」

「…あぁ」

「その時は……もう一度……“仲間”って……呼んでもいいですか…？」

「…あぁ」

「敵として会わなくても……“仲間”って……呼んで……いいですか？」

「…お前達がそう思ってくれるなら」

その時、凪がエースの腰に腕を回して抱きついた。

涙で濡れた顔をエースの胸板に押し付けて……

「また……会いにきます…」

「待ってるぜ」

それを聞いて、凪はエースから離れて涙を拭いた。

（この温もりともここで別れることになる…けれど…）

凪は深呼吸をして心を落ち着かせ、一段と凛々しい表情をエースに向けて言った。

「いつかまた……あなたに勝ってみせます……エース“さん”」

「へへ…」

凪からの宣戦布告にエースは優しい笑みを不敵な笑みに変えた。

後悔や悲しみのない純粋な笑みだった。

「凪ちゃん……」

そこへ、傍から見ていた鈴仙も凪に…好敵手に声をかける。

鈴仙も凪の心を理解し、エースの元から離れることを責めはしない。

「鈴仙……お前ともいずれ巡り合うだろう」

「うん……その時は決着を付けよう……凪」

互いに握手を交わす。

その握手だけで互いの絆を確かめるには充分だった。

「真桜と沙和も元気で…」

「三人共～。またどこかで会いましょう～」

「もちのろんや！　そん時は絶対に勝ってやるさかい！」

「二人も元気でなの～」

互いに別れの挨拶を交わす光景に曹操は満足そうに見ていた。

「こういう場面も悪くないわね」

そう小さい呟きは見事な晴天の中に溶けていった。

その後、エースは曹操からの詫びとして二つくらい要求した。

まず一つ、『少しの間の食料を恵んでほしい』

そしてもう一つは、『洛陽への道のりを教えてほしい』だった。

あまりの欲のない要求に曹操は少し呆れ、少しの気持ちだと言って路銀までも用意してくれた。

そして、行き先を決めたエース達はその日の内にその場を発つことにした。

そして、現在は激しい戦いを繰り広げた街の門前に凪達に見送られようとしていた。

「私達は早速、この街の再建の任を任されました」
「だから、見送りはここまでや」
「それに時間もないの～」

三人の律儀さにエースは嬉しくなりながらも、軽く手を振る程度で応える。

そして、何も言わずにエース達は旅立つと思っていたが、エースはある程度歩いてから振り向かずに言う。

「……お前等…」
「「「？」」」
「おれはこの先…更に強くなってみせる……だから…」

エースは少し振り向くき、口を吊り上げて言う。

「おれは…更なる“高み”でお前達を待つ」
「「「はいっ！！」」」

その言葉を聞き、三人は大きな声で応えた。

それを聞いたエースは再び視線を戻し、凪達から離れていく。

凪達はそのエース達の背中を見送った。

自分達が目指す、あの背中を記憶に焼き付けるために……

そんな彼女達のやり取りを門の影で見ていた者がいた。

「黄巾党を軽く一蹴する実力に加えて寛大な器、他人を惹きつける魅力……興味深いわ…」

その影は曹操。

完全に気配を絶って彼女達とのやり取りを覗いていた。

最初は野暮かと思ったが、人として、好奇心には勝てなかった。

「あれほどの希有な才能を持った人間……欲しいわね」

彼女は妖艶な笑みを堪えながらその場を静かに去っていった。

「私は覇王……欲しい物は必ず手に入れるわ…」

ある意味では、エースは強大な敵を生み出したかもしれなかった。

## 別れは突然に（後書き）

次回、やっと…あの街に着きます…

## 自業自得（前書き）

そろそろ、春季休業が終わりそう……

ノスタルジー……

それはそうと、これからこの小説は朝、夜の十時に更新しようと思います

この時期は朝の十時での更新をしています

# 自業自得

ここはとある屋敷。

その屋敷の主はいつもの様に仕事をこなしていた。

「ふぅ……今日もこんなに……はぁ…」

その屋敷の主・孫権は朝早くから仕事内容の書かれている巻物の山を見て溜息を洩らす。

しかも、それは全て民の声であった。

孫家の領地を掠め取った袁術が行っている政治の批判が主だったのだが…

その量はまさに、どれだけ袁術が愚かであるかを物語っていた。

「よくもまぁ…どうやったらこれだけ不満を言われるのか…」

そして、そんな愚凡に飼われている自分達の境遇にも溜息をもらしてしまうのであった。

更に、彼女の受難は終わらない。

今、目の前にある内容はあくまで政治だけであり……

「蓮華様。新しい書簡です」

軍関係の書類は信用に足る近衛が持ってきてくれた。

「はぁ……」

「心中お察しします」

「ありがと…思春…」

甘寧が大量の書簡を積み上げると、タワーが出来上がった。

そんな仕事のフルコースに孫権は参ってしまうが、そうも言っていられない。

今の民の不満はやがて袁術を滅ぼす刃となる。

ならば、その刃を孫呉の武器とすれば、いくら袁術といえどひとたまりもない筈。

こうして、孫権が問題を解決していけば支持する声も大きくなっていき、打倒袁術、及びその後の治世に役立つ。

これが建前であり、孫権自身の理由としては純粋に民を助けたかったこともあり、毎日の激務を見事に乗り気っていた。

しかし、その仕事にもある変化が現れていた。

「やっぱり……軍関係の書簡が減ってるな」

「はい。近頃では陳留の曹操が黄巾党討伐に力をいれているようで」

「そうか…」

孫権は背伸びしながら返事すると、一つの書簡が落ちる。

落ちた拍子に広がった書簡は孫権の目に止まり、くぎづけにした。

その中身は…

「『火拳』…か…」

「蓮華様…やはりあの男が…」

「思春…お前もそう思うか…」

二人が思い出すのは数ヶ月前に出会った一人の男。

よく覚えているその名はエース。

呉を誇る猛将を丸腰で打ち負かした謎の人物。

そして、印象的だったのが背中の入刺。

その入刺が世間を賑わす『天の御遣い』の証だと知った時は二人は驚愕した。

「思春は…エースをどんな人柄だと思う?」

「あ奴の…ですか?」

そう言って甘寧はしばらく思い出してみる。

「…詳しくは知り得ませんが、少なくともそこまで悪人とは…」

考えながら言う甘寧に孫権は意外そうな顔をする。

甘寧は役割と性格上、付き合いの浅い人間は信用せず、警戒する。

しかし、今の甘寧はたった一回しか会っていない人間に好評価を下していたのだから。

「意外だな…お前がよくそこまで評価したな」
「人の本質は極限の闘いの中で無意識に表れるものです」
「なるほど、武で語り合ったという訳か…」
「あくまで私個人の意見ですが…」

そう言う甘寧に笑いかけ、窓からまだ淡く照らされる空を見上げる。

（灼熱の御遣い…か…）

孫権は以前に出会った男を思っていた。

その頃、凪と別れたエース達はというと、ただ今渓谷を抜けようとしていたのだった。

「今まで山だった所がもう崖に来たか」
「ですね、それも都に近付いてきたという証拠ですね～」

険しい山道から歩き通しにも関わらず、エースと鈴仙の顔には疲労の色が見えない。

「ア…アニキ……姐さん……はやすぎ…」
「ちょ……休憩……ほしい…」

それと違って部下達の息は絶え絶えとなっており、とてもじゃないが、今日中に渓谷を抜けられるとは思えなかった。

「あ…ごめんなさい。大丈夫ですか？」
「も……もう…限界っす……」

鈴仙はアチャーといった表情で部下に労いの言葉をかける。

それに対してエースは溜息を吐いて呆れる。

「男ならこんな山くらい登ってみせろよ」
「無茶言わんでくださいよ……さっきまであんたが作った火の輪くぐりをずっとやらされたんですから…」
「やっぱりこの人達に『火の輪くぐり』という大道芸は無茶だったのでは？」
「そうか？　火なんて慣れれば怖くねえだろ？」
『『『怖いわ！！』』』

部下全員でビシッと突っ込む姿に鈴仙と風は溜息を吐く。

ちなみに、部下に仕込んでいた芸は全てバギー海賊団がやっていたものをパクったものである。

しかし、その大道芸で金を集める計画も頓挫してしまった。

「そんなことより、やっぱり休もう？　風ちゃんも疲れてそうだし、ね？」
「はい～。お兄さんが遠慮無しに風を置いて先に進んでましたから、追いつくのに体力使ったのです」

それを聞かされたエースは頭を掻いてどうするか考えてみたが、やっぱり置いて行く訳にもいかず、ここでキャンプすることにした。

「よし、じゃあ広い場所を見つけたらそこで休むぞ!!　気合い入れて登れよ!!」

『『『ウス!!』』』

休みという単語を聞いた部下達は疲れが消えた様に立ち直って気持ちのいい返事を返す。

「現金な奴等だな」

そう呟いて再び歩こうとしていたその時。

「いた…!」

「ん?」

後ろで鈴仙が小さい呻きが聞こえ、振り向くと鈴仙が足を抑えてうずくまっていた。

それに気付いたエースや風、部下達も鈴仙の容体に気付いて周りを囲む様に覗きこむ。

「どうした?」

「う…うん……ちょっと……足首が急に…」

そう言ってエースが鈴仙の足を見てみると、足首が若干青くなっており、痙攣していた。

「ちょっとすみません……」

そこに一人の部下がマジマジと足首を見て触ったりする。

エースはその部下が元は衛生兵だと言うことを知っていたため何も言わなかった。

しばらく触診を続けていた部下は頷いてエースに向き直る。

「大丈夫です。ものすごく軽い打撲です。恐らくエースさんとの鍛錬が原因でしょう」

「そっか。ありがとな」

「鈴仙ちゃん、大丈夫ですか？」

「う…うん。ありがとう」

エースは部下に、鈴仙が風に礼を言っている間も周りの部下が心配してソワソワしていた。

「ですが、これ以上歩かせると悪化する可能性があります。安静にすれば今日中には治りますが、できれば寝台に乗せた方が…」

「そうか……」

「エ…エースさん。わたしは大丈夫だから心配しないで？　皆も…ね？」

鈴仙は微笑みかけながら立とうとするが、痙攣する足ではバランスが取れずにすぐ転んでしまう。

そんな鈴仙を見てエースは今後の方針を変える。

「お前等！　悪いけど今日中に街に行って宿を探したい！！　休憩は消えるけどいいか！？」

『『『応！』』』

エース達の計画変更に鈴仙は驚く。

「い、いいよそんな…わたしは大丈夫だし、皆も疲れてるんだから…」

「んなこと言ってもよ、おれが怪我させちまったからな。早く治してやりてえからよ」

「おれ等なら大丈夫ですよ！！　程普さんや程イクさん、兄さんのためなら体の一つや二つくらいお安い御用ですよ！」

一人の部下の言葉に同僚も皆で同意するのを見て鈴仙はアタフタする。

そんな鈴仙に風は優しく笑って諭す。

「ここは皆さんの好意に甘えましょう。鈴仙ちゃんは女の子なんですから」

「そ…そう…？」

鈴仙は皆の顔を見てから少し考える。

そして……

「うん。分かった……ちょっとだけ……甘える…」

「はい、よく言えました～」

風は鈴仙の頭を撫でると、鈴仙は照れて顔を赤くさせる。

そうしている間にエースは部下達を先に送って、この先に街が無い

かを調べに行かせた。

そんな中、鈴仙は片足だけで立とうとする。

しかし、若干辛そうな鈴仙を見てエースは鈴仙に近付く。

「エースさん？」

それに気付いた鈴仙は不思議そうな顔をするが、エースはすぐ傍まで近寄る。

「どうした…きゃっ！」

どうしたのか聞こうとすると、急に鈴仙を抱き上げる。

突然の行動に鈴仙と風はしばらくは何が何だか分からなかった様だが、抱きあげられている鈴仙だけがその事実に気付いて顔を急に紅潮させた。

「エ、エ、エ、エースさん！？　な…何して……！！」

「おいおい、んな暴れんなって」

「だから離して…ひゃん！」

自分が俗に言うお姫様抱っこをされていることに気付き、暴れようとするが、それによってエースに強引に抑えつけられる。

それによってエースの体に益々密着し、暖かい体温が自分の体に伝わってくる。

「ったく……怪我人が変な意地張ってんじゃねーよ…このままいく

ぞ」
「ちょ…ちょっと待って！　なんでこんな格好なの！　もっと別もあるんじゃ…！」
「お前なら背中出しても遠慮して背中に乗っからねえだろ？　だからこうやっとけば不意もつけるからな」
「……それだけ？」
「ああ」
「……ばか…」
「？」

こんな恥ずかしいことを天然でやりきるエースに鈴仙はなぜかガックシきた。

自分が勝手に勘違いしていたのだが、この時、鈴仙は小さい声で呟きながら胸を拳で軽く叩く。

その行動にエースは不思議に思うが、途端に大人しくなったから深く突っ込まない様にした。

それを隣で見ていた風もそんな姿を見た後、トテトテと近くまで寄って来てまたいつぞやの様に背中にしがみつく。

それに気付いたエースは何も言わずに背中の風を見る。

「鈴仙ちゃんだけというのは納得いかないので風も楽させていただきますね？」
「あ～……仕方ねえな」

流石に、非戦闘員且つ、身長も小さい風だけを歩かせる訳にもいかず、エースは嫌な顔をせずに風を受け入れる。

なんとも奇妙で本っっ当～～に羨ましい状況である。

しかし、エース自身は邪な感情は全く無く、単に仲間を助けるとしか思っていない。

それがエースという人間であり、良い所とは分かっているのだが。

「……」

「……」

鈴仙も風も分かっているのだが、そんな彼に納得できないのも事実。

ここまで密着しているのにエースが何の反応もないことに不満を抱いていた。

だけど、この感触も気持ちいいと思える。

二人はそんなことを思いながら顔をエースの体にうずめた。

バキッ！

「ちょっ！　凪!?　どないしたん!?」

「凪ちゃん!!　筆！　筆を強く握り過ぎなの!!」

何故だろう……なんだかイラつく……

「何やら……風が激しくなってきたな…」
「そないなことよりその殺気を抑えんか！！」
「そうなの！　殺気で周りの備品にもヒビが入ってるの！　これ以上備品を壊しちゃまずいのー！」

とある乙女の勘は無敵だった……

「あと少しか……」
「へい。山から見えた時は少し辟易としましたが、案外近くてよかったですね」
「ああ、そしてやっと着いた……」

時間は経ち、エースはとある門の前に立っていた。

長い渓谷を抜け、やっと川のほとりを見つけた。

そして、その川に沿って歩くこと数時間経っていた。（作者の体力の問題で割愛しました）

未だに鈴仙と風を背負っていたのだが、その必要も無くなってきた。
なぜなら、その眼前には目的地…洛陽への検問所が顔を覗かせていたからだ。

「長かったな～」
「長かったね～」

エースと鈴仙は今までの旅を振りかえって懐かしむ。

「懐かしむのはいいですが、早く入って宿を探した方がいいのでは？」

風がおれの耳元で呟く。

それもそうか。

「じゃ、早速行くか」
「ですね～」

そう言ってエースは検問を抜けようとする。

しかし、そこでエースは何かに気付いた。

「？…」

エースも自分の感じた違和感に気付いて脇道の林の中を覗きこむ。

「エースさん？」

「お兄さん？」

その行動を不思議に思った二人は呼びかけるが、エースには聞こえていないのか構わずに林を見渡す。

すると……

「お前等！！　鈴仙と風と一緒に先に行っててくれ！」

前方の部下達に叫ぶと鈴仙をゆっくりと降ろしてやる。

「え？…え？」

「お兄さん？」

「アニキ？」

急に立ち止まって先に行かせるエースの行動に全員が首を傾げる。

それでも、エースの視線は林から動かない。

その先に何かあるのかと全員がエースの視線を辿ってみるが、そこには緑豊かな木々しかない。

それに一層、不思議に思っていると、エースは全員に先に行くように再度促す。

「おれは…野暮用ができた。だから先に行ってくれ」

「野暮用……ですか？」

「だったら私も一緒に…」

エースの真剣な表情に鈴仙は只ならぬ予感を感じたが、エースは眉

ひとつ動かさずにそれを諭す。

「駄目だ。大人数じゃ“奴”に悟られる。ここはおれ一人でいい」

「でも……」

エースの強さを知っている鈴仙でも、ここまで張りつめているエースは見た事が無い。

そこまでエースが警戒する“奴”の言葉もあって心配するが、風がそれを諭す。

「鈴仙ちゃん。行きましょう」

「風ちゃん…でも…」

「大丈夫なのです。怪我している鈴仙ちゃんや疲労している皆さんが一緒にいるよりも、お兄さんの言う通りにした方がいいのです」

「……」

風の言う通り、今の自分達がいても戦力としては期待できそうにない。

それどころか足手まといになる。

それは分かっている。

分かっているけど、肝心な時に力になれない自分が嫌になってくる。

悔しさで拳を震わせるが、エースはそんな鈴仙の頭を少し強めに撫でる。

「そんな顔しなくても、おれはお前等を置いてどこにも行かねえよ。

すぐに追いつくから心配するな」

それを聞いた鈴仙は撫でるエースの手を取って自身の手で包みこむ。

「うん……信じるから…早く帰って来て…」

「ああ」

鈴仙の手を解き、風も背中から下ろしてすぐに林に向かおうとする。

その時、風がエースを呼びとめた。

「お兄さん」

「どうした？」

「宿はとっておきますから、早く帰って来てくださいね」

その言葉にエースは親指を立てて無言で返事をして再び林の中へと駆ける。

あっという間に見えなくなったエースを部下達も心配する。

しかし、風も鈴仙もエースが無事に帰ってくることを信じ、部下達に指示を出して洛陽へと向かったのだった。

まさか……“奴”がここにいるとはな……

だが、ここで見つかったのが運の尽きだったな。

お前だけは逃がさない。

“奴”を見つけてからおれは本能ともいえる“何か”の警報が鳴った。

それは『“奴”を逃がすな』という警告。

そいつを見つけてからおれは必死に追いかけた。

森は“奴”のテリトリー。

少し苦労もしたが、ようやくおれはそいつを追い詰めた。

「もう逃げられねえぞ」

おれの前で堂々たる風格を漂わせるその姿。

何者も屈服させる強靭な角

黒く光る強靭で美しいボディ

「お前を捕まえる」

おれは“奴”に近付く。

地上の王者……ヘラクレスオオカブト！！

「よ～し、動くなよ～」

エースは樹液を吸っているヘラクレスオオカブトにそろりそろりと近寄る。

しかし、流石はカブトムシの王者。

危険を察知して木から飛び去った。

「あ、待て！」

エースは飛び去ったヘラクレスを全力で追い掛けた。

小さい体で木々や枝葉をすり抜けるヘラクレスに対してエースは邪魔な枝葉を腕で払いのけ、場合によっては絶妙な火加減で邪魔な枝葉をカットしていく。

「逃がすかぁぁぁぁ！！」

エースはヘラクレスにまである程度近付いてきたところでダイビングキャッチを試みる。

「うおおおぉぉぉぉぉ！！」

そして、やっとヘラクレスを両手で包みこんだ。

「やった！！」

エースは花が咲いた様な笑顔に変わる。

勢い余って崖に飛び出していたのに気付くまでは……

「……あ……おわぁ！！」

今頃思い出した。

ここは渓谷の近くだったということに……

もちろん、崖の下を見ると水の濁流が見えた。

エースはその濁流に落ちていく。

「やべ！」

咄嗟に崖に生えていた木の枝に捕まってぶら下がる。

「ふぅ……」

エースの気が抜けて安心していると……

ブチブチ…

一難去ってまた一難。

エースの体重に堪えられなくなった枝が折れていく。

「何だ？」

その音が気になって掴んでいた枝を見てみる。

ボキッ

エースが最後に見た光景は、晴れ渡る太陽と青い空が遠ざかっていく奇妙な光景だった。

折れた枝を手に持ちながら、エースは濁流の中に飲みこまれていった。

「～～♪」

所変わって川のほとりでは一人の可憐な少女が鼻歌を歌っていた。

そこは誰も知らない自分と親友だけの秘境。

嫌なこと、悲しいことも包みこんでくれる場所。

花や草の穏やかな香り、川のせせらぎが彼女は好きだった。

色鮮やかな花、華麗に飛びまわる蝶。

透き通る水、泳ぎ回る魚、川上から流れてきた人。

様々な命が様々な形で……

形で……

「え？」

少女は川から流れてきた“何か”凝視する。

「……」

しばらく凝視してから目をこすって再度見てみる。

しかし、その人は消えずに川に沈んでいた。

そして、少女は確信した。

（……もしかして、溺れているんじゃ…）

そう理解した瞬間、少女は慌てて沈んでいる“何か”に駆け寄る。

「あ、あの！　大丈夫ですか！？」

少女は自分の服が濡れるのも構わずに水に飛び込んで白目向いている男に走り寄る。

とりあえず、男の顔だけでも水面上に出し、そのまま陸に上げようとする。

水の中では浮力が加わって比較的簡単に運び出せたが、陸に上げると男の体重がズッシリと戻る。

「う～…重いぃ…」

少女は全身の力を使って男を引っ張り上げる。

少女の忍耐もあって何とか男を芝の上まで運びこんだ。

「へぅ～…と…とにかく助けないと…」

少女は男が息をしていないことに気付き、以前に教わった民間療法で男の介抱に尽力を尽くすのだった。

「大丈夫ですか！？　息をしてください～！」

何気ないこの出会いもまた運命による巡り合わせ。

そのことに気付くのはまだまだ先のことである。

## 自業自得（後書き）

分かる人なら分かるあの人が遂に登場！！

そろそろストックも切れそうですが、このペースでやっていけたらと思っています！

## 自己紹介と社交辞令と謎の影（前書き）

やっとあのおぜう様との会合……

今日の金八は楽しみです

## 自己紹介と社交辞令と謎の影

洛陽

大陸で最も賑わい、発展しているとされる都。

鈴仙は部下達に介抱されながら宿に入る。

曹操から謝礼として充分過ぎる路銀をもらっていたので、手頃の宿さえあれば二、三泊くらい余裕だった。

風が手配してくれた宿に入ると、鈴仙を寝かせる。

元・衛生兵の部下の指示で濡らした手ぬぐいを足首に巻いている。

「はい。安静にしててくださいね」

「はい。ありがとうございます」

治療を終えた鈴仙は部下に礼を言う。

しかし、その顔はどこか浮かない。

その場の全員はその陰りの原因が分かっていた。

十中八九、エースの役に立てなかったことがショックだったのだろう。

それを見越して風が言った。

「あまり自分を責めるものじゃありませんよ？」
「風ちゃん…わたしはそんな…」
「その言葉に説得力が無いですよ」
「……」

抵抗は無駄だと悟った鈴仙は何も言えなくなる。

風はそんな鈴仙の頭を撫でて慰める。

「大丈夫ですよ。お兄さんは破天荒で鈍感ですが、約束は必ず守ってくれます」
「それは…」
「それは私も鈴仙ちゃんも分かっていますから」
「……うん」

鈴仙は静かに布団にもぐりこむ。

そんな鈴仙を一瞥し、風は部下達にも指示をする。

「皆さんはお兄さんが戻るまでできたら仕事をさがしてください。路銀は無限じゃないので」
『『『はい！』』』

元気よく返事する部下を見て微笑んだ後、風も密かにエースの無事を祈るのであった。

「く…ぅ…」

エースは目覚めた。

しかし、エースは忘れていた。

自分がどんな状況か、なぜこんなところにいるのか、そもそも何で今、空に満月が浮かんでいるのか……

重い上半身を起こして辺りを見回すと、そこは涼しい芝が周りに広がっていた。

そこの近くには透き通った川が流れている。

「これは…」

そして、自分の体には毛布が掛けられていた。

「これは一体……」

エースが状況に惑わされていると、近くから声が聞こえた。

「もう大丈夫ですか？」

「誰だ！！」

考え込んでいたのかエースは突然の声に警戒して声の主を睨む様に視線を向ける。

「ひぅ…！」

少女は小さい悲鳴を上げて尻もちをつく。

しかし、エースは警戒を解かずに少女を睨む。

「…何でおれがここで寝ている…お前は何者だ…」

ドスの利いた声で少女に問い掛ける。

一見、小柄で繊細なガラス細工を思わせる少女でもエースは油断する素振りも見せない。

もし、自分を見知らぬこの場所にまで拉致した張本人なら尚更だった。

「あ…あの…私は…」

「……」

「ただ…川上から流れてきたあなたを…ここに上げて……」

「…流れて？」

ここでエースは妙な単語を耳にする。

流れてきた？　おれが？

そこまで言われて、過去のことを振り返ってみる。

（たしか…森でヘラクレスを見つけて…それを追い掛けて…）

ポク　ポク　チーン

「あ」

思い出した、何かも。

ヘラクレスを追い掛けて崖から転落したことも…

（そうか…それで…）

そこから冷静になって考えれば色々と分かった。

周りからは気配も何も感じられず、いるのは少女と自分の二人だけだということ。

何か目的があって連れてこられたとしても、護衛どころか仲間さえもいない。

しかも、目の前の少女からは闘気も殺気も感じられない。

とすると、本当に一般人か…

エースは自分をみて怯える少女を見る。

（…おれの命の恩人か…）

「へぅ…」

エースが少女を見ると、少女は小さい体を更に小さく強張らせる。

そんな少女にエースは頭を下げる。

「え？」

少女は急にエースが頭を下げたことに面喰ってしまう。

「すまねえ。よくよく考えてみりゃ、あんたはおれの命の恩人だ。
そんなあんたを怒鳴っちまったことを許してほしい」

「え…あの…いいですよ。誤解が解けたなら私も満足ですから…」

エースの大人の対応に少女は手と首を振って応える。

そんな彼女にエースは心の中で感謝していると、エースはここで何かを忘れていることに気付いた。

（あれ？　そういえばあいつ等……）

風と鈴仙とその部下達。

そいつ等はどこに……

……

「そうだ！！　洛陽！！」

「ひぅ！」

エースは全てを完全に思い出し、大声をあげたのに少女はビビる。

それでもエースは頭を抱えて苦悩する。

「くそ～…すぐ帰るつもりだったのによ～…どれだけ流されちまったんだおれは…」
「…洛陽？」
エースの呟く目的地を少女は不思議そうに反芻させ、エースに聞いてみる。
「あの…」
「ん？　どうした？」
「あなたは洛陽に行きたかったんですか？」
「ああ、そこでおれの仲間が待ってんだ」
「そうですか……でも、今の時間じゃ検問も閉まっているかと…」
「は！？　なんで！？」
エースは顔を少女に近づけて問い詰めると、少女も少しひるむが、その迫力に堪えてぎこちなく返す。
「えっと…その…最近では洛陽の検問は日暮れになると閉まって、通過することができないんです」
「マ…マジか…」
少女の答えはエースにとって最も都合が悪かった。
ということは、次に検問が開くまで自分は洛陽に行くことができなくなってしまう。
そんな答えが脳内で出された時、エースは四つん這いになって黒いオーラを醸し出す。

明らかに落胆しているエースに少女はアタフタしながらフォローする。

「で、でも大丈夫です！　検問は毎日昼ごろから開いてますから、明日の昼までの辛抱ですよ！！」

「ほ…本当か？」

「はい！　間違いありません！　ですから頑張ってください！」

胸の前でガッツポーズして応援してくれる少女にエースは情けない姿を見られて恥ずかしくはなったが、すぐに立ち直る。

（まあ、おれだけもう一晩野宿すりゃいいか…）

思えば、それほど大変なことではないので、あまり悲観的にはならなかった。

エースは四つん這いの姿から仰向けにゴロンと態勢を変えて天を仰ぎ見る。

「それもそうだな……明日なんかあっという間だな」

エースは寝っ転がった姿で少女を見て、笑って礼を言う。

「色々とありがとな。心配してくれて」

「いえ、困った時はお互い様ですよ」

「そっか……じゃあ早く帰りな。こんな夜おせえと帰りあぶねえぞ」

それに対して少女は首を横に振る。

「大丈夫です。住んでいる所はここからすっごく近いんです。それ

に…」

少女の雰囲気は少し暗くなったことにエースは気付くが、少女はしばらく何も言わなくなってから、また取り繕う様にニッコリと笑って返す。

「えへへ…やっぱりなんでもありません」

「……そうか」

多少気になってしまうが、あまり詮索しすぎるのも悪いと思って深くは突っ込まなかった。

そんなことを思っていると、少女が何気無しに聞いてきた。

「それでですね…寝る場所と夕飯はどうするんですか？」

「え…あぁ…そうだな……」

不意に聞かれて少しチグハグしてしまったが、答えは大体決まっていた。

最近までやってた様に野生の熊か猪を捕まえて食べ、そのまま野宿。

「とりあえず今日一晩は…」

エースが答えようとした時、少女も同時に言う。

「私が使っている小屋にいかがですか？」

「のじゅ…は？」

エースは何気に言われた少女の言葉に絶句した。

一方の少女はというと、エースが驚くのを見て嫌がっているのだと悲観的になってしまう。

「すいません……迷惑ならいいんです…」

「あ、いや、そういうことじゃなくて…」

悲しげな表情を浮かべる少女にエースは慌てて訂正する。

「ただなぁ、初対面のおれをいきなり信用するのは早計じゃねえのか？」

エースとしては当然のことを聞いたつもりだった。

しかし、その少女はそんなエースに優しく微笑んで答える。

「大丈夫です。もし、あなたが悪い人だったら今頃私は無事じゃなかったと思います」

「……おれを助けた時もそんなこと考えてたか？」

「そ…それは…へぅ…」

どうやらそこのところは何も考えてなかったらしい。

しかし、エースの印象としては少女が良い奴だということが分かれば充分だった。

顔を赤くさせて恥ずかしがる少女が何だか面白くて笑って眺めていた。

グゥ～～～～～

「……」

「…お腹すいてるんですね」

しかし、空気の読めていない自身の体内時計が余計なことをしてくれたおかげで今度は自分が恥をかいてしまった。

腹を抑えて何とか音を聞こえないようにするが、音は一向に鳴り止まない。

「クスクス……お腹の虫さんが鳴いてるので私の所にお越しください。ご馳走しますね」

「……いただきます」

彼女から上げ足を取られたエースは観念して彼女の元で世話になることを決めた。

それで彼女の気が済むならそれでもいい。

なにより、さっきから助けられてばっかりだから当然借りも返す。

その時の為に少女の住処を知るのことも踏まえての決定だった。

帰りくらいは守ってやろうと思いながら彼女の後を付いて行こうとすると、彼女ははまたエースに振り向いた。

「申し遅れました。私の性は董、名は卓、字は仲穎です。董卓とお呼びください」

月を背に少女…董卓は文字通り輝くような笑顔をエースに送ると、

エースも口を吊り上げて自己紹介をする。

「申し遅れました。川から流れ着いて助けられたわたしの名はエースと申します」

社交辞令とも言えるお辞儀を董卓にする。

その対応に董卓とエースは笑い合った。

同時刻、洛陽の政を担う屋敷では…

「それでは賈駆殿。明日の晩は董卓殿の元へ向かうので、その時の留守は任せましたぞ？」

「……はい。おまかせください」

城の通路で複数の老人を連れた小柄な男が眼鏡をかけた少女…賈駆と話していた。

小柄な男…張譲自身もそうだが、その後に続く老人達もどう見ても善人とは言えない笑みでニヤニヤしている。

賈駆はそいつ等を見て溢れだす感情を必死に抑える。

（だめ…今こいつ等に反抗しようものなら、月が…）

賈駆は今はいない遠くで監禁されている親友の顔を思い出して体が悔しさで震える。

それを見た張譲はニヤリとほくそ笑み、賈駆にうわべだけの微笑みを浮かべる。

「大丈夫。董卓ちゃんは私達が保護している。こんな世の中だから仕方無い。これも彼女と君達のためなんだよ？」

「……はい」

張譲の言葉にお供の老人は何かを思い出して吹いてしまう。

そんな中で、賈駆は必死に堪えた。

（何が保護よ…あんたの地位が奪われるのを恐れての監禁の間違いね）

心の中で毒づき、失礼します、と張譲の脇をすり抜ける。

「明日のためにゆっくりとお休みになさい」

後ろから聞こえてくる張譲の嫌みに賈駆は怒る。

しかし、心中では怒りの他にも何かに対する自信も含まれていた。

（えぇ…お言葉に甘えさせて、今日はゆっくりと休ませてもらうわ……だから……）

賈駆はある一室の扉の前に立つと、周りに誰もいないかを確認。

そして、中に入ると、そこは真っ暗な部屋だった。

賈駆はあらかじめ持ってきていた蝋燭に火を灯す。

すると、ぼやけた光の中から四人の人影が浮かび上がった。

「呂布、陳宮、張遼、華雄……全員いるわね？」

賈駆の呼びかけに全員が黙って頷く。

影のシルエットもあって、顔の輪郭までは暗くて見えないものの、本人だと確信した。

「それじゃあ……明日の作戦の見直しをするわ…」

賈駆は地図を広げて最終確認にかかる。

それは大切な人を救いだすため。

そのためなら、どんな犠牲も厭わない。

だから……

――――あんた達の命……有意義に使わせてもらうわ

静まり返った夜、波乱の余興が行われていた。

「あらん。意外と早かったわね」

洛陽の裏通り。

そこに、月明かりで照らされた巨漢がクネクネと立っていた。

「左慈ちゃんも暴走しちゃってるから、早く会わないとねん♪」

それだけ言って、巨漢は路地裏の闇へとその身を溶かした。

## 作戦開始（前書き）

そろそろ不定期になってきますが、それでもこの作品をよろしくお願いします

# 作戦開始

「準備はいいか？」
「はい…」
「覚悟よし……行くぞ！」
「！！」

朝、日もまだ出ていない早朝にエースは董卓を背負って屋敷から勢いよく跳び出す。

少女は固く目を瞑って必死にエースにしがみつく。

なぜこうなっているのかは、昨晩のエースが晩飯に誘われた時にまで遡る。

「いや～…食った食った♪」
「はい。お粗末様です」

少女の小屋にお邪魔してもらい、彼女の夕飯を綺麗に平らげたエースは満足そうに腹をさする。

それを見て嬉しそうに微笑む少女はさり気なくお茶も出してくれる。
それを受け取ってエースは一口すすってから気になっていたことを聞いてみる。

「ここには董卓以外にはだれもいねえのか？」
「はい。ここには私だけが住んでいます」
「そうか……友達とかは？」
「大好きな友達なら洛陽にいます。けど…」
「けど？」

董卓の表情が暗くなったことが気になっていると、董卓はエースと自分の食器を集めて台所に向かいながら話す。

「私……ここからあまり離れられないから……もう長い間会えてないんです」
「そうか……って…じゃあお前は食材とかどうしてんだ？」

話を聞いててエースは気になった。
董卓は洛陽に入れないということは話から推測はできた。
それなら小屋の食材や調理家具などの生活必需品はどうやって調達しているのかと。
それには董卓が食器を洗いながら答える。

「私は一応、お城の関係者なのでお城の人が時々やってきて必要な物を持ってきてくれるんです」

「ふーん……お前って結構偉いんだな」
「そんなことないですよ……今だってここで色んな人達に守られているだけなんです…」
「……」
少女の表情からして色んな感情が表れている。
無理に笑っていると思わせる表情を見て、エースは少し考えてみる。
「なぁ…」
「はい。何でしょう?」
「お前って……ここから離れたことが無いんだっけ?」
「はい。森には猛獣や盗賊がいるから行くなって……」
「……森に行きたいって思ったことはあるか?」
エースの質問に少し考えて小さく頷く。
それを確認したエースは腰かけている椅子から勢いよく立ち上がる。
「だったら、おれが連れて行ってやる!」
「え!?」
突然の宣言に董卓は目を丸くして驚く。
しかし、エースはそれに構うこと無く続ける。
「そんな危険って言われている所でも護衛さえいれば問題ねえだろ?」
「え…いいですよ! そんなことしなくても、私は今の生活で充分ですから!」

「でも、行ってみてえんだろ？」
「それは……そうですが、そうしたらエースさんが危険に…」
董卓は手を振って頑なに拒み続ける。
しかし、そんな手もエースに握られて止められる。
「おれはそんな危険な森を通ってきたんだ。あんな森は危険の内には入らねえよ」
「で…でも…そんな…私のわがままに付き合ってもらうなんて悪いです…」
「いいよ。おれの命を助けてもらったことと飯を食わせてもらったことの礼だ。気にすんな」
「そんなつもりでご馳走したんじゃないんですけど…」
何気無しに言うエースに董卓は遠慮がちに言うのだが、エースは今度は手を会わせて董卓に頼みこむ。
「頼む！！　借りはきっちり返さないと男が廃る！！　ここはどうかおれの顔を立ててやってくれ！」
「へぅ……」
エースの必死な頼み込みに董卓追い詰められた様な境遇になるが、やがて折れた。
「……分かりました」
「お？」
「私を…連れ出してくれませんか？」
「あぁ！　そうこなくっちゃな！」

指をパチンと鳴らして喜びを表現する。

そんなエースを尻目に董卓は折れてしまったことに若干の罪悪感を感じてしまっていた。

そんな董卓の気持ちも知らずにエースは既に算段を立てていた。

「それじゃあ森へは…朝早い方がいいな」

「え…あぁ、そうですね…日の出前には出ないと兵士さんがいますから」

「そうか……だったら董卓はもう寝とけ。明日は早いからな」

「え…あの…やっぱり迷惑ですし…悪いです…」

やっぱり、エースに迷惑をかけると思って尻込みしてしまう。

「んなこと別にいいよ。ホラ、早く寝ろって」

「あの…ひゃ…！」

董卓はエースに背中を押されて寝室と思われる部屋の前まで運ばれる。

「じゃあおれはもう行くけど、また明日の朝に出直してくるさ」

「話だけでも聞いてください～」

エースの申し出が素直にありがたいので、董卓は強く言えずにいた。

もう諦めたほうがいいのかな……

董卓がそう思っていると、エースは出口の方へと歩いていたのに気付いた。

「あの、どこに行こうとしてるんですか？」
「どこって……今晩は野宿しようと思ってな」
「そんな……夜は冷えますから…」
「大丈夫。慣れてるから」

エースはそう言って外に出ようとするも、董卓が回り込んで阻止する。

「だめですよ。外で寝る方が危険なんです」
「いや、でも慣れて…」
「それに、お外で寝るよりもこの中で寝てた方が森に行く時の準備もすぐですから」

少し早口で説得する董卓の意見を聞いて、それも一理ありと思い、エースは歩みを止めて中へと戻っていく。

董卓はホッとして胸をなで下ろす。

「にしても、寝床まで世話になっちまうとはな……また借りができちまったな」
「へぅ…気にしなくて大丈夫ですよ…」

純粋な笑顔を向けられた董卓は顔を赤くさせて照れる。

こういった訳でエースは一晩だけ居候することになり、床の上で毛布をかけてもらって一夜を過ごした。

そして、逃避行決行の朝を迎えた。

「ほ～……結構な過保護だな。お前の上司も」
「……」
エースは目の前の巨大な塀を前に、皮肉めいて呟くと、董卓は少し複雑そうな表情に変わる。
国のお偉い連中に吐いた言葉だが、董卓が落ち込んでしまい、内心では焦った。
そこで話を逸らすことにした。
「ま、まぁ、これくらいなら簡単だな。しっかり捕まってな」
「え…なにを…きゃう！！」
董卓がなにかを言う前に、エースが超人的な跳躍で塀を跳び越える。
「……！！」
董卓は目を瞑って跳んだ時と下りる時の衝撃に耐えた。
そして、とてつもなく高い場所からエースは降り立った。

その時の衝撃で董卓の体も揺れる。

「よし、完璧」

そう呟きながら董卓を見てみると、しがみつきながら目を回している董卓が見えた。

「あ～……少しおどかしすぎたか…」

「きゅ～…」

気を紛らわせようとおどかしたのだが、効果バツグンすぎた。

しかし、いつまでも気絶していては面白くない。

「おーい。起きろ～」

「…ふぇ…ふあい…？」

「えーっと、お前の名は？」

「……董卓ですけど…」

「よし、もう大丈夫だな」

エースは簡単に本人が未だに正常かを確かめてから董卓を下ろしてやる。

「よし、これからどうしたい？」

そう言って董卓を見下ろすが、董卓はそっぽを向いていた。

「？　どうした？」

エースが董卓と同じ視線にまで屈むと、董卓はエースを睨む様に見つめてきた。

「怖かったんです…もっと安全に行けたと思うんです」

頬を膨らませて拗ねる董卓にエースは苦笑して謝っておく。

「悪かったって。こうすれば手っ取り早いだろ？　そうしたらそれだけ自由の時間も増えると思ってな」

「そうかもしれませんが……帰りはもっと静かな方がいいです…」

「はい、かしこまりました」

エースは社交辞令の様に頭を下げると、董卓は「いいですよ」と笑って返す。

そして、機嫌を取り戻した董卓と共に二人は森の散策を開始した。

董卓にとって森には初めてのことだらけだった。

「わぁ…綺麗……」

「その花って蜜が結構美味かったぜ」

森固有の花が咲いていたり……

「うおおおぉぉ！　またヘラクレスだ！！　董卓！　そっち行ったぞ！！　捕まえるぞ！！」

「え？…あう～…大きくて怖いです～！」

奇妙な虫を見つけては追いかけたり……

「この実食ってみろよ。美味いぜ？」
「これですか？　あむあむ……あ…美味しい…」
「そうだろ？　おれも旅の時はよくそれ食ってたぜ。あ～ん……苦ぁっ！！」
「エースさん！？」
「げほっごほっ！！　くそ…まだ熟してなかった…」
「あの！　すぐにお水お持ちしますね！」

山の幸を堪能したり…

「位置に着いて……ヨ～イ……ドン！」
「うおおおぉぉぉ！！」
――グオオォォォ！！
――ヒヒーーーーーン！！
「やったぁ！！　一位ゲットーーー！！」
「す…すごいですよ！！　熊と馬よりも速いなんて…！」
――クゥゥ…
――ブルル…
「はは…そう落ち込むなよ。お前等も速かったぞ？」
――ワン！
――ブヒー！
――ピーピー！
――ニャー！
「……動物とお友達になっちゃった…」

動物と触れ合ったりと、董卓は今までにしたこともない体験をたくさんした。

そして、楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、あっという間に夕刻間近になっていた。

空はまだ明るいが、若干、光に赤みが差してきた。

そんな空を見ていた董卓は儚く、今にも消え入りそうに思えた。

そんな董卓に構わず、エースは木製の箱を抱えてすぐ近くまでやってきた。

「大変だ董卓！」

「ふぇ！？　びっくりした～……どうしたんですか？」

「ああ！　聞いてくれ！　やっと……やっとヘラクレスを捕まえたんだ！！」

そう言って箱を開けると中から巨大な虫が姿を現した。

そう言って目を輝かせるエースに董卓は笑ってしまう。

しかし、すぐにまた表情が暗くなりそうになる。

その前に、董卓は悟られない様に言葉で誤魔化す。

「あの、もうそろそろ検問が閉じてしまいます…その前に帰りましょう」
「あ？…もうそんな時間か…」
どうやら気付いてはいなかったらしい。
エースは空を見上げた後、大体の時間を把握した。
「また今日も検問に入れなかったらエースさんのお仲間も心配しますよ？」
「そうだな……また遅れたらあいつ等怒りそうだな…」
いや、絶対怒るだろう。
それを想像したエースは鳥肌になり、素早く荷物をまとめる。
「そうだな…うん。もう帰るか」
「……はい」
董卓の暗い表情に気付かずにエースは帰り支度を整える。
「どこまで送ってやればいい？」
「だ…大丈夫ですよ。また昨日の川のほとりまで行ければ充分ですから」
「そうか……じゃあ送ってやる」
エースはどうしても董卓を送ると聞かず、董卓に動かない様に指示して森の奥に入っていく。
しばらくしてエースが戻ってくると、その手には大きい丸太を担い

でいた。

董卓が何かと思っていると、エースが川のほとりにまで歩いていく。

途中まで歩き、董卓の方を向くと驚くべきことを言った。

「だったら川の流れで下っていきゃすぐだろ？」

エースの言いたいことは丸太に乗って波乗りのように下るのだという。

「その丸太で下るんですか？」

「ああ、おれ達が乗っても沈まなさそうなのを採ってきた」

「だ…大丈夫でしょうか？」

不安がる董卓だが、エースはそんな董卓の頭をポンポン叩いて撫でる。

「心配すんな。こういうのには慣れてんだ。転びはしねえよ」

「…エースさんがそう言うなら…」

董卓はオズオズとエースにおぶさると、エースはそれに笑みを浮かべる。

その後、丸太を川に浮かべてその上に乗る。

そのまま、緩やかなサーフィンで川を下っていく。

「わぁ……」

董卓は川の上を渡るという初めての感覚に心を奪われていた。
董卓にとって、この時間もかけがえのない時間の一つとなった。

心地よかった森のクルージングも終え、しばらく歩いて董卓の小屋が見える所まで董卓を送ってきた。
董卓はその場で立ち止まり、エースに向かい合うとお辞儀をする。
「今日一日ありがとうございました。すっごいドキドキしたけど楽しかったです」
「そうか。それは何よりだ」
ほがらかな笑顔を見せられたエースは笑って答える。
そんなエースに再び笑いかけ、小屋に向かう。
そんな董卓にエースは聞く。
「ちょっと待った」
「？　なんでしょう？」
「……またあの小屋に帰るのか？」
「はい。それがなにか？」
董卓は当たり前なことを聞かれたので、素直に返す。

しかし、董卓は気付いた。

エースの表情は朝の子供の様な表情ではなく、何かを思案する真面目な表情であったことに。

董卓は初めて見た真剣なエースに緊張していた。

そして、エースからの質問で驚愕した。

「……頼めば親友に会わせてやる」

「！！　な…何を…」

体が一瞬震えるのを堪え、普通を装うのだが、完全に隠し切れてはいなかった。

そんな董卓にエースは続ける。

「お前には借りがまだある。お前が望めばそれくらいはしてやる」

「いいえ…私はこれで満足ですから…」

「…それはお前の本心か？」

「え？」

エースの言葉に董卓は虚を突かれた。

最も痛いところを急に突かれて質問の意味が分かっていないのだ」

それでもエースは続ける。

「このまま……親友に……お前が好きな奴に会えないで……お前は

満足できるのか？」

「……それは…」

「おれはできねえ。したくねえ。そういう我慢は大っ嫌いだからよ……お前もそうなんじゃねえのか？」

「……」

会いたい。

董卓は当然、そう考えていた。

しかし、それができればとっくにやっている。

それができないからこうして“保護”されているのだ。

そのことにはエース自身もよく分かっている。

だからこそ、目の前の儚い少女に感情移入した。

エースも愛する者への想いがどれだけ強く、時として自分を苦しめるかを分かっているからだ。

「今ならどうとでもなる。お前さえよければ…」

「…無理です……」

「おれが何とかしてやる。お前への借りはまだ返せてねえんだ」

「…無理ですよ……」

「無理じゃねえ。あれくらいの護衛の一人や二人どうってこと「無理なんです！！　ここから離れたら詠ちゃん達が…！！」…」

エースの言葉を遮って董卓がその小柄な体型から想像できないほどの声を上げる。

その声にも驚きはしたが、黙って聞き受ける。

「駄目なんです…離れられないんです……もし……もし、私が変なことをすれば……お城にいる詠ちゃんが……」

董卓はエースから視線を外す。

その小さな体は震え、顔の辺りから水滴が落ちている。

その間にも少女の本心が明らかになっていく。

「私……お金や権力になんて興味無いのに……皆で街の人の笑顔見て……穏やかに暮らせたらそれで……よかったのに……」

「……」

エースは彼女の独白をただ聞くだけだった。

「……何なんでしょうね……大切な人がこんなにも近くにいるのに……会えないなんて……」

董卓は絶望する。

金と権力にまみれたこの時代に…

なぜこんな目に会わなければならない？

「……すみません…変なこと言って…」

そう言って董卓はエースに目もくれずに小屋へと戻っていった。

「……会いたくても会えない……か…」

エースはそう呟き、その場を後にした。

「董卓殿。お迎えに上がりました」

「……張譲様…」

エースと別れてから幾分か経ち、辺りが漆黒の闇へと包まれていた頃に董卓の小屋に今の洛陽を牛耳る独裁者・張譲が悠然と現れる。

後方に兵を忍ばせて小屋にズカズカと入りこむ。

「……」

「おやおや、お元気が無い様ですが大丈夫ですか？」

「いいえ…問題ありません」

「そうですか…それはなによりです……こんな所で一人で暮らすとなると苦労も絶えないでしょうねぇ」

「……」

董卓は椅子に座らされて囲まれており、張譲の返事にも感情の無い声で返す。

単純に張譲のことが怖いのだ。

人を人とは思わず、役に立たない者は即刻切り捨てる。

民には平気で重税をかけ、民の苦労など認知していない。

董卓はそんな張譲が嫌いだった。

今は離れている仲間もそんな張譲を毛嫌いしていた。

しかし、権力も財力も彼に賛同する兵の数でさえも張譲が全て上をいっていた。

そんな時、ある事件が起こった。

董卓の家臣が次々と暗殺された。

首謀者は隣国の敵勢力と世間では囁かれているが、董卓達は全て知っていた。

穏健派の次期皇帝継承者の董卓を陥れる張譲派の凶行だということに。

穏健派はまだいたのだが、脅迫によって吸収されてしまった。

そして、現在のレジスタンスは賈駆、呂布、張遼、華雄の部隊しか残っていない。

そして、董卓自身には張譲が“提案”という名の“脅迫”が下され

た。

『しばらくの間、あなたを保護させていただきます』

理由は次期後継者の身の安全などとお偉い建前を並べた物だった。

それの真意には誰もが気付いていた。

要は、邪魔だから消えろということだった。

董卓は何も言わずに従うしかなかった。

「そんな生活ともうお別れですよ。ここを離れて別の場所で保護しますよ」

「……はい」

「大丈夫ですよ。住めば都。すぐに新居に慣れますよ」

「……はい」

董卓は言われるがままに兵士に囲まれたまま外へと出る。

もはや、ここに戻ってくることは叶わないだろう。

董卓は遠くに見える森を見つめる。

出会いは突然だったけど、すぐに良い人だと確信させた。

（そして、私に色んな“初めて”をくれた場所……）

そんな場所とも……思い出とも……もう会うことも叶わない。

「……」

董卓はそんな森から視線を逸らし、周りの兵に連行されていった。

（さようなら……）

誰に言った訳でもない心の声は誰にも知らされずに泡沫となって消えた。

しかし、その場の誰一人として気付いてはいなかった。

その小屋の影から人影が現れたことに……

「……」

何を呟くでもなく、その影はユラリと闇の中に消えていったことには気付いていなかった。

「いよいよやね」
「ええ、今、この時が最初で最後の好機！　これを逃せば月も……ボク達も終わりよ」

洛陽の城内では、動きが見られていた。

賈駆は四人を集めて作戦を練っていた。

「まず、呂布と華雄はここに残って敵を殲滅して」
「……（コク）」
「敵を全滅させるんだな？　簡単なことだ」

呂布と華雄と呼ばれた二人の同意を確認して次に進む。

「陳宮は二人の補佐をお願い」
「分かったのです！」
「そして、張遼はボクと一緒に月……董卓の救出を！」
「おっしゃあ！！　任せとき！！」

その他の二人にも命令を下すと、そこに一人の兵が走ってきた。

「報告です！」
「！　どうしたの！？」
「はっ！　張譲及び、董卓様が向かわれた場所が明らかに！！」
「そんで！？」
「ここから北西の洞窟……張譲の私有地にございます！！」
「やっぱり……おいそれと国外に出られるものじゃないと思っていたけど…本当にあそこだったなんてね…」
「ここまでは予想通りやな」

張遼と呼ばれた関西弁の女性は表情を変えずに馬にまたがる。

「ええ、そこに董卓の両親もいる可能性が……もうそこしかない」

「さよか……それじゃあ場所も分かったんや。乗り込むで！！」

『『『応っ！！「おー…」』』』

「よっしゃ！　この統一感の無い号令！！　絶好調やで！！」

そう笑っていると、城門が味方によって開けられるのを確認した！

それを見た張遼は後ろに賈駆を乗せて駆ける。

「これより我が主、董卓を救出する！！　覚悟の補充は充分か！！」

「何を今更！！」

「その意気や！！　行くで賈駆っち！！」

「お願い！！」

張遼の馬は加速し、城門をくぐる。

そして、張遼は離れていく呂布に叫んだ。

「死んでも勝てぇ！！」

この時、国の歴史が動き出した。

運命の賽は

この時を以て

投げられた。

## 潜入、そして絶望（前書き）

やっと里から帰ってきました。

一人暮らしはやっぱり大変でした。

それとここでオリジナル技を募集したいと思います。

何かいい案があったらドシドシ応募お願いします。これでも８つくらいは考えておりますが……皆さんの方がかっこいい技を考えてくれそうなので。

## 潜入、そして絶望

「どうですかな？　ここの住み心地は…」
「……」
董卓は入れられた洞窟の中で何も言わずに俯いていた。
そんな董卓を見て張譲はほくそ笑む。
「まあ、急に引っ越しても戸惑いますから徐々に慣れていけば構いません」
「はい……」
董卓は弱った様な声で返事をし、張譲はその部屋から出る。
そして、その部屋には董卓しかいなくなった。
「……」
董卓はその場に座り込んで何を思っていたのかは分かるはずもない。

「……あそこの中に董卓ちゃんがおるんやな」
「はっ。張譲一派があそこに入ったのは確認済みです」
「そう。ありがとう」

張遼と賈駆は草影から一つの洞窟を覗いて部下から詳細を聞く。

賈駆が調べた所によると、そこは以前の皇帝が避難用に作らせたシェルターだという。

「あそこは厄介ね…敵に占拠されないために複雑な構造になっているのよ…」
「時間をかければかけるほど董卓ちゃんに危険が及ぶっちゅうのに……」

張遼がそうぼやくが、そう作られているのだから当然。

「いつまでもここにいても仕方ないわ。乗り込みましょう」
「ええんか？　賈駆っちはここで待っててもええんやで？」

そう諭すが、賈駆は首を横に振る。

「いいの。この作戦を考えたボクにこそ責任があるわ。だからこの結末を見届けたいの…」
「……」
「あ、でも…霞の足手まといになるようだったらそのまま放っておいてもいいから…」

賈駆が遠慮がちに張遼にそう言うと、それを張遼は笑い飛ばす。

「あんまウチを見くびってもらっちゃあ困るで？　詠の一人や二人…ドーンと来いや！……なんてな♪」

はにかむ張遼に賈駆は自然と目頭が熱くなる。

自分の指示で一番危険な任務に就かせているというのに、嫌な顔一つせずに協力してくれるのだから。

本当に良い仲間だ、と心の中で思っていた。

「どないしたん？」

「いえ、なんでもない……」

「いや、なんでそんな泣きそうに……ハッハ～ン…ま・さ・か、さっきのウチ言葉が嬉しかったんか？」

「な…なんでそうなるのよ！！」

「ええでええで、こういう時くらいは素直になってもエエんやで～」

「だからっ…違うって言ってるでしょ！！　なんでそうなるのよ！！」

図星を言われて慌てふためく賈駆に張遼は笑みを零す。

そして、赤くなって照れている賈駆に言ってみる。

「賈駆っちの余分な力が抜けた所で、もう行くで？」

「……ならもう少し違う形で抜いてくれない？」

「いや～…褒めてもなんも出さんよ？」

「……」

からかってご満悦の張遼を賈駆はジト目で睨む。

とは言っても、緊張が抜けたのは事実。

準備はできた。

それを確認すると、張遼も気を引き締めて偃月刀を握る。

「ご武運を」

「おおきに」

部下からの敬礼を受けた二人は何を言うでもなく、駆けだした。

「それじゃあ、鬼退治の始まりや」

二人は暗い魔の巣窟へと身を投げ出した。

「おい、今なにか音がしなかったか？」

「そうか？　俺は聞こえなかったぞ？」

「……気のせいか」

洞窟内では兵士がうろついて見張りの番をしていた。

蝋燭でボンヤリと照らされた複雑な構造の洞窟を徘徊する兵士がさっきから後を絶えない。

兵士達がその場を去ると、その近くの通路から黒い頭が出てきた。

「ここは迷路か？　さっきから同じとこばっかにしか行かねえし、見張りも結構いやがる」

辺りを警戒しながら愚痴るエースだった。

あの後、別れたと見せかけて董卓の小屋の傍で様子を見ていた。

何となく気になったエースは見張っていたら、動きがあった。

胡散臭い連中が董卓の小屋に押し入ってどこかへ連れ去っていった。

これには何かあると踏んだエースはすぐに連中を尾行して、隠れ家に辿りついた。

しかし、下手に騒ぎを起こせば董卓自身が危険だった。

仕方無く、時間を少し遅らせてから尾行を続けたのだが、洞窟内の構造が複雑すぎて見失ってしまった。

「くそ……ん？」

そう呟きながら進んで行くと、エースはとある部屋を見つけた。

少しポッカリと広かったので、そこに入ってみると…

「……牢屋」

幾重の檻の部屋が並んだ場所に出てきた。

檻の中は冷たい石でできた壁と床だけの殺風景なものだった。

「……」

そんな部屋を見ていると気分が悪くなってきた。

それもその筈、檻の部屋は嘗て、自分が収容されていた大監獄・インペルダウンを彷彿させるものがあった。

あの時のことがフィードバックされてきた。

しかし、エースはその記憶を抑えこんで進む。

もしかしたらここに董卓がいるんじゃないかと期待して…

しかし、進んでも進んでも董卓どころか人一人いない。

「ハズレか……」

そう思ってその場を後にしようかと考えていた時……

「？」

また大きな部屋に出た。

「……少し冷えるな」

エースの言う通り、そこは蝋燭も一本しかなく、辺りはボンヤリとしか見えない。

しかも、なぜかその部屋だけが寒かった。

それでもエースは壁を伝って慎重に部屋を調べていると急に手の感触が変わった。

「？…木？」

さっきまで石の壁だったのに、今は木製の何かを触っていることに気付いた。

そこだけ異質な感じだったからその辺りを自分の火で照らして調べてみる。

すると、そこには取っ手があった。

「なるほど……扉か…」

エースは少しの進展に口を吊り上げる。

エースは取っ手を掴んでゆっくりと開ける。

すると、そこには……

「こ……これは…」

エースも想像していなかった物が入っていた。

「妙やな…」

「えぇ……人がいない……」

同じく、エースよりも後に侵入した張遼と賈駆は不審に思っていた。

ここに侵入してから大分時間が経った。

だというのに、ここまで見てきた見張りの兵士は二、三人くらいしか見ていない。

ここに入った兵はこんなものではないのだが、その姿が見えていな

い。

しかも、それのせいかどんどんと奥に進めていく。

それ自体は二人の望んでいたのだが、ここまでうまくいきすぎているとかえって不気味になってくる。

「……誘われていると見て間違いないわね……」

「なら、退き返すか？」

「でも、そうだとしたら尚更、月が危ない…」

「なら、進むしかないやろ？」

本城の呂布と華雄の応援は正直、期待はできない。

それなら、徹底的に進むしかない。

二人は分かっていた。

そうして進んでいると、二人はとある広い部屋に行き着いた。

「ここは……なんや？」

「暗い……何も見えないわね……」

二人は蝋燭がない一番大きいと思われる空間を見渡していると……

「……賈駆っち」

「？　何か見つけたの？」

張遼が声をかけてきたのを、何かを見つけたのかと思って張遼の顔を見上げる。

しかし、彼女の表情は強張っていた。

しかも、武器を構え出した。

「張遼？」

「……このままウチにくっついとき。離れるんやないで」

「え？」

何を言いたいのかが分かっていない賈駆に張遼は自然に出てきた汗を垂らしながら言う。

「…ウチ等の悪い予感が当たったようやで」

「それってどういう…」

賈駆がなんなのか聞こうとすると……

「このような所で何をしておいでか？　賈文和殿」

「！！」

嫌悪感を引き立たせる声に賈駆は反射的にその張本人の場所を向く。

すると、その場所から蝋燭の火が灯り、憎き敵・張譲の姿が露わになった。

張譲の出現に二人は身構える。

そんなことは気にせずに張譲は続ける。

「私は城の警護を頼んだはずですよ？　賈駆殿」

「あら、皇帝でもないあんたがなんで皇帝の私有地におられるのですか？　ボク達はその注意をしにきたのですが？」
「ふふ……この期に及んで減らず口を叩くとは……大した度胸ですねぇ…そこの張遼殿も」
「ウチの名を気安く呼ぶなや」
不快そうに眉を顰める張遼に張譲はクックと笑って返す。
「いやはや、相変わらず冷たいですな。これだから穏健派は…」
「御託はいらないわ。董卓を返して」
冷たく言い放つ賈駆に張譲は口を開けて笑う。
「はっはっは……国に逆らう逆賊が一国の王に何たる物言い……愉快ですな」
そこまで言うと、笑っていた張譲は急に笑いを止めて、無表情で言い放つ。
「…お前達がいつかこうして反乱を起こすことくらい知っていた。だからこうして待っていたんですよ……」
「「……」」
「こうして餌におびき寄せられる時をねぇ！」
張譲が邪悪さの籠った笑みを賈駆達に向けると、周りの穴が蝋燭の光で照らされてきた。
「うそ……こんなにいたの！？」
「どんだけの穴がこの部屋に繋がってんねん！」

賈駆は予想以上の敵の出現に驚愕し、張遼はこの部屋特有の構造に悪態をついた。

そうしている内に二人の周りには多数の武器を持った兵士が現れた。

「なんで！？　張譲派の人間はもっと少なかったはず……」

その人数は本城で待機している張譲派、そして張譲自身の護衛の人数を足しても数が合わなかった。

最初は張遼さえいてくれれば蹴散らせるくらいの数だと把握していた。

しかし、この洞窟に入ってからその人数が増えたように感じられた。

それに疑問を抱いていると、張譲が自慢げに言ってきた。

「なに…簡単なことですよ……ここいらで『灼熱の御遣い』などという胡散臭い存在に敗れた一行がチラホラとこの地に流れ着きましてな…何かに使えるかと思って金で雇ってみればアッサリと集まりましてねぇ……３００ほど」

「「！！」」

最後の言葉に二人は絶句した。

まさか、こいつ……今日この日のためだけにこいつ等を忍ばせていたのか！？

「くっ！　みみっちい悪知恵だけは賈駆っちよりも断然上やな…」

「あんなのと一緒にしないで！」

二人はしてやられたと思いつめた表情に変わって二人で固まる。

それを見て、張譲は満足したらしく、賊に向かって手を招いて合図をする。

すると、賊の一人が通路へと戻っていく。

その様子を二人は警戒しながらしばらく見ていると、その奥から二人の賊と兵士が現れた。

「月！！」
「月っち！！」

目隠しされ、猿轡を噛まされた董卓が無理矢理連れて来られてきた。

董卓は抵抗することもできずに強引に張譲の元に引き寄せられた。

「御覧なさい。あなた方の目的はこの小娘でしょう」
「月！！」

そのまま跳び出そうとした賈駆だったが、張譲が懐から出した短剣の切っ先が董卓の首に当たる。

賈駆は動きを止め、董卓は僅かな痛みに体を硬直させる。

「きったない奴等や！！　月っちに傷付けたら承知せえへんぞ！」
「自分の立場をお分かりか？　逆賊張遼。不用意な発言は控えてもらおう」
「……くっ！」

張遼が悔しさを堪えながら言われるがままに押し黙る。

それは賈駆も同じであった。

そんな二人を見て張譲は短剣を董卓に押し付けたまま二人に言う。

「もし、あなた方が下手なことをすれば……分かってますね？」

「「……」」

「言うまでもありませんが……このように！」

そう言うと、張譲は短剣をもう片方の手に持ち替え、董卓の首を思いっきり掴む。

「「月！！」」

「……が……ぁぐ…げぼ……」

突然の凶行に二人は悲鳴に似た声を上げ、董卓は猿轡で満足な声も出せずに悶えた。

張譲の強張った表情からして、本気で首を絞めている。

董卓の口からは大量の唾液が垂れ、目からも尋常じゃない量の涙を流した。

「ごぼ……ごぼ…」

「もう止めてぇ！！！　分かったから！！　何もしないからぁ！！！」

「くそっ！！」

賈駆は泣いて許しを乞い、張遼は無抵抗を示すために自慢の武器を思いっきり放り投げる。

それを見た張譲は邪悪な笑みを浮かべて手を放す。

すると、董卓は力無く地面に倒れる。

「はぁっ！…はぁっ！……げほっ！　ごほっ！」

倒れた董卓は荒く咳きこむ。

しかし、張譲はそんな董卓の髪を掴んで無理矢理立たせ、今度は賊の一人に放り投げる様に渡す。

「……後はお前等で遊べ。この二人を始末してからな」

「「なんですって（なんやと）！！」」

張譲の言葉に二人は絶望し、董卓はそれを聞いて必死に暴れて逃れようとするが、男の腕力が邪魔をして満足に動くこともできない。

そんな彼女達を張譲はどこからか用意された椅子に座って観賞する。

まるで、何かのショーを見るかのように腰かけていた。

その時、周りの男達は急に呼吸を荒くして、下劣な死線で董卓を見る。

「ありがとうございやす…張譲様」

「構わん。その二人も好きにしていいが、最後は全員殺せ」

「えぇ…こんな美人をですか？　もったいないな」

「うつけが。それくらいの奴ならまた補充してやる。今の世の中、力が全てであるからな」

その会話に賈駆は涙を流しながらその場の全員を殺すかの様に睨む。

張遼は自分でも体感したことのない怒りを目の前の男達にぶつける。

しかし、投げ出した武器は既に回収されている。

仮に取り返せたとしても賈駆がどうなるか分からない。

（考えろ！……何か良い方法を……！）

張遼は何も浮かばない頭に鞭を打って必死に考える。

だが、そうしている内にも事態は悪化していく。

「……もう耐えらんねえ」

一人の欲情した男が急に下半身を露出させたのだ。

もちろん、その矛先は董卓だった。

「おまっ！……早すぎだろ！！」

「いいぞいいぞー！！」

「ぎゃはははは…！！」

その行動に周りの男は笑いを上げ、張譲は『野蛮人が……』などと呟く。

脂肪の塊が董卓に迫るのを賈駆は泣き叫んで止めようとする。

張遼は耐えられずに董卓の元へと強行突破しようと男達を殴り倒して行こうとするが、到底間に合わない。

董卓も声も出せずに泣き続けることしかできない。

可憐な少女の陰部に男の魔の手が迫ってきていた。

## 潜入、そして絶望（後書き）

次回、やっとエース無双がきます！

お楽しみに

## 一網打尽（前書き）

今回も私自身の考えたオリ技披露です。

どんどん消費しながら皆さんの技も取り入れたいと思ってます。

と言う訳で、まだまだ技の募集をやっておりまーす

# 一網打尽

張譲には何が起こったのかが分からなかった。

それどころか張遼にも賈駆にも分かっていなかった。

欲情して董卓に迫っていた男が今、倒れている。

倒れただけでも驚くべきことなんだろうが、特筆すべきは、その男の状態だった。

男の体の一部分が焦げてる。

その奇妙な男を全員が見ていると……

「おれの恩人だ。手出し無用で頼む」

そんな声が聞こえると、突然に一人の男が颯爽と現れ、董卓の前にまで降り立つ。

「少し待ってろ。すぐに終わる」

「！！」

董卓はその声の正体が分かり、驚愕する。

すると、男は董卓を囲んでいた男を次々と殴り飛ばす。

そして、董卓を押さえていた男が手を離して董卓が落ちる。

それを颯爽と現れた男・エースは上手くキャッチする。

「ほれっ！」

「！！　うわ！」

エースは奪われていた張遼の偃月刀を蹴り上げて張遼に飛ばす。

慌ててキャッチする張遼はいきなりのエースの乱入に戸惑いながらも、その武器で周りの男達を切り捨てる。

その間にエースは張遼の元へと退いて態勢を立て直す。

「月！」

「んな慌てんなって。ほれ」

ヒステリック気味の賈駆に董卓を手渡すと、賈駆は奪い取る様に素早く受け取って目隠しと猿轡を外す。

そして、董卓がうっすらと目を開けると、そこには長い間、会うことも叶わなかった親友の姿があった。

「え…い……ちゃん？」

「そうだよ…ボクだよ…月」

「……本当に詠ちゃんだ…」

そう言って董卓は賈駆と抱き合って喜びを分かち合う。

まさか、こんな日が来るなんて夢にも思っていなかった。

「再会を分かち合っているとこ悪いんだが……お前等はおれ達から

離れるなよ？」

その声で二人は驚いた。

それもそのはず、賈駆は急に現れた男の登場に。

そして、董卓は予想外な人物の登場に驚きを隠せなかった。

「うそ……エースさん…」

「よ。また会ったな」

さっき別れたはずの人との意外な再会に驚愕していた。

「え？　なに？　月はこいつを知ってるの？」

「う…うん…昨日、川から流れてきた旅の人……」

「…はぁ？」

賈駆は親友が何を言っているのか分からなかったが、そんな呑気な状況ではなかったので、張遼がそれを制す。

「今はそんなことはエエ。それよりアンタ…一体何モンや？」

「おれか？　おれは…」

そう言うと、エースは張譲の方を見る。

「こいつ等の敵だ」

それに対して張遼には笑みが浮かぶ。

「今はそれでエエ！　ちょっと手ぇ貸しぃ！」

「そうか？　さっき歩き回ってたら飯見つけてな、満腹だからおれ一人でもいいんだけどよ」
「抜かせ！　武器も持っとらんのに！」
張遼はそう言うが、それをエースは口を吊り上げて笑う。
「なんや？　何がおかしいんや？」
「そりゃあ……お前……ちゃんと武器なら持ってるぜ？」
「持ってるって……その腰の剣か？」
「いや、このナイフは武器じゃねえが……」
そう言うと、エースは両手に炎を灯す。
「んな！？」
「うそ！！」
「え！？」
いきなり現れた炎に張遼、賈駆、董卓は驚愕する。
そんな中、エースはそれを槍の形に形成すると、それを投げる。
「神火　不知火！！」
その槍はまっすぐに飛んでいき、その軌跡上にいた男達に刺さる。
「ぐあっ！」
「がふっ！」
腹に刺さった槍はいっそう燃え上がり、その男達を飲みこんで燃やし尽くす。

それを目の当たりにした男達や董卓達は目も口も開いて驚いている。

そういった中で、エースは口を吊り上げた。

「どうする？　覚悟の無い奴ぁ早く失せな」

そう言うと、男達の中で騒ぐ者が現れた。

――――や…やべぇ……またあいつかよ…

――――そんな…もうやだ…

――――また…火拳かよ……

「「「火拳!?」」」

男達の会話から三人は思わず叫んでしまう。

今、黄巾党と同じくらいに世間を賑わせている天からの使者。

そう噂されるエースのまさかの登場に三人は呆然となってしまう。

「なるほど……あなたが…灼熱の御遣いと呼ばれているお方ですかな？」

そんな中、張譲は悠然とエースの前へと歩み寄ってくる。

「なるほど……手の込んだ仕掛けですな……」

張譲の一言に周りの家臣や兵士は笑い飛ばす。

エースのことを全く信じていない様子であった。

「そんな大道芸で、この人数を相手にするおつもりで？」

すると、周りの男達は剣を抜く。

そんな状況に張遼達は身構える。

そんな中、エースはそんな三人に陽気に警告する。

「お前等はしゃがんでな。すぐ終わる」

「「「……へ？」」」

状況が読めていないのか、エースの笑みを見てそう思った。

だが、エースはそんなことは気にせずに逆立ちする。

そして、手を動かしてカポエイラの様に回り出す。

最初は遅い回転も、段々と速くなっていく。

回っているエースを見て、張譲は呆れたかの様に言う。

「……もう大道芸は結構ですよ」

そう言って張譲は椅子に座りなおして呆れている様に見えた。

張譲は部下に合図をして剣を抜かせる。

しかし、そんな時に異変を目にした。

それに気付いたのは傍で立ちつくしている董卓達三人だった。

エースの回っている足の軌跡上にうっすらと赤い光が見えた。

しかも、回るにつれてその光は強くなっていく。

「…ねぇ……あれって…」

「…うん…多分だけど……」

「言う通りにした方がエエな」

三人は何かを感じ取って言われた通りにすぐにしゃがめる様に構える。

そんな中、エースの足の光はやがて強まり、熱を帯びていく。

エース自身の回転も速くなっており、手から土煙が出るほどだった。

その尋常じゃない様子に男達はたじろぐ。

しかし、そんな男達に張譲は舌打ちし、鞭を打つ。

「何をしている!!　早く切り捨てい!!」

張譲がそう言うと、男達は気を取り直して回っているエースに跳びかかる。

董卓と賈駆は斬られると思って目を瞑り、張遼は跳び出したい衝動を抑えて動かない。

この時、張遼の行動が最も正しかったことはその後に明らかになる。

やがて、エースの回転が最高潮にまで達した時、光は火に、やがては業火へと変貌していた。

そして、エースは放った。

「火斬車(かざぐるま)ぁ！！」

エースはその一振りに力を入れて、炎を飛ばす。

すると、その炎は遠心力によって増したスピードと空気からの抵抗により姿を変える。

それは、まるで熱した刃の様だった。

そして、その刃は円状に広がって何もかもを飲みこんだ。

何もかもを燃やし

何もかもを切り捨てた

「な…なんだ…」

張譲は本日二度目の驚愕を覚えていた。

突然、回っているエースの足が光った所で、あまりの眩しさに目を閉じた。

しかし、何かがさっきまで違ったことに鼻で感じた。

（……さっきから焦げ臭い）

そう思って、閉じていた目を開ける。

そこには……

「なっ！？」

信じられない光景が……

「こ……これって…」

「そんな…うそ…でしょ…」

「な……なんやこれ……」

広がっていた。

咄嗟にしゃがんだ張遼達はしゃがみながら顔を上げて驚愕する。

それもそのはず、エースを中心とした男達のほとんどが倒れていた。

腹に切り傷と火傷を負った状態で……

「……！！」

呆然としていた張譲はさっきから焦げ臭い元に辿りつき、後ろを振り返る。

すると、張譲の座っている椅子の背もたれが焦げながら綺麗に真っ二つにされていた。

そして、背もたれから色々と覗いてみる。

数多に倒れた家臣や賊、そして、深い切れ込みの入った壁。

ここで、張譲は認識した。

これは、目の前で笑っている男の仕業。

確たる証拠は無かったが、張譲は最早そうとしか思えなかった。

そして、確信してしまった。

この男は……本物だと。

「…！！」

その瞬間、張譲は椅子から転げ落ちる様に下りてエースから距離をとろうとする。

その姿は無様だとしか言えないが、今の張譲にそんなことを気にす

る余裕は無かった。

張譲の本能がエースにアラームを鳴らしていたからだ。

床を這いつくばる様に逃げ惑う張譲を見て、男達は次第にエースに恐怖を抱く。

そして、その恐怖に耐えきれなくなった者からその場を逃げる。

――ひぃ！！

――化物ぉ！！

――た…たすけ…

最初に逃げたのは、やはり賊だった。

理由は言うまでもなく、一度味わった恐怖がよみがえったからである。

その悲鳴と火拳の名で次々と逃げる者が続出。

ここまでいけば、もう敵はいなかった。

多くの男が逃げる人の波の間からエースは張譲を睨む。

「ひぃ！！」

そんなエースの視線を受けた張譲の体は硬直し、やがて自由も利かなくなってきた。

「ぐ……が……」

呼吸もまともにできなくなっていき、最後には泡を吹いて倒れた。
それは張譲だけではなく、エースの近くで逃げ惑う人間から張譲と同じ様に気絶する者が現れてきた。
董卓と賈駆は二人で抱き合ってお互いを慰めていた時、張遼は感じていた。
エースから一瞬出された尋常ではない“何か”を
「はぁ……はぁ……」
その証拠に勘の強い張遼はエースの覇王色の覇気にあてられていた。
しかし、何とか耐えきってみせた。
（ホンマに何者なんや……この男…）
未だに息苦しい張遼は声にも出さずにそう考えていた。
しかし、逃げる人間がその場から全員消えた時、エースは力を抜く。
「！！　すーーーーはーーーー！！」
すると、周りの空気が軽くなり、張遼も深い深呼吸をする。
肺に足りなかった分の酸素を取り込むために。
そして、張遼の気分も幾分か良くなったところで改めて周りを見て

みる。

その周りはとんでもないことになっていた。

張譲を含めたその場の男達は全員がエースを中心に泡を吹いて気絶している。

出口の方でも未だに逃げ惑う悲鳴が聞こえる。

一見すれば地獄のようだが、それは紛れもない大どんでん返しの超逆転劇だった。

気を落ちつけた張遼がエースに向き直る。

「あんた……一体何者や……」

張遼の疑問に賈駆も頷く。

「あんた……本当に『火拳』なの…？」

「ん？　まあ、そうだけど？」

あっけらかんと答えるエースに何だか毒気も抜かれそうになるのだが…

そんなことは口に出さずにそれが事実だということを認める。

そんな中で、董卓はというと……

「あの～……エースさん……」

「ん？　どうした？」

董卓はエースに近寄って一番気になっていたことを聞いてみた。

「手から火を出してたんですけど……」

賈駆達はいきなり核心を突くのかと内心ではドキドキしていた……のだが……

「熱くないんですか？」

「「聞くのそっちかよ！！」」

的外れな質問に賈駆と張遼は思いっきりつっこんでしまった。

それに対してエースはというと……

「なんかこれ……トグロを巻いたヘビみてえだな」

「「質問にだけでも答えろ！！」」

洞窟を照らしていた燭台に興味を奪われていたエースに連続でつっこむ。

「こういうのなら城にも一杯ありますよ？」

「へ～……おれは珍しいと思うんだけど……」

エースのマイペースさと董卓の寛大さが調和して、一番重要なことからどんどんと遠ざかっていく。

燭台で盛り上がる二人を見て、賈駆と張遼は盛大に溜息をついた。

「ていうか、ボク達がいない間に月になにがあったのよ……」

「随分と神経が太くなっとるね……」

あまりに変わってしまった様子の董卓を微妙な視線で見つめるしかなかった。

## 一網打尽（後書き）

バイトの面接に行ってきました。

採用されてるといいなー

## 圧倒（前書き）

この前の技の説明がまだだったので今説明します

火斬車（かざぐるま）…足に炎を纏わせ、それを飛ばして斬撃をくらわす。今回の様にサンジの様に回り、ＣＰ９のカクの嵐脚・周断（あまねだち）の要領で飛ばしたり、普通の嵐脚みたいに飛ばせる。

# 圧倒

激動の夜が明けた頃、洛陽の民は騒いでいた。

それもそのはず、一夜…たった一夜で国の歴史が変わったからだ。

張譲が墜ちた。

街は驚きと喜びに溢れていた。

張譲に実権を握らせてから、人々の税が上がり、物価も上がっていた。

そう思っていた矢先の吉報とも言えた。

どんな事情があって張譲が失脚したのかは誰も分からない。

だけど、もはやどうでもよかった。

今はとにかく、長い間続いた地獄からの脱却を人々は喜び尽くしていた。

笑う者もいれば泣く者もいる。

とある宿屋の中では様々なドラマが繰り広げられていた。

「…ヒク……グス……」

目を真っ赤にして涙を流す鈴仙。

「……お兄さん…」

鈴仙を撫でながらジト目で睨む風。

『『『……』』』

何とも言えない感じでその場を見守る部下達。

そして……

「なんだ……結構元気そうじゃねえか…」

少し追い詰められた感じのエースがいた。

董卓を救出したエース達は洞窟を抜け、張譲を拘束した後に解散した。

董卓はエースに礼がしたいと言って城に招こうとしたが、エースは風達のこともあったので拒否する。

しかし、そこは董卓も譲らず、絶対に恩は返したいとのこと。

賈駆はまだ未知なることが多いエースを招くのに、少し渋っていた。

それと打って変わって、張遼はエースの実力に興味を持ったらしく、董卓と結託して城に来るように迫った。

あまりに二人がしつこかったからエースは風達と会ったらすぐに城に行くと、ヤケクソで同意してしまった。

そんなエースを賈駆が同情するような目で見ていたのを思い出すと、今でも恥ずかしい。

そして、風達の宿を探しまわり、少し時間をかけて見つけた。

そんな中、エースはいつもの感じで扉を開けたら鈴仙が泣いて跳びついてきた。

エースが困惑する中、鈴仙は泣きじゃくる声で風、そして部下達がそこにやってきた。

そして、事情を聞くためにエースを正座させている今に至る。

「いや～…なんつーか……結構時間かかっちまって…」

「本当だよ！　一日も帰らないなんて！……」

「まったくです。正直、風も心配でご飯十杯しか食べられなかったんですよ？」

「……面目ない」
（（（十杯って…むしろ食い過ぎじゃね？））））

風の言葉にエースは疑問を抱いていなかった様だったので部下達が代わりに心の中でつっこんだ。

「風よりも鈴仙ちゃんがひどかったんですよ？　必要以上に責任感じてお兄さんを助けに行こうと跳び出そうとするし、昨夜なんて泣いたんですよ？」
「そ…そんな…気に病むことでも……」
「最後のお兄さんの言葉と雰囲気から只事ではないと誰でも思うのですよ」

いつもより風の言葉にトゲを感じるエースはこの状況を打破しようと咄嗟の行動にはいる。

「鈴仙！！」
「…うぐ…ひく……」
「おれは遂に奴を見つけたんだホラ！」

エースはどこからか取り出した虫カゴを出してふたを開いて見せる。

「見ろ！　この見事なボディのヘラクレス…」
「うわあああん！！」

バキャ

「あああああ！！　苦労して捕まえたヘラクレスオオカブトがぁぁぁ！！」
「ふえぇぇぇぇん！！」

鈴仙は虫カゴを殴って粉砕すると、その中からヘラクレスオオカブトが飛び出して窓から逃げて行った。

普段ならそこで怒るはずなのだが、更に泣きだした鈴仙を見て見た事もないほどうろたえる。

「お…おい……なんで泣くんだよ…」

「いやいや、これほど心配させて、原因が虫の採集なんて言えば泣きたくもなりますよ」

「おっかしいな……弟だとこれで泣き止むんだけどな…」

「お兄さん……女心をなんだと思っているのですか？」

これには部下達さえも呆れるしかない。

エースのずれた常識には何を言っても無駄だと思ってしまう。

しかし、このまま鈴仙を泣かせ続けるのも話が進まないから風はエースに耳打ちする。

「お兄さん。お兄さん」

「…なんだ？」

「鈴仙ちゃんに……してあげてください。そうすれば治まります」

「？　そんなことでいいのか？」

「乙女心の分からないお兄さんに任せてたらこのまま平行線です」

「……分かった」

釈然としないエースだが、ここは風の言う乙女心とやらに任せるしかなかった。

エースは再び鈴仙に近付く。

そして……

「……ふえ…」

鈴仙の頭を胸に押し当て、背中をさすってやる。

兎の耳が顔に纏わりつくが、気にはせずに背中や頭をさすってやる。

エースとしては仲間と交わすハグとしか認識していなかった。

エースは何も言わずに風に言われた通りに抱いたまま背中をさすってやる。

そして、鈴仙はその心地よさに段々と目を閉じていく。

「……ぐぅ…」

ここで完全に眠ってしまった。

寝たのに気付いたエースはゆっくりとベッドに運んで寝かせてやる。

「こいつ……こんなに眠たかったのか…」

「はい。お兄さんの大袈裟な芝居のせいで心配してまして、昨日は寝てないと思いますよ？」

「……悪いことしちまったな」

ベッドの上でスヤスヤ眠る鈴仙に溜息をつく。

ここでエースは一つ学んだ。

弟と妹とは別の生き物だということを。

そんなことを考えていると、同時にエースは思い出した。

「そうだ。風」

「はい？　何でしょう」

そう言うと、エースは鈴仙を背負って風に言う。

「ちょっとお呼ばれされちまった」

「お…お待ちしておりました」

「うおおお！　でっけえなぁ！」

「……」

『『『……』』』

現在、エース達は城の巨大な城門を開けてもらっている。

有名なエースに緊張している兵士は城門を開け、エースは呑気にその巨大な門を見上げてテンションが上がっている。

エースとは対称に風と部下達はいきなりの大物からの誘いに驚いている。

そんなことも知らずにエースは開かれた城門に悠然と入っていく。

風達も慌ててエースの後を追う。

ちなみにエースは寝ている鈴仙を背負っている。

一行は兵士に案内されて中庭を横切る間は周りから奇異の視線で注目されていた。

その様子から城中でエースの名は知られているようだ。

そのまま中に入ろうとすると、風は提案する。

「そろそろ、鈴仙ちゃんも起こした方がいいかと」

「…それもそうだな」

エースは背中の鈴仙を揺する。

「ん……ぅん…」

「ほら、早く起きろ」

「…ふにゅ……」

更に揺すると、重たい瞼をゆっくり開ける。

しかし、本人は未だ虚ろだ。

「……うん？」
「ほら。早く起きろ」
「……にゃふ♪」

夢から覚めずにエースに可愛い声を出して顔を押し付ける鈴仙に風は肩を叩いて聞いてみる。

「鈴仙ちゃん。聞こえてますか？」
「……うん…」
「今、鈴仙ちゃんはお兄さんの背中にくっついています」
「……ん」
「しかも、ここは洛陽の現・太守の董卓様のお屋敷ですよ～」
「……たい…しゅ？」

ここで鈴仙の覚めかかってきた思考がさっきの言葉を反芻する。

たいしゅって……太守様？

なんでそんな所にいるのだ？

これは流石に冗談だろう。

だけど、気になることがある。

自分の態勢がどうもおかしいのだ。

普通に眠っていたのに、どうしておぶさっているのか。

その温もりが心地よかったので変な声を出して顔をうずめたことは恥ずかしい。

でも、この布団はなんか固すぎる……

鈴仙はゆっくりと目を開ける。

「やっとお目覚めだな」

「……」

エースの顔が間近にクローズアップされているのにフリーズ。

その後に聞こえた悲鳴は城中に響いた。

「忙しい時間を割いてまでのご足労、感謝致します」

玉座に優雅に座る董卓の前では盛大な晩餐会が行われていた。

巨大なテーブルには豪華な食事が所せましと並べられており、そこで緊張している鈴仙といつも通りの風と一緒に呼ばれた部下達、そして……

「むぐぐぐぐぐぐ……！」

一心不乱に料理にかぶりつくエースもいた。

エースの食欲はとんでもなく、大盛りの皿に乗っかった料理はどんどん空になっていく。

それなのに周りの反応は今まで見てきたのと違って反応が薄い。

ここは結構驚くべき所なのに……

「まったく……恋並の食欲ね……」

遠目で見ていた賈駆も初めて見るエースの食欲に驚愕と呆れの混ざった溜息を吐く。

その他にも董卓の傍で控える張遼はエースと闘いたくてウズウズし、華雄はそのエースを見定めようと凝視する。

そして、董卓軍最大の武・呂布は……

「……（じゅる…）」

「ふいへえわはほわえおうえっへ（食いてえならおまえも食えって）」

「……いいの？　これ…お前達の料理…」

「（ごくん）……何だ食わねえのか？」

「……食べる」
「そうこなくちゃ」
エースの差し出した料理を皮切りに一緒にご馳走を頬張り始めた。
そして、その腹心の陳宮はというと……
「ちんきゅーきーっく！！」
エースの背後から我流の飛び蹴りを喰らわそうとしていた。
「あ、落ちた」
スカ　ドカーーーーン
「陳宮、うるさい」
エースが落ちた肉を拾う際にしゃがんで陳宮の攻撃を避けた。
ご馳走に突っ込んだ陳宮を呂布が静かに注意する。
「おいおい、腹減ったからってダイブするこたぁねえだろ。ちゃんと席に座って食えよ」
「そんな訳ありますかーーー！！」
顔をグシャグシャに汚して勢い良くエースの前に詰め寄る。
「お前が呂布殿を誘惑させるから、ねねが正義の鉄槌を下そうとしたのです！！」
「ねね、エースに失礼」

「恋殿～…このような胡散臭い奴をかばわないでください～」
「はは…！　生意気で元気な嬢ちゃんだ。これは将来大物になるぜ！」
「ふふん。ねねは飛将軍呂布殿の軍師なのですから大物は当然なのです！！　それとねねを子供扱いするななのです！！」
エースの天然が陳宮を追い詰めているのを見て、周囲の人達は苦笑する。
そんな中、陳宮は勢いで言った。
「大体、お前みたいな飄々とした奴が今、噂の『灼熱の御遣い』だとは信じられないのです！！」
「たしかに、陳宮の言う通りだ」
そこで華雄も出てきた。
その発言に風と鈴仙、そして部下達の何か言いたげな視線を華雄にぶつける。
それにも動じずに華雄は毅然と言い放つ。
「たしかに董卓様を助けてくれた手助けをしたのには感謝している。それに董卓様、賈駆、張遼が言うのだから事実だろうが、お前が本物とは限らんぞ」
そう言った後、陳宮が続ける。
「この噂が広がった同時期に各地で御遣いを名乗る偽物が現れたのですよ」

「それでお兄さんが疑われているのですね？」
「そういうこっちゃ！！」
風がそう続けると、突然張遼がエースに詰め寄った。
己の武器を持参して。
「正直あの時の出来事がまだ夢だと思ってんや！！　せやから闘え！！」
「自分の欲望剥き出しですよ？」
鈴仙のサラッとした突っ込みで食べ続けているエースと呂布以外の全員が同意する。
それに対して、張遼はもはや聞く耳を持たない。
「うるさいっちゅーねん！　もう闘わせろーー！」
エースに駄々をこねる張遼にエースもいい加減引いてきた。
対応に困っていると、風が提案した。
「もう闘ってみてはどうですか？」
「え？」
突然の提案にエースも首を傾げる。
「張遼さんも闘って納得し、お兄さんの疑いも晴れるならそれでよろしいのでは？」

そう言われると確かにそうだ……

「よし、やろう」

「決断早っ！！」

エースのアッサリした答えに詠の突っ込みが響いた。

「よっしゃあかかって来いや！！」

中庭の真ん中にはエースと武器を構える張遼が互いに向き合っている。

テンションが上がっている張遼に対してエースは手ぶらで飄々としている。

その様子を董卓軍全員と風達、それと董卓軍兵士が覗いていた。

――――張遼将軍と手ぶらでやる気なのか？

――いや、なんでもあの男が噂の……
――いや、それにしたって手ぶらなんて……死ぬ気か？
――また偽物じゃねえのか？

風はもうすぐでその声が消えることを楽しみにしていた。

そして、呂布はなんとなく見ているが、華雄も兵士と同じ意見だった。

「張遼相手に得物も無し……勝負あったな」
「いいえ、エースさんの武自体もとんでもないですから…油断すれば痛い目見ますよ？」
「ほう…それは楽しみだな」
「む……エースさーーん！　絶対に勝ってーー！！」

華雄の挑発に思える態度に対抗意識を見せる。

そんな妹分に少し呆れるが、すぐに持ち直して張遼と向き合う。

「それじゃあ、あんたにもおれの修業に付き合ってもらうぜ？」
「やれるもんなら……」

その時、張遼が尋常ではない速度で駆けだした。

「やってみい！！」
「！！」

意外と速かった張遼に少し眉を動かすが、後ろに跳んで距離を離す。

しかし……

「逃がすかぁ！」
「おっと」

張遼は咄嗟にもう一歩踏み出して偃月刀を振るう。

横一閃のそれをエースはしゃがんで避ける。

「まだまだぁ！」
「落ち着きのねえ奴だな」

負けずに張遼は突きを放つも、それをジャンプで避けて偃月刀の矢先に着地する。

「おらぁ！」

張遼も偃月刀を振るってエースを払うも、空中で態勢を直して華麗に着地する。

「いい加減…」

エースに突っ込んで刃を振るうが避けられる。

「本気だせぇ！！」

その時、張遼の力任せの振り下ろし攻撃をサイドステップで避けると、その場所の地面が割れる。

「そうだな…様子見はこれくらいにしとくぜ」

避けたエースが張遼の目を見てそう言うと、今度はエースが魅せる。
エースの両手から出た炎はやがて、その身を包んで張遼へと向かう。

「陽炎！！」
「んな！？」

その火のタックルを上半身だけを捻って避ける。

「なんですとーーー！！！」
「なっ！？」
「！！」
「うわ…」
「すごぉい…」

その様子を見ていた陳宮、華雄、呂布、賈駆、董卓が目をカッと見開いて驚愕する。

もちろん、周りのギャラリーも突然にザワザワし始める。

一度見た賈駆と董卓、張遼でさえも驚愕してしまう。

「そらそらぁ！　どうしたぁ！」
「ぐっ…く…」

その合間に近付いてきた火の拳のラッシュを必死に武器で弾いたり、体を動かして避ける。

ドガガガガガガガガガ　ヒュ　ドカカカカ…

いつまでも受け続ける訳にはいかない張遼はラッシュの隙を見て反撃する。

「く…そぉ！」
「ふっ！」

しかし、エースの死角からふるったつもりの横一閃も、エースは刃の腹を蹴りあげて軌道をずらす。

「ちょお！…マジかいな！」

自分の間合いであるはずなのに、攻撃が全てが不規則な動きで防がれるか、避けられる。

（熱が伝わって武器も熱い！　おまけに紙一重で避けても結構熱い！）

張遼は至近距離での戦闘よりも中間距離に持ち込みたいのだが、エースの爆発的な突進がそれを許そうとしない。

ここは少し距離をおこうと思った張遼は一気にエースとの距離を大きく開ける。

しかし、エース相手にそれだけはしてはならない。

「火銃！！」
「え？…うわ！　危なっ！！」

エースの指から連続で放たれた小さな火の弾丸を張遼は初見で避けた。

彼女の反射神経が超人的だったのが幸いしたようなのだが、その後が問題であった。

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ

「ちょお！　こんなのアリかいな！！」

ガキガキガキガキガキン

火銃を偃月刀で叩き落とすも、数が多すぎて中々抜け出せない。

ジリ貧になってきた張遼がこの後の行動について考えていると、偃月刀に十字架の形の光が当たっていることに気付く。

「十字火！」

「しまっ…！　うわぁ！！」

気付いた時には十の形の炎が目の前に近付いており、不可避だと思って武器で防ぐ。

その火は爆発し、武器もろとも吹き飛ばされてその場に倒れる。

「いった～…」

張遼が立ち上がろうとすると、そこに影が差す。

「これで終わりだ」

「！！」

その影が跳躍しているエースだと知って慌ててその場から離れようとする。

「炎戒！！」

エースは跳びながら両手の炎を周りに放射して周りに展開させる。

そんな中で、風の言葉を思い出した。

『派手な技で印象付けられれば信憑性も増して、後々が楽ですよ？』

派手と言っても『火拳』『炎帝』などはやり過ぎて城も壊すから却下。

そんな中、エースはこの技を選んだ。

「火柱！！」

エースの周りの炎が勢いを増して張遼に襲いかかってくる。

それを見た張遼は慌ててそこから跳んで避ける。

しかし、極太の火柱が地面に衝突するとその周りを熱風の風圧が襲いかかる。

「どわあああぁぁ！！」

それに巻き込まれた張遼は吹き飛ばされ、城壁に激突する。

「ぐはっ！」

張遼はズルズルと地面に崩れる。

エースとしてもできる限り、火加減もしたから死んだことはない。

しかし、意外と強く出したため、火の風は半径十五メートルくらいに広がってあらゆる物を燃やす。

『『『！！！！！！！！！』』』

それを目にした鈴仙と風、部下達を含め、董卓軍将軍とその兵士達も目を飛び出させて驚愕した。

董卓はあまりの驚きに気絶し、呂布は目を真ん丸に熱風に耐えながら凝視していた。

やがて、熱風は割と簡単に治まり、焼け焦げて陥没した地面にエースが悠然と立っていた。

驚きで誰も動けないギャラリーを見て、こう呟く。

「これで満足かい？」

口を吊り上げて言ったエースの言葉がこの空間を掌握した。

## 圧倒（後書き）

次回からはしばらく日常を書いていきます。

## とある火拳の日常（リアル）（前書き）

そろそろ大学が始まり、サークルとバイトも始まりますが、できるだけ早めに更新し、１０時、又は２２時に更新していきたいと思います。

「火銃！！」
「く……ぁ…」

現在、エースは華雄に火銃を連発している。

華雄はそれに対して防御しかできずに一回り大きい斧で身を守ることしかできない。

その弾丸の嵐から抜け出すことしかできなくなっている。

そんな中、エースは弾丸を撃つのを止めて華雄の懐に一気に潜りこむ。

「懐がお留守だな！」
「ぐふっ！」

エースのボディブローが華雄の腹部に突き刺さり、華雄は崩れ落ちる。

「なんだ。こんなもんか？」

エースは腹を押さえて倒れている華雄に笑みを浮かべて言う。

それを見ていた張遼は笑いながら言う。

「なんや華雄！　威勢良く勝負挑んでおいてアッサリやられたやん！」

「ち…違う…エースがあんな攻撃ばかりするから……」

痛みを堪えた華雄が苦しげに言い訳をするが、張遼がそれを否定する。

「アホか。エースに全力をださせることのできん華雄が悪い。撃ち合いがしたけりゃエースに少しでも近付き！」

「ぐぬぬぬぬ…」

的確な指摘に華雄も何も言えずに唸るしかできなくなった。

現在、エースは華雄とその前に張遼と手合わせをしていた。

流石は正規の軍。

戦闘も鈴仙とは一味違ったものがあって、修業する時の緊張感もあって最適だった。

そもそも、エースは現在では董卓の下にいることを了承した。

元々は管賂を探しに洛陽にまで来たというのに、管賂がいないのならまた探しに行こうとしていた。

しかし、そこで賈駆からの提案があった。

この城で衣食住を世話して管賂に伝わる情報は逐一連絡すると……

傍から聞けばとても美味しすぎる条件であり、誰もが怪しがった。

そして案の定、エースにも条件が出された。

時々でいいから街に繰り出て警邏をしてほしいとのこと。

エースとしてはそれだけのことで協力してくれるのはとてもありがたいことだった。

この洛陽は今まさに大陸で最も発展し、物流が盛んな国。

各地を転々とする管賂なら高い確率でこの洛陽にやってくると説明したらエースも納得した。

そして、それには賈駆の思惑もあった。

見た限りではエースは最低限の文字は知っていても（炒飯とか餃子とか…）書くことはできそうもない。

というより本人から聞いた。

そこは何となく分かっていたので、どうということはなかった。

今の問題は治安である。

君主が移り変わる節目には政治を根本から見直す必要がある。

その合間に悪事を働く者が現れる。

そこで大いに役立ってくるのはエースの風評である。

エースの火拳の名は既に洛陽の住民の心に多大な安心をもたらし、悪党には多大のストレスを与える。

これほどまでに有効で手っ取り早い防衛手段は今の段階では無い。

そう考えた賈駆はエースに『街を見回って不審者がいれば捕まえる』という条件をだした。

それを出されたエースは少し考えてしまった。

こっちとしては自由に過ごしていきたいのに、海軍のような規律厳守の所に入るのはあまり気が進まなかった。

しかし、風や鈴仙のこともあり、なにより董卓への礼がまだだったことも考えた。

川から拾って救ってくれたことの恩は張譲からの救出で、食事を作ってくれたことの恩は森へ連れ出したことで返した。

しかし、一晩泊まらせてくれた恩はまだ返せていなかったのでエースは自分が少し我慢することで賈駆との取引に応じた。

そして、今に至るのだが……

「よっしゃあ！　おれが勝ったから持ち金いただきな♪」

「く…ぬぬぬ…」

「くっっっっそ～～～～！　エエ加減に勝って取り戻したる！！」

正直、結構楽しい。

正規な軍のはずなのに酒代を賭けての勝負とか、やってることは海

賊の時となんら変わらない。

しかも、警邏という時間には街を練り歩いて仲良くなった奴等と話したりするだけで金までもらえるのだからこれほど楽しいことはない。

時々、悪事を働く者を完膚無きまでに叩きのめしたりはするけど。

風はその智謀を、鈴仙はその戦闘力と指揮能力の可能性を買われてエースと一緒に董卓の下で落ち付いている。

「こらぁ！！　あんた達ぃ！　また賭けで闘ってるわね！！」
「やべっ、賈駆だ」
「ちょお待ちぃ！　まだウチとの決闘はまだ終わってへんで！」
「私とも闘え！！」
「ちったぁ学習せぇ！！　さっき負けたやろ！！」
「どうでもいいわよ！！　下らない理由で闘ってたら兵にも示しがつかない…って待ちなさいエース！！　城壁を跳び越えて逃げるな！！」

中庭に突如現れた賈駆に気付くとエースは一目散に逃げ出した。

「あぁんエースぅ…ウチを置いてくなんていけず～」
「黙れ！！　この後すぐに執務室で話を付けるわよ！！」
「え～…」
「自業自得だな。張遼」
「華雄！　あんたもよ！！」
「なんだと！？」

董卓と風は中庭で賈駆に叱り、叱られる光景を屋敷の中から微笑ま

しく眺めている。

「やれやれ、またここに帰ってくるというのに……お兄さんだけ大目玉ですね～」

「クスクス……そうですね」

嬉しそうに眺める董卓を見た風は董卓に聞いてみた。

「董卓様はお兄さんをどう思いますか？」

「エースさん…ですか？」

風はそれに頷くと董卓はにこやかに言う。

「そうですね……とても面白くて、強いお方だと…」

「本当はそうですよね～。あんな姿見たら分からなくなりますけど」

「ふふ…程イクさんは信用しているのですね」

「はい……別の意味でも信用できる……と言ってもいいでしょう」

その言葉に董卓が頭を捻ると、風は何気無しに答える。

「お兄さんは自分に向けられる好意には疎いのですよ」

「？　それはどういう…」

董卓が風の言ってることが分からず、聞き返そうとすると、扉が開いて書類を抱えた鈴仙がやってきた。

「すいませ～ん。また追加です」

「あ、ありがとうございます」

話が逸れ、三人はまた仕事にとりかかる。

（お兄さんは風達の根本的な気持ちが分かってないことは、いずれ知ることになるでしょう）

そう思いながら董卓に見えぬ聞こえぬのエールを送ってやった。

「御遣い様。こんなところでどうしました？」

「いや、何でも…」

エースは茶屋で饅頭を頬張りながら主人と話している。

あれから大分経ったので、飛び出してきたのはいいが帰りづらくなっていた。

帰ったら賈駆の説教が待ってると思うと帰りづらい。

「はぁ……」

頭上で呑気に輝いている太陽がうらめしい。

そんなことを思っていると……

「エース？」

「ん？　あぁ…呂布か。もう掃除は終わったのか？」

「……（コク）」

「そうか。なら一緒に食うか？」

エースは饅頭の皿を差し出しながら笑って提案すると、呂布は少し考える。

「……いいの？」

「別にいいよ。一人よりも大人数で食ったほうが楽しいからよ」

「……（コク）」

一回頷くと、呂布はエースの横にちょこんと座って皿から饅頭を一つパクリ。

「……美味しい」

「だろ？　最近できてよ、良い匂いだったから食ってみたらうめえんだ」

「……もっと食べていい？」

「おお、食え食え。おばちゃーん！　もう二皿おかわりー！」

――はいよ！

威勢のいい声が店の中から響いてきた時、急にやってきた。

「ちんきゅう……きーーーっく！！」

外からの威勢のいい声の主はエースの元へとミサイルの様に直進し

てくる。

しかし……

パシ

「え？」

「ねね…うるさい」

「うきゃ！」

呂布に阻まれた陳宮はそのままポイと投げ出された。

しかし、陳宮は慣れた様子で猫顔負けの着地を見せる。

「はは…これで十三回目の奇襲。そして失敗だな」

「今のは違うのです！！　お前は何もしてないのです！！」

「まあ、次があるさ。お前も遠慮せずに食え」

「ありがとうです…て、ねねまでも買収されてたまりますか！！」

こんなじゃれ合いはこの洛陽にとって日常的な物であり、名物とも言えるようになってきた。

今、この瞬間にも戦乱の波が押し寄せている。

だけど、エースにかかればそんな空気くらい簡単に壊してくれる。

武器を携えて闘う定めの兵士さえもが今、この瞬間に笑顔を浮かべている。

どうやら、賈駆の思惑は予想通りどころか予想以上に効果があった

ようだった。

「よっしゃ、じゃあ他に何か食うか？　金ならさっきいただいたからな…」

「……」

「どうした？　呂布」

「恋殿？」

饅頭を持って黙る呂布が心配になったエースだが、それは杞憂に終わった。

呂布は顔を上げ、エースを見つめて言う。

「……恋」

「ん？」

「これからは恋でいい」

「なんですとーーー！！」

呂布が急にエースに真名を許したことに陳宮は驚愕して呂布に詰め寄る。

「恋殿！　血迷ってはいけませんぞ！！　そんなおいそれと真名を許すなど…！」

「いい、エースはいい人。月も助けてくれたから」

「恋殿～…」

折れない主に陳宮は涙を流す横でエースは気になっていた。

「えっと……りょ「恋」……いいのか？　恋」

「ん」

そう言って呂布…もとい恋は犬みたいに可愛らしく頷く。

それを見ていた陳宮も黙ってばかりではなかった。

「恋殿だけに茨の道は行かせませぬぞ～！　聞くがいいのです！！　ねねもお前に真名を許すのです！！　ねねの真名はねねねですぞ！！」

「ねねねねね？」

「“ね”が多いのです！！」

「ていうかなんか“ね”がお前が自称してる名前より多くないか？」

「それの方が呼びやすいと恋殿が言ったのです！　本当は音！　音！　音！　と書いてねねねですぞ！」

何をいばっているのか分からないが、とにかくエースは二人が自分に真名を預けてくれたのが嬉しかった。

エースは素直に笑って返す。

「それじゃあ、今度からはその名でよろしくな。恋、ねね」

「うん……よろしく」

「ふん！　仕方無いからよろしくしてやるのです！」

二人の新たな仲間とも親睦を深めることができたエースは本当に嬉しそうに、夕方直前の街へ三人で繰り出した。

その際、恋とねねを飯に誘ったのだが、恋が予想以上に大食漢だったから張遼との賭け金が一気にパァになった。

そして、エースは忘れていた。

自分が賈駆を怒らせたままであったということに。

帰った後、賈駆に正座で説教され、風達の前で恋達の真名を言ったら風と鈴仙までもが参戦してきてダブルパンチを喰らった。

エースの一日はこうした波乱万丈で溢れている。

穏やかな日常はまだまだ続く。

## とある火拳の日常（リアル）２（前書き）

ゴッドイーターバーストで女キャラをお好みにアレンジしたら狩りというより、〇〇〇な人にしてしまい、人には見せられないキャラを作ってしまいました『生まれ変わった人』です。

それでもエロいから大歓迎でしたので、問題ナッシブル！！

「なんだ、お前おめでたかぁ」
「へい。この前に一人生まれまして……」
「そうかそうか…よかったな」

エースは中庭で休憩中の兵士達と雑談していた。

気さくなエースはすぐに周りの兵士と意気投合し、最近の話で華を咲かせていた。

そんなエースに近付く影があった。

「随分と楽しそうね。エース」
「お、賈駆か。聞いたか？　こいつもう父親になったってよ」

エースがそう言うと、周りが笑いに包まれる。

それを見ていた賈駆は少し考える。

（兵との関係は良好。もしかしたら…）
「？　賈駆？」
「え？　なんか言った？」
「いやな、なんか考えてたと思ってな」
「ええ、でもまだあんたには関係ないけどね」

エースは賈駆が嘘を言ってないことを見抜くと、それ以上は追及せずに再び立ち上がる。

「それじゃ、また行ってくるとしますか」
「まあ、城の壁とか色々燃やされてるから、しっかりと働いてよね。しわ寄せは全部月にいくんだから」
「……そりゃ失礼」
エースは賈駆から視線を逸らし、そのまま街へと繰り出した。
「もしかしたら…とんでもない人材を手に入れたのかも……」
エースには聞こえない様に賈駆は呟いた。

「今日は何すっかな～…」
エースはあまりに穏やかな街を歩きながら退屈に悩まされていた。
といっても、エースの名がそうさせているのだから仕方のないことだ。
目的もなく、ただブラブラと歩いていると、前方から見知った影が二人。
「お、奇遇やな。エース」
「こんにちはエースさん」

張遼と鈴仙という意外な組み合わせだった。

「お？　何してんだお前等」
「わたしは張遼さんと試合してて…」
「ウチと飯食いに行こうと思ってたん」
「へぇ、もう昼になってたのか」

そう言って空を見上げると、既に太陽が空高くまで上がっていた。

「ちゅうかエースも昼はまだなん？」
「それなら一緒に食べよ？」
「う～ん……」

エースは二人からの誘いに考えるが、断る理由も何もないので快く了承する。

「分かった。そろそろおれも腹へってきてな」
「よし、それじゃあ店はウチの行きつけでエエな」

それに頷いてエースも二人に同行する。

「さっき二人は試合したんだってな？　どうだった？」
「もちのろん！　ウチの勝ちや！」
「負けちゃった……」
「やっぱな、おれの予想通りだ」

その言葉に張遼はますます天狗になり、鈴仙は頬を膨らませてエースを睨む。

「なんでそんなこと言えるの？」

せめて弟子を応援くらいしても…と思いながら聞くと、エースはそれに対して真面目に返す。

「簡単だ。張遼とお前じゃあ経験の差が違いすぎるからな」

「経験？」

鈴仙はその答えに首を傾げると、隣で張遼も頷く。

「せやね。ウチも程普の武は中々のもんだと思っとる。だけど、とっさの判断がまだまだ荒削りやねん」

ウンウンと腕組んで言う張遼の言葉にエースも同意する。

「だな。だから昔から本格的な修業と戦闘をしてきた張遼とじゃあ、今のお前には荷が重すぎるってわけだ」

「…うん、分かった…」

少し納得した鈴仙の言葉を聞いて、エースは鈴仙の頭を撫でる。

「そうそう、そうやって強くなっていけるんだ。頑張れよ」

「エ…エースさん……」

撫でられている鈴仙は往来の真ん中ということもあり、恥ずかしく思うのだが、心地よい感覚だったので抵抗はしなかった。

それを横で見ていた張遼は急に猫の様にエースにすり寄ってきた。

「あ～ん…ウチも撫でて～な～。程普だけじゃなくてウチも可愛がって～」

「ちょ…張遼さん！」

すり寄ってくる張遼を慌てて引き剥がそうと鈴仙は止めようとするが、エースはそれに笑いを上げる。

「はは…賑やかな奴等だ」

チューしようと迫ってくる張遼を止めるのに必死な鈴仙、そのじゃれ合いはしばらく続いた。

そして、治まった三人はお目当ての店に着いた。

それはなんの変哲もない普通の店。

「ここですか？」

「割と普通だな」

二人の呟きに張遼はチッチッチと反論する。

「二人共……この店の持ち味は味やない……場所で勝負しとるんや」

「「？？」」

店からガーン！　と言う効果音が聞こえたが、三人はガン無視して話を続ける。

「あの、場所って……」
「見て分からん？　あの店」
張遼が指差す場所へ二人は追ってみると、その先には酒屋が……
「なるほど……」
鈴仙は何となく真意が見え、溜息を吐く。
「なんや？　なんかおかしいんか？」
心外とばかりに張遼が目を細めて言う。
「いや、こういうのって普通昼からやることでは…」
「何言ってんのや。酒は夜にしか飲んではいけないなんておかしい。飲みたい時に飲みたい」
「子供ですか…」
「なんとでも言い！　ウチはなんとしても今飲むで！」
子供みたいに駄々をこねる張遼に鈴仙は困り果て、エースに目で助けを求めた。
それに対してエースは…
「おれは別にいいと思うけどな」
「ぶっ！…ちょ…エースさん！？」
意外な所からの新たな敵の出現によって鈴仙はテンパった。

「何も仕事って奴に影響されないくらいなら酒だって構わねえと思うんだがな」

「流石エース！　ウチの見込んだ通りの男や！！」

「いや、この人に酒を与えては……」

鈴仙がそこまで渋るのは、一度だけ酔った張遼を見たからだ。

一度だけ昼間に飲んでいたのを見かけたのだが、その時に有り様がひどかった。

酒の器はそこら中にばらまかれており、匂いもひどい。

ただでさえ露出の多い格好なのに胸のサラシも外れかけてだらしないことこの上なかったのを覚えている。

そんな記憶もあり、できるだけ勤務中は張遼には酒を与えない様にしたかったのだけど、それも最早叶いそうになかった。

エースと二人で盛り上がっているのを見てうなだれる鈴仙だった。

「それじゃあ、盃は持ったな？」
「おう」
「わたしはこの一杯だけですよ？」

張遼の号令と共にエースはノリノリに、鈴仙は仕方無くといった感じで中庭の一角で酌をしている。

そこで思うだろう。なんで中庭でやっているのか、飲食店に向かったのではないかと。

その理由はあまりにマヌケなものだった。

張遼は酒屋で滅多に見る事の出来ない酒を見つけ、その場で買うことにした。

しかし、高級なこともあって所持金＜酒の値段、ということになった。

そこで諦められない張遼はエース達に拝み倒した。

急に土下座を始める張遼に二人は驚き、止めさせようとするが中々顔を上げない。

それ以上に街の将軍の情けない姿を見せるわけにはいかないと判断し、その場で持っていた金を全て貸した。

そのおかげで酒は買えたのだが、飲食店では食べられなくなった。

そして、三人は城まで退き返して待女につまみを持ってきてもらって酒盛りをしようとしている。

酒を注ぎ終わった張遼は自分のも高々と上げてエース達を促す。
エースと鈴仙もそれに応えて盃を上げる。
「「「乾杯」」」
それと同時に一気に飲み干す。
「「ぷは～！」」
「ん……強い…」
エースと張遼は酒の味に満足したのだが、鈴仙には早かったのか目を閉じて唸る。
「なんやエース。結構イケるやないの」
「そりゃこっちの台詞だ。これでも結構強いんだぜ？」
「ほぉ……それなら勝負するか？」
「勝負か……望む所だ」
二人で不敵に笑い合っていたと思っていたら二人で一気に酒を大量に飲み始めた。
「エースさん！？　張遼さん！？」
二人の沈黙の合図に驚いた鈴仙はいきなりの行動に驚き、二人を抑えようとする。
「いきなりどうしたんですか！！　そんなに飲んだら体持ちませんよ！！」

「これで死ねたら本望や！！」
「本望ですか！？」
「おれは挑まれた勝負は必ず受ける！！」
「こんな形の勝負もですか！？」

本人はマジメに言っていることだが、鈴仙にとっては理解できないほどアホらしかった。

どうして酒の飲むだけだったのに一番の酒豪を決める勝負になったのか。

酒が苦手な自分が言うのもおかしいのだが、酒をゆっくりと堪能できないのかと呆れた。

乾杯から始まっていきなりクライマックスに入る奇妙奇天烈な状況を眺めながら考えていた。

（賈駆さんを呼んで来ようかな…）
「アンタ！　ちょお酒持ってきてや！！」
「こっちも頼む！！　できればつまみも！！」

鈴仙の視線の先の二人は常人では考えられないスピードで食料を消費していく。

最早、山になって積み上げられた酒瓶とつまみの皿の量は相当な数に達していた。

見る限り、個人で賄える許容量を越えている。

逆らえない待女に注文するたびに自分達の首を絞めていることには

今の時点では気付いていないだろう。

そう考える鈴仙はもう一つ別のことを考えていた。

自分のことを放って張遼と楽しく酒を飲みまくるエースに少しの嫉妬が燃え上がる。

「もう知らない」

鈴仙は兎耳をピンと立て、賈駆の元へと報告（またの名を“チクり”）しに向かった。

「秘儀！！　滝流し！！」

「秘儀！！　濁流！！」

大量の酒を滝のようにして口の中に流し込む二人は本当に良い笑顔だった。

そんな様子を城壁から眺めていた者がいた。

「これは少し懲らしめる必要がありますね～…」

偶然、外に出て散歩していた風が内心、穏やかではなかった。

こんな感情は初めてだったが、今の風の頭にはそんな疑問よりもエース達を懲らしめる策を張り巡らしていた。

「今晩が楽しみなのです」

そう言って、風も賈駆の元へと自分の考えていることを提案（また

の名を“チクり”）しに向かった。

「「美味い！！　もう一杯！！」」

二人の笑顔はその日の晩にコナゴナに崩されることになった。

『エース及び張遼将軍に一週間の禁酒を命ずる』

「「え”！？」」

「何？　文句があるならいつでも、いつまでも聞くわよ？」

賈駆の後ろに何かのス○ンドが見えた。

「「……」」

「で？　言いたいことは？」

「「……滅相もございません」」

これを賈駆の説教と共に聞いた二人は自分の部屋で血の涙を流したとか流してないとか。

# とある火拳の日常（リアル）２（後書き）

バイト決まるまでは書き続けます！！

## なんで信用しない！　エースの過去のしこり（前書き）

今回はやりすぎた……最近のエースはちゃらんぽらんな所しか見せてなかったから美化させようとしたら、文字通りやり過ぎた……

どうしよう……

それとタイトルもワンピース仕様にしてみました。

## なんで信用しない！　エースの過去のしこり

「おれと恋が？」
「そ、あんたが霞より強いのは分かるから恋とも闘ってほしいのよ」
いきなり、中庭に呼ばれたと思ったら状況がつかめない真昼間。
エースは庭の中央で恋と向かい合っていた。
「よろしく」
「あ、あぁ……」
「恋殿！！　エースを倒してねねの無念を晴らしてください！！」
状況がつかめていないエースに対してそこにいるねねは恋に大きい声援を捧げる。
「はようしてな。ウチはこの日のために一級品を取り寄せたんやで？」
「そうだな。我が軍が誇る猛将が天の力相手にどこまで闘えるかも見物だからな」
別サイドでは酒を飲んでいる張遼と腰かけている華雄もいた。
ちなみに、禁酒期間の一週間は既に切れているので問題自体はない。
「期待してますよ。お兄さん」
「がんばって！」
更に別サイドではアメをなめながら応援する風と、声を張り上げて

応援する鈴仙の妹分達がいた。

「あの……お二人共頑張ってください」

小さくガッツポーズして応援する董卓もいた。

しかも、その周りには一般兵士も多数集まってきている。

要は、董卓軍全員集合というわけだ。

「んだよ。見世物じゃねーんだぞ？」

「いいじゃない。あんただって修業の最中なんでしょ？」

「そりゃあそうだけどよ……」

賈駆の言葉で思い返す。

思えば、この世界にきてから大分覇気の修業をしてきた。

見聞色の覇気については、周りの気配を探り、相手の行動の一部の先読みができるとこまではいけた。

武装色の覇気については、一番力を入れて行っているため結果は上々だが、まだ粗削りである。

そして、覇王色の覇気については……放出くらいならできるようになったが、まだ特定の人物にまで飛ばすのが難しい。

それでも、当初よりは大分使えてきた。

このまま続けていけば後一、二年で完全に使えるようになるだろう。

「？」

そして、目の前にはその相手にふさわしいと言える豪傑。

この力だけでどこまでいけるかを試すことができる。

そう考えたエースは準備運動を始めながら答える。

「分かった」

「え？」

「おれも自分の成果を確かめてえ。ちゃんと闘うさ」

「そう……無理言ったことは分かってるから。怪我はしない様にね」

心配してくれる賈駆の言葉に笑みが零れる。

それに便乗して張遼が大きく声を上げる。

「そんじゃ、号令はウチがやるで！！」

それについてはだれも反対しないので、張遼の声が上がる前に両者共構えをとる。

その瞬間、周りのおしゃべりの声が消えた。

両者が戦いの姿勢を見せた時、模擬戦ではなく戦場の雰囲気になった。

武官はある程度予想できていたようで黙ってそおの様子を見守り、賈駆や董卓とねね、風はその光景に無意識に唾を飲む。

「それじゃあ、いくで？」

その言葉に二人は何も言わずにただ頷く。

両者はもうスイッチが入っている。

これは試合だと分かってはいるが、死力を尽くさねばならない。

互いの力量はまだまだ未知なるものだ。

だからこそ、半端な気持ちで臨めばただでは済まされない。

飛将軍と火拳は向かい合う。

それはまさに常人では及びもつかない超人の領域。

その戦いの火蓋が…今…

「……始め！！」

切って落とされた。

ｓｉｄｅ　呂布

恋は今からエースと闘う。

詠が肉まんをくれるからエースと闘うことにした。

エースも初めて聞いたけど修業になると言ったら勝負することになった。

エースは普段は優しいから好き。

だけど、こっちを見ているときのエースは油断できない。

エースに勝てるか分からないけど……やってみる。

「始め！！」

霞の声が聞こえた。だから恋はエースに向かった。

ｓｉｄｅ　張遼

ウチの号令と共に恋はエースに真っすぐに向かって行った。

遠距離攻撃もできるエースには上々の展開。

ここで簡単に引き離されるトコやのに恋はウチ等とは比べ物になら

ん速さで懐に入った。

「ふっ」
「おっと」

二人の軽い声とは裏腹に恋は画戟での一閃で轟音を響かせるが、エースはそれを宙返りしながら軽く避ける。

雑兵やったら確実に終わってたで……

だけどエースはそれを紙一重で苦もなく避けた。

「……これは？」

ビュン！ビュン！ビュン！ブワッ！

さっきと同じ速さの剣撃が嵐となってエースに牙を向く。

「おわ！」

流石のエースもそれを紙一重ではなくて体を捻ったりして避ける。

ブン！ブン！ブン！ブン！

ウチ等より速い剣撃が更に速くなる。

しかし、それでもエースは全て避けよる。

これを見る度に、二人は本当にウチ等と同じ人間なんかと疑う。

エースは天の人間と言えば分かるんやけど……

少しの劣等感を感じていた時、闘いの流れが少し変わっていた。

それは……

「……なあ…張遼…あれは一体……」

「ん？　どないしたん？」

華雄が驚いているのに疑問を持った。

「……あれは一体……」

「なんやあれって…なんかおかしいことでも…」

華雄の震える指が指し示す方向に視線を向ける。

すると、そこではとんでもないことが起きとった。

「っ！！」

「……」

ビュンビュンビュンビュン！！

相も変わらずどころか、さっきよりも一層速さと力強さを増した剣撃がエースに向けられたいた。

しかし、それを未だにエースは避け続ける。

驚くべきはそこにあった。

「……マジか？」

エースはさっきとは違って落ち付いていた。

いや、落ち付いていたというよりも悟りの境地に達していたかのようだ。

エースはその場から必要最小限の動きで剣撃の暴風雨を避ける。

その顔には焦りも何もない。

「なんと……」

隣の華雄も驚きで声も上がらへん。

そらそうや。もうウチでも恋の一閃が見えへんようになってきたのに。

もはや反射神経とかではなくて完全な“予測”。

相手の一手を先読みでもせえへん限り、あないな動きはでけへん。

だけどそんなこと神にしかできん所業。

この時、ウチはガラにもなく“奇跡”というものを本気で信じた。

ガキン！！

また考えに更けていた時、耳をつんざすような音と共に恋の戟が宙に舞っていた。

戟は綺麗な弧の軌跡を描きながら地面と落ちる。

刃が地面に刺さって立った時、多分、ウチ等の頭は真っ白になったのかもしれへん。

今、まさに伝説が塗り替えられたから当然や。

そして、ウチは感動した。

もしかしたら、ウチ等はウチ等が目指す武の頂きの一端を垣間見た気がした。

この大陸が誇る武神達の戦い。

それを直に見たウチ等は幸せ者かもしれん。

そして、ウチは思った。

エエとこ見逃したぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！

ｓｉｄｅ　エース

やべぇ……力いれすぎた。

最初、覇気の出来映えを確かめるため、見聞色の覇気を試した。

大事なのは余計な雑念を消すこと。頭をクリアにして頭の中に入ってくる光景を受け入れる。

これだけで相手の一秒先の動きが見えてくる。

少しボヤけてはいるけど、大分分かる。

右からの薙ぎ払い

ブオゥ！

「！？」

恋は今の攻撃を避けたのに驚愕するが、また追撃を仕掛けてくる。

次は……おれの腕を右手で掴もうとしてくる。

スカ

「っ！…」

手を引っ込めて恋の一手を避けると恋の眉に皺が寄る。

次は単純におれの腹に突き。

シュ

視える……相手の一手が……これが覇気……おやじ達の力……

相手が恋だったら能力も使うことも考えてたが、予想以上だった……

しかし、避けてばかりでは勝てない。

次は武装色の覇気。

いつもやっている通りに全身を覆う鎧をイメージする。

「ふっ！！」

恋が若干の怒りの籠った渾身の薙ぎ払いを仕掛けてくる。

この威力を真正面で受けるのは正直まずい。

だからこそ、修業になるというものだ。

今の恋には苛立ちがあるせいか攻撃が単調すぎる。

おれは迫りくる刃を予測できたこともあって、刃の腹を足で軌道を逸らそうと思った。

その後、ガラ空きになった恋の懐へ一発いれてやろうと思いながら刃を足で……

「うらぁ！」

ガキン！！

……間違えて弾き飛ばしちまった…

エースの覇気の籠った蹴りは恋の戟を逸らすどころか弾き返し、恋の手から弾かれた。

そこまでするつもりが無かったエースは突き刺さった戟を見てアチャーといった感じで頭を掻く。

「ぐ…」

それと同時にエースの体が急に重く感じた。

覇気の練習は確かにしてきたのだが、リアルさながらの戦いで使うのは初めてであった。

殺るか殺られるかの緊張の中での覇気は莫大な体力を消費させた。

だけど、エースの中では大きな達成感が生まれた。

歴戦の覇者達はこれを乗り越え、強さをもぎ取った。

自分は未だスタート地点……いや、やっとこれからスタートできる。

「やったぁ！」

そう思ったエースは歓喜の声を上げながら地面に仰向けに倒れる。

「エースさん!?」
「お兄さん!?」

鈴仙と風は急に倒れたエースに駆け寄る。

「エースさんどうしたの!?……って、すごい汗…」
「結構お疲れみたいですね～」

二人は心配そうに倒れていいるエースを見つめる。

しかし、エースは疲れよりも嬉しさが大きかった。

鈴仙と風の二人の姿が見えると、エースは立ち上がる。

「ははは…やったぁ！」
「きゃっ！」
「！！」

エースは歓喜のあまり鈴仙と風を抱いてクルクル回り出す。

「やっとだ!!　やっとおれは始められるんだ!!」
「いや、あの、皆が見てるから……」
「う～…少し苦しいのですよ～」

二人の声が聞こえたのかは知らないが、エースは二人を下ろしてしばしの余韻に浸る。

二人の顔が真っ赤になっていることなど二の次だった。

「す…すごかったです！　エースさん！」
「まさか恋にまで勝つなんて……嬉しい誤算だわ」

遠くから眺めていた董卓と賈駆は小さくそう呟くと、賈駆はエースの元へと向かう。

「ねえ、エース……」
「ははは…うん？」

張遼や華雄、ねねも含めた面子でじゃれ合うエースの前まで行くと、賈駆はエースに提案する。

「あなた……自分の部隊を持ってみない？」
「は？」

そう言うと、エースは素っ頓狂な声を上げる。

「自分の……部隊？」
「ええ、あなたがボク達の様に規律の固い形式が嫌いだって知ってるわ……だけど、お願い……」
「……何があった？」

エースは賈駆の悲痛な声に何かを感じ取り、さっきとは雰囲気を変えてマジメに賈駆を促す。

それに答える様に賈駆は続ける。

「……この前、月を張譲から助けて張譲が没落したのは覚えてる？」
「ああ、あん時のことはよく覚えてるさ」

エースもその時のことを思い出して腹が立てる。
弱い者を大人数で囲んだ卑劣な連中を嫌でも思い出してしまう。

「そう……確かにあの後に月は助け出されて、この洛陽の支配者になった」
「それは聞いたぜ？　董卓が王になってからは結構生活も良くなったって街の奴や饅頭屋の婆ちゃんも言ってたっけな」
「でも…」
「？」

その光景を思い出して誇らしく思うエースだが、賈駆の続きに耳を傾ける。

「でもね……その時、月はただの王じゃなくて皇帝……この大陸の支配者になったの」
「は？　大陸って……董卓はこの街だけを任されたんじゃねえのか？」
「表向きはそう。だけど、張譲は元々から今の皇帝を裏で操ってたの」
「なに!?」

賈駆の言ったことが信じられなかったのか、エースは大きく目を見開く。

あんな小物がそんな簡単に支配者なんかになれるのかと…

「今の皇帝は張譲が推薦したから、その恩として皇帝と話したりすることができるの」

「なるほど……そうすれば自分の思うことを皇帝に刷り込ませられるってわけか……」

ここまでくると、エースでも分かった。

人は一度だけでも良くしてもらった人物にはトコトン弱いし、警戒心も薄い。

あんな小物が親切で推薦する訳が無いと思ったエースも合点がいくと納得できた。

「その時、月が張譲の代わって、実質、皇帝を動かせる立場になれた」

「そっかー。すげえ出世だな」

「だけど、それを良く思わないのがいるの」

「？」

そう言って賈駆は少しの怒りを混ぜてそおの憎き原因の名を挙げる。

「河北の袁紹って奴」

「？　そいつってこの国となんか関係あんのか？」

「いいえ、ただ単に自分よりも偉くなったことが気に入らないのよ……」

「そうか…くだらねえな……」

エースは権力のそういうところが理解できなかった。

確かに偉くなれば金も名声も手に入るが、それだけだ。

一人だけで欲しい物を手に入れても寂しいだけだ。

そんなものよりも仲間と一緒にいるほうがどんな宝にも勝る宝だと思う。

エースとはそういう男だ。

そんな彼に追い討ちとも言える事実が突きつけられる。

「それで……近い内に月を殺しにくる…」

「なんだと!?」

エースは最後の言葉に納得がいかずに賈駆に詰め寄る。

「なんで、なんで董卓が殺されなきゃなんねーんだよ!!　あいつ…なんも悪いことしてねえじゃねえか!!」

「……各地の諸侯は成り上がりたくてしょうがないのよ。だから月が邪魔だって思うのよ……」

「……くそ…」

結局、同じ志を持っていても、そいつが味方とは限らない。

同じ考えだからこそ邪魔になる。

それは海賊にも言えることだった。

「だから、アンタがこの軍に正式に入ってくれたらまた強くなれるの。さっきの模擬戦で確信できた」

「……それで闘わせたのか…」

「ええ、兵にアンタの強さを見せつければ納得してくれるし、エースは兵の間では人気が高いの……だから……お願い……」

「……」

「アンタの気持ちを無視してるのは重々承知してる。だけど、月だけは守りたい……だからお願い……」

「……」

賈駆が頭を下げた時、エースは見た。

頭を下げたことにではない、賈駆の顔から零れた一滴の滴を……

大事な人が訳も分からない理由で殺されるかもしれない。

そんな事態が起ころうとしているから手段を選んでいる場合ではない。

そんな感情がヒシヒシと伝わってくる。

賈駆だけじゃない。

周りの張遼や華雄、恋とねねからもそんな感情が伝わってくる。

そして、エースもその気持ちが痛いほど分かる。

大事な人のためならどんなことでもやれる。

かつて、身勝手な者のために自分達から離れ、逝ってしまったもう一人の兄弟のサボ……

絆の力ではサボの方が上かもしれない。

だけど、それとこれとは別。

今、目の前の少女達が窮地に立たされている。

かつて、サボが連れ去られた時のように……

（今度は……こいつ等がおれ達みたいなことになるってのか！！）

あの時ほど怒ったことはなかった。

あの時ほど悔しかったことはなかった。

あの時ほど自分の弱さを呪ったことはなかった。

あの時ほど……泣いたことは滅多になかった。

エースの頭の中で昔の風景が呼び起こされる。

そして……決めた。

「……一つだけ……言わせてくれ」

「……」

賈駆は何も言わない。

それを了承だと思ったエースは……

「おれの顔色なんざ窺うんじゃねぇ！！」
「「「「「「「「「！！！！」」」」」」」」」

自分の想いを言葉にしてぶちまけた。

驚く全員を押しのけて賈駆に詰め寄る。

エースの表情には“覚悟”と“怒り”が混ざり合っており、賈駆は一歩退いてしまう。

「わざわざこんな遠回りなことしやがって……直接言えよ！　『助けて』って！」

それでもエースは真剣な表情で賈駆に言い切る。

エースの切なる願い。

相手が国の人間だろうと、共に過ごし、受け入れ、笑い合った仲間だ。

そんな仲間に遠慮されたことがエースの感情をより一層燃え上がらせた。

「でも…エースは軍は好かないって……」
「たしかにそうだ！　でも、それとこれとは話は別だ！！　仲間が危ない目に会うってんだ！！　黙ってられるわけねえだろ！！」
「……」
「それとも、お前等を仲間だと思ってたのはおれだけだったのか！？」
「エース！　言い過ぎや！」

詰め寄るエースに賈駆を守る様に立ち塞がる。

「賈駆っちはエースの気持ちを尊重してくれたから中々言いだせなかったんやで！！　それを分かってやり！！」

それを聞いたエースは感情を思いっきりぶつけたこともあって、少し落ち着きを取り戻す。

「…それは分かってる。だけど……」
「言わんでエエ。エースがそこまでウチ等のことを想ってくれたんは知らんかった」
「……嫌だったか？」
「な訳あらへん！　メッチャ嬉しいわ！　やから、エースの望み通り、もう小細工は無しや！」

ここで張遼はエースの肩を叩いて頼み込む。

「頼む！！　ウチ等に力を貸してほしい！！　何も言わずに頷いてほしい！！」
「……恋からも……エースになら背中を任せられる…」
「私からも頼む…」

「……お願いです……ここは月殿を助けると思って……」

張遼の他にも恋と華雄、珍しくもねねまでもが頭を下げてきた。

そして、奥からも董卓が歩み寄って不安そうにエースの前に立つ。

（……董卓……やっぱり小さいんだな…）

今にも涙が溢れるかのように目を潤ませる董卓を見て、またサボの顔がちらつく。

（サボ……お前が捕まっている間は、董卓みたいな気持ちだったのか？）

抗いたくても何もできない。

周りには敵ばかり。

この状況は昔の忌まわしき事件に酷似している。

（あの時…おれは弱かった……お前を完全に信じてやることができなかった……）

――――今、目の前に昔のお前がいる

この時、エースにはもがき、苦悩するサボと董卓がダブって見えた。

「…っ！」

一瞬、目を閉じてしまったが、同時に覚悟も決まった。

しばらく、そのまま目を閉じて佇んだと思ったら再び目を開ける。

「……おれは戦術なんて細かいことはできねえ……お前等の様に陣なんて組めねえけど…」

エースは董卓の前に歩み寄り……

――――おれが……守ってやる…

「……え？」

気付くと、董卓は頭をガシガシと撫でられていた。

それを夢心地で反芻させながら、エースを見上げる。

すると、いつもの太陽みたいなエースの笑顔があった。

「少し迷惑かけちまうけどよろしくな」

それはつまり、エースが了承したことを意味する。

一緒に闘ってくれるということを意味する。

「……マジで？」

「ああ」

「……嘘では無いな？」

「全く」

「……一緒に闘ってくれる？」

「もちろん」

「……本当なのですね？」
「しつけえよ」
張遼、華雄、恋、ねねの問いにエースは苦笑する。
そして……

「いやったぁぁぁぁぁぁ！！！」
張遼が急にジャンプして喜びを表す。
「ふ……これでお前も仲間入りか…」
「……」
華雄も恋も笑顔を浮かべながらエースの仲間入りを喜ぶ。
「ふ…ふん……始めから焦らさずに言えばいいのです！」
ねねも悪態は吐くが、満更でも無さそうだ。
そして、当然、この二人も……

「エース……いいの？」
「まあな、おれが決めたことだ。こうなったらできるところまでやっていくさ」
「そう……ありがとう……」
賈駆は素直な気持ちで感謝を述べ、董卓もエースに感謝する。
「ありがとうございます……知り合って間もない私なんかにこんな…」
だけど、エースは笑って董卓の言葉を遮る。
「今更何を言ってんだよ。もうこれはお前だけの問題じゃねえんだからよ」
そう言ってくれるエースに董卓は嬉しさがこみ上げる。
そして、董卓はある提案をしてきた。
突然、厳かな雰囲気を纏った董卓にエースは眉を少し動かして反応する。
そして、董卓は決意した。
「これから共に戦う証として……私の真名…月の名をあなたに預けます」
エース達と共に闘うことを……

董卓の申し出に少し反応するが、何も言わない。
董卓の気持ちを汲んだエースはそれを否定する権利も理由もないと思ったからだ。
それに同意したかのように張遼と賈駆も頷く。
「ほんなら、ウチのも預ける。これからは霞って呼んでや」
「ボクも、これだけで信頼の証になるかは分からないけど預けるわ。詠でいいわ」
二人からも信用の証を託されたエースはそれに笑って応える。
その光景を風と鈴仙は微笑ましく眺めていた。
「よし！　新しい仲間も増えたことやし、今日はパァーっとやるで！！」
「ちょっと！！　あんたまだ飲む気！？」
「エエやん今日くらい～」
「あんたは毎日飲んでるでしょうが！！」
事態も一段落し、またいつもの様に賑やかになってきたギャラリーを見つめてエースは一人、物思いにふける。
（サボ……結局おれは未だにお前の死が納得できてなかったようだ……だけど、これで終わらせる……）
――――今度こそ……守ってみせる
「……」

「今はそっとさせておきましょう……」
「…うん」

天を仰ぐエースに風と鈴仙は見惚れていた。

初めて見るエースの…覚悟を決めた戦士の顔を見た二人は、その光景を胸の中にしまうだけにした。

心に決めた一つの決意はこれから起こる戦いに何をもたらすか……

ただ、これだけは断言できる。

その時が、本当の伝説の幕開けだ。

一人の大海賊が迷い込んだ世界に、もう常識などは存在しない。

ようこそ

本物の混沌の時代へ

## なんで信用しない！　エースの過去のしこり（後書き）

そろそろ技の応募を一旦打ち切ります。

色々な案をありがとうございました！

## 何だコイツ！？　踊り子の忠告（前書き）

次回の投稿はいつになるか分かりません！

ですので、二日に一話ペースも今日までです。

それでも、この小説をよろしくお願いします！

## 何だコイツ！？　踊り子の忠告

時代と人の気持ちは複雑に交差し合うものだ。

それぞれの人々に欲望がある限り、時代は常に動き続ける。

そして、今まさに時代の節目を迎えようとしていた……

「やっぱ来ちまったのか……」

「えぇ……できれば外れてほしかったのだけど…」

朝早くから起こされた時には何事かと思ったのだが、内容を聞いた瞬間にエースの目つきが変わった。

そして、急いで滅多に行かない朝の会議の場に行く。

すると、皆の表情は暗かった。

それで、エースは全て悟った。

穏やかで楽しかった日常が消え……

戦いが始まるのだと……

「皆に集まってもらったのは他でも無い…この戦についてのことよ」

詠が全員を見渡して再度問いかける。

「くどい様だけど……この戦を抜けたいのなら構わないわ」

全員にそう言うが、誰一人として下りる者はいない。

その事に詠は皆に内心で感謝した。

そして、最終確認を終えた後、軍議に入ろうとしていた。

しかし、詠はそこで思い出したかのようにエースに一つ聞いてみる。

「ねえ、あんたは新しい兵と上手くやってる？」

その答えにエースは口を吊り上げて答える。

「今は問題ねえ。新しい奴もヒヨッコだけど中々ガッツがあるぜ？」

「？…『がっつ』って？」

「えっと……強い心って意味だ」

「そう……まあ、その様子だと上手くやっているようね。それは何よりだわ」

「ああ、結構良い奴等ばっかだしな」

笑いながら言うエースだが、彼の部隊設立には色んなエピソードがあった。

なにせ、彼の部隊のほとんどが山賊、盗賊、裏町のフダツキが多いからだ。

エース曰く、「どんな形にしろ、死ぬ覚悟があるような屈強な奴等がいい」とのこと。

そのために、周辺で暴れようとしていた盗賊や既に壊滅した黄巾党落ちの者を片っ端から倒しまくって自分の部隊に引きずり込んだ。

そして、言うことを聞かない者はその度にぶん殴りまくって大人しくさせた。

そして、真摯に話したりもしまくった。

一人一人の名前を必死に覚え、えばり散らすのではなく、同じ釜の飯を食う仲間として触れ合ってきた。

そのため、一度は修羅の道に落ちかけた者達は昔の優しくされた時の記憶を思い出して更生した。

エースは更生させる気はなかったのだが、仲間になってくれたのならなんだって良かった。

こうして時間はかかったものの、エースの当初からいた３０人を含め、今では３００にまで増えた。

詠はそれを目の当たりにした時、エースのカリスマ性に素直に驚い

た。

武だけではなく、エースには人の心を魅了する何かを持っているのだと思った。

そして、エースの部隊には副官として風と鈴仙をつけた。

この二人なら兵の指揮も臨機応変に行ってくれるだろうと思ってのことだった。

「エースの部隊は一番数も少ないと思うけど、これから徐々に増えていくかもね」

「そうか！　それは賑やかになりそうで助かるぜ！！」

的外れなことに期待をするエースに詠は溜息を吐く。

そして、詠はもう一つだけ気になっていたことを聞いてみた。

「そういえば時々、兵に訓練をつけてるようね」

「あ？　まあな、いざという時に自分の身も守れなきゃならねえ。いつもおれが助けられるわけねーんだからな」

「そうだけど……なんか変な動きをしてる時もあるわね……あれって何なの？」

「あぁ、それか……多分、おれしかやってねえよな？」

「そりゃそうよ。銅鑼の合図で避ける練習って……なんの意味が…」

そこまで言うと、鈴仙と風が間に入るように挙手する。

詠がそれを認識すると、二人を促す。

二人は立ちあがって話を続ける。

「ありがとうございます。ここからは私達がご説明致しますね～」
「？…エース隊の訓練なのですか？」
「はいねねちゃん。あれを覚えておかないと色々と都合が悪いのですから」
「そうです。詠さんはエースさんの火力を覚えていますか？」
「火力……あぁ、火のことね」

そう言われて、以前に霞と闘った時のことを思い出した。

最後に見せたエースの『火柱』を思い出し、詠だけでなく、それを見ていた他の武将達も改めて思い出して唖然とした。

なんせ、中庭を一瞬で焼き払った様な火など見た事が無い。

ジワジワと小火から成長する過程をすっとばした火の嵐。

強大としか言いようがない。

そんなことを考えている面子に鈴仙達が衝撃的な事実を述べる。

「正直、私達全員はエースさんの本気を知らないんです」
「今まで見てきたお兄さんの火なんですが……どれも全部が手加減してるようなので……」
「「「「「……」」」」」

全員が奇妙な物を見るような目でエースを見る。

その視線にエースは疑問符を浮かべるが、気にしない。

全員はエースの力の異常性をなんとなく理解した。

もし、エースが本気を出せば、だれにも止められないのでは……

「でも、その大きすぎる力にも欠点があるのですよ～」

「待って……なんとなくというか、完全に理解したわ」

「……やっぱりそういう見解になりますよね…」

風と鈴仙が溜息混じりに呟く。

ここで詠も気付いた通り、問題はエースの強さ。

簡単に言えば強すぎるのだ。

エースの能力をフルに使おうものなら、まず、負ける可能性が極端に低くなる。

しかし、それをフルに使えば敵のみならず味方までもが巻き込まれる恐れがある。

「おれの使える技も限られるし、新しい技も後々思いつくだろうからな。合図と共に避けられる様に訓練させてんだ」

「なるほどね……強すぎて使えない力か……難儀なものね」

「まあ、おれも部下の命を無駄に散らすつもりはねえし、こういうのも慣れてるからな」

聞けば、この案を出したのも意外なことにエースだったとか。

「へぇ…意外と慣れてるのね…部隊を持ったことがあるの？」

「あぁ、これでもおれは白ひげ海賊団2番隊隊長だったこともあるんだぜ」

そう誇らしげに胸を張って言うエースに全員が意外そうな顔をした。

見た感じだと自由人という印象だったのだが、れっきとした経歴があったようだ。

ここで風は、ちょうどいい機会だと思って、前から思っていたことを聞いてみた。

「そのお兄さんの話に出てくる白ひげってなんなのですか～？」

「ちょっと待て。今は関係無い話だろ」

「でも、今日の定例会はその報告だけだったので、後はもう解散するだけですよ？」

「なに？　そうなのか？」

話が脱線しかけてきそうだったから、華雄は止めようと思ったのだが、少しの反撃で何も言えなくなってしまう。

「それに、どうせ皆さんも聞きたそうだったので聞いてみたんですが……お兄さんはそれで良かったでしょうか？」

「なんも問題はねえよ」

アッサリと承諾してくれたエースに、皆がさっきまでの真剣な雰囲気を解く。

それを確認したエースは昔のことを思い返しながら説明する。

「白ひげ……おれのおやじはそのまんまの言葉通り世界最強の海の

王者だったんだ」

「世界最強って……結構抽象的だね…」

意外と陳腐とも思える言葉に鈴仙は苦笑するが、エースの穏やかな表情を見てから嘘じゃないと思えた。

「おれの背中のドクロは白ひげ海賊団の証でな…大抵の奴はこれを見ただけで逃げちまうんだ」

「へぇ…けったいな名前かと思ってたんやけど、本当に強かったんやな」

「あぁ……最初はおれが白ひげを撃ち倒そうと思って一対一の決闘を挑んだこともあったんだけど…よ……」

「？　どうしたのですか？」

エースが少し顔を赤くさせて恥ずかしがる様子にねねは質問してみると、言いにくそうに驚愕の事実を口にした。

「それがな……おれは手加減されたおやじに……傷一つ負わすことなく……一瞬でボロ負けしちまってよ……」

「うそ!?」

エースの一言に鈴仙は驚愕した。

なにせ、この面子の中で一番エースと関わってきたのだが、多勢の賊と闘って苦戦どころか傷を負ったところも見たことが無い。

いつも不敵に相手を見据え、苦もなく勝ってきたエースの姿しか記憶にない。

そんなエースと戦い、一瞬で倒すなどありえないことだった。

そして、驚いているのは鈴仙だけでなく他の面子の驚きも大きかった。

あれだけの火力と強さでどうやったら負けるのだろうか。

そんな全員を置いて、エースはボロボロにされた時のことを思い出して恥ずかしがっていた。

「そんときだな……死に体のおれをおやじは迎え入れ…助けられたおれは…」

「そこでその白ひげの仲間になったのだな？」

華雄がそう完結すると思ったのだが、エースはそれを笑って否定。

またしても全員で疑問符を浮かべると、本日二度目の驚愕が襲った。

「助けられたおれは、毎日ことあるごとにおやじを……暗殺しようとした」

「「「

しかし、話を聞けば聞くほどにその『白ひげ』の強さが浮き彫りになっていく。

「だけど、おやじはそんなおれを追い出そうともせずに船に置いて……息子って呼んでくれた……」

「結構変わった人ですね～」

「ああ、だからおれはおやじの器のでかさに惚れて白ひげ海賊団に入ったんだ……」

やがて、誇らしげに言うエースに全員が呆然と聞いていた。

人の過去を聞いただけでここまで印象が変わってしまうものなのか…と。

無敵と思っていたエースも負けた時もある。

それは強くなる上で必要なことだとは分かっていたけれど、どこかでエースを美化しすぎていたのかもしれない。

エースだって悩む時もあれば悲しむ時もある。

その時、自分達は何をしてあげられるのだろう。

無意識にそう考えさせられるようになっていた。

「さて、おれはその部下達の面倒でも見に行ってやるか」

ある程度の話を終えたエースは席から立ち上がって中庭へと向かう。

「…それじゃあ風も行きますね～」

残された面子は風の一言を合図に解散し、各々の仕事にとりかかる。

そんな朝の光景があった。

ちなみに訓練風景はというと……

ジャーン！　ジャーン！

――――やべ！　銅鑼が二回鳴ったぞ！！

――――速く避けろ！！

――――ばか押すな！！

悲鳴に似た声が辺りに響く中、一陣の嵐が吹き荒れた。

「火拳！」
『『『ぎゃあああぁぁぁ！！』』』
軽め（エースにとって）の炎が部隊を飲みこもうとしていた。
「もうちょっと機敏に動いてくださーい。でないと死んじゃいますので～」
「あと少しだから！！　頑張って！！」
呑気に言う風と本気でやばい兵達を励ます鈴仙の指導の元、準備は着々と進んでいた。

「腹減った～」
訓練を終え、エースは街の中を歩いていた。
腹を押さえて空腹をアピールするエースに鈴仙がクスっと笑う。
「もう、さっきも結構食べてたのに」
「まあ、お兄さんらしいといえばらしいですよね～」
「へへ……おれも鍛えてんだよ。もっともっと強くなりてえからな」

嬉しそうに拳を握るエースに二人は気になっていたことを聞いてみた。

「お兄さんはどうして更に強くなりたいって思うのですか～？　今のままでも充分強いと思うのですが～」

「ん？　おれってそんなに強いのか？」

「正直、時々ですが、同じ人間なのか…て思うくらい…」

風がそう言うと、それほど時間もおかずにエースは風達を見て無邪気に言う。

「そりゃあお前等という仲間を守りてえんだ。それ以外の理由なんて無いし、いらねえよ」

「「……」」

それを聞いて、二人は顔を赤くさせて恥ずかしがる。

どうしてこんなことを臆面もなく言えるのだろうか……

前々から思っていたが、エースは女心を理解していないのだと思う。

一度だけ、事故で自分の半裸を見られた時もエースは冷静にタオルを体に巻いてやり、何事もなかったかのように振る舞った。

確かに、相手を思いやる気持ちは至上だが、女心を理解しているかといえば絶望的だった。

（ふんだ！　どうせわたしの裸なんて色気が無いですよーだ！」

「鈴仙ちゃん。心の声が口に出てますよ？」

風からの忠告をスルーして鈴仙はどんどんヒートアップする。

「だって……少しくらい顔赤くさせたり、欲情してもいいじゃない……わたし一応女の子なんだよ…？」

「なんか最近の鈴仙ちゃんに違和感を感じるのですが…言ってることはもっともですね～……今度思い切って……」

風は飴を舐めて……

「裸でお兄さんを襲いませんか？」

「どこの未確認生命体！？」

「大丈夫ですよ。お酒に秘めたる真価を発揮させれば抱くことも事故。子種も事故にできますから」

「それが一番の失敗だよ！？　酒の席で最も人としてやっちゃいけないから！！」

「でも、兎の性欲ってすごいらしいですよ？」

「わたしを見て言わないで。この耳は飾りだから」

サラっとぶっとんだ発言をする風に鈴仙が食らい付く。

「それじゃあ、正攻法でお兄さんに直接言ってみては？」

「え…いや…でも……」

「今日は霞さんと一緒に飲み交わしましょうね」

「こういう時くらいは自分の力でさせてよ！！　ていうか酒頼りなんですけど！！」

急に普通の話になったと思ったら意表をつかれ、鈴仙は振り回される。

ニヤニヤする風を見る限り、彼女は下のネタで他人をいじるのが好きなようだった。

「おーい！　速くしねえと置いてっちまうぞー！」

そこで、遠くからエースの呼びかけに気付いた。

「は～い。ほらほら、いつまでも拗ねないでください」

「全くもう…だれのせいで…」

「まあまあ、そうイライラしてはお兄さんも気を悪くしますよ。いつもの鈴仙ちゃんに戻ってくださいね～」

（うわぁ…ヌケヌケと…）

風の実力を確認し、これからもそんなネタでいじられるのかと辟易して溜息を吐く。

それに気付いたエースは鈴仙に尋ねる。

「どうした？　具合でも悪いのか？」

「……」

「？…速く行こうぜ」

ジト目で睨んでくる妹分に疑問を感じるエースは鈴仙がお腹をすかせてるのだと勘違いして早歩きになる。

（はぁ……わたしって……すごい弱虫だ……もっと素直になれたらもっと楽だったのに……）

鈴仙はトボトボと重い足取りでエースの後を歩く。

（あら～……ちょっとやりすぎましたね～）

それを見ていた風は少し罪悪感を感じていた。

（まあでも……風が先に告白すれば鈴仙ちゃんも勇気でますよね）

……ことはなかった。

今の風の興味もエース自身のことだけであった。

「今の話……聞かせてもらったわよん」

「「「へ？」」」

「とう！！」

いきなり、野太い声が聞こえたと思った。

三人は辺りを見回すと、そこに一つの影が現れた。

「はろろ～ん。恋に悩める噂の美少女の貂蝉ちゃんでぃ～っす」

「「「……」」」

「あ、こちらこそ初めまして。わたくしはエースと申します。以後、お見知りおきを…」
「丁寧に挨拶しなくていいよ!!　それよりも霞さん…いや、恋さんを呼ぼうよ!」
丁寧に物怖じもせずに挨拶するエースに驚愕しながら鈴仙は城へ引き返そうとする。
それもそのはず、急に現れた男はビキニパンツ一丁、筋肉隆々の奇妙奇天烈な生物（なまもの）だったのだから。
「ちょっと待ってよ〜ん。いきなり逮捕ってぇ、それはあまりにあんまりじゃないの〜?」
「その姿で街中を闊歩すれば猥褻物陳列罪ですよ〜?」
「あらん、この花も恥じらう乙女のやわ肌を見たいという男の隠された欲望をかきたてるなって…そう言いたいのねん?」
「『鼻も卒倒する変態のゴツ肌を見たくないという老若男女の内なる願い』を叶えるためです。なんでもいいから縛についてください」
冷やかな鈴仙に風もこの時だけは戦慄を覚えた。
そんな鈴仙の頭をエースはポンポンと優しくなでる。
「まあ、落ち付けって、このオッサンはまだなんもしてねえだろ?」
「でも…!」
あまりにこのナマモノの存在に取り乱している鈴仙がエースの制止を振り切ろうとしていると……
「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

「！！」
「きゃあ！！」
「いぃ！？」

突然の獣の吠えに三人は身体を強張らせる。

三人がその貂蝉という生命体を見ると、そこには阿修羅のスタンドを背負った魔人がいた。

「あなた……エースちゃんって言ったかしら？」
「お……おぅ……」
「あな～た…今、この乙女に向かって“オッサン”て言ったわね？」
「ま…まあな、だってオッサン…」
「かぁっ！！」
「！！」

再び、魔人が吼え、エースは未知なる恐怖に襲われる。

そして、貂蝉は急に泣き崩れた。

「ひどいわひどいわ……折角、あなたに届け物をしようと思ったのに…」
「あ、いや、悪かったよ。お姉さん」
「だめ！！　そこだけは譲らないで！！　女として何かが壊れそうだから！」
「もう手遅れですよ」

必死の兎のシャウトも風の言う通り無駄に響くだけだった。

エースの一言で少し立ち直った貂蝉が上目遣いでエースに潤む。

「本当？」
「ああ、だから早く用件を言ってくれ。そのためにおれに近付いたんだろ？」
「ぐす……いいわ。あなたの優しさに免じて」
「……（ミシミシ）」
「鈴仙ちゃん、拳を強く握り過ぎて手甲が壊れてますよ。後で修理してくださいね」

徐々に貂蝉に怒りを募らせる鈴仙に気付くこともなく、貂蝉はある物を取り出した。

それは……

「おれの帽子！！」

エースが昔から愛用していたカウボーイハットだった。

帽子に付いてる紐に括りつけられたドクロのエンブレム。

つばの上に付けられた笑い顔と泣き顔の飾り。

まさしく、エース愛用の帽子だった。

「あらやっぱり？　これあなたのだったのね？」
「なんでこれを持ってる！？　これはバナロ島で…」
「それね、旅の最中で落ちてたから、匂いを辿っていたらあなたに辿りついたの」
「なーんだ。そうなのかー」
「そこで納得！？　もっと追究するところがあるよ！！　ていうか

その帽子どこから出した!!」

鈴仙のシャウトを二人は華麗にスルーし続け、話が進む。

「うふふ……わたしは良い男のみ・か・た。困った男がいればあっちホイホイ。こっちペロペロよおん」

「そっかなんかありがとな」

「何かすごいトンデもない単語が聞こえましたね～」

風がそう言うも、もはや二人には聞こえていない。

いつの間にか、二人は互いに話がヒートアップし、楽しげに話していた。

「あと、これもあげるわん」

「なんだ？　蝶の仮面か？」

「ええ、これさえあれば、顔を隠せる必需品よん」

「何から何まで……この礼はどうすりゃあ…」

本気で涙ぐむエースに貂蝉は優しく微笑みながらこう言った。

「あなたの髪の毛でいいわ」

「なにその要求!?」

「へ？　髪の毛って……そんなもんでいいのか？」

「ええ、三本さえあれば毎晩あなたを妄想……愛でることができるわ」

「変態だ!!　度し難い変態がいるよ!!」

堪らずに間に入る鈴仙に貂蝉は余裕の笑みを浮かべる。

「あらん？　もしかして先を越されて焦ってる？」
「寝言もいい加減にしてよね」
「ツレないわね～……いいじゃない。髪の毛くらい」
「エースさんを汚すな！　お前の毒牙には侵させはしない！！」
「それでね、ここで忠告なんだけど…」
「話くらい聞いたら！？」
「ごめんなさいね…こっちも時間が無いから主題を優先させるわ」
「鈴仙ちゃん。どうどう…」

風がそう言いながら頭をゆっくりと撫でてやると、鈴仙も少しは落ち着きを取り戻した。
それを確認した風は貂蝉に向き直る。

「それで？　忠告とは？」
「そうねん。二つあるんだけど……まず一つ……『阿部』っていう人には気を付けてねん」
「阿部？　だれでしょうか？」

そう言うと、貂蝉は深刻そうに話す。

「阿部はね……かつてはわたし達の仲間であり、わたしの兄弟子…師匠の卑弥呼と共に漢女になるための修業をしてたの」
「この時点で危険な香りしかしませんね～」
「特に阿部は…その漢女の中でも百年の間に一人いるかいないかの逸材だったの」
「どの基準で逸材が分かるの？」
「だけど……ある日、その阿部が事件を起こしたの……」
「ほぅ……強すぎるために、自尊心が強かったんだな」

三人が訳の分からない話に耳を傾けていると、貂蝉は天を仰いだ。

「一般人の男を強姦したの」
「馬鹿じゃないの！？」

鈴仙が聞いたことを後悔しながらそう言うと、貂蝉は深刻な表情で答える。

「これは他人事じゃないわ。阿部の欲はもう歯止めが利かなくなってどうしようもない。卑弥呼でさえも匙を投げたわ」
「本当に無責任ですね～」
「しかも、阿部は……エースちゃんを標的にしちゃったのよ」
「おぉう！　それは衝撃的ですね～」
「今何か聞き捨てならない台詞が聞こえたんだけど！！」

現実逃避していた鈴仙が詰め寄る。

「話からするとアレですか！？　あなた達の様なのがエースさんを……強姦しようとしてると！？」
「早い話がそれね」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

驚愕の事実に鈴仙は兎の耳を押さえて何も聞かないようにする。

そこに、当の本人のエースも加わる。

「そいつはおれを捕まえてどうする気だ？」
「そうねん……多分、下の毛でも欲しがってるかと……」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

二人の会話に鈴仙は血の涙を流す。
風はそんな鈴仙を優しく撫でてやる。

「まあ、阿部の性分からして、近い内に名乗ってくるから……」
「そん時にぶっ飛ばせばいいんだな？」
「ええ、今の阿部にとってそれが良い薬になるわ。彼は男を掘りすぎたの」
「？…どういうことだ？」
「どぅふふ…ナイショよん♪」

貂蝉の言ってることが分からなかったエースははぐらかされ、納得はしてないが、要点だけは覚えておいた。

「それと、白装束の連中にも気を付けてねん」
「白装束？」
「ええ、近い内に左慈ってのと于吉ってのがあなた達に攻撃してくるわ。でも、彼等は阿部よりもはるかに弱いからだいじょうびん！！　その時のために、周り…董卓ちゃんの周りを警戒しといた方がいいわ」
「……そんなことまで教えてくれるなんて……お前良い奴だな！」
「うっふん……わたしはか弱い美少年のミ・カ・タ♪」
「なんだか分かんねえけどありがとう！！」
「うふふ……それじゃあわたしはもう行くわ。阿部を卑弥呼と一緒に探してるの」
「そっか……見つかるといいな」
「ええ、ここまで素直な気持ちを向けてくれたのってご主人様以来

……あなたが周りから好かれるのも分かるわ～……あら？　わたしのイチモツも思わずあなたに反応……」

「帰れ！！　いますぐ帰れ！！」

二人で握手する微笑ましい場面のはずなのに、どこかのグロ映画を見ている気分になるのは初めてかもしれない。

バイオハザードのヒロインが突然、ゾンビにファースキッスを与えるような衝撃的光景がそこにあった。

貂蝉のパンツが徐々に膨らんできたのを見た鈴仙は既に臨戦態勢をとっていた。

そんな鈴仙を置いて、握手を終えた貂蝉はすぐに屋根に跳び移り、高々と宣言する。

「エースちゃんに困ったことがあれば、いつでもこの愛と正義と性欲の味方の可憐な貂蝉ちゃんが助けに来てあげる！！　だから、その時までお元気でねーーーーー！！　デュワ！！」

屋根から飛び降り、何かが大破する音と、人の断末魔が響くが、エースには聞こえていなかった。

「ふぅ……変わった奴だけど面白い奴だったな。またいつか会いてえなぁ」

「できれば次こそは地獄に落とす……」

復活した鈴仙はエースの身を案じながら、バックに情熱の炎を滾らせる。

「あの筋肉魔人と阿部という未確認第二生命体……そんな奴等なん

かにエースさんは渡さない！！　絶対にこのわたしが守ってみせる！！」

「なんか鈴仙も元気出たな～」

「そうですね～」

一人のウサ耳乙女は新たなる敵の登場に覚悟を決めるのだった。

「ウホッ！　やっぱり良い男」

エースを影から見る一つの怪しい影。

かれこそが最強の敵の『阿部』

顔は良いのに、中身が残念なガチホモであり、外史を管理する役目を受けているのにも関わらず、世界を渡っては男を無理矢理掘るというブラックリストにのる男だ。

アッチ方面では于吉にも勝る。

「おれにとって外史とか卑弥呼とか于吉だとかは関係ない。おれの本能が呼んでいるのは火拳のエースたんだけだ。……待っていろ……必ず、お前の小便をおれのケツにぶっかけさせてやる」

キラキラ輝きながら自分の身体をよじらせている男は周りに悪夢を

無理矢理プレゼントしているのも関わらずに光悦する。

「だが、まずは邪魔な羽虫共を駆除しないことには始まらん」

そう言って、阿部はその場から姿を消したとさ……

## 遂に開戦！　火拳、表舞台に立つ（前書き）

ニコニコ静画で『エース』と『鈴仙』もしくは『うどんげ』、そして『恋姫』で検索して感動しました……あれの中で一番よかったのをイメージしながら書いております。

続きをどうぞ。

## 遂に開戦！　火拳、表舞台に立つ

街にはだれもいなくなった。
戦いを予見した市民達が都を出たからだ。
そして、戦いはすぐそこまで迫っていた。

「これからお前等に渡したい物があるんだ」

戦の準備をしている皆にエースは一枚の紙を出して人数分になるように小さくちぎる。
ちぎった紙を鈴仙、風、恋、霞、華雄、ねね、詠、月にそれぞれ渡すと全員がその紙を不思議そうに見つめる。

「エースさん。これは？」
「ただの紙ね」
「紙やな」
「紙」
「紙きれなのです」
「何も書いてもないですね」

鈴仙が尋ね、詠、霞、恋、ねね、月が首を傾げる。
それに対してエースは鈴仙の手を取る。

「え？」
「ちょっと手の上にその紙を置いてみな」

「う…うん…」

内心では役得だとドキドキしながら言う通りにして紙を一枚乗せる。

「そのままじっと見てろ」

エースの言う通りにしてみる。

皆の視線が紙に注がれている時だった。

「あれ？　動いた」

「風じゃないのか？」

「……城の中は吹いてない」

恋の言う通り、城の中に風が通っていない。

そこでエースは告げる。

「それはな、ビブルカードって奴だ」

「びぶるかーど？　なんやそれ？」

「ビブルカード…この前に話した海・グランドラインの先の究極の海…新世界に存在する店で作られる紙だ。その紙があれば持ち主のいる場所に向かって動くんだ」

「どれどれ…」

他の皆も同じ様に手のひらに乗せると独りでに動き出す。

「「「「「「「「「「おぉ～」」」」」」」」」」

「こうやっておれが別の場所に移動しても……」

「「「「「「「「「「おぉ～！」」」」」」」」」」

エースを追うかの様に動く紙に全員が感嘆の声を上げる。

「その紙の動く方向を追えばいつでもおれに辿りつくからな。どんなに遠くにいてもその場所にいれば必ず会えるってわけだ」

「面白いな…これ」

「だろ？　華雄。これから戦いだからな、もし、危なくなったらおれの所まで逃げてこれるぞ」

「……いいの？」

「あぁ、仲間だからな。それとも恋、いらないって言うなら別にいいぞ？」

「……（フルフル）……嬉しい。ありがとう…」

「そっか」

恋が顔を赤くさせて嬉しそうに紙をしまうと、周りからも声を掛けられる。

「できれば、戦の前に欲しかったわ～…そうしたらいつでもエースに会えたのに……」

「悪い。別にいらねえかと思ってよ」

「んなことあらへん。もうもらったからいつでも会えるんやな？　メッチャ嬉しいで♪」

霞は本当に嬉しそうだったから、エースも嬉しそうに笑った。

「ふん……本当ならお前の力は必要ないのですが、どうしてもというなら貰っておいてやるのです！」

「おう」

「ねね、もっと素直にお礼」

「うぐ……ありがとうです…」

嬉しさを隠すねねにエースも苦笑。

「ふむ……これがあればいつでも勝負できたのに……もっと早く言って欲しかったぞ？」

「はは…華雄はそればっかだな」

「まあ、それ以外でもエースに会うのも悪くないな」

「そうか」

華雄も嬉しそうに貰う。

「まあ、今回はこんなの必要ないけど、貰っておくわね。これから役に立ちそうだし」

「もう……詠ちゃんってば……もっと素直にならなきゃ駄目だよ…すみませんエースさん。詠ちゃんは本当は嬉しがってるんです」

「ちょっと月！？」

「そうか、まあ持っててくれ。役に立つかもしれねえから」

「そ…そのつもりよ！」

「私も嬉しいです…これで私と詠ちゃんもエースさんと繋がることができますから…」

「あぁ、何かあったらそれを辿っておれんとこに来いよ。守ってやるからな」

「はい」

「……まあ……頼りにしてあげるわ」

顔を赤くさせた二人に笑みが零れる。

「エースさん……」

「ん？」

「これがあれば洛陽に着いた時も何とかなったのでは？」

「あ～……忘れてたんだ……」
「まったく……」
「いいじゃないですか。これでいつでも大好きなお兄さんに会えるのですから……」
「大好きって……まあ、これからはこれで安心ね」
「風も時々、お兄さんに会ってもいいですか～？」
「いつでも歓迎するぜ。そのためのビブルカードだしな」

明るく言うエースに二人は嬉しそうに紙を大事そうに握りしめる。

「おれからは以上だ。もう何も無いな？」

エースからの問いに全員が頷く。

それを見たエースは口端を吊り上げ、己の拳を片方の手のひらにぶつけて音を鳴らす。

「戦闘開始だ」
『『『応！！「おー…」』』』

「はぁ……」
「どうかなさいましたか？　桃香様」
「うん…さっきの袁紹さんの軍議なんだけど…」
「？」

ここで、関羽は主である劉備の話を聞いて憤慨した。

さっきまで軍議を時間をかけてきたというのに決まったことといえば軍の総大将だけだった。

「何を考えているのだ!!　決まったら決まったで作戦も決めねばならぬというのに!!」
「あ…愛紗ちゃん…少し落ち着いて……」
「落ち付けますか!!　大体、朱里と雛里の話からしてこの戦も袁紹の下らない嫉妬で起きたものでしょう!!」
「あう…」
「桃香様に当たるな。最初から危惧していたことであろう」
「しかし星!!」

怒りをまき散らす同僚を落ち着かせようと、かつてのエースの旅の同行人の趙雲が劉備の陣営にいた。

反論する関羽を落ち付かせ様にそこへ蜀の小さな軍師の諸葛亮も加わる。

「星さんの言う通りですね。策と言っても期待できるような物ではなさそうです。何も決まっていないなら独自で勝手にやっちゃいましょう」
「む……それもそうだが……」
「まったく…愛紗は頭がカチコチなのだ」
「り…鈴々まで…」
「だが、鈴々の言う通りだ。この戦はあくまでも桃香様の名を上げるため……董卓には悪いがな……」
「それで、もし董卓さんが良い人だったら助ける！　それが良いと思うんだ」

劉備は拳を握って力説すると、関羽も少しは落ち着いてきた。

「…分かりました。我々の目的は一つでした……」
「うむ、そういった割り切りも大事だぞ」
「お前に言われるとは……何とも言えん…」
「にゃはは…星に言われるなんてかわいそうなのだ」
「お主等『失礼』という言葉を知ってるか？」
「そんなことよりも皆に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」
「そんなことって……」

戦前に楽しげに話す陣営だが、そこで劉備は気になる情報について趙雲をスルーしながら意見を尋ねてみる。

「やっぱり、天の御遣いさんも董卓さん側に付いてるって言うんだけど…どうかな？」
「……正直、分かりかねますね…会ったこともないですから人と為りも分からずですので……」
「愛紗はそいつを胡散臭いって邪険にしてるのだ」

「当然だ。体から火を出すなど……訳が分からん…」
「まあまあ、でも…今まで悪い人達を懲らしめてくれたんだから良い人だと思うんだけどなー」
「…大体、桃香様の考えが分かってきました」
「鈴々も…」
「やっぱり我が軍に引き込むおつもりで？」

そう言うと、劉備は満面の笑みを浮かべて頷く。

「うん！」
（（（やっぱり……））））

ここまで楽天的だと心配なところがあるが、そこがこの主の魅力。

それならば全力で期待に応えよう。

内心では呆れと同時に、忠臣としての心が動いていた。

（それにしても何故だろう……）

そんな中で、趙雲は不思議な感覚を体験していた。
趙雲は強固にそびえるシ水関を見定め物思う。

（何となく……懐かしい気がする…）

思わぬ再会まで時間が迫っていた。

「なあ、やっぱり兄さんがおるんやろか？」
「エースさんが敵側になっちゃったのー」

蜀とは場所が代わり、魏の天幕ではかつての仲間の凪、真桜、沙和が三人で固まって話している。

内容はもちろん、エースのことだ。
真桜と沙和は少しブルーになっている。

「……この戦……勝てるやろか？」
「勝てるかどうかじゃない。勝つんだ」

真桜の弱気な発言に、凪が強気に返す。

そんな同僚に二人は少し驚いたようだ。
そんな視線を受け、気になった凪が二人に尋ねる。

「どうした？」
「いやぁ～……凪ちゃんってば全く動揺してないな～……って」
「好きなんやろ？　戦うのは辛くないん？」
「す…！　あの方は尊敬すべき方だ！！」

顔を赤くさせて反論し、すぐにいつもの調子に戻る。

「あの方を魏に入れるにはどの道勝たねばならん。どんな形で会おうともな…」

「凪ちゃんは分かってたの？」

「なんとなくだがな……正直、まだあの方の言う“高み”に行けたか分からないけど……こうなることは覚悟していた」

「それを聞いて安心したわ」

「はい。なればこそ、全力でエースさんにぶつかって……て、華琳様！？」

「いつから…！」

「そこに！？」

突然、現れた主君の曹操と、忠臣の夏侯惇と夏侯淵の登場に三人は背筋を伸ばす。

曹操はそれを静かに微笑んだ後に考えてたことを伝える。

「相手がエース……だったかしら…あなた達の知り合いだから尻込みするかと思っていたけど……あなた達を見くびっていたわ。てっきり落ち込んでいるかと思ってたから」

「いやぁ……ウチと沙和は……なあ？」

「うん…」

「それでもやる気は出たのでしょう？　良い傾向だわ」

「はい。そうでもしないとあの人には食い付いていけませんから」

「その点に関しては春蘭と秋蘭も協力させてあげるわ」

三人は夏侯惇と夏侯淵を見ると、両将軍共にやる気を見せていた。

その中でも夏侯惇が一番張り切っていた。

てっきり、男反対派の荀イクと一緒で反対するかと思っていたけど

……

「今度こそ勝ぁぁぁぁつ！」

「「「なるほど」」」

夏侯惇の燃え上がる姿を見て合点がいった。

仲間にするしないかは別として、単にリベンジしたいだけなんだと

……

「姉者はともかく……もし、戦う時が来たら協力しよう」

「ありがとうございます！　秋蘭様！」

しっかり者の妹に凪は頭を下げる。

そこへ曹操がため息をつく。

「それにしても…まさか噂通り、体から火を出すなんて…夢にも思わなかったわ」

「はい。しかもその炎は変幻自在、力は山をも抜きます」

「凪が言うなら納得はできるが……本当にそうだとしたら厄介どころではないぞ…」

夏侯淵もこれには頭を悩ませる。

そんな話で元々の軍の陣形をいじくっていいのだろうかと。

「構わん！　火だろうがなんだろうが私が叩き斬ってやる！！」

「「「「「……」」」」」

まあ、間違ったことは言ってないのだが、夏侯惇が言うと説得性に欠けるとは口が裂けても言えなかった。

「あなたが言うと説得に欠けるわね」
「そんな～…華琳様～」
「言いにくいことをそうズバッて言える華琳様もすごいの～」

相方の突っ込みなど上の空。
凪はシ水関を眺めて物思う。

（待っていてください……必ずあなたを倒しますから！！）

「やっほ～♪最悪な軍議ご苦労様」
「思い出させるな……頭が痛くなる……」

呉の天幕の中では孫策と周瑜の二人のじゃれ合いがあった。

ご機嫌な孫策とは違って、周瑜はどこかゲンナリとしている。

「ていうか雪蓮、どうしてあなたはそんなに上機嫌なんだ…？」

「決まってるじゃない！　だってこの戦で、やっと闘えるからよ！！」

ズビシィ！と周瑜に指をさして指摘する孫策の姿に、疲労という名の岩石が自分の頭に直撃した感覚を味わった。

さっきまで鬱に陥りかけた周瑜も恨みたくなる笑顔が目の前にあった。

「あなたのように生きていけたらどんなによかったか…」

「ありがと～」

「褒めてないわよ」

しばらく他愛もないおしゃべりをしていたが、すぐに気を取り直して続ける。

「なんにせよ、相手に御遣いがいるという話は私達にとって相当不利だ。今まで賊を倒してきたから民からの聞こえがいいからな」

「下手したら私達が悪人……か……なら、なおさら御遣い君を引きずりださなきゃね」

「引きずり出す…か…そう簡単にいくわけないでしょ。それと、これから軍議だからもう行くわ」

「ええ、素敵な作戦をお願いね」

「できればお前も考えろ。飲んだくれ」

「頭でっかち」

憎まれ口を叩き合いながらも互いに不敵な笑みを見せる。

周瑜は別の天幕へと移り、孫策はすぐ傍にある席に腰掛ける。

「……ふふふふふ…」

一人になったことを確認した孫策は誰にも聞こえない様に笑みを浮かべる。

そして、その感情は抑えきれるものではなかった。

「あーーーっはっはっは

っはっはっはっ

## 遂に開戦！　火拳、表舞台に立つ（後書き）

そろそろバイトよ決まれぇ！！

## 冷静になれ　華雄の無謀の突撃（前書き）

活動報告にこの作品を完結させた後の連載予定の小説の序盤を書いてみました。

プロフィールはまた後で書く予定です

## 冷静になれ　華雄の無謀の突撃

「さあ来い。すぐに地獄に叩き落としてやる」
「「その前にお前を叩き落とすぞ。この猪が」」
「先がおもいやられますね～」

自慢の斧を携えた華雄に霞と鈴仙が諫め、風は一人ごちる。

「なんだと!?　貴様等やる気が無いのか!?」
「アホか!!　やる気があるから出ないんや!!　何度も今回は籠城戦やって言ってるやろが!!」
「さっき詠さんも言ってましたけど…忘れたんですね……」
「違う!　戦の前に精神統一していたんだ!!」
「…ぐぅ～」
「風があまりの呆れに寝てもうたで」
「ていうか、聞いてなかったんですね…」
「なお、悪いわ」

これには風までもが呆れて現実逃避。
そんな華雄に二人も呆れる。

「やっぱエース達も連れてきて正解やった……熱くなったこいつの相手はムッチャ疲れるで……」
「心中お察しします……」
「ありがとなぁ…華雄、お前もエースを見習い」
「暇だな～…」

そう言って霞が指を差すと、そこにはうつぶせで寝ている。

「エース！！　貴様も気合いが足りんぞ！！」
「でもよぉ…詠も言ってたしな～…出なくていいだろ」
「なんだと！？　ここまで愚弄されて悔しくないのか！？」

そう言うと、エースは起き上がって華雄を見つめる。

「部下を危険な目に会わせてまで守りたい名声なんて始めから持っちゃいねえんだよ」
「う……」

エースから醸し出される威圧感に華雄は何も言えなくなる。

それを見て、エースは再び寝転がり、霞たちは安堵に一呼吸おく。

こうして、全員は再び、城門前の状況の成り行きを見守る。

「いつまでそうやって籠っているつもりだ！　腰ぬけ共！！」

シ水関前では劉備軍の将軍である関羽が罵声を浴びせ始めた。

華雄の自身の武に対する誇りは過度の驕り高ぶりが特徴的であり、それは周知の事実。

「戦わずして勝とうなどと思っているのか!?　笑止千万!!」

関羽は特定の人物に挑発していた。

「華雄!!　貴様は口先だけか!?　それならばそのまま臆病に籠るも良し!!　違うというなら我等と矛を交えてみよ!!」

シ水関の誰か一人でも引きずり出せれば門も開き、守りが消える。そして、その標的を華雄にしたことは反董卓連合軍にとって最も最良の手だった。

それの後のシ水関では…

「離せ!!　霞!!　鈴仙!!　奴等を叩き斬る!!」
「アカンって!!　それに乗ったら敵の思う壺やで!!」
「我々の武を愚弄しているのだぞ!?　悔しくないのか!!」
「悔しいのは分かりますけど、今は抑えて…!」
「だが…!!　しかし…!!」
「これが最善の策なんです!!」
「くぅ～……」

事態は徐々に深刻化していき、仲間割れまで始まった。
こんな状況を見た兵達は少しずつ不安になってきた。

「ありゃ～…マズイですね～」
「ふ～ん…そう…」
「「少しは手伝えよテメー等！！」」

三角座りする風とあぐらをかくエースに二人が突っ込む。
少しは体を張っている身にもなってほしい。

手伝ってほしいと聞いたエースは立ちあがって華雄に近付く。

「お兄さん？」

風は急に立ち上がったエースに疑問符が浮かぶ。

何も言わずに華雄の背後へ歩む。

「エース？」

それに気付いた霞がそう言うと、華雄と鈴仙もエースの方に向く。

「華雄……」
「何だ…まさかお前まで…」

そこまで言った時だった。

「おりゃ」
「がっ…！」

エースは華雄の頭をグーで殴る。
華雄の頭は城壁にめり込み、壁を陥没させた。

「何してんの！？」

霞は思わず標準語で叫んだ。
それでもエースは顔色一つ変えずに手の埃を払うかのように互いの手をぶつけ合う。

「聞かせたくなきゃ聞けなくすりゃいいと思ってよ」
「「「……」」」

サラっと考えたことをここまで忠実にできるエースに皆は顔を引き攣らせる。
仮にも仲間なんだから…

そう思いながら城壁から見下ろすエースを見ていると、エースの様子が変わった。

「おい、なんか新しい姉ちゃんが出てきたぞ？」
「え？　どんな人？」
「あれ」
エースが指差して言うと、一人のふくよかな女性が出てきた。
その近くの『孫』の字を見て霞がおもむろに嫌な顔をする。
「げ……まさか孫策かいな…」
「孫策……何か誰かに似てんな…」
「孫策さんがどうしたんですか？」
桃色の髪を見て頭を捻るエースだが、その脇で鈴仙は霞に聞くと気絶している華雄を見て答える。
「ああ、華雄は孫策の母である孫堅に一度負けてるんや」
「それで華雄さんに因縁があるんですね……」
そんなことを話していると下から孫策と思われる罵声が聞こえてきた。
「わが母、江東の虎と謳われた孫堅が娘、孫伯符が来てやったぞ！！　我が母に敗れた憐れな華雄将軍！！」
そこからは華雄に対してのみの罵声を送ってくる。
鈴仙と風は周りの華雄の『猪』の評価に少し同情してしまった。
だけど、その猛獣も今はおねんね中。
「…エースさんの暴挙が吉になったね…」

「そのようやね。罵声が本人が聞いてなきゃ意味が無…」

霞が得意気に華雄を見てみると…

「全軍抜刀!!　我等を虚仮にする愚か者どもを根絶やしにするぞお!!」

「「起きてたぁぁぁぁぁぁぁ!!!」」

華雄の無駄なタフネスが凶を呼び寄せてしまった。

壁を陥没させるほどの衝撃を受けた頭には傷も何も無く、本人も絶好調だった。

これには霞も鈴仙も驚愕を隠しきれなかった。

華雄は既に準備を整え、部下も誘導していた。

「アカン！　止めんか華雄！」
「門だけは絶対開かないでくださーい！！」
「私は兎の様にブルブル震えるつんもりは無い！！」
「な…！　この耳は今は関係無いでしょ！？」
「落ち付けって！　鈴仙も冷静さを失ってどないすんのや！！」

このままでは仲間内で瓦解しかねない。
それも含めて霞が抑えることは到底不可能だった。

「全軍続けぇぇぇぇ！！」
『『『応っ！！』』』
「わーーっ！　なに言うてんねんお前等！！」

霞の必死の願いも届かず、華雄隊は門をこじ開けた。
それを見た面子は焦躁感に襲われる。

「ダメですって！　戻って…！」
「突撃ぃぃ！」

鈴仙の説得にも耳を貸さずに華雄は隊を引き連れて門を出る。

「ありゃー…相当マズいですねー…」
「アカン！　華雄が落とされたらここも陥落するで！」
「霞さんは華雄さんを助けてあげてくださいね？」
「言わずもがな！！　誰かおる！」

風の指摘に頷く霞は兵を呼ぶ。
そこへ一人の兵がやってくる。

「今からウチ等の隊も討って出る！　今すぐ準備しい！」
「兵の撤退は風と鈴仙ちゃんが努めますね～」
「おう！」
「そんじゃあおれは華雄を連れ戻すか？」
「頼む！！　ウチは劉備隊を抑える！」
「よしきた！」

霞は先鋒の劉備隊の撃破、エースは華雄の救出、風と鈴仙は虎牢関への撤退及び、エース隊率いる、『スペード隊』の準備を済まそうとする。

「霞さん！　エースさん！　ご武運を！」
「なのですよ」
「おおきに！　門を開けろ！！」

鈴仙と風の激励に霞は笑って返し、門を開けさせる。
それと同時に霞は腹の底から声を上げて高々と言う。

「全軍！！　ウチ等を舐めくさるボケ共に一泡吹かせ！！　突撃ぃいいいいいい！！」
『『『うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！』』』

霞は指揮の上がった兵達を連れて戦場に繰り出す。

「さて……おれも問題児を回収するか…」

視線の先でたなびく紅の『孫』と漆黒の『華』の旗を一瞥し、エースは城門から飛び降りた。

「押せ押せぇ!!　このまま押し切れぇ!!」

華雄は馬の上で自慢の戦斧を振り回し、敵をなぎ倒しながら戟を飛ばす。

周りには赤で統一された孫策軍の兵士がひしめいていた。

「華雄将軍!!　ダメです!!　敵の勢いが強すぎます!!」

「くそっ!　油断した!!」

部下の報告を聞いた華雄は自分の失態に悪態を吐きながら群がる敵兵を斬り伏せる。

ここは敵軍の真っただ中であり、援軍も期待できない。

そんな中、一人の声が聞こえてきた。

「お命頂戴」

「!!」

背後から静かで、底冷えのする声が聞こえると華雄は馬から飛び降りた。

「ぐはっ！」

地面に叩きつけられて全身を打撲するが、馬の首が胴体から切り離されたのを見ると、まだマシな方だった。

転がる勢いは止まり、顔を上げるとそこには鋭い眼をした小覇王がいた。

「貴様は孫策！！」

「あら、案外あっけないわね」

「なんだと！？」

その言葉に華雄は激昂するが、孫策はどこ吹く風か動じない。

「だってそうでしょ？　こんな口八丁に引き寄せられて門を開けて突っ込んできて今にも負けそうなんだもの。あっけないとしか言い様がないわよ」

「ちっ！　抜かせ小娘…痛っ！」

「？」

急に足を押さえて痛がる華雄を見て孫策はどうしたのかと思っていると、疑問はすぐに解けた。

「あぁ～……さっきの落馬で足を挫いたのね…」

「うるさい！！　私はまだ…ぐぅ！」

無理矢理立ち上がろうにも紫に変色し、腫れた足が本人の意志についていけない。

これはもう勝負アリだった。

孫策は溜息を吐いて華雄に近付く。

「はぁ～……御遣い君と戦う前の準備運動のつもりだったのに……これじゃあつまんないわね…」

「小娘がいっぱしの口を…！」

「そういうのは勝ってから言うのね……でも…これで終わり」

孫策は剣を構えて向かってくるというのに体が動かない。

全く動けないこともないが、地に這いずるのは武人の誇りとして許さない。

（……ここまでか…）

華雄の諦めと、孫策の剣の輝きが重なり合った。

その時だった。

「華雄！！」
「「！！」」

突如として大きい声が聞こえ、孫策と華雄は声の元を追う。
すると、そこには戦の中心人物がいた。

「エース！！」
「よぉ…」

エースは表情を変えずに華雄に手を振って応える。

「なんでこんなとこに！？」
「そりゃあオメエ…手の焼く仲間を回収にきたんだよ」
「う……」

明らかに自分のことだったので、何も言えなくなってしまった。
エースはそんな華雄を守るかの様に孫策の前に立ち塞がる。

そして、孫策はエースから醸し出される威圧感を感じ取って聞いてみた。

「……あなたが御遣い君？」
「御遣いというより、協力者だな」

不敵に笑って答えるところを見ると、孫策は聞いてみた。

「そう……まあいいや。早速だけどちょっといいかしら？」
「ん？　何だ？」

「おい！　慣れ合うな！！」

孫策の雰囲気が少し柔らかくなったのを感じて孫策の話題に乗る。

「ありがと。ねえ思春！」
「はい」
「い…いつの間に…！」

華雄は突然現れた甘寧に驚く。
対称的にエースは別の意味で驚愕していた。

「あれ？　お前……甘寧か…？」
「その通りだが？　エース……」
「やった！　大当たり～！」
「……こんなとこで会うなんてなぁ……」

エースは以前に出会った甘寧との思わぬ再会に驚き、孫策はエースが目当ての人物だと知って大手を振って大喜び。

そして、そのまま剣を抜く。

「あれ？　やんのか？」
「当然！　そのためにここまでやってきたんだから！！」
「私はお前を捕縛するための補佐だ」

甘寧がそう言うと、孫策は不機嫌な顔を甘寧に向ける。

「や～よ思春。私は一対一でやりたいの～」
「で、ですが…御身になにかあっては……」
「殺るか殺られるかの勝負が面白いんじゃな～い。戦わせてよ」

「しかし……」

決闘の許可を貰おうと説得する孫策に甘寧が狼狽する。
そんな漫才みたいなことをしていると、エースはポケットに手を突っ込んで言う。

「話してるとこ悪いんだけどよ……」

エースの言葉に全員の視線がエースに向けられる。
そして……エースはニカって笑って言った。

「おれとの勝負……また今度な！」

そう言うと、エースはポケットから一つの小さい黒い玉を取り出して地面に叩きつける。
叩きつけられた玉からは黒い煙が出てきた。

「うわ！　ちょっとなに！？」
「けほっ！　こほっ！　煙幕か……」
「うそ！？　何も見えない！！」

黒い煙に四苦八苦している傍で、エースは同じくむせていた華雄を抱えて引き返す。

「お前の隊はもう退散させたからな。後はお前だけだから心配すんな」
「……」

走りながら話すエースの言葉に華雄は煙を少し吸い込んで喋れずとも、頷いて肯定と感謝の意を示す。

エースはそれを華雄に笑顔を浮かべる。

「逃げんなーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

真桜印の煙幕丸の煙の方向から聞こえる孫策の軽めの呪詛を無視して、そのまま虎牢関へ猛ダッシュで突き進むエースであった。

こうして、華雄隊が開けた門から敵がなだれ込み、シ水関の戦いは連合軍の勝利に終わった。

だが、次はそう簡単に敗れはしない。

なぜなら、虎牢関では飛将軍呂布と火拳のエースが待ち構える。

次の戦いこそが本当の正念場だということは目に見えていた。

## 楽しくいこうぜ！　燃え盛る虎牢関の攻防（前書き）

今回はエース主体にしてみました。

そして、ラストにあんなことが…

## 楽しくいこうぜ！　燃え盛る虎牢関の攻防

シ水関での戦いから二日後に連合軍が押し寄せてきた。

虎牢関の前は金の鎧…袁紹軍で溢れていた。

「まったく……本当に馬鹿正直に突っ込んできたわね……」

「まあ……袁紹やからな……」

「でも……その方がボク達としてはやりやすいけどね……」

「ふふ……奴等の慌てふためく顔が目に浮かぶ」

虎牢関で待機していた詠と合流していた霞と華雄は相手の大将の馬鹿加減に呆れるもニヤニヤが止まらない。

なにせ、こっちには相手も予想していないだろう、派手で強力な“罠”をしかけているのだから。

「あんた達、気を引き締めなさい。気持ちは分かるけど兵にそんなみっともない顔見せないでよ？」

「む…すまん」

「分かったから今は静かにしてくれへんか？」

「ったく…と…戻ってきたわね」

二人の行動を注意して溜息を吐くと、自分達に近付いてくる姿があった。

恋とねねだった。

「兵の設置を終えてきたのです！！」

「……後はエースの攻撃の後に敵を崩す」

「おっしゃあ！！　待ってましたぁぁ！！」
『『『うおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！』』』

霞の歓喜に兵も釣られる。

それもそのはず、今まさにエースの本領を見せつける時が来たのだから……

「なぁ…斗詩ぃ～…まだ出て来ないのかな～？」
「もう…文ちゃんったら…そんなこと言って本当に出てきたらどうするの？」
「それならあなた達が華麗にやぁ～っておしまいなさい」

先鋒の袁紹軍の懐刀の文醜、そして顔良…そして悪趣味な神輿に担がれている袁紹がいた。
先鋒でなに馬鹿なことをしているのかと周りに思われても本人は気にしない。

「それよりも、飛将軍とか御遣い～とか言われて良い気になっている方達はまだなんですの？」
「ですよね～…アタシは戦いたいんですけど出て来ないんですよね～」
「できれば出てきて欲しくないですよ～…」

浮かれる二人に顔良は涙目で答える。
そういった漫才が繰り広げられていると、いきなり兵士が走ってきた。

「伝令ーーーーーー！」
「なんですの？　はしたない声で叫ばないでくださいまし」
「す…すみません！　ですが報告が…！（何がはしたないだ。あんたの頭ははしたないと言うより恥ずかしいだろうがよぉ…）」
「何かあったんですか？」
「はい！　その……虎牢関より、奇妙な物が現れました！！」
「「「奇妙？」」」
「はっ！　上空をご覧ください！！」

兵からの報告で三人と全兵士が上空を見上げる。

すると、そこには大きな火の玉が浮かんでいた。

「なにあれ……」

袁紹軍の後方の曹操軍を指揮していた曹操は唖然としていた。
それも曹操だけでなく夏侯惇、夏侯淵、荀イクも驚愕していた。

「なによ…あれ…」
「分からん……だが、良い予感はしないな…」

荀イクの呟きに夏侯惇も同意する。
武人としての本能がアラームが鳴っているのを感じる。

その中で、凪と真桜、沙和は青い顔をして声にする。

「凪……あれって……兄さんやない？」
「あぁ……あんなことができるのはエースさんしかいない…」
「……どういうことかしら？」

二人の話を聞いていた曹操が聞いてくる。

しかし、事態は動いていた。

――おい、なんだかあれこっちに落ちてないか？
――本当だ……なんだよあれ…

袁紹軍から兵から不穏な声が聞こえた時にはもう遅かった。

「落火星」

城壁でエースがそう呟くと、火の玉は弾けて火の雨が辺りに降り注ぐ。

――うぎゃあぁぁぁぁ！！

――あちぃよぉ！！

火の雨で体は燃やされ、周りの気温も異常に上がっていく。

断末魔が袁紹軍から響く中、また新たな攻撃が辺りを混乱に突き落とす。

袁紹軍の周りに小さな火の玉が無数に浮いていた。

「これは！　エースさんの蛍火！！」

「大将！！　あの火の玉が無いところまで一旦退いた方がエエ！！」

「これってすごく危険なの！！」

曹操は三人の必死の反応を見て少し驚く。

「これ……あの男が？」

「はい！　あの火の玉はエースさんの技の一つの蛍火、あれから離れないと尋常ではない被害が出ます！！」

「どういう…」

夏侯淵がその故を尋ねようとした時だった。

ドカアアアアアァァァァン！！！

「「「「！！！」」」」

無数に浮遊していた蛍火が爆散した。
爆発の衝撃で兵士は紙の様に吹き飛び、辺りが地面が揺れる。
爆発は一つには止まらずに次々と袁紹軍を飲みこんでゆく。
爆発の跡では多数の兵士が服を焦がして倒れている。

「こ……これは一体……」

夏侯淵が目の前で起こる惨劇と異常事態を見て無意識に呟く。
他の武将もこの世の物とは思えない光景に言葉を失っている。

「……凪…まだこういったことが起こると？」
「はい。正直、あの人の全てを知っている訳ではないのでそのほうがよろしいかと…」
「そう……春蘭、秋蘭、桂花。呆けるのは後になさい。ここにいては巻き添えを食らうわよ」
「「「！…はい！！」」」

冷静な曹操の声に気付いた三人は我に帰り、素早く兵達に後退の指示を送る。

しかし、冷静に見えても、その実は驚愕も混ざっていた。

ただ、自分のすべきことは驚愕することではなく、兵を退却させることだと自覚しただけの話だった。

「全軍反転！！　爆発に巻き込まれない範囲まで退却せよ！！」

今は最善を尽くすのみ。

そう思っていたのだが……

「逃がしはしねえよ」

『『『！！』』』

その場の全員が目を疑った。

袁紹軍が悲鳴を上げる灼熱の雨の中を上着も着ていない一人の男が悠然と歩いている。

その光景には誰もが息を飲んだ。

そこには不可解な炎に襲われたという報告を受けてやってきた趙雲隊がいた。

「エ…エースなのか……」

その隊の統率を任されていた趙雲は意外な人物のこの世ならざる光景にフリーズしてしまった。

周りが一人の男に視線が集まっている中で、曹操隊が一番早い行動を起こした。

「止まるな！！　今は後退しろ！！　殿は夏侯淵隊が請け負う！！」

夏侯淵の声が響くと、夏侯惇が驚いた様に夏侯淵に詰め寄る。

「なにをいっているのだ秋蘭！　奴は一人だ！！　このまま一気に…！」

「それでは駄目だ！　奴がここへ来たということはその内に奴の軍も押し寄せてくる！」

「だったらその前に…！」

「駄目だ！　どうやら我々は蜘蛛の巣に迷い込んだ蛾のようだ！袁紹をやぶってこちらに押し寄せてくる時間もそう長くは無い！！」

「だからといってお前だけを残して行けるか！！」

夏侯惇がそう言うと、夏侯淵は不敵な笑みを浮かべる。

「心配せずとも、少し相手をひるませて逃げるさ。弓で遠くから狙い撃てばいい」

「それなら私が直接奴を…！」

「いや、姉者の部隊が一番行動が速いから華琳様を確実に守ってやれるから姉者は行くべきだ」

そう言われ、夏侯惇は苦悩するが、すぐに立て直す。

「……分かった。すぐに帰って来い」

「あぁ……少しでも時間は稼ぐ」

「……死ぬなよ」

そう言って夏侯惇は兵を率いて後退していった。

夏侯惇も全て納得できてはいないようだが、無理矢理納得させた。

ここは戦場、常日頃から兵に身内が倒れても命を賭せと言っている。
そんな自分が身内の危機にうろたえる訳にもいかず、ただ信じることしかできない。

身内にしか分からない二人の固い絆を信じながら夏侯惇は兵達を後退させていった。

「死なないさ……華琳様がこの世を治めるその日まで…」

穏やかに呟くと、表情を変え、こちらに向かってくるエースに弓を構える。

「……お主……まさかこんな所で会うとはな…」
「……夏侯淵だっけ？　ここは知り合いのよしみで見逃してくれ」

おちゃらけてそう言うエースから隙を見つけられず、夏侯淵から余裕が尽きかけていた。

「だめだ……我が主が貴殿との対面をお望みだからな。みすみす見逃す訳にはいかん」
「堅苦しいなぁ……楽しくいこうぜ？」

見えない圧力に追い詰められる夏侯淵にエースが不敵に笑いながら言うと、そこへ別の声が聞こえてきた。

「それなら、我等と“楽しく”死合おうではないか？」

その声に二人がその声の主を見ると、意外な人物がそこにいた。

「「趙雲？」」

「左様、常山の趙子龍とはこの私のことだ」

エースと夏侯淵の声がハモり、趙雲は愛用の槍を構えて堂々と応える。

「……ここへなにしに来たというのだ…？」

警戒しながらの問いに趙雲はふてぶてしく笑いながら答える。

「何しにって…あんなバカでかい火を見て、一番近い曹操達に貸しを作りにきたのだ」

「……」

上からの物言いに夏侯淵の趙雲に対する視線が一層鋭くなる。

それを感じた趙雲は溜息を吐く。

「睨んでいる場合じゃないぞ。今の私では奴を討ち取ることはまかりならん。ここは一つ共闘でも…」

「……少し考えさせてくれ」

そう言うと、夏侯淵は弓を放つ。

エースは瞬時にそれを避け、夏侯淵めがけて走ってくる。

夏侯淵はその間にも矢を常人離れした弓捌きで射る。

一秒に二発射るという神業を駆使するが、エースは止まらない。

全てを避けるか叩き落としながら夏侯淵との距離を一気に詰める。

（速い！　身のこなしが半端じゃない！）

「そら！」
「！」

掛け声と共にエースは夏侯淵に向かって跳躍し、踵落としを繰り出していた。

「ぬぅっ！」

夏侯淵も体を捻って回避すると、直後にエースの踵が地面をえぐる。

負けじ夏侯淵も避けながらエースの顔に照準をあわせて放った。

「うおっ！」

矢が当たると同時にエースの頭が弾かれる。

（やった！）

そう思って気が緩んだ時だった。

「ふっ！」
「な…！」

エースが頭を起こすと、矢を口にくわえたエースが笑っていた。
それに驚愕した一瞬が悪かった。

「十字火！」
「！！」

突如としてエースの指からあらわれた炎に驚愕すると同時に『十』

の形の炎が飛んできた。

炎の軌道は真っ直ぐに夏侯淵に向かっている。
夏侯淵は咄嗟に鋼の弓でいなそうとした時だった。

「夏侯淵！」
「うわ！」

横から趙雲が夏侯淵に体当たりして自分ごと倒れて避けた。
そして、炎は通過し、壁に当たると爆発した。

それを起きながら見ていると、夏侯淵は戦慄した。

（もし、さっきのを受けていたら今頃…）

崩れた岩壁を見て、呼吸を整えながら立ち上がる。

「……すまない。助かった」

素直な気持ちを伝えると、趙雲は余裕の無い様子で応える。

「なに…今は一人でも味方は多い方がいいと思ってのことだ…正直言えば私一人で闘り合っても勝てる見込みが無い」
「……やはり凪達の言う通りだったな…今まで嘘だと思っていたのかもしれん…」
「何を言ってるのか分からんが、多分私も同じ気持ちだ」

実際、エースと面識のあった二人がエースと対峙し、その能力の一端を目の当たりにしたのだ。
二人は今これまでにない驚愕を受けていた。

趙雲の言葉に夏侯淵は薄く笑い、問い掛ける。

「そうか…それなら今、私の考えていることも分かるのか？」

趙雲は鎗を構え…

「ふふ…どうだろう…な！」

最後の言葉と共にエースの方へ突進する。

同時に夏侯淵も弓を構える。

「なるほど…いい手だ」

余裕そうに言うエースに趙雲は叫ぶ。

「仕方なかろう！　これが今の最善だ！」

「よっ」

趙雲の一振りをバックステップで避ける。

そこから高速で乱れ突く。

「しかし驚いたぞ！」

「なにが？」

「初めて会った時からただ者ではないと思ってはいたが、まさかあの灼熱の御遣いだったとはな！」

「おれもお前を見つけて驚いたぜ」

「覚えてもらって光栄だ！」

軽口の最後に趙雲がバックステップでさがると、夏侯淵が同時とも言える早業で二本の矢を放ってきた。

そこで夏侯淵も会話に入ってくる。

「私もまさかエースがここまでの実力とは思ってなかったぞ！！」
「人は見た目で判断するなってことだな」
「まったくだ！！　それと、凪がお前に会いたがっていたぞ！」
「おれもだ！」
「それなら我が軍に来い！」
「だが断る！！」

雨の様な夏侯淵の矢を捌き、嵐の様な趙雲の槍を交わしながら余裕そうに会話するエースは流石といったところだ。
それでも、エース相手にそこまで相手できる夏侯淵・趙雲ペアの攻撃が巧いのだろう。

（高速で、寸分違わずにエースに放つ腕……これが魏武の一角を担う夏侯妙才か……強い…）
（鋭い槍捌きに加えて私が狙いやすいようにさりげなく戦っている……龍の名は伊達じゃないようだ…）

戦いながら、今後自分達に立ち塞がるであろう“敵”の力量を見定める。

そこで一瞬……一瞬だけ互いの視線が交差したと二人は感じた。

それは危惧であり、喜び。
新たな脅威と新たな楽しみとの出会い。

そんな感情を味わう珍しい体験をした。

しかし、忘れてはいけない。

そんな神秘的な体験を遮る者がいるということを。

「火斬車！！」

「「！！」」

そこでエースの足から火の刃が放たれ、二人は現実世界に戻ってきた。

「はっ！」

「ふっ！」

二人でしゃがみ込んで避ける。

そして、油断を反省し、目の前の強大な敵に意識を向ける。

（私としたことが……まずはエースだったな…）

（我ながら情けない……今は警戒よりもエースの捕縛だ…）

二人は立ち上がって各々武器を構える。

「そうそう…楽しくやんねーと人生つまんねえぜ」

覚悟を決めた二人に対して、エースは両手を炎でコーティングして挑発気味に笑ってみせる。

どう見ても息切れも無く、余裕だというアピールに二人は冷や汗をかく。

（はて……どう攻めれば一矢報いてやれるか…）

（そろそろ矢の本数も危うい……何か状況の変わる一手を……）

二人でそんなことを考えていると……

ジャーン！　ジャーン！

「「！！」」

「お、やっと袁紹が潰れたか」

明らかに虎牢関から聞こえてくる銅鑼にエースが呟く。

途端に威圧と炎を収めたエースの言葉を聞いた二人はエースより前方を見てみると、そこは圧倒的の一言でしか言い表せなかった。

初めて見るテンガロンハットのドクロを模した旗を掲げ、剣だけでなく拳、蹴り、もしくは頭突きで攻める荒くれ集団が袁紹軍を圧倒していた。

もはや、軍の瓦解も時間の問題だった。

それを確認した詠が引き上げ合図の銅鑼を鳴らしていた。

それに気付いたスペード隊は勝利の雄叫びを上げながら意気揚々に引いて行くのが見えた。

そこへ、更に別の声も聞こえてきた。

「しゅうううううらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
「星！！　加勢にきた！！」
「鈴々参上なのだ！！」

そこへ蜀から関羽、張飛。
魏からは夏侯惇がエースの前に現れた。

「姉者！？　なんでこんなところに！？」
「あぁ！　華琳様を避難させ、華琳様からの命で秋蘭の加勢と火拳の捕縛を任された！」
「そうか……華琳様は無事か…」

ホっとした胸をなで下ろす夏侯淵に夏侯惇が意気揚々に応える。

「そうだ！　これで…」

夏侯淵も表情を少し嬉しそうにしながらも武人のソレになる。

「あぁ…本領発揮だ」

二人が構える中で、趙雲達も集まる。

「愛紗と鈴々か…ちょうどよかった…」
「あぁ…相当手こずった様だな…」
「あぁ…夏侯淵と共闘してもこのザマだ…」

自嘲気味に言う趙雲の言葉に鈴々が興奮した子供の様にはしゃぎ出す。

「う～～～～～～！　なら早く戦うのだ！」

勝手に蛇矛を振り回してはしゃぐ妹分に関羽も呆れる。

「まったく…無駄なことしてないでかかるぞ。星もいいな？」

「無論、本来なら一対一でやりたかったが、これも桃香様のためだ」

「そうなのだ！！　早く帰ってお姉ちゃんを安心させるのだ！！」

三人も武器を構える。

魏の夏侯惇、夏侯淵。

蜀の関羽、張飛、趙雲。

先のシ水関で武勲を上げた猛将が一つに集まっている。

本来なら絶望すべき場面の中、エースはポケットから小さい玉を手に取る。

しかし、それはシ水関で使ったのとは違ってアルミで包まれたような光沢を輝かせている。

それを手に取って対峙する将軍の気を逸らす。

「集まった所悪いんだけど、おれもう帰らなくちゃいけねえから帰るわ」

おちゃらけて答えるエースに皆の警戒が濃くなる。

「それは聞けん。我が主が貴様を御所望だからな。大人しく来てもらう」

「それは我等も同じだ。我が主がどうしても聞きたいことがあるのだからな」

この時、夏侯惇と関羽の間に火花が散ったが、エースにとってそんなことはどうでもよかった。

「ま、お前等がなんと言おうともまかり通らせてもらうさ」

そこで、持っていた小さい玉を見せると、全員の警戒心がさらに高まる。

得体の知れない相手だからこそ、こういった誘導が大きく効果を表す。

その誘導に乗って玉に釘付けになっているのを確認すると、エースは口を吊り上げて一言。

「また会おうぜ」

その時、エースが玉に火を付けると玉は凄まじい光を放つ。

「うあ！」

「こ…これは…」

夏侯姉妹はいきなりのまばゆい光に目を瞑る。

「なんだこれは！」

「ニャー！　見えないのだー！」

「くっ…目が痛くなるほどだ……」

蜀の将軍達もあまりの眩しさに目を瞑って動けなくなった。

周りの兵も急な輝きに一時的な目の痛みを訴え出した。

兵の収拾もつけられないまま、彼女達が目を開けた時にはもうエースの姿は綺麗さっぱりと消えていた。

「これで大分減っただろ」
「相変わらずとんでもない威力やな……このままやれば全滅もできるんやないの？」
「おれの炎も飛ばせる範囲があるからな…全滅は無理だろうな……それによ…」

将軍級を撒いて来たエースは城壁から混乱している敵を見下ろし、親指である一点をさす。
霞がその場所を覗くと兎の耳が見えた。

「鈴仙が……ていうかうずくまってどないしたん？　震えてるやん」
「そこは目を瞑ってやってくれ。ここまで大々的な戦いは初めてなんだよ…」

そう言ってエースは鈴仙に近付く。

「……うぅ…」

鈴仙は先程のワンシーンを思い出して気分が悪くなった。

人が紙の様に簡単に吹き飛ぶ。

その場の怒声が聞こえる度に鈴仙は自覚させられる。

「これが……本当の戦場……」

今までの賊退治なんかとは訳が違う。

人の御霊が散り、消えゆく魔の領域。

そして、自身の狂気を増幅させる場所でもある。

鈴仙は自分のやりたいことをやって死ぬことに何の恐怖も感じていない。

だけど、戦場に溢れる狂気に感化されて、その誇りを失うのを恐れていた。

そしてもう一つ、彼女を追い詰める要因があった。

（……だめ……逃げちゃ…）

初めて、自分が人を殺めたという自責の念があった。

鈴仙は戦いというのを極端に恐れ、嫌っている。

戦が悪いことだということもあるが、人の死というものが一番の原因だ。

自分の目的は世の中の復興に役立つこと。

だけど、そのためには自分の嫌いな戦でしか夢の確定は有り得ない。

そんな二つ巴の感情に唇を噛んでいる時だった。

「鈴仙」

「！！」

背後から急に声をかけられた鈴仙は驚き、反射的に振り向くとその視線にエースを捉えた。

「エース…さん」

「……顔色悪いな……大丈夫か？」

「はい……大丈夫です……」

無理に作る笑顔にエースは頭を掻いてため息をつく。

エースは鈴仙の隣に座って鈴仙の背中をさすってやる。

鈴仙はそれに何か言おうとしたが、結局止めた。

そのままエースは背中をさすっていたが、少し話す。

「お前は優しい奴だな」

「え？」

「お前は今も死んで行く奴のために泣いてやれてよ……おれとは大違いだ…」

「そんなこと…わたしには覚悟が無いんだよ……」

普段はしっかりとしているのに、こう落ちこまれると調子も狂う。

そう思ったエースはなんとしても励ましてやりたかった。

「おれはお前に覚悟が無いなんて一度も思ってねえよ。お前にはす

げえガッツがあるじゃねえか」
「でも、大事な時に決心が……」
「……」
エースは少し考えてから言った。
「だったらおれはお前の覚悟が決まるまで支えてやる」
「え？」
明るく言ってくるエースに鈴仙は虚を突かれる。
「お前がその重圧に耐えきれないなら代わりにおれがお前を守ってやる」
「でも、これはわたしの問題……」
「いいよ、ここで妹分のために一肌脱いでやらねえと男が廃る」
「……」

「だからよ……」
「？」
「覚悟……早く決まるといいな」
「！！」

エースの屈託の無い笑顔に鈴仙の目頭は急に熱くなる。

それに気付かないエースは横で暖かい声をかけながら背中を撫でてやる。
その声は聞こえていなかった。聞く必要は無かった。

ブレザー越しでも、撫でるエースの手の暖かさをはっきりと感じた。
体温とも、火とも違った暖かさを感じた。

「……ごめんね…わたしって本当にどうしようもないね…」
「んなことねえよ。お前はよくやってくれてるよ」
「……ありがとう…」

鈴仙はこの時間が少しでも長く続けばいいと思った。

「……時と場所を考えなさいよ……たく…」
「嫉妬は醜いで？　戦が終わったら詠も心おきなく甘えたらええやん」
「ばっ！…何よ嫉妬って！！　冗談じゃないわよ！！」
「その割には顔が赤いで～？　月の言う通りもう少し素直になってもええんちゃう？」
「なにが素直って……あの子あんたに何か言ったの！？」
「華雄。今の内に準備しとこか？」
「話聞けぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！　あんた月と何話したのよぉぉおぉぉお！！！」

エース達は後ろで賑わっている詠達を見て首を傾げていたが、その光景がとても面白かったので笑いながら放置した。
隣の鈴仙の穏やかな笑顔を見たエースはもう大丈夫だと判断し、鈴仙を離して立ち上がる。

「よし、一緒に頑張ってこんなことさっさと終わらせるぞ？」
「……うん！」

鈴仙の目に輝きが戻っていた。
それを見て安心したエースが第二陣を仕掛けようとした時だった。

「兄貴ぃぃぃぃぃ！！！　大変だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スペード隊の一人がエース達の元へと走ってきた。
それを見たエース達は首を傾げる。

「なんだ？　こんな時に」
「す…すいやせん…ゼェ…こんな時に……ハァ…でも……それどころじゃ…ゲホ…ないんです……」

息絶え絶えになってる所を見ると、相当走ってきたのだから非常事態なのだろう。
エース達は作戦の中断を咎めることなく報告を促す。

「なにか敵が仕掛けたのか？」

華雄の問いに部下は息を整えながら首を縦に振る。

「何ゆうてんねん。敵さんはさっきエースの強襲で大損害を被った所やで？　反撃する暇はあらへんかったやん」

霞の言う通り、先鋒の袁紹軍のほとんどが先程の爆風や火災で損失した。

そんな敵が反撃したというのか？

そう考えていると、息の整ってきた部下が紡ぐ。

「違うんです！　“こっち”じゃなくて強襲を受けたのは“あそこ”なんです！！」

「だからどこが襲撃されたのよ！！」

詠がまどろっこしくなって少し乱暴に問い詰めると、部下の血走った目が見開かれた。

そして、その後聞かされる事実に全員が驚愕し、絶望する。

「董卓さまのおられる城及び、洛陽の街が襲撃されました！！！」

天国から地獄。

運命の歯車は時として人々の運命を狂わせる。

## 楽しくいこうぜ！　燃え盛る虎牢関の攻防（後書き）

途中で撤退に使った真桜印のスタングレネードとまさかのテンドンにがっかりしたでしょうが、それが作者の限界です。

## 影からの強襲　月を救え（前書き）

唐突ですが、『ななし』さんのおかげで次回作の構想の基礎が閃きました。
ありがとうございます！！

## 影からの強襲　月を救え

エースは走った。
虎牢関に仲間を置いて。

急に言われた言葉に誰もが耳を疑った。

洛陽襲撃

大陸の主要軍が虎牢関に集まっている中、洛陽への進行は不可能だった。
部下から詳しく聞いてみると、急に街中から白装束の大群が襲ってきたらしい。

幸いにも月の周辺の兵で持ち堪えてはいるが、白装束が次々と湧いて出てきているらしく、徐々に押されているとのこと。

そこで伝令を送ったとのこと。

後で詠も駆けつける様だが、それまでエースは待つ気にはなれない。

エースのはらわたは煮えくり返っていた。

エースはあちこちで煙を上げる洛陽を駆ける。
戦前とあって、民は一人も見当たらない。

エースにとっては好都合であったため、そのまま崩れた瓦礫を跳び越えて行くと数人の人影が現れた。

その衣服は白に統一されていた。

「異能を宿した悪め!!　今こそ正義の鉄槌を下さん!!」

「悪は滅びるべきなのだ!!」

そう言って凶器を手に取って襲いかかる。

そんな時、エースは不敵に笑う。

「懐かしいねぇ……海賊の時を思い出すぜ……」

世間からは邪魔もの扱いされ、蔑まれた時と同じ周りの目。

死んでからは打って変わってやることもなかったから旅をしていただけだったのに、いつの間にか正義の味方。

そんな見方に慣れずになんだか戸惑っていた近頃。

エースは思い出した。

不敵な笑みを浮かべてエースは叫ぶ。

「海賊が悪なのは昔からの常識だぁ!!」

エースは両手に炎を纏わせて敵に突っ込む。

「陽炎!!」

洛陽の街に巨大で強大な火柱が上がった。

――交代だ!!　今の内に飯は食っておけ!!
――第三陣も一緒に抑えろ!!

城の一室では怒号が飛び交う。
月はそこの玉座に座って不安そうに表情を歪ませる。

どうしてこんなことになったのか……
そもそも、敵がこんな近くに潜んでいたなんて……

月はそんなことを考えていると、一人の伝令が月の前に膝をついてくる。

「伝令!!　敵が城門を突破したとのこと!!　今すぐにこの部屋を閉ざします!!」
「そうですか……その前にこの城の者全員もこの部屋に集めてください」
「はっ!」

月の指示で兵士は分担して城の中を駆ける。

今頃、城の門で兵達が頑張って踏ん張っているだろうが、それも時間の問題だ。

間もなく思い出の詰まった中庭にまで押し寄せてくるだろう。

そう思うと胸が苦しくなる。

楽しくて優しい仲間達と育んだ思い出の場所が侵されていく。

「董卓様！　城の住人の避難終わりました！！」

「！…ありがとうございます。これよりここで敵を当たって時間を稼いでください！」

『『『応っ！！』』』

月は自分を頼りにする臣下を前にして涙を堪え、指示を出す。

上に立つ者として臣下を護る義務を果たさなければならない。

（…エースさん……）

月は無意識にエースの笑顔を思い出す。

この苦難を乗り越える勇気をもらうため…今一番会いたい人を思い浮かべる。

「蛍火……火達磨！」

エースの放つ炎が白装束を包んでいく。
断末魔を上げる暇さえ与えない。

「くそ……こいつ等どっかから生えてんのか？　全然減りもしねえ…」

晴れた爆煙の隙間から白装束の大群が映る。

「火拳！！」

間髪入れずに特大の炎の拳を撃ち込む。
炎は白装束を家屋ごと焼き払い、エースの前方だけを灰に変える。

「とりあえず今は急がせてもらうぜ」

さっきの火拳で全滅させたなどとは思ってないエースは反転させてある場所を目指す。

「えっと…確かここを曲がって…」

「天誅っ！」

「受けねえよ」

「この…ぐはっ！」

曲がり角に隠れていた敵の不意打ちを難無くかわしてお返しに顔面を殴る。

倒れた敵を跳び越えて突き進む。

しばらく進んで、目当ての家が見えてきた。

「あった！」

エースはホっとしながらまだ無傷の一軒の家にたどり着く。

そのまま家の中を覗き込む。

――――ワン！　ワン！

すると、家の中から一匹の犬が跳び出した。

その跳び出した犬は首に赤い布を巻いていた。

エースは突っ込んできた犬をキャッチする。

「はは…大丈夫そうだな……セキト」

――ワン！
「ぷ…おいおい…今はじゃれてる場合じゃねえよ」
そうは言っているが、顔を舐められるエースは笑いながらセキトと呼ばれる犬を離す。
――ニャー
――チュンチュン
――モー…
――メー…
――ヒヒーン
セキトの声に応じてか、家の中からたくさんの動物が出てくる。
動物達は群がる様にエースに近付く。
「おい、今はそんな場合じゃねえって…」
エースもそれにたじろぐが、群がってきた動物達を押しのける。
「…これだけ元気がありゃ大丈夫だな…」
押しのけても群がる動物の力にエースも苦笑。
そもそも、この動物達がいた家は恋の自宅であり、動物達は怪我、捨てられたなどの理由で恋が世話していた“家族”である。
これを聞いたエースは自分の“家族”の定義から離れた家族にギャップを感じたものの、守るべき家族がいることに少し羨ましくなった。
そんな動物達が自分になついた時は素直に嬉しかった。

動物にしろ、頼られることが嬉しいと思っていた。
自分が『存在してもいい』と、第三者から認められた気がするから。

「おれはまた行かなきゃなんねえ。セキト、ここはお前に任せるぞ？」

――――ワウ！！

「よし、いい返事だ」

エースは自分の問いに自身ありげに吠えるセキトに口を吊り上げる。

（こいつが人間だったら大物になってんなこりゃ）

そう考えながらセキトを下ろすと、セキトは他の動物に呼び掛けてエースから離す。
離れた動物達はセキトを中心に家に入るのを確認するとエースは両手を家に向ける。

「炎上網！！」

そう叫ぶと、家の周りから炎が現れる。

やがて、その炎は大きさを増して家を覆い隠す様に包みこむ。
いわば、炎の防御壁である。

「これでここはしばらく大丈夫だな……あとは……」

エースは火の手が上がり始めている月の城を見渡す。

「あそこまでどうやって邪魔もなく行くか……だな」

エースは少し考える。

（おれもゾオン系の鳥の能力があれば飛んで行けるんだけどな……）

だが、ここで頭を振って考えを否定する。

「だめだ、無い物ねだりしても始まらねえ。とりあえず近道でも……」

近道……その一言でエースは何かを思いつき、閃いた。

近道がない……無い物を願っても仕方ない…

ならどうする？

――――簡単なことだ……

「そうか！！」

なんでこんな簡単なことを今まで思いつかなかったのだろうか。

「道がねえなら作るしかねえだろ！！」

エースは不敵に笑って炎の渦を展開させた。

月達の篭る部屋は不安と恐怖に満ちていた。

部屋に攻めてきた白装束が扉を叩く音が響く。
その音に待女達が身体を震わせる。

部屋には月の親衛隊も含めて僅か数十人。
この様子だと門前の兵もやられたと考えて間違いない。

扉を破られたら太刀打ちどころか時間稼ぎも怪しいだろう。
（誰か…）

月は両手を胸の前で握る。

しかし、膠着も長く続く訳がなかった。

『『『！！』』』

扉がこじ開けられ、敵がなだれ込む。

月は驚愕するが、すぐに指示を送る。

「兵士さんは迎え撃ってください！　それ以外の人は私と共に後方へ下がってください！」

月の指示に兵士は白装束の前に立ち塞がり、待女は逃げる様に下がる。

「悪を擁護する罪深い罪人達よ、正義の鉄槌を喰らうがいい！」

敵の一人がそう言うと、一斉に襲い掛かってくる。

それに対抗する様に兵士も武器を振りかぶって突っ込む。

ぶつかり合った時に互いの武器から火花が散る。

大声を上げて威嚇する者もいれば罵る者もいる。

そこにあるのは、ただの狂気だけだった。

待女同士で抱き合って涙を流すのに対し、月は毅然とした態度で玉座から離れない。

自分が逃げれば自分を頼っている部下も不安にさせてしまう。

だからこそ月は逃げるわけにはいかなかった。

怖い気持ちを抑えて月は拳の震えを抑える。

しかし、状況は劣勢に追い込まれていた。

最初の均衡も溢れ出る白装束に破られ、兵士は倒れ、残りの数少な

い兵士は待女と君主の月を護る様に立ち塞がって武器を向けるが、ジリジリと追い詰められていく。

「観念しろ！　悪は栄えない！」

白装束の一人がそう叫んで武器を構えると、白装束の全軍が凶器を手にする。

それに悲鳴を上げる待女を見た月は玉座から立ち上がる。

「あなた方の目的は私なのでしょう？　この方達にはなにも怨みは無いはず…」

月は歩をゆっくりと進ませ、白装束の眼前に立つ。

兵士は武器を向けられて動けずにいる。

「ですから、私の首は差し上げます。ですからこの人達だけは……」

懇願する様な月に一番大柄な白装束は少し考えて言った。

「いいだろう」

（これで……いいんだよね？）

その言葉に月はホっとしながらもどこか悲しげだった。

諦めの月に白装束が武器を構える。

巨大で鋭利な刃物が月に牙を向けている。

「ご覚悟召されよ」

白装束の感情の無い声が部屋に響き、凶器が振り下ろされた。

月にはそれがスローモーションで見える。

避けようと思えば避けられそうな凶刃も避けようとはしない。

それどころか避けようとは思わなかった。

（きっと……大丈夫……）

それは諦めか……または希望なのか……それは月にも分からなかった。

そして……

――――炎戒……

運命の女神は……

――――火柱……

月に微笑んだ。

「摩天楼！！」

「なっ！…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

誰かの声が聞こえたと思った刹那、白装束が炎に包まれる。

月も兵士も待女も白装束も驚愕する。

月の前には白装束を飲みこんだ火が大破した壁から外へと繋がっている。

壁を突き抜けて白装束を飲みこんだ時間差はコンマ一秒。

その炎がどれだけ速かったのかが分かる。

「おれの仲間に手ぇ出す奴は……」

外から聞き慣れた声が聞こえる。

月が一番聞きたかったその声を……

「あれは…！？」

外を見ていた白装束が声を上げて指を差す。

それを追って外を見ると、そこには地上まで続く細長い炎の上を走っているエースが見えた。

「これは……炎の道か！？」
「いかん！　早く切り落とせ！！」

一人がそれに気付くと、別のが武器を構えて叫ぶ。
それに賛同した白装束は一緒に武器を構えて炎に武器を振るう。

しかし、どれだけ攻撃しても炎は消えない。
切っても貫いても殴ってもそれは全て無駄に終わる。

そして、遂にエースが壁から屋敷に入ると、エースは高く跳躍する。
それを目で追う全員の視線を受けながら着地すると、月を包みこむ様に抱いてその場から離れる。

「発火！！」
『『『ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』』』

エースの掛け声と共に炎の道が爆発を起こす。
炎を攻撃していた白装束を大量に呑みこむ高熱の息吹はある程度まで広がって風と共に消え去る。

兵士を追い詰めていた白装束もエースに警戒を向ける。

それでも、エースからは動揺も気持ちの揺れも見られない。

それどころか帽子の隙間から鋭い眼光で目の前の“敵”を射抜く。
白装束もその一睨みで動けず、膠着状態になる。

そんな中でエースが口を開く。

「お前等……」

この白装束はとんでもない禁忌……タブーを犯した。

「おれの仲間に手ぇ出すなら……覚悟決めろよ？」

邪教集団は太陽の化身を怒らせた。

## よくもやってくれたな！　洛陽に舞う炎の乱舞（前書き）

反董卓連合編も後半になりました！

このままよろしくお願いします！！

それと活動報告には『ななし』さんの作品をヒントにして作る作品のプロローグを載せてみました。

続きはできるだけ早くに書いてみます。

「エースさん…」
「悪い…これでも近道したんだけどよ」
エースはバツが悪そうに言うが、月は微笑んで応える。
「大丈夫です。信じてましたから」
その言葉にエースは少し虚をつかれた。
その場の空気を感じさせない様子の月の意外性を目にしたからだ。
「肝が据わってるじゃねーか。本当に月か？」
「へぅ…」
「冗談だよ。そう落ち込むなって」
「我等を前にたいした余裕だな」
頭を撫でていたエースに白装束が会話を遮る。
一方で、当のエースは白装束を前にしても余裕の笑みを崩さない。
月を後ろに下がらせる。
「董卓を餌にすれば釣れると思っていたが、こうも簡単にいくとは思ってなかったぞ」
「それでこんなまどろっこしい真似を？」
「そうだ」
その先の言葉は無かった。

エースは白装束の顔面を殴ったから。
殴られた白装束は地面を何回かバウンドして壁に激突する。
壁が大破して白装束が崩れる。
他の白装束も臨戦態勢をとる。
そして、エースは拳を収めて右半身を炎に変える。
「なら、『悪』らしくお前等を燃やすだけだ」
「なにを…！」
エースの軽い挑発で白装束は更に怒る。
それを見てほくそ笑んだエースは突然白装束の大群に突っ込む。
それに対して白装束は迎え撃つ姿勢を見せるが、それもすぐに崩される。
エースは驚異的な跳躍で白装束の頭上を跳ぶ。
しかも、それだけではない。
「蛍火…」
『『『『！！』』』』
白装束はいつの間にか眼前に現れた火の玉に驚愕する。
「火達磨！！」
幻想的な炎は弾け、白装束を飲みこんだ。

エースは着地し、間髪入れずに第二撃を打ちこむ。

「火拳！！」

『『『ぐあああああぁぁぁぁ！！』』』

いつもよりも極太の炎の拳は白装束を一掃し、城の壁を破壊した。

それによって白装束の数が四割にまで減った。

『『『うおぉぉぉぉ！！　御遣い様ぁぁぁぁ！！』』』

「応援よりも早く逃げろよ！！」

董卓軍の兵士と待女達が手を振って応援するのに、エースは突っ込む。

その直後、気を入れ直して白装束を見据える。

白装束はエースに警戒を強くして、動けずに武器を構えたまま。

「来ないならこっちから行くぞ」

エースはまた白装束に突っ込み、両手に薄い円盤状の炎を纏わせる。

「火輪刀（かりんとう）！！」

エースはそれを投げると、当たった白装束は火傷と切り傷を負って倒れる。

「ひ……怯むなぁ！　押せぇ！」

白装束が叫んでエースに群がるが、それは紛れもない自殺行為だった。

「狐炎輪！！」
「なっ！…ぐわぁ！！」

エースが放った炎は姿を変え、一つ一つが一匹の狐の姿となる。
数は四匹だが、通常の狐とは似ても似つかぬスピードで駆け廻り、
白装束を蹴散らす。

白い衣と肌を焼かれ、次々と倒れていく。

数が次々と減っていく同胞に白装束も狼狽していく。
正体を知らない内に襲撃したのが間違いだった。

何人かはそう思ったが、真実を知って後悔することもあるということを忘れているのだろう。
憐れ、鼠は百獣の王に喧嘩を仕掛けたことにも気付かない。

「どうする？　まだやるのか？　それとも全滅させられるか……」

狐はエースの肩に乗り、またユラユラと炎に戻った。
炎はゆっくりとエースの体に戻っていく。

それを見た白装束は一歩後ずさって態勢を立て直す。

そんな時、白装束の全員の頭から声が響いた。

――――もう結構ですよ。相手の観察を終えました。すぐに撤収してください

それを聞いた白装束の動きが止まった。

手足の力が抜けてグッタリとなる。

「？」

エースは急に生気の抜けた白装束に疑問符が浮かぶ。

しかし、そんな疑問もすぐに吹き飛ばされる。

「！」

また白装束が動き出したのを見て、エースも構える。

しかし、闘う気はあったけれども白装束は一目散に逃げてしまった。

「…なんだぁ？」

さっきからの意味不明な行動にエースは首を傾げ、思考する。

しかし、そんなことを考えても分かる訳が無い。

神経を研ぎ澄まして周りの気配が薄れていったのを確認した。

とりあえず、当面の危機は去った。

「エースさん！」

「おっと」

少し気が抜けた所に月が勢いよくエースの体に跳び込んできた。

大した衝撃では無かったから、エースは普通に受け止めた。

月を見ていると、先程とは違って月は泣いていた。

「ヒック…グス……」
「なんだ？　さっきまでは肝っ玉だったのによ」
「…怖かったんです……」

エースはそれを聞いて優しく笑う。
月はさっきまで目の前の死の恐怖と戦っていたのだ。

こんな小さい体のどこにそんな勇気があるのかさえ考えた。

「まあ、とにかく当面の危機は去ったな。またおれは虎牢関に…」

月をゆっくり離して城を出ようとした時だった。

「申し上げます！」
「あれ？　お前……」

急に現れた伝令兵に目を向ける。
その顔に見覚えがあったエースはすぐに虎牢関からの伝令だと理解した。

「何かあったのか？」
「はっ！　先程、虎牢関が…！」
「……何があった？」

エースはただならぬ予感を感じ、兵に聞くと悔しそうに答える。

「…虎牢関が連合軍に……！」

「そう…それでは火拳のエースはもう虎牢関にはいなかったのね？」
「正確に言えば、最初の一当ての後に洛陽に戻ったんやけどね」
「そう…それは残念ね…」

エースが去った後、恋と華雄の突撃にやむを得ず霞も突撃を開始した。

その結果、霞は夏侯惇の目の責任として捕虜となり、曹操に下った。

「洛陽の湧き出た賊……お主は戻らなくてよかったのか？」

夏侯淵の問いに霞はカラカラと笑って答える。

「大丈夫や。エースが向かったから問題あらへん。ウチ等がおったら足手まといもエエところやな」

「そう…じゃあもう一度聞くけど、袁紹に大打撃を与えた火の雨は…」

「言うまでもあらへん。エースやな」

それを聞いた曹操は口を吊り上げて答える。

「火拳のエース…ますます興味が沸くわ…欲しいわね…」

「華琳さま！　それは…！」

「ふふ…男が入るのが嫌なのね？　可愛いわ桂花」

「か…華琳さま……」

可愛いと言われ、恍惚な表情を見せる猫耳軍師・荀イクにSっ気を見せる曹操といった百合百合しい光景を見た霞は少し引いた。

「はいはい、ごちそうさま……」

「華琳さまは渡さんぞ？」

「いらんて、ウチはエース一筋やから」

夏侯惇の問いをやんわりと断ると、それに気付いた曹操は聞いてみる。

「へぇ…あなた、火拳を狙ってるの？」

「せやで！　ウチよりも強いし、メッチャ優しゅうて面白いんや！　あれほどの男はそうそうおらんで！」

笑いながら言う霞に曹操は少し笑いながら言う。

「そう……今は別件でここにはいないけど、あなたと凄く気の合う部下がいるわ」
「？　どんな奴や？」
「楽進って名前で……とにかくエースの話をしてごらんなさい。飛び付くから」
「はぁ……」

訳が分からないといった様子で霞は首を傾げるのを見て曹操は少し吹いてしまった。

「こんにちは、可愛い兎ちゃんと……いねむりさん♪」
「……「ぐ～…」」
「雪蓮……」

一方、呉の天幕では呆然とする鈴仙と眠る風、おどける孫策と頭を抱える周瑜がいた。
鈴仙は風の体を揺すって起こす。

「おおう！？」
「おはよう」
「おはようございます～。孫策さん」
「なんで和んでるんです…？」

風と孫策はなぜか和やかに話し、鈴仙と周瑜は溜息を吐く。

そもそも、なぜ鈴仙達が呉の天幕にいるのか。
答えは簡単、霞と同じ様に捕まったからだ。

詠の指示で後退する連合軍を追う恋、華雄の軍を下がらせるために鈴仙達も出陣した。

しかし、それは孫策と劉備の作戦の内であり、スペード隊は救出の際に袁術軍を攻撃。
袁術軍はとてつもない大打撃を受けた。

しかし、その後が問題だった。

孫策と劉備は前もって打ち合わせしていたかのように、息を合わせながら三軍を分断させた。
そして、呉はスペード隊、蜀は恋と華雄を相手にした。

しかし、兵数の少ない鈴仙達の部隊が耐えられる訳もなく、また、部下を危険にさらせる訳もなく降伏するしかなかった。
恋達も敗れ、華雄も捕らえられたが、恋とねねはどこかへ逃げ延びた。

「それじゃあ話戻すけど…本当に火拳くんはいないのね？」

「……」

鈴仙は静かに頷く。
表情は沈んだまま……

それを見て孫策は努めて明るく言う。

「まあ、あなた達のような有能な将が手に入ったから本当はこれで万々歳なんだけどね♪」
「…それで私達を捕虜に…？」
「あぁ…我等が大将が勝手…に決めたことだからな」
「なによー。そんなネチネチ言わなくていいじゃない」

『勝手に』を強調する周瑜に孫策はブー垂れて抗議する。

「それに、この中の誰かを殺しちゃったら火拳くんも怒ると思ってねー」
「結構、お兄さんを押すのですね…気に入ったのですかー？」
「もちろん！　火拳くんは絶対に呉に来るわ。だから安心なさい」

妙に自信満々に宣言する孫策に鈴仙と風が首を傾げる。
思案顔で考えていることを見透かされたのか、周瑜は溜息混じりに言う。

「気にするな。確証も無ければ根拠も無い。ただの勘だ」
「そう！　だから呉にいれば絶対に会えるから大丈夫！」
「「……」」
「雪蓮…」

再度頭を抱える苦労人の周瑜に二人は同情した。

それと一緒に今この場にいない大事な人を思いながら物思う。

（エースさん……大丈夫だよね？…また会えるよね…？）

（お兄さん……早く会いに来てくれないと鈴仙ちゃんも風も退屈で……楽しくないのですよ…）

空は間も無く、夕闇に呑まれようとしていた。

「こ…これは…」

「…どうやら大丈夫」

もう一方では戦いから逃れてきたねねと恋が洛陽から帰って来ていた。

目的は洛陽の家族を迎えに行くこと。

しかし、歩けど歩けども街の残骸しか見えず、恋達は心の中で絶望していた。

しかし、いざ着いてみると何故か恋の家だけが無傷に近かった。

中にいた家族も含めて。

――ワウ！

「セキト……大丈夫？」

――バウ！

「張々も大丈夫だったのですね！？」

二人は家族の無事を喜び合う。

そして、その時に全てを悟った。

「……今度お礼しないと…」

「ま…まぁ……礼くらいはしておかないと恋殿の軍師としての品格を疑われるので、礼くらいは…」

「……それよりも早く洛陽から出る。ねね」

「はいですぞ！！」

こうして二人は家族と共に洛陽を飛び出した。

「そうか……捕まっちまったのか…」

兵からの伝言を聞いたエースは肩を落とし、いつもの様に明るいとは言えなかった。
そんなエースを見て月は慌てるかの様にフォローする。

「だ、大丈夫ですよ！　皆殺されずに保護されたって…！」
「そうだけどよ……」
「へぅ…」

予想以上に堪えているエースに月も困惑する。

何か明るい話題くらい触れられないのか。
月は自分の人見知りさを恨みながら話題の種を見つけようとキョロキョロと穴の空いた壁から城下を見下ろす。

「あれ？」

月は何か動く一行を見つけた。
最初は白装束かと思ったが、白でなく緑の衣装であったため少しホっとした。

「！！」
「どした？…月…」

しかし、そんな一瞬の気の休まりも消え去る。
エースも月の見ている先を隣で見てみる。

「！！」
「エ…エースさん……」

エースはその先の光景に目を見開き、月は泣いてエースのズボンの裾を掴む。
そんな月の頭に手を置いて安心させようとするエースの表情も硬く強張っていた。

「……少し待ってろ」
「え…？　エースさん！？」

短くそう言って城から飛び降りるエースに月は叫ぶ。
落ちている間にエースはズボンのポケットから小さく折ってあった仮面を握る。

洛陽の街はかつての喧騒さも賑やかさも威光も失くし、ただの廃墟と成り果てていた。
そんな洛陽を徘徊する緑の鎧の軍隊と将軍たちがいた。

「ひどい……」
「…男や女、子供や年寄りなんてあったものじゃない…」
「無差別なのだ……」

関羽、趙雲、張飛は悲痛に顔を歪ませて焼けた街を見渡す。

「なるほど…本当に洛陽で反乱があったのですね……」

「これだけ被害を起こして人影一人見つからないって変だよね？…朱里ちゃん」

ペレー帽似の帽子を被った諸葛亮と魔女ハットの鳳統…伏龍鳳雛と謳われるロリ軍師達は冷静に状況を分析する。

「こんな……許せない…」

その中で、怒りを表しているのが劉備軍大将の劉備である。

劉備は焼け焦げた子供のおもちゃを見て拳を握る。

そして、その中で一番歯痒く、悔しいと思っている人物が二人いた。

「くそ！　我々がいないことを良いことに……絶対に許さん！！」

「そんな……なんでこんな……」

劉備軍の捕虜にされた華雄と詠だった。

この二人は逃げる直前に劉備軍に捕まり、一度は死を覚悟した。

しかし、劉備はそれをよしとせずに生かし、罪のない月を助けるとまで約束した。

最初はそんな劉備に疑心を募らせていたが、劉備の説得と提案、自分達の益を語ったことによって反論する余地と共に疑心も失せてしまった。

下手に感情論を述べるよりも劉備達自身の得を言うことによって詠達に現実的な安心感を与えたことが吉となった。

詠と華雄は劉備に一時的に賛同し、洛陽を案内している。

しかし、いざ着いてみると全員がそこの光景に目を疑った。

街は無残に焼け、城の壁には巨大な風穴が開けられている。

今、洛陽で起こっていることはマトモじゃない……と

一方で、詠と華雄の二人は手のひらにビブルカードを置いてエースの元へと向かう。

瓦礫を無理矢理よじ登ったり、道なき道を延々と歩き回っていた。

「……月」

「心配するな…董卓さまにはエースが付いているんだ。負けるなど有り得んのは私達がよく知っているだろ？」

「……うん」

いつもよりもしおらしい我が軍師を見て複雑な気分になってしまう。

励ますつもりだったが、逆効果になってしまったのを悔やんでいると劉備が話しかけてきた。

「……随分と御遣いさんを信用してるんですね」

「あ…あぁ…」

「まぁ……少しは信用してるだけよ…」

二人は曖昧に返事し、顔を赤くさせて視線を逸らす。

その意図が分からない劉備は首を傾げるが、それを微笑ましく思う。
そんな時だった。
――――動くな
「「「「「「「「「「「「！！」」」」」」」」」」」」
突如としてどこからか第三者の声が響き、劉備達の足を止めた。
兵は武器を構えて辺りを見渡し、関羽達は劉備や軍師達を庇う様に立ち塞がる。
劉備達の３６０度全方位を見渡しながら関羽が唸る。
「誰だ！？　どこにいる！　姿を見せろ！！」
「そう怒鳴らなくても見せてやるよ」
「「「「！！」」」」
関羽、張飛、趙雲の三人ははっきりと聞こえた声の方向に武器を向ける。
すると、そこには上半身半裸でオレンジのテンガロンハットを被り、蝶の仮面を付けたエースが立っていた。
「誰だ貴様！！」
「変で怪しい奴なのだ！！」
「貴様！！　その格好いい仮面は何だ！！　私にくれ！！」
一人だけおかしいことを口走る者がいたが、仮面を付け、帽子も被って顔を隠しながら声も変えているので、趙雲もかつての同行人とは気付かない。

驚愕する面子の中で詠が素っ頓狂な声を出す。

「エース!?　あなた何やって……あ」

「「……」」

しかし、途中でエースの名前を出すというううっかりをやらかした詠は慌てて口を閉じるが、遅かった。

「エース……お主エースか!?」

「こ……こいつが袁紹軍を崩壊させた火拳……?」

「おかしなお兄ちゃんなのだな」

趙雲は意外な人物との再会にテンションが上がり、関羽と張飛は世に謳われる御遣いのイメージとのギャップに呆然とする。

エースは自分の仲間のやらかしたミスに頭を抱える。

「……詠」

「あぅ……ごめん…」

「エースにも何か考えがあったのだろうが……まあ気にするな」

「ごめん……」

エースからのジト目と華雄からの訳のわからないフォローに詠は弱々しく謝罪する。

そんな中、話を聞いていた劉備がポワポワと話しかけてきた。

「あの……あなたが華雄さん達が言う御遣いさまですか?」

「……まあそんなとこだ」

エースは未だに沈む詠を置いといて、仮面を外さずに劉備達を見据える。
まだ素性の知れない相手に心を許していないと一目で分かる。

「あの、これは「無駄な問答は止めようぜ」…なにを」

劉備は何が何だかといった感じで返すと、エースは仮面の奥から鋭い視線で突き刺す。

「お前等……詠と華雄をどうする気だ？」
「くっ！」
「にゃにゃ！？」

エースからの味わったことのない迫力に関羽も張飛も少し怖気づいてしまった。
無意識な後退に気付いた関羽はハっと我に帰る。

（退いた！？　そんな……そんなことが…！）

内心で自分の愚行にうなだれながら虎牢関でのことを思い出す。
それは関羽、張飛、趙雲の三人で飛将軍・呂布に対峙した時だった。

『……お前等……怖くない』
『くっ！…言わせておけば…！』
『止めろ愛紗。悔しいが呂布の言う通り。我等は脅威とみなされていない』
『三人で攻めているのに、全然討ち取れもできないのだ…』
『そう。こっちにはお前等よりも……恋よりも強い人がいる。恋も鍛えられてる』
『なんだと！？』
『呂布よりも強い奴がいるのか！？』
『……しかも呂布も強くなっている……か……厄介どころではないぞ…』

（あの時……火計で逃げた呂布が言っていた奴と賈駆と華雄が言う灼熱の御遣い……本当にこ奴が本物の…！？）

関羽は虎牢関の時の会話を思い出しながら焦燥感に駆られる。

（まずい！　桃香さまが傍におられる今、呂布以上の者とやりあえ

る余裕など…！）

「あ……愛紗…」

「鈴々……」

自分の義妹も自分と同じことを考えていると気付き、二人で顔を見合わせてエースを更に警戒する。

それが武しかない自分達にしかできないことだと奮い立たせる。

そんな膠着状態が続く中、その沈黙を破る者がいた。

「落ち着けエース！！」

「そうよ！！　今はこんなことしてる場合じゃないのよ！！　月はどうなったの！？」

華雄と詠がエースの前に立って落ち着く様に説得する。

エースが本気で暴れる前に落ち着かせようと思った故の行動だった。

本気で暴れられたら収拾がつかなくなる上に話もこんがらがってくるのは目に見えていた。

それに、詠達には月の行方が気になっていた。

二人の説得にエースは劉備達から目を離し、二人に話しかける。

「……それなら大丈夫だ。白い奴等も追い返したし、月も兵達も大丈夫だ。少しやられちまったけどな」

「そう……よかったぁ…」

「それなら、私達を董卓さまの元へ案内してくれないか？……劉備達も一緒に」

華雄の言葉にエースは少し反応し、聞き返す。

「なんでだ？　こいつ等は敵のはず……」

「確かに敵だったけど……もうこいつ等の助け無しでは月を……守ってあげられないの……」

「どういうことだ？」

そこから、詠は語っていった。

劉備達に捕まった時に洛陽での異変を告げたこと、劉備達は月の悪政説に疑問を持っていたこと、劉備達は月を助けるために洛陽にやってきたこと。

全てをありのままに話した。

「……」

しかし、それでもエースは警戒していた。

口ではなんと言おうと、ついさっきまでは敵だった奴を信じていいのだろうか……

どっちにしろ、何か対策を立てなくてはいけないと思っていた時だった。

「…久しいな……と言っても虎牢関の時に会ったな…エース」

「……趙雲か？」

エースに話しかけてきたのはかつての旅の仲間の趙雲だった。

顔を知っている人物の登場でエースの警戒が薄れたのを趙雲は感じ

取った。

「そこの二人の言う通りだ。我等は董卓の保護を目的にここまで来た……嘘は言わん」

「……さっきまで月を悪役に仕立てて攻めてきた奴を信用しろと？」

その言葉に趙雲以外の劉備の将達は何も言えなくなってしまう。

どんな理由にしろ、無実の月を追い詰めたという事実が皆の胸にしこりとして残っていた。

そんな中で、趙雲は堂々と言う。

「確かに、我等は董卓を利用してのし上がり、いくつかの名声を手に入れた」

「星さん！？」

諸葛亮は全てをありのままに話す趙雲に驚愕する。

他の全員も目の前の強大な敵を刺激しかねない趙雲の発言に肝が冷えていた。

皆の緊張が高まっていく中、趙雲は続けた。

「だが、この世で今も貧困に苦しみ、嘆く者のため……これは必要悪なのだ……だから頼む……我等に董卓へ償わせる機会をくれないか…」

趙雲は自分の気持ちを精一杯にそう言って頭を下げた。

劉備達はそんな趙雲の姿を目の当たりにして驚愕している。

エースは頭を下げる趙雲を見て、頭を掻いて溜息を吐く。

そして、仕方無いといった口調で言う。

「……詠と華雄以外には少し警戒させてもらう……それでいいな？」

「あぁ……お前と私の仲だ。もし、言葉に違うことがあれば私の命で皆を許してやってくれ」

「星ちゃん！？」

「おい星！！」

趙雲の自己犠牲の発言に劉備と関羽が叫ぶも、趙雲は飄々と受け流す。

それを見て、エースのさっきまでの敵意は自然と消える。

そして、エースは両手を劉備達に向ける。

それには関羽と張飛は警戒を強めて武器を握る手を強める。

そして、その後に驚愕させられることになる。

「火蝶（かちょう）」

エースの手からおびただしい量の赤い蝶が出てきた。

「え！？」

「なっ！？」

「なんなのだ！？」

「！！」

「はわっ！！」

「あわわわわわわわ……」

劉備、関羽、張飛、趙雲、諸葛亮、鳳統がその不可解な光景に驚きを隠せない。
周りの兵もザワザワし始めた。

それでも、エースは劉備軍を覆うほどの蝶を出して淡々と告げる。

「いいか……もしお前等が詠達に危害を加えるようなことをしようとしたら……」

蝶の一匹を操作し、誰もいない場所へとヒラヒラ飛ばしていると……

「羽火(うか)！！」

そう叫ぶと、一匹の蝶は小規模爆発を起こし、地面を抉りながら木でできていた店の壁を吹っ飛ばす。

「「「「「「！！」」」」」」

詠達は慣れているようだったが、劉備達はその威力に驚愕し、自分達を覆う赤い蝶に戦慄した。

もし、自分の周りの蝶が爆発したらどれくらいの被害を及ぼすのか…と。

「そんじゃあ少し待ってろ」

そう残してエースはその場を離れ、月を向かいにその場を去っていった。

## よくもやってくれたな！　洛陽に舞う炎の乱舞（後書き）

『火輪刀』……クリリンの気円斬のように手で円盤状の炎を作って攻撃。火斬車よりも切れ味はいいが、作るのに少し時間がかかる。

『狐炎輪』……狐の形の炎をまるで生きているかのように動かして敵に当てて燃やす。威力は弱いが、速さはピカイチ

『火蝶・羽火』……火蝶仮面の時だけの技。技は蛍火を蝶の形にしただけ。

『火柱・摩天楼』……通常の火柱を縦横無尽にコードの様に曲げたりすることで自由に道を作る。場合によっては攻撃にも使え、その炎の上を走って近道を作ったり空中戦もできてくる

## 責任は果たす　火拳のエース発つ（前書き）

遂に反董卓連合も終わりです。

納得できないところもありますが、ご覧ください

## 責任は果たす　火拳のエース発つ

「よ、月」
「！　エースさん!?　あんなところから跳んで大丈夫だったんですか!?」
「まあな、あれくらいならガキの時からよく跳んでる」
「す…すごいことしてたんですね…」

苦笑する月だが、ここでエースは本来の目的を思い出して月の手を引っ張る。

「それじゃあ行こうぜ」
「え？　でもどうやって…きゃ！」

エースは強引に月を背中に持ち上げて乗せる。
すると、月は懐かしい感覚と共にデジャヴを感じた。

「え……一体なにを…」
「ちょっと急ぐから我慢しろよ？」

間違いない……またあの時と同じ場面だ！
そう思った月は慌てて制止をかける。

「ま…待ってください！！　そんなに急がなくても…！」
「悪い。ムリ」
「だ…だったらせめて心の準備を…！」

月がそう言うと、エースは少し考えて急にカウントを始める。

「1…もう覚悟できたぜ」
「エースさんのじゃないですよ！！　私はもっと必要…」
「いくぜ！」
「え！？　あの…だから……きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

月の悲鳴は悲しく、洛陽の上空に響いたという……

「「「「「「……」」」」」」
「きゅ～…」

エースは城からまた飛び降りた後、劉備達の元に戻って来た。

しかし、劉備達は本当に奇妙な光景を見ていた。

前もって悪政を行っていたと聞かされていた董卓が意外どころか斜め上を行くほどの可憐であったから。
袁紹のが嘘だと分かってもイメージは払拭できていなかったようだ。

それだけならまだ許容できていたのだが、その董卓が目を回しているのに唖然とした。

「エース……」

「なっはっは…悪い悪い」

それとは別に、華雄は苦笑し、エースは悪気もなく笑っている。

そして、詠は体をプルプルと震わせ……

「月になにしてくれてんのよあんたぁぁ!!」

「おふ」

詠は渾身のパンチをエースの腹に放つが、エースは全然痛くないらしい。

その後も何度も殴りながら怒鳴る。

「あんたはいつもいつも他人のことそっちのけで無茶苦茶するんだから、少しは気をつかいなさいよ!!」

「いや、これでも結構…」

「でもじゃない!! あんたじゃなくてボク達の基準で考えなさい!! 正常な人としての基準を持ちなさい!!」

「んなこと言われてもなぁ…」

エースは詠からの要求に困っている。

劉備達はさっきまで、自分達が今まで会ったことのない程の圧力を与える人物のやんちゃな一面を目にして言葉がでない。

もっとも、趙雲はいつものエースに笑みを零し、劉備も無邪気な笑

みを浮かべるエースに笑みが零れる。

（本当は優しくて面白い人なんだ…）

劉備はさっきまでの姿を忘れ、目の前で詠達と楽しそうに笑っているエースを見つめる。

「は……ここは……」

「月!?　意識が戻ったの!?」

目のうずまきが消え、月の意識が戻るのを詠は喜ぶ。

「…詠ちゃん?」

「月!　大丈夫だった!?」

「う…うん…でも、なんでここに…」

「なんでって……月が白い装束に身を包んだ奴等に襲われたって…」

「それは…もう大丈夫だよ…エースさんが追い払ってくれたから…」

「そう……よかった……」

二人で涙の再会に浸る光景に劉備達もエース達も嬉しそうに微笑んで見つめる。

しかし、そのままでは話も進まないので諸葛亮と鳳統が少し経った後に月に今後の方針を聞かせる。

目の前の詠に意識がいってたこともあって、劉備達がいたことに驚きはしたが、自分の運命を悟っていたので殺されようがどうしようが受け入れる気でいたので大人しくした。

まさかここで助けられるとは思ってなかったので、流石におどろい

たが……

方針としては、洛陽の一番乗りは劉備だからここである噂を流す。

――――董卓は連合軍の脅威に耐えられなくなって自害した……と。

幸いにも連合軍には董卓の顔を知っている者はおらず、適当な死体を偽装すれば簡単な話だった。

その後はほとぼりが冷めるまで政治には手を出させずに待女として迎える。

そして、董卓と賈駆の名を捨てて真名を名乗っていけば大丈夫とのことだった。

それを聞いた時の月はどこか悲しそうだった。

その表情を見かねてエースは仕方無さそうに言う。

「そんな顔すんなって……お前のことだから、この戦いは自分のせいで起こったと思ってるんだろ？」

「……」

「でもよ、おれ達だってお前のこと守りたかったから戦ったんだ。ここでお前が死んじまったら戦で散った奴等が辛いだけだ……」

「……皆……ですか？」

「あぁ、詠も華雄も鈴仙も風も霞も恋もねねも……おれもな」

最後に自分の親指で自分を指す。

それでも月は納得できていないようだった。

「でも……エースさんにはもう貸しなんて……」

「お前……いつの話してんだよ」

「え？」

エースは月と、その近くで聞いていた詠と華雄を巻き込んで腕を首にまわす。

「へぅ！？」
「ちょ…！」
「！？」

三人は急なことに顔を赤くさせるも、エースはそれに気付かないでそのまま語る。

「仲間の間で貸し借りの話は関係ねえ。おれが守りたいと思ったから守った。それでいいじゃねえか」

にこやかに言うエースに詠が更に顔を赤くさせて反論する。

「そ、そ、そ、そ、そんなことを恥ずかしげもなく言わないでよ！どうしたらいいか分からないじゃない！」
「おれは恥ずかしくねえぞ？」
「だからあんたじゃなくてボクが……あぁ～もう……さっきから顔が近いわよ！！」

キョトンとするエースに何を言っても無駄だと理解した詠はエースに密着している状況からの脱出を決行した。
それを聞いたエースは力を緩めると、二人は一気に脱出する。

「はぁ…はぁ……心臓に悪いわ…」
「詠…もっと素直になったほうがいいぞ？」
「どういう意味よ！！」

未だに顔を赤くさせながら華雄に怒鳴り続ける。
その横では月がエースを見上げて優しい微笑みを浮かべる。

「……分かりました。私は皆さんの気持ちを無駄にしないように…
…これから苦しんでる人のために頑張っていきます！」
「うん！　その意気だ！」

エースがそう言って笑うのを見て、劉備達は思った。

エースを仲間にしたい……と。

そう真っ先に思った趙雲はエースの前にまで歩き、告げる。

「エース……ちょっといいか？」
「？　どうした？」

急に話しかけてきた趙雲にエースは？を浮かべる。

そんなエースに趙雲は笑いながら言う。

「我等と一緒に太平の世を目指さないか？」
「たいへんのよ？　なんか大変そうだな」
「いやいや、た・い・へ・い。平和って意味ですよ」
「そっか」
「そうだ」

劉備のフォローでエースは理解し、趙雲もエースの真似をしておどける。
そんな光景に毒気は抜かれ、一部ため息を吐く者もいたが、全員が

穏やかになる。

「朱里、雛里、私はエースも迎えたいのだが…どうだろうか？」

「そうですね……限定的にはなりますけど……しばらくの間は術を控えてもらって……袁紹さんが滅亡してから力は発揮される……一応大丈夫ですね」

「一部の人にしか姿を見られていないわけですし……姿さえ見せなければなんとか…」

「どうだ？　二人の大軍師様お墨付きだ」

そう言ってほくそ笑む趙雲にエースは少し考える。

「桃香さまもいいですかな？」

「うん！　エースさんなら大歓迎だよ！！」

「愛紗と鈴々は？」

そう言うと、関羽は苦い顔をし、張飛は笑いながら言う。

「あぁ……そう簡単に決められるのはどうかと思うのだが……」

「鈴々は別にいいのだ。このお兄ちゃん強そうで面白そうなのだ！」

「ふむ……愛紗“だけ”が反対か……」

「い…いや、誰も反対とは……」

趙雲の指摘にたじろぐ関羽を放って、再びエースに向かい合う。

「と言う訳だ。我等は既に準備万端だ。後はお前次第」

「……」

「これはお前だから言うのだ。前から思っていたが、私はお前になら背中を預け、命を預けられる。それに一緒に戦ってみたいのだ」

「…う～ん……」

「それに、それを望むのは我々だけでは無さそうだしな」
「？」

趙雲が指を指す場所を辿っていくと、そこには月、詠、華雄がいた。
三人は不安そうにエースを見つめてくる。

「エース……ボク達と来るわよね…？」
「エースさん……」
「エース…私からも頼む…」

三人の反応を見たエースはさらに考え込む。

そして……

「悪い。やっぱおれは旅に出るわ」
「「「「「「「「「「えぇ！？」」」」」」」」」」

満面の笑みで答えるエースに全員が驚愕する。
笑うエースに月と詠が詰め寄る。

「なんでですか！？　なんで私達と来ないんですか！？」
「そうよ！　急にふざけるんじゃないわ！！　納得できる訳ないじゃない！！」

月も詠も納得できない様にエースに詰め寄るが、意外にも華雄は予想できていたのか静観する。

エースは二人の頭に手を置いて落ち着かせる。

「お前等がそう言ってくれるのは嬉しいけどよ、おれは部下をほっ

とくなんてこたぁしたくねえんだ」

エースはハットを被りなおす。

「あいつ等はもうおれの仲間なんだ。おれが途中であいつ等を見捨てるなんてできねえしな」

「それなら……ボク達の兵だって……皆あんたを慕って、憧れて…」

「お前等が守ってくれる……だろ？」

一通り笑うと、今度は二人を安心させるように優しげに笑いかける。

「それに、おれ達にはビブルカードがあるだろ？　そいつがおれ達をまた引き合わせる。だから心配すんな」

そう言うと、二人は静かに頷き、エースを潤んだ目で見上げる。

「…分かりました……私…エースさんの代わりに皆を…」

「ああ」

「…約束破って月に悲しい思いをさせたら……許さないから…」

「嘘は言わねえよ」

そう言うと、二人はエースから離れて劉備の元へ歩いていく。

エースは佇む華雄を見る。

「華雄、二人のことは任せたぞ」

「あぁ…お前はどうせ聞かないからな…」

愚痴りながらも承諾してくれる華雄に笑みが生まれる。

そこへ趙雲が神妙な表情で近付いてきて一言。

「……どうしても来ないのか？」
「あぁ…自分の責任から逃げる気はねえからな」
真剣な表情のエースに趙雲は薄く笑う。
「そうか……お前になら真名を預けてもよかったのだけどな…」
「そりゃ悪いことしたな…」
バツが悪そうに答えるエースに趙雲はクックと笑う。
「なに…それでこそエースであり、私の認めた男だ」
「そりゃ嬉しいな…」
「だから、真名はこの先、私との再会にまで取っておく」
この時の趙雲の瞳に光が宿っていたことに気付いた。
それは確信
また、運命が引き合わせるという自信だった。
その自信を趙雲から感じ取ったエースから笑みが零れる。
「そうか……その時が来たらいいな」
「来るさ。絶対に…」
二人は互いに何も言わずに見つめ合い、不敵に笑い合う。
この瞬間に二人は幾千、幾億の言葉では表せない感情を、重い約束を交わした。

――また、必ず生きて会おう

エースはすぐに趙雲から劉備に向き直って一言告げる。

「この三人をお願いします」

「あ…いえ…大丈夫です」

礼儀正しくお辞儀するエースに劉備も少し遅れて慌てながらもお辞儀で返す。

それを確認したエースはポケットに手を突っ込んで、また新しい玉を出す。

これも真桜印の目くらましである。

他の斥候を警戒しての最も有効で、今の状況に最も適した優しい手段だった。

手でそれを弄びながら月達にまた一言。

「じゃあな……それと月……」

「…はい」

「……結局お前を守ってやれなかった……男なのに情けねえよ……」

そう言うと、月は首を横に振ってエースに優しく応える。

「いえ、エースさんはこうして私と皆さんのために戦って……誰も死なせなかった……それで充分ですよ」

「そっか……やっぱお前と一緒にいれてよかったよ……」

月の優しさにエースは心を打たれ、どこか救われた気がした。
エースは気を取り直して皆に笑いかける。

「じゃあ、“また”会おうな！！」

“また”を強調したエースの言葉に月は涙を流し、詠は鼻を赤くさせる。
華雄はその言葉を聞いて安心していた。

「はい……またいつか……きっと皆で…」
「まったく……あんたってホント……自分勝手よ……月もボクもこんなに頼んでるのに……」
「いいじゃないか……エースはきっと…絶対に約束は破らん……そういう男だ…」

その言葉でエースの胸が軽くなった。

守るという約束は果たせなかったけど、ここまで言われると嬉しくなった。
そして、同時に一緒にいたいとさえ思った。

（次は……霞も恋もねねも一緒に……）

そう思いながら、全員に目を瞑る様に言う。

全員が目を瞑るのを確認すると、エースは持っていた玉に火を点ける。

すると、辺り一面が強烈な光に呑まれた。

しばらくして光が消えると、そこにはエースはいなかった。

ただ一つ……

蝶の仮面と……

この世界で覚えた“ある一文字”と英語の一文字が書かれた紙を置いて……

火拳のエース……洛陽から姿を消した。

後で月達が見つけた紙には墨汁が数滴垂れ、ぶれた手つきで歪んだ文字が書かれてあった。

――再見…ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ――

## 責任は果たす　火拳のエース発つ（後書き）

次回から遂に本√に入ります。

今から書くのが楽しみです。

## 裏の状況　動き出した黒幕（前書き）

バイト決まったぁぁ！！

稼いで稼いで稼ぎまくるんじゃあ！！

## 裏の状況　動き出した黒幕

「あらあら、わたしの家を壊しといてトンズラなんて調子ぶっこいてるのかしら～ん？」

カマ口調で喋る貂蝉の足元にはボロボロになった白装束が大量に転がっている。

「にしてもホント強いわねエースちゃん。わたしより…阿部よりも強いじゃない」

さっきまで影からエースが繰り広げていた戦いを思い返しながら呟く。

巨大な風穴を空けた炎を思い出しながら呟く。

そんな時、彼女？（彼）に近寄る影があった。

「久しいな貂蝉」

「？　あら～…卑弥呼じゃないの～。どうだった？」

貂蝉の前に白髪の純白の褌を身につけたガチムチなオヤジ・卑弥呼が現れた。

「やっぱり予想通り、于吉の差し金じゃった」

「な～る…じゃあさっき撤退させたのは…」

「あの火のおのこの実力を見たかっただけ……のはずが」

「実力を読み違えて撤退させたって感じよねぇ？」

二人はいい気味だと言わんばかりの憎たらしい笑顔を見せ合う。

「雅の分からん奴等の悔し顔が目に浮かぶわい」
「そうねぇ……それともう一人気になるのが…」
「貂蝉……儂をストレスという名の凶器でなぶり殺す気か…」
「あらヤダ」

貂蝉の話題に先程までのホクホク顔が一気にやつれる。

それにギョっとした貂蝉は少し自分の師に同情した。

「大丈夫なの？　一瞬でしぼんだわよ？」
「ちょっと美少年分が欲しい……なにか力になりそうなものを…」
「はい、水嶋ヒロ写真集」
「フヒヒ…クンカクンカ」
「美少年というより美青年だけど、本を嗅ぐくらい気に入ってもらえてよかったわん。このまま話続けるわね」

卑弥呼が本に顔をうずめて機嫌がよくなるのを確認すると、貂蝉は本題に入る。

「それで阿部はどうするのよ。あのレイプ野郎見張ってたのにさ、左慈ちゃん達が余計なことしてくれたおかげで見失っちゃったわよ」
「そう慌てるな。大体の奴の行き先など見当はついてる…レロレロ…」
「そうねぇ…奴はエースちゃんしか頭にないようだし……とりあえず健業に先回りするわね？　それと本は読むためにあるの。だれが舐めるつったよ」

舌がブレて見えるほどの速さで本を舐める卑弥呼に貂蝉も口調が段

々とオヤジ化していく。
そんな貂蝉に卑弥呼は普通に返す。

「そう急ぐことでもなかろう。すぐに手を出すわけでもなし。それに、あの反漢野郎はあのおのこには勝てぬよ。身の程をわきまえるじゃろう」
「ん～～…そうだといいけどね～ん…あれのしつこさはゴキブリ以上だからね～…」
「まあ、なんとかなるじゃろう」
「……それもそうね…それに左慈ちゃんや于吉ちゃんも阿部には勝てないし、大丈夫よねん」
「そうとも、そうと分かれば儂等もエースを追いかけよう」
「ええ」

二人はスキップしながらその場を去っていく。
彼等の通り過ぎる度に草木、空気が淀むのなんて気にしない。

彼等にはすべきことがあるのだから。

「それと、貂蝉。お主がここにいる間に新しいおのこ……ダーリンが儂等の仲間になったぞ」
「んま！　な～に抜け駆けしてんのよ～ん。わたしにも紹介して～ん！」

二人とまだ見ぬもう一人は己が使命のため、健業へと歩みを進める。

「ふむ……健業か…そこにあのエースたんが……」
「き…貴様……」

洛陽から遠く離れた無人地帯にその男・最強にして最凶の管理者（仮）の阿部がいた。
その足元には下着をはぎ取られ、白目を剥いた白装束が泡を吹き、悲壮感を漂わせて倒れていた。

そんな中、一人だけ残った心の強い者が忌々しげながらも股間を抑えながら阿部を睨む。

「な…なぜ我等と同じ同胞である貴様が悪に手を貸す……ぜぇ…」
「答えは単純明快至極当然、エースたんを婿にするためだ」

臆面も無く、とんでもない発言をする阿部にげんなりしながら今でしか言えないことを言う。

「貴様もわかるはず…はぁ…我等、外史の管理者は世界の異常を正す責任が…あふぅ！」

「おれにとっては外史の管理よりも良い男の監視が重要だ」
「なにを世迷言を…ぎゃふぅ！」
「それはそうと、お前も中々の逸材だな」

自身の体をなぞる阿部のこの一言に白装束も頭が真っ白になった。

――――今……なんて……

それしか浮かばない頭に更に特大爆弾を打ちこまれた。

「お前は……今日のオカズ決定だ」
「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

全てを理解した白装束は体をくねらせてその場から逃げようともがく。
しかし、それも叶わずに間も無く、阿部に馬乗りにされて抑えられる。

そして、阿部の息が荒くなっていくのを感じると、頭の中の警報がさらに大きくなっていく。
そんな中、倒れている白装束にも必死に声をかける。

「ちょっ…！　マジ助けて！」
「……」
「起きてるのは分かってるんだよ！！　貴様等の口周りから吐息出てるの見えてるぞ！！　ちゃんと任務を果たせ！！」
「……」
「テメー等狸寝入りもいい加減にしろコラァ！！」

もがきながら死んだフリしている仲間に手を伸ばす。

しかし……

ペチ

その手は呆気なくも払われた。

「……」

「いただきます」

「いや！　ちょっ、まっ…！」

ッアーー！

この洛陽でも建業でもない、世界のどこにもない黒い空間に彼等はいた。

「うわぁ！」

「どうした于吉!!」
「いえ…一瞬だけ阿部の顔を…」
「……坑鬱剤持ってくる」

不吉なシンパシーを受けた于吉と左慈が薬を飲んでいた。

「というか于吉。あれだけの部下を火拳に当たらせたんだ。何か打開策は見つかったのか?」
「それが……ですね…」

軽く狼狽する于吉に左慈は睨みながら問い詰める。

「そうか…まだ見つけてないと言いたいのか?」
「そう睨まないでください。奴の戦闘能力を測りきれていないのですから…」

疲れた感じで呟く于吉に左慈がイライラした口調で進める。

「早くしろ。脅威は火拳だけじゃねえんだぞ」
「分かってますよ…貂蝉、卑弥呼、そして……はぁ…目の上のタンコブですよ…」
「まったく面倒な…特に阿部を思い出すと寒気がする…」
「なら私が暖めてあげます。男同士、裸で暖め合いましょう。カムヒア」
「一生ありえねえよ…くそったれ…」

毎日と言っていいほどの相方の本気のプロポーズに左慈もゲンナリしてスルーする。

これより先に待ち構えるは自分の相方よりも最強で最凶、管理者の

中でも百年に一人いるかいないかの鬼才でありながら卓越した戦闘能力。
そして、常人の理解を越えるエロと行動力を兼ね備えるホモラー。
それを考えると、左慈の胃がキリキリと痛んで仕方無かった。

「どうしました？　そんなに景気の悪い顔をして…」
「…阿部がいるってのに呑気な奴だ……阿部の怖さを忘れられるお前の豆腐並の頭が羨ましいぜ……」
「違いますよ……いくら辛い先のこと考えても気が滅入るだけです。本当の勝者は毎日“今日だけ”頑張れる人なんですから」
「それは福本先生がカイジで使うから重みが出るんだよ。お前が使っても誰も納得しねえよ」
「でも、私の左慈に対する愛は重いですよ」
「重くてどうする……人に好かれたいなら愛を強くしろ。お前の愛が強くなってもおれは嫌いだけどな」
「いいですね……左慈に罵られるのもこれはこれでイイ…」
「今すぐ消して～…」

涎を垂らして鼻息を荒くする于吉に絶望しながら、左慈はこれからの使命を胸にしまう。

たとえそれが、毎回繰り返される逃れられない運命だとしても……

そう思いながら左慈は曇った感情を振り払い、ただ暗い天井を見上げるだけだった……

「結婚しましょう」
「なんでこのタイミングで言った？　前言撤回、お前の頭プリン並だ。よかったな」
「酷いですね左慈……そんなこと言っていると私は付いて行きませんよ？」
「その方が都合がいい」
「そんなこと言わないでくださいよ！」
「気持ち悪いんだよ！！　頼むからもうどっか行ってくれよマジで！！」

すり寄ってくる于吉の顔面を足で抑えながら、これか抗鬱剤をもっと買おうと心に決めたのだった。

今度からはパートナー選びは慎重に行おう

同時にそう悟った左慈だった。

そして、放浪の旅を始めていたエースは……

「腹減った～～～～…」

体を木の棒で支えながら宛てもなく荒野をさまよっていた。

## 裏の状況　動き出した黒幕（後書き）

誤字脱字の訂正は夜に行います

指摘をありがとうございました。

## 小休止（前書き）

最近、ダーク系が書きたい作者です。

理想の主人公は、普段はイタズラ好きだが戦い大好き。興奮すると人を一杯噛んじゃう肉食系男子

## 小休止

放浪生活から既に十日目が経っていた。

意気込んで月と別れたまでならよかったのだが、エースは完全に行くべき場所を見失っていた。

時々出会う行商人に建業の場所を聞いても、方向が曖昧である。

行けども行けども、だだっ広い荒野からは抜けられず道無き道を歩き続けていた。

途中で集めた水と食料も底をついた。

正直、この状況は危機的だった。

どんなに屈強な戦士といえど、食べ物が無ければやがて死に絶える。

現状、エースの視界は歪み始めていた。

（やべぇ……なんとなくだけどやべぇ…）

支えの木の棒と一緒にエースの体も地面に倒れる。

「なんか食いてー……」

力無く呟き、そのまま目を閉じた…

その直後、自分の周りを囲む多数の影が現れるのも知らずに……

ーーー腹減った……

エースは意識を取り戻したのと同士に率直な意見を頭に浮かべた。

突然、何かの刺激がエースの意識を闇から引き上げた。

それは匂い

しかも、エースが今最も欲している匂いが嗅覚をくすぐる。

山の幸や焼いた肉…思いつく限りのご馳走がエースの頭の中を反芻する。

「め……」

そして、エースの意識は無意識に咆哮を上げる。

「めーーーーーーーーしーーーーーーーーーー！！！」
「！！」
エースが大声でそう叫びながら起きると、周りに集まっていた人が驚きに後ずさる。
「ん？」
エースは上半身を起こし、辺りを見回すと周りの風景が違うことに気付く。
驚きに目を見開く人々、どこか懐かしさを思わせる木でできた床と天井。
そして……エースの隣に置かれている飯。
「お！　飯！」
そう叫んでエースは容器のご飯を一瞬でかきこんでいく。
続いて山菜、肉とかきこんでいくが、すぐに料理は全てエースの腹の中に消えてしまう。
「なんだ…もうねえのか…」

物足りないといったエースは腹をさすって空腹の意を示す。
そんなエースの近くに一人の若く、赤い髪の男が近寄ってくる。

「すごい生命力だな。普通なら今頃餓死してもおかしくないというのに」
「？　だれだ？」

いきなり現れた人物に首を傾げると、男は何かに気付いた様にハっとして申し訳なさそうに繕う。

「失礼、自己紹介がまだだったな。おれの名は華佗。放浪するしがない医者さ」
「そうか、おれの名はエースだ。以後、お見知りおきを」
「エース？……あぁ、貂蝉の知り合いの？」
「貂蝉？」

貂蝉の名を聞いたエースは少し考え、洛陽で出会った風変わりの男を思い出す。

「あぁ…貂蝉かぁ……華佗は知ってるのか？」
「あぁ、訳あっておれと貂蝉、そして卑弥呼は共に旅をしていてな、今は三人共バラバラだが、いずれ健業で落ちあうつもりだ」
「へぇ～へぇ～…そうかそうか…」

エースは華佗を珍しそうに見回している中、初老の男性が話しかけてきた。

「あの～……すみませんが…」
「あんたは？」

「この人はこの村の村長だ。倒れたエースを介抱し、少ない食料で料理を作ってくれたんだ」

華佗の説明でエースは把握した。

その村長をよく見てみれば貧しいと思わせるような風貌をしている。

そして、その周りの人々は一層みすぼらしかった。

「……見ず知らずのおれなんかに貴重な食料なんて与えていいのか？」

「えぇ……人は皆この大地に生まれた親子じゃ……たとえ倒れているのが見知らぬ人なれど悪人でない限り助けようと…」

「そっか……」

自分達の方が苦労してるのに……

エースは内心でそう思いながら、どうすればこの恩を返せるのかと思考を巡らせていた。

首を傾げるエースに村長は一言告げる。

「それよりも、早めにこの村から出ていった方がいい」

「え？」

村長の言葉にエースは更に首を傾げる。

助けた次は追い出すって…どんだけ～

そう思ったのだが、その訳を華佗が話してくれる。

「実はな、明後日にこの村は袁術に一揆を起こそうとしている」

「一揆？　反乱か？」

「あぁ、この村の豊作事態は実は悪くはないのだが、そのほとんどをここの領主の袁術に掠め取られてな……」
「なるほど……いや、それで一国に勝てるのか？　この村にそれだけの戦力が…」
「それは心配いらない」
華佗の言葉に疑問が膨らむ。
明らかにアリが象に戦いを挑むくらいの無謀さなのだが、それのどこが大丈夫なのか。
答えは華佗が自信満々に答える。
「こっちにも一国…それも強力な助っ人がいるからな」
「なるほど……どうやらそっちについた方が得ってわけか」
「あぁ、医者から言わせてもらえば、袁術のしていることはひどすぎる。国の宝の農民を無碍にし、命を削らせてる…医者から言わせてもらえば命に対する冒涜だよ」
目に力を入れ、怒りを表す華佗の言葉を聞いてエースは即決で決めた。
「よし！　それならその反乱手伝うぜ！！」
『『『！！』』』
エースの一言に村の皆が驚愕する。
「な…なにをおっしゃる！　ここは危険ですぞ！？」
「それはおれの台詞だ。どうもお前等は強そうに見えねえし、迫力もねえ…戦うのはこれが初めてだろ？」
「……」

無言の村人の反応にエースはビンゴだと確信した。

「まあ気にすんな。別にお前等を気の毒に思ったとか同情からじゃねえよ」

「では何故……」

村長が分からないといった様子で聞き返すと、エースは不敵に笑って答える。

「ちょいと、野暮用だ…」

「は…はぁ…」

村長は訳が分からないといった様子でありながら納得しておく。

そんなやり取りを傍で見ていた華佗はもう一度寝転がるエースを見て呟く。

「そんな理由だけで戦場に立てる訳ないだろう…」

貂蝉から聞いたエースの人柄を思い出しながら無意識に笑みを浮かべる。

エースの素直じゃない部分に溜息を吐いて…

「こんな男を必要としているのだな……これからの時代から……」

華佗の視線は確実にエースを捉えて離さなかった。

「凶暴、短気、わがまま……」
「…聞く限り危険人物にしか聞こえないのだが……」

ここは徐州。
反董卓連合の時に月、詠、華雄を保護した陣営である。

ここで、皆はエースの話が気になって聞いてみたが、劉備と関羽がエースの人柄を聞いて引いていた。
他の皆もそうだったが……

しかし、華雄は慌てて訂正する。

「勘違いするなよ。それは戦いに限った時だ」
「そうなのか？」

張飛の疑問に月と詠が答える。

「えぇ、普段はそんなに見下すこともなく、むしろ兵や市民からは絶大な人気を誇っていたわね」

「エースさんは子供の様に真っすぐで純粋でしたから」

「へぇ……やっぱり良い人だったんだね～」

ポワポワと呟く劉備に詠は溜息を吐いて警告する。

「でもね、エースが敵になったら朱里や雛里、ボクの生半可な策じゃ通用しないのは確かね」

「あわわわわわ……」

「はわわ……その根拠は……」

脅える諸葛亮と鳳統に華雄が答える。

「そうだな……根拠には乏しいと思うが、エースにはやってはいけないことがある」

「そ…それは一体……」

劉備が唾を飲みこんで華雄の答えを待つ。

「エースの部下、仲間、そして友達を手に掛けたり罵倒することやな」

「それが、火拳…エースにやってはならないこと？」

所変わってここは曹操の地。

霞を捕縛した陣地だが、霞自身はこの場所を気に入り、曹操と夏侯惇を始めとした国の重鎮達とも真名を交換していた。

「せやな、特にエースの隊からの死者はあまり聞いたことがあらへん。『潰せるなら潰せ。危なくなったらおれの後ろに隠れろ』が兵に対する喝やった」

思い出しながら呟く霞に夏侯惇が憤慨する。

「するとなにか！？　火拳は兵を甘やかしているのか！？」

「ちゃうちゃう。エースはそんな真似は絶対にせえへん。一人でできる限界をわきまえてたから誰よりも厳しく兵を鍛え上げたんや。

ウチが言いたいのは、汚い手を使わずに正々堂々と戦わなアカン。いくらエースでも兵の死くらい覚悟しとる」

「それがエースさんがエースさんたる所以なのでしょう」

懐かしみながら、何も変わっていないエースに凪は幸せそうに呟く。霞もそれに笑って同意する。

「よう分かっとるやないか凪。凪の言う通りエースは普段は子供の様に真っすぐで邪な感情を持っていない。多分、性欲も持ってないで」

「嘘よ！！　男はいつも頭の中で汚らわしい妄想を抱いているはずよ！！」

霞のエース分析に荀イクが反論する。

確かに、傍から聞けば荀イクが正しいのだろう。

だが、霞ははっきりと答えた。

「桂花。エースを普通の人間と同格に見るのは止めとき。そういう考えはウチ等を滅ぼすで」

「ど……どういうことよ…」

「エースは普通やない。せやから普通な策も、分析も、攻撃も通用せえへん。エースは何度も“普通”を壊してきたから…」

「何か心当たりが？」

曹操が尋ねると、霞は態度を変えて意気揚々に話す。

「本当は黙ってくれと頼まれたんやけど……特別に教えたる…」

霞の凄みのある話し方に全員が唾を飲んで緊張する。

「ちょっと面白い逸話があってな……」

「一度だけ、全軍を率いて黄巾党の大群を強襲したことがあるんです」

「確か……十万くらいはいましたね～…」

「うんうん、それでそれで？」

また所変わってここは孫策の陣地。

連合軍の時に弱った袁術を強襲する準備をしていた。

しかし、退屈になった孫策が鈴仙達にエースのことを聞いてみた。

周瑜は呆れながらも興味を持ち、黄蓋はワクワクしながら話を聞いている。

「しかも、その時は華雄さん、霞…張遼さんと呂布さんも別件でその場にはいなかったんですよ」

「ふむふむ……」

「ですが、敵が私達に気付いて攻撃してきたんですよ」

「それはそうだな。指揮官が抜けていたその状況を見逃すとは思えん」

皆が考察を立てている中、風が引き継ぐ。

「ですから風達は撤退し、華雄さん、霞さん、恋さんと合流して反撃しようとしたのですが……」

「？　ですが？」

「エースさんが一人で殿を請け負いました」

「な！？」

「なんと！！」

「へぇ…それで？」

驚く周瑜と黄蓋とは裏腹に孫策は興味深そうに笑みを浮かべて続きを促す。

「それでですね～…ここでお兄さんの本領発揮。お兄さんは火を余すことなく使って黄巾党を壊滅寸前にまで追い詰め、一刻で十万から四百にまで減らしました～」

「「「四百!?」」」

風のトンデモ発言に三人が仰天した。

十万から四百?

たった一刻で?

四百“だけ”減らしたのではなく、四百に“まで”?

「……それは何かの冗談か何かか?」

「いえいえ、その時には目撃者も多数。本当ですよ」

「…随分と威勢のいい奴じゃのぅ…」

周瑜と黄蓋は言葉が出ないといった様子であるが、孫策は嬉しそうに言う。

「でも、そんな子が呉に来れば何もかもが安泰。敵となったら打ち破る。どっちに転がっても損は無いわ」

「……後者のどこが損は無いだ……」

孫策のずれた感性に親友の周瑜は溜息を吐く。

「というより、今は御遣いよりも目の前の戦いだ。準備はできているんだろうな?」

脱線した話を戻すと孫策の雰囲気が変わり、妖しく目を光らせる。

「当然。この日のために毎日を積み重ねてきたんですもの。そんなヘマはしないわ」

「結構。それなら私と祭殿はもう行く」
「そう…祭も頑張って」
「応ともさ！」

意気揚々と返事すると、周瑜と共にその場を後にした。

そして、孫策も鈴仙と風に笑いかけて手を振る。

「二人も忙しいのにごめんね。明後日は頼んだわよ？」
「はい！」
「御意です～」

二人の返事に満足して孫策はその場を去る。

運命の邂逅まで後僅か……

時空を越えた大海賊……

今という時を駆け抜ける小覇王……

この出会いはそこから始まる。

故に、この物語は……

そこから始まる。

## 小休止（後書き）

そろそろ活動報告に次回作の続きでも載せようかな…

# 歴史の分かれ目　江東の麒麟児立つ

エースが村に行き着いてから二日後。

国の歴史が変わる日がやってきた。

「ふあぁぁぁぁぁ……眩しいなぁ……」

エースは小さな家屋から出てきて淡く、暖かな朝日を浴びる。

欠伸混じりの呟きの後には笑みがこぼれた。

「…いい天気じゃねーか……」

この村に少しでも恩を返すため、火拳の一日は始まった。

「報告！！　農民が徒党を組んで反乱したそうです！！」
「なんじゃと！？」
「数にして十万！！　さらに近隣の村からも数を増やしていくと思われます！！」

一方、早朝に袁術の城はパニックに陥っていた。

いきなりの農民の反乱に動揺を隠せていなかった。

「うぬぬ……農民のくせに生意気なのじゃ！　七乃！　すぐに倒してくるのじゃ！！」
「無理」
「はやっ！！」

袁術の腹心の張勲は間髪入れずに袁術の命令を拒否る。

「十万って私には対処しきれませんし～、基本城攻め専門なので衝車大量生産してドーンって戦法しかしませんしー」
「ならどうするのじゃ！！」
「もう、美羽さまってばうっかりさん♪　こう言う時にこそあの人を使うんじゃないですかー」
「？　誰じゃ？」

首を傾げる様に聞く袁術に張勲が首を傾げる。

「孫策さんですよ。美羽さまの盾であり、剣でもある」
「おぉ！　すっかり忘れておったのじゃ！　それなら全て孫策に任せるとしようかの！！　七乃！！」

「もう、お嬢様ったら狡猾で陰険、それでこそ偽皇帝に近いですよ」
「もっとじゃ！　もっと褒めてたも～！」

悪口＝褒め言葉と錯覚して喜ぶ主に兵士はとてつもない不安に襲われた。

こうして、孫策に農民の反乱の鎮圧を指示しようと張勲は孫策の元に向かった。

それが結果的に自分達の首を絞めるのにも気付かずに……

「そういえば華佗」
「ん？　なんだ？」

準備運動しながら後ろで荷物をまとめる華佗に声をかける。

「なんでお前は貂蝉と離れて行動してんだ？」

素朴な疑問だった。
貂蝉と一緒に行動したほうが都合がいいと思った故の問いだった。

華佗は「あぁ、そのことか」と普通に答える。

「ここにおれの知り合いの文官がいてな、そいつに頼まれてここに来たんだ」
「へぇ…これって計画されてたんだな」
「そのようだな……と、そろそろ集合しないと将軍が来るぞ？　先に出ててくれ」
「そっか…んじゃ行ってくる」
「あぁ……その前に一ついいか？」

華佗は家屋から出ようとするエースを引きとめると、感慨深く言う。

「……また戻ってくるな？」
「あぁ…おれもここで死んでる場合じゃねえしな」

冗談混じりに答えるエースに安心し、華佗は一呼吸置いて言う。

「……また会えたら一杯どうだ？」
「そっか……いいなそれ」

「決まりだな」

二人で笑いながら言うと、エースは家屋から勢いよく飛び出した。

エースの後ろ姿を見送る華佗も気合いを入れる。

傷ついた人を治すという使命を胸に秘めて……

「行軍するのはこれで全員ですね！？」

エースは村人の先頭に立って、目の前で参加の確認をとる忍者ルックスの少女を見据えていた。

とりあえず突っ込めば問題無いだろうと思っていた。

「……れでは質問はありませんね？」

「ん？　あぁ…準備くらいできてる」

「分かりました。それでは周泰隊は進んでください！」

思考の海から抜け出したエースは周泰と名乗る少女の後に着いて行く。

「…という訳でー、暴徒の鎮圧に行ってくれますね？　孫策さん♪」

一方、孫策達に派遣された張勲は上から目線で孫策に一揆の鎮圧を命じる。

それに対して孫策は盛大に溜息を吐く。

「あや？　どうかしましたか？」

「いえ、ほーんと、張り合いのない相手って疲れるなーってね」

皮肉めいた口調に関わらず、張勲は気付かずに続ける。

「あらら、最近になって英雄なんて呼ばれていい気になってる孫策

さんらしいお言葉ですねー」

孫策の言葉に違和感を感じないのか…張勲は続ける。

「分かりますよー。ただの暴徒に張り合いがないのは分かりますけど、美羽お嬢さまのご命令ですので出てくださいますねー？」

「えぇ…袁術ちゃんに『頸を洗って待ってて』って伝えておいて」

「はーい♪」

明らかに不穏な伝言のはずなのに張勲は気にも止めずにその場を去って行った。

それを見ていた面々は盛大に呆れる。

「…開いた口が塞がらないとはこのことだな」

「楽だからいいんだけどさー…」

周瑜と孫策が思わず呆れて脱力する。

二人のこういった言動は結構レアなのだ。

それを見ていた鈴仙と風は苦笑しながら呟く。

「今まであれに従ってたんだ……なんかゲンナリ…」

「雪蓮さまも苦労してたんですね～…」

「そういうのは本人が聞こえないところでやってよ…今すっごい心が抉られた…」

孫策自身も今までの負の歴史を思い返して地に手を付いてうなだれる。

そんな孫策を周瑜が立ち上がらせる。

「今日でそんな歴史を終わらせるんだからいつまでも落ちこまないの」
「それもそうね……鈴仙、風」
「「はっ！／はい～」」
立ち直って孫策は雰囲気を一変、鈴仙と風に鋭く号令を出す。
「穏と共に兵站の準備を！」
「御意！」
「御意です～…」
それぞれ答えると、周瑜の傍で控えていたダイナマイトならぬニトロボディの陸遜がほんわかと前に出てきた。
「それじゃあ鈴仙ちゃんと風ちゃんお願いしますね～」
「はい！」
「は～い」
やる気充分の鈴仙に比べて風は陸遜と同じくのんびりとしている。本人は本人でやる気と実績を出してるのだから全く問題は無いのだが。
「それじゃあ私達も準備ができ次第出発、江東には入らずに明命と思春に合流しましょう」
「そうね」
孫策と周瑜も戦闘の準備に入るのであった。

「それでは一旦止まってください！！　本隊と合流まで待機でお願いします！！」

江東内では周泰は合流地点に到着し、進軍を止める。

その際、エースは腰かけて堂々と休む。

「ん～……結構多いな」

エースが見渡すと、周りからも続々と兵が集まって来ている。

地平線まで見えなくなると、最早壮観である。

「これで全部か？」
「思春殿。はい。こちらの行軍は完了です」
「そうか。先程雪蓮さまも到着なされた。合流するぞ」
「はい！」

そんな中、見たことがある甘寧の顔を見て、前のことを思い返す。

（甘寧がいるってことは、やっぱりここは孫策の……）
「それでは行きます！　私に付いて来てください！！」

自分がやっと目的地に着いたのだと思い返している中、周泰の声で我に戻った。

エースはそのまま周泰の後に続くのだった。

「前方に寿春城あり！　敵影無し！」
「ちょっ…！　敵影無しって…！」

しばらくして孫策本隊との合流を果たした甘寧と周泰。

しかし、全軍＋民兵が出揃ったのにも関わらず、袁術の城は閉ざされたままだった。

それには他の面子も呆れ果てる。

「全く危機管理がなってないな…」

「あ！　今兵が出てきました！　それから旗も！」

「おっそ…袁術ってもしかしてばか？」

「もしかせんでもばかじゃな」

周泰の報告に孫家の末娘の孫尚香の素直な感想に黄蓋も同意する。

「相手が混乱しているので一当てした方がいいかと……雪蓮さま？」

方針を決めていた新参者の呂蒙が孫策を見ると、孫策はうなだれていた。

「今までこんな奴に…こんなばかに…コロスコロスコロ…」

「作戦はそれでいいだろう。この戦は亜莎に任せる」

「あの…雪蓮さまがなにかに覚醒しそうなんですが…」

孫策に同情できる周瑜は呂蒙に気にしない様に行動で示す。

少し主君を心配するが、相手はそんな暇を与えるはずがなかった。

突然、城の門が開いたのだ。

それに気付いた全員が気を引き締める。

「旗はっ！？」

「旗は『張』！　大将軍張勲です！」
「あぁ…あの将軍モドキね…」

張勲の登場に孫策のテンションしぼむ。

「やる気出しなさい。さっと倒して袁術を引きずり出すわよ」
「そうね…それなら蓮華！　さっきも言った様にあなたが指揮してみせなさい！」
「はい！！」

孫権は美しい髪をなびかせ、荒々しくも宣言する。

「これより、我等孫呉の宿敵、袁術と相対する！！　何も恐れるな！！　誇りを奪われることを恐れよ！！」

孫権は剣を天に掲げ、全軍に見える様に輝かせる。

そして、その時が来た。

「全軍、突撃ぃぃ！！」

その瞬間、歴史が動いた。

兵の猛りが辺りを震わせる。
まるで、積年の恨みを晴らすかのように……

「あの嬢ちゃん……前に会った時よりも気合い入ってるじゃねーか…」

鼓舞する兵とは対照的にエースはじっと孫権を見据え、その傍で控

える鈴仙と風に目をやった。

「……仲間を世話してくれたんだ……恩くらいは返してやるか…」

そう呟いて、エースは静かに口の端を吊り上げて笑った。

## 遂に始まる　相見える英雄と海賊（前書き）

バイトの研修がキツイ……

それでも書くけど……

ＹＫさんの感想すら返信する余裕が無い……いつか返します。

それといつも誤字脱字の指摘に感謝です！！

## 遂に始まる　相見える英雄と海賊

遂に、孫策たちの長年の苦労と努力が報われ、屈辱を晴らす時がきた。

時を遡り、孫権が号令を発したところから両軍は激突。

兵数では互角であったが、ここで将としての能力が物を言い、事態は改変。

張勲軍は押され、追い詰められるばかり。
さらにそこへ本隊である袁術軍が城内から加勢にきた。

しかし、烏合の衆が集まった所で虎に勝てるだろうか？

答えはもう予想通りとか生易しい物ではなく、運命とさえも呼べるくらいの状況になっていた。

その緊張は孫権を触発させていた。

「敵は総崩れだ！　このまま押し出すぞ！」

積年の禍根と今の流れのせいで孫権の感情は高ぶっていた。
熱くなりすぎていた。

「蓮華さま！　雪蓮さまの本隊と離れすぎです！　一度退却を！！」

周泰が説得を試みるが、孫権は聞く耳を持たない。

「駄目だ！　弱った敵を落とさずに退却など、小覇王の誇りが許さん！！」

「それならば、せめて味方との合流を…！」

「その間にこの流れを止められたらまた一からやり直しだ！　ならばこそ流れに乗っている今が好機！」

孫権がそこまで断言してしまったらもう止められない。

孫権を突き動かすのは流れの勢いと、流れから振り落とされるかもしれないという不安からだ。

そうなった主君を放っておくのは一番危険。

周泰はそれを察知し、自分のすべきことを整理する。

「分かりました……それならばこの周幼平！！　蓮華さまの活路を切り開いて参ります！！」

「その意気よし！！　どこまでも付いて来い！！」

「御意！！」

孫権は高ぶる気持ちを押さえようともせずに孫権は周泰を率いて敵の陣中へと切りこむ。

その勢いは正に鬼神の名に恥じない威圧があった。

背負うは国と民の未来。

その自覚が彼女を死地へと向かわせた。

そんな二人を遠目で見ていた影が一人いた。

「何してんだ？　あいつ等」

「隙あ…おぶっ！」

剣を振るってくる袁術の兵に目もくれずに鳩尾キック。
兵は苦しげにのたうち回る。

「死にたがりと勇敢はちげえぞ」

そう言いながらエースは適当な兵を一人捕まえる。

「なっ！　貴様なにを…ぐえ！！」

ぶん投げられた兵は敵の密集地帯に飛ばされ、激突する。

その時にできた僅かな隙間へとエースはダッシュして思いっきり跳躍する。

「ちょいと通るぜ！」

エースは倒れている敵でできた僅かな段差を足がかりに集団の頭上を越える。

スタッと着地したエースは跳び越えた集団に構うこと無く、前方にうごめく敵の渦中へと走っていった。

「全く……あの子ったら何をしてるんだか……」
「いつもの蓮華さまならあんな無茶な指揮はしないはずなのだがな……」

本陣では孫策と周瑜が頭を悩ませていた。

伝令兵から聞いた報告から孫権の独断突撃を知った。

周瑜は至急応援に駆け付けるようにと甘寧を向かわせた。

「とりあえず本隊で一気に叩きましょう」
「しかし、強引すぎるぞ？　もしこの流れを奪われたら被害は甚大なものになるぞ」
「ですが、ここで蓮華さまを失っては元も子もないのですよ～」

傍に控えていた風は短期決着を提案する。
それに孫策も賛成する。

「そうね。まだあの子は死ぬべきじゃないわ」
「……それもそうだな」
「じゃあ…」

「ええ、すぐに祭殿を始めとした全員に伝令を流すから準備しておいて」

周瑜の言葉に孫策はにっこりと笑ってすり寄る。

「さっすが冥琳♪　仕事も早くて助かるわ」

「そうね…いつも誰かさんの対応で慣れたから……」

「ちょっと～…なんで私を睨むのよ～…」

「別に…」

周瑜は溜息を吐いて誤魔化すが、それとは対照的に孫策は笑っている。

とても、身内が危険に会っているとは思っていないかのように。

そんな様子に風と周瑜が首を捻る。

「どうかなさいました？　雪蓮さま」

「え？　どうしたの？　風」

「それはこっちの台詞だ。蓮華さま達が心配じゃないのか？」

「全然」

「え？」

アッサリと否定した孫策に周瑜の眼鏡がズレる。

呆然とする二人に対して孫策はあっけらかんと答える。

「いやね、確かに蓮華のことは心配なんだけど、多分大丈夫だと思うの」

「いや…それってお得意の勘？」

「そ」

「だけど～、それだけで状況を「それとね、もう一つ感じるの」？」

風の言葉を遮って孫策は凛々しい笑みを浮かべながら周瑜達に自分の感じていることをありのままに伝える。

「これから……追い風が吹くわ」

「押せ押せ！！　このまま袁術を江東から追い出すのだ！！」

孫権は剣を振るいながら兵達に激を飛ばす。
孫権の剣は群がってくる敵を斬りさく。
「はぁっ！」
「させない！！」
孫権を討たんとする輩も周泰によって阻まれる。
辺りには血の臭いと土埃が蔓延していた。
怒声が聴覚を刺激し、土埃が視界を遮る。
「蓮華さま！　これ以上は限界です！！　そろそろ退却を…！！」
「駄目だ！　これではまだ決定打とは言えん！！　せめてこの部隊だけでも落とさねば…！！」
「しかし、蓮華さまの御身にもしものことがあれば流れどころか今までの苦労も水の泡です！」
「だが…！」
孫権は次期呉王としての責任に振り回され、周泰の助言も聞き入れずに尚も剣を振るう。
そんな時だった。
孫権の馬の足に敵の矢が刺さった。
「！…なにが…あぁ！」
「蓮華さま！！」

孫権は暴れた馬に振り落とされ、孫権は体を地面に叩きつけられる。
周泰は孫権の身を案じて孫権の元に参じる。

その時だった……

「お命頂戴！！」
「「！！」」

一人の兵士が孫権の背後から剣を振りかぶってきた。

「くっ！」

すぐに孫権は痛む体を無理矢理動かして転がって避ける。

「死になさい」
「ぐあぁ！！」

その直後に周泰は冷たい一言と共に兵士を一刀両断

敵が事切れたのを確認すると、すぐに孫権の元へ駆け寄る。

「蓮華さま！！　ご無事ですか！？」
「あ、あぁ…なんとか…ぐ！」
「蓮華さま！！」

孫権の全身は土で汚れ、口の中を少し切ったらしく口から血がしたたっている。
そんな孫権が肩を押さえて悲痛な声を洩らすのだから周泰は心配になった。

「戻りましょう！　そのお身体では戦うことは無理です！！　ここは本隊と合流…！」
「悪いが、それをされちゃあ困る」
「「！！」」

別の声が聞こえ、その方向へと視線を向けると大人数を率いた一人の兵士が現れた。

すぐに周泰は孫権を庇うように刀を構える。

「あんたが……孫策の妹の孫権だな？」
「貴様等は……」
「そんなことはどうでもいい。重要なのは、あんたを殺せばこの戦は我等の勝ち、という結果だ」
「ちっ！　お下がりください！！」
「逃がさん！」

周泰が孫権を後ろに下がらせるが、隊長と思しき敵が指示すると一斉に襲いかかってきた。

「させない！！」

周泰は敵数人の刃を自身の武器で抑える。

「明命！！」
「私のことはいいですから、早く撤退を！！」

そう言うが、実際の状況は最悪だった。

さっきの落馬で全身を打ちつけた孫権に逃げる体力があるかどうか

も疑わしい。
ならばこのまま相手を抑え、注意を引きつけて逃がす時間を稼ぐのが常套手段。
自分が強いと認識させられでもしたら標的を変更して孫権を狙ってくる。
殺さずに止める。
孫権を庇いたいところだが、そうも言ってられなかった。
数人からの鍔迫り合いで表情が歪むも、堪えられないものではなかった。
このまま引きつける。
そうできると思っていた。
「逃がさん」
敵将が孫権の元へと向かうまでは…
「！！」
「蓮華さま！！」
孫権は自分に向かってくる敵に目を見開く。
痛みで体が動かない。
意地を出しても走ってくる敵は振り払えない。

ならばどうなる。

言うまでもなく死に直結する。

（動け！！　私の足！！）

自分の体に鞭を打っても動く気配がない。

（動け！　動け！！　動けぇ！！）

自分の失態を呪いながら孫権は足を叩くが、動くことはない。

「敵将、我が討ち取った！！」

敵は誇示と共に剣を抜いて振り抜く。

それを見た孫権は涙を零して目を瞑る。

無意識に出した手はかりそめの抵抗なのだろう。

そして、敵の刃は孫権の体に吸い込まれていった。

「抵抗できねえ嬢ちゃん何人だよおめーら」

はずだった。

孫権はいつまで経っても来ない痛みと聞き覚えのある声に孫権はゆっくりと目を開ける。

「テメー等……男が廃ってるぜ」

地面には気絶した敵が大の字になって倒れている。

逆光でよく見えないが、たしかにその男の背中が見えた。

一度だけ見たことのある背中の奇妙でありながらどこか威厳を感じさせる骸骨。

逞しい上半身に危機感を感じさせない余裕の声。

孫権はそんな彼に一瞬さけ見惚れ、思い出した。

「あなた……」

「村の代表の人ですか！？」

孫権の言葉を周泰は敵を振りほどいて、驚愕する。

しかし、その男…エースは不敵な笑みを浮かべながら周泰に言う。

「今はそんなことより、孫権を連れて行きな。こいつ等はおれが引き受ける」
「「はぁ！？」」

数十人もの敵を前にして大胆発言するエースに二人は驚愕。
すぐに説得を実行する。

「なにを言っている！！　丸腰で敵う訳ないだろ！！」
「そうです！！　それならば私も一緒に…！」

共闘を望む周泰にエースは調子を変えずに答える。

「何言ってやがる。孫権は足挫いてんだろ？　だったらお前が支えてやんなきゃいけねえ。それくらいおれでも分かる」
「だけど、お前は…！」
「あんたはここの大将だろ？　それだけは自覚しな」
「そ…それは…」

孫権はエースの言いたいことを理解できている。

大将である自分が死んでしまったら流れがあろうが、自分達の負けが確定。
ここまで付いて来た兵達を危険に晒すことになる。

そんなことは最初から言われなくても分かっていた。

「……分かりました。ここをお願いできますか？」
「もち。早く送ってやんな」
「……ご武運を…」

周泰は素早く孫権の元へと駆けつけ、孫権をおぶる。
孫権はいつも言っている正論を返されたことで何も言えなくなっていた。
周泰は孫権を背負って尋常ならざる速度で陣へと引き返して行く。
あれくらいなら五分で充分だろう。
「待てっ！」
その周泰を追おうとする敵は、一人残らずエースに足を払われて転ばせられる。
先程エースにやられた隊長と思われる敵もダメージから立ち直って隊長格の男が睨みながらエースに凄む。
「あんた……呉の仲間かい？」
「まぁ…関係者だ」
「そうか……あんたのおかげで上玉を逃がした……責任はとってもらう…」
兵達の表情が怒りで歪む。
そんな相手に意を介さず、エースは周泰の逃げていった方へと視線をやった。
周泰の姿は既に見えない。
それを見たエースはフっと笑う。

「…何がおかしい……」
「悪いね……ただホっとしただけなんだ」
「？」

エースの発言に敵が不審がっていると…その瞬間に信じられない光景を目にした。

「あそこまで離れれば巻き込まれることもねえだろ？」

エースは両肩から両手にかけて燃えていた。

それを目の当たりにした兵達は動揺し、隊長格の男は後ずさる。

「な……妖術……！」
「さあな」

その直後、エースは敵集団へと突っ込んで行った。

ユラユラと燃える炎の軌跡を残して

「姉さま!!」
「戻ったわね。何があったの?」
孫権達はすぐに甘寧隊と合流し、孫権は周泰と共に本隊と合流していた。
孫権は孫策の元へと泣きつく様に寄りかかった。
「すみません……私の勝手でご迷惑を……」
「すみません……私が未熟なばかりに蓮華さまを止めるどころか敵の奇襲で危うく蓮華さまを……」
周泰は孫権を擁護するように話す。
その話に周瑜は疑問に思った。
「どうやって逃げてこれたのだ?」
「! そうだ、エース!」
周瑜の質問に孫権はエースのことを思い出す。
皆はその名前に反応を見せ、孫策一同は驚愕する。

その中でとりわけ反応が大きかったのが風だった。

「蓮華さま……それは本当ですか？」

「え、えぇ……」

「本当に…そう名乗ったのですか？」

「いや、名乗ってはないけど……」

「ふ…風さん？」

今まで見たこともないくらいに感情をさらけ出す風に孫権と周泰はもちろん、他の武将達でさえも驚いている。

「ただ…背中に奇妙な骸骨の刺青があったのだけは覚えて……」

「！…それよりも加勢に行きましょう！！　今、その人が蓮華さまと私を護るために殿を……！」

周泰が思い出したのか、エースの救助を必死に申し出ていた時だった。

「雪蓮さま。甘興覇、ただいま戻りました」

孫権達とすれ違ったはずの甘寧が静かに戻ってきていた。

「思春か。そっちはどうだ？」

「甘寧隊と周泰隊担当の軍を撃破」

「そう…それならゴリ押しでも問題なさそうね」

甘寧の報告で勝利を確信した孫策達の表情は和らいでいた。

周瑜でさえも思わず頬を吊り上げたほどだ。

そんな中、甘寧の報告は意外にも続いた。
「それで、実は雪蓮さま達に会いたいという者がいまして、勝手ながら連れて参りました」
甘寧の発言に周瑜は首を捻る。
「？　珍しいな。用心深いお前が見知らぬ者を連れて来るなど」
「ホント、思春なら警戒して斬り殺すと思ったけど…」
周瑜に続いて孫策も普段の甘寧からは考えられない行動に驚きの色を隠せない。
「その者は一応知ってはいるのですが…」
「知り合いなのか？」
「いえ、その者の素性はよくは知らないのですが…」
「何それ？」
ますます珍しく言葉を濁す甘寧に疑問が深まっていく。
そんな時だった。
「おー。結構見た顔の奴がいるじゃねーか」
『『『？』』』
突然、知らない声が甘寧の後ろから聞こえてきたと思ったら、そこからこれまた予想外な人物がいた。
『『『！！』』』
「よぉ、何人かとは久しぶり。後は初めましてか？」

深く被ったハットを外し、エースは驚愕の孫策達に陽気に挨拶する。

「お…お兄さん…ですか？」

「あ、さっきの代表さん！」

風はいつもは半開きの目を全開にし、周泰は生存が絶望的だったエースの登場に驚愕する。

孫策達はというと…

「まあ、積もる話もあるからお前等の所で何か食わせてくんねーか？」

無茶苦茶な頼み方にも反応できずに呆然としていた。

火拳と江東の麒麟児

この二人の出会いは全ての始まり

この大陸の伝説の始まりであり

未だかつてない戦いの始まりの狼煙でもあった

故に

# 火拳は眠らない

## 遂に始まる　相見える英雄と海賊（後書き）

遂に始まったぁぁ！！

ここからは好き勝手に書いて行きます！！

## 倒せと轟く　黄蓋とのガチ決闘（前書き）

お待たせしました。遂に物語を進めていきます！！

なお、活動報告には次回作の主人公像を書いておきました。

アイディアのヒントをくれた『ななし』さんに感謝です！！

書いてみたかった外道系ツンデレキャラ！！

やってみたかった！！　劉備と北郷一刀の超ド級アンチ小説！！

## 倒せと轟く　黄蓋とのガチ決闘

現在、エースはどこかの城の中庭に立っている。

そして、眼前にはウキウキしている黄蓋が弓を構えていた。

周りには様々な面子が所狭しと集まっていた。

目を輝かせて自分に視線をぶつけてくる孫策と陸遜、周泰に孫尚香。

冷静にエースを見据える周瑜と甘寧。

少し緊張した面持ちで見詰めてくる孫権と呂蒙。

そして、ご機嫌な風と鈴仙。

いつもと違った状況にエースは呑まれそうになる。

「さあ！　存分に力を使ってみるがよい！」

半ば呆然としていたエースに黄蓋は本当に嬉しそうに呼び掛けていた。

時を遡り、エースと出会った孫策達は一次的にエースを警戒する。

しかし、エースは敵意が無いことを両手をあげて示し、必要ならば拘束も構わないと公言。

そこまで言った時のエースの眼に一片の曇りは無かった。

孫策はエースを信用し、拘束はしないが、甘寧と周泰に監視させるように命令する。

そういった軟禁状態でエースは孫策の城へと連れて来られたのであった。

「あなたが、火拳のエースだったわね？」
「そうだな。んで、あんたが孫策か」
「もちろん」

両者共に軽く素性を確認させた後、すぐに本題に入る。

「それで、連合軍の時に敵対していた貴殿が何の用ですかな？　火拳のエース殿」
「何の用って……決まってんだろ」
「いや、ここまで単身で乗り込んできてその質問は…」

周瑜の探りにエースがドヤ顔で答えると、意外な切り返しに周瑜もたじろぐ。

そして、一言。

「おれの仲間と部下を引き取った奴がどんな奴なのか見に来たんだ」
「……それで？」
「それだけ」
「そうか、それは……それだけ？」
「ああ」

当然のように答えるエースに周瑜は固まってしまう。
それは他の面子も同じらしく、何も言えなくなってしまった。

その疑問を代弁するかのように孫策はエースに問う。

「それじゃあ……エースは私を見にここまで来たの？」
「ああ」
「……洛陽からはるばる？」

「当然」
「うへぇ～…」
胸を張って答えるエースに孫策は苦笑いを浮かべる。
「じゃあ聞くけど……この後どうする気だったの？」
「そうだな……ひでえ奴だったら倒そうかと思ったんだけど、いいや」
「いいやって……随分と軽く引き下がるんじゃな…」
傍で聞いていた黄蓋もエースの気まぐれさに苦笑する。
だが、これは決して気まぐれだけではなかった。
「まあな、孫策ならおれの部下を預けるに足る奴だと思ったからな」
「あら、あなたは私の何を知ったのかしら？」
「色々」
「さっきからそういう答えばっかりねぇ…」
「いいんだよ。そいつ自身を知るのに言葉はいらねえ。そのまま感じられればいいからな」
「あぁ……それは私も賛成」
同意して頷く孫策を尻目に周瑜がエースに再度問う。
「しかし、なんでお前はすんなりと我等を受け入れられるのだ？反董卓連合の時に攻撃してきた我等が憎くないのか？」
「ん～……そうだなぁ……」
エースはしばらく考え……
「すっげぇムカついた」

「そ……そうか…」
「……だけど、それとこれとは話が違うからな」
「なに？」

思いのたけを話すエースに周瑜もたじろぐ。
さっきから憎しみを感じさせない言動が続いたから、エースの本心に虚を突かれていた。

なぜならさっきからエースは穏やかな笑みしか浮かべていなかったから。

「よく考えりゃあおれ達海賊も似た様なことばっかやってたからな。それで恨むのは筋違いだろうと思ってよ」

エースの言葉に全員が脱帽した。

「仕方無いって……それでいいの？」
「あぁ…だからこそ今まで死ぬ覚悟のある奴だけおれの部下にしてきたしな！　それにあんたはおれの部下を世話してくれてるからな」
「へぇ……意外と義理堅いじゃない」

孫策が妖しく笑いながら言うと、エースはフっと笑って答える。

「おれみたいなゴロツキよりも、お前等みたいな奴等に拾われた方があいつ等も本意だろうしな…」
「……」
「だから、あいつ等のことを頼む」
「ええ、最初からそのつもり」

頭を下げて頼むエースに孫策は嘘偽り無く返す。

虎牢関で暴れた猛将、天の御遣い火拳のエース。
世間で最も噂される彼が頭を下げた。
その頼みは酔狂や気まぐれでされたものではない。
軽く頭を下げるような凡夫でもない。
彼にあるのは仲間のせめてもの幸せを願う『願い』
そのためだけに洛陽からはるばるここまで一人で来たのだ。
「用件はそれだけですか？」
「ああ、孫策がどんな奴なのか確認できたしな、信用できる奴でよかったよ」
「うふふ…ありがとう」
首を傾げる陸遜の問いにエースは満足気に答えると、孫策もにこやかに返す。
そんな時、黙って話を聞いていた孫権がエースに問いかけてみる。
「それで、これからどうするのだ？」
「分かんね」
「分からないって……この大陸の情勢がどうなっているのか分かっているのか？」
「いや、最近商人とかにも会ってねえから状況が分かんなくて困ってたんだ」
エースの言い分に呆れながらも納得した孫権が何も知らないエース

に分かりやすく教えてやる。

董卓との戦いの後、曹操、劉備、孫策の名が一気に上がったこと。

それによってその三人が大陸の三大国となって君臨
各地の諸侯も三人を中心に敗北、吸収されていること
近い将来、その三国に収束されると予想されていることを……

「今の状況では国境を越えるのにも一苦労だ。虎牢関で姿をあまり公にしなかったとはいえ、お前の名は有名だから国境を越えるのは無理だろう」
「なら突破するさ」
「あのなぁ……そんなことしたらお尋ね者として追われるのだぞ？」
「慣れてる」
「慣れてるって……どんな人生を歩んできたんだお前は…」

孫権は奔放すぎるエースの説得に頭を悩ませていると、見ていられなくなった孫策がエースの説得に参加する。

「それなら私達の仲間にならない？」
「え？」

意外な申し出に今度はエースが目を見開く。

「このままお尋ね者になって雑魚に追われるよりも私達と強い敵と闘って暴れる方が有意義だと思わない？」
「しぇ…雪蓮姉さま…」
「それに、元々はあなたの部下なんでしょう？　だったら最後まで自分で面倒見たら？」
「（たしかにそうなんだがなぁ…）……」

孫策の言葉一つ一つがエースにとって正論に思え、ここを去ろうとした足も止まる。

（確かに部下を丸投げにするのはあまりに無責任だし……だからといって軍には縛られたくねえし……）

「それにここは最近賑わってきてね、おいしい露店やお酒が多いわよ～？」

「じゃあ客として」

「釣られるの早っ！！」

旅の間、何も食べていなかったエースにとって孫策流のネゴシエーションは食べ物の話題でフィニッシュを迎えたのであった。

「それで、エースって本当に火を出せるの？」
「あぐ？」

大広間で孫策に食事をご馳走されていた時、不意に孫権が聞いてみた。

それを中心に孫策達も集まってきた。

「そうねぇ……それは気になってたのよ」
「エースさんの体からは焦げた匂いとか何もありませんし～…」
「外見は普通に見えますよね」

孫策、陸遜、周泰が気になって自己分析を始めている。

すると、そこへ末娘の孫尚香が無邪気に提案してきた。

「だったら、エースが誰かと闘えばいいんじゃない？」

「「それだ！！」」
「姉さま！？」
「祭殿！？」

急にスイッチが入った孫策と黄蓋が目を光らせてエースに振り向く。

それには孫権も周瑜も仰天する。

「彼は今は客人なのですよ！？　客人と殺し合いする気ですか！？」
「や～ね～、殺さないわよ。ちょっと腕が見たいって思っただけよ」
「少なくとも食事中に言うことではありませんよ！！」
「食事で精力つけて全力を出させたいところじゃのう」
「もう私の声が届かない！！」

孫権はこうなった元凶の末娘に詰め寄る。

「シャオ！！　こうなることを予想してわざとあんなことを…！」
「だって～…その方が確実だし、雪蓮姉さまなら遅かれ早かれああ言ってたもん。シャオは知恵を出しただけだもん」
「エースの迷惑を考えろ！！　それに姉さまがああ言う反応すると知ってやったな！！」

孫尚香は意地悪く舌をペロっと出して答える。

「殺さないって言ってるからいいじゃない。それに思春に勝ったんだから大丈夫でしょ？」

「し、しかしだな……」
「それに顔は合格。中々いい体してるし、火のように熱い男も好みだし～♪」
「それ関係ないでしょ！？」

姉妹の痴話げんかが続くも、それを黄蓋が抑える。

「蓮華さまも小蓮さまもその辺にしておれ。これは決定事項、王の権限でもある」
「もっと権限を有意義に使って欲しかったわ……」
「心配せずとも儂は殺さぬよ」
「ちょっと、なんで祭が戦うってなったの！？　私がやる！！」
「策殿はシ水関でやったんじゃなかったのかのう？」
「途中で逃げられただけよ！！」
「とにかく、儂だけまともに顔合わせしとらんのじゃ。これは決定事項じゃ」

黄蓋が勝手に決め、エースに近寄ってきた。

「食後の運動程度で構わん。相手を願いたい」
「……（コク）」
「よっしゃ！！　それじゃあ先に待っておるぞ！！」

食後の運動ということもあり、エースは深く考えずに頷くと黄蓋はウキウキと中庭へと出ていった。

「はぁ……まあ、エースの戦いぶりを見られるなら今回は譲るわ」
「少しは自重してほしいものだ。祭殿もな…思春も来てくれ」
「はっ」
「それでは私も準備に行ってきますね～♪」

孫策と周瑜と甘寧、陸遜は出て行き、その場には未だに食べ続けるエースと孫権、孫尚香、周泰、呂蒙が残っていた。

「……ふー、食った食った。ご馳走さまでした」
「あ…いえ…お粗末様でした」

急に話を振られた周泰は慌てて返す。

孫権は申し訳なさそうにエースに謝罪する。

「すまん。姉さまも祭…黄蓋も悪気はないんだ…ただちょっと…」
「いいさ。おれも退屈してたからな。たまには悪くねえ」
「そうか……そう言ってもらえると助かる…」

そんなことを話していると、急に大広間の門が開かれた。

皆がそこに目をやると、そこに二人の影があった。

「後処理も疲れたね。風ちゃん」
「大国ともなれば前準備も後処理も大変ですから覚悟しましょうね～」
「うわ～い…はぁ…」

エースもよく知っている顔がそこにあった。

「よぉ、お前等元気か？」
「もう疲れたよ～……朝からだから体もカチカチ……」
「うっす」

フリーズする二人に何気なく挨拶する。

「……」

「なんだよ元気ねえな？」

「鈴仙？」

エースと孫権は呆然とする鈴仙に呼びかけ、返って来ない返事に首を捻る。

そんな沈黙もすぐに破られた。

「エ……」

「？」

「エース……さん！」

「おう？」

涙を流しながらエースに抱きついてきた鈴仙を受け止めると、エースの胸の中で鈴仙が涙を流す。

「おいおい…そんなに泣くのかよ……」

「あったかい……本当にエースさんだぁ……」

「参った…お？」

「……」

今度は背後から弱い衝撃を受け、振り返ると風もエースの後ろからしがみついていた。

「……もう少し早く来てくれた方がよかったのです…」

「……悪いな…待たせてよ……」

「…今度から気を付けてくれますね……？」

「おう」
「……ん…」

風のしがみつく手が強くなる。
さっきはできなかったが、会えなかった分だけ甘えるように…

エースは二人の妹分との触れ合いにしばらく浸っていた。

「……」
「あわわわわ……二人共大胆です…」
「い…いけませんこんなところで…！」
「二人共ズルい～…シャオも～…！」

最後の発言は孫権に止められた。

そんな経緯があって冒頭に至る。

すぐに落ち着いた風と鈴仙は上機嫌になってエースの試合を観戦する。

全員に体を覆うことのできる濡れた手ぬぐいを持たせて。

最初は全員不思議がっていたが、一番付き合いの長い二人が言うのだから素直に従おうと手ぬぐいを装備する。

「ふふ…血肉躍る……ここまで興奮するのはいつぶりじゃろうか？」
「浸ってないでさっさとやろうぜ。おれも少し盛り上がってんだからな」
「そうか……なら…」
「！！」

黄蓋はノーモーションで矢をエースに放った。
エースはスウェーで避けながら口笛を吹いて驚きを表現する。

「すげえ腕だな。今まで会った奴の中で弓の腕はピカイチだな」
「そう言ってもらえるとは光栄じゃ…な！」
「ほ…ふ…」

黄蓋と軽口を叩き合いながら矢を完全に見切るエースに外野は驚きと賞賛が起きる。

「んじゃ、おれもやるかな」
「む？…おう！？」

そんな中で痺れを切らせたエースが黄蓋に突進してきた。
いきなりで虚を突かれたが、黄蓋はすぐに口を吊り上げて迎え撃つ。
エースは黄蓋に向かって跳躍し、飛び蹴りを見舞う。

「当たるか！！」

黄蓋がそれを避けるが、着地したエースはすぐに水面蹴り。

「ぬぅ！！」

片足を上げて避ける黄蓋は間髪入れずに矢を補充、エースに放つ。

「おっと」

それをバク転で避けるが、黄蓋の追撃は続く。
矢をエースに次々と射るが、それさえもたやすく避けていく。
矢の雨を笑顔で避けるエースの身体能力は異常とも言えたが、黄蓋にとっては嘗められてるとしか思えてなかった。

「ええい！！　チョコマカと！！」
「なに言ってやがる、本気でもねえ奴に文句言われる筋合いはねえぞ」

それを聞いた黄蓋は体をピクっと反応させて手を止める。

それに合わせてエースもその場に止まる。

「そうか……なぜ分かったのじゃ？」

「よく言うぜ。本気でやりゃあ息の一つくらい乱れるに決まってる」

「それは……」

「それに迫力が感じられねえ……だからおれも様子見で済ませてんだ」

不敵に笑うエースに黄蓋は参ったという風に表情を緩ませる。

「ふふ……お主ほどになればこの老躯の限界などお見通しか？」

「そういう訳じゃねえ。だが、おれは本気の奴にしか応えねえ。おれを見極めたいなら全力で来なよ」

「そうか……それじゃあ“準備運動”もここらへんにして本腰を入れようかのう」

そう言って深呼吸すると、黄蓋はすぐに目を見開いて矢を構える。

「！！」

いまさっきとは違う速度のノーモーション早撃ちにエースも慌てて回避する。

跳躍での回避は危険と判断し、側転で避けるが黄蓋の弓はエースに向かってくる。

しかも、さっきまでとは考えられない速度で飛んでくるだけでも舌を巻いたというのに、もう一つ驚くべきことがあった。

「二本同時かよ！！」

エースはあまり味わったことのない攻撃にそう毒づく。

黄蓋もその二本を自在に操り、エースを翻弄する。

時折、同時でなくリロード無しの射撃もくるから厄介極まりない。

このままゴリ押しで突っ込んでもまた逃げられて狙い撃ちがオチだろう。

そう考えていた時、今度は黄蓋から余裕の一言。

「どうした？　儂は本気でやっとるのにお主は様子見か？」

「！！」

「だったらお主の無礼を儂が正す！！」

「ちょっ！！」

黄蓋が至近距離まで近づき、矢を射るのでは無く直接手に持って突いてきた。

エースも少し黄蓋の言葉にショックを受けているところだったから反応が遅れ、紙一重で避ける結果になった。

それが悪かったのだろう。

「しまっ…！」

急な回避でエースは足を踏み外して転倒する。

その刹那、エースは眼前で弓を自分に構える黄蓋を見た。

「これで終わりじゃ！！」

黄蓋は臆することもなく矢をエースに放つ。
近付いてくる矢を前にしてエースは意外な反応を見せた。

「認める!!　あんたは強い!!」
「？」

急になにを言うのかと思った黄蓋はその瞬間とてつもない熱気を帯びた風に見舞われた。

「な…何が起こったのだ？」
「分からない……というより口の中に砂が……」
「ほえ～……」

周瑜と孫策、側にいた陸遜は突然吹き荒れた砂嵐に苦闘している。

「さっきまであんなに晴れてたのに……」
「大丈夫ですか？　小蓮さま」
「うえ～…目に砂が～…」

周泰と呂蒙は目をこする孫尚香を護るようにあらかじめ渡されていた手ぬぐいで砂嵐を防いでいた。

「なんだか熱いな……」
「蓮華さま。すぐに手ぬぐいを」

急な温度変化に困惑する孫権に甘寧が手ぬぐいを被せてやる。

皆、いきなり起こった城の中庭で起こった異常事態に混乱している。

そんな中で事をなんとなく理解している風が皆の前に出てくる。

「心配せずともこの風はすぐに止みますから」
「風？」
「なにを言ってるのですか～？」

ノホホンと言いながら必死に手ぬぐいで砂を防ぐ陸遜の質問に風は諭すように言う。

「……これが皆さんの見たがっていた“物”の正体なのです」
「「「「「「「？？」」」」」」」

風の言葉に鈴仙以外の全員が首を傾げた。

この後起こる超常現象の予想もできずに…

「ぐ……何だとゆうのじゃ…」

黄蓋は急に起こった砂嵐に苦悶の表情を浮かべていた。

エースに矢を射った直後、急に目の前で熱風が吹き荒れた。

まるでエースが起こしたかのように…

そんなことを思っていると、段々と熱風が収まってきた。

黄蓋も仕切り直しといった感じで弓を構えた時だった。

「陽炎！！」

「！！」

舞い散る砂埃の中から巨大な火の塊が黄蓋目がけて飛んできた。

黄蓋は反射的に身を投げ出して回避。

通り過ぎた火の塊が地面に着地した瞬間、爆発を起こす。

「うぐぅ…！」

『『『！！』』』

爆風で砂埃が綺麗に吹き飛ばされ、辺りの様子が元に戻ったのに皆は驚く。

しかし、黄蓋と外野の驚きのベクトルは違っていた。

黄蓋はどこからともなく現れた火に、外野は再度起きた異変に…

そんな時に火の着地地点から人が現れた。

「それじゃあ、こっからは気持ち良く戦うとするか」

「！！」

それは言うまでもなく不敵な笑みを浮かべたエースだった。

## 倒せと轟く　黄蓋とのガチ決闘（後書き）

もし、よければ次回作の感想もください～い

## 決着！！　エースの新たな輪

驚愕

今はそれしか思いつかないし、感じられない。

自分はさっきまで客人と闘っていた。

その武は讃えられ、名は天にまで知られてるとされている者。

故に興味が湧き、闘いを挑んだ。

類まれなき戦闘感覚を駆使して儂で遊びおった。

儂は本気を出し、奴の油断をついて勝負あり……のはずじゃったが……

「お…お主…今なにを…」

「……」

急に襲いかかってきた火の玉を避け、その落下地点からエースが出てきた。

これではまるで……

「たしかに…」

「！！」

思考の海に沈んでいた意識がエースの静かな声で引き上げられる。

再び黄蓋は弓を構えてエースに向ける。

しかし、エースは物怖じもせずに続ける。

「…まずはおれも無礼を詫びよう」

「…無礼じゃと？」

「ああ…さっきまで能力を使うこと無く勝とうと思っていた……あんたを見下していた……」

「……」

「だから…」

「？」

「おれもおれの力で以て応えよう」

その時、エースが差し出した手がユラユラと揺れ、やがては炎へと姿を変えた。

「な……なんじゃそれは！！」

「言っただろ？」

途端にエースは手の炎を強くして啖呵を切った。

「これがおれの“力”だ！！　しっかり防げよ！！」

「！！」

「陽炎！！」

エースの両手の炎はやがて全身を覆い、黄蓋へと突進する。

黄蓋は咄嗟に向かってくる炎に矢を射るが、その全てがたやすく燃やされる。

「ぬぅ！！」

止まらずに向かってきた炎の玉を間一髪で横に避けるが、炎の玉は着地するとさっきのように爆発せずにエースだけを表す。

そして、エースは黄蓋に全速力で突進し、跳躍
炎の纏った飛び回し蹴りを黄蓋に振るう。

「つぅ！」
「まだまだぁ！！」
「！！」

エースは蹴った足に一瞬だけ燃える、爆発系の炎で振り抜いた蹴りを無理矢理戻して黄蓋の顔面へ放つ。

「なっ！」

黄蓋は反射的にエースから距離をとるように転がって避ける。

その時、自分の銀髪の一部が焼け落ちるのが見えた。

（な……こんなのアリか！？）

いきなりの出来事に黄蓋はすぐに立ち上がり、息絶え絶えの中エースを睨んだまま動けなくなった。

「め…冥琳……今…」
「あ、あぁ……今のは一体……」

勝負の成り行きを見守っていた孫策と周瑜は驚愕で呂律が回っていなかった。

元からエースの噂をそのまま信じていた訳ではなかったから、今の現状は理解しがたいものだった。

そう考えているのは他の面子も同じだった。

「ひ…ひ……ひ……火が…」
「……」

ワタワタと混乱する呂蒙と目の前の出来事に頭から湯気を出す陸遜

「あ……あ……」
「あ…あれは……」
「うそ……」
「こんなことが……」

周泰、甘寧、孫尚香、孫権もそれ以上の言葉が口からでない。
彼女達はただ、目の前の現実を受け入れるのに必死だった。

「「……」」

こうなることを事前に分かっていた風と鈴仙は静かにエースと黄蓋の戦いを見守っていた。

今、戦っているのはエースだけじゃない
これは周りとの戦いでもある

二人はどんな結果になろうともエースと共に行くことを決めていた。

たとえ、周りから迫害されようとも……

（すごい……すごいぞ！！）

風達が覚悟を決めていた時、黄蓋は感動していた。

（武としての腕も悪くない！　術も使える！！　なにより…！）

黄蓋は不敵に笑って両手を燃やすエースの目を見て思った。

（こんな真っすぐな目をした奴は久しぶりじゃ！！）

眼だけでなく、さっきの戦いから黄蓋は確信も根拠もないエースの“本質”を見抜いた。

曲がったことも無く、己に恥じる事も無いまさに“男”としての姿勢、威厳、器。

一瞬で感じ取った黄蓋は先程までの混乱を興奮に変えていた。

若いころに経験した感覚。

底が見えない相手との息もつかない真剣勝負。

今になって初めて味わった感覚。

女として本物の男と出会えた喜び。

黄蓋の頭の中にはその二つの感情しか無かった。

「どうした！！　来ないならこっちから行くぜ！！」

「！！」

「神火　不知火！！」

「うお！」

黄蓋も我に返ってエースの二本の火の槍を避ける。

「そぉい！！」

そして、避けながらエースに高速の矢を三本撃ち出す。

「火銃！！」

エースの火銃は三本の矢を破壊し、それどころか数十倍もの数の弾を黄蓋に撃つ。

「はぁ！！」

黄蓋はその場から走って弾を避ける。

「そらそらそらそらそらそらそら！！」

「くぅっ！」

それでも、マシンガンのように撃ち続けて黄蓋を走らせる。

この時、黄蓋は遠距離攻撃を棄てた。

木でできた矢では火には勝てない。

それどころか相手に弾切れなどは無いだろう。

一瞬でそう判断した黄蓋はエースの火銃を見つめた。

高速で襲いかかってくる火の弾から目を離さず、しかし意識しないように

避けた

「！！」

エースはいまさっきとは違う黄蓋の動きに目を見開いた。

さっきのように逃げるのではなく見切った。

いや、見切ったというよりあれは……

火が黄蓋を避けた。

そう見えるような動きで黄蓋は次々と攻撃を弓でいなし、すれすれで避けていく。

射撃に関して、呉の中で熟知している黄蓋は弾の軌道を予想しながら進む。

服や髪が燃えようが歩みを止めない。

そして、黄蓋は火の嵐の中の綻びを見つけた。

「そこっ！」
「な…！？」

エースとしても意外だったのか火銃の嵐の僅かな隙間をかいくぐってき始めた。

黄蓋のまぐれと卓越したセンスの為せる動きにエースもギャラリーも素直に驚いていた。

そして、黄蓋はエースの懐へと潜りこみ……

「これで……」

自分の懐に持っていた小太刀で…

「終いじゃ！！」

エースの腹部を貫いた……

かに思われた。

「なんじゃと!?」

黄蓋の驚愕の声にギャラリーも湧く。

それもそのはず、エースが立っていたその場所には…

「火……じゃと…?」

人を形を模った炎が燃える。

黄蓋の剣はその炎を突き刺す形になっていた。

そして、どこからか声が聞こえてきた。

「火幻武者（かげむしゃ）」

声が聞こえたのと同時に人型の炎が爆散した。

「!!」

黄蓋は自分に猛威を振るう火の嵐から急いで逃れるように後ろに下がるが、炎の熱で衣服の一部が焼け焦げ、皮膚までもが焼ける。

「つぅ!!」

流石の黄蓋も肌から感じる熱さに表情を歪ませる。

黄蓋は後ろに跳んで退いたというよりも爆風で吹き飛ばされたとい

ったほうが正しかった。
吹き飛ばされた黄蓋は地面をしばらく爆風で転がる。
「つぁ！」
転がる体を無理矢理起こして爆風の中心地を見るとそこには黒煙しか上がっていない。
その地点を中心に地面が焼け焦げているのを見て黄蓋は戦慄した。
「…うら若き乙女を焼き焦がす気じゃったな…」
悪態と共に冷や汗が流れる。
もし、一瞬でも動いていなければ今頃消し炭になっていたところだと容易に想像できた。
「余所見は命取りだぜ？」
「！！」
黒煙の中からエースが拳を振りかぶって突っ込んできた。
「小癪な！！」
黄蓋は高熱の拳を間一髪で受け流し、そこから流れるように剣を突く。
「甘い！！」
「なんじゃ…うお！？」
しかし、エースは剣を避けながら黄蓋の手首に足をかけ…

「ふん！！」
「あっづ！！」

体を一回転させて剣を地面に叩きつける。
それによって剣は腹から真っ二つに折れた。
黄蓋は直前に手を離したが、若干叩きつけられて痺れた。

「足がお留守だぜ！！」
「なんじゃ…！」

よろけた黄蓋の後ろにいつのまにか回り込んでいたエースはすかさず足払い。

黄蓋の身体は地面に倒れ……

「チェックメイトだ」

エースに掌が黄蓋の無防備な体に触れた。

こうして、前代未聞の呉の宿将との一戦は幕を閉じた。

「お主！！　これからは儂を祭と呼べ！！」
「いや、ちょっと待てって……」

決闘から時が幾ばくか時間が過ぎたころ、エースは予想外な展開に巻き込まれていた。

それは黄蓋からの呉への勧誘だった。

エースは少し意外だったのと黄蓋からの熱い勧誘に戸惑っている。

まさか、あそこまでねじ伏せ、面子を潰した自分が当の被害者から歓迎されるとは思っていなかったからだ。

ほとんど絡まれる形で体を揺さぶられてエースも少し動揺する。
しかも勢いで真名を名乗っている感じも否めない。

「だから……真名をそんな簡単に名乗っていいのかよ……そんなに大したことも…」
「なに言っておる！　部下を見捨てぬ責任感に単身で乗り込んでき

た胆力、それに儂を討ち倒す程の武の心得……お主ほどの男に出会うのは初めてじゃ！！」
「そんなもんなのか？」
「おう！　お主ほどの男ならば雪蓮さまと冥琳との計画も問題無しじゃよ！！」
「？？」

その言葉にはエースだけでなく他の皆も気になって首を傾げる。

そんな些細な疑問も孫策と周瑜の出現に忘れてしまう。

「あら～、もう祭を陥落させちゃったの？」
「陥落？」
「と言っても私達も同じくエースに呉に来てほしいのよ」
「その方が我等にとって有益だと判断したからと、できるだけ敵に回したくないのが本音ね」
「も～、冥琳ってば冷たいわね～。ごめんね？　私のことは雪蓮だから、よろしく」
「冥琳だ」
「ああ、まあいいけど……」

段々と話も大きくなっていき、エースもいつ色々と質問しようかと頭の中で模索していた時、更なる訪問者がやってきた。

「あの…！」
「ん？」
「えええええええっと……エースさま……でよよよよろしかったでしょうか…？」
「あ…あぁ…お前等は……」
「申し遅れました！！　私は周泰と申します！！」

「わ…私は…えっと…呂蒙と申します！」

周泰は明るく、呂蒙は上がっていて舌を連続で噛みまくっている。
そんな時でも周泰は構わずにエースに明るく聞いてくる。

「先程の祭さまとの模擬戦は凄かったです！！　急に火がブワーって……噂にたがわぬ強さで祭さまを倒すなんて……本当にお強いんですね！！」
「そこまで騒ぐなって、これでもおれもまだ修業中の身さ」
「それでもですよ！！　やっぱり御遣いさまは凄いです！！」
「そ…そうか？」
「はい！！」

なつく犬のようにピョンピョン跳ねて尊敬の意を表す周泰にエースも思わず笑みが零れる。

「是非！　私の真名をもらってくださいませんか！？」
「いいのか？　おれはいいけど」
「はい！！　これからは明命とお呼びください！！」
「そうか。よろしくな明命」
「はい！　これからは時々私も鍛えてください！！」

「では、これで！」と言い残してそそくさと去っていった周泰を見送っている最中、未だ上がっている呂蒙もエースに挨拶。

「あの……私も真名を預けても……」
「いいけどよ、そんな無理矢理教えなくてもよ……」
「いえ！　そういうことではなくてですね！」
「じゃあなんでだ？」

どう見ても自分を怖がっているようにしか見えていない呂蒙が何故真名を教えるのかに疑問を持っていると、呂蒙は図らずもその訳を答える。

「あ、あああああなたさまのことは噂でよく耳にしておりました！　無償で賊を退治したりとか…」

「あれは……賞金稼ぎのはずなんだったんだけどよ……」

「それでもです！　民のために戦い、雪蓮さまに認められたのですから私も預けます！！　預けさせてください！！」

「お、おぅ…」

「これからは私を亜莎とお呼びください！！　それでは失礼しますうううう！！」

それだけ言って顔を赤くさせてその場から走って去った呂蒙に呆然としていると、そこに数人の影が一気にやってきた。

「気にするな。亜莎は人見知りでな。恥ずかしいだけなんだろう」

「孫権と甘寧と…陸遜と孫尚香……だっけ？」

「はい～、初めまして～」

「よろしく！　エース！！」

孫権と甘寧の他の初対面の二人には挨拶をすると二人は快く返す。

孫権達にも挨拶を交わす。

「久しぶりだな。孫権も甘寧も」

「そうだな……鈴仙の村の時以来だ」

「あぁ…」

孫権は懐かしそうに頬を緩ませ、甘寧は短く返す。

「お前等もおれに用か？」
「あぁ……色々と聞きたいところだが、それはまたいつかにして、先に真名を渡そうと思ってな」
「だからそんな簡単に……て言っても聞きはしねえんだろ？」
「そう言うな」

自分の大事な名前を簡単に預けてくる孫権達に少し呆れるエースに孫権も少し微笑んで返す。

「私のことはこれからは蓮華と呼んでくれ」
「思春で構わん」
「私は穏です～」
「シャオは小蓮って言うんだけど～、これからはシャオって呼んでね？」
「そっか……だったらおれもエースで構わねえ」
「それならエースさん！！　早速ですけど聞きたいことが！！」
「おわ！！」

これで呉の全員と真名を交換したエースはどこか嬉しそうに笑ってそう言うと、急に穏が鼻息を荒くさせて近付いてきた。
驚いてのけ反るもすぐに立て直す。

「な…なんだよ？」
「早速ですけどエースさんの体……少し調べさせてくださいませんか～？」
「は？」
「何もない所から火を出し、それを操る術。さらにあれだけの火を浴びているのに火傷もしない体……興味深いです～～！！」
「うおおぉ！！　急に飛びついてくんな！！」

急に跳んできた穏を反射的に避けるが、それでも穏はあきらめずにエースに照準を合わせて跳びついてこようとしていると…

「いい加減にしろ」
「あた……蓮華さま～…」
「お前までもエースに迷惑かけるな。お前と思春は姉さまを抑える役だ」
「えぇ～…」

心底嫌そうに穏は蓮華に垂れるが、蓮華に聞く耳は無く首筋をつかんで連行する。

蓮華は振り向きざまにエースにこう残す。

「今日は疲れているようだが、明日からは色々聞かせてもらうぞ？」
「あぁ……分かったよ」
「よし……行くぞ思春。小蓮もな」
「御意」
「ちっ…先手打たれた……」
「あぁ～ん…蓮華さま～～」

良からぬことを考えていた穏とシャオに釘を打って蓮華達一行はその場を去った。

そんな賑やかな一行を目にしてエースは少しキョトンとなったが、すぐにその顔は無意識な笑顔へと変わる。

（なんだかなぁ……落ち着きがねえっていうか……賑やかっていうか……）

ここしばらく味わえなかった人とのコミュニケーション
月の所にいたときと同じ感覚
胸が躍った。

自分はまだ自由な海賊だという自覚を棄ててはいない
他人からあごで使われるのは我慢ならないはずなのに……

最近の自分はどうもこういった軍に身を寄せている。
しかし、それを素直に望んだからではない。

自分のすべきことを見つけるための通過点だと考えていた。

（おれは……またいつか“じゆう”を求めて海に出てやる……）

エースは心の中で自分の帰るべき場所を願った。

「エースゥゥ！！　あなたもこっちに来て飲もうよ～！！」

そんな時に自分の雇い主からの声で現実に引き戻された。

そんな自由人を彷彿させる雪蓮にエースは思った。

（今は……あいつらと楽しむか…）

考えるのを後回しにしてエースは大円団の元へと歩みを進めた。

## 決着！！　エースの新たな輪（後書き）

最後のエースが祭の剣を叩き落とすシーンはルフィがクロコダイルのフックをへし折ったシーンと重ねてください。

## 秘密一部解禁（前書き）

遅くなって申し訳ありません！！

リアルが有り得ないくらい忙しいので遅れてしまいました！！

次からはもう少し早く仕上げられるよう頑張りたいです！！

## 秘密一部解禁

エースが呉の客将となってから一夜が明けた。
エースが最後に覚えているのは雪蓮と祭と一緒にはっちゃける場面だった。
エースが起きた時に他の武将と一緒に倒れていたのを見た。
雪蓮と祭はともかく、冥琳や明命などの面子は顔色も悪かった。
やはり、江東の奪還という念願でハメを外しすぎたようだ。
しばらくして皆も起きて二日酔いが残った者もいたけれどなんとか復活して今では少し立ち直った。
そして、エースに対しての質問タイムが始まった。
「さあさあやっとこの時が来たわね！」
「落ち着け。まだ酒が残っているのか？」
「何よ別にいいじゃない」
無駄にテンションが上がっている雪蓮に冥琳がなだめる。
それによって一旦は落ち着き、話を戻す。
「ていうか何が聞きたいんだ？」
「あぁ、お前のことは鈴仙と風からある程度は聞いているからな。お前が元々普通の人間だったとか…海賊だったとか……悪魔の実なる果実を食べてそんな体になったとかな……」
「そこまで知ってんのか？　だったらもういいんじゃねーか？」

「いやな、それを聞いて色々と興味深くなってな。他の皆からも聞きたいことができたのだよ」
「そこで、本格的に明日から国の立て直しが始まるからその前に聞いておきたいと思ってね」
雪蓮と冥琳の言葉に全員が頷く。
それにはエースも肩をすくめて困った素振りを見せるが、それにも関わらずに話は進む。
「それじゃあ私からね？　天の国にはエースみたいに火とかを出せるの？」
「……いや、火を出せるのはロギア系の特徴だからな。体ごと火を出せるのは世界でおれ一人だった」
「ろぎあ？　それはなんですか？」
最早自分の話は聞いてもらえないと悟ったエースは素直に答える。
聞き慣れない単語に皆の思いを代弁して亜莎が聞く。
「その聞いた悪魔の実ってのはおおまかに三つのタイプ……種類に分けられるんだ」
「三つか……どんなのがあるんだ？」
「そうだな……まず一番種類が多いのはパラミシア系で……体の形とかを変えて攻撃したりするやつかな……」
「え～っと……例えばどういうことができるんですか？」
明命がそう聞くと、エースは過去を振り返って能力者を思い出す。
「そうだな……首を伸ばしたり腕や足、体の至る所を伸ばして遠距離から攻撃するゴム人間……体を自在にバラバラにしたりできるバ

ラバラ人間……全身の肌をスベスベにしてどんな攻撃も滑らせて受け流す美白人間とか……」
「体を伸ばすって……」
「体をバラバラ……ですか？」
「スベスベ……なんか羨ましいかも……」

蓮華、明命、鈴仙のように全員も感心とは少し違った感嘆を洩らす。

「ちなみに、おれの弟はそのゴム人間だ」
「え？　エースさんに弟なんていたんですか？」
「あぁ、血は繋がってねえけど」
「初耳ですね～」
「まあ今は悪魔の実だ。弟の話はまた今度にしてやるよ」

鈴仙と風でさえも初めて聞いた事実にエースは笑って受け流し、次へと進む。

「次にあるのはゾオン系だ」
「ぞおん……さっきから聞き慣れない言葉だが、お前の世界の言葉なのか？」
「そうだな。分かりやすく言えば動物だな」
「動物って……まさか動物に変わる……とか…そうなの？」
「まさしくその通りだけど？」

思春と蓮華の問いにあっけらかんと答えると、周りの皆も少し顔が引き攣った。
人間が急に獣になるところを想像してしまったのだろう。

「ゾオン系ってのは単純に身体強化させるのが特徴だな。鍛えれば鍛えるほど強くなれるんだ」

「へ……へ～……どんなのがあるの？」
「ん～…イヌになるやつとかネコとかブタ…トリもいるな～…」
「ネコ……ですか？」

この時、明命が自分もネコになってみたいと思ったのは誰も知らない。

「だけど、ゾオン系が三つの中で一番奥が深くてな、ゾオン系“古代種”“幻獣種”ってのがあるんだ」
「古代種？　幻獣種？　それはイヌやネコとはどう違うの？」
「ああ、古代種ってのは昔に絶滅した動物……幻獣種は伝説の中でしかいない、龍とかそういった奴になれるんだ」
「へ～……すっごい数があるのね～…」

雪蓮も舌を巻いて驚いていると、他の人も段々と話にのめりこんできているようだ。
鈴仙と風でさえも深くは聞かなかったが、聞いてて面白いものがあった。
冥琳と穏、亜莎も未知なる話に興味津々で聞いていた。
穏だけが既に卑猥に身体をくねらせていたが…

「そして、最後に悪魔の実最強のロギア……自然の力を使うんだ」
「し…自然ですか？」
「それって、エースも自分で言ってたよね？　エースもその…ろぎあってやつなの？」
「いい勘してるじゃねーかシャオ。おれはメラメラの実…ロギア系の炎人間だ」
「自然……どんなやつがいた？」

冥琳がそう言うと、エースは思い出しながら答えていく。

「そうだな……氷を操る氷結人間……光人間や煙人間もいたなぁ……多分だけど雷を操るのもいると思う」

「雷……なんかピンとこないわね……最強といってもどれくらい威力があるの？」

蓮華の言葉に少し考えてから答える。

「……ロギアが三人いたら……この大陸は間違いなく沈むな」

『『『はぁ！？』』』

エースの推測に全員が驚愕する。

大陸が沈む！？

「沈むって……そんなことがあるんですか！？」

「あぁ……ただでさえパラミシアでも島の原型を変えるくらいの能力者がいることも珍しくない。おれの世界の世界一の大剣豪でさえも剣一本で島くらいは……」

「剣一本って……どんだけ強いのよ……」

雪蓮を含めた全員もその強さに驚きはするが、実感が湧いてこない。今まで見たこともない強さに全然実感が湧いてこないのが彼女達だろう。

「悪魔の実を食ったやつのことを『能力者』って呼ぶんだ」

「成程……その実はどこで見つけたんだ？」

「どこって……海を渡ってたら浮いてるのを偶然見つけて食ったんだ」

「海って……浮かんでた木の実を食べるか？　普通……」
「いいじゃねえか。食料とか大変だったんだぞ？」

昔のことを思い返してると風が気になったことを聞いてみた。

「その実を切り分けて他の人にも食べさせてたら戦力も上がってたんじゃあ……」
「いや、どうやら最初に口付けたおれにしか能力は伝わらなかったな。後で他の奴にも食わせたけどだめだった」
「不思議ですね……」

亜莎が呟くと、祭が嬉々として聞いてきた。

「それで？　その実というのは美味だったのか？　酒のつまみにくらいはなったか？」

それに対してエースは味を思い出すや否や胸やけを起こす。

「いや、あんな不味い物はコリゴリだ。あれより酷い物があるなら教えてほしいぜ」
「そんなに不味かったのか？」
「不味いだけじゃねえ。食った瞬間に自分の身体が変わっていくような……そんな感覚だった」
「……本当によく食う気になったな」

思春も思う所があったのかツッコムが、エースは気にしない。
そんな時、シャオも聞いてみる。

「じゃあもしもう一つ見つけてエースが食べたら無敵じゃない？」
「いや……多分むりだろ」

「え？　なんで？」
「これは聞いた話なんだけどよ、悪魔の実を二つ食った奴は体の中から爆発して跡形も無く飛び散るんだと」
「……」
シャオもあまり想像したくなかったのか何も言わなくなってしまった。

「まあ知ってることはこれくらいだな」
「なるほど……亜莎」
「は、はひ！」
冥琳はそこまで二人に明日の作戦を伝える。

「明日、ここから北西の賊の討伐をエースと共にしてもらいたい」
「わ…私が…エースさまとですか！？」
「あぁ、袁術が余分に建てた城を占拠されてな。迷惑な話だがな」
冥琳は溜息を吐きながら悪態を吐く。
その横から雪蓮が言う。

「だったら蓮華も行ってきなさいな」
「え？　私もですか？」
「そ。蓮華も袁術の時は少し甘い部分があったからその訓練…って訳」
「は…はい…それなら……行きますが…」
「心配しないの。たかが賊なんだから蓮華と亜莎なら大丈夫よ」
「「はい！」」
雪蓮は二人の肩に手を置いて励ますと、二人は咄嗟に返す。

その後雪蓮はエースにも向き合う。

「エースもこの二人をお願いね？」

「ああ！　偶には思いっきり暴れたかったんだ！」

「ふふ。頼もしいじゃない。期待してるわよ？」

「まかせろ！！」

エースも思いっきりという言葉に惹かれてテンションが上がっている。

それを見て、困った主を思う冥琳は苦笑してエースに進言する。

「それならお前の…すぺーど隊というのも保護しているから挨拶にでも行ってこい」

「お！　あいつらも無事だったんだなぁ…分かった！　ちょっと行ってくる！！」

部下が無事だと知って喜ぶエースはそのまま玉座の間から駆け足で出て行ってしまった。

それを見た雪蓮は笑い、冥琳は溜息を吐く。

「まったく……場所も聞かずによくもまあ…」

「いいじゃない。面白いから」

「これで苦労が二倍だわ……亜莎と蓮華さまも」

「はい！　なんでしょう！？」

「どうしたの？」

「ていうか今私見てなにか言わなかった？」

前半の呟きに敏感に反応した雪蓮を無視して冥琳は自分の提案を伝える。

「少し頼まれてくれませんか？」
「？　なにかあるの？」
「はい。実はエースの実力を測っていただきたいのもあるんです」
「エースの？」

亜莎と蓮華は二人揃って首を捻る。

「はい。できればエース個人でどこまでの仕事が可能なのか。何が得意で何が不得意かを見極めてもらいたいのです」
「あぁ、そういうことか」
「そ。それなら蓮華と亜莎のいい経験にもなるし、これからのエースの仕事の割り振りもできるから色々と得なのよねー」
「行ってくれますか？」

冥琳の言葉に二人はやる気を見せて頷く。

「分かったわ」
「頑張ります！！」

こうして、呉の休みは閉じていくのだった。

その後、さまよい続けたエースは小一時間ぐらい城を駆けめくり、鈴仙と風に案内されることとなった。

## 秘密一部解禁（後書き）

和尚さんの小説の解禁が楽しみな今日この頃

どうやったらあそこまで早く更新できるのか……

## 強大すぎる力の驚愕と畏怖（前書き）

『阿部のエースを求めて健業潜入・洛陽からの脱出』

「エースたんは呉に行った……」

卑弥呼の“元”弟子の阿部は焼けきった街中でそう呟き、カバンの中へツナギとツナギとツナギを詰めていった。

パンツ？　トランクス？　邪道だ。

「おい！！　何している！？」

そこへやってきた槍兵。
見た所、蜀の兵だ。

「ん？」

阿部はその兵に気付いた。

「おれはノンケでも構わんがいいのか？」

阿部の眼が妖しく光り、股間が肥大化した。

## 強大すぎる力の驚愕と畏怖

現在、蓮華達率いる孫権軍が行軍している。
目的は袁術の城に居座る賊の討伐である。
エースは蓮華と亜莎と共に賊の討伐に加わっていた。

「なんか歯ごたえがねえ仕事だな」
「真面目にやれ。お前は将軍の身なんだ。兵の指揮をやる気を削ぐ発言は控えろ」
「こりゃ失敬」

蓮華に諌められたエースは素直に謝っておく。
しかし、やる気が湧いてこないのも事実。聞いた話だと賊の数は極僅かだという。

数にして４００だと聞かされ、拍子抜けしたのは記憶に新しい。

「で…でも！　今回の戦はエースさまにとって大事な戦なんです！」
「…？　なんで？」

亜莎は慌てた様子でエースにのたまうと、エースは首を傾げる。

「エースさまは兵を使うよりも単身で敵に一当てしてから兵と突破する傾向が見られます」
「それが？」
「推測ですが、エースさまはあまり自分よりも強い相手と戦った経験がないのでは？」
「へぇ…なんでそう思う？」

「エースさまは必ず一当てする時には単身で突撃すると聞いたので…もしかしたらそれが癖になってると思って…」
「癖？」
エースが分からないといった雰囲気を醸し出すと、亜莎は分かりやすいように伝える。
「どんな戦いであれ、必ず時間、お金、兵の三つに多大な影響を受けます」
亜莎が指を三本立てて説明を続ける。
「エースさまは三つの削減を続けるのに無意識的になったんだと私達から見たら感じます」
「そうね…私も亜莎と同じ意見だ」
「そ……そういうもんなのか？」
なんだか自分に対する周りの反応が異様なものに気付いたエースは少し居づらそうにすると、二人はそれに気付いてフォローする。
「あ、あの…ですからここで少しでも改善させようと思って…」
「そうよね！？　ここで私達の戦いに付き合って、少し手伝ってくれれば少しくらい分かってくるんじゃないかな～って…」
二人のフォローに少しは立ち直るのを感じて少し安心する。
「兵を動かすのは私がやるから亜莎とエースは城にこもった敵をいぶり出してくれ。できるか？」
「はい！　やってみせます！」
「…分かった」

亜莎は礼儀よく返事し、エースは短く返事するだけに留めた。
内心では部下に任せて自分だけ引っ込んでるのが歯痒い。
助かる部下を見殺しにするかもしれないからだ。

しかし、月の元で兵を何回か率いたが、亜莎の言う通り戦い方がまるで違う。

こっちの兵は能力のことを完全には理解しておらず、エースも不用意に暴れることができない。

その上、一人での無双は兵に過ぎた安心感を与え、安心は怠惰に、怠惰は死に繋がる。

そんなことになってしまえば全滅も考えられる。
そうなってしまえば元も子もない。

（頭じゃ分かってんだけどよぉ…）

部下をできるだけ死なせたくない。

かといってそう思う事自体が戦場に立つ者にとって侮辱と同じ。

「甘いなぁ…おれも…」

矛盾する思想とこの世界とのカルチャーショックにエースは溜息を吐く。

「どうかしたのか？」

蓮華が覗き込むようにエースを見詰めると、エースは苦笑しながら答える。

「……なんでもねえ」

間もなくして、エース達は賊の根城にたどり着いたのだった。

「なにしてるの？　冥琳」

エース達が出立してからしばらくして、雪蓮が書簡に筆をなぞらせる冥琳に何してるのか聞くと冥琳は作業を続けたまま答える。

「これか？　エースの仕事の割り振りと文字の教育に関する計画だ」
「あれ？　エースには政はやらせないんじゃなかったの？」

雪蓮の言う通り、冥琳はエースに政務をさせる気などなかった。

「確かに政務はさせん。させはしないのだが…」
「？」

冥琳が机の引きだしから一つの書簡を出して手渡される。
書簡を受け取って中を見ると雪蓮は更に書簡を覗き込む。

「なにこれ？　落書き？」
「『こんにちわ』『ありがとう』と書いてるらしい」
「これが！？」

雪蓮はもう一度確認するが、どう見てもおかしい。

墨汁の付けすぎで滲んで見づらい。

その上、字も汚く歪んでもう訳が分からない。

「エースは字はある程度読めるが、書いたことがあまりないらしい」
「あ、そうなの？」
「あれも一応将軍になったのだからな。せめて書けるようにもなってほしいのだ」

溜息を吐く冥琳に雪蓮が肩に手を置いて激励。

「あはは～。頑張ってね♪」
「お前もな。仕事な」

「あ…しまった…」

冥琳は肩の雪蓮の手をがっしりと掴んで逃がさない。

「……」

「……」

手を振りほどこうとする力と手を離さない力が拮抗する。

二人の無言の攻防が小さな部屋で繰り広げられていた。

「……」

「…これは…」

雪蓮と冥琳が不毛な争いを続けている時、賊の討伐に向かった二人は呆然とした。

事の発端はある一つの作戦からだった。

篭った敵をあぶり出す。

賊相手になら挑発して引きずり出すことも容易だったのだが、ここはエースに頼んでみた。

この作戦の目的にはエースの戦力解析も含まれているからだ。

エースはこれを快く承諾した。

最初はそのことに何の疑いもなかったのだが、ここで忘れていることがある。

両者との価値観の違い。

蓮華たちにとって『引きずり出す』というのは相手に何らかの策を用いって敵をあぶり出す、と考えていた。

しかし、エースにとってのあぶり出すとは……

「落火星！」

文字通り、あぶり出すと捉えていた。

エースの出した炎の球は城の上空へと浮かび、いつもの如く炎の雨を降らせる。

雨の一つ一つは屋根を貫き、賊を焼き尽くす。

雨の雨粒を避けられないように、人間に火の雨を避けることなどできようか？

言うまでも無い。

それほど時間を置かずに我慢の限界を越えた賊達が城から出てくる。

しかし、戦うからでも激情に任せたわけでもない。

正体不明の奇襲からの恐怖によって逃げ出す者が全員であり、実際に武器など持ってはいない。

「れ…蓮華さま…」

「え…あ！」

蓮華はハっとして兵士全隊に号令を発す。

「孫権隊はすぐに賊を制圧せよ！！　呂蒙隊は城の消火だ！！」

『『『……』』』

「何をしている！！　早くかかれ！！」

蓮華の指示で兵達も我にかえって蓮華の指示に従う。

「それじゃあおれも行ってくる」

「あぁ、頼んだ」

エースも兵に混ざって燃え盛る城の方へと向かって行った。

エースの姿が見えなくなってしばらくすると、蓮華と亜莎が深いため息を吐いた。

「す……すごいですね……」

「あぁ……これを戦というにはあまりに一方的すぎるな……」

二人は燃え盛る城へと視線を移した。

燃え盛る城を見下ろす燃え盛る赤い太陽

太陽の身はその身を削り、地へと落とす

その身は万物を穿ち、万物を焼き払う

太陽はその身と共に地上を灰へと帰す

（もはや、これは神の所業……）

蓮華はそんな異様な光景を目の当たりにして言葉を失っている。

（確かにエースは孫呉に加担すると誓った……だけど……）

蓮華の心にある感情が芽生えていた。

（エースは……私達を……）

――滅ぼすのではないか

蓮華は知らないだろうが、その横では亜莎も同じ事を思っていた。

人は大いなる力と共に大いなる責任を問われる。

それと同時に蓮華と亜莎はエースに新しい感情が芽生えた。

それは孫呉に入ったことに対する感謝とエースの強大な力に対する驚愕するのと同時に

蓮華達はエースの未知なる力に

畏怖するのだった。

## 強大すぎる力の驚愕と畏怖（後書き）

最近はリアルでの疲労で厨二病の力（略して厨二力）と文章力の落ち込みが激しい……

それと扉絵みたいなこととしてみました。

## 怠慢王女との休息（前書き）

『阿部のエースを求めて健業潜入・洛陽でのランデブー』

阿部「そうだ……もう少し屈んだほうが……」
兵「もうだめです……もう出そうなんです…！」
阿部「それじゃあオレの腹をお前の小便で満たせ」
兵「そ、そんな……でも…」
阿部「いいから……」
兵「そ、それじゃあ……はっ！」
阿部「っう！！」
諸葛亮&鳳統「はわーーーーーーー！！／あわーーーーーーーー！！」

この時、阿部は軍国から一級危険生物と判断された。

そして、洛陽から逃げた彼は……

# 怠慢王女との休息

賊の討伐が終わってから数日が経った。

エースも呉の街を闊歩する中、エースはこの地に来た初日と比べて更に増した活気を感じ取っていた。

自分は政治のこととかは全く分からないけど、とにかく賑やかになってきたことは分かる。

そんな中、エースは警邏のお仕事中である。

「あら？　エースじゃない。やっほー♪」

急にどこからか声が聞こえてきたかと思ったら先の通りの端で雪蓮が立っているのが見えた。

エースもそこで老夫婦と向き合いながらも自分に手を振る雪蓮に気付いた。

「雪蓮か。何してんだ？」

「うん。おじいちゃんとおばあちゃんとね」

楽しそうにそう答えると、雪蓮お喋りをしていたのだと悟った。

「雪蓮ちゃん。この方は？」

「あぁ、おじいちゃんもおばあちゃんも初めてだったよね？」

そう言ってエースを紹介すると、老夫婦はエースをマジマジと見つ

めて感心する。

「どうも初めまして。私の名はエースと申します。以後、お見知りおきを」

とりあえず雪蓮の知り合いだということでお辞儀をすると、老夫婦もお辞儀して返す。

「これはこれは、礼儀のいい子だねぇ」

「この子は新しい仲間かい？」

そう聞かれると、雪蓮は誇らしげに胸を張って宣言する。

「もちろん！　今や三国の注目の的、こんな世の中を変えられる大きい戦力なんだから♪」

「ほぉ～……期待されてるじゃないか……」

「頑張ってね」

おじいさんが肩を叩き、おばあさんも労いの言葉をかけてくれるのにエースは少し嬉しくなった。

「それにしても格好いいわね～…雪蓮ちゃんはどう思う？」

「わしだって後三十若かったら雪蓮ちゃんと結ばれてたかもしれないの～…」

エースを見ながらの言葉に雪蓮は頬を緩ませる。

「ありがと。おじいちゃんの若い時も興味あるけど、私達はエース一筋かな？」

「？」

「本人はこんなんだけど。そこが可愛いところでもあるから」

自分が何を言われているのかは知らないが、信用されていることは確かのようだ。

とりあえず、その場を静観することにした。

しばらく談笑してからエース達は老夫婦と別れて街を練り歩く。

「どう？　皆とはもう慣れた？」

何気なく聞いた質問にエースも何気なく答える。

「まあ…慣れたといえば慣れたんだけどよぉ…蓮華と亜莎がなぁ…」

今のエースが抱えている問題は蓮華と亜莎との関係。

同伴した任務の時以降、二人の態度がどこかよそよそしい。

嫌われている感じではないが、避けられている感じだった。

雪蓮も少し思案顔になるが、すぐにくだけて背中を叩く。

「大丈夫よ。ただあの二人は頭がカチカチでね。エースの戦いを見て少し不安に思ったんでしょうねえ」

「不安？」

なんのことだか分からないエースに雪蓮が分かりやすく説明する。

「いきなり、城を一気に焼き尽くしたんですって？　それじゃあ混乱もするわよ」

「そんなもんか？」

「そうよ？　天界はどうかは分からないけど、こっちじゃあそういうものよ」

雪蓮はそのまま空を仰いで続ける。

「普通なら自分達の常識が覆されたら少なからず恐怖を感じるわ。今まで信じてきた物が裏切られた気分と同じね」

「そうかぁ？　おれはそういうのが好きなんだけどな」

「そうなの？」

エースは海賊として海に出ていた時を思い出すと、気分が高潮してきた。

思わず握り拳を作る。

「そりゃそうさ！　今まで知らなかったことを知ると自分の中の世界が広がって、ワクワクすっからな」

ニシシと笑って率直な感想を述べる。

「海には、世界にはおれたちの知らないことがたくさんある。その一つ一つを見つけ、心に刻む時、おれははっきりと自覚できるんだ…自分のちっぽけさや……」

握り拳を解いて自分の胸に手を当てる。

「もっと見たい、もっと知りたい、そのためにもっと生きたい……おれが生きていることを実感できるんだ……」

爽やかに、それでいて穏やかな表情のエースに雪蓮は少し呆然としたが、すぐにエースの意外な顔を見て満足し…

見惚れていたのに気付いた。
しかし、慌てることなく返す。

「そっか…じゃあ私と一緒だね」
「雪蓮も？」
「うん。毎日が同じことの繰り返しなんてつまらないじゃない♪
だから、非常識人間のエースが呉に来てよかったと思うの」
「そっか……そりゃ感激だな」
「蓮華と亜莎のことは気にしないでいいわ。いずれ慣れるから」
「だといいんだがな」

無邪気に根拠の無い自信を見せつける雪蓮を見てエースも何となく嬉しさがこみ上げてきた。

この世界の住人から見ればおれは異質で異常。
本来なら血筋は関係無く忌み嫌われるだろう。

しかし、そうならないのは今までの行動が偶々良い結果に繋がったこと、謎の噂、そして噂を信じるしかできないくらいまでに疲弊した大陸の情勢。

これらの条件があったからこそおれはこの世界で“御遣い”なんて呼ばれるようになった。

だけど、一歩間違えればおれは“化け物”の一括り。
またガキの…ルフィやサボに出会う前のおれに逆戻りだったかもしれない。

それに、雪蓮達にはまだ言ってないロギアのもう一つの能力がある。

だが、それを話せばこいつ等はおれをどうする？

殺されはしない。

だけど、確実に恐れを抱かれる……

ロギアが悪魔の実最強の所以となっている攻撃の無効化。

その力はおれの世界でも異質中の異質。

そんな姿を見られたら……

――――化物！！

――――呉から出て行け！！

――――おのれ！！　人の皮を被った悪魔め！！

“あっちの世界”で死に、“この世界”でおれは生きる活力を持てたのはこいつ等の……仲間の笑顔があったから…

もう……あの時に戻るのはゴメンだ…

それならどうする？　どうすればいい？

ふと頭に浮かんだ……

（バレなきゃいい……今まで通りに攻撃さえ当たらずにいけばいい……）

エースは無意識にそう考え、暗示するようになっていた。

この世界に舞い降りてきてから過ごしてきた穏やかな時間は少しずつ、確実にエースの心に影響を与えていた。

「どうしたの？　エース」
「あ、いや…なんでも…」
「ふ～ん…そう？」

曖昧に返すエースに若干の疑問が残るが、雪蓮はすぐに話を別に置く。
腕を絡ませてエースに密着する。

雪蓮は上機嫌な表情を浮かべていた。

「どうしたんだよ？　急に」
「べっつに？　ただこうしたかっただけ♪」

雪蓮はわざと豊満な胸をエースの腕に押し付けるが、肝心のエースは無反応。
首を傾げるだけだった。

そんな反応に雪蓮は不満げに頬を膨らませてエースにブーたれる。

「もうちょっと反応があってもいいんじゃないの？」
「え？　何が？」

即答で返すエースに流石の雪蓮も冷や汗を流してエースが本当に男なのかを疑う。

「エースの股間……ついてるわよね？　今度理由つけて確かめようかしら…？」
「どうした？」
「ううん！　なんでもない！！　早くいこ！」
「うん？　おぉう！　そんなに引っ張るなって！」

雪蓮は気を戻してエースと純粋に楽しもうと腕を力強く引っ張ってエースを振りまわす。

振り回されるエースは戸惑いこそしたが、その顔はすぐに笑顔になってしまう。

この世界でもまた仲間ができた。
おれの“世界”を照らしてくれる仲間が……

だからこそ、エースはさっきまでの弱気な自分に喝を入れた。

おれはもう決めた。

たとえ、嫌われようと、憎まれようとも

こいつ等は……仲間は

おれが守る

たとえ、それがどんな茨の道だろうと……

海賊なら自分の信じる道は自分で決める

そうだろ？

おやじ……

「……本当にいい天気だ」
「え？　何か言った？」
「いや……なんでもねえ……」

エースの心は決心を固め、自分の道を突き進む。
それが自分の信じる道なのだから……

「ふふふ……ついにここまで来れたか」

同時刻、街の外では一人のイイ男が闊歩していた。
その男は知らずに口に出していた。

体はイイ男でできている
血潮はクソミソで、心は男のケツ
幾たびの戦場（床）を絶頂
ただ一度の目前逃亡もさせず
ただ一欠片の貪欲の限りもなし
イイ男はここに独り肉の剣で性欲を鍛つ
ならば我が行動に自重は要ず
この体は“ツナギとクソとミソでできていた”

「ただの女がエースを寝取れると思うな……エースたんのケツの穴は……阿部　高和しか受け入れない」

そう呟いた瞬間、その男の姿は消えた。

最初からその場にいたことを否定するかのように……

# 怠慢王女との休息（後書き）

学園祭で遅れた……きつかったです…

## ネコラーとオブジェ娘との昼時（前書き）

『阿部のエースを求めて健業潜入・健業での職探しの途中でランデブー』

阿部「さて……住処と金は……」
男「おらぁ！！　どきやがれ！！」
阿部「うん？」

阿部に突っ込んでくる一人の男
手には店に置いてある品物が。どうやらスリのようだ。

男「そこどきやがれぇぇぇ！！」
阿部「ふん！！」

ズブリ

男「っアーーーーー！！」

# ネコラーとオブジェ娘との昼時

「お猫さま～♪」

いつもの昼間、呉の武将こと明命は街の一角で猫と向かい合っていた。

何故なら彼女は呉……いや、三国きっての猫好き。

俗に言うネコラーなのである。

今の彼女は一匹のネコの前でエサである小魚を献上する形で地に這っているような感じだ。

とても呉の武将を務めている姿だとは思えない。

彼女は数少ない休暇をネコのために使うことが日課となっている。

「お猫さま～♪」

――フシャーッ！

「ひゃわ！！」

そして、最後には逃げられる。

あまりしつこすぎる愛の末路というに相応しい例がネコと明命の間で繰り広げられていた。

ネコの威嚇に怯んだ明命はネコに手を引っ掻かれ、そのまま逃げられていた。

痛む手を押さえて明命は目に見えて落胆した。

「あぅ……また逃げられてしまいました……」

明命は誰の目から見ても薄暗いオーラを放っていた。

これで嫌われて逃げられた回数は三桁を越えた。

「なぜ嫌うのですか……お猫さま……」

痛む手をさすってネコの逃げた先を見つめて呟く。

その後ろから　二つの人影が来たことにも気付かずに…

「なにしてんだ？　こんなとこで」

「はい…今さっきお猫さまに…あれ？」

明命は急に聞こえてきた声に返事して誰かの存在に気付いた。

明命は後ろの気配を追って振り返る。

「よ」

「こんにち…ぐ～…」

焼鳥の串を一本口にくわえて爽やかに挨拶するエースと挨拶中に眠る風がいた。

それに気付いた明命は慌てて姿勢を正して挨拶を返す。

「あぁ！　こ、こんにちは！！」

さっきの光景を見られたのではないかと思って顔を赤くさせる。

「お前、こんなとこで何してたんだ？」
「え、えぇっと……」
エースの問いに言葉を詰まらせる明命。
目が泳いでいる明命に疑問を抱いていると、いつのまにか起きていた風が引き継いだ。
「明命ちゃんはお休みの日に猫とじゃれるのが日課なんですよ～」
「ふ、風さん！」
明命は風に制止の声をかけるが、風はそのまま続ける。
「その様子ですと、また逃げられたようですね～」
「あぅ…」
図星を突かれた明命は縮こまり、紅い顔をさらに紅潮させる。
その理由を聞いたエースはなんの反応をするでもなく、普通に返す。
「そっか…それならおれ達は行ったほうがいいか？」
エースは明命の休みの日課を邪魔しないようにと気を利かせようとしたのだが、それは当の明命に止められる。
「いえ、もうお猫さまに逃げられてしまいましたのでお気遣いは無用です…」
そうは言うも、明命自身は頭を力無く垂れて明らかに気落ちしてい

る。
そんな姿を見せられたエースは明命を放っておくわけにはいかなくなった。

「それならよ、これからおれ達と飯にいかねえか？」
「え？　私が…エースさま達とですか？」
「あぁ、これから風と行く予定だったんだけどよ、やっぱ人数は多い方がいいと思ってよ」

そう言いながら風に向くと、風も快く了承する。

「風は構いませんし、むしろ大歓迎ですよ～」
「そ、そうですか？」

明命は少し考え、首を縦に振る。
それを確認したエースは満面の笑みを浮かべて明命の背中を軽く押す。

「わわ…！」

明命はいきなりのことによろめくが、エースは肩を押さえて支えてやる。

「わりいわりい、大丈夫か？」
「あ、はい、ありがとうございます……」

明命が軽く会釈して言われるがままにエースに付いて行こうとした時、エースは怪我している明命の手に気付いた。

「…明命、ちょっと」

「はい？　なんでしょう？」

明命を振り向かせるとすぐに手を取ってやる。
それには明命と風の二人は面を喰らった様子だったが、エースは構わずに常備している手ぬぐいを傷に押し当ててやる。

「お前……これはネコの爪か？」
「え、あ…あの…」
「もしそうだとしたら早く治療させるぞ。動物に引っ掻かれた傷ってのは汚いらしいからな、今はこれで我慢してくれ」

おどけて言うエースに明命はアタフタしながら制止させようとする。

「あの…私は大丈夫ですから…！　そんなことしたら手ぬぐいが…！」
「手ぬぐいってのはこういう時に使う物なんだよ」
「ですが…！」
「よし、表面の血はとれたな。それならすぐに飲食店で綺麗な水を借りにいくぞ」

血で赤く濡れた手ぬぐいをポケットに突っ込むと、風はエースに提案する。

「それでしたら急ぎましょうか～？」
「だな」

明命は状況に置いて行かれて呆然としている中、エースに手を握られる。

「はうわ！！」

急に握られたことに驚きを隠せない明命は少し混乱してしまう。

「ほら、行くぞ？」

「え？…どこに……」

「どこって、お前の傷治すついでに腹ごしらえに行くって言ったろ？」

笑って言うエースだが、明命には拒否を許さない響きを感じとって今度は緊張してしまう。

「ほらほらお二人さん。そんなところでイチャついてないで行きますよ？」

「分かってるよ」

「あ、すみま…って別にイチャついてなどはいませんよ！」

こうして三人は飲食店へと向かって行った。

道中では狼狽する明命をエースはエスコートし、明命を少しずつ落ち付かせた。

なんで動揺してるのか理由が分からずにいたのは言うまでもなかった。

あれから少し時間が過ぎ、エース達は食事を終えて店から出てきた。

「どうだ？　手の怪我は」

「はい、最初はズキズキしていたのですが、今はなんともないです」

「どうやら、お兄さんの治療が効果てきめんだったようですね～」

「まあな、海渡っていた間は怪我の恐ろしさに何度も直面したからな…」

エースが懐かしむようにウンウンと回想に浸っていると、明命がエースの前に出てきた。

「あの、エースさま！」

「ん？」

エースが呼ばれるままに明命を見ると、明命は少し照れくさそうにしどろもどろに言葉を紡ぐ。

「先程は…こんな私に気遣ってくださって嬉しかったです……その……ですからお礼を…」

明命がエースに何か望みを聞こうとすると…

「ほい」

「ふえ？…」

明命の頭に手を乗せて…

「うりうり」

「ひゃわわわわ…！」

頭をワシャワシャと撫で始めた。

「わぷ…目が回ります～…」

「ふむ…こんなとこか」

パッと手を離すと、髪を乱したまま明命は目を少し回す。

そんな時でもエースは明命の目線にまでしゃがんで諭すように言う。

「全く…どうして真面目な奴はすぐに融通がきかねえんだぁ？」

少し呆れながら、しかし思いやりも篭った笑みを浮かべてくるエースに明命もタジタジになる。

「真面目なのもいいことだけどよ、時々は力を抜いてみるのも乙なもんだぜ？」

「は、はぁ…」

「それともおれとの食事はつまんなかったか？」

「そんなことはありません！　とても楽しかったです！」

エースの問いを明命は力一杯否定する。

実際、食事中はエースの昔話で場が盛り上がっていた。

明命と風にとっては子供のころに聞いたお伽話と架空の冒険を足して二倍にしたような話だった。

島から島に渡る冒険、宝探しの浪漫、そして未知なる出会い。
明命たちはそんな壮大すぎる話に心を奪われていた。

「ですから、こんな私を誘ってくれたことが嬉しくて…」

明命は昔から家柄の関係で武と礼儀を徹底的に叩き込まれてきた。
故にこういった娯楽に対する感謝とかの反応や気の利いた言葉を見つけるのが不得意だった。

そんな真面目で素直な明命だからこそ、嘘偽りないのない気持ちを表し、エースの心にサッと溶け込んだ。

「それならもっと笑おうぜ？」
「え？」

エースの言葉に疑問符を浮かべて小首を傾げる姿はとても愛らしいものがある。
そこへ風が肩をポンポンと　叩いて明命にいう。

「明命ちゃん。少し例を挙げましょうか？」
「は、はぁ…」
「もしですよ？　明命ちゃんがなにかしらの好意…お茶をいれるとかしようとしますね？」
「はい…」

例を挙げて分かりやすくしたのがよかったのか明命から抵抗がなく

なったのを感じた。

そして、風から核心を突かれる。

「そんな好意を遠慮されたらどう思いますか？」

「えっと……あ…」

風の質問に答えようとすると、明命は風の言いたいことに気付いた。

人の好意に遠慮することは決して悪いことではない。

遠慮するのはむしろ、その人の優しさを表すものと同義なのだから。

しかし、人によってはその優しさで傷つける恐れがある。

その人に避けられていると錯覚するであろう。

そこまで考えが至った明命にエースに対する申し訳なさが込み上げてきた。

本当はそこまで深刻になるところではないのだが、それも明命の真面目さ故の事態だった。

そんな考えが顔に出ていたのか、風はすかさずフォローする。

「まあ、相手がお兄さんですから今度出会ったら『いただきます』って構ってあげてくださいね～」

「風。言ってくれるじゃねえか？」

傍で聞いてたエースは微妙な表情でツッコミを入れる。

「ぷ…」

そんな光景を傍目で見ていた明命は可笑しくなって吹いてしまった。

二人も明命の様子に気付いて満足そうに笑みを浮かべる。

「さて、お昼が済んだので風はもう行きますね」

「そっか、おれも冥琳に呼ばれてんだったな」

「そうなんですか…それでは戻りましょう！」

風の言葉に連動するようにエースも自分の用事を思い出す。二人が踵を反すと明命は二人と並んで帰路に発つ。

しばらく帰る間に三人は他愛のない話で盛り上がった。

戦いの絶えない今の時代

血で血を洗う混沌の時代の中でのほんの一時の安息がそこにはあった

火拳の優雅な日常はまだまだ続く。

## ネコラーとオブジェ娘との昼時（後書き）

『火幻武者（かげむしゃ）』

エースの新たな技。敵の攻撃が当たる直前に自分の形を模した炎を身代りにして追撃、または炎を爆破させて怯ませるなど、使い方は様々。

技の紹介が遅れてたのでここで紹介しました。
申し訳ございませんでした。

# 生真面目王女さまの憂鬱（前書き）

『阿部のエースを求めて健業潜入・なぜか決まった職』

阿部「ごちそうさま」
男「……」
？？「流石だな…」
阿部「ん？　あんたは？」
？？「私は男と女との違いを研究する探究者……とでも言っておこう」
阿部「なるほど……その研究者が何の用だ？」
研究者「お主、私の研究対象として私と同棲してみないか？　給料は弾むぞ」
阿部「いいともー」

# 生真面目王女さまの憂鬱

とある昼下がり、昼の休みを堪能した亜莎は冥琳からある重大な任務を請け負ってた。

それは……

「字の読み書き…の教育ですか？」

「ああ、ある人物に基本的な文字の読み書きを教えてもらいたいのだよ」

「はぁ…私に務まりますでしょうか？」

普段は学ぶ側でありながら自分ではまだベテランとは言えない亜莎は今回の任務に大きな不安を抱える。

そんな彼女に冥琳はフっと笑って当然のように返す。

「そう緊張するな。別に複雑なことはしなくてもいいし、暇な時にやってくれればいい」

「は、はい…」

そうは言うが、新参者の亜莎が冥琳の言うことを拒否できるわけがなかった。

亜莎は冥琳の申し出を受け入れ、部屋を出ようとした。

「おっと、ごめんなさい亜莎ちゃん」

「いえ、こちらこそ」

亜莎が扉を開ける直前で向こう側から扉を開けてきた隠と鉢合わせとなった。

二人は道を譲り合う。

そして、亜莎が部屋から出たのを確認すると隠と冥琳だけになった。

「それじゃあ、計画を進めようか」
「ですね」

二人は書簡を広げてある計画を進めようとしていた。

「まったく…まさか私達がこんなことをするとは思わなかったぞ…」
「あは♪　私はいいと思いますよ～？　それに楽しみですから」
「……」

体をくねらせる一番弟子に冥琳も溜息を漏らす。
弟子の性癖もそうだが、仕方ないとはいえ、こんな企画に全力を注ぐのがバカらしくなったことは言うまい。

彼女達の極秘任務が皆に知れ渡るのはまだ後のこと。
その時に起こる波乱はまた別の話。

（どこにいるのかしら…）

一方で、城の通路を歩く人影が一人。孫呉の次期王の蓮華だ。

すれ違う待女や兵士は蓮華に傅くも、少し元気のない彼女の様子に疑問を覚える。

そんなことにも気付かずに蓮華は再び溜息を吐き出す。

（早く謝らないと…）

蓮華の懸念、それはエースだった。

エースとの合同任務の日から蓮華はエースを無意識的に避けていた。かといって、エースを敵視している訳でもない。

嫌っているのはエースという仲間を疑う“自分自身”である。

つい最近にも命を助けてもらったのにもかかわらずにエースを信用しきれていないのが許せないのだろう。

少しの畏れがエースと蓮華の関係を歪なものに変えていた。

「「はぁ…」」

そんな時、蓮華と重なるように別の溜息が聞こえてきた。

それに気付いた蓮華はもう一つの溜息の方向に目を向けると……

「あ…蓮華さま……」

「亜莎？」

溜息の正体は真名を預けた重臣の一人の亜莎だった。

二人が隣り合っていることから、互いの存在に気付いてなかったようだ。

軽い挨拶をぎこちなく交わす。

「どうした？　なにか悩みがあるのか？」

「え…いえ、そういう訳では…」

妙に歯切れの悪い亜莎に蓮華は首を傾げるが、すぐに検討がついて聞いてみる。

「当ててみようか？」

「え？」

「…エースのことだな？」

「……」

亜莎の挙動が止まるのを確認すると、蓮華も納得する。

「なるほど…お前も気にしてのか」
「…はい、どうにかエースさまに会おうとしてるのですが…」
そこから話は進んだ。
亜莎も蓮華と同じく、エースの力に微妙な未知なる恐怖を抱いていること、しかし、最近の任務でエースとの遭遇率が低くてあれ以来会えていないこと、さらに、機会があっても極度の人見知りが働いて声をかけられないとか…
暗鬱になっていきながら語る亜莎を止めて蓮華は語る。
「お前は事情が事情だ。まだ仕方ないな」
「そ…そうなんですか？」
意外な言葉に亜莎が聞き返すと、何故だか蓮華の表情に陰りが差す。
「私はあいつに命を助けてもらったというのに……それでも信用できないでいる……本当に最低だな……」
「蓮華さま……」
そんな風に自嘲する主に亜莎は何とも言えない苦しみが胸を駆ける。
「邪魔して悪かったな。私はもう行くから、任務もエースのことも頑張れよ」
「あ…あの！……はい…」
亜莎は蓮華に慰めの言葉を返そうとしたのだが、同じ立場の自分が何を言っても無駄だと思って何も言えなかった。

「じゃあな…」
「はい…」

両者とも碌な会話もせずに別れて行った。

二人共仕方無いことだと思いながら、ただ好機を待つしかないと思っていた。

そんな様子を影から覗かれていたのも気付かずに…

「ふぅ……」

亜莎と別れてからしばらくして、蓮華は自室で机仕事に勤しんでいた。

未だ消えぬ袁術の悪政の火種の後処理はそう簡単には消えていない。

しかし、蓮華たちの手腕によって日々癒されてきている。

「袁術……よくもまぁこんな政策で今までやっていけてたわね…」

そんな仕事を終え、一息つくと、蓮華は一つ思い出した。

「あ、この後は思春との鍛錬だっけ……」

思い出し、外を見ると日が高い位置に上がっていた。

「あ、大変」

これは少し遅刻してしまっただろうと思い、部屋に置いてある剣を腰に携えて速足に待ち合わせ場所の中庭へと向かった。

途中で誰とも会うことなく、中庭に来たことを蓮華は不思議に思ったが、その疑問も中庭に出てから氷解した。

「思春？　それに……エースまで……」

蓮華の前で繰り広げられていたのは思春とエースとの一騎打ち。

どうして思春がエースと戦っているのか……その疑問は消えないものも分かったこともある。

雪蓮、冥琳、祭、鈴仙、明命などといった呉の主要メンバーがその中庭に集まっていた。

冥琳を除いた軍師達は城の中で政務中、小蓮は多分街へ遊びに行ってるのだろう…

こんなところに集まっていたから城にはほとんどいなかったのか…

蓮華が納得すると、その思考はけたたましい風切り音によって霧散

させられた。

思春達に目を向けると、そこには別世界が広がっていた。

剣による斬撃の嵐と火炎の嵐がぶつかりあっていた。

揺らめく焔を剣が切り裂く。

しかし、それは残像

思春はエースに鋭い一撃を振るうも、エースはその上を行くかのように全てを紙一重で避ける。

思春の強みは叩き潰すような力ではなく、刹那に葬る無音の瞬殺

文字通りの意味で、体の回転を常人では成し得ない速度にまで上げ、死角から斬る。

まさに不可避の嵐

そんな嵐の中にいながら、エースに苦労の色が見られない。

つくづく規格外な奴だ……思春を相手に無手、しかも紙一重で避け続けるなどそうそうできることではない。

たとえ、火が使えなくても、我が軍の猛将と互角…いや、それ以上の実力を持ち合わせている。

噂では、呂布を相手に同じく無手で挑んで敗ったとか…

聞けば聞くほど、一緒にいればいるほど分かってくるエースの異常性。
私はそれが怖い…

それなのに皆は楽しそうだ…

「おっと、あぶな」
「抜かせ！」

一番に驚くべきは思春

普段の思春ならエースの異常性に警戒心を剥き出しにするところ、警告の一つくらいはするはずだ。

実際、エースに会う直前は警戒心を隠そうともしていなかった。

しかし、今はどうだろうか？

攻めきれてもいないのに機嫌がいい。
むしろ楽しそうではないか。

「なんで…」

今まで見たこともない重臣の姿に蓮華は疑問と戸惑いを隠せなかった。

カァァン

そんな中、金属音が中庭に響いた。

何事かと思考を振り払うと、目の前の光景が目に入ってきた。

「……参った」

「よし」

思春が押し倒され、エースは燃え盛る拳を思春の顔面に振り下ろす形のまま止まっていた。

「強い……」

「すごいです！！　エースさまは本当にお強いのですね！！」

人知れずに呟いた言葉は明命の無邪気な賞賛によってかき消された。

それに続いて周りからも賞賛の声が上がる。

「ふむ…見事だったな」

「うむ、それぞれの一撃が思い切っていて見ている方も気持ちいい戦いじゃった」

「いいなぁ……次は私と～…」

「こ…今度は私とやってもいい…かな？」

エースの周りに集まる面子を見て、蓮華はますます分からなくなる。

（たった一週間でここまで皆の信用を勝ち取るなんて……彼は一体……）

「蓮華さま」

物思いにふけっていた時、剣を拾った思春が傍にまでやってきた。

服は土埃で汚れたり、焦げてはいるが怪我も無く問題は無さそうだった。

「なんであなたがエースと？」

「蓮華さまが中々来られなかったので、その時にエースから組手に誘われた次第です」

「そう……待たせて悪かったわね」

「いえ、蓮華さまこそ政策で多忙な身。仕方ありません」

私の遅刻を咎めるわけでなく、さりげなく流す思春の優しさに胸が軽くなる。

「それにしても凄いわね……エースって…」

「ええ、認めたくはないのですが、武だけ言えば呂布に匹敵…もしくはそれ以上だという噂もあながち嘘では…」

「いえ、そういうことじゃないの」

私が言いたいのは……

「こんな短期間で皆からの信用を勝ち取るなんて普通では有り得ないこと……なにがそこまで…」

「……」

まただ…この胸の黒い感情が疼く…

（仲間さえも信用できない…私はこんなに嫌な人間だったのか…）

戒めとも自嘲かも分からない皮肉を自分にぶつけている中、傍観していた思春は蓮華に意外な提案をする。

「それなら、エースと一手の相手してみたらいかがかと……」
「え？」
蓮華は思春からの提案に目を丸くさせて驚きの表情を見せる。
それでも思春の表情は変わらない。
「そのまま引きずっていても奴のことは分かり得ません」
「それはそうだけど…エースに勝てるわけ…」
「はい、今の蓮華さまでは勝つことは不可能です」
「そこははっきりと言うのね…」
思春は基本的に嘘はつくことはない。
優しさと甘やかしを混同させるような真似は絶対にしない。
「ですから、ここは一度思い切って戦ってみては？」
「でも、エースにも都合が…」
「それならお任せください」
「え？　思春？」
そう言って思春はエースに向かって歩いて行く。
やはりいつもと様子が違う…思春が自分の役目を人に、しかも新参者にやらせるなど思ってもみなかった。
思春はエースと二、三秒話した後で戻ってきた。
「大丈夫とのことです」
「あはは…そう…」

勝手に進んで行く状況に笑うしかないのが納得できないが、心の隅ではほんの少しだけ思ってもみない好機にほくそ笑んだ。

もし、ここでエースと手合わせしたら何か分かるのだろうか。

そんな勘というには乏しい予想を胸に心躍った。

「よし、次は蓮華。お前でいいんだよな？」

「ああ、こっちは全力で行かせてもらう」

すっかりやる気に溢れてんな。最近はすぐに目を逸らすから分からなかったけど、今は中々に良い目をしてやがる。

少し気負いすぎる感じも伝わってくるが…

まあ、ビギナーはこんな感じだろ。実力はそこいらの奴よりも上だと見るがな。

「よし、だったらおれから行くぜ？」

「！？」

湧きでる炎のうねりを目にした蓮華は瞬時に構える。

まあ、思春との約束だ。

手加減はしてやるよ。

「陽炎！！」
「！！」
エースは業火の鎧を纏って蓮華へと突進していった。

「あ奴……！　蓮華さまを殺す気か！？」
何故こうなった！？　ちゃんと手加減しろと言っておいたというのに…！！

私は今日の朝、浮かない表情の蓮華さまを目撃した。
盗み聞きするのもなんだか卑怯な気がしたが、そこで私が出れば逆効果だっただろう。
そう思って話を聞くと、原因はエースだというではないか。

どうにかして私は奴と蓮華さまとの接点を作る機会として、今日の稽古に思い至った。

しかし、エースを呼んだのはいいが、蓮華さまがいなかったので暇潰しも兼ねて模擬戦をしていたらいつの間にか雪蓮さまを含めた面々が興味本位で集まってきていた。

「思春、さっきはお疲れ」

「はっ、勿体なきお言葉」

雪蓮さまが冥琳殿と共に私の傍にまで来て讃美の声をかけてくださった。

「それにしても容赦ないわね。すごい数の火柱」

「あれでも手加減はしてくれているのだろう……安心してそうは言い切れんが…」

蓮華さまとエースの周りでは炎が燃え、爆散している。

蓮華さまはそんな中で、剣を振るっているから大丈夫かもしれないが……

少しは手加減を覚えろ、エース

後で言っておこう。

心でエースの処遇を決めていると、不意に雪蓮さまが質問してきた。

「ね、何で蓮華の相手をエースに任せたの？　勝てないと分かっているのに」

「それに用心深いお前がよくこんなことに踏み切ったのだ？」

どうやら、私の行動に冥琳殿も疑問をお持ちのようだ。

「……私が以前にもエースと戦ったことはご存じですか？」

「ええ、蓮華と思春が初めて会ったときでしょ？　聞いたわ」

「はい……そこで一手だけ戦ってみて、一つ気になることがあったのです」

「気になる？　何にだ？」

何……というより…

「えぇ……なんだか本人の気持ち、考えが全て分かってしまったような……そんな気が…」

「へぇ……そんなことが有り得るの？」

「ん～……そんなことは分からないわね…」

雪蓮でさえもその言葉には舌を巻かされた。

そんな感情がの全てが伝わるのが本当に有り得るのだろうか？

長い間戦ってきた彼女でさえ、分からない状況だった。

人はそんな一戦交えただけで分かり合えるほど単純ではない。

そんなことが有り得るのだろうか？

「まあ、確かに汚い奴と純朴なのとの剣筋ってなんか、どっか違うのよね～」

「ええ、性格は剣筋などの無意識的な行動に表れますから」

「それにしたって用心深いお前が感覚的に信用したというのか？」

冥琳殿の言いたいことは分かる。

自分でも用心深いと自覚しており、ここまで付き合いの短い人物に気を許したのは中々なかった。

だけど……

「まあ、この戦いが終われば分かります……」

「「？？」」

戦っている者にしか見る事のできない奴の表情を見れば……な……

「はっ！　せいっ！」

縦振りと突きを織り交ぜても当てるどころか掠りもしない。

少し予想はしていたが、ここまで差を見せ付けられると逆に意地が湧いてしまう。

なんとか一発、せめて掠らせるくらいは…

そう思いながら剣を振るい、攻撃を避けているとなんだか不思議な気分になってくる。

多分、エースの手加減というのもあって、こうして戦えている。

「反応がおせえ。来ると思ったら躊躇わずに避けろ！」

「う…ぐ…！」

炎の拳を剣で受けても強すぎる威力に体が地面を削る。
踏ん張っても後ろにさがってしまった。

それに応じて体に疲労が蓄積されていく。

しかし、気持ちは高ぶっていく。
思春との模擬戦とは一味違う醍醐味、体から溢れる汗飛沫が心地良い。

そんなこともあってか、気持ち的に余裕ができ、気付いたことがあった。

それの所為だったのだろう。

カァン

「あっ！」

気付いた時は既に遅かった。
油断し、武器を蹴り飛ばされた私は尻餅をついてしまった。

「はぁ…はぁ…」

動きを止めると、感じることのなかった疲労感が押し寄せてきた。
息を整える中、エースは私の前に無言で屈んできた。

「……」

「…どうした？」

何も言ってこないエースに不安を覚える。

「今のやり方に…問題があったのか…？」

不安げにそう聞いても変わらず無言。

それどころかずっと私を見つめてくる。

「な…なによ…」

……よく見るとエースって顔は整っていて凛々しいのね…なんだか恥ずかしいわ……

内心を悟られないように毅然とした態度で挑むも、意識しすぎて強気になってしまう。

は、早く何か言ってよ…

願いが通じたのか、エースの口が開いていく。

段々と変な気分になっていくのを感じながら彼の言葉を待つ…

「お前…」

そして……

「桃まんみてえだな」

なんだか気分が引いていくのを感じた…

「あっはっはっは……！！」
「……く…」
「はははははは！！　蓮華さまを桃まんとはな！」
「れ、蓮華さま…」
「なんてこと…」
「……」

エースの素っ頓狂なセリフにギャラリーは呆然としたが、その沈黙も雪蓮の笑い声で破られることになった。

それに吊られて冥琳、祭も笑う。

明命はあわわ…とうろたえ、鈴仙はエースの言動に恥ずかしさを感

じる。

そして、思春に至っては無表情なのか、それとも呆れているのかも分からない表情だ。

そして、当の本人である蓮華はしばらくはピクリとも動かなかったが、やがてワナワナと小刻みに体を震わせる。

「…なに？　その『桃まん』って…」

何か迫力を伴った声色にも拘わらず、エースは笑いながら答える。

「ほら、街で売ってる桃に見えるまんじゅうだよ。あれって作り立てだから熱くて美味いんだよな～」

「で？　なにが桃まんだと…？」

何かの期待に裏切られた蓮華は背後に黒いオーラを纏わせていた。

理由は分からないが、とにかく今の発言を許す気にはなれなかった。

「う～ん……」

エースの首を捻る姿が何とも憎たらしく思いながらも成り行きを見守り続けること数秒。彼の口が開かれた。

「今さっきのお前、顔が桃まんみてえだったから」

「あ～、激しい運動の後で顔も赤くなってて、その顔が…」

注）　女の子に『顔が丸いね。チョウジみたい』『肌がサバサバしてるね。アラバスタを思い出したよ』『なんだかふくよかだね。た

しかドカベンの山田太郎も…』『え～っと……ほら……あれ……そう北斗の拳のラオウだ！！』などの悪口は許されません。良い所を見つけて褒めましょう。

「まんじゅう……だと？」
「なんかそう見えた！！」
「人が真面目にやってるのにそんなこと思ってたのか！！」
そう言って頷くエースに遂にキれた。

「女性にあれはないでしょ」
「ないわね」
「ないの～」
「ないです」
「ありません」

その光景を見ていた雪蓮、冥琳、祭、明命、鈴仙はエースの非礼を影ながらに責めた。

ここは少し冗談だったとおちゃらければよかったのだが、正直すぎるエースにはそう要求するのも難しかった。

中央で喧嘩している二人を見てそう思った。

とは言っても蓮華が一方的に言っているだけなのだが。

だが、思春だけが比較的落ち着いて、それどころか細い目を開き、穏やかな表情で二人を見つめる。
それを横目で見た雪蓮、冥琳、祭は内心では驚くが、すぐになぜ笑ったのかを知った。

思春の視線の先の蓮華は王の妹としての責任の重荷を取り除いた素の蓮華なのだから。

思春はこれがエースのもう一つの“力”だと思っている。
どんな形であれ、過去にエースと手合わせをした者は皆戦いの後で負けたのにも関わらずにどこか清々しい気持ちにさせてきた。

負かすだけなら誰にでもできる。
だが、エースは戦いを通して自信の“素直な気持ち”を行動で伝えているのだろう。

だからこそ、エースと関わった人達は彼に無類の信頼を感じているのだろう。

「なるほど……」

雪蓮は人知れずにそう呟いた。
そして、背伸びをして呟いた。

「やっぱ今度エースも連れて行ってあげよ」

その時の笑顔はとても良い笑顔で……穏やかな太陽の光のようだった…

「はぁ…はぁ……」
「もう落ち着いたか？」
「誰の……せいよ…」

怒鳴り散らした蓮華に残っていたのはどうしようもない疲労感と…

「まぁ、それでも……」
「？？」

「すっきりした…かな？」
爽快感だった。
「そっか…あ」
「…今度はなんだ？」
また失礼なことを言うのかと思った蓮華は首を傾げるエースを見てると……
「…やっぱ」
「…」
「その顔の方が好きだな、おれは」
「ぶっ！！」
意外な言葉に思わず吹いてしまった。
蓮華はただでさえ赤い顔をより一層赤くさせた。
「きゅ、急に何を言うのよ！！　好きって…！」
「怒るなって、しょうがねえだろ？　お前のそんな顔見るの初めてだったんだからな」
「初めてって…そんなこと…」
そこまで言って自分で気付いた。
そういえばエースとはこんな風に話したことはなかった。
今までの理解しがたい恐怖感も消えている。
目の前には朗らかな笑顔の青年であり、とても裏切りをするとは思

えなくなっていた。
今までなんでそこまで警戒していたのかもバカらしくなった。

「ふふ…」
「どうした？」
「なんでもない」
「？？」

蓮華は小さく、しかし確かに笑った。
その理由をエースにははぐらかし、のどかな雰囲気のまま昼の模擬戦は幕を閉じた。

これでわだかまりが消えたとは言わない。
だけど、蓮華の心は小さく、しかし大きな一歩を踏み出したのだった。

## 生真面目王女さまの憂鬱（後書き）

今回で溜まっていたストックが底をついた……後一回だけ拠点をやったら本編に行きたいと思っています。

## 街の警備隊長（前書き）

今回は扉小説はお休みです。
代わりに一つ聞かせてください。
『もし貴方が女なら北郷一刀とエースの内、どっちと結婚しますか？』

すいませんあまりに暇なので聞いてみました。
皆さんからもこういった質問があれば書きこんでいってください
いいネタ埋めにできるので

それと、『和尚』さまの復活には胸が躍りました♪

## 街の警備隊長

「エース。調子はどうだ？」
「蓮華か。思春はどうした？」
「思春は今は水軍の訓練だ。エースも警邏ご苦労様」
「そんなに苦労はしてねえんだけどよ。ただ歩き回ってるだけだからな」

城の中でバッタリと居合わせた蓮華とエースは気楽に話している。

「それにしてもすごいな。自分の隊だけでなく他の部隊からもエースの呼び声が名高くなりつつあるぞ」
「そんな特別なことはしてねえんだけどな」
「そうだな。けど、お前のそういう所に市民も、兵も、私達も惹かれてるのだろうな」
「？？　前から思ってたけどなんのこと言ってんだ？」
「そこは自分で気付くところだ」
「う～ん……腑に落ちないけど、いっか」

短絡的な返しに蓮華は苦笑するが、もう慣れたのかすぐにまた他愛のない話に華を咲かせる。

最近ではエースの人柄に合わせて、エースのリーダー気質もあってか、市民からも兵からも人気が高い。
今や、エースの存在は呉の中でとてつもなく大きい物となり、『武神』『太陽神』などの称える声も高々と広まっていくのであった。

蓮華は以前の模擬戦でエースの人柄を垣間見て、前よりも親密に話すようになっている。

偶にこぼれる微笑みとくだけた言葉づかいも多くなっている。
蓮華は既に素の自分をエースに見せ始めていた。
しかし、蓮華には一人だけ心配な部下がいた。
「そういえばエース…聞いてもいい？」
少し神妙な雰囲気になった蓮華に疑問を持ちながらとりあえず聞いてみる。
「どうした？」
「えっと…亞莎のことなんだけど……」
「亞莎？　どうかしたのか？」
「ええ……その…エースは亞莎とも仲良くなりたいの？」
自分で余計なお世話と思いながら聞いてみると、エースは数秒も待たずに即答する。
「そりゃしてえさ。ただ、あんま会えないし、避けられてるからな～」
「そうか……本人も実はお前と和解したいと思っているんだ。だから……」
蓮華は少し挙動不審気味に聞いてみるも、エースは蓮華の心配をよそに笑って答える。
「分かってるさ」
「え？」
「亞莎の人見知りも知ってるしな。避けてることは気にしてねえよ」

「…」

「それに蓮華ともこうして話せるんだ。なんとかなんだろ」

随分と短絡的な言葉に蓮華も一瞬呆れるが、エースらしい答えに笑いも浮かぶが、それは苦笑いにとどまった。

「そのうち亞莎とも時間空くだろ。その時に考えるさ」

「そうしておけ」

互いに軽い挨拶を交わして別れる。

この後、エースの願いがすんなり叶うとは予想もしないままに…

「亞莎！　ちょっと付き合って！」

「…え？」

城の中ではちょっとしたハプニングが起きていた。

今日一日非番の亞莎は自室にこもって勉学に励もうとした時だった。

自室の扉が勢いよく開かれ、びっくりして用意しておいた墨汁をひっくり返しそうになるも反射でそれを防ぐ。

そして、亞莎の部屋に入ってきた正体は……

「えっと…どうかなされましたか？……小蓮さま…」

未来の孫呉の指導者、お転婆の言葉に相応しい小蓮だった。

落としかけた硯を整えながら状況を把握しきれていない亞莎に小蓮が畳み掛ける。

「亞莎は今日一日は非番なんでしょ？　それならシャオの護衛に付き合ってよ」

「は…はぁ…」

色々とツッコミたい所があるけど小蓮の命令ならば聞かない訳にはいかない。

「そ、それでは準備をしますからしばしお待ちください」

「うん！　できるだけ早くね～！」

そう言い残して小蓮は城門前に向かったのだろう。

満面の笑みを浮かべて驚異的なスピードで走り去って行った。

小蓮の行動力の高さを羨ましく思いながら亞莎は護衛の準備のために自室に戻った。

日に日に賑わっていく街、建業

商人の客寄せの声と子供達のはしゃぎ声などが飛び交う中、エースは闊歩していた。

「すげえな、本当に人が増えてくるなぁ」

一日ごとに人が増えているのが目に見えて分かる。
このままだと国から人が溢れるんじゃないかと思うほどだ。

「御遣いさま。とれたての桃はどうですか？」
「みつかいさま～！　また『さっかー』しようよ～！」

辺りから響いてくるエースへの声が賑わいに拍車をかける。

警邏の最中にエースが子供に自分の世界の遊びを教え、一緒に遊んでいるところを思春か蓮華に見つかって大目玉をくらうのも日常となりつつある。

流石に連続で自分の役目を投げ出すことに抵抗を感じ、またいつか遊ぶことを約束してその場を去る。

気を取り直して見回りしようとすると、何者かが自分に近付いてくるのを感じた。

「みーっつけた！」

「？　おっと」

気配の方向に体を向けると、その瞬間に腹部に軽い衝撃を感じた。

虚を突かれたこともあって一、二歩下がって踏み止まる。

直前に聞こえた声をもとに予想をたてながら腹にしがみついている小さい影を見下ろす。

「なーにしてるの。エース♪」

そこには嬉しそうに笑う小蓮がいた。

その可愛いらしい姿を見たエースは少し意外そうな表情に変えた。

「小蓮か。どうした？　こんなとこで」

「ちょっと息抜きで街に出てたらエースを見つけちゃった」

そう言いながら腕を絡ませて寄り添ってくる小蓮にエースはいつものような笑顔で聞いてみる。

「それよりいいのか？　この前も一人で街に出て蓮華とやり合ってたらしいけど」

エースの言う通り、小蓮は以前にも街にくり出たのがバレて蓮華と口論となった。

蓮華としては次期孫呉の姫に相応しい慎ましやかを身につけろと口を酸っぱくして言い聞かせているのだが、当の小蓮は耳にタコができたと言わんばかりに反抗するのでいつも喧嘩が絶えず、雪蓮を始めとした誰かが仲介して止めるのが日課だ。

「お姉ちゃんは頭堅すぎ！　乱世の今は体を動かしたほうがいいって言ってるのに！　エースもそう思うでしょ！？」

その時のことを思い出しながら憤慨し、エースに話をふってくる。

有無を言わせない勢いがあれど、エースはそれをものともせずに自分の考えを伝える。

「まあ、こまけーことはわかんねえんだけどよ、要は護衛さえいれば問題ないんじゃねえのか？」

「質問に答えてないんだけど…まあいいわ、そう思って護衛を連れてきたからモーマンタイよ！」

質問に質問で返されて怪訝な表情を見せるも一瞬、親指を立てて上機嫌に答える。

本日絶好調

「小蓮さま～！」
「あ、いた！」

後方から二人の声が聞こえてきた。
なにかと思って目を向けると、そこには見知った人物だった。

「え！？」
「あ、エースさん？」
「ん？」

エースの姿に驚きの声を上げた軍師見習いとブレザーのウサ耳女子高生がいた。

「亞莎と鈴仙…なんでこんなとこに？」

そう言ったところでなんとなく理解した。

さっきの亞莎の台詞だと、シャオを追いかけてきたのだろう。
だとしたら、と思ってシャオを見ると、舌をペロッと出して悪戯っぽく笑ってみせた。

エースも内心で納得し、付き合わされた亞莎達に苦笑する。

だが、それと同時に運がよかったと思った。
今さっき亞莎のことについて相談していたのだから。

「エ、エース…さま……」
「？　どうしたの？　亞莎」

急に固まってしまった亞莎に鈴仙は首を傾げる。

ちなみに、鈴仙と亞莎、明命は歳も近いこともあって互いに軽口で呼び合っている。

「よ！　結構久しぶりじゃねーか？」
「うん。そうだね」
「ほ、本日晴天で…！」

亞莎だけがカチンコチンになりながらなにか見当違いなことを口走っている。

「そそそれでは邪魔者はしちゅれいちま…！」
「待てい！　ここで逃げるな！」
「それと小蓮さまの護衛も！」
「あう！」

ジェット機のように逃げようとする亞莎を小蓮と鈴仙は翻った袖の一部を掴んで制止させる。
動きを止められた亞莎は変な声を出して止められていた。

「鈴仙！　抑えてて！」
「はい！」
「え！？　そんな！」

もがく亞莎を鈴仙に羽交い締めにさせ、何事も無かったかのようにエースと再度向き合って笑顔で尋ねる。

「ねえ。これからなにするんだったの？」
「おれがか？」
「そ。シャオ達は何するか決めてないからエースに着いて行こうと思ってるの」

「そうか…だったら…」

先ほどまでのシャオ達の行動に露ほども疑問を抱かないエースも流石だ。

少し首を捻った後でニカッと笑いながら提案する。

「じゃあ腹ごしらえすっか」

「シャオは麻婆豆腐！」

「じゃあ…青椒肉絲で」

「炒飯の野菜、肉、ご飯マシマシ！！」
「じゃあ…ラーメンで…」
「へい！」

時と場所が変わって、ここは街の隠れた名店にいた。
亞莎を落ち着かせた面々はエース行きつけの店に入った。

行きつけだけあって、エースのメニューにない要望にも応えてくれた。
エースの食い逃げ癖を見逃さずに、城に領収書を送る手際のよさも一級品だ。

（き……気まずい…）

そんな中で亞莎は居心地の悪さと葛藤していた。
現在、亞莎はよりによってエースの隣に座らせられている。

（どうしよう……今更仲良くなんてできるわけ…）

正直に言えば、今ではそれほど抵抗も恐怖もない。
親友の明命も認めており、同じ境遇だった蓮華でさえもエースと楽しげに話しているのを最近見るようになった。

もはや、エースの存在は呉にとって大きい物となっている。
実績、信用、人柄があったからこそ呉にエースの居場所ができたのだ。

それと相まって、普段から目にするエースを見て恐怖感はもはや無いに等しくなっていた。
あるとしたら、今までエースを無視してきてしまった罪悪感しかな

かった。

（早く終わらないかな……）

料理が来たら早めに食べてここから出よう。

小蓮さまには用事を思い出したと言っておけばいいだろう。

そう思っていた時、不意に声をかけられた。

「なあ、亞莎」

その声の主は問題のエースだった。

「え！？　あ、はい！」

意外な展開に亞莎の舌も満足に回らないまま返す。

なんでこんな時に話し掛けてきたのかと疑問に思っているのをよそにエースは続ける。

それはそれはいい笑顔で

「食う前に辛気臭いツラしてんだ？　もっと景気よくいこうぜ？」

「は、はぁ…」

すいません…とてもそんな気分には…

「それにな、お前と話す機会もできたし、願ったり叶ったりだと思ってるからよ」

「私と……ですか？」

「ああ、お前は人見知りが激しいって聞いたからさ、この際に少し

でもお前と親しくなりたくてな、はは…」

すいません…そういうことではないのですが…

亞莎はエースの少し検討外れな解答に内心で謝罪する。

ただ単に自分の我が儘に似た躊躇いが原因だということが原因で自分もエースさえも悩ませていることに対して…

「だからな、今日くらいは仲良くやろうぜ、な？」

「は、はぁ…」

悩んでいる、と自分で言ったエースの偽りのない笑顔に少し躊躇いがちに返す。

亞莎とて、エースとの仲をなんとかしたいと思っている。

しかし、最近までしてきた自分の行動の後ろめたさから中々素直になりきれずにいる。

「へいお待ち！」

亞莎の葛藤をよそに料理はエース達の卓上に並べられていく。

食欲をそそる香りが辺りに立ち込める。

「いっただきまーす！」

号令とともにエース達は料理を口に運ぶ。

亞莎もこれからどうするか、なんてことは置いといて、今は料理を堪能しようと気持ちを切り替えた。

「んでな、あそこの店も絶品なんだよなぁ」
「は、はぁ…」
「ていうか、警邏中にそんなことしてたんだね…」

少し時は経ち、エースは鈴仙、亞莎と共に警邏の続きをしていた。
ちなみにシャオは店を出た瞬間に蓮華に見つかり、

――――シャオ！　あなたまた穏の授業を抜け出したのね！！
――――やばっ！　それじゃあシャオはもう行くね！！　また一緒に

警邏しようね！！
――こらシャオ！　今日という今日は逃がさないわよ！
そのまま戦馬もびっくりの速度でどこかへ逃げてしまった。

「そういえば亞莎、お前って目ぇ悪いのか？」
「は、はい…ってなんで知ってるんですか？」
「明命や鈴仙から聞いた」
「今さっき教えちゃった」
「あぅ～…」

亞莎の恥じらう姿はとても愛くるしいものがあり、通り過ぎる人も愛おしそうにチラチラ見てくる。
そんなのも気にせずにエースは一つの約束を取り付ける。

「よし！　じゃあ今度買ってやるよ」

突然の申し出にエース以外の面子は目を丸くする。

「ええ！？　エースさまが私にですか！？」
「うん」
「いえいえいえ…！　そんな恐れ多いこと…！」
「だけどなぁ…お前辛そうだからさ、目もこーんな鋭くなっちまってよ」
「うぅ～…」

そう言ってエースは亞莎の真似をすると、本人の顔が更に紅くなっていく。
そんな亞莎を見てからかい過ぎたと思ったエースは亞莎の顔を覗き

込んで笑いかける。

「悪い。ちっとやり過ぎた」

「…からかってたんですか……む～……」

頬を膨らませてツンとそっぽ向く亞莎を見て、また笑ってしまう。

それを見ていた鈴仙もこれには呆れる。

「エースさん…これ以上笑ったら亞莎も怒るよ？」

「む～…」

鈴仙の言葉に肯定するように亞莎は更に頬を膨らませる。

「違う違う、なんだか亞莎の雰囲気も表情もさっきより柔らかくなったなって思ってな」

「え？」

意外な返答に亞莎はキョトンとなる。

エースは腕を頭の後ろに組んで意気揚々に答える。

「なんかよぉ、今のむくれたツラのほうが素のお前だと思ってな」

「そ…そうですか…？」

自分の顔を押さえてマッサージみたいに揉みながらほぐす。

すると、エースは何かに気付いて亞莎に声をかけようとするが…

「はわ！？」

「すみません！」

亞莎の後ろから市民と思われる中年男性がぶつかってきた。

中年男性が謝るのによろめきながら返そうとするが、そんな暇もなく消えた。

いや、消えたのではなく正確には…

「えええええぇぇ～～！？」

「なんで！？」

亞莎と鈴仙が急に押し寄せてきた人の波に驚愕する。

その間にも二人を飲み込まんと人の大行進が迫ってくる。

「こっちだ」

そんな時エースは二人に呼び掛け、二人の手を引いて二人を自分の元に引き寄せた。

「わふ！」

「わ！」

短い声と共に二人はエースの体に密着する形となった。

それと同時に二人の顔が真っ赤に熱くなるのが自分でも分かる。

それもそのはず、二人はエースと体を密着しているのだから。

「あ…ぅ…」

「え……と……」

「ん？　あぁ、この市場はなこの時間に急に人が溢れんだよ」

エースは二人の反応を勘違いし、勝手に話を進めていく。

「多分、この時が商人の出入りも最高潮だろう。商人が必死に物を売り、人がその内に物を買う…物流なんてそう頻繁にされるもんじゃねえから躍起になってんのさ」

「なるほど……まだ交通の弁も不十分なんですね……」

「あぁ……夜よりも昼の方が危険も少ないからな、夜の追い剥ぎやコソ泥を恐れて夜にはこの喧騒もウソみたいに退いていく……まだこいつ等は街の中でも何かあるんじゃないかって恐れてるのさ」

二人のエースを見上げる目が変わった。

真顔で的を射た答えを導き出したエースの意外な面が露わになったからだ。

「すごいです……この街の問題点、民の不安をここまで的確に……」

「おいおい買い被るなって。おれはこいつ等から話聞いたり、後は経験則から判断したのさ」

「経験？」

鈴仙の言葉にエースは短くあぁ、と言って続けた。

「支配される側の理不尽さなんて……上の奴等は知らねえからな……」

「「……」」

何も言えなかった。

あまりに的確な答えだった。

人は皆が平等

そんなのは幻想

上層階級と下層階級はそれぞれ光と影、陽と陰、互いに対の関係にあたる。

水と油が混ざらないように、これら二つが分かり合うことは無い。

自分以外に起こったことは全て他人事

それが人というものだ

そう思っていた。

「そっか…」

「？」

「だからエースさまは……」

亞莎はここで気付いた。

なぜエースが皆の心を惹きつけるのか。

自分を縛る鎖を拒み、自由を奪うことを良しとはしない。

エースの天衣無縫とも言える普段の言動もそれに起因する。

ルールを認めず、壊し、跡形も無く燃やし尽くす

そんなエースだからこそ雪蓮たちと向き合い、分かり合おうとしている。
たとえ、それが無理であるとしても……

重圧に縛られずに自由を奪われる上層階級
そんな彼女達だからこそエースを心のどこかで羨ましく思っているのだろう。

陽と陰

立場は違えど、彼等は同じ人間なのだから……

階級なんて自由を奪う壁を壊せるのもひょっとしたら……

「あの……エースさま……」
「ん？　どうした？」
「……また今夜お話……していいですか？」

亞莎からの意外な提案に面を喰らってしまったが、エースは当然の反応を見せた。

「あぁ。おれもお前のことを知りてえ」

満面の笑みで答えた。

その答えに亞莎は恥ずかしそうながらも嬉しそうに頷き、鈴仙はその光景を複雑そうに眺めるだけだった。

心を包みこみ、温めてくれる太陽の可能性に惹かれ始めた乙女達。
彼女達が抱いた太陽への想いはどのように変わっていくのか。
一度受け入れた想いは胸からは消えない。
武人と乙女

戦士達の心はこの二つの間に激しく揺れ動く

物語はまだまだ続く。

## エース驚愕、恐れていた事態（前書き）

『亞莎との休日』

エース「ほら、この眼鏡はどうだ？」
亞莎「あ、はい。では……」
エース「どうだ？」
亞莎「……」
エース「どうした？　顔赤いぞ？」
亞莎「え、いえ！　その……エースさまの顔がよく見えてしまって……その……」
エース「？　とにかくその眼鏡がよく見えるんだな？」
亞莎「……（コク）」
エース「顔がどんどん赤くなっていくなぁ……」

## エース驚愕、恐れていた事態

「そうか、貴重な意見に感謝する」
「なに言ってんだよ。そんなこと今更じゃねえか」
「ふふ。そう言ってもらえれば助かる」

冥琳とエースが二人で笑いながら話し合っている。
内容はこの前の休みに亞莎に何気なく言ってみた感想だった。

亞莎との仲が前と比べて改善されたことは誰の目から見ても明らかだった。

びくびくしていた彼女が嬉々としてエースの話をしていたのは流石の冥琳も驚愕を隠せなかった。

それと同時に感心もした。
瞬く間に相手を自分の味方にする天性のカリスマ性を持つ人物は雪蓮以外に見たことがない。

エースにも王としての才が眠っているのか。
しかし、本人は悠々自適を望んでいる。益々もって雪蓮にそっくりだ。

私とて軍師だ。亞莎ほどではないが、エースに警戒してなかったと言えば嘘になる。

しかし、私も奴と触れ合うにつれ、変わっていたようだ…

まったくもってやりづらい…

王は一人で充分だというのに…

「どうした？」

「なに……お前が敵でなくてよかったと思っていたところだ」

「？　変な奴だな」

「軍師だからな。普通じゃいられないのだよ」

「そっか。じゃあ仕方ねえな」

「ああ」

互いに笑い合った後、私は一つだけ思い出した。

「そうだ。一つ頼まれてくれないか？」

「なんだ？」

「朝から雪蓮の姿が見えないのだ。探してもらえんか？」

冥琳の問いにエースが腕を組んで考える。

「ん～……街の酒屋とかにいるんじゃないのか？」

「街は既に探索済みだ。後は山辺りだろう」

「…んな心配しなくてもいいんじゃねえのか？」

「そうはいかん。奴はああ見えても王族だ。そうそう簡単に出歩かれても困るし威信に関わる」

「雪蓮も遊びてえんだろうよ」

「あと、それだけでは無いのだがな…」

「？　なんか不安があんのか？」

王族ってのはメンドくさい……なんて考えていたエースが冥琳の続きにエースは続きを催促する。

「最近、曹操の情報が入ってこない……袁紹との勢力争いは未だに終わってないとは思うが、万が一のこともある。早急に雪蓮の護衛に付いてくれ」
「曹操……ね……」
そう言われて曹操のことを思い出してみる。
かつての愛弟子の凪、真桜、沙和が付いて行った嬢ちゃん……
体に似合わない尋常でない覇気、澄んだ瞳、心構え、どれをとっても見事の一言。
そんな人物が汚いことをするだろうか？
そう考えはしたが、口には出さずに胸の内にしまっておいた。
「そういうことなら了解だ。心配なことは片っ端から片づけねえとな」
力こぶ作って笑うエースに頼もしさを覚えた冥琳はフッと笑って頷く。
「期待しているぞ。この国はもはや雪蓮やお前無しでは有り得ないのだからな」
「嬉しいねぇ。それなら早速行ってくる」
「ああ」
意気揚々と窓から外へと出るエースを見送る。
ここは二階なのだがな……

こっちももう少し将としての礼儀をわきまえてほしいものだ……

「礼儀よいエースと雪蓮か……」

自分で思って違和感を覚えた。

机に向かって書簡に判子する雪蓮とエースを想像してみる。

「……ぷ…」

あまりの違和感に吹いてしまった……やはりあの二人に礼儀云々は逆に気味が悪くて滑稽だな。

「私としたことが、そんなこと現実的ではないな…」

自分に言い聞かせるように呟きながら、机に積み上げられた今日の分の仕事に目を向け、筆を握る。

……やっぱり気味が悪くてもいいから奇跡くらい起きてはくれないものか

中庭に着地したエースは周りを見渡す。
まずは情報収集して雪蓮の場所に見当をつけようとしていた時だった。

「なにしている？」
「おぉ、思春か。ちょうどよかった。聞きたいことが一つ」

背後から急に現れた思春に驚きもせずに人差し指を立てて聞く。

「聞きたいこと？」
「ああ、今朝雪蓮を見たか？　冥琳からの頼みでちょいと護衛を…てな…」
「雪蓮さまをか？……いや、私は見てはいない」
「そうか……やっぱシラミ潰しで探すしかないか……」

エースがブツブツ言っていると、思春は諦めたように溜息を吐く。

「お前と一手交えようと思っていたが……今日は無理のようだな」
「そうか？　そりゃ悪いな」
「構わん。それよりもこんなところで油売ってないで早く迎えに行ってさしあげろ」

「わーったよ」

そう言ってまたエースは城門へと向かうのであった。

「あぁぁああん……ん……はぁ……」

エースはとても奇妙な物を見ていた。
それも街中で

「はぁ…はぁ……ん……くぅ……！」

城の中で見知った顔が街中の道の真ん中で卑猥な声を出し、恍惚な表情で倒れている。

「なにしてんだ？　穏」

「ん……はぁぁ……エー……ス…さぁん……」

涎を垂らす穏に若干ヒきながらも最優先事項を聞いてみる。

「お前、今朝から雪蓮を見たか？」
「しぇ……れんさま……ですか……？……んんっ！！」
「あ、あぁ……どっかに行かなかったか？」
「はいぃ……あの……道を……まっすぐに……あぁ！！」
「あそこか……」

あの東の道となると……あの山しかないか。

「サンキュ。でもその前にとりあえずお前をどっかに運んでやる」
「だ……大丈夫ですよ……これは……ただ本を読んで……」
「そうか……じゃあ早めに帰れよ。んじゃ」
『『『おいぃぃぃ！！　これ置いてくな！！』』』

爽やかに手を振って穏が指した道を行くエースに周りの住人から盛大な駄目だしを喰らう。
ところがドッコイ、エースはそんなことも気にせずにそのまま雪蓮の元へと向かうのであった。

「華琳さま。最後の砦の兵の捕縛、完了致しました」
「御苦労。あとは揚州に進行し、孫策と対峙するだけ……」

同じ頃、建業から遠く離れた地点では青い鎧の部隊が行軍している。
その軍を率いるは魏王・曹孟徳

彼女の両脇には懐刀である夏侯姉妹の姿があった。

彼女達の目的は揚州の占拠
今の時を駆け抜ける孫策の名は大陸に広がる一方
放っておけば後の禍根になるのは必須

ならば袁術を撃退し、内政に躍起になっている内に叩こうと言う魂胆だ。

益州を治める劉備はその後からでも遅くはない。

「各自、他にも偵察兵がいないか警戒を怠るのを忘れずに前進！！」

夏侯惇の気合いの入りように曹操は横目で笑みを浮かべる。

「凪達と霞の様子はどう？」

「四人とも気合いが入っております。いつも以上の力を発揮してくれるでしょう」

「そう、それでこそ華があるというものよ」

なぜ孫策が先なのか……それは呉にいる二人の英雄との決戦を望んだからだ。

虎牢関で退却したあと、一時期は姿を眩ませていた天の御遣いが呉の将として報告された。

それ以来、『呉に麒麟児と武神あり』と囁かれている。

魏にとっては強敵以外の何者でもない。

しかし、それらと相対してこそ我が覇道は完遂する。

障害なき覇道になんの価値があろうか？

私はこれから起こる聖戦に胸を躍らせる。

「兵共よ……この曹の旗の下で舞おうではないか」

待ってなさい……私は麒麟を倒し、太陽を下してみせる……

だが、私…私達は失念していた……

先程の稟と桂花の報告に出てきた……

『許貢の残党』にもっと注意を向けるべきだった……

「結構奥まで来ちまったかな～？」

エースにとって初めて来る山道を進んでいたが、進めど進めど人気の無い道が続くばかり。

流石に引き返そうかと思ったこともあったが、穏の話から推測するとこの山道しか有り得ない。

「少しのんびりし過ぎたかな…」

エースは少しの焦燥に駆られて早歩きになる。

そうしてしばらく歩いていると小川が流れる音が耳に入る。

「母様、報告が遅れたわね」

それと共に聞いたことのある声が聞こえてきた。

その声に気付くと、草影からこっそりと顔を出して様子を窺うと無骨な形の石を磨く雪蓮を見つけた。

「母様の土地は袁術から取り戻したわ……遅すぎるなんて小言は大目に見てね」

あの様子から言ってあの石は墓標…雪蓮のお袋のか……

苦笑する雪蓮を見てエースはしばらくの静観を決めた。

「あなたが無茶苦茶したおかげで、私達は大変だったんだから」

普段から滅多に見せない穏やかな微笑みを見ていたかったかもしれない……

それに……

「でも、私達はこれから……歩みを進めるの……」

親子の触れ合いを邪魔するなんて無粋な真似はしない……

姿は見えずとも、魂魄は……絆は確かにそこにある……

雪蓮への、先代から語り継がれる愛情がそこにはあった。

「…羨ましいよ……」

エースは木にもたれ、目を瞑りながら微笑み、人知れずに雪蓮を見守る。

しばらくすると、墓標を磨き終えた雪蓮ははにかんで姿なき母に報告を続ける。

「これから、私達は戦いに身を投げる…それもこれほどにないくらいの大戦に……でもね……私達には希望があるの…」

雪蓮が立ち上がる。

「最近ね、天の御遣いって呼ばれる子が私達の仲間になってくれて……すごいのよ？　武は祭でさえ凌ぐんだから」

少し威張りながら続ける。

「最初はね、ちょっと不安だったんだけど、触れ合ってみるとこれまた面白くて優しい子なの……御遣いなんて言われてたから意外っちゃあ意外だったわ。店では食い逃げして冥琳は怒られるわ、軍議中に寝て思春と蓮華に怒られるわ、もー大変」

楽しそうにケラケラ笑いながら続けていたが、すぐにまた穏やかな表情に戻る。

「でも、エースと一緒にいると思うの。この人と一緒に歩きたいって……少し抜けてるところはあるけど凄く頼もしいから……」

それを聞いているエースは少し意外そうに目を見開く。

「だから誓うわ……私は冥琳を、妹達を、私に付いて来てくれる人を護る……その人達が笑顔で生活できるような世を作るから……」

そうして雪蓮は手を合わせて黙祷する。

「初めまして。少し抜けている私の名はエースと申します」

「え？」

雪蓮が急に聞こえてきた意外な声に気付き、声の元を辿ると、そこには花を二、三本墓標に供えるエースがいた。

「エース……あなた……」

「お前のお袋なんだろ？　それなら挨拶するのが筋ってもんだろ？」

驚く雪蓮を尻目にエースは墓標に向かって言葉を紡ぐ。

「お袋さん……確かにおれは抜けてるかもしんねえし、学もねえ…おれのできることは限られてる……だけど…」

エースは握り拳を作って天に掲げ、太陽に重ねる。

「あんたの娘も……部下達も…兵も皆おれが守る……必ず…！」

「エース……」

「……なんてな」

エースの満面の笑みを見て雪蓮は胸に安心感を感じ、再び墓標に向き直る。

「今から孫家の悲願が始まるわ。見守っていてね。この地に住む全ての人が泣き、笑い、ずっと平和で暮らせる国を、私達は作ってみせるわ…だから、もう少しだけ待っていて。その時は、私達姉妹や仲間達皆で笑顔で報告にくるわ。そうしたらここで酒盛りでもさせてもらうわ」

そう言って目を閉じる。

雪蓮はこの時、何を思ったのか……

再び優しい表情に戻って続けた。

「それじゃ母様……天国から見ていて……あなたの娘の戦いぶりを…そして呉の輝かしい未来を…」

その時だった。

殺す…

「！！」

エースは感じ取った。

自分達の周りに群がる“声”と…

雪蓮に迫る“凶刃”を……

ガサガサ……

草音と共に一本の矢が雪蓮へと迫ってくる。

だが、雪蓮は動くどころか気付いてさえもいない。

このままでは当たる。

しかし、炎上網も火銃も間に合いそうにない。

それなら……

「雪蓮！！」

「え？　きゃあ！！」

おれは雪蓮を突き飛ばす。

しかし、咄嗟のことでおれは失念していた。

矢が当たる“場所”を予想した時、おれは思った。

下手を打った……と。

「いたた……なにするのよ…エー……ス？」

私は急に付き飛ばしたエースに恨み事をつこうとしていた。

だけど、そこから言葉が出て来なかった。

なぜなら……

「……なに……それ？」

エースの頭に一本の矢が貫通していたから……

信じられないものを見た私はしばらく思考を停止していたが、血の気が下がるのを感じると、今の状況を悟った。

「エース……エースぅ！！」

私はすぐに倒れるエースを抱きとめると、矢が飛んできただろう方向を睨んで南海覇王を取り出す。

「貴様等ぁ！！」

「ひぃ！！」

私の一喝で何人かの賊が逃げるのを確認する。

その中の一人だけ脅えながら私に弓を構えている。

上等だ！！　望み通り殺してやる！！

かつてない怒りに身を焦がし、力任せに南海覇王を振るおうとする。

しかし……

「火銃!!」

後ろから何かが通り過ぎ、それが刺客に当たる。

「ぎゃあ!!」

刺客は体を焦がしながら地に倒れる。

「!!」

それよりも今のってまさか…!!

私は後ろを振り返ると、そこにはエースが立っていた。

額が矢で貫かれた状態で……

「あなた……エース……なの?」

そう聞かずにはいられなかった。

素人目から見ても普通なら即死のはず。

しかし、私の意を解さないエースは何事も無く無造作に額から矢を抜いて投げ捨てる。

本来あるはずの傷口からは炎が噴き出し、治まると傷も何も無かった。

なんだこれは？
こんなことがあるのだろうか？
“死”を免れることのない傷が消えた。
いわば“不死”

しばらく混乱していると、突然、エースは膝を付いてうなだれた。

「エース！！」

私は考えるのを止めてエースに走り寄る。

まさか本当に怪我を！？

「大丈夫！？　しっかりして！！　エース！！」

頭を矢で射抜かれて無事なはずがない！！
かといってエースに目で見られる傷が付いてるとは思わなかった。

エースの体は無事だった

致命傷だったのは彼の“心”の方だったのだ……

（バレた……おれの秘密が……！！）

あのまま倒れたフリをすれば後で事実をうやむやにして誤魔化すことができた。

だけど、雪蓮に危険が迫ってるのを知ったおれはすぐに敵を射抜いた。

雪蓮があんなのに負けないと分かっていたはずなのに…！！

どんなことでも仲間を危険に晒す奴が許せずに攻撃した。

（くそっ！　なんて短絡なっ…！）

これだけは知られたくなかったのに……！！

（バレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレたバレた……！！）

エースがかつてない絶望感に打ちひしがれていた時だった。

「姉さま！！　城で緊急事態が……！」

急に蓮華と思春が草むらから出てきた。

「蓮華か！！　エースが…！！」

「なに……どうしたのエース！！」

雪蓮の挙動とうなだれるエースから尋常ではない事態を悟った蓮華はエースに走り寄る。

しかし、エースは手を顔に当てて錯乱しているようだった。

今まで見たこともないエースの様子に蓮華どころか思春までもが息を飲んだ。

「思春！！　そこに暗殺者が！！　とどめを…！」

「！！　御意！！」

雪蓮の指先の方向に倒れる人影を見つけると、素早く鈴音を取り出す。

「下衆が…」

ぶしゅ

怒りの籠った声と共に斬首する。

「エース！！　私が分かる！？　蓮華よ！！」

肩を揺さぶって問い詰めるが、エースは変わらずに荒い呼吸を繰り返すだけだった。

「蓮華。それより緊急事態というのは？」

「は、はい……曹操が国境を越えて我が国に侵入。既に本城の近くにまで迫っているようです」

「なに！？　伝令と見張りはどうした！？」

「悉くが補殺されました……一人の勇敢な伝令が命を賭して……」

「そう……その親族には報いてやらねば……」

だんだんと落ち付いてきた。

だが、怒りは増すばかり……

「雪蓮さま……こ奴は魏の鎧を纏っております」

「そう……」

そう言ってその亡骸が持っていただろう矢を見てみると、先端ににやら粉が付着していた。

「毒……ですね……」

思春もそう思うのだろう。

どう考えても毒にしか思えない物が全ての矢に付いていた。

「蓮華……エースを連れて行くの手伝って……」

「は…はい！」

「思春はそこの“屑”を持ってきて。それは動かぬ証拠よ」

「御意」

思春が魏兵を引きずるのを確認すると、私は蓮華と一緒にエースを肩で担ぐ。

今は真実を言うべきではない。

私でも確信を持って言える内容ではないのだから……

だけど…そんなことはどうでもいい…一つだけ言えることがある。

「ねぇ…エースぅ……しっかりして……」

泣きそうな蓮華の呼びかけにもエースは生気さえも見せない。

これが、さっきまでまばゆい笑顔を見せていた人間と同一人物なのだろうか……

胸に黒い“何か”が渦巻き、溢れる。

この感情は己を壊し、破滅へと向かわせるものだろう……

だけど、今の私にとっては心地いいものだ……

我慢？　忍耐？　知ったことか

私は許しはしない

彼から、私達から太陽のような笑顔を奪った蛮族を……許すつもりはない。

憎悪、怨恨、呪怨、怨嗟、殺意、怨思

今の私にはとても心地が良い……

「どうやら私はあなたを買い被っていたようね……」

もう貴様等の運命は決した。

地獄さえも生ぬるい地獄を見せてあげるわ……

「どうしてくれようかしらねぇ……曹操……」

## エース驚愕、恐れていた事態（後書き）

遂に本編に戻り、テンションが上がっています。

次回もよろしくお願いします！！

## 憎しみの戦、動き出した運命の歯車（前書き）

今回の雪蓮とエースのキャラが崩壊します。

お許しください。

## 憎しみの戦、動き出した運命の歯車

刺客に暗殺されかけ、エースに助けられた雪蓮は無事だった。

しかし、エースは心に大きなダメージを負い、雪蓮と蓮華に抱えられている。

やがて本城の城門前に到着すると、そこには神妙な面持ちの冥琳がいた。

「雪蓮！　今までどこに…！」

そこから言葉が出なかった。

雪蓮と蓮華さまがエースを担ぐ形で姿を現したのだから。

その後に思春も現れ、無造作に手に掴んでいる物を見て合点がいった。

危惧していたことが現実となったか…

思春の持ってきた矢の先の付着物を見てある程度は理解できた。

「エースは運んでおくから、準備お願い」

王自ら臣下を病室に運ぶことはあまり感心しない。

しかし、それを咎める気はなかったし、できなかった。

あれほど感情を剥き出しにした雪蓮はいつぶりだろう…
もう、私が止めても無駄だろう。

いや、もう止める必要はない。

私達の怒りの代弁者は既に戦場に立っている。
だからこそ、私は冷静でいられるのだ。

その分、今日の雪蓮は手が付けられないだろう…

今日だけは存分に蹂躙するがいい。

手綱は任せておけ……

「……」

医務室に着いたか……

おれは今まで何も考えられていなかった。

情けねえ……少し落ち着いて自分の醜態に嫌気がさす。

「エース…」

そんなおれをベッドに寝かせてくれる雪蓮の表情は意外と穏やかだった。

「……」

「……」

「……怖いの？」

「！！」

どうやら今のおれはとことん腐ってるらしい。

こうまで心を読まれちまうくらいに…

（当然か……）

おれは…この世界でたくさんの物を貰った。

それはおれがどうしても欲しかった物だった。

だけど、今まさにそれが崩れようとしている。

人は失うのを恐れるから戦うのだ。

誇り、名誉、富など人それぞれに守るものがある。

だけど、その対象が消えようとしている…

「……私はもう行く……今はこの地を奪われたくないから…」

「……」

「…またここに帰ってきたら…」

雪蓮は憂いを帯びた眼差しを向ける。

「また……笑ってくれるわよね…？」

そう言って雪蓮は医務室から出て行った……

「くそっ！！」

誰もいなくなった空間の中でエースの激情が響く。

（くそっ！……おれは…おれは…！）

エースは自分を許せなかった。

己の保身のために、この戦いから逃げた自分を……こうも簡単に心を折られるほど弱くなった自分を……

先ほど雪蓮が見せた顔を思い出す。

あの、哀しくも安心したような表情を…

（止めろ！　そんな優しさを受けていい奴じゃねえんだよ！　おれは…！）

おれはあいつ等とは…違う…

（くそ！　ここまで孤独を恐れるのか！？　今のおれは…！）

エースは葛藤していた。

この過ぎたる力が自分から大事な物を奪っていくのかと…

エースは誰もいないその部屋の中で…

自分の中に眠る『悪魔』の力を恨んだ。

虫の居所が悪い…

エースと話せばこの心も軽くなると思ってた。

だが、逆効果だった。

あんな辛そうな表情を見て、より一層どす黒い感情が増した。

皆には既にエースのことを話した。

エースの傷については伏せ、毒の矢が掠った程度だと事実は隠蔽しといた。

すると、皆は驚愕、そして憤怒のそれへと変える。

それもそのはず、未遂であろうとも王を暗殺しようとしただけに飽き足らず私達の大事な仲間を毒に侵させたなどと言われて我慢できるような部下じゃない。

例外もいて、鈴仙はエースが死んでしまうのではないかと泣き、風は目に見えて動揺してしまったのだが…

「鈴仙、風も聞いて。エースがこんなところで死ぬと思う？　あな

たたちがこの中で近い場所でエースの勇姿を見てきたはずよね？
それなら信じてあげなさい。それがあなた達のできることでもあり、
その気持ちがエースの力になるから……」

妹を慰めるような優しい声で二人の頭を撫でながら言うと、二人は
こみ上げる感情を唇を噛んで抑える。

それを見た雪蓮は改めて二人の人間としての強さを知り、二人が呉
に来てくれてよかったと心から思った。

そして、その報せは兵の間にも駆け巡り、驚くべき現象が起きた。

兵達の雄叫びで大地が揺れた。
比喩でもなんでもなく、実際に大地が揺れた。

人を支える大地を揺らすほどの猛りが呉を包んだ時、流石の祭まで
もが驚いた。

「皆の心がここまで合わさるなど……呉の建国以来見たことが無い
……」

その呟きには少しの驚きと、同じ悔しさを共有できた心強さがあっ
た。

「エース……貴様は我等だけでなく、民も…兵でさえも誑かすのか
……」
「……これもあの方の強さなんですね……」

思春と明命も改めてエースの存在の大きさを体感した。
武と心の強さの他にも、皆から慕われる“何か”がエースにはある。

今まで呉に仕えるだけが人生だと考えていた二人の心に土足で踏み入って好き勝手に乱していった変わり者。
そのせいで、普段の日常にもいつもより張り合いというものを見出していた。

なぜだか、エースの行動を不快に思うことがなかった。

彼はうそをつけない。
何事にも全力で挑み、イキイキする姿は使命に生きてきた彼女達にとって眩しく、尊いものだったのだろう……

だからこそ、皆は彼に憧れるのだ…

「皆……聞いてくれ」

それぞれの想いにふけっていた頃、冥琳は感情を見せない軍師の姿で皆に作戦を指示する。

あらかた作戦を報告した後で、皆の顔を眺めるが、納得できないといった表情もあった。

だが、納得してもらう。
もし、ここで感情に流されれば呉はこの戦国時代から退場するしかなくなる。

そうなれば、体を張ったエースは浮かばれるだろうか？

否、そんなこと有り得ない。

そんなことになれば、エースは私達を許しはしないだろう。
皆もそれに気付いてるから非を唱えないのだ。
だけど……
「雪蓮、兵の指揮を上げてはくれないか？」
「……そうね、あそこに丁度いい“カモ”もいるしね……」
雪蓮はこれから戦場になるであろう場所に佇む一つの影を見据えて静かに応える。
「思春。“あれ”を持ってきて」
「御意」
雪蓮の一言で思春はその場から離れて、すぐに“それ”を引きずって現れた。
「それじゃあ行ってくる」
普段なら底冷えするくらいの無機質な声も今の私達にとっては頼もしく聞こえる。
雪蓮は戦場に躍り出た。

「遅い……ですね……」
「えぇ……兵の展開が遅い……いくらなんでも遅すぎるわね……」
桂花の疑問に思うのも無理はない。
英雄と謳われている孫策の旗が上がらない。
「何かあったのでしょうか？」
「そうかもしれん。孫策がここまで愚かだとは考えられんからな」
一度だけ対峙した春蘭だからこそ堂々と言えるのね……天も無粋なことしてくれるわ……
だが、もしそうだとしてもそれが天意であるのなら我等が手加減などする必要無し。
良い戦いを望んでいるのよ、私は
と、そこに新たな報告が

「前方に単騎で前にでてくる敵あり。あれは……」
「ふふ……やっとお出ましね…」
見間違えるはずもない。
あれは孫策
何やら麻袋を引きずっているが、この状況で前に出るということは舌鋒か……
「どうします？　華琳さま」
「愚問ね。王が自ら出向いたのよ？　それなら私自ら出るのが礼」
私は武器を下ろしてすぐに孫策の元へと歩み寄る。
（ふふ……最高ね。今の気分は……）
そう思っていると、いつのまにか孫策のすぐ近くにまで来ていた。
そこで孫策の顔を見ると、意外なことに孫策は笑っていた。
それも、凄く穏やかそうにニコニコと……
だが、ここで何か違和感があるように思えた。
（？……聖戦に心が躍っている……ようには見えない……）
私はここで初めて嫌な予感に心が反応したのか、冷や汗を流してしまった。

だが、それも思い違いだと決めて舌戦を仕掛けてみる。
そうすれば孫策もなんらかの反応を見せるだろう。

「ふふ……待っていたわよ。江東の麒麟児・孫策」
「……」
「この戦にはこの大陸の未来がかかっている……悪いけどここは頂くわ」
「ふーん……そう」

なんだ？　この反応は……侵略に怒りを見せるのでもなければ聖戦に胸を躍らせている訳でもない。
あまりに素っ気ない反応で心の内も読めない……

「……随分とやる気がなさそうね……それは余裕かしら？」
「……」
「……まあなんにしてもここからは正々堂々の聖戦よ。その態度も改めさせてもらうわね」

さあ、ここまで挑発されて黙っている訳にはいかなくなったわよ？
どう出る？

「んー……それじゃあ一つ言わせてくれないかしら？」
「ええ、いいわよ？」

「どの口が言ってんだぁ？　卑怯者の分際でぇ…」
「ひきょ…！？」

急に変わった孫策の雰囲気に言葉が出なかった。
確かに雰囲気が変わることは予想していた。

だけど、そこには侮蔑、軽蔑しか見受けられない。

私を汚いものを見る様な目で見ていた。

驚愕で何もできない私に孫策はまたうわべだけの笑顔に戻って麻袋を漁り始める。

そして、その中から現れた物は私に追い討ちをかけた。

「なっ!!　それは…!!」

「これは何かな〜？　曹操ちゃぁん」

それは魏の鎧を纏った亡骸だった。

鎧はもちろん矢、剣のどれを見ても我が軍の所有物、我が兵だった。

孫策はニコニコしながら“それ”を私の前に放り投げて追究してくる。

「そいつが何したか、知らないなんて言わせないわよ？」

「こ、こんなこと私はしらな…!!」

知らない、そう言おうとした時だった。

「そいつねぇ、私を暗殺にきたのよぉ？」

「な……!!」

なんだと!?

どういうことだ!?

私はそんなこと知らない!!

だれがそんな命令を出した!!!!

ここまでくると、何も言えなくなり、孫策もそんな私に露骨な怒りを表した。

「正々堂々……？　聖戦……？……どの口が言ってるのかしら

……ねぇ？」
「ちが……こんなの……」
「どの口がそれを言うのか聞いてる！！！！　答えろ！！」
「！！」
急に声を荒げる孫策にもう弁明の言葉も見つけられない。
それは私でも知らなかったのだから……
遂には黙ってしまった私に孫策は背を向け、振り向かずに宣言した。
「……もう楽に死ねる……なんて考えないでね……精々苦しんでから消えされ！！　この屑がっ！！」
後半の言葉は耳に入らなかった。
聞こえなかった。
私が呆然としていたのも束の間、後方から誰かが走ってきた。
「大将ーーー！！」
「華琳さまーーー！！」
「なんだ！！」
伝令に来た真桜と沙和に溢れる怒りをぶつけるが、二人はそれに臆する、というよりそれどころでないと言った感じで報告を続ける。
「今すぐ凪と姉さんを止めてほしいんや！！」
「春蘭さまでも秋蘭さまでも手に負えないの～！！」
くっ！！　どうして次から次へと！！

そう思いながら私は二人と共に駆け足で本陣へと戻ると……

「止めろ霞!!　少し落ち着け!!」
「凪も今すぐ拳を収めろ!!」
「黙れぇ!!　そこの阿呆を八つ裂きにしたる!!」
「離してください!!　秋蘭さま!!」

春蘭と秋蘭に羽交い締めにされる霞と凪が鬼の形相で一人の兵を殺そうとしている。

「なにをしている!!　止めぬか!!」

私の声に気付いてその場の全員の視線が集まる。
凪は落ち着き、霞も少しは静かになったが、未だに怒りを治めようとはしない。

「これはどういうことだ!!　説明してもらおう!!」

誰にでも聞こえるようにさけぶと、霞は声を低くして告げた。

「……こいつがふざけた真似したんやで？　それを黙って見過ごせゆうんかい？」

見ると、何人かの兵士が霞と凪に怯えている。

何があったのかと聞こうとしたとき、凪が口を開いた。

「そいつが、こいつ等が毒矢でエースさんを狙撃したのです!!」
「なんだと!?」

なんてことを…！！

それでは私達は孫策だけでなく火拳のエースにまでも手にかけたというのか！？

なんということを！！

私は聖戦を汚した輩に向き直って感情のままに叫ぶ。

「この者共の首を刎ねよ！！」

「え！？」

「この聖戦を汚した愚人の首を刎ねよと……そう言った！！」

「ぎょ、御意！！」

愚人共の命乞いなど無視して稟に呉へ弔問の使者を送るように指示する。

「ここは退くぞ！！　各自、敵を倒そうなどとは思うな！！　この戦を無事に収拾することだけを考えよ！！」

「しかしこんな状況で退却などしたら被害が……」

「ならば戦えというのか！？　卑怯者呼ばわりされたまま戦えと…！！」

「それは……」

やがて、春蘭と秋蘭も私の意を汲み取ってか、退却の準備、殿を申し出た。

「なぜだ……だれがこんなこと望んだというのだ……」

曹操の嘆きは怒りと悲しみの入り乱れる戦場の中へとかき消されて

いった。

少し時間は遡る。

――――『麦わらのルフィ』ロスト。現在高度五十メートルで東に飛翔

ここはとある海の上。

『それ』は文字通り、海の上を飛んでいた。

自身の使命は海賊の殲滅。

だが、その途中で邪魔が入り、『飛ばされて』しまった。

――――行動不能。一定期間のオフモードに移行する。

やがて、『それ』はピクリとも動かなくなった。
その後はただ、気まぐれに空を飛ぶだけだった。

その場に突如現れた光さえ現れなければ……

一瞬、辺りがまばゆく照らされ、辺りを閃光で覆った。
鳥、魚、海王類が目をつぶるしかなくなるほどだった。
しかし、それも一瞬の出来事。

光は治まり、再びその空間は何事もなくなっていた。
海上を飛んでいた『それ』が忽然と姿を消したことを除けば……

これが後に起こる、遠い遠い、誰にも感知されないほど遠い世界を
その世界の運命を揺るがす

極めて大きな事件の引き金になろうとは

誰にも知る術は無い。

# 自分の居場所（前書き）

活動報告に番外編も載せたのでそちらもお願いしまーす

## 自分の居場所

「殺せ！！　殺せ！！　王を穢さんとした下衆共を！！　友を傷つけた犬畜生共を殺し尽くせ！！」

「一人残らず殺してください。皆さんの思いの丈を剣に込めて！！」

「腕をもげ！！　耳を千切り、眼球をくりぬいて踏み潰せ！！　その穢れた血をこの地に沁み込ませるのだ！！」

揚州の荒野では狂気と怒りが入り乱れた戦が繰り広げられていた。

呉の将、及び兵達が怒りに任せて剣を振るう。

対する魏の兵はその猛攻をただ受け流すくらいしかできずにいた。

「殺せ！！　英雄を亡き者にしようとした愚か者共に死を！！」

蓮華もその一人であった。

そんな周りを見た冥琳は少し危惧した。

（周りが熱くなりすぎている……このままではこちらも危ういな…）

普段なら他の皆もそれくらい判断できるはずなのに、今回は深追いの一歩手前にまで事態が進行していた。

それだけ、皆がエースを想っているのかが想像できるのだが、その

感情に身をまかせ続けるのは危険すぎる。

「雪蓮……」

「…分かってるわよ。ちょっと行ってくる」

頭では理解しているが、納得できていないといったところか。

奴の王としての責任感が奴を自制させたか……

今、雪蓮が王でなかったらと思うとぞっとする……

「そこまでよ。蓮華」

「姉さま!?」

「蓮華、これ以上の追撃は無理。兵を撤退させて」

「ですが姉さま!!　奴等はあなたを暗殺しようとしただけでなく、エースに…!!」

「だから冷静になりなさい。これ以上の進軍は負にしかなり得ないわ」

「ですが……!」

「こんなこと……エースは望むかしら?」

「……」

エースの名が出た瞬間に何も言えなくなってしまう。

そんなことは誰もが分かっている。

だけど、その感情を治めることは中々できない。

それを無理矢理抑える。

この辛さを口にすることができないほどだ……

「……分かりました。他の皆にも伝令を出します…」

蓮華も王としての自覚によって冷静になり、自制する。

（なんとか最悪な事態は免れたな……）

冥琳は収拾していく事態を見て息を吐いた。

しかし、またすぐに懸念が出てくる。

（後は……エースか……）

内心で冥琳は気付いていた。

エースは毒には侵されてはいない……と…

（雪蓮に介抱されてきた時は驚いたが…あの時はどこにも傷は見当たらなかったな…）

そう、冥琳はちゃんと覚えていた。

介抱されているエースはどこにも怪我を負ってはいなかった。

（それを差し引いても不可解な点が出てくる……）

それもそのはず、あの時のエースからは何の異常も見られなかった。

体の麻痺、痙攣、硬直、体温低下など記憶している毒の様々な症状を記憶から掘り起こしても、どれにも該当する症状は無かった。

すると、あのエースの状態は……

（精神的致命傷……なにかあったのか？）

すぐにエースの心の異常にまで辿りついた彼女は流石としか言い表せない。

突然のことに気が動転していた周りとは違い、すぐに冷静さを取り戻して観察していた彼女こそ超一流の軍師に相応しい。

（……どっちにしろ後はエースの問題か…）

これからの最善はまた後で考えることにして、冥琳はすぐに今の事態の収拾にとりかかる。

（…お前も人の子なんだな…エース…）

冥琳は心の中で複雑そうに呟いた。

「後方の敵兵の追撃が終わりました！！　後方に敵影無し！！」
「そう……」
呉の追撃から逃げきったにも関わらず、魏の面々の表情は晴れない。
相手国から卑怯者呼ばわりされ、それが真実なのだから無理もない。
それだけでなく、兵の多数が失われたのだから。
「……奴等は？」
「既に処分済みです」
「ならそ奴等の首を後日に弔問の使者に持たせなさい…」
「御意」
荀イクの言葉を受けた曹操はそこから何も話すことなくなった。

「華琳さま……」

「……」

それを傍で見ていた夏侯姉妹は何もできない自分に悔しさを覚えながら、ただ傍に付くことしかできなかった。

「……」

曹操から少し離れた位置では霞がいた。

手の平にビブルカードをのせると、カードは手前に動いてくる。

霞は遠ざかっていく呉の城へと向けた。

（エース……あんた…こんなところで死ぬタマやあらへんやろ？）

口に出せない感情を心の中で訴える。

（死んだりしたら……恨むで……）

かつて、大切な物を護るために共に戦った戦友であり、憧れの人を想いながら……

（霞さま……あなたも……）

少し弱った姿を凪に見られていることなど知らずに……

「ありがとう月ちゃん、詠ちゃんも。今日はもう終わりでいいよ」
「はい、ありがとうございます」
「それじゃあボク達はもう寝るわね？」
「うん。おやすみなさい」

一方の蜀は益州を平定し、元々から不安定だった治安の向上に力を入れている最中である。

当然、月達は自分達を助けてくれた劉備達の手助けをしている。

あまり評判にならないように待女としての働きしかしていないが…

空が綺麗な朱色で照らされる時間になり、月達の仕事は終わりを迎えた。

「月、詠」

「もう仕事は終わったのか？」

自分達に宛がわれた部屋に戻ろうと通路を歩いていた時、偶然にも恋と華雄とバッタリ会った。

ちなみに、恋とねねは洛陽から脱出した後、劉備達に保護されたクチである。

「恋ちゃん、華雄さん」

「うん、これから着替えに行くところ。あんた達の仕事は？」

「……ねねはもうすぐ追いつく」

「我等は兵の調練組で、ねねは軍師見習いだからな。働く場所もバラバラだからな」

華雄がそう締めくくると、月は何かを思いついて両手を合わせて提案する。

「じゃあ、久しぶりに皆で『あれ』やろうよ」

嬉しそうな月とは対照的に詠と華雄は微妙な表情になる。

「『あれ』って……また『あれ』をするのぉ？」

「うん。だってこうして皆忙しくて、集まる機会なんてあまり無いから…」

「そ、それはそうですが……」

「……詠と華雄は嫌なの？」

恋は何事も無く、というより少し楽しみにしているのか二人が言う『あれ』をやりたくないと思って残念そうに聞いてくる。

「そんな目で聞かないでよ～……それにボクは嫌ではないんだけど～…」

「うむ……なんというか、恥ずかしいというか……」

詠と華雄は顔を赤くさせて俯きながら答えていると、そこに別の来客が来た。

「恋どのー！！　遅くなりましたー！！」

「……ねね」

その場にねねが全力疾走で走り寄ってきた。

「申し訳ございません！！　ここまで遅くなるとは…！！」

「いい。気にしてない」

「ありがたき幸せです！……にしても詠達はここで集まって何をしているのですか？」

「ふふ……今から『あれ』やろうとしてたの」

「…え？」

ねねが久しぶりに集まった面子の集まりを不思議に思っているが、月の答えに表情を変える。

それは詠と華雄と同じ様に恥ずかしそうだった。

「い、いや、あれはちょっと恥ずかしくて…その…」

「どこが恥ずかしいの？」

「その、なんて言うか……」

「やるのは良いんだが……」

「気分の問題なのですよ……」

不思議がる月は三人の答えに更に首を傾げる。

「へぅ……詠ちゃん…華雄さん……」

「…ねね…」

「……」

「月～…そんな目で見ないでよ～…」

「恋どの～…そんな顔は反則ですぞ～…」

渋る三人に月と恋は涙目の訴えを敢行（本人達は無自覚だが）

三人はそんな二人の涙目にたじろぐ。

もし、ここで彼女達を泣かすようなことを言えば……いや、想像もしたくない。

ただでさえ、今の状況でも傍から見れば小動物を苛めてるとしか思われないだろう。

何もしてないのにそう思われるのはある意味すごいことなのだが…

これ以上は精神的に辛いので、仕方無く了承した。

それに対して月と恋は嬉しそうに機嫌が戻る。

そんな二人には一生敵わないと三人は思い知らされながらも、呆れながら笑みを浮かべる。

「じゃあやろっか？」

「そうね……」

すると、五人はそれぞれ懐からお守りを取り出し、更にその中から一枚の紙を取り出す。

言わずもがな、それはエースのビブルカードである。

五人はそれを手の平に乗せると、カードはもぞもぞと動く。

五枚のカードは全て同じ方向に動く。

「…この先にエースさんがいるんだね…」

「この方向は呉……やっぱ斥候の報告は本当だったのね…」

ついこの前、エースが呉にいると判明してからというもの、全員は気になっていた。

そして、つい先程に魏が呉に攻め入ったとの報告が入った。

皆は表に出さないものの気になっていたのが本音だ。

「……エースなら大丈夫……恋よりも強いから…」

恋が皆にそう呟くと、呆気にとられながらもどこか嬉しそうに肯定する。

「そうだね……」

「まあね、あいつの負けるところなんて想像できないしね」

「当然です！！　恋どのに勝ったのだから、負けたら承知しないのですよ！！」

「まぁ、私はなんの心配もしてなかったがな」

その言葉に嘘は無い。

相手は大陸最強を負かせた天の御遣いなのだから。

彼の強さは蜀の中で彼女達が一番よく知っている。

だからこそ心配する必要はないのだろう。

「また……会いたいな」

ビブルカードは夕陽に向かって動き出す。

彼女達にとって今日の夕陽はとても輝いて……綺麗に見えた。

「……」

医務室のベッドで天井を仰いでいた。

あれからというもの、時間も経ち、少し落ち着いたのか表情も少し穏やかだった。

「はぁ……」

かといって気持ちは晴れないままだった。

エースは他人に弱みを見せるのを嫌っている。

ショックとはいえ雪蓮達に情けない姿を見せてしまったのが悔やまれる。

いや、まだそこはいいとして問題は…

「あぁ……結局見られちまったか……」

できればずっと隠しておきたかったロギアのダメージ回避。

ロギア独特の絶対的な防御は見る人によっては不気味なものだった。

あんな物を見られて、今まで通りに過ごせるのか……

「……ここらが潮時か」

エースがそう呟いた時だった。

「なーにが潮時なの？」

扉が開き、雪蓮が入ってきた。

いつもと変わらぬ様子で……

「雪蓮……」

「怪我……はないから大丈夫そうね。どこか具合が悪い？」

「いや、そんなことはねえ」

「そう？　よかった」

本当に変わらない。

おどけた様子で話してくる様子は本当にいつも通りだ。

「皆は？」

「うん。皆には外で待ってもらってる」

「そっか……」
「……」
「……」
「……聞きたいか？　なんて聞くまでもないか。人払いまでしてここまで来たんだからな」
「ええ、だから全部教えて……あなたが生きている理由を…そして……」

――――あなたは何者なのか……をね

「つまり、雪蓮はおれが何故生きているのかが知りたいのか？」
「ええ、あの時、あなたは矢に頭を間違いなく射抜かれていた。確実に致命傷だった……なのになんで生きてるのか、なんで怪我すらもないのか……とかね」

雪蓮はエースの額を指でつつくが、エースは優しく振りほどきながら観念する。

「簡単に言えばこれもロギアの能力の一つなんだ」
「能力？　ていうことはエースは不死の存在になったの？」
「いや、おれとてまだ人間だ。死なないことは無いし、寿命がくれば死ぬさ。お前等と変わらずにな」
「じゃあ……」
「ちょっとお前の剣貸してくんねえか？」
「南海覇王を？」
「ああ」

急に関係ない提案をするエースに疑問を覚えながら、雪蓮は渡す。

「どうするの？」
「もう説明するよりも見た方が早いと思ってな」

そう言うと、エースは躊躇いも無く自分の手首を斬り落とす。

「ちょっ！　何してるのよ！？」

「いいから…見てな」

少ししてエースの手首は地面に落ちるが、そこからは不可思議なことに気付いた。

「あれ？　血が出て……」

出血しない手首を見ているときだった。

急にエースの手首と斬り落とされた手首の斬り口から炎が溢れだした。

「なにこれ！？」

雪蓮は急なことに驚いていると、落ちていた手首が炎に変わり、まるで生きているかのようにエースの手首に集まる。

しばらく経つと、炎は消えて手首は綺麗に接合されていた。

「……」

「うん。こんなもんだ」

呆気に取られる雪蓮に構わずエースは手を握ったり開いたりと異常が無いのを見せつける。

「おれが食ったのはメラメラの実。自然系といって自然の力である火を駆使することができる」

「そ、それとさっきのとはどういう関係が…？」

「…ただの人間が自然を操るなんてことできると思うか？」
「……！！」

エースの言葉で雪蓮は答えに行き着いた。

太古の昔から誕生し、地球上で最も知能が高いと思われる生物…人間。
人間は文明と時間を過ごして行く内に色んな知識を見に付け、後世に残してきた。

食料を作り、家を作り、文化を作り、やがては社会をも作ってきた。
そして、生きるために今度は人が人を従えるようにもなった。

人間がこの世を生きていくためには『強くなる』のではなく『操る』ことを覚えた。

だが、そんな人間にも操れない物があった。

それこそが……

「自然……か……」
「そう、天気や災害は人の意志に関係無く起こる」
「なるほど……つまり、エースは『火を操る者』ではなく、『火』そのものになった……自然となって自然を操っているのね…」
「そう。とはいっても実体はあるにはある。例えるなら…火の鎧に守られてるってわけだ」

なるほど……と雪蓮は合点がいったような素振りで手を顎に当ててしばらく考える。

そして……

「うん。なんかすっきりした！」

「は？」

晴れ晴れとした表情で頷く。

それだけだった。

「でもさ、攻撃が効かないってすっごいわね～！　なに！？　じゃあ無敵ってこと！？」

それどころかテンションが上がってる……

「なあ……おれが怖くないのか？」

そこでエースは気になっていることを聞いてみると、雪蓮はピタっと止まって疑問符を浮かべる。

「何が？」

「何がって……矢で貫かれたり斬られたりしても傷がつかないんだぞ。不気味じゃないのか？」

エースは不安げに聞くが、雪蓮はどこ吹く風

いつもの様な口調で答える。

「何言ってんの？　私がエースを嫌うと思ったの？」

「え？」

「もうあれだけ現実離れした物を見せておいてよく言うわ。今更じ

ゃない」
「けどよ…」
「それどころか私は怒りたいくらいよ。なんで隠してたのかってね」
「ぐ……」
それを言われると痛い。
理由がどうであれ仲間に嘘をついていたのは完全にこっちの責任なのだから。
エースが罪悪感に追い詰められているのに感づいた雪蓮はしかめっ面を柔らかい笑顔に変える。
そして、エースの手を握る。
「雪蓮？」
エースは不思議そうに呼び掛けると、雪蓮は嬉しそうに言葉を紡ぐ。
「エースの手って大きいね……この手が私を助けてくれたんだ…」
「……」
「こんなに暖かい手を……私が怖がると思った？　あなたを追い出すと思った？」
「でも、国の奴等ならそうする。自分の保身のためにな」
「そうね……それが普通よ。だけど……」
「？」
「私、普通じゃないし普通じゃいられないじゃない？」
雪蓮の最後の言葉にエースは少し唖然とした。
「お…おれは……」

「だから、これだけは言わせてくれない？」

雪蓮はエースに何も喋らせないように言葉で言葉を遮る。

今の彼に必要なことは“只の”言葉ではない。

「本当にありがとう……あなたに会えて本当によかったわ。エース」

“真”の仲間としてエースを抱擁した。

優しい温もりが体を包むのを感じる。

（……おれは……今まで…ろくでもない人生を送ってきた……）

白ひげとは別の父親であるゴール・D・ロジャーの実子。

その事実だけでエースの人生は狂わされてきた。

謂われの無い差別、隠れて生きる隠居生活、父親の侮辱、そして、

正体無き暴言。

子供の内にとてつもない経験をしてきたエースにとって自身の存在

意義が重要になってきた。

苦悩の毎日

それを振り払うためにエースは海に出た。

『“じゆう”を探すための出航』というカモフラージュを施して……

（でも……こいつ……この人は……こんなおれを……）

エースは胸の内に表れた熱い感情を抑え、目を閉じた。

（おれ……海賊なんだよな……）

エースの心に浮かべた心は誰にも聞こえはしない。

（いや、そんなの関係無い…か）

ただ、彼は信じる道を進むだけ。

その先が、たとえ地獄へ誘うものだとしても

今背負っている大切な物を守るために……

彼は再び歩き出す。

## 自分の居場所（後書き）

ハンターハンター連載開始おめでとー！！

熱くなってきましたが、盛り上がっていきたいですねー

## 残酷な天使のテーゼ（前書き）

題名はあまり考えずに付けました。

なので気にせずにどうぞ

## 残酷な天使のテーゼ

魏が呉に攻めてきた“あの時”から幾日か経った。

あの後から皆にはエースの毒は完治したと伝えたら皆が喜んだ。蓮華、小蓮はエースに雪蓮を助けてくれた礼とエースの無事を喜んでくれた。

鈴仙と亞莎は激情のままに泣きつき、風もいつもより大胆に抱きついて喜びを体現したのだが、そのままつきっきりで、しかもお風呂も厠も全て世話をするなどと暴走し始めたのだ・が……エース自身に悪意のない正論によって押しとどめられて涙を飲むこととなった。

その他にも祭は酒を持って酒盛りしようとしたのを冥琳に止められ、明命と穏は共に抱き合って喜び、冥琳は静かに微笑みながら雪蓮の礼とエースへ労いの言葉をかけてくれた。

そんな仲間にエースは心を打たれ、再び“護る”決意を新たにさせた。

そんな皆にエースは全てを話すことを決意した。絶対防御、カナヅチ、覇気のことなど自分にとって都合の悪いこと、弱点の全てを。

だが、その提案に雪蓮はというと。

「防御は知られたくなかったのでしょ？　なら無理に教えずにエースの気持ちに整理がついてからでいいわ」

そう言われたから言葉に甘えるとして、それならと覇気のことも教えようとしたのだが、これも却下された。

エースは断る理由が分からずに問い質すと意外な答えが返ってきた。

「エースの力は戦の後で教えてもらうわ。その力は後の子達を護るために使いたいから」

「いや、でも覚えたほうが便利だぞ？　この前の奇襲にも役に立つから」

「や～ねぇ、そこでエースが護ってくれたんじゃない。なら大丈夫よ」

「雪蓮……」

「それに私達だけが強すぎて曹操をいじめるのもアレじゃない？」

最後の方が本音だな、と確信したと同時に思ったこともあった。

（これでこそ雪蓮だったよな）

戦いは自分の全てをかける。そこに付け焼き刃など必要なし。

そこは自分とよく似ている、だからこそ覇気のことも時が来るまで口外しないようにすることを決めたのだ。

だけどカナヅチのことは大々的に話すことにした。

今まで弱さを見せて来なかった彼にとってこの告白は蓮華達を信

用している証だと雪蓮は思った。

今度からは助けられるだけでなく、助け助けられる関係になれる。そう思ったのだろう。

こうして、皆に話す内容は能力者のカナヅチのことだけとなった。

そして、話してみると案の定驚かれた。

それもそのはず、そんなカナヅチが島を飛び出して大海原へとその身を投げ出したのだ。

魚が新しい住処を求めて陸地に上がってくるようなものだ。

だが、それが長年の“夢”だったと力説したことで理解を得たのであった。

そんなこともあり、エースの心のしがらみの一つが解消された。またいつものような日常に戻ったのだった。

そして、その間にも魏から弔問の使者もやって来て暗殺者の首の塩漬けを届けられたこともあった。

一応の詫びのお返しに使者も送る予定である。

そんなこともあり、すっかり立ち直ったエースは日常を謳歌していた。

「冥琳から聞いて少し不安だったんだけど、案外平和なんだな」

「見た限りではな、だが油断するな。雪蓮さまに反旗を翻す奴は実

際にもいるからな」
「それをおれ達がつぶすって訳だな」
「分かってるならあまり余計なことは喋るな」
「お堅いことで」

現在は思春と共に街へと警邏の最中。雪蓮の件は極力は伏せていたが、どこかで漏れたのか噂という不確定な形で事件のことが広まってしまった。

そして、その噂を信じて反旗を翻そうとする豪族や諸侯もいた。それらの沈静がエース達の任務。三日間で既に六件は摘発したのが現実だ。

「最近では裏でコソコソしてる奴が多いな……監視網を裏町にも広げたらよくないか？」
「そうは言うが、こっちの兵の数も限られている。私の兵でさえ訓練にも参加させたい……」
「それなら……どうすっかな……」

二人で考えながら歩いていると、一人の人影が近付いてきた。

「そこの人、少しいいか？」
「？」
「我等のことか？」

二人は声に反応して振り返ると、そこにはツナギの着たイイ男がいた。

「ああ、オレは阿部という。ここらで店を構えようと思ってな」
「へぇ…また店ができんのかー」

「初耳だな……許可は取ってあるのか？」
「それをこれから取ろうとしていたんだ。あんたらみたいな国の人間が最初に視察しなきゃならないって聞いたもんでね」
「そういうことならいいだろう。これから二人で視察に行く」
「それは有り難い。偶々あんたらに会えてよかった」
「それで、どんな店だ？」
「一応、何でも屋…万事屋ってとこかな？」
「万事屋……か」

二人は百均のような雑貨店は珍しいなと思いながらも、警邏の途中ながらその店の視察へと向かった。

そして、しばらく歩いて行くと、一軒の屋台に辿り着いた。二階建ての内、一階は『汚華魔馬亜』と表記されているのは事実だ。

「あら、阿部ちゃん。新しいお客さん？」
「違うさ。この人達はオレの副業の視察さ」

急にチャイナ服を着た野太い声の中年男性が現れた。ご丁寧に化粧までして……

「これは……なんと言うか……」

「あっはぁぁん！　可愛い子が二人も！　羨ましいわ～ん！！」

「それはいい……それより顔が近いからもう少し……」

普段から冷静沈着な思春でさえもジワジワ迫ってくるオカマの顔面戦車に動揺している。両手で迫る顔を抑えているのがその証拠だろう。

「エース、とりあえずさっさと済ませよう……どうもこういうのは苦手だ」

「だな。早く終わらせて見回りすっか」

早くその場から離れたいのか、オカマを退けた思春は急かす様に二階へと上がっていく。そして、二階の部屋のドアの前に立った。

「なんか古臭いな……本当に店なのか？」

「そうだと言うに、この店には滅多に見られない物を置く予定だ」

そう言いながらドアを開けて二人を招き入れると、そこには騒がしい外とは異空間と言ってもいいくらい静かだった。棚に所狭しと設置されている品物が空間を掌握していたようだった。

その中で、エースは珍しい物を見つけた。

「これ……ワインか！？」

「おっと、それもこれから売る物なんだから丁重にな」

「あ、わりぃ。なんか懐かしくなっちまってな」

エースはへェ～と言いながらワインを元の場所に戻した。

「妙な物しか無いな……これらの安全は確かなんだろうな？」

「ここにある物は異国の食料や日用品がほとんどだ。危険物はない」

「そうか……ん？　部屋は区切っているのか？」

「ん？　ああ」

「？……何て書いてある？」

「『あーる１８』」

思春は『Ｒ－１８』と表記されたのれんが気になった思春はエースを一瞥すると……

「おぉ……なんか分かんねえけどすげえなぁ」

「……はぁ……早く来い」

「え？　次行くの？」

嬉しそうに未知なる商品を眺めるエースの精神年齢の低さに溜息を洩らしながらもそののれんの先をくぐった。すると、意外にもそこには大量の本が陳列されていた。

「ほう……本も売っているのか？」

「一応何でも屋だからな、言っておくが本に関してはお宅の陸遜という人から許可は降りているんで」

（穏が？　なるほど……ここは兵法書売り場か……）

そう思いながら本を開いてみる。

『ある昼下がりの裏道で二人の少年が向かい合っていた。

「兄さん……やっぱり……怖いよ……」

「ふふ……やっぱりお前は可愛いな」

「兄さん……」

まだあどけない弟の顔を兄は両手でそっと包み、幼さが残る唇を自身の大人びた唇で……』

突然、思春は本をバタン！と本を勢いよく閉じた。まるで見てしまった現実を否定するかのように。

「なんだ？　なんかあったか？」

「……なんでもない。というか見るな、来るな、触るな……」

「？　見ちゃいけねえ本なんてあんのか？」

「……少なくともお前にはまだ早い……忘れろ」

「ふ～ん……まあいいけど。こっちには何のおかしい物は無かったぜ。どうする？」

「そうか……まだまだ不安なこともあるが、穏もこの店のことは知っているのだから問題は無い……とは言えないことは無いかもしれん」

「へ～……なんか顔赤いぞ？」

「……気のせいだ」

そんなに暑かったかな？　結構この中は涼しかったと思ったけど。

まあ、本人が大丈夫なら大丈夫なんだろうな。あまり探るのも嫌だろうし。

「にしても良い店だな。いつからオープンすんだ？」
「開店は明後日からだ」
「……早すぎやしないか？」
「前には陸遜将軍から許可を貰ってな、それ以来は開店させる方向で進めてきたからな。問題は無い」
（今の本は問題にしないのか？　穏は）
「それならいいじゃねえか？　今度はおれもここに来るから」
「くくっ、嬉しいな。あんたには五割負けるとするか……ふふ……」

何故だろう、この阿部という店長の会話を聞いていると焦燥を覚えるのは……さっきの本といい……後でエースにはよく言い聞かせておこう。何かあってからでは手遅れなのだからな……

「だけど、女には十割増しで請求するから」

……こいつ……私を見据えながら言うとは良い度胸だな……なぜだかこいつだけには負けたくなくなった。何に負けたくないかというと、色々だ。

それにさっきからだが、私に喧嘩を売っているのか？　殺気とは別の言い表し難い“何か”を私に執拗に飛ばしてくる……もう出よう……

「そろそろ行くぞ。私達は警邏の最中だからな」
「それならエースだけを置いて行ってくれ。久々に良い男とお近づきになれたのだから。まあ女に用は無いから帰ってくれ。女がいるとテンション下がって“できない”のだから」
「もげろ」

だめだ……こいつはマトモじゃない……早めにエースを連れて行

かねば本当に手遅れになりかねん。

多少強引ではあるが、エースの手を握って連れ出す。

「ほら帰るぞ」

「おいおい、んな急ぐことねえだろ」

「お前のためだ。男としての人生に汚点を残す気か？」

「？？」

……こいつはもう少し大人になったほうがいい……それまでは皆に協力してもらうしかない

「それじゃあ、“あっち”に嫌気がさしたらいつでも来ていいぞ」

「……」

本当にあの店……いや、あの男を野放しにしてもいいのか？　色々と危険だ……

「あ、阿部ってまさか貂蝉の……」

私に引っ張られているエースが何かを呟いたようだがそれどころではない。至急にこのことを蓮華さまに報告せねば！

こうして思春はエースの手を引きながら蜀、魏と並ぶ新たな脅威を心に刻んだ。

エースの貞操の結末や如何に……

新たな脅威との邂逅から少し経ち、エース達も仕事を終わらせた頃の城では……

「ふむ、『汚華魔馬亜』か……なんだか危険で、私にとってはあまり賛同したくない気がするのだが……」

「でも～、店自体はそれなりに揃えも設備も問題なかったので大丈夫かと～」

「そうか……それならいいだろう。分かった。許可する」

「はい～。ありがとうございます～♪」

弟子の穏がこれからどこに向かってしまうのか心配しながら書簡

にサインをする冥琳の姿があった。机に座っている冥琳の前の穏はどこかホクホク顔だ。

「それでは今日の用事はこれだけなので失礼しますね～♪」
「あぁ……あとそれと一ついいか？」
「はい？」

部屋を出て行こうとする愛弟子を引きとめる。彼女としてはこれだけは言いたかった。

「お前の趣味に口を出すつもりは無いし、止めろというわけでも無く、一応言っておくだけだが……」
「？」
「……程ほどにしておけよ？」
「はぁ……それじゃあもういいですか？」
「あぁ、引きとめてすまなかった」

穏は訳が分からないといった様子で部屋を出て行った。その後、部屋に一人しかいなくなったのを確認すると一人ごちた。

「汚い華って……どんな店よ……」

冥琳は溜息を吐く。

以前、親友が独断で許可した店がまさかあんな店だったとは……

……

違法なことは無いのだが、どうもあの店の付近の雰囲気が悪い？意味で変わってきている。それにそこの従業員の一人が何故か女に対して喧嘩腰だ。

まったくもって意味が分からん……

冥琳は街に突然現れた一軒の店について頭を悩ませていた。その店自体はなんの問題は無いのだが、どうにも妙な人間が日が経つにつれて増えている。

これはどうしたらいい？　なんとなくあの雰囲気は苦手だ……

「はぁ……まあ考えても仕方ない……というかもう勝手にしてくれ」

冥琳は心底どうでもいい案件に匙を投げてしまう。どうやら街は親友の色に染まると諦めたのだろう。

「よし、これで今日も終わりか……」

苦笑いながら書簡を抱えて部屋を出ようとした時だった。

冥琳の視界が揺れ……

「がはっ！」

冥琳が部屋を出ることは無かった……ドアの一歩手前で崩れ落ちたから……

抱えていた書簡が床に落ち、悲鳴を上げる。その無機質な悲鳴が部屋を反芻してやがては消える。

「は！……はっ！……う……ぷ……」

冥琳の胸が熱くなる。その熱さはどんどんと広がり、のどをも通る。

「ごぼっ！　げぇ！！」

冥琳は大量の嘔吐物を床にまき散らす。床からはビチャビチャと不快音をまき散らせる。

「う……げえええぇぇぇ！！……はぁ……ぅ……げほっ！……ぅ……げぼっ！」

一通り吐き終え、その部屋からは異音が消えたが嘔吐物特有の酸味の匂いがたちこめる。

「う……ぁ……ぁぁ……」

だが、今の冥琳にとってそんな匂いはどうでもよかった。

吐いた直後に今度は頭が蝕まれる。冥琳の頭を支配しているのは匂いによる不快感ではなく、純粋な“痛み”だった。

「ぁ……ぅぅ……」

頭が痛む。目に見えない“化け物”が頭の中を這いずり、“私”を貪っているように……

机が、床が、壁が、天井が、“私”が歪む。

歪んで、
歪んで、
“周公謹”が歪んでいる。

目に見える森羅万象が原型を保てなくなる。

崩れる、
崩れる、
“冥琳”崩れていく。

それは明確な“死”へのカウントダウン
死神の足音
死門の前の桃源郷

壊れる、
壊れる、
“私”が壊されていく。

目が回る、頭にもやがかかる、五体が動かない。
まさに桃源郷、ある意味桃源郷

「はっ！……はっ！……」

（また……ぶり返してきたか……）

冥琳は痛む体に鞭を打って地を這う。

（今夜も長い夜なりそうだ……）

これは天が描いたシナリオ、娯楽の茶番、神が与えた天使の定立（テーゼ）。

（頻度が上がってきた……本格的に聞こえてきたな……地獄からの誘いが……）

死に体の体で適当な手ぬぐいを取り、嘔吐物を拭く。

（だが、“貴様等”の思い通りにはいかんさ……まだやることがあるのだからな……）

冥琳は誰かも分からぬ“もの”に布告する。

親友を天下に……いや、安寧の世へと導く！！

そのための自分の命ならなんと破格の条件！！

なんと容易い！！

（雪蓮は本来なら毒に倒れるはずだった……だが、そんな“予定”が狂い、運命が私に牙を向けたのなら好都合……王の身代りなら望むところ、本望だ！！）

冥琳は霞みゆく意識の中、天井を仰いだ。

ゆっくりと視界が狭くなっていき……

（雪蓮が……あの子が幸せに生きてくれれば……それで……）

やがて視界と共に意識までもが闇の中に落ちた。

（ほん……も……う……）

冥琳はその場から動かなくなった。

この夜が冥琳の分岐点になろうとは予想できなかったのも無理は無いことなのだ。

運命など気まぐれに変わるのだから……

## 残酷な天使のテーゼ（後書き）

夏休みには原案を書いてストックを溜めるので投稿は遅くなる……と思います。

進行具合は活動報告に書くのでご了承ください。

夏季休業まで後、一週間。その間には書けるまで書いて投稿していきます！！

## 医者と海賊とガチでイイ男（前書き）

後書きにはちょっとした悩みを書くので、できたら助言をくれると嬉しいです。

今回のは今までで一番ひどいと自負しています！！

それではどうぞ！！

# 医者と海賊とガチでイイ男

それは本当に日常的なことだった。

いつものように警邏を終え、修業も終えて明日のために自分の部屋のベッドへと向かう最中だった。

そんな日常を過ごしていただけだったのだが……聞いてしまった。

ある一室から妙な音が響いたのを……

そして見てしまった。

ドアの隙間から見えた、嘔吐しながら苦しんで倒れ行く最愛の仲間の姿を……

「冥……琳……？」

目の前の光景が信じられなかった。ついさっき、昼の時にはピンピンしていたのに……なぜこんなことに……

「冥琳！！」

考える前におれは部屋に入る。すると、その部屋には酸の混じった酸っぱい匂いが鼻を刺激された。

「おい！！　冥琳！！　しっかりしろよ！！」

ぐったりしている体を揺さぶっても返事は返ってこない。

まずい……これが怪我だろうと病気だろうと深刻な事態だ。その証拠に嘔吐物の中には赤い血までもが混ざっている。

だが、こんな時間だ。城の主治医はもういない。

「くそっ！！」

しかしエースは諦めようとしない。何も今の状況下でもまだ望みはあった。

「華佗……」

それはあの時、江東の奪還する際に会った人物。自分の知り合いである医者だ。

華佗の名はその時の戦の後で知った。何でも『五斗米道』と呼ばれる氣による治療を生業とする医者だということを。しかも、華佗の名は既に三国中に知れ渡る程、実力も確かだ。

そして、あの時からそう時間も経ってはいないからこの街にいる。

そう思い立ったエースの行動は素早かった。

「少し揺れるけど我慢してくれ！」

そう言うと、エースは冥琳を背負って窓から外へと駆ける。

エースはそのまま中庭を猛スピードで横切る。

そして、城壁を脚力だけで飛び越えた。

「東方の新薬、西方の漢方薬……よし、これで心残りは無いな」

夜の宿屋の一角で荷物をまとめる人影がある。

華佗である。

雪蓮の江東奪還戦で知り合いの文官から応援を受けていた。そして、エースと出会った。

本来ならすぐにでも国を出るつもりだったのだが、中々上手くいかない。袁術軍や黄巾党の残党の警戒策として検問が強化されていた。

もちろん、華佗も例外無く引っ掛かってしまったが、幾日による事情徴収でやっと許可が降りた。

そして、その準備をしている今に至る。

「よし、針も新調したし、後は……」

明日に備えて寝るだけだとそう思っていた。

その時……

「華佗！！」

「！！　エースか！？」

急な、予想外な客人に華佗は驚きを見せるが、更なる驚愕に襲われる。その原因が彼の背中にあった。

そこにはぐったりとした女性の姿を見た。

それによって医者としての本能が動いたのか、すぐに目の前の患者の救出のために行動する。

「すまん！　お前しか頼れそうな奴がいなかった！！」

「そんなことより患者の容態を！！」

「よくわかんねえけどさっきから血とゲロを吐いてばっかだ！！」

エースから容態を聞いた華陀は聞く限りの目星をつけて冥琳の体を触診するが、表情は依然として険しい。首を横に振る。

「駄目だ……治すことはできるが、病魔の進行速度が早過ぎる……」

「つ、つまりどういう……」
「たとえ治したとしてもまた再発……堂々巡りだ……」
「うそ……だろ……」

その宣告に目の前が真っ暗になった。

助からない。助けられない。目の前の仲間を……

エースにとって華陀の死の宣告は到底信じられるものではなかった。

エースは仲間の死を良しとはしない。その精神は尊敬すべき白ひげと愚弟のルフィ、そして血の繋がった父親のゴール・D・ロジャーと共通している。

死にかける仲間がいれば救う手立てを全力で探し、全力で敵を討ち滅ぼす。

それが一国家であろうとも。

だが、病魔となると話は変わる。相手は実態の見えない悪魔。

できることと言えば医者に連れていくことしかなかった。

だが、信じていた医者でも治せないと……病魔に勝てないと言った……

「～～～っ！！」

声無き声を上げて拳を握り締める。身体全体を震わせて非情な現

実へのやるせなさを体言する。

そんな時だった。

「気に病むな……お前の……せいでは……ない……」

「「！！」」

聞こえてきた小さな声、ベッドに横になっている冥琳からだった。

「冥琳！！」

「まったく……妙に揺れると思ったら……厄介なのに見つかってしまったな……」

「んなこたぁいい！！　お前いつから……！！」

「ふふ……兆候はつい最近……ここまで酷くなるとは思って……いなかったけど……」

自嘲気味な冥琳の顔色は土色に、やつれていた。

人は短時間でここまで変わってしまうのかと……

そして、自嘲している冥琳を見て胸が張り裂ける気がした。

「何言ってんだよ……何笑ってんだよ……なにか可笑しいのかよ！！」

「……」

エースの悲痛な声に冥琳は自嘲を止めた。その代わりに決意を宿したように目を輝かせた。

「分かっただろう？……私の病は華佗でさえも匙を投げる……もう

……無理なのだよ……」

「……」

「だが、私は死なんよ……呉が……雪蓮が天下を取るまでは……」

そうまで言う冥琳にエースはただ見ているしかなかった。いや、見ているというよりも『あの時』のことがフラッシュバックしていた。

ガキの頃、ルフィと喧嘩をしてそれぞれ『どくりつこっか』を作って顔を合わせようとしていなかった頃。おれのくだらない意地でルフィは命に関わる大怪我を負った。あの時はマグラに助けてもらったけど……

「くそ……またおれは……」

何もできない……

拳を震わせ、唇を噛みしめるエースに冥琳は弱々しく伝える。

「お前は何も悪くない……正直、お前がここまで私を心配してくれて……うれし……」

「うるせぇ!!　心配なんて当然だろ!!　仲間が死にかけてんだぞ!!……生きてほしいんだよ……」

「……そうだな……私も生きたいさ……けど、この病はもう……」

「……すまない……その病気に適した薬さえあれば……」

今まで静観していた華佗は自分の非力さに無念を抱きながら二人に頭を下げる。

そんな華佗に冥琳は優しく応える。

「いや、貴方が気に病むことではない……これが私の天命なのだから……」
「……天命？」

冥琳の台詞にエースは反応する。

これが……天命？

エースには理解できなかった。

こんな悲惨な現実を何故運命だと割り切れる？　何故そんな表情になれる？

（今言ってただろ！！　冥琳だって本当は……！！）

本物の“死”に直面した奴にしか分からない恐怖が冥琳の“生きよう”とする感情を邪魔している。なにか……なにか手を……

「要は病の進行を抑え、死滅させる薬さえあれば手はあるんだな？」
「「「！？」」」
そこへ急に第三者の声が響いてきた。
この負の感情に包まれた空間に似つかわしくない落ち着いた雰囲気の声だった。
「あ……あんたは？」
華佗も突然の闖入者に動揺する中、入口から大胆に入ってきた“イイ”男は威風堂々と華佗のとまどいを受け取った。
「なに、通りすがりの万事屋さ」
「阿部……か？……なんで……」
「血相変えた君を見て悪いがつけさせてもらった」
希望は未だ潰えず、万事屋と名乗った男・阿部は親指で自分を指して自己紹介。

「で？　答えはどうなんだ？」
「た……たしかにそんな薬があれば理想的……後はオレの氣でそれを助長、患者の体の保護をすれば朝一の退院も可能だが……そんな都合のいい薬が……」
「それなら話は簡単だ。そんな都合のいい物を使えばいい」
そう言って阿部は胸のツナギの中から一粒の黒い丸薬を取り出して説明を始める。
「これはここから遠い地で採れる万能薬だ。これ一粒さえあれば大抵の病気……ガンのレベル5までも完治させることもできる」
「『がん』というのがなんなのかは分からんが……そんな薬があるなんて……」
「ただし、この薬の値は張るぞ？……そうだな……――――――ってところだ」
「なっ！！」
あまりの法外な値段に華佗の顔色が変わった。それもその筈、この世界においては国一つ買えるくらいの値段だったのだから……
しかし、あらゆる病気を治すとなれば当然かもしれない……だけどこんな額は……
そんな華佗の苦悩に歪むのを見て、阿部は柔らかに笑う。
「心配するな。一医者にそんな額は期待していないし、最初から金はいらない」
「へ？　それじゃあ……」

なんのために……

華佗がそう聞こうとすると、阿部はエースを見据えて応えた。

「愛する者の笑顔、プライスレス」

親指を立ててグッと笑う阿部にエースと華佗は首を捻ったが、それを無視して表情を引き締める。

「それよりも始めるぞ!!　華佗は針の準備!!　エースはこの部屋から退出してくれ!!」

「あ……あぁ!!」

「分かった!!」

阿部の言葉に二人の表情から光が見えた。

これは……もしかしたら……

華佗はすぐに自前の針を用意、手入れをする。エースはこの部屋に残りたそうだったが、自分がいて二人の邪魔になることを予想して素直に従い、部屋から出て行った。

そして、エースが出て行ったのを確認すると阿部は冥琳の目を見てはっきりと言い放つ。

「お前はここまでお膳立てされても、まだ『運命』とやらを信じるのか？」

「……」

「まあ、どちらにせよお前には『はい』か『ｙｅｓ』しか発言権無い。体を引き裂こうが四肢がもげようが手術は受けてもらう」

「な……なんで……」
「さっきも言っただろう。愛する者の笑顔はプライスレス。女は嫌いだが、このまま放置するとエースが泣く」
「……」
「だから……今後、エースを悲しますようなことをほざけば……」
阿部の眉間に皺が集まり、冥琳を睨む。
「許しはしない」
「……そうか……」
思わずゴク、と固唾を飲む冥琳にお構いなしに阿部は口の前に薬を運ぶ。
「それじゃあ生きる決意をしたら飲め。ていうか飲ませる」
「あぁ……頼む」
冥琳のすべきことは分かっていた。
親友を愛し、仲間達を助ける道。最後までこの世の結末を見届ける道。
本来の運命に抗い、神理に反した“生”を選ぶこと。
（それでも私は……）
冥琳は
（やっぱり……生きたい……）

薬を飲みこんだ。

「一応寝かせておいた。後はこのアマに氣をぶちこむだけだ」
「ああ……それにしても信じられん。ありえない速度で病魔が……よくこんな薬を持ってたな……」
「伊達に万事屋を名乗ってないさ。お探しならたとえ１０３０００冊の魔道書、人の名を書けば書いた名の人を殺す本、鍵で閉ざされた本くらいなんでもござれ」
「そうか……それは良い店だな……はあああああああああ！！」

一通りの軽口を終えたところで華佗が大声を出したと思ったら、彼の持っている針が光る。かれの氣が針に注がれている証拠だ。

「体の保護はもうやっておいた。おれの氣でコーティング済み」
「すまん！！　何から何まで恩にきる！！」

強力な助っ人の阿部に礼を告げると、華佗はより一層に針を輝かせる。

「我が身我が針と一つなり！　病魔撲滅！　全力全快！」

華佗の叫びに呼応するかのように針の輝きが増していく。

「いくぞ！！　これぞ我が奥義！！　賦相成（ファイナル）……武霊躯（ブレイク）！！」

冥琳の体に針を突き刺す。

直後、冥琳の体が淡く光った。華佗の氣が上手く循環した証拠だ。

それを確認した華佗はここで勝負に出ることを決意する。

針に更なる氣を送りこみ

「五斗米道（ゴッドヴェイドー）おおおおおおおおおおお！！！！！！」

光が

爆ぜた

その光景はまさに

冥琳の魂の輝き、命の咆哮に見えた

「ん……んぅ……」

……頭がハッキリしない……私は一体……

（確か……また病気が……）

頭で覚えていることを徐々にだが思い出していく。

「よ、起きたか？」

「！！」

そんな中、不意に聞こえてきたのは聞き慣れた声だった。

驚きに目を開けるとそこには満面の笑みのエースがいた。そして、自分の今の立場も理解した。

エースによってお姫様だっこを

「エ、エース！！　おま……！！」

「この態勢は勘弁しろよ？　この担ぎ方がお前の負担も軽いって華

佗がな……」
「だ、誰もいやだとは……」
いきなりの不意打ちに顔を赤くさせながらもモジモジさせている内に自分だけでなく周りの状況も見えてきた。
今現在、エースに抱えられいて、ぼんやりと明るくなった空も見える。そして街路をゆっくりと歩いている。こんな時間だから誰にも見られていないのが幸いだったが……
そして、今一番気になることが……
「あ、そうだ」
「な、なんだ？」
さっきからの不意打ちに冥琳は圧倒されっぱなしだが、さっきよりは気丈に振る舞う。そんな冥琳に笑みを零しながら伝える。
「華佗からだけどな、病気は治りかけの時が怖いからしばらくは城で定期健診するって」
「なんだ、そういうこと……だと？」
エースの言葉の中に潜んでいた自分の願望。一瞬、聞き違いだと思って思い返してみる。さっきまでの会話を反芻させる。
その間に冥琳はさっきからの違和感に決着をつけようとしていた。
普段から、ここ最近感じる事の無かった体の軽さ。胸がすっきりした、まるで異物が消え去った感覚。

必死に進み過ぎた現実に追いつこうと頭をフル回転させていると、そこにエースの一言が……

「……長い闘病……大変だったな」

「！！」

「でも、もう終わった……お前が運命に勝ったんだ……未来を掴み取ったんだ……」

「そ、それは……」

エースからの救いの一言。最初はエースの私に対する慰めかと思っていた。

だけど、エースはそんなつまらない嘘はしない、元より顔に出る。

だからエースの言葉に偽りは無い……だけど信じられない。

今まで私を苦しめ、蝕んできた病気が……こんなにも簡単に……

だけど、体の変化も考えるとそうとしか思えない。

私の病気は治った……私は……

「だけど……なんで……」

「まあ、なんで急に治ったなんて知らねえけどよ。これだけは分かる」

「？」

「お前はもう、自由だってな」

「！！」

不意に目から涙が零れる。

（こんな日が……本当に来るなんて……）

夢でなければ有り得なかった現実が今まさにそこにある。

夢にまで見た現実がそこにはあった。

ただそれだけなのに、すごく嬉しくて……涙が溢れてきた。

「……」

エースはそこから城に着くまで何も言わなかった。

顔を俯かせ、エースには顔が見えないように、しかし腕の中で体を震わせる冥琳を間近に見ていたから……

この日の朝日はいつもよりも赤く輝いていた。

「ありがとう。エース」

城に到着し、冥琳の部屋のすぐ傍まで来ると冥琳が呟いた。

「なにが？」

「何故だろうな。お前がいたから今の結果があると思うのだよ」

「それは勘違いだ。華佗と阿部がお前を治したんだ。おれは待つしかできなかったよ」

「そんなことはない。お前のあの時の言葉で私は生への執着を思い出したから治療を受けたのだよ」

あの時、冥琳を失いたくないと叫んだ時だった。

エースはなんのことだか思い返しているが。

「だから、華佗や阿部にはもちろんエースにも感謝している。……私の未来をありがとう」

「へへ……そう言ってくれんのか？　嬉しいねえ」

少し呆けたが、満面の、偽りの無い笑みを浮かべる。

（不思議な奴だ……皆が無理だと思うことを平然とやってのける……）

彼は言うだろう。『運命なんてない。あるのは未来を決める気持ち』だと。

（人はお前みたいに強くないのだよ……だけど……）

冥琳はエースの首に手を回す。

「お？」

エースはいきなりの行動に冥琳を見るが、冥琳の穏やかな笑顔を見ては追究を止めた。

「そろそろ部屋だぞ。着いたら今日はゆっくり休めよ？」

「あぁ、今日は頭も働きそうにないからな……」

「おれもだ今日はおれも寝てないからな」

能天気に笑いながら冥琳の部屋の扉を開ける。

すると……

「あら♪　随分とお早いお帰りね♪」

目の前に呉の王であらせられる雪蓮が現れた。

「しぇ…雪蓮!?」

「あれ?」

予想外な人物の登場に冥琳は驚き、エースは呆けた。

だが、これだけでは終わらない。

「エース……冥琳……これは……」

「どういうこと……?」

そこには蓮華、小蓮、穏、思春など……簡単に言えば全員いた。

「な……これは一体…!?」

「不思議そうじゃな冥琳よ。昨晩、お主等が城を抜け出した、との報告を受けた雪蓮さまが面白半分で朝一に集合させたのじゃが……これはこれは……」

祭が言いたいのはこういうことだ。

その態勢はどゆこと?

「なななななにをしているのかしら!?　そんなに密着して!!」

「答えろ、十秒以内に、迅速かつ正確に……」

「さて、風は準備してきますですよ」

「エースさま……」

「さて、今日はどうしてくれようかな……」
「冥琳さま……ずるいです……」
「そうよ！！　冥琳だけなんてシャオ納得いかなーい！！」
蓮華、思春、風、明命、鈴仙、亞莎、シャオの様子がどこかよろしくない。非常に危険なあレッドゾーンである。
皆の目が据わり、エースを睨んでいる中で穏がのほほんと聞いてみる。
「男と女の夜のお散歩ってなんだか嫌らしく思いませんか～？」
『『『答えろ！！』』』
面白そうに呟く穏の囁きにそろそろ皆も限界だそうである。
「いや、これはだな……」
冥琳は事態を治めようと弁明する直前、エースは考えていた。
周りから詰め寄られている四面楚歌の状況下で、それはもう冷静に考えていた。
（どうするかな……本当のことを言うとみんなも動揺するしな……）
そこまでは冥琳と共通の考えだった……のだが……
（それなら遊びに行っていたと言うか……一緒に酒飲んでたとか……でもこういう時って……なんて言うんだっけ……）
「どうしましたか～？　風達には言えないことですか～？」
「えっと……たしか……あ……」

『『『あ？』』』

頭を抑えて必死に偽りの状況を表すワードを振り絞るエースに冥琳は嫌な予感しかしていない。

「あ……あ……」

必死に、必死に記憶を振り絞って振り絞って……遂に思い出した。

「逢引き！！　冥琳と逢引きしてた！！」

この時、冥琳は思った。

（……終わった）

エースの一言は部屋の温度を一気に氷点下にまで下げた。

『『『……』』』

予想外なのは雪蓮、祭、穏もだったのか一緒になって固まっていた。

「じゃあおれはもう戻るな？」

室内の異様な様子に本能で気付いたエースは固まっている皆の横を通り過ごし、冥琳をベッドに眠らせた。

そして、そのまま窓から颯爽と出て行った。

辟易とした冥琳を置いて。

「れ……蓮華さま……皆も……」

『……』

不味い、非常に不味い。

早くこの部屋から出たい……けど動けない。

とりあえずこの状況を打破しなければ……

「あ……あの……」

必死に言い訳を探す冥琳。こんな状況に追い込んだ本人を恨む冥

琳は一つのセリフを思いついた。

だが、ここで冥琳は決定的で致命的な自分のミスに気付いていなかった。

ギギギと皆の首が動き、生気の無い瞳が自分を射止めるのに耐えながら言い放った。

「凄く……激しい夜でした（激しい治療という意味で）」

冥琳はミスを犯していた。

それは気付いていなかったこと。

寝不足と急な状況変化、気まずい状況下でのストレスで自分の頭も正常に働いていなかったということに。

## 医者と海賊とガチでイイ男（後書き）

実は……この小説と一緒に書いていきたい作品があるのですが、候補がありすぎてたまりません。僕はこの作品と一緒に書いていくのか、もしくはこの作品を終わらせてから書いた方がいいのか……教えてください！！

ちなみに作品はというと……

・ワンピースのオリ主で恋姫世界を外道に駆け抜ける（ヒロインへの容赦ない暴言あり）
・ワンピースのオリ主で時空管理局の弱みにつけこんで占領、もしくは破壊
・ブロリーを時空管理局へ漂流してきました。

この中からどれがいいですか？　ちなみに三番目のブロリーはネタなので微妙です。恋姫のワンピースオリ主はド級の劉備、北郷アンチが書きたかったのでキャラ設定は鬼畜、超自己中心的です。

ちなみにオリ主に言わせたいセリフは「てめえ等は落ちぶれたクズだ…最初から人権なんてねえ…クズはクズらしくそこらへんの壁のシミにでもなっててくれや」「手加減ってなんだ？」「ｆｕｃｋｙｏｕ、ぶち殺すぞゴミめら」「お前達を助ける義理なんかないよ、生ゴミが」などです

## 新たなる時代（前書き）

かなりやっつけで書きました……早くバトルが書きたい……

それと、夏休み中はストックを溜めるので、更新はチョビチョビになりますことを今の内にお詫びいたします。

それでは新章の『火拳は蜀へと赴く』をどうぞ！！

# 新たなる時代

「繰り返すために……また集まる気か？」

「う……」

とある島で男は泣いた。

あまりにも巨大な壁を知り……

信じていた者を救えぬ自分の弱さに絶望して……

だが、それでもまだ彼には残された物はあった。

引き離され、別々の地へと飛ばされた仲間。今の男に残された最後の希望。最高の宝。

その存在が男を絶望と悲しみの淵から救い出した。

そして今、男は最大の人生の岐路に立たされている。

「わたしから一つ提案がある……」

心身共に傷だらけ男に老年の男は問う。

「伸るか反るかはもちろん……」

覚悟はあるのか？　これから立ちはだかる強大な敵に立ち向かえるのか？

もう、前へ進めるな？

もう、仲間を失いたくないのだな？

短い言葉で数多の言葉を投げかけた男――シルバーズ・レイリーは男を試す。

彼が本物の海賊へと成長するのか……

彼にどれだけの可能性が秘められているのか……

「君が決めろ」

「……」

男はレイリーの言葉を聞いて頭の麦わら帽子を深く被り直す。

レイリーからの無言の問いを瞬時に理解した彼はレイリーへと向き直る。

「おっさん……おれは……」

その男――モンキー・D・ルフィは自分の中に芽生えた想いを言霊にして具現化させるのだった。

この時、レイリーだけが気付いたのかもしれない。

今まさに、新時代の扉が開かれた……

新たなる海賊時代がうねりを上げた……

現在、呉は魏からの襲撃を退け、国中が束の間の休息を満喫していた。

だが、そんな状況でも国の人間に休みはあまりない。次なる思案を練っていた。

「蜀への遠征？」
「ええ、この前の襲撃の時に魏……曹操の兵の規模を見て思ってたの……冥琳も同じ意見だし」
「でも蜀ともドンパチしようと構えてなかったっけ？」
城内の中庭で二人は酒盛りしていた。
傍から見たら職務怠慢で減俸物だが、会話の内容はこれからの未来を左右する内容だとは誰も思うまい。
「そうなんだけどね～……この前の曹操軍見て思ったのよ。ここから先は呉だけじゃあ勝てる見込みは薄い。魏はこの瞬間にも徴兵してるはず」
「おいおい、なんか穏やかじゃなさそうだな……やっぱり金の差か？」
「仕方無いでしょ。元々からあの国が異常だったんだから」
雪蓮はツンケンしながら酒を流し込んでつまみを手に握る。
「まあ、金以外にもなんかしてるのは事実。このままじゃあ倒すどころか勝負にならなくなるのよ」
「ふんふん」
「そして、蜀も状況的には私達と同じ、いえ、さらに風向きが悪いわ」
「あぁ～……それなら聞いたことがあるな。今、囲まれてるんだって？」
一緒につまみを食べながら、相づちをうっていたエースは蜀の状況を思い出して気の毒そうに顔を引き攣らせる。

「そ。西に五胡、南に南蛮が陣取って好き勝手やってるの」
「へ～……」
「そしてそこにあなたが親善大使としてちょっと行ってもらうの……この意味分かるわね？」
不敵に笑みを浮かべる雪蓮にエースは悟ったらしい。
「なるほど……同盟組んで曹操を迎え撃つ……そのための布石か……」
「ご明察」
満足そうに笑う雪蓮にエースも笑みが浮かぶ。
「まあ、それが定石ってかここまでしないとってところまでになってたか……」
「そうそう……そのためにも中途半端なのを送っても恩は売れない……だからこそのあなたなのよ。天の御遣いで名の通ってるエースの名を聞けばあっちも受けるしかない」
自信満々に言うその姿は正に小覇王の名に恥じぬ気迫があった。あぐらさえかいていなければパーフェクト。
「蜀かぁ……そういえばあっちには趙雲に恋、月や詠も…あとは華雄もいたな～……また会いてえなぁ……」
「あら、やっぱりあっちに知り合いがいたのね。なら余計に好都合ね」
「あ～……確かにな～……顔も合わせてるし」
「そういうこと。互いに知っている者同士なら少しは信用もできるんじゃない？」
「まあな、信用を得るのは生半可なことじゃあ為し得ないからな。

そこら辺は海賊も同じだな」
「なら話が早いわ……今度あなたに蜀に……あれ？」
そう言いながら盃の酒が切れていることに気付き、後ろに置いておいた酒壺に振り返らずに手を伸ばす。
しかし、いくらまさぐっても壺が無い。
「あれ？」
さっき間違いなく置いておいたはず……それが消えてることに疑問を持っていると……
「お探し物はこれですか？」
目の前にお目当ての物が現れたのに気付くと、雪蓮は嬉しそうに手を伸ばす。
「あら、こんなところに。ありがとう」
「いえいえ、むしろ感服しました。こんなところで堂々と酒なんて飲める胆力さに……」
「あれ？」
どこか聞いたことのある声だと思い、流石の雪蓮も声の元へ振り向いてみると……
「……こんな昼間っから政務ほったらかして酒に入り浸るとは何事です？」
そこには堅い堅い愛すべき妹の蓮華が額に青筋をたてていたわけ

で……

「さて、これから街への警邏警邏っと……」
「今日は内務の予定ですが？」

ムンズ、と首を掴まれ逃亡失敗。

「あ……」
「用事思い出したかのようにしてさり気なく去るな」

手をポン、と叩いてまでの芝居も失敗。エースも捕まった。

容赦無い蓮華にエースはウンザリしたように溜息を吐く。

「勘弁してくれよ～……また質問攻めは勘弁な」
「それはもう終わったし、元からどうでもよかったんだ！」
「にしてもお前等の食い付きが怖かったんだけど？」
「き、気のせいだ！！」

恥ずかしさに顔を赤くさせて蓮華は視線を逸らす。

ちなみに質問攻めとは、以前に起きた冥琳との夜這い疑惑のことである。本来ならどんな手を使ってでもキリキリと喋ってもらうところだったが、思考能力の回復した冥琳の説得が乙女達の行き場の無い感情を鎮静してくれた。

だが、それでも治まらず、全員で二人を質問攻めにしたのは記憶に新しい。

「あらあら、どうせ冥琳を連れて行くなら私もイイことしてあげた

のに♪」
「姉さま！」
「大丈夫よ。その時は蓮華も誘ってあげるから」
「姉さま！！！」

兵が見ているところで何をほざく……と思いながらも蓮華は姉のペースに乗っていると悟り、強引に本題へと持っていく。

「それよりも今日提出の案件はどうしました！？　こんな時間にこんなことしてるんですからもう終わってるんですよね！？」
「あぁ……そういえば……あったような……」
「……何か仰いまして？」
「あぁ、いや！！　あともう少し！！　うん！！　余裕で終わるわよ！！」

雪蓮の最後のほんの小さな声に蓮華の何かが臨界点を突破しそうになり、思わず殺気を出すと雪蓮も作り笑いで全力で誤魔化す。酒で火照っていた顔色も今ではすっかり元に戻っていた。

「そうですか……それでは部屋には風もおります。もし、部屋に行かなかったりしたら……」
「うえ……あの子意外と容赦ないんだけど……」
「でしょうね」
「うぅ～……お姉ちゃんをいじめて楽しいかーー！！」
「えっと、確か新しい剣の切れ味は……」
「行ってきま～す」

抗議する雪蓮に蓮華はどこからか鋭く光る剣を取り出す。それを見た雪蓮はすぐさま笑顔で城の方向へと体を反転させる。

その時、雪蓮の体から哀愁が漂った。

（冥琳……私どこかで育て方間違えたかしら……ていうか冥琳の影響じゃない？）

この時だけは姉としての威厳に疑問を持った。

「まったく……」

雪蓮が行ったのを確認すると、蓮華は剣を引っ込める。

そんな光景を見てエースは一言。

「やっぱお前等仲良いなー」

「……今のをどこをどう見たらそう見えたのかは敢えては聞かないわ……」

「なんとなくだよ。なんかどっちもイキイキしてた」

「そ、そう？」

率直な感想に蓮華は顔を赤くさせる。そこで蓮華は何かを思い出してエースに聞いてみる。

「そういえばエース……」

「？」

「あの……蜀に行くって本当？」

蓮華は少し不安そうに聞くと、エースはキョトンとしながら答える。

「さっきの話聞いてたのか？」

「え、えぇ……もしかして聞かれたくなかった？」

何か悪いことしてしまったかのように蓮華は不安そうに顔を目を背ける。その姿はそれはそれで可愛らしく、並の男なら並々ならぬ申し訳なさと護って上げたい衝動に駆られるほどだ。

しかし、エースは普通ではないので、何も感じることはなく、率直な意見を言う。

「そんなことはいいんだけどよ。なんかお前が暗くなったからな」

「そ、そんなこと……」

正直言えば不安は……ある……

よく考えてみればエースの人当たりの良さは確かに今回の遠征では効果的だ。それに加えて聞けば蜀にも知り合いがいるという。聞く限りでは真名も許されているだろう……

（エースなら短時間で打ち解けることも……もしかしたら真名を交換するかも……）

蓮華としてはそんなことしてはもらいたくない。

この世界での真名を許すことは心身共に信用し、場合によれば体と体を許すことと同じ。そもそもエースみたいに同時に複数の真名を受けることは大変珍しい。それも相手が異性ならなおさらだ。

（でも、問題はそこじゃなくて……）

百歩譲っても真名はいい。

なぜなら、蓮華それよりも恐れている仮定があった。

「どうした？」

「……蜀には仲のいい人がいるの？」

「おお、あっちには恋、月、詠や華雄もいるな。早く会いたいぜ」

「……ねぇ……」

「ん？」

蓮華はやっと聞こうと決心し、口を開く。

「……もし蜀が気に入ったら……どうするの？」

聞いてしまった。

何となく危惧していた。

エースは基本的に社交性があり、仲間と認めた者を愛して止まない。それは蓮華もよく知っている。

だからこそ、危惧したのだ。

もし、あっちで仲間ができたらエースは蜀に残りたいと言うのではないか？

もしくはそう思ってしまうのではないか？

（あっちにも大切な人がいる……エースはどう思うの？）

そうなったら私達はどうすればエースに振り向いてもらえる？

どうやったら自分達と一緒にいてくれる？

そんな疑問がさっきから頭をよぎっていた時だった。

「蜀が気に入ったら……エース……呉に帰らずに蜀に……」

不安そうに聞いてくる蓮華にエースは……

「……何言ってんだお前？」

「……？」

「おれはどこにも行かない。この戦が終わるまで護るって忘れたのか？」

何言ってんだ？　みたいに返すエースに蓮華も少し面を喰らってしまった。

「え……でも、あっちにも仲間がいるんでしょ？　心配じゃないの？」

蓮華の質問にエースは少し頭を掻く。

「心配じゃないさ。劉備は一見トロそうだけど根は真っすぐな奴だ。一目見てそう思ったから問題ない」

「……姉さまみたいに言うのね」

エースのポジティブシンキングに蓮華も少しクスっと笑みを零す。
どうやら幾分か安心したようだった。

「おれは仲間を裏切らない、裏切りたくない。そして信用したいし信用もされたい……なのにお前はおれを疑うのか？」
「そんな！！　さっきのは私の気の迷いで……！！」

心の底からの否定はエースの心を満たしてくれた。エースはここで面白そうに慌てる蓮華を見て一言。

「それじゃあここで約束してくれないか？」
「……え？」

いきなりの頼みに蓮華も動揺から一転して少し緊張してしまった。

一体なんなのか……

そう思っていると、意外な内容の約束を交わされた。

「おれはどんな時でも一緒にいる。どんな時でも信用するからお前等も……」
「……」
「おれを信用して、おれと一緒にいてくれないか？」
「！！」

その内容に蓮華は一瞬驚き、すぐに内容を理解して嬉しそうに答える。

「え、えぇ！！　もちろんよ！！」
（……本当に嬉しそうだな……）

エースとしては正直、ここまで喜んでくれるとは思っていなかった。その分に嬉しさも思った以上だった。

（……こりゃ、おれも頑張るかな）

蜀ではどんなことがあるのか。

どちらにせよ一悶着あるのは既に目に見えている。

だけど、こんなにも優しい仲間のためなら多少のことは我慢しよう。

顔をほんのり赤らめて優しい笑顔を浮かべる蓮華を見てまた一段とやる気を出すのであった。

「じゃあおれは警邏に行くけど蓮華も来るか？　少しは護衛として役に立つと思うぜ？」

「え？　あ、えぇっと……仕事は終わったわよね……よし」

「何だ？　止めるか？」

「ううん。私も行こうと思っていたの。護衛をお願いしてもいい？」

浮かれ調子から立て直し、同行を即決すると、エースは手を蓮華に伸ばしてイタズラっぽく言ってみる。

「承知致しました。姫様」

「もう、エースったら……」

二人の笑い声が中庭に響いたのだった。

次の舞台は蜀の益州。

次なる舞台はこの時代をどう左右させるのか……

今はまだ知らなくてもいい……

## 一休み企画『恋姫×〇〇』のプチクロス（前書き）

最近ではこの二つ作品を『火拳は眠らない』が終わったころに書こうと思っています。

・アンチと思っていたが、実はアンチではなく、単に主人公がグロイだけのグロテスク×恋愛×ハートフル×バトルアクション『恋姫×ワンピース』

・生まれてきたのは史上最悪の悪魔・ブロリーの息子！？　魔法とサイヤパワーが交差する時、物語は始まる。豪快超ド級×恋愛×チート×ハートフル×極力外道×バトルアクション『魔法少女リリカルなのは×ドラゴンボール』

これらなんていかがでしょうか？　考察してみたら色んな意味でカオスになって１５Ｒ……でも書いてみたい！！

その男は一度明確なる死を迎えた……

男の最期は燃え盛る炎、自身を愛し全てを理解した最愛の女の艶やかな死体、そして……

「和平を謳い、牙の抜け落ちた腑抜けた先輩……のはずだった……」

なぜ今ここにいる？　なぜ足を大地に付けていられる？

たしかに己が身は炎に包まれ、闇魔への道に誘われたはず……

だが、今では受肉し、包帯でこの身を包んだ生前の姿そのものだった。

なぜ？

そう思っていた時だった……

「よぉ……そこのお前……」

「あん？」

気が付けば囲まれていた。どうも頭がスッキリとしていないようだった。

「どっかから逃げてきたのか～？　全身包帯だらけじゃねえか～？」

「……」

「何ダンマリ決めてんだ？　何とか言えよ、え？」

頭に黄色い頭巾を被った雑魚か……腰には新井赤空作最終型殺人奇剣の『無限刃』も帯刀している……

「くくく……」

「あ？」

なぜだろうか、俺としたことが笑いが……

「くくく……っはっはっはっはっは……」

止まらねえよなぁ！！

「はーっはっはっはっはっはっはっは！！」

「な、なんだ……コイツ……」

「薄気味わりぃ……」

周りでは雑魚がさえずっているが、運がよかったなぁ……

俺は笑いを止めて刀に手を置き……

「しゃらぁ！！」

不意に目に止まった弱者の首を一閃。

それと同時に魂の抜けた骸を火葬してやる。

「ぎゃあああ！！」

「も、燃えた……妖術……化物……！！」

「このやろう！！　よくもやりやがって！！」

周りでは仲間が殺られたことに恐怖と怒りで逃げる者、俺に剣を向けてくるのまでいやがる……

そう、それでいい……それこそが俺の思い描いた世界、これこそが弱肉強食！！

「くくく……天も粋な真似しやがる……」

どうやら闇魔は俺を恐れ、また俺に“生”を与えた……存外、闇魔大王も腰抜けときやがった。

「まあいい……ここが地の獄だろうが浄土だろうが俺は……作るだけだ……」

それは創造という名の破壊

これは狼煙だ

「ここで準備運動も悪くねえ……かかって来いやぁ！！」

燃え盛る刀を振るい、男は向かってくる衆愚に突っ込んだ。

「た、たす……助けて……」

包帯の男が刀を振るってから一分、いや、一分も経たない内に周りを囲んでいた賊徒は無残な姿を現していた。

四肢は切断され、上あごと下あごが別々の場所に落ちていたり、体を縦に一刀両断など、常識では考えられないほど凄惨な死体が転がっている。

しかも、そのほとんどが突然出現した炎によって焼かれ、辺りには人を焼いた匂いが充満している。

「……一つ聞かせろ……」

「は、はい！！　なんでしょう！！」

男は刀の血を無造作に払いながら一人だけ残った輩に尋ねる。

「ここはどこだ？　なんて地名だ？」

本来なら頭がおかしいと思われる質問だが、聞かずにはいられなかった。

自分は今まで京都の山奥にいたはずだが、今さっき気付いてみればどうだ。

そこは京都でもなければ山でもない。

無限に広がる荒野しかなかった。

男が思案していると、輩が縋るように説明を続けてきた。

ここはどうも聞いたことがない地名、年号も大分過去のもの、しかも聞けば自分達は黄巾党だという。

「……なるほど……よく分かった……」

「そう、ですか？　それならわたくしは……」

「ああ、感謝しよう」

「へ、へへ……」

男からの礼の言葉に輩――――黄巾党は助かったと思い、力無き歓喜の声を上げるが……

「てめえは俺の糧となった」

「へ？」

それが黄巾党の最期に聞いた言葉となった。

無造作に黄巾党の頭を刀で寸断した男は、力無く倒れ、燃える肉塊に目もくれずに思案に浸る。

（益州……霊帝……曹操……袁術……袁紹……どれもこれも三国時代の縁の名ばかりだ）

三国時代――過去の中国にて三つの国の間で行われていた戦の時代。

一応は基礎知識だけ覚えてはいたが、そこからの深い知識はない。

だが、問題はそこではなく、なぜそんな時代、舞台に自分がいるのかだった。

あまりに不可思議な現象の連続に男は頭を悩ませていると……

「もし、そこの御方」

不意に背後から聞こえてきた声。さっきまで気配がなかったのに、今なら感じ取ることができる生気。

まるで、“急に”その場に表れたかのような感じだった。

だが、男は驚きどころか大した反応も見せずに振り向かずに問う。

「何だてめえは」

「おや？　私の出現に驚かないとは……中々に肝が据わった方ですね」

「こっちは闇魔大王の呪詛も聞かされずに訳わかんねえことになってんだ。てめえが現れようが何しようが驚く気にもなりゃしねえ」

「そうですか」

突然に現れた眼鏡の男性はおどけながらも包帯の男の胆力には素直に驚いていた。

「それで何だ？　てめえも燃やされたいクチか？」

「いえいえ、私……私達は貴方と手を組みにきたのですよ？」

「ほう……聞こうじゃねえか」

男は眼鏡の男性の話に少しだけ興味を持つ。

先程から男から発せられている隠し切れていない狂気は包帯の男に恐怖を与えるどころか興味を抱かせるものだった。

そんな男の心情も知らずに眼鏡の男性は社交辞令とばかりに頭を下げる。

「その前に名乗らせてもらいます。私の名は于吉と申します。どうぞお見知りおきを……」

「于吉か……俺も名乗ってやろうか？」

「いえ、貴方の名は存じておりますよ。真なる支配者の鏡となる貴方様のお名前を知らずに尋ねるのは失礼というもの……」

挑発気味に返す男の言葉に于吉と名乗る男の顔が狂気に歪み、歓喜に口端を吊り上げながら一人の男の名を口にする。

「そうは思いませんか？……志々雄真実（ししおまこと）さま」

この時、この国の未来が変わった。

三国三つ巴の戦乱に一人の男が地獄から蘇った。

『弱肉強食』の信条を胸に秘めた修羅の産声に世界は震えたのだった……

## 一休み企画『恋姫×〇〇』のプチクロス（後書き）

今回は息抜きとして書いてみました。しばらくはこういうのが続きますのでご了承ください……

志々雄さまマジで志々雄さま！！　和月さまへ悪のカリスマとしてこんな最高のキャラを世に生み出してもらってマジでリスペクトです！！

次回はあのキャラが外史に降り立ちます！！

## 一休み企画『恋姫×〇〇』のプチクロス2（前書き）

弱者を糧にする、という共通で今回は“あれ”が登場しますのであしからず

# 一休み企画『恋姫×〇〇』のプチクロス2

地獄から蘇った元・『人斬り抜刀斎』の後継者である志々雄真実が三国時代の地に降り立ってから一日が経った。

その間に突如として現れた于吉と名乗る男からあらかたの事情を受けた。

なぜ、蘇ったかというと、正直なところ分からない。だが、今回のように死んでから外史で蘇るのは時たまあるらしい。とは言っても、志々雄自身はそんなことはどうでもいいらしい。

そして、この世界の武将が全て女性であること、天の御遣いと名乗る北郷一刀なる者が現れて歴史を変えたこと、歴史が変わって三国同盟が成り立ったのがこの世界だという。

それを聞き終えた志々雄は邪悪な笑みを浮かべて于吉の目を見据える。

「なるほど、つまりてめえ等はその『北郷一刀』というガキをぶっ殺したい……そういうことだな？」

「ええ、貴方のように運命的にこの世界に流れたならともかく、北郷一刀のようにイレギュラー……失礼、異なる方法でこの世界に流れ着いた者は我々にとって邪魔なのですよ」

「なら何故てめえ等が殺らねえ？　聞けばそのガキは腑抜けた日の本から来た只の平和ボケのガキだろうが」

「そうしたいのは山々なのですが……我々のような『世界の管理者』は堂々と動けない理由があるのですよ」

それを聞いた志々雄はしばらく考え込むが、すぐに于吉の双眼を見据える。

だが、それは睨みとも取れ、普通の……いや、並の実力者でも失神させるほどの威圧感が伺える。

「俺がそんな話をはい、そうですかと受けると思ったか？」

「いえ、これは個人的な頼みですよ。受けるかは自由にしてもらっても結構」

志々雄の殺気を一身に受け、于吉は圧されながらも当たり障りの無い応えで志々雄の反応を促す。

于吉の意図に気付いた志々雄はすぐに殺気を抑え、再び悪魔の笑みを浮かべる。

「なら、俺の好きにさせてもらおうか」

「と、言いますと？」

志々雄は口を吊り上げる。

「元いた時代は『俺』という新時代を恐れ、この時代は俺を呼んだ……つまりだ」

志々雄は握り拳を作って于吉に歩み寄る。

「この世界は腑抜けた時代を嫌い、俺を望んだ……ならばやることは一つだ」

于吉の横を通り過ぎてその場を後にしようとする。

志々雄としては話は終わったつもりだが、于吉は違った。

志々雄の殺気、覇気を垣間見て思った。

彼は間違ってもここでくすぶるようなことはしない。すぐにでも行動を起こすはず。

そして、その行動はこの世界に変革をもたらす……と。

「待ってください！！」

根拠もなく、そんな結論に至った于吉は志々雄を呼びとめる。

志々雄は立ち止まり、振り向かないまま耳を傾ける。

「やはり、貴方は私達の思った通りの方です……貴方なら私が言わずとも目的を果たしてくれます」

「……」

「決して貴方の邪魔は致しません……ですからせめて私の提案を一つ聞いてくださいませんか？」

于吉はここで自分の考え得る、最高の提案を持ちかける。

「貴方を……戦えるようにしましょうか？」

「何だと？」

ここで初めて志々雄は驚愕の色を見せた。

「ここですよ」

時刻は夜、誰もいない荒野に志々雄と于吉はやって来た。

「時間はピッタリですね……もうすぐ来ますよ」

そう言ってから本当に一分もしない内に、暗闇から『そいつ』は現れた。

「やあ、久しぶりだね于吉」
「相変わらずですね。キュウべぇは」

暗闇から聞こえてきた子供らしい声。

だが、姿は赤い小さな瞳の四足歩行の白い獣。明らかに獣ではない。

志々雄は初めて見る喋る動物に目を見開いて驚く。

だが、于吉とキュウべぇと呼ばれる獣は話こむ。

「この前も于吉のおかげで契約がとれたよ。毎度助かるよ」

「いえ、そちらのインキュベーター一族との仲であり、私の同志なのですからあれくらいは当然です」

双方の間では前々から交流のあるような物腰で話し合う様子に志々雄もここで分かってきた。

あのキュウべぇという獣も碌な生物ではない……と。

思うに、于吉は自分の目的のためならどんな犠牲も厭わない。しかも、どう見ても善人ではなく、狂人だ。

そんな人間と対等に渡り合えるのは同じ狂人しかいない……と。

(俺も人のこと言えねえがな)

そんな狂人に付き合っている自分も充分狂っていると自覚して独り笑いを浮かべていると、その獣が自分の所に来たのに気付いた。

「なるほど、おじさんが僕に願いを叶えてほしい人かぁ」

「ほぅ……てめえが俺の火傷を治せると……そう言いてえのか?」

「うん。于吉には色々と世話になってるね。この世界の女の子と無条件で魔法少女の契約を交わす契約を結んでもらう代わりにおじさんの望みを叶えろ、とまぁそういうことさ」

「望み……それはどの程度まで可能だ?」

「彼なら少なくとも死者くらい蘇らせることも可能ですよ」

会話に于吉も加わり、キュウベぇの有用さを饒舌に唱えると、志々雄は顎に手を付けてしばらく考える。

「大抵は僕が望みを叶えて、女の子をまほ……じゃなかった。不死身の戦士にして妖怪みたいな物と闘ってもらうんだ」

「……」

「でも、于吉の頼みだということと、おじさんが男だからね。今回だけ望みだけ叶えてあげるよ。その姿を元に戻すとか」

表情一つ変えずに提案してくるキュウベぇに志々雄はと言うと……

「はっ！！」

とうとう堪えられずに笑い声を上げる。

「この姿を元に戻す？　ふざけんじゃねえぞ。俺は今でもこの姿を気に入っているんだよ」

「全身包帯巻かれて化け物みたいなのにかい？」

「ふん、この姿でも女からの受けもいい。それに暗殺の際の俺の戒めでもあるんだよ」

「分からないね。女の子にモテるのはともかく、戒めとか……人間のそういうところが分からないね。理解できないよ」

小首を傾げてる珍獣に志々雄は屈むかのようにドカっと座り込む。

「それもそうだ。さっきから見てりゃあ、てめえには感情がねえからな。分かる訳ねえよ……一生な……」

「それもそうだね……考えれば種類からして違ったからね」

「聞けばてめえは無駄なことはせず、利だけを求めるらしいな」

「うん。だって無駄なことは無駄でしょ？」

どうやらこの獣は徹底した合理主義だな……

まあ、そんなこと知ったことではないのだが。

「そうかよ……だったら無駄な話は止めて本題に入ろうじゃねえか」

「そうだね。おじさんの様に無駄な話を省く所なんて結構好きだよ？」

「はっ！　てめえに好かれてもこっちに利なんざねえよ」

「そうだね。それじゃあおじさんの願いを叶えるよ」

一人と一匹は互いに向かい合う。

本来ならこの邂逅を誰かが止めるべきだった……どんな手を使ってでも……

だが、それは敵わなかった……

「それで、何が望みなんだい？」

今、この瞬間に……

「そうだな……色々と注文はあるが……まずは……」

長い戦いを経て迎えた歴史が……

「“十本刀”の再結成……今んとこはそれだけだ」

終わりを告げる……

## いざ、蜀へ！！……の前に（前書き）

お待たせしました！！　感想にも書いたのですが、プチクロスはあくまで思いついたことなので連載はしませんし、この小説を終わらせる気もありません！！　ただ、今回はストックを作っているだけなのでそこのところを御理解ください！！

## いざ、蜀へ！！……の前に

「見て見てエース！　これも可愛いよー！！」
「これか？　なんか可愛いっていうより禍々しいって言ったほうが……」
「いやいや、私はなんだかノホホンとして落ち着くと思うのですが～」
「なんか意見の食い違いが激しいんですけど！？」

現在、とある店では大変珍しい客が買い物に来ているため、周りの人から注目を集めている。

それもその筈、なんと一つの店に城の重鎮が勢ぞろいで買い物に来ているのだから。

エースはもちろん、小蓮、穏、蓮華といった言うなればＶＩＰが勢ぞろいしているのだから。ちなみに蓮華は他の三人を抑えに来たつもりである。

そもそも、今回の買い物はシャオの提案によって始まった。

エースがしばらく蜀に行ってしまうとのことでしばらくは一緒に買い物できない。そのためにも少しくらいは買い物に付き合って欲しいウンタラカンタラ。

最初は蓮華はエースに迷惑だと妹を叱責したが、ここで口げんかになりかけた。気の強い同士のぶつかり合いを予想し、エースは何か買ってやると宥める。

その応対にシャオは大いに喜び、蓮華は申し訳なさそうにしながらもシャオが心配とのことで同行を決めた。その中には面白がって便乗してきた穏もいたことは偶然だろうか？

「だ、大丈夫か？　結構高価なものを買わせてしまったようだが……」

「大丈夫大丈夫。しばらくはここには戻ってこねえし、こっちの金はあっちじゃ使えねえからここで使うのも手だろ」

「そうそう。呉には呉の、蜀には蜀の通貨があるんだから」

「シャオ！！　あなたはもう少し遠慮を覚えなさい！！」

「いいじゃん！　エースが買ってくれるって言ったんだから！！」

「もういいって」

「うわ！」

「キャ！！」

また喧嘩しそうな状況になってきたので、エースはまた二人をなだめる。今度は強引に首筋を掴んで。

「だから喧嘩すんなって、こんなことさせるために買い物に来たんじゃねえんだぞ」

「ご、ごめんなさい……」

「ぶー……分かった……」

二人も公衆の面前ということもあってかエースの言葉を素直に受けて大人しくなる。

「お見事ですね～。なんだか二人のお兄さんみたいでしたよ～？」

「まあな、今日まで一緒に過ごしてきたんだがよ、シャオはともかく蓮華も意外と危なっかしいことが分かってたからよ」

「なっ！！」

「おっと、反論は無しだぜ？　今ここで感情に流されようとしてたろ？」
「むぅ……」
「シャオもな」
「……はぁい」

むくれながらも反省した二人を確認してから首筋を離してやる。
そんな様子を見ていた穏は少し感心した。

「なんだかすごいですね～……あの蓮華さまもエースさんの前では妹ですね～」
「こういう手の奴とは結構関わってるからな。付き合い方もわかるさ」
「なんだか雪蓮さまよりも『きょうだい』って感じがしますね～」
「あれでこそ雪蓮だからいいさ。それよりもお前の買い物はいいのか？」

話題を切り替えると、穏は凄く嬉しそうに持っている数冊の本を胸に抱き寄せる。

「はい～♪　私の欲しかった本を買ってくれてありがとうございます～♪」
「そりゃあ買った甲斐があったってもんさ」
「私～、エースさんのそういうところ好きです～」

そう言って腕に抱きついて豊満な胸を押し付けるが、エースはどこ吹く風かいつも通りだった。

「分かったから離れろ。歩きにくい」
「む～……反応悪いです～！　もうちょっとムラムラしてください

～！」

「ムラムラってなに？」

腕に組みつきながらいやらしい体をクネクネといやらしく動かす穏に気付いた蓮華とシャオは感情の矛先を変える。

「エース！！　あなたはなにをしてるの！！」

「穏！！　抜け駆けは止めてよね！！」

このショッピング、静かには終わらない。

顔を赤くさせて訳も分からずに詰め寄ってくる蓮華の説教を聞きながらエースは思った。

でも、これでこそこの国の風景であり、楽しいと思うから別にいいと思っていた。

「あ、やっと来たわね」
「やっとか……」
「買い物は楽しかったですか？」

そして、城へ帰って中庭に戻ってきたエースを待っていたのは雪蓮、思春、明命の三人だった。丁寧に武器の手入れもして。

「なんか待たせたか？」
「いいえ、体も温めてたしいい感じよ」

そう言うと、三人は武器を抜いてエースと対峙する。

「え？……なに？」

いきなりの展開に蓮華は付いていけてない様子。なにせ、一緒に帰ってきたと思ったらエースが三人と今まさに矛を交えようとしている。ガチで。

「蓮華さまに小蓮さまと穏！　こっちじゃこっち！！」

「祭？」

訳も分からずにつっ立ってた買い物組を呼んだのはエース達と随分離れた場所で傍観していた祭だった。手招きしていたから蓮華たちも祭の傍まで寄ってきた。

「どうしたの？」

「どうしたじゃありませんぞ。あのままあそこにいたら戦いに巻き込まれておったのに」

「戦いって、これからですか～？」

「もちろんじゃよ」

穏のゆっくりな問いにやや投げやりに短く返す。

「しばらくの遠征で手合わせできなくなるというのに……儂は一対一でしたことがあるとかでのけ者にしおって」

「「「……」」」

むくれる祭に三人は苦笑するしかなかった。話を変えるために小蓮は咄嗟に新たな話を振る。

「でも結構大変じゃない？　これから蜀に行くっていうのに」

「そ、そうねぇ……せめて休ませても……」

蓮華は妹のフォローに心で感謝しながら便乗すると、祭は気を取り直す。

「そこは心配ありゃせんよ。無理に休むよりもこうやって余分な力を抜くのも一つの手。力が有り余ってる男にはちょうどいい息抜きじゃよ」

それは相手を選べ、と言いたいところだったが止めた。いくら相手が雪蓮、思春、明命の三人同時だとしてもエースなら張り合えそうで怖い。

いや、そもそも雪蓮たちが三対一の勝負を仕掛けてきたところでそうでもしないと張り合えないと判断したのだろう。それでも祭を入れなかったのは武人として、正々堂々の信条を表したのかは微妙ではあるけど。

「それに準備なら鈴仙と亞莎がしてくれているから大丈夫じゃよ」

「ぶ～……あの二人だけエースと同伴で蜀に行くんだっけ？　ズルイ～」

「そう言わんでくだされ小蓮さま。亞莎と鈴仙にはミッチリと経験を積ませると冥琳の意向でもあるのじゃ」

「鈴仙はいいけど亞莎は軍師として療養中の冥琳の補佐をしなきゃいけないんじゃない？」

納得のいかない小蓮は亞莎の同行に疑問を持っていた。

以前の冥琳の病気は皆には過労と説明したため、現在の冥琳は自室で療養中である。

しかし、本人の性分なのか放っておくと重要でなくても簡単な仕事にまで手を出すのが周りの悩みとなっている。

そんな時での亞莎の遠征は危険ではないか？

小蓮なりに冥琳への心配と亞莎の能力を考えて抗議したこともあった。

しかし、その弁も祭が論破する。

「それでも大丈夫じゃよ。待女に見張らせてる故、そんなことは起こらんし起こさせん」

「でも～……」

「それよりもホレ、あっちが始まるぞ」

まだ言い足りない小蓮を遮った祭が中庭に指を指すと皆もその方向に目をやる。

すると、そこにはジリジリと間合いを測る呉の戦士とメラメラと焔を纏った漢がいた。

「そういえば雪蓮と明命とは初めてやるっけ？」
「そうよ？　本当は一対一でやりたかったんだけどちょっとね……」
「？」

苦い顔で城の一部分を見つめる雪蓮にエースは首を傾げる。たしか見つめてるところは冥琳の部屋だった気が……

そんな疑問をかき消すように今度は明命が元気に答える。

「私も初めてです！！　今回は手合わせに誘ってもらって至極光栄です！！」
「そうか……そりゃこっちも頑張らねえとな」
「はい！　少し状況も卑怯な気がしますが、勝てるように頑張ります！！」

人懐っこい笑みを浮かべての返事に頬も緩みそうになるが、すぐに気を引き締める。

今、この場においては戦場。

それを察してか雪蓮たちの表情も武人のソレになっていた。

もう戦いは始まっていた。

「……」

おそらく攻め方を決めあぐねているだろう雪蓮たちは中々動こうとしない。

離れれば炎の雨に晒される。

近ければ肉迫した文字通り燃える戦いとなる。

どちらにせよ不利にはちがいない。

だからこそ今回は多勢で攻めるのだ。

そう考えていたが、もちろん相手の知ったことではなかった。

「行くぞ」

「「「！！」」」

エースの一言で三人は身構えるが、それよりもエースの反応が速かった。

「火銃！！」

「くっ！！」

エースの指から高速の火の弾丸が向かってくる。

「散開！！」

「「応っ！！」」

雪蓮の合図によって三人はそれぞれ別の方向に逃げる。

しかし、それでは終わらない。

「落火星！！」

高速で火の球を打ち上げ、三人は華麗な身のこなしで避けるが、予測できていたかのようにエースは次なる用意をする。

逆立ちし、高速で火を纏った足を広げながら回転し、

「火斬車！！」

炎の刃を３６０度全方位に放った。

「ふっ！」

「ちぃ！！」

雪蓮と思春は咄嗟に屈んで避けたが、一瞬だけ反応の遅れた明命は違った。

「うわぁ！」

避けれないと判断してか武器で受け止めてしまい、衝撃に負けて小さい体ごと弾き飛ばされてしまった。

「はぁ！」

「せりゃ！」

飛ばされた明命を気にする余裕のない二人はできるだけ最小限の動きで、素早く自分達の間合いに入り込んだ。

だが、問題はここから。

エースの体術と身体能力はハッキリ言って桁違い、規格外と取っても過言ではない。

「おっと」
「なっ！」

振り下ろした思春の刃の腹を器用に手の甲で払いのけ、剣をふんづけて抑える。

背後から雪蓮が南海覇王を振りかぶって斬り裂こうとするが……

「あめえ！」
「え！？　きゃあ！」

思春の剣を掴み、逆立ちの恰好で雪蓮の剣を足で真剣白羽取りを決める。そして、足に力を入れて剣を握った雪蓮を思春の脳天に叩き落とす。

「うおお！！」
「ッ！！」

しかし、思春は剣を力づくで無理矢理払いのけてエースを払った。その際に宙に浮く形となった雪蓮は地面に器用に受け身を取ってすぐに立ち上がる。

「狐炎輪！！」
「きゃあ！！」
「うわあ！！」

払いのけられたはずのエースは体の一部の炎を狐に変えて二人に突出させる。

すさまじい速さの狐の突進を間一髪で避けたが、背後で狐が爆発を起こし、二人は衝撃に体ごと吹き飛ばされた。

（やべ！）

流石にやり過ぎたと思ったエースだが、彼は油断していた。

「はあああああ！！」
「せりゃあああああ！！」
「！！」

爆風に飛ばされていた二人は逆に爆風を利用してエースに突進しながら剣を振るってきた。

「ちっ！」

珍しく舌打ちしながらエースは並々ならぬ跳躍で二人の攻撃を交わした。

避けられた二人は地面に何回も何回も転げながら地面に叩きつけられる。

しかし、二人の擦り傷と土にまみれた顔にはしたり顔が映っていた。

「明命！！」
「そこだ！！」
「！！」

二人が名前を呼ぶのと同時にエースは背後に急に感じた圧力を頼りに振り向く。するとそこにはエースよりも高い位置から剣を振りかぶる明命がいた。

遠距離、中間距離、近距離戦闘で言えばどれをとってもエースに敵うには程遠い。

エースには敵うことは有り得ない。

だが、勝つ可能性は零ではない。

そのためには一人だけじゃあ為し得ない。

確実に信用できる仲間との共闘で初めて可能性が生まれるのだ。

（少し卑怯だけど今回は意地でも勝たせてもらうわ！！）
（私達に注意を引きつけさせてからの奇襲……古典的だが最善の一手！！）

ましてやエースは宙に浮いたまま態勢を崩している。

並の相手ならこれで終わり！！

これで詰みだ！！

「なんて……思ったか？」

「「「！！」」」

しかし、相手は並だなんてとんでもない。

「狙いは良かったし、おれも油断してたが……」

相手はなにせ規格外なのだから。

「まだまだ爪が甘かったな……炎戒！！」

エースは自身を炎で包みこみ……

「火柱ぁ！！」

巨大な火柱を中庭の中心にぶちこんだ。

「きゃあ！」

「うわあ！」

「にゃーーー！！」

雪蓮と思春は地面に四つん這いになっていたのに、爆風によって再度、紙のように吹き飛ばされた。同様に明命も熱による風圧でさらに高く打ち上げられてしまった。

「「「……」」」

「ま、まぁ……なんじゃ、本人にとっては息抜きなんじゃろ？」

熱風を受けながらも蓮華たちは呆気にとられ、祭もこればかりはフォローできずに頬を掻いた。

「やりすぎじゃ……」

焼け野原と化した中庭を見てそう小さく呟いた。

「そんじゃあ行ってきます！！」
「ええ、あっちで同盟破棄なんてしないようにな。鈴仙と亞莎も補佐をしてやってくれ」
「「はい！！」」
「それと浮気は見逃さないでくださいね～」
「「もちろん！！」」

決闘から少しの時が経ち、風と療養中のはずの冥琳は門前で見送りに来ていた。

とはいっても多少の出歩きも許可されているから問題はないのだが。

「とは言ってもあっちでは嘗められることはするなよ？」
「あっはっはっは……それは有り得ないでしょーが」
「またいつかご指導お願いします！！」

思春、雪蓮、明命もまた見送りに来ていた。ボロボロになりながらも。

「そういや蓮華は？」
「あの子はいつも通り仕事よ。黙ってろって言ってたけど、結構心配してるから察してあげてね」
「女の心は複雑なんじゃよ」
「ふーん。ま、いっか」

軽く返しながらエースはショルダーバッグを肩に担ぎながら城門を出ていく。ついでに言えば、小蓮も穏のお付きで勉学に励まされている。

その先には準備を整えた鈴仙と亞莎がエースを待っていた。

「じゃーねー！　吉報待ってるわよ！」
「亞莎も鈴仙もたっぷりと揉まれて来い！！」

雪蓮と祭の激励に習って亞莎も鈴仙も手を振ってそれに応える。

そして、今回の作戦の要であり、隊長であるエースはというと……

「たしか益州は餃子が有名だったな……」

作戦のことなど頭の中から消えていた。

「……不安だ」

一抹の不安を覚えた冥琳はもう一人だけお供をつけようとも思った。

「いや、既に蜀にも文は送ったし、大丈夫だろう……多分……」

考えるとまた胃がキリキリと痛んできた気がした。

「冥琳さん。心配せずとも大丈夫ですよ」

「……風よ。この世に『確実』なんてことはないのだよ……」

風のフォローを空しいと思いながら結局はその虚実を受け入れるしかなかった。

早くこの一カ月は何も考えず過ごしたい……

そう思いながら城に戻っていく冥琳の後ろ姿はどことなく儚げだったという。

同時刻、蜀と名を変えたばかりの国の中心では会議が行われようとしていた。

「皆さん、席につきましたね？」

今や、“天下に伏龍あり”とまで謳われ、後の“知”の象徴にまで讃えられる少女・諸葛亮孔明。

「それではこれより始めます。議題は……」

全武将を見据え、小さい体で堂々と宣言する。

「これから起こるであろう呉の持ちかける協定についてです」

自国の命運を左右する予定調和の是非を全員に求めたのであった。

## 動き出した蜀（前書き）

このごろ気持ちが揺らいでいます……『ＧＴ後のベジータがリリカル頑張ります』又は『ブロリーの弟がリリカル頑張ります』のどっちもが書きたくてしょうがない……ブロリーの弟を書いたら某ハンターマンガの護衛軍を率いた蟻の王さまみたいな性格と口調になってしまった……

## 動き出した蜀

エース一行が呉を発っていた時、目的地の蜀では軍議が行われていた。内容はもちろん、予想される呉との協定についてである。

「協定って……いくらなんでも考えすぎじゃないのか？」

初っ端から諸葛亮に異議を求めたのは、今や『劉の青龍刀』で名を轟かせる関羽だった。

「この大陸の勢力はもはや我等と曹操、孫策と言ってもいいのだが、そんな連中が簡単に手など結ぶか？」

「ここまで自身の力で大きくしてきた国を簡単に引き合いに出さない……愛紗さんはそれを懸念しているんですね？」

「あぁ、それぞれが天塩にかけて大きくしたのだからその国を自分で……」

「ですけど、孫策さんはそんなことで自分の国を破滅させるほど愚かじゃないと思うんです」

その言葉に関羽は黙り、諸葛亮の言葉に耳を傾ける。関羽自身もそうは思っていた部分もあったようだ。

そんな諸葛亮に同意するようにここで恋が珍しく話に加わる。

「あっちにはエースもいる……たとえ孫策が暴走しても止めてくれる」

その一言で恋に全員の視線が集まった。何気なく出したその名を知らぬ者はおらず、それ以上の情報が分からぬ謎の豪傑なのだから

当然の反応と言えるが…

「でもさ恋。その火拳って奴のこと知らないんだけど、どんな奴なんだ？」

「いい人」

「いや、そういうことじゃなくて……」

「？」

それ以上に何がある？　と言う風に首を傾げる恋に最近入ってきたポニーテールの女性…馬超は苦笑する。

「まぁ……恋さんの言うことはともかく……今回の呉からの使者のことと関係があるんです」

「どういうことなのだ？」

苦笑はするも、すぐに真剣な表情になる諸葛亮に張飛は首を傾げる。

「実は、つい先程に呉からの手紙が来まして……協定の使者が送られることになったのです……」

その言葉で全員、特に関羽が大きく反応する。

「使者ってことは、だれか来るんだよね？　誰だろう？」

その中でも劉備は大したアクションも見せずにいつも通りに聞いてくる姿に全員は少しコケる。

「あの……それはつまり他国の人間がここに来るってことですよ？」

「うん。そうだよね」

「……」

少なくとも劉備はこれから来る使者が他国のまわし者ではなく、客としか思っていないことに少し不安に思うが、警戒は自分達がやろうと決心して話を進める。

「それで、その中身に朱里ちゃんが気になるほどの問題があったの？」

「よもや『呉から使者が来るので快く向かい入れましょう』なんてだけで呼んだんじゃあるまい？」

皆の疑問を代表して上げたのは、近頃に蜀の武将入りを果たした妙齢の女性である黄忠と厳顔である。

「はい、紫苑さんと桔梗さんの言う通り、少し皆さんに承知して欲しいことがあって呼びました」

「ほう……我等が軍師の捨て置けないことが……内容は？」

趙雲の問いに、今まで静観してきた鳳統が説明を受け継いだ。

「いえ、内容自体は使者のことや今後の関係についてだったのですが……問題は使者として来る人なんです……」

「？　何か問題でも？」

更なる問いに諸葛亮は淡々と話を続ける。

「……派遣されてくる主な武将は程普さん、呂蒙さん、そして……火拳のエースさんです」

『『『なに！？』』』

「なんだと！？　それは本当か！？」

「はわ！！」
「あわわ！！」

最後の名前にほぼ全員が驚愕に目を見開き、華雄だけがその報せに声を張り上げて机を這う。そんな華雄に諸葛亮と鳳統は怖くなって身を引かせる。

火拳のエース……今の時期で最も名を轟かせ、最も強いとされる謎の人物。

一人だけで一個師団と同等……もしくはそれ以上の実力を有するとされる別名『灼熱の御遣い』

そんな大物が来るとすれば驚かずにはいられない。

ましてや、実力のほんの一端を垣間見た関羽、張飛、趙雲は驚きの色を周りよりも濃く見せていた。

「うわ～……あのお兄ちゃんが来るのか～……」
「朱里！！　いくらなんでもそれは危険すぎる！！　まだ呉の連中の腹の内が分かってないんだぞ！！」

呑気に驚く義妹を無視した関羽はすぐさま呉からの受け入れに異議を申し立てる。

そんな関羽に新参の魏延が得意気に語る。

「おいおい。『天の御遣い』なんて胡散臭い奴に少し過敏すぎやしないか？」

実力を生で見たことの無い魏延はエースをそこいらの祀り上げられた雑兵としか思っていない様子だった。

そんな魏延に趙雲は少しイラッときたのか少し棘のある含みで返す。

「なら焔耶よ。お前は紫苑ほどの弓の使い手と私を同時に相手にすることができるか？」

「い、いきなり何だ？」

「で、どうなんだ？」

趙雲の深い追究に若干怖気づきながらも率直に返す。

「そうだな……紫苑の正確無比、神速と神業級の矢を防ぎながら星の神速の突きを受け流せと……そんなの今の私に無理に決まっている」

何を当たり前なことを……といった風に答える魏延にちょっかいをかける者がいた。

馬超と同じくして蜀入りした馬岱である。

「脳筋のくせに自分の実力を自覚してるんだ……後でエサあげようか？」

「……その前にお前の顔面に鈍砕骨をぶちかましてやろうか？」

「上等。やれるものならね」

「いいだろう。殺してもかまわないな？」

馬岱と魏延の間に不穏な空気が流れるのに皆は呆れる。

「いい加減にしないかバカ共！！」
「ぐえ！！」
「うぎゃ！！」

そんな二人を拳骨で鎮めるのは厳顔だった。

この二人の小競り合いはいつものことなのか、厳顔の捌き方はとても手慣れたものだった。

「いった～……あんたのせいで何でこんな目に……」
「貴様が何もしゃべらなければこんなことにはならなかったのだ」
「なに？　やる気？」
「なんだ？」
「懲りるということを知らんのか？　お前達は……」

指をコキコキ鳴らしながら二人を睨む厳顔にぶり返そうとしていた二人は作り笑いを作って席に座る。

そんな様子を黙って見ていた趙雲は溜息を吐いて話を戻す。

「はぁ……話を戻すが、焔耶の言う通り夏侯淵と私は一度だけエースと対峙し、戦った……が……結果は惨敗。良い勝負すると思っていたのに互角どころか遊ばれた挙句に逃げられてしまった……」
「うえ！？　星姉さまを相手に遊んだって……夏侯淵が足を引っ張ってたの？」
「いや、むしろ何度も助けてくれた……奴がいなければ闘いにすらなっていなかったのやもしれん」
「それにエースは一対一で恋に圧勝したこともあるな」

趙雲の次の華雄の言葉に馬超を始めとした新参の武将は驚きに目

を見開いた。

蜀の武将入りしたとはいえ、飛将軍の強さは既に認識済みである。正直言えば一生をかけても恋には追いつけないとも思っていた。

だが、上には上がいた。

皆の中の火拳のエースという存在はもはや軽いものでは済まなくなってしまった。

もし、その話が本当だとしたら危険ではないのか？

ただでさえ術を使うとのことで怪しさ全開だというのに、その上武力は豪傑以上。

そんな人物が使者として来るのだから緊張し、身構えるのも当然と言える。

「確かに危険だと思われるのも無理はありませんが、こうも考えられませんか？」

緊張に包まれた雰囲気を悟り、諸葛亮が手を顎に当てて問う。

「今や御遣いの名で轟くエースさんは民衆から無類の指示と信頼を受けているのは斥候からの情報で事実。しかもこの前の件で更に評判も上がっているのはご存じですよね？」

「そして、その御遣いさんの警護で犯罪率は激減です」

「にゃ？　それがどうかしたのか？」

張飛と他の武将は諸葛亮と鳳統の言いたいことが分からなかった

ようなので丁寧に説明した。

この前の件とは雪蓮の暗殺のことである。その際に雪蓮を救出したエースは自他国認める本物の英雄としてより一層讃えられるようになった。

そして、そのエースが警邏の任についてからというもの、どんな手を使ったのかは知らないが、犯罪が他の国と比べて減ったという。

知れば知るほど謎の多い人物に全員は思わず生唾を飲んでしまうほどだった。

「すごいな～……本当の英雄さんみた～い」

相も変わらず呑気な主を除いて……

つまり、諸葛亮たちが思い立った結論とは……

「それほどの大物を寄越し、協定の大義名分を作り上げる」

「周瑜さんは私達とそれほど本気で同盟を結びたがっている……ということなのです」

それを聞いた他の武将も納得がいく。

「なるほど……確かに我々の問題といえば指揮官の不足」

「劉障の失脚に乗じた犯罪の増加……」

「見事に我等の問題を見抜いておる……流石は孫呉といったところか……」

厳顔は見透かされたことへの悔しさと見事な眼力への賞賛を混ぜ

た皮肉を洩らす……

「でもでも、孫策さんは私達と同盟を結びたがって、それは私達と同じ様に曹操さんと対抗するためだよね？」

「はい。そうとしか考えつきません」

「なら、孫策さんも裏切るなんてことしないんじゃないかなぁ……」

「それも間違ってはいません」

「なら、ここまで話し合う必要なんてあるのかな？　使者が来るってだけ伝えてもらったらよかったんだけど？」

意外と鋭いところを突いて名誉挽回してきた劉備に諸葛亮は少し安心し、気を取り直して続ける。

「それはそうなんですが、呉がどれだけ本気なのか皆さんに知ってもらいたかったのです」

「あ～……そうだよね～……お互いに疑い合っていたら疲れちゃうもんね」

劉備が疲れるように言い、諸葛亮と鳳統に目配せする。それに対して二人は頷くと、またいつものように笑顔で皆に言い聞かせる。

「それじゃあ皆！！　今の話を念頭に置いてまた今日も頑張ろうね！！」

『『『はい（応）！！』』』

劉備の号令に全員は椅子から立ち、部屋から出ていく。

「それじゃあ私達もいこっか？」

「はい」

「今日もたくさん仕事がありますよ」

「う～……大変だけど頑張る……」

諸葛亮と鳳統の言葉にうなだれながらも部屋を出る主に二人は苦笑する。

だが、その頭のなかには一つの疑念が浮かんでいた。

（いつだったか、エースさんが城を単独で墜としたという報告があった）

（しかも、半刻も経たない内に……）

もしもということがあるが、その話が本当ならこの話には魅力があるが、同時に危険性もある。

この軍議の目的は全員のエースに対する注意の強化。

元・董卓軍の恋達に効果がないどころか完全に信用しきっている。いくら恋や月達の証言があるとはいえ、直に話したことも無い相手を信用するのはとても無理な話である。

よって、このような大袈裟とも言える軍議を開いたのだった。

（はわ～……緊張しましゅ……）

（う～……怖いよ～……朱里ちゃ～ん）

だが、本心は単に噂で大きくなっていくエース像に二人が密かに脅えていたのは永遠に二人だけの秘密である。

～思春の日記～

「来たか阿部」
「ほれ、いつも通りの薬だ」

○月△日……冥琳殿の診察で阿部という者が来た。私は念のために影ながら護衛をすることになった。

「そうだ周瑜。マイハニ……エースの部屋へ案内してくれ」
「却下」

だが、診察に来るたびに何故だかエースの話しかしない。

「じゃあエースの下着をくれ」
「……本当に止めてくれないか？」

いくら冥琳殿の恩人とはいえ、少々目に余る行動もうかがえる…

…いっそのこと地下牢にぶち込みたい……

「そろそろお昼だ。暑くなってきた……」

「こういう時こそ帽子が役立つ。日焼けなんてしたら悲しむ」

一体だれが悲しむというのだろうか……と、ここで奴は懐から何か白い物を出して頭にかぶ……何だアレ？

「う～ん……この頭に吸いつくようだが、優しく包むようなフィット感……たまらん」

「あ、それって……確かエースがこの前に下着を一着失くしたとか言って……」

事件経過……阿部と名乗る男がエースの下着を盗んで頭に被ったことによる『窃盗罪』及び『わいせつ罪』の現行犯で地下牢へ一時輸送された。

――――オレもまた、下着に踊らされただけの犠牲者の一人にすぎないんだよ――――

この声明は輸送直前に放った容疑者の言葉である。

## 動き出した蜀（後書き）

着々とストックを増やしまくっています。

これからの大学のテストと実習で更新が遅れるのでご了承ください

……

# 魏の敵状観察（前書き）

こんなクソゴミ劣悪作者をお許しください……皆さんの意見を押し切って小説をもう一つ書こうと思っています……

思えば私は大学院を目指しているので来年の春には勉強を始めなければならないので今すぐに別の小説を始めなければ間に合わないという結果に今さら気付きました……

よって、この小説を続けながらリリなののクロス小説を書こうと思っています！！

一応、その小説も書きながらこの小説のストックを書いているのですが……意外と苦ではありません。

むしろ私の常日頃のストレスが発散できてこの小説の進みもよくなるという特異体質だと気付きました。

なので、私に助言してくださった皆さんに心からお詫びいたします！！

この小説のシナリオはほとんど完成しているので、この小説ともう一つの新連載は絶っっ対に完成させます！！

これだけは忘れないでください！！

身勝手な話はここまでにして、今回の話始めます！！　どうぞ！！

余談ですが、今の時点でのこの小説のｏｐはハンターハンターの『

おはよう』だと思っています

## 魏の敵状観察

エース一行が呉を出た同時期、魏では嵐が吹きこんでいた。

「死んでなかったとは本当ですか！？」

蜀と同じ様に軍議を行っていた夏侯惇がいきり立っていた。

「うるさいわね……私だって信じられないわよ……」

「ならなんで生きている！？　聞けば毒矢で脳天を射抜かれたのではないか！！」

「だから知らないって言ってるでしょ！！　こっちだって訳分かんないけど事実よ！！」

元から何かと突っかかる夏侯惇と荀イクだが、この時はいつものよりもいきり立っていた。

それもそのはず、我が主である曹操が最も期待し、危惧している存在が死んだかと思っていた矢先での生存の発覚。これで落ち着けというのは酷かもしれない。

そんな中、曹操はどうしようもない二人の臣下を呆れ混じりで抑える。

「二人共いい加減になさい……その報告に偽りは？」

「あ、はい……斥候の全員からそういった報告があるので間違いないかと……」

その報告に何か思う所があったのか、視線を外して思慮に入る。

（毒矢で頭を射抜かれたにも関わらず……）

すぐに凪達を呼んで聞いてみる。

「凪、沙和、真桜と霞に聞くけど……火拳のエースに不死の呪いなんてあるかしら？」

「「「え……」」」

「いや～……」

急にそんなことを真顔で聞かれた四人は返答に困りながらも過去の記憶を辿ってみる。

しかし……

「申し訳ありません……そういったことは聞いたことも見たことも……」

「ウチも……」

「沙和も……」

「堪忍な……そんなこと知らんわ」

「そう……」

案の定知らなかった四人に曹操はあまり気落ちせずに分析しようとしていた。

「毒も矢も役に立たない……これも英雄の力量かしら……」

その呟きはあまりに小さかったためか他の人物に聞こえることはなかった。

同時に、曹操はこれ以上の詮索は無駄だと判断し、話を多少強引ではあるが変えることにした。

「分からないならこれ以上の詮索は無駄よ……それよりも一番重要なのはもう一つの報告の方でなくて？」

「はっ。その件なら既に下準備は進めております」

「そう……天和たちへの言伝は？」

「いつでも」

「ならよし」

曹操は荀イクと郭嘉の優秀さを改めて実感しながら二人に内心で感謝する。

曹操が言いたいこと、それはエース生存とは別のもう一つの動き。

呉と蜀の同盟。

これも不確定な部分もあるが、曹操には分かっていた。

というのも、現在の魏の兵力ははっきり言って異常である。

今では蜀と呉が強力でもしないかぎり兵力差では大きな差が出てしまっている。

げに恐ろしきは数の暴力であり、これぱかりは努力などと甘い言葉では済まされない。

（だからこその同盟……奴等は必ず動く）

もはや、それしか生き残る術は残されていない。奴等は二つで一つの運命共同体となっていた。

そして、曹操は来るべき決戦に向けてその時への力を溜めるために動く。

全ては欲しい物を手に入れるために……

曹操はこれからの戦いに悦を感じながら玉座の間から颯爽と出て行ったのであった。

## 魏の敵状観察（後書き）

どうでしたか？

今回は話だけでしたが、次回にはエースを出すのでご期待ください！！

## 進路変更（前書き）

これから２２時に新連載を載せるので、興味がありましたら是非ご覧になってみてください。

それと、もうテスト期間が近いので更新が遅れます。ご了承ください。

# 進路変更

暑い。

正に今の気温はその一言で表せられ、その一言に収束されるほどだった。晴天に浮かぶ太陽は平等に全てを照らし、平等に全てを炎天下の地獄に晒すのであった。

「あつ～い～……」
「はぁ……はぁ……」

鈴仙、亞莎はもちろん、兵達も焼けるような日光に汗を流している。鈴仙も上着のブレザーを脱いで肩にかけてフラフラしている。

「でっけえ森が見えたな」

一人、エースだけは例外であり、何故かいつも通りである。

「もう南蛮っつー所に入ったっけか？　あちいな」
「あはは……そう……だねぇ……」
「はい……あの森が集合場所です……」

エースの環境に対する適応能力に唖然としながらも熱さでダルさを隠せていない声で返す。

島によって過酷な環境の島に上陸し、耐え抜いてきたエースにとってはあまり取るに足らないことだろう。

「ほら、おれは熱くねえし、もう近いから飲め」

「え…いえ、エース様のお水……」
「いいよ。もう相当飲んで量も少ないし、あんま飲む気にはなれねえ。暑さで腐る前に飲めって」
「あ……じゃあ……」

どんなに過酷な環境でもエースのさり気ない心遣いで二人は泣言は言ってもへこたれることはなかった。それは兵にも同じことが言えるのであった。

そして、エース本人はそんなことは当たり前だと思っているゆえにどう思われているかに気付かない。

「えっと……先に飲んでいい？」
「あ……と……どうしても先がいいの？」

後ろで彼女達が羞恥心と期待を籠めながらエースの水筒にどっちが先に口をつけるか話していることに気付かぬまま耳を澄ます。

「えっと……あっちに“声”が集中しているか……」

少し神経を研ぎ澄ませて感知した。

その方向にはやはりジャングルだった。

「よし！　行くぞお前等！！」
「え！？　休憩は！？」
「終わった！」
「早いですよ！！」
「もう近いからだいっじょ～ぶ！！　早くしろよ～！」
「いやいや、場所分かるの！？」

「こっちな気がするからこっち！」
「子供か！！」

ツッコんでいるにも関わらずに周りを置いて突き進むエースに溜め息がこぼれる。

「はぁ……ごめんね皆！！　あともう少し頑張って！」

鈴仙の激励によって兵の指揮が上がり、総勢でエースの後を追う。

舞台は未開の地の南蛮

なぜ、蜀ではなく、こんなところに来たのかと聞かれれば二日前に遡る必要がある。

行軍していた呉の軍勢に唐突にやってきた蜀からの使者が一通の手紙を持ってきた。

それは急な南蛮へ向かった者達の加勢の依頼と、手紙による頼みに対しての謝罪文であった。

内容によれば、現在の蜀は五胡の鎮圧、南蛮大王の猛獲との交戦に人手をとられている。だが、今度は南蛮を抑える兵力が足りなくなってしまったために急遽として呉に要請したというわけだ。

もちろん、その話を断る訳にもいかず、進路を変更して今に至る。

そして、エースと鈴仙にとって久しぶりの再会の時はすぐ間近にまで迫っていた。

「あ～……ムシムシしてやがんな～……」

先陣を切ってジャングルに先走ったエースは流石に蒸し暑くなってきた環境に手であおぐ。

そして、最近の退屈な日常を送った反動か、未知なる場所に好奇心が湧き、いつも以上にテンションが上がって突っ走り、部下を置いてきた自分の失態を悔やんだ。

「ちっ……おれも暑さにやられてたかな……」

そう愚痴りながらエースは“声”の集まる場所に歩を進めていた。

そして……

「ふむ……あれか……」

エースは不意に見つけた大量の幕へと足を運ばせていった。そこから懐かしい感じを感じ取りながら。

「亞莎たちのほうは……大丈夫っぽいな」

亞莎たちの気配も少し遅れ気味ながら着実に目的地に向かっていることを感じ取り、エースはジャングルに佇むあまりに異質な巨大な幕へと向かって行った。

南蛮の一角を陣取る蜀の陣地

「困ったわね……」

「困ったのだ～……」

「困ったな……」
「ていうか同じ顔があんなに……逆に不気味なのです……」
「……かわいい」

天幕内には五人の主要人物がいた。

最近になって厳顔、魏延と共に蜀入りを果たした黄忠と呼ばれる女性、紫の髪をなびかせた艶やかで、気品のある美しさを色濃く醸し出し、大胆に胸を強調するかのように挑発的なチャイナドレスは真に美しい。

そして、それに続くのが張飛、趙雲、そして陳宮ことねね、呂布こと恋である。

ただ広い空間の中には男にとってのアガルタが存在しているのだが、同時に普通の人間では入ることを躊躇わせる威圧感が満ち溢れている。

「猛獲ちゃんの兵力を甘く見ていたのが少し痛かったわ……既に三千……こっちの二倍はいるわね」
「でもあっちの兵はあまり大したことは無さそうなのだー」
「だが、地の利もさることながら、こんな環境だ。時間が経つにつれて兵が暑さで精度が落ちてきている」

今、蜀が相手にしているのは猛獲率いる南蛮軍である。最初の内はねねの簡単な策で兵力差を物ともしない実力で猪突猛進な猛獲軍を相手に何度も小競り合いに勝ち星を上げてきた。

だが、問題は何度も戦っているのにあっちが負けを認めず、兵をかき集めて兵数が上がっていくこと、追い詰めようにも地の利があ

ってかすぐに逃げられてしまうこと、そして、南蛮の蒸し暑さに兵が次々とダウンしていくことが徐々に蜀が押されている結果へと繋がってしまった。

猛獲軍は図らずとも蜀相手にヒット・アンド・アウェイ戦法を取っていた。

だが、南蛮軍のげに恐ろしきはそんな生易しいものではなかった。

「だが……あんな子供の軍勢にはいささか疲れてきたのだが……」

趙雲はウンザリしたように呟くと、恋以外の面子が一緒に溜息を吐く。

その趙雲から分かった真実……兵が子供の集団であることが蜀軍のやる気を一掃に削いでいた。

なにせ、見た目は全員の耳に獣耳がヒョコっと出ており、見た目も無邪気な子供

攻撃方法も噛みつくとかいった戦法ばっかりだから怪我人はいても死傷者は一人もいない。その上、見た目のせいで恋はもちろん兵たちも困惑している。

問題は他にもあり、もし、そんな相手に武器をとったとあらばそれこそ劉備への批判に繋がるし、いたずらっ子相手に武器を振るうことを黄忠たちは良しとしていない。

だが、早めに決着をつけねば兵も危ない。

猛獲は図らずに持久戦へと持ち込んでいたと言う訳だ。

「それなら、呉からの援軍に期待するしかないな」

趙雲が無意識に呟いた言葉にいち早く反応したのは暑さでダレていた恋だった。

「エースたちが、来た？」

「いや、少し言ってみただけだ。まだ来ておらんよ」

「……残念」

嬉しそうな表情が一変して少し暗くなってしまった。無表情でもその上げて落とされた雰囲気が周りに伝わってきた。

恋はまたイスに座ってダレてしまった。

「そういじけるな。今日来ることは確実だからやる気を出してくれ」

「ん～……」

「恋殿がここまでダレるとは……ねねの手にも負えませんぞ」

趙雲の注意も机の上でダレて聞いていない恋にねねも困惑の色を見せる。

そんな飛将軍の様子を黄忠は少し意外そうに聞く。

「ふふ……恋ちゃんは御遣いさんのことが好きなのね～」

「うん」

「即答か。これはよほど懐いたな」

急に元気になる恋に趙雲も共感を覚える。

そんな話で場が和み、雰囲気が明らかに軽くなった。

「エースに関しては団体で来るから来れば兵が報せに来てくれるさ」
「そうそう、それにあいつ等もここに気付いて向かってるっぽいからすぐに着くぜ」
「本人もこう言ってるんだ。気長に待つと……」
「ズズズ……あ、お茶がもうない」

趙雲はどこかおかしいことに気付き、いつもなら聞こえるはずもない声、記憶のなかに録音されていた声がはっきりと聞こえてきた。黄忠は初めて見るその闖入者に驚愕と警戒心を露わにして弓と矢を速攻で構える。

「誰!?　貴方は何者ですか!?」

黄忠の威圧感たるや一般兵の何百倍にも匹敵する。普通の人間ならば金縛りにかかるほどだった。

「あ、これは失礼。何とも面白そうな話につられてやってきたわたしの名はエースと申します」

エースはそんな黄忠の威圧感にさらされても怯むどころか頭を下げて挨拶する。そんな不敵なエースの様子に黄忠はより一層警戒を強くさせる。

そんな時だった。

「……ん」

エースの後ろから彼の腰に腕を回して抱きつく影が一人。

「おぉ恋か。久しぶりだな」

「……（コク）」

「元気……だよな？　その様子なら安心だ」

エースは恋を一旦離す。離された恋は名残惜しそうにシュンとしたのも一瞬。

「へへ…ほら！」

「わ！　こら！　ねねと恋殿を辱めるなです！！」

「！！」

恋と近くにいたねねの首に腕を回して引き寄せる。

引き寄せられたねねはジタバタ暴れるもそんなに嫌がっているようには到底思えなかった。恋に至っては一瞬だけ驚いたが、すぐにまた嬉しそうにじゃれる子犬のようにエースの頬に自分の頬をすり合わせてくる。

「え～っと……これは一体……」

何が何だか分からないといった感じの黄忠は見たことも無いほど甘える仲間の姿と、その甘え先の侵入者を見て困惑していた。

そんな黄忠の肩を叩いて意味ありげな視線を送るのは趙雲だった。

「星ちゃん？」

「ひとまず収めろ。恋とねねに当たる」

「……」

黄忠は冷静に弓を下ろすが、未だに状況に迷っているようである。

「心配するな。あれが“例のあの人”だ」

趙雲の一言で黄忠は驚愕を露わにする。

「え!?　それじゃああの人が……」

「あぁ……」

趙雲は喜びの余韻に浸るエースを見やって妖しい笑みを浮かべる。

「我等の希望の星だよ」

蜀と呉

二つの国が今

繋がった……

## 揺るぎない覚悟（前書き）

お待たせしました。ネットもできるようになったので本編開始……と言いたいところですが、9月はテスト週間なのでペースが不定期になるので承知してもらえると嬉しいです。

それと、誤字脱字の指摘をありがとうございます！！

「……心配だ……」
「急にどうしたの？」

呉の冥琳の室内で見舞いに来た雪蓮とベッドに横たわりながら簡単な書類を片づけている冥琳がいた。

冥琳の突然の呟きに雪蓮はどうしたのかと尋ねる。

「いや、やっぱりよく考えればエースに同盟締結は少々無謀だった気が……」
「何を今更……大丈夫よきっと」
「……だといいがな……」

冥琳は突然に感じた不安感を口に出したが、すぐに考えを中断させた。

自らが信じ、雪蓮が信じた一手なのだ。ここはただ結果を望むのみだとは分かっているのだが……

「今度経過報告でも送ってもらうとしよう……」

ミスは許されないミッションにエースの奔放さがどう関わってしまうのか、不安でしょうがない冥琳の安息はしばらくお預けである。

「はっくしょん！……だれかおれの噂でもしてんのか？」

ズズ……と鼻をすすりながら外壁から景色の望む。

「くすくす……今や有名で高名な御遣いさまですよ？　当然です」

「噂をする人間など星の数ほどいる。やはり自分のことに関しては無頓着というか、鈍いというか……」

そんなエースをおかしそうに笑う黄忠と呆れる趙雲

「にゃはは。お兄ちゃんは何も分かってないのだ」

「そうか？」

すぐ傍の張飛に笑われ、エースは首を傾げる。

「まったく……変わらんな……何一つ……」

敵地があるであろう場所を見据えながら趙雲は少し嬉しそうに呟く。

「どこかの国に仕えれば少なからず体も心も少しは変わる……と思っていた時期があったよ」

エースと初めて会った日のことを思い馳せる。

「変わったかどうかは兎も角、これでも修業は怠っていないとは自負しているぜ？」

「ほう？　それなら帰ってからどうだ？」

「あ～！　星だけズルいのだ～！　鈴々も闘いたいのだ！！」

力こぶを作るエースに趙雲は自慢の槍を掲げて笑いかけてくる。

趙雲に釣られて張飛も自信の身長より大きい蛇矛を高々と掲げる。

そんな二人を見て、これから絡まれて苦労するだろうとエースに同情しながら苦笑する黄忠

「星ちゃんも鈴々ちゃんも、エースさんにご迷惑よ？」

ここは年上として客人のフォローも忘れない。さっき紹介し合った仲間としてということもあったのかもしれない。

「いいではないか。こういうのは既に決定事項なのだから」
「そうなのだ。どうせ愛紗や翠もふっかけてくるから同じなのだ」
「それは……」

確かに……このまま蜀に連れていけば武将たちにモミクチャにされるのは必至

ここで止めても無駄だと思ってしまった。

「はは。どうやらこっちでも退屈はしなくても済むな」

黄忠の心配をよそに笑うエース

願わくばその前向きな姿勢が吉と出てくれれば……と思ってやまない黄忠がいた。

「んなことよりもやっこさんは何してんだ？　全然攻めてこねえじゃん」

軽い話で時間を潰していたが、中々攻めて来ない敵にエースは疑問を抱く。

「えっとね、ついさっきも攻めてきたんだけど星の仕掛けた落とし穴に落ちて泣いて帰ったのだ」
「……落とし穴？」
「あぁ、もうまともに相手するのもアレだったからちょいと……な」
「でも帰り際に『すぐにまた切り札を連れてくるのにゃー！　今度こそははーって言わせるのにゃー！』て言いながら帰ったからまた来ると思うのだ」
「もし来たら見張りの恋ちゃんや呂蒙ちゃんが来ますわ」

「……」

ここで初めて聞いた猛獲の素性。聞けば聞くほど、知れば知るほどになんだかやりづらくなってきた。

ちなみに亞莎と鈴仙は黄忠たちに紹介をし合ったので黄忠も二人の名を呼ぶことになった。

（どう考えても張飛レベル……だよなぁ……確かにやりづらいな……）

「にゃ？」

張飛を見下ろすとあっちも自分の視線に気付いたが、さり気なく視線を逸らす。ある意味タチの悪い敵を思って頭を抱える。

「何度も罠に嵌めても降伏せずに向かってくるのだから……厄介なものだよ子供ってのは……」

「ふふふ……ほどほどにね」

ため息を吐く趙雲に黄忠は柔らかく宥める。

流石は蜀の母、余裕綽々なのが伺える。

「ほんっと……この世界はどうなってやがんだ？」

エースもこんな遠い地にまで来て、スケールアップ版おままごとをやらされる羽目になるとは……と思っていた。

もちろんエース自身もこの戦（？）に本気を出そうなんて毛ほども思っていない。もし、相手の大将が子供であれば気も抜ける。

なにより、子供相手に本気を出すような大人げないこともいたぶるような真似も避けたいと思っていた。

外道ならともかく、ただ駄々をこねる程度の弱い者をいたぶる真似をエースの男気が許さない。

（それなら少しおどかしてさっさと終わらせるか……）

人知れずため息を吐きながら三人から離れて襲撃される時を待とうとした時だった。

「「「「！！」」」」

突如として鳴った銅鑼の音に四人は表情を変え、ジャングルを見据える。視線の先で木々が揺れ、鳥たちが危険を察知して飛び去る姿に三人は各々の武器を携えて外に出る。

「ありゃあ……なんか連れてきたか……ここまで響いてきやがる……」

即席とはいえ木製の見張り台やらが地響きで揺れていることから、巨大な何かが向かってきたのを感じた。

「ちょっと行ってみるか」

ちょっと興味が出てきたエースは三人の後を追いかける。

「何なのだ……これは……」
「これは……予想外ね……」
「いっぱいいるのだ～……」

つい先程、勢い良く飛び出していった三人は驚愕し、動揺もしていた。

「すっご……」
「あわわわわ……」

「なんですか……アレ……」
「おっきい……」

他にも後から駆けつけた鈴仙や亞莎、その二人と話こんでいたねねと恋も驚愕に目を見開いていた。

「どうにゃどうにゃー！　おどろいたかーしょくの奴らめー！」

皆の視線の先には得意顔で高々と笑いを上げるネコミミの幼女がいる。

その正体こそが南蛮の王・猛獲

見た目はエースの想像通り悠々自適そうな少女であり、張飛と同じくらいに見える。

だが、皆が驚いているのは彼女が原因だからではない。

原因は彼女が“乗っかっているもの”だった。

それは“象”

この大陸では南蛮でしかお目にかかれない動物であり、三国付近では文献でしか描かれていない。

事前に知らされていたとはいえ、予想以上な大きさを誇る象に立ちすくんでしまう。

しかも、大きいだけでなくそんなビッグサイズの動物が猛獲の乗っている象を頭に群れを成していれば、それだけで圧巻であり、こ

れからの相手の悪手が自ずと見えてくる。

「紫苑……どうする？」

「……動物が相手なら火を使うのがいいのだけれど……こんな密林で使って辺りを燃やすわけにはいかないし……」

「だけどここでまごついても相手を調子づかせる。それに兵の動揺も大きい」

突如として現れた巨大生物に後方の呉と蜀の兵たちが混乱している。

このまま突っ込んでくるであろう象の集団に一気に窮地に立たされてしまった。

こんなことになるならさっさと捕まえるなりなんなりすればよかった。

そう後悔して武器を構えた。

「へ～……こんなとこに象がいたのか～……」

その時

緊張感の無い声が辺りに響いた。

「あ、エースさん」

鈴仙の声に声の聞こえた後方に皆が振り返る。

すると、人垣をかき分けてきたエースが飄々と現れた。

「え？　エースさまはあれをご存じなんですか？」
「まあな、何度も見たこともあるし、仲間に動物に詳しい奴がいたからそれなりにはな」
エースは象を前にしても余裕は消さずに趙雲たちと同じ場所に来た。
「下手に刺激すんなよ。象は仲間意識が強い。警戒されて暴れられたらお前等でもひとたまりもねえぜ」
「むぅ……やっかいなのを連れてきたのだ」
いくら張飛でも象のボリュームに攻めあぐねていた様子だった。
「……優しくて……目がかわいい。かわいいから傷つけちゃだめ……」
「れ、恋殿～……いくらなんでもそれは無茶ぶりが過ぎますぞ～……」
「でも、猛獲もかわいい……」
「お主……何しにここへ来たのだ？」
ここまで戦を拒否する恋に趙雲は頭を抱えた。
「あれが猛獲……ねぇ……」
自分の予想が当たってしまい、エースも少し気落ちしながら前に臆することも無く出る。
「おいなにをしてるんだ！」
「なにって……象をなんとかすりゃこの戦いも終わるだろ？」

「簡単に言うな……こんな密林で火なんか使うわけにはいかんのだ」

周りは木々が生い茂っている。こんな所で火の手が上がったら南蛮が全焼する未曾有の大災害となりかねない。

そんなことになれば近隣の村から蜀に対する反劉備の動きを助長させる結果となることはほぼ間違いない。

そうなることだけはなんとしても避けねばならぬことだった。

そう言う趙雲にエースはというと……

「要はあれ等に手を出さなければいいだけだろ？」

「「「「「……は？」」」」」

象の大群を指差して爽やかに言うエースに皆は訳が分からないといった感じになる。

何を言っているのかまったく分からん！！

この状況で話が通じると思っているのか！？

「そうだな……象にはお引き取り願うだけさ」

「お引き取りって……話が通じるのでしょうか……」

「そういうことだから行ってくる」

「いや、危険ですから本当に！！」

「はやまるなです！！　殺されますぞー！！」

周りの説得も聞く耳持たずにエースは象の前へと両手を広げて無手をアピールしながら向かって行く。

マジシャンのようにタネも仕掛けもないことをアピールさせるように向かってくるエースに猛獲が叫ぶ。

「なんにゃお前は!?　これ以上来るとボッコボコのケッチョンケッチョンにゃ!!」

意外な行動のエースに猛獲は面を喰らってしまったのだが、エースは気にせずに猛獲の乗る象の目と鼻の先にまで近付いて立ち止まる。

そして、猛獲を見上げるとエースの表情は優しげだった。

「な、なんにゃ？　その顔は……」

まるで、小さく、弱い命を慈しみ、愛でる優しき賢者のように優しい微笑みだった。

猛獲にとってその笑顔は危機に瀕している人間の出す顔ではないと思い、不気味に思っていた。

その時だった……

「猛獲……」

エースは猛獲を見据えた。

それは慈愛……親が子に向けるような優しさ……無償の愛とでも言えよう。

そんな微笑みを猛獲に向けて言った……

「少し怖いだろうけど……ごめんな……」
「にゃ？」

少し時間をおいてからのエースからの謝罪に猛獲は虚をつかれた。

それは後方の鈴仙たちも同じ

エースの意味も無い謝罪はその場を誤魔化す虚勢なのだろうか……

そう思っていた……

ビリリ……

「「「「「「？」」」」」」

一瞬だけ胸に“何か”が駆け巡った感じがした。

ねねは気付いてさえもいないようだったが、武に長けた六人は確

かに何かを感じた。

なにかの波が自分の体を震わせるような他愛の無い感覚でしかなかった。

急に起きた謎の現象に皆が首を傾げていた時だった。

ズドン！

突如として大きな地鳴りと共に地面が揺れた。

「なんだ！？」
「にゃー！？」

皆が地鳴りに驚愕する声と猛獲が象から落ちる声が重なった。

そして、地鳴りによる驚愕はすぐに別ものに変わった。

なぜなら……

「いたた……一体なんなのにゃ……」

先程まで自慢の巨体で蜀の精兵たちを威圧していた象の群れが……

「……え？」

だらしなく泡を吹いて倒れ伏していたのだから……

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」

後方の恋も含めた面子はその圧倒的な光景に目を奪われた。

倒れる象の群れの真ん中に立つエースからは言葉で言い表せない力強さを感じた。

威圧、風格、器量……そんな曖昧な物ではなく、どんな鈍愚でも認めざるを得ない力そのものがエースを中心に広がっていた。

「にゃ……な、な、な、なんにゃ……その目は……」

「……」

「ひっ！」

猛獲はエースから発せられる威圧に気丈に堪えるも、エースの深く、濃い黒の瞳と視線が重なり、精神が折られた。

耐えきれずにへたりこんだ猛獲に無言で近寄るエース。

「わ、分かったのにゃ！！　もうみい達の負けでいいから……」

「……」

「助けてにゃ……」

もはや猛獲なりの“王”の風格などかなぐり捨てて泣いて命乞いを始めた。武器を持たぬ手の平をエースに見せつけて抵抗の意が無いことを必死にアピールする。

しかし、エースはそれでも前進を止めることは無く近づく。

そして

猛獲の前に立った。

「……」

「うぅ……ぐじゅ……ひっく……」

長身ならではの威圧と無言の圧力に猛獲は目に涙を溜め始めた。

今まで野性として生き、世の広さを知らずに育ってきた猛獲は今まで出会ったことのない脅威にひれ伏すしかなかった。

うずくまる猛獲にエースは手を伸ばす。

「……っ！」

反射的に猛獲は目を閉じる。

「……はは。悪い、やりすぎた」

「……にゃ？」

しかし、返ってきたのは暖かみのある言葉。既に威圧感や怖い感じは無かった。頭に乗っかる暖かい手が猛獲の意識を落ち着かせた。

涙を溜めながらも落ち着いていく猛獲にエースも屈託のない笑みを浮かべて言う。

「どうしてもお前は自分の負けを認めないから少しおどかしただけなんだけどよ、やり過ぎた」

猛獲と同じ視線にまで屈む。

「でも、さっき負けを認めたからもう終わりだ」

「……本当かにゃ？」
「あぁ、嘘は言わねえさ」
「……絶対にゃ？」
「絶対」
「……許してくれるにゃ？」
「嘘は嫌いなんだよ」

猛獲の幾度に及ぶ確認にエースも眉間にしわを寄せるが、自分が幼子に与えた恐怖を考えると仕方無いとも思った。

「……び……」
「ん？」
「びえええええええぇぇぇぇぇぇぇん！！」
「うわ！」

エースは優しく諭しながら頭を撫でていたら猛獲が遂に泣きだした。

「びえええええええぇぇぇぇぇぇぇん！！」
「おいちょっと待て！！　なんで泣くんだ！？」
「びえええええええぇぇぇぇぇぇぇん！！」
「謝っただろ！？　だから泣くなって！！」

急に泣きだした子供のあやし方など分からないエースはとにかく猛獲を泣き止ませようとする。それでも強烈なエースの印象が拭える訳でもない。

「エースさま……今回はちょっと……」
「やりすぎだよ……」

猛獲にあれよこれよと泣き止ませようさせるエースの姿に今まで黙っていた呉サイドの味方は恥ずかしく思った。

そして、もちろんその他の恋以外の面子も思った。

――――自業自得って知ってるか？――――

今日もまた晴天なり。

## 揺るぎない覚悟（後書き）

南蛮は……あまりにも無理な状況だったのでハショっちゃいました！！

すいません！！

## お目見え（前書き）

はい！！　テストはまだ終わっておりませんが、一段落したので投稿しました！！　まだ感想の返信はできませんがそれでも送ってくれれば嬉しいです！！　ドラゴンボールも近い内に投稿します！！　テストの終わりまでラストスパートをかけてます！！　ちなみに受かっているかは分かりません！！　むしろ不安すぎる……

それではどうぞ！！

## お目見え

南蛮の平定から早三日は経った。

エース一行は南蛮平定の報告とエース達の紹介のために蜀へ戻ることになった。最初はそのつもりだったのだが……

「ふあ～！」
「お腹一杯なのにゃ～！！」
「眠いのにゃ……」
「あにしゃま～……」

エースの体にひっついている猛獲、部下のミケ、トラ、シャムのこともあった。

南蛮の猛獲は蜀と和解し、同盟を組んでくれることになった。そのために主君である劉備に合わせる必要がありと考えてのことだった。

しかも、猛獲たちとエースは既に仲が睦まじくなったので彼女たちの世話はエースに丸投げすることになった。

そんな道中でちょっとした変化もあった。

「凄かったのだお兄ちゃん！！　あんなこと鈴々にも星にもできないのだ！！」
「そうか？　あれでもまだまだだとは思ってんだけどな……」
「そんなことないのだ。威圧だけであんなに大きかった動物を気絶

させられるなんて考えたこともなかったのだ」

そうは言われてもエースは以前に感じた白ひげの力を比較してしまってまだまだ誇れるものではないと感じてしまう。素直には喜べずにいた。

そんな態度に張飛は謙虚しているのだと感じていた。

「それなら帰ったら鈴々と闘ってほしいのだ！　そうしたらお兄ちゃんも自分がどれだけ強いのか分かると思うのだ」

張飛としては自分よりも強いエースが自分に自信を持っていないことを良く思っていない様子である。

「ん～……そっか。おれは強いのか」
「そうなのだ！　だから今度勝負！！　勝負するのだ！！」

自慢のポジティブシンキングで少し自信を取り戻すエースに張飛は少し気がよくなった。というよりもこのまま頼めば了承してくれるのだと思ったのだ。

「そうだな……じゃあいつかやってやるよ」
「やったー！！　絶対に約束なのだ！！」

無邪気に笑って喜ぶ張飛にエースは張飛の気にあてられてなんとなく嬉しくなった。

そして、そんな張飛は突然提案してきた。

「ねえねえ」

「なんだ？」
「お兄ちゃんには鈴々を真名で呼んでほしいのだ」
「え？」

本当に突然の申し出にエースも不意打ちをくらってしまった。

何をしたわけでもないのに、急に自分の命と同義の真名を預けてきたのだからそれもしょうがない。

「なんで急に真名なんか……ていうかいいのか？」
「うん！　これから鈴々たちと一緒に戦ってくれるし、この前もお兄ちゃんがいたから南蛮の戦いも終わったから！」
「ん～…あれくらいはよかったんだけどな……」

パッと来て横やりを入れてきたようなやり方だったから少し微妙な感じだったのだが、本人がそう言っているのならいいかとも思った。

「……よし、じゃあお言葉に甘えさせてもらうかな」
「うん！　じゃあこれからは鈴々って呼んでほしいのだ！」
「そんじゃあよろしくな…鈴々」
「うん！」

二人が笑顔でじゃれ合う姿はまるで仲の良い兄妹だったと行軍中の全員が思ったのだった。

そうこうする間にエース達は蜀に辿り着いた。

「お～……すげえ賑わいだな～」

「うわ～……凄い活気……」

「これも劉備殿の善政のおかげでしょうか……」

城に向かう最中のエース達は賑わう街を見渡し、無意識に呉と比較しても賑わいは負けていないと思った。

エースは周りの活気にテンションが上がり、鈴仙は少し怖気づき、亞莎はこの街を創り出した劉備に感心するなど個々の性格が出されていた。

「すごいのにゃー！！」

「人がいっぱいにゃー！！」

「うじゃうじゃにゃー！」

「ぎゅうぎゅうにゃ～」

南蛮娘ズも初めて見る活気ある街にテンションが上がりに上がっている。

「エース……」

「ん？」

「後で一緒に周っていい？」

喜ぶエースの手を引いた恋はエースを見上げて顔を赤くして照れながら言う。

普通の男なら美少女である恋が見上げて上目遣いをしているその姿に悩殺され、欲望と嬉しさの狭間で頭がショートするはずなのだが……

「あぁ、暇ができたら周ろうな。ねねも一緒に」
「ん……」
「ふふん。そうです。分かっていやがるのです」

ちょっと勇気を出した誘いを了承してもらえた恋は嬉しさでエースの体に密着して喜びを表し、誘われたねねも仲間外れにされなかったことに照れながらも喜んでガッツポーズ。

「ふふ……恋ちゃんとねねちゃんってば嬉しそうね～」
「うむむ……先を越されたか…」
「なんで星は悔しそうなのだ？」
「……思えば鈴々にも先を越されていたな…」
「にゃ？」
「あらあら♪」

趙雲は眼下で首を捻る鈴々に少し対抗意識を燃やす。本当なら先に真名を預けるはずだったのに……と。

黄忠はそんな趙雲を見て面白そうにクスクスと笑う。

「……なんか」

「……」

鈴仙と亞莎は恋と密着しているエースを見て不機嫌になった。

「はは…やっぱ恋は甘えん坊だな」

「ぅん……」

エースが思わず愛玩動物の感覚で頭を撫でると恋も気持ち良さそうに目を細める。

色んな感情を抱く奇妙な軍団は城へと向かうのであった。

少し時間が経ち、エース一行は劉備のいる城へ入城し、玉座の間

へと招かれた。

その間には蜀の主力戦力である将軍が勢ぞろいしていた。

そして、前方には劉備がニコニコしていた。

趙雲、黄忠、鈴々を除いた者からは鋭い目で睨まれるも、恋、ねね、華雄、そして茶を持ってきた月と詠はエース達を見守っている。

「うぅ……」

「あわわわ……」

四面楚歌な状況に鈴仙と亞莎は完全に委縮してしまったのだが、エースはというと不敵に腕を組んで笑っていた。

周りから猜疑の目で見られてるのにも関わらず、堂々としている様は鈴仙たちに少しの安堵をもたらせた。

「星さんたちから話は聞きました。此度の助太刀には感謝の念が尽きません」

以前に洛陽を去る際に目にした二人の小さな軍師である諸葛亮と鳳統がいた。

エースはそんなことは気にせずに腕を振って謙遜する。

「いいっていいって、これから仲間になろうってんだ。それで充分だしよ……それにあんた達には少し感謝してんだからな」

「感謝……ですか？」

「ああ」

エースは一カ所に固まっている月たち元・董卓軍メンバーに視線を送る。それには月や詠たちも気付き、なんで見てきたのか分からないといった反応をする。

（どうやら、ここでは不自由なく過ごしてるみてえだな……）

更に言えば、エースから見れば、洛陽の主だった頃と比べると少し感じも穏やかな気がしたのだ。

もし、彼女たちがぞんざいに扱われていたら……と、そんな心配も杞憂に終わって一息ついたのだった。

そんなエースの心情が分からない劉備以外の周りは思考を巡らせるも、本人は気にせずに続ける。

「ま、そういうことだからよ。これからは仲良くやっていこうぜ？劉備……だっけ？」

「え？　あ、はい！！　こちらこそよろしくお願いしますね♪」

自分が呼ばれたことに少しびっくりしたが、柔らかい対応とエースの気さくさに笑顔で応える劉備。

（よかった～……恋ちゃんや月ちゃんの言う通りいい人だ～）

今まさに時の人であるエースがずっと怖い人だと決めつけていた劉備は直接感じ取った彼のギャップに安堵していた。

「おい」

「ん？」

だが、先程のエースの良く言えば気さく、悪く言えば馴れ馴れしいととれる態度に業を煮やした人物がいた。

それは最近になって蜀の将軍となった魏延だった。

「桃香さまに向かってなんだその態度は。少し礼儀というものを学んだらどうだ？」

「おっと、これは失礼しました」

魏延の一言にエースもこれは不味かったと思ったのか劉備に頭を下げた。

だが、それで魏延の追究は終わらない。

「ふん。噂の天の御遣いがどんなのかと思えば、ただの無礼な細い男ではないか……大層な二つ名にはとても相応しいとは言えんな」

「あ～……二つ名はおれも思うんだがなぁ……参ったな」

魏延は完全にエースをただのインチキなペテンとしか見ていない。その発言に周りの一部の人間は同意を示す反応を見せた。

「自覚しているのならいい。ただ、もう二度と桃香さまに嘗めた態度はとるな」

「焔耶ちゃん……なにもそこまで……」

そう吐き捨てる魏延に劉備が宥めようとするが、それを遮る者がいた。

「いえ、私も焔耶の言うことは最もかと」

「ちょ…愛紗ちゃん！」

傍に控えていた関羽も魏延に続いた。

「先程に態度にも思う所はありますが、まず、私から言わせてもらいますが、この男が戦力になるとは思えません」

関羽はエースを横目で睨みながらほとんど無視するような感じで続ける。

「こんな覚悟も決めていないような輩を桃香さまの前にまで招くなど納得できませんし、どうしてもさっきからヘラヘラしているような奴が……この男が我が国にとって有益になるかどうかも疑問です」

「「……！！」」

さっきからの容赦のないエースへの罵倒に鈴仙と亞莎が拳を握って立ち上がろうとした時だった。

エースは急いで二人の拳を自身の手で包んだ。

その行動に二人は驚愕し、エースの顔を見る。

「止めろ……おれはいい」

「でも……！！」

亞莎は少し興奮していたが、エースの諌めるような目に動きを止めた。

「もう一度言う……止めろ……鈴仙も亞莎も落ち着け」

「……はい」

「……」

エースの小声は二人の耳にハッキリと聞こえ、本気の目に二人は居た堪れない気持ちで再び姿勢を正す。

幸い、その動きは周りには気付かれはしなかったようだが。

「もういいであろう？　愛紗よ」

「星？」

そんな険悪な状況の中、傍で控えていた趙雲が挙手して関羽に物申す。

「この同盟は既に桃香さま公認のものであり、国の意向だ。そこに意見するのは越権行為というのではないか？」

「確かにそうだが……しかし……」

「分かった分かった……お前の意志はまた後日聞いてやるから落ち着け。ここは玉座。罵声で穢すことは許されんぞ」

「う……うむ……」

趙雲の言うことには関羽も反論できない。続けて魏延にも言う。

「焔耶。お前もだ」

「……分かった」

趙雲の言葉に魏延も同じく言い返すことはできなかった。

「そ、それじゃあ程普さんと呂蒙さん、エースさんも今日は疲れていると思いますので休んでください！　ええっと……じゃあ朱里ちゃんと雛里ちゃんお願いね！！」

「はわ！？　私でしゅか！？」
「あわわ……」

気まずいムードに耐えられなくなった劉備は即座に会議を中断させて三人を部屋に案内させようと辺りを見回し、側にいた諸葛亮と鳳統に丸投げした。

二人は先程までのやり取りで怒っているであろう人物の案内を任されて呂律が回らないほど狼狽する。

「ごめんね！！　でも、今朱里ちゃんの力が必要なの！！」
「そんな、桃香さま～」
「あわわ……」
「じゃっ、後はお願いね！！　あの……ごめんなさい……」

だが、哀しきかな。二人が拒否する前に劉備は逃げしまった。その途中でエースの傍を通り過ぎざまに謝罪を送る。

それに合わせて周りの武将たちも皆、自分の持ち場へと戻るために部屋を出ていくが、その間に劉備以外からのエースへの謝罪は無かった。

「あ、えっと……」
「そ……それでは……お部屋へとぎょあんにゃい……」

助けがいなくなった空間で二人はエースたちに恐る恐る案内を申し出る。

「……」
「……」

（ひ、雛里ちゃん！！　拳！！　二人共拳を握ってるよ～！！）
（それにお二人共の目に涙が……ふえ～ん……どうしよう……！）

明らかに憤慨している鈴仙と亞莎に諸葛亮と鳳統は恐怖と申し訳なさに抱き合って震える。

そんな二人を見たエースは努めて明るく言った。

「んな緊張すんなって。案内よろしくな」
「は……ひゃい！！」
「が……がんばりましゅ！！」

ガチガチと震える二人に握手を求めるが、もう手遅れだったのかぎこちない。エースも困惑してきたそんな状況の中、自分達に用意された部屋へと案内されていくのだった。

余談だが、その日の晩に諸葛亮と鳳統は心労でぶっ倒れたのだった。

あれから時間が経ち、用意された部屋の一室に三人の影。

その部屋は即席で用意されたため、三人それぞれの個室はまだ時間がかかるためしばらくは一室で三人共に寝る予定だ。

それはまだいい。まだ許容できるし、むしろもうずっとそのままで大歓迎なのだが……

「もーーー！！　何よさっきのアレ！！」

「本当です！！　酷過ぎます！！」

鈴仙と亞莎の二人は激しく憤慨し、怒りに顔を真っ赤にさせていた。

鈴仙の元から紅い目はもはや怒りだけを表し、亞莎も普段からは考えられないほどの音量でやり場の無い怒りを体現させていた。

そんな二人にエースはベッドに横になりながら宥める。

「落ち着けよ。あそこで暴れたらお前等まで印象悪くなっちまうだろ？」

「でも！！　それにしたって初対面で普通あんなこと言いますか！？」

「それに一言も謝りもしないのも納得できない！！」

「だから止めろって。まだおれだけだったからよかったんだよ」

「「良くない（です）！！」」

予想以上にここまで怒る二人にエースは困ったような表情で起き上がりながら二人を傍まで寄るように手招きする。

二人もそれに素直に応じて一緒にベッドに座る。それを確認したエースは乾いた笑みを浮かべる。

「もしお前等まであんなこと言われるのは我慢できねえからな。だから大人しくしててくれよ」

「それは私たちも我慢できませんよ！！」

納得できないと言った二人の目にとうとう涙が溜まってきた。

「おれはいいんだよ。元々住んでた所でなんかじゃあれくらいは当然だったから慣れてる」

「でも……こんなのあんまりです……ヒック」

「あんなこと言われて……グス……納得なんてできないよぉ……」

「おいおい！　頼むから泣くなって！」

二人にとって、いや、呉にとってエースはもはや国の重大人物というだけではなくなってきた。

エースの仲間に対する深い愛情は誰もが知り、誰もが嬉しく思っている。

仲間を愛するその姿に鈴仙と亞莎を含めた全員が惹かれ、信頼とは別の感情を抱いた。

能力なんて関係無しにエースのことが好きだという事実は誰にも変えられないし、他の男となんて考えられない。

そんな愛しい人が目の前で罵倒されるのには我慢できなかった。

そんな罵倒に耐えながら自分たちを心配させまいと作る笑顔を見て彼女たちの心が更に痛んだ。

彼女たちにとって今回のことは許容できるものではなく、彼女たちの心を抉ったのだ。

「全く……良い奴だなお前等……」

泣きじゃくる二人を宥めようと背中をさすっていた時だった。

「なら、あ奴等に認めさせればいい」

扉から不意に聞こえてきた声に三人は視線を向けると、そこには不敵に笑う趙雲がいた。

「趙雲……なんでお前……」

「私だけじゃないさ」

そう言って部屋に入ると、後ろの闇から次々と現れてきた。

「月と詠、恋にねねと華雄……それとなんで鈴々？」

「みぃたちもいるのにゃー！！」

エースの驚愕も当然。エースの部屋に趙雲を先頭とした月、詠、ねね、恋、華雄、しまいには鈴々と猛獲たち南蛮ズもやってきたのだ。

「え？　なに？　なんなの！？」

「慌てないで。いくらここが将軍の部屋から遠いと言っても音は響くから」

突然の出来事に驚く鈴仙に詠は優しく諭す。亞莎も何が何だか分からないまま、流れてた涙も拭かずに呆けていた。

「というかどうした？　急に認めさせるなんて」

「あぁ、今、そのことについて話に来たのだ」

そう言うと、趙雲はバツの悪そうな表情で謝罪する。

「すまなかったな……どうも今の皆は余裕が無い故に少し状況に過敏になっているのだ」

「いや、それはいいんだけどよ。早くその認めさせるってのを……」

「うむ……そうだったな」

そこから気を取り直して説明を始める。

「今回の件は流石にこちらに非がある。あんなチンピラみたいな態度は同じ将軍として見かねる」

「軍師としても今回のはいただけないわね。あんな同盟を潰しかねない行動は目に余るわ」

趙雲と詠の意見に皆もウンウンと頷く。

「私もエースさんがあんな風に言われるのは悲しいです……」

「恋も……」

「恋は今にも襲いかかろうとしていたから苦労した」

「それは華雄も同じなのです」

月と恋、華雄とジト目で華雄を見るねねも今回のことは許容できなかった様子である。

「にいをバカにする奴と仲良くなんてしないのにゃ！！」

「ちょっと今回の愛紗と焔耶は失礼だったのだ！！　お兄ちゃんは良い奴なのだ！！」

「ああ、生憎私も一時期とはいえ、一緒に旅した友を愚弄されて我慢できるほど教養がなってないのでな」

猛獲、鈴々、趙雲も完全にエースの味方のようである。

その事実にエースたちの頬も自然と緩む。

「でも、そんな認めさせるってどうすれば……」

亞莎は不安そうに趙雲に聞いてみる。ここまで言い切るのだから何か算段があってのことだと思ったのだから。

「なに、簡単なことだ」

亞莎の問いに対して趙雲は自信タップリに返す。

「単純な奴等には単純な方法でエースの実力を認めさせるのだよ」

その部屋にいる全員は動き出す。

理由は単純明快。友のため、愛しい者のためである。

明日、彼女たちは動き出す。

## お目見え（後書き）

次回はバトらせます！！　お楽しみに！！

## 一触即発！！　本気を出すまでもねえ（前書き）

やっっっっっとテストが終わったぁぁぁぁぁぁ！！

と思ったら今度は１０月丸々を大学の実習に使うので書くのは難しいですが、それまでの間に全力で二つのストックを作って１０月中に更新させようと思っています。

あまり書けなくてすみません……

それでも、この小説だけでなくなのはの小説も見捨てずに見てくれたら嬉しいです。

**一触即発！！　本気を出すまでもねえ**

エースが蜀に来てから一夜明けた。

外は既に日が発ち、街が賑わい始めた時だった。

コンコン

「愛紗。今大丈夫？」

「ん？　あぁ、問題ない」

聞きしに勝る猛将・関羽の部屋の扉の向こうから呼びかける声。

その聞き慣れた声で誰が来たのかを判断した関羽は何の躊躇いも無く部屋に招き入れた。

「どうした？　詠」

呼ばれたの同時に詠が入ってきた。

「うん、今日の午後の公式試合の時間調整に来たの」

「試合？　なんのことだ？」

関羽が詠の言葉に頭を捻る。

そんな関羽に詠はさも当たり前の様に言った。

「なんでも、エースが愛紗と焔耶に試合を申し込んだって話よ」

「なに？」

ここで今日初めて関羽の眉に皺が寄った。

そんなわずかな動きを詠は見逃さなかった。

「早い話がエースの実力を示すのよ。この軍にはエースたちの実力は全然知られてないから」

「ほう……要は我等で力の誇示と言う訳か……」

関羽は表情を歪めた。

（仮に敵地とは言わんが、味方の少ないこの状況で力の誇示か……嘗められたものだな）

ましてや、到着して日が浅い時にこの宣戦布告は大胆すぎる。

相手には緊張というのはないのか……

そう考えると関羽の中の何かが燃え上がってきた。

「なら。いつ頃がいい？」

この言葉に詠は内心でほくそ笑み、すぐに次の準備に移る手立てを思い描いていた。

「ぶー……結局鈴々たちは用意だけなのか～……」
「ぶーたれるな。正直言ってこれは作戦なんて大業張って言うほどの物でないしな」

現在、中庭では鈴々と趙雲たちは中庭の整備に追われていた。

「なあ星」
「どうした？」

準備中の趙雲にエースは真名で以て呼ぶ。

実は、昨晩の内にエースたち呉の一行は趙雲と真名を交換し合っていた。

その時の鈴仙と亞莎のジト目っぷりはあまりに露骨だったが、一緒のベッドでエースを挟むように鈴仙と亞莎が寄り添って眠る頃にはその日の不機嫌もなんのその。二人の機嫌が戻るどころかテンションも最大を振り切った。

冥琳くらいとはいかないが、二人は自身の胸の膨らみを押し付けるのも忘れなかった。しかし、当の本人はすぐに寝てしまい、羞恥心と期待を賭けた戦いは空しく終わってしまったのに酷く落胆した。

余談だが、元・董卓軍の面々は部屋を出る際に「変なことはするな」と注意されたのだが、エースがその意味を理解することはなかった。

「いや、なんかここまでやってもらって悪いなぁってな」
「ふ、気にすることじゃない。昨日は特に愛紗のことはともかく焔耶……魏延のことは桔梗も了承済みだ」
「誰だ？　そいつ」
「桔梗……厳顔という名でな、魏延の親代わりなのだよ」

星は準備を忘れずに着々と進めながら話していく。

「どうも焔耶は自意識過剰なところがあるからできたら叩き直してほしいとのことだ。ますます負けられんだろう？」
「へ～」
「なんだ？　やる気が出ないか？」
「そう言う訳じゃないんだけどなぁ。ただ……」
「ただ？」

エースの気の無い返事に星は意外そうに首を傾げる。

だが、その後の言葉に面を喰らってしまった。

「そいつ等が万全じゃねえとこっちもツマんねんだよなぁ……」
「ほう……」

手で顎を支えるようにあぐらをかいて言うエースに星は興味深く息を吐いた。

エースは理屈でよりも本能で感じる部分が大きい。どんな手か分からないが、相手の強さを正しく把握できているようだ。

星はエースの天性の闘いの才能とは別の戦中のエースの並はずれた観察眼、簡単に言えば予知に似た力を持っていると考えていた。

実際に星はその一端を垣間見て敗れているのだから。

そして、エースは相手の強さをその並はずれた観察眼で感じ取っていると星はそう思っていた。

もはや、達人どころか賢者の域にまで達したかのような雰囲気を思わせた。

そんなエースがこう言っているのだ。星にはただの余裕とは思えなかった。

「そうか……一応アレでも我が軍きっての猛将なのだがな」

「そっか……まあ頑張るさ。あいつ等も応援するって言ってるしな」

「あいつ等？」

エースの視線の先を見ると、そこには一緒に中庭の整備を手伝う亞莎と鈴仙がいた。

「あの二人は普段はすげえ頼りになるんだけどよ、昨日のことが初めてじゃねえんだけどすげえ泣き虫なんだ」

「それだけ慕われてるってことだな」

星の言葉にあぁ、としみじみとして言うエースが新鮮だったのか星は少しエースを見つめる。

その視線と意味を同時に悟ったエースはポケットに手を突っ込む。

「あいつ等だけじゃない。呉の皆や月たちや凪たちとか気付けば仲間がたくさんできたってな」

エースの世界での世界的にも歴史的にも大きい“あの”戦争のことを思い出した。

自分はあの日ルフィを生かして命を絶った。

だが、それでもこうして生きた。

その時は独りだけ、自分を理解して受け入れてくれた仲間はいなかった。

だけど、この世界でも前の世界の仲間にも負けない程大切に想い、想ってくれる仲間ができた。

「だから、あいつ等には笑って欲しいんだ……おれのことで悲しむ必要なんか無い」

「……」

「あいつ等の期待には応えてやらねえとな」

「エース……」

空を仰いで告白するエースはずっと笑顔だった。

だが、何故だか星にはその笑顔に哀しみを感じた。

「よし、もう腹減ったからなんか食ってくるわ」

「あ、あぁ……後は我等がやるからその間に二人の鼻をあかす力を蓄えておけ」

「おう！」

星はエースの声に意識を戻し、エースを帰らせる。彼は亞莎と鈴仙を連れて城内へ戻っていった。

「……英雄にも悩みはあるというものか」

その言葉はだれに言うでもなく、今の時点で全く意味の無いものとして消えていった。

そして、約束の決闘の時がきた。

日は昇り、立っているだけで汗ばむような温度になってきた。

それにも関わらずにギャラリーも多く、武将は全員集合。蜀の兵も興味本位で見物に来ていた。

「おのれ火拳……絶対に許すまじ……」

日陰もない中庭の真ん中では武器を持って悠々と佇む関羽と魏延がいた。

関羽は一見冷静に精神を統一させているように見えるが、実際の

ところ、心が落ち着かないでいた。

派遣から間もない時間での力の誇示。それはつまり自分たちが嘗められているという認識に至った。

そして、魏延の方は目に見えてかなり怒り心頭であった。

「ねえ、どうしたの？　あの脳筋」

遠目で見ていた馬超のいとこの馬岱が近くにいた星に聞いてみた。

「ああ、確かエースからの伝言だろう」

「伝言？」

星はニヤっと口角を吊り上げる。

「『二人いっぺんにノしてやるよ。遠慮無く来い筋肉共』だそうだ」

「うわぁ……すごい度胸だね……」

（もっとも、そんな出鱈目を流したのは……詠だけどな……表面には出さないが、内心では煮えくりかえっていたということか……）

星は素直でない仲間に苦笑を浮かべる。

星の体が徐々に汗で湿ってきた時、遂に現れた。

「この庭、呉のよりも狭いな」

ギャラリーの外から何事もないかのようにエースが歩いてきた。

今回の件の中心人物か、又は噂の天の御遣いだというのか蜀の兵

は反射的にエースを避けて中庭に続く道を作った。

「ほう、威勢の良い御仁のようじゃのう」

「ぶ～……鈴々も闘いたかったのに～」

星の左右から聞こえてきた声に星と馬岱は視線を向ける。

そこには酒瓶を傾けて意気揚々な厳顔と不満そうな鈴々がいつの間にかいた。

「桔梗か。どうだ？　一目見た感想は」

「そうじゃの～……焔耶はともかく愛紗と同時に相手をしようとする気概は認めるが、いささか無謀な気も否めんしの～……これも若さか……」

「なに一人で言って落ち込んでるのだ？　それよりも始まるのだ」

鈴々に促されて星や周りの武将も中庭へと目を向ける。

闘いのゴングは間近にまで迫っていた。

（ほ～……なにやら御立腹そうじゃねえか？）

エースは屈伸などをして準備運動をしながら前方で佇む関羽と魏延を見据える。

そして、二人の雰囲気も表情も穏やかでないことがよく分かる。

（でも、こっちもあいつ等の前じゃあみっともない姿は見せられないんでね）

ギャラリーを見渡し、今回の件で世話になった蜀の面々や呉から付いて来てくれた二人に感謝する。

それに笑みを見せたエースを快く思っていない者もいた。

「「……」」

今から直接闘う関羽と魏延にとってはエースの笑みも余裕に見えてしまった。

「おい、火拳」

「うん？」

魏延は不愉快そうに低くした声で運動を続けるエースに声をかける。

「愛紗と私の二人同時とは……随分と余裕じゃないか？」
「え？　それおれが言ったんじゃあ……」
「そうだな……少し見くびってはしないか？」
「聞いてねえな……」

全く人の話を聞いてくれない二人にエースも参ったと頭を掻いてしまう。

だが、そんな中でもエースの笑みは消えなかった。

それはまぎれもない自信の表れからだった。

エースは二人に向き直る。

「なあ……ここは一つルール……決まり事をしようぜ」
「決まり？　なんだ？」

思わず横文字を使い、訂正する。魏延の探るような一言の後にエースはゆっくりと三本の指を立てて二人に見せる。

エースの意味不明な行動に二人は訝しむように目を細める。

そんな二人にエースは確固たる自信を付け加えて言った。

「三分、おれは防御に撤する」
「なんだと？」

エースの言葉にじれったいと思った関羽は不機嫌のままに聞く。

「三分だけおれは一切の攻撃はしないし、能力も使わねえ。だけどお前等は自由におれに攻撃をしてもいい、そういうことだよ」

本人としては二人だけに言ったつもりなのだろうが、その言葉は周りのギャラリーにも響き、全員を驚かせることとなった。

ガヤガヤと一般兵と武将たちもあまりの無茶な提案に騒然となっていた。

「貴様……少し嘗めすぎやしないか？」

そんな周りの雑音も関羽の底冷えさせる声によって一瞬でかき消されてしまった。彼女の抑えきれなくなった怒気が周りにだだ漏れであるのが原因だった。

ただでさえ一般兵の何十倍もある関羽の威圧に魏延の怒気もプラスになっている。

だが、そんな怒気を前にしてもエースは余裕を崩さない。

それどころか腰を低くして独特の構えを見せながら挑発まがいに続ける。

「お前達からしてみりゃおれが油断していると思っているようだが言っておくぜ……これは余裕ってんだ」

「「……！！」」

その一言に二人は武器を構えながら一斉にエースに走っていく。

エースは二人が突っ込んでくるのを見てより一層口角を吊り上げる。

「「はあああああぁぁぁぁぁ！！」」

そして、二人の武器が地面を砕いた。

## 弱さという名の強さ（前書き）

う～ん……この調子だとこの小説は残念ながら１００話越えるかな～……と思えてきました。

最近、『魔人探偵が幻想入り』というニコ動画ハマってしまいました。あまり知られてないようなのですが、謎の中毒性があって面白くて全部見てしまいました。

それと、もう一つ、１０月中は大学の実習になるので更新はストックを消費していく感じなので速度は遅くなってしまいます。
これも９月最後の更新となります故、ご承知してくださいてください。

僕からのお知らせは以上です。あとは、この前の関羽と魏延に対する批判が強く、どう返信したら良いか分からなくなってしまいました。

## 弱さという名の強さ

「うわぁ……あんなこと言っちまって大丈夫かよ……」

エースの挑発を目の当たりにした馬超はあまりの大言壮語に少し冷や汗を流していた。

周りも馬超と同じ様に猛将相手への挑発に無謀さを感じていた。

……何人かを除いては

（ほう……これはこれで面白くなってきたな……）

星は驚愕する周りのギャラリーを尻目に一人だけテンションが上がっていた。

蜀の中でエースと直接手合わせた者は董卓軍以外ほとんど皆無だと言ってもいい。

だが、直接対峙、拳を合わせた時、初めて体感する相手の力量、気迫、威圧、殺気、そして……

次元の違いというものがある。

私は納得できなかった……今闘っている男を……

今まで、私は鈴々と共に世直しの旅をしていた最中に桃香さまに出会い、自分が武器を振るう意味を頂いた。

桃香さまの靖王伝家を頼りに一から、本当に何も無い状況から三人で世直しのためにここまでやってきた。

数々の問題、強敵を退け、仲間も増えていった。

最早、我等に敵は無いと、これで我等の念願である太平の成就が成されたと思った。

あの虎牢関での戦いの日までは……

突如として現れた天の御遣い。

その者の術は炎を操り、森羅万象を焼き尽くす。

わずか数刻の内に麗羽、曹操、孫策といった猛将の軍を壊滅寸前にまで追い込んだ。

そして、星と夏侯淵を二人同時に相手して退けたという話は信じられなかった。

なにせ、急に現れた輩のおかげで我等の障害が増えたのだから……

そして……

「余所見とは余裕だな？」
「！？」

私は目の前の男の声に意識を現実へと戻す。

「後……もうちょいだな」
「嘗めるなぁぁぁぁぁぁ！！」

魏延が自慢の武器でエースに殴りにかかるが、エースは何の苦もなく最小限の動きで避ける。

髪の毛が掠ろうとも彼は顔色一つ変えない。

まるで、攻撃の先を予知しているかのように……

「くそっ！　ちょこまかと！！」
「涼しいな。この時期にはピッタリだな」
「この！」
「でやあああぁぁぁぁぁ！！」

態勢を立て直し、二人でエースに襲いかかる。

「見えてるぜ」

だが、二人の攻撃の間を見事にすり抜けてエースは二人から距離を置く。

「はぁ……はぁ……」
「くっ……貴様ぁ！　一体何のつもりだぁ！！」

さっきから攻撃すれど避けられる。この繰り返しである。

関羽と魏延は息が上がっているというのにエースは呼吸の乱れどころか汗さえもかいていない。

「へっ、そりゃそうだろ？　今のお前等相手に能力使っちまったら弱いものイジメでしかねえからな。これで充分だ」

「どこまで人を虚仮にすれば……」

二人の怒気はもはや最高潮にまで達し、その場にいる全員がそんな彼女たちの怒気を見た目で確認できるほどだった。

「まあ、もう三分経っちまったしな。ここで休憩といこうじゃねえか」

それに対してエースはまるでこの状況を楽しんでいるかのように大胆にも二人に背を向けて去ろうとする。

「待て！！」

そんなエースの言動に関羽は単体で向かって青龍刀を横一閃に振るう。

だが、エースは振り向きもせずにしゃがんで避け、関羽の空いた足を払う。

「あぁ！」

関羽は疲労からか力が入らないまま転ばされる。

「三分だ。次の休みが明けたらこんな暇つぶしは終わらせるぜ」

エースはそのまま鈴仙と亞莎の待つ場所へと帰っていった。

「くそ！！　なんで勝てない！？」

魏延は乱暴に自分の武器を放った。

武器は地を割らんばかりの轟音を轟かせて落ちた。

「くそ！　くそぉ！！　なぜあんな奴に嘗められているのだ私は！！」

ヤケクソ気味に地面を叩くその姿はまるで駄々をこねる子供そのもの。世辞にも美しいとは程遠いものだった。

そんな魏延の前に現れた者がいた。

「焔耶」

地の底から聞こえるような冷めた声に魏延が表を上げると、そこには自分の師匠とも呼べる者がいた。

「桔梗さ……」

魏延の師匠……厳顔の姿を見た瞬間に魏延の肝が一気に冷めた。

なぜなら、そこには厳顔の憤怒の表情があったのだから

「お主……さっきの試合……なんだアレは……お遊戯のつもりか？」

「あ、あれは……」

「いや、あんなのお遊戯にも劣る……貴様の闘いの中で最もひどい……見るに値しないものじゃった」

劉備と厳顔に頭が上がらない魏延にとって今の状況は最悪だった。

だからこそ、彼女はやってはならないことをやってしまった。

「でも、攻撃さえ当たればあんな奴なんて……！」

この言葉に厳顔は……

「いい加減にしろこの阿呆！！」

「！！」

魏延の胸倉を掴み、思いの丈を吐く。

「この期に及んでまだ自分が強いと言い張る気か！！　情けないにもほどがある！！」

「で、ですが……」

「よく聞け！！　お前は奴より弱い！！　それも遥か格下じゃ！！」
「！！」

その一言に魏延は何の抵抗もできなくなる。

自分が信じてきた強さが否定されたのだから……

「貴様がいつまでも妄信している限り強くはなれん！！　だれにも勝てん！！」
「じゃ、じゃあどうすれば……」

厳顔の一言に大人しくなった魏延は分からなかった。

それならどうすればいいのか……

そんな魏延に厳顔はさっきとは違って声を抑えて言う。

「なら、認めろ」
「え？」

予想外の一言に魏延は分からなくなった。

「認める……とは……」
「簡単なことだ。奴の強さを認めろというのだ……」
「そ、それは……」

どういうことか……

そう聞こうとした時、厳顔は魏延の胸倉を離した。

「お主……強い者と闘う時はどうしろと教えた？」
「は……えっと……」
突然の問いに動揺しながらも魏延は思い出そうとしていた。
強い者と……これは確か……
「礼で始まり、礼で終われ」
「そうじゃ。強い者と闘えばそれ相応に得るものは必ずある。だからこそその相手に感謝するのじゃよ」
厳顔はしっかりと言い聞かせるように静かに、だが、優しく続ける。
「ここまで言えばもう分かったじゃろう？　今の主がすべきこと」
「……なんとなくですが……」
厳顔は魏延の表情を見て安心した。
これで、また一つ強くなれると……

（くそっ！……なんてザマだ……！）

関羽は自分の情けないさっきまでの姿を思い返し、悪態を自分に吐いた。

相手は丸腰、しかも二対一でこのザマとは……

私はこのやりきれない気持ちを整理できないまま休憩していた。

「随分とまあ……こっぴどくやられたものだな」

ここで星が関羽の傍にまで近付いてきた。

「……何の用だ」

いつも通り含み笑いを浮かべる星に関羽は追い返さんと言わんばかりに睨めつけるが、星はそのまま動こうとしない。

「なに、みっともない今のお前に助言でもしてやろうと思ってな」
「……」
「怒ってもこの状況を打破できるわけがない……今のお前は相手の力量も掴めない程目が曇ってるらしいな」
「なに？」
星の言葉にさらなる怒気を膨らませるが、趙雲は変わらぬ態度で挑む。
「一体なにをそんなに恐れている？」
「恐れだと？」
「ああ、武器を振りまわすお前からはそうとしか感じなかったが」
「……」
「武器に迷いを纏わせたままエースに……いや、迷ったままともに相手になる奴などいるのか？」
星の追究に関羽はなにも言えなくなってしまった。
関羽は自覚していたのだ。
それは恐れ。
エースの強大すぎる力がこの蜀の地を飲みこんでしまうのではないかという懸念。
間近で見た強さの大きさに関羽は知らずに呑まれていたのだった。
だが、関羽の真意はそれだけではなかったのだ。

「ほら、あともう少しで休憩は終わる。少しでも体力を回復……」
「……星」
関羽は去ろうとする星に小さく、弱々しく聞く。
「私は……弱いのか？」
ただ一言、それ以上はなにも聞かない。
関羽のもう一つの真意がこれ、切望である。
間近で見たエースの強大な力に恐れとともに憧れもあった。
いや、正確にはその感情が大半を占めていた。
絶対的強者を前にした者が必ずしも抱く感情、畏怖と憧れ。
前者は己を凌ぐ強大な力に抱くもの。
後者は強さを追い求める者が抱くものである。
関羽はこれまで我流で己を鍛え、今では大陸屈しの兵へとのし上がった。
だが、それでも敵わない者たちがいることも事実。
恋やエースといった才能に溢れた者が羨ましく、彼等が輝いて見えていたのだった。
「私は……自分が弱いという事実を認めたくなかったのだ……」

「なるほど、それなら今の試合も納得だ。自分から逃げる者にはエースどころか私の相手にすらならん」
「ふ、お前の言う通りだな」
弱い自分を否定したかったがために自分から逃げていた。
今では自分の滑稽さに笑いすらこみ上げてくる。
泣きたいのか、笑いたいのかさえ分からなくなっていた。
その時だった。
「なら、もう逃げるのは止めるんだな」
「え？」
星からの意外な一言に関羽は呆然となる。
「お前はもう自分の気持ちに気付いたのだろう？　ならば後はすべきことは分かるな？」
「……」
「確かにエースの強さに嫉妬する気持ちも分からんではない……だが、それ以前に自分に勝てないようでどうする？」
「そ、それは……」
関羽も返す言葉がないのか何も言えないでいる。
「今、お前のすべきことは同盟の使者を目の敵にすることではなく、まずは強くなることだ」
武も、心もな、と付け加えて星は魏延の方を見据える。

「見ろ。焔耶はバカだが、バカだからこそ素直な面もある」

関羽も見ると、厳顔に頭を殴られ、馬岱にバカにされながらも真剣な表情でエースを見据えていた。

「後はお前もいい加減素直になって、弱い自分も、エースも認めたらどうだ？」

星は関羽に背中を見せて去り際に告げる。

「皆もそうやって自分の弱さと向き合って強くなってきたのだからな……」

そう言ってギャラリーの中へと姿を消していった星の言葉が関羽の中に反芻する。

「そう……だったな……なぜ忘れていたのだろうな……」

憧れも嫉妬も悪いことじゃない。

それに向かって強くなるという目標となりえるのだから。

だが、それと同時に強くなることは自分の中の弱さと向き合わなければならなくなる。

それには相応の努力と覚悟と苦痛と失敗が付きまとって来る。

だからこそ、その強さを得ることに掛け替えの無い価値が生まれるのだ。

修業時代も自分の弱さに絶望し、強くなるためにその自分の弱さを受け入れた。

弱いことは悪いことではない。本当に悪いことはその弱さから逃げ出し、自分を偽ることなのだから……

「なるほど、奴が……エース殿が本気を出してくれない訳だ」

彼の強さに嫉妬し、逃げていた私に本気など出す筈もない。

なら、もう止めよう。

逃げるのはもう今日で終わりだ。

私は全てを受け入れる。

自分の弱さを……そして貴殿の強さも!!

「また……共に闘ってくれるか？……相棒」

自信の青龍刀に問いかけると、青龍刀の刃が太陽の光でより一層に輝いた。

まるで、関羽の問いに応えるように、強く、とても強く光った。

「ありがとう……もう大丈夫だから……」

だから、また共に歩もう。

どんなに困難でも、どんなに傷ついても、どんなに立ち止まろうとも。

今まで、そうやって強くなってきたのだから……

「……よし」

関羽は己の信念を胸に再びエースの元へと歩き出す。

また、自分が強くなるために……

「よう……来たな」

エースはポケットに手をつっこんで笑みを浮かべながらこっちを見据えている。

エースは直前までこんな勝負を一瞬で終わらせようと思っていた。

再びやってきた二人の目を見るまでは……

先程までには無かった二人の光。

そのことに少し思案していると、二人から意外な言葉を投げられた。

「すまない」

「すみませんでした！」

急に自分に頭を下げてきたのだ。さっきまで親の仇のように見ていた二人が

突然の言葉に本人はもちろん、ギャラリーも少しザワザワしているが、二人は構わずに続ける。

「桔梗さまから聞いた……私は自分を強いと過信していた、と……その腐った根性を叩き直されて来いと言われた」

「私は気付きました……貴殿の強さに嫉妬し、自分の弱さを認めていなかったことに……」

どちらも恥ずかしそうに唇を噛みながら話すのをエースは黙って聞いていた。

「だけど、この世界は広い……上には上がいることはもう認めなけ

ればならないと分かった……そんなことも知らず、あんなことを言った自分が恥ずかしい……」

「私もです……そんな我等が貴方に敵う筈が無かったのです……」

交互に話す二人はそこでまた下に向けていた視線をエースに向ける。

自分の真摯な気持ちを籠めて。

「だから、だからこそ闘わせてください！　私たちは全力でいきます！！」

「お前は全力でなくてもいい……今の我等にはそれで精一杯なのだから！！」

二人がそう言って武器を構えると、エースはポケットから手を出した。

そして、こう続けた。

「いや、もう手を抜く必要はなさそうだな」

エースはここにきて認めたのだ。

目の前の二人は闘うに値するものだと……

故に、エースは本気を出すことにした。

エースは姿勢を低くして独特の構えを見せると……

「なっ！」

「！！」

その力を解放させた。

『『『！！』』』

エースを中心に炎が立ち上り、やがては炎の渦を創り出した。

そして渦はやがて火柱となり、天を衝く。

「はっ！」

火柱は霧散させると同時にエースが勢いよく火柱から出てきた。

着地し、炎の余波を撒き散らせた。

「さあ、そろそろ始めようぜ？」

「「！！」」

「本当のケンカを」

腕が、足の各部に炎が灯るエースからは今までに感じたことの無い圧力を感じる。

むしろ、ここからが本物の勝負だと肌で感じた二人はすぐにエースへと斬りかかる。

相手に一瞬の隙を見せればその瞬間に全てが終わる。

そう思った二人は何の迷いもない斬撃を見舞わせようとした。

だが、その攻撃も何の苦も無く避けられた。

「業火・炎翼（ごうか・えんよく）……」

エースの腕が巨大な炎の翼へと変化する。

「なに！？　まさか……！！」

「飛ぶのか！？」

ギャラリーから見ていた星と鈴々が驚愕し……

「火炎車（かえんぐるま）！！」

『『『飛ばねえのかよ！！』』』

「すごいです！！　翼を回転させて円状に攻撃するなんて！！」

「うん！！　でもなんで翼なのかってツッコまなくてもいいよね！？」

蜀からのツッコミと亞莎と鈴仙二人の応援で更に場が盛り上がる。

「う……く……」

「これが……火拳か！」

武器で受け止められないと判断した二人は咄嗟にしゃがんで避けてはいたが、そのせいで態勢が崩れた。

そこを狙われてしまった。

「火小星（ひこぼし）！！」

「え！？」

「なんだ……！？」

エースは翼を広げると、翼を解体させて大量のテニスボール級の火の弾を創り出し……

「これで、終わりだ！！」

３６０度全方向に火の弾を直線状に飛ばし……

二人を弾幕の嵐へと引き込んだ。

「こ、これは一体……」

周りのギャラリーは咄嗟に目を閉じてうずくまっていたのだが、炎の嵐が治まると思うやすぐに顔を上げてエースのいた場所を目にすると……

そこには信じられない光景が広がっていた。

所々に服を焦がした二人の武将は地に倒れていた。

呼吸はしているのは明白だったのですぐに死んではいないと分かった。

そして、その二人を肩に担いで介抱するエース。

相も変わらず、彼は不敵に笑って告げた。

「中々楽しめたぜ？」

この日、蜀という国は一つの伝説を

その胸に

焼きつけたのだった。

## 弱さという名の強さ（後書き）

ここで技説明です

『業火・炎翼』……読み方は「ごうか・えんよく」で、文字通りエースの腕が翼になります。ストーリーによってはそこから何かに派生するかもしれませんし、腕以外のところから生やせるので意外とオールラウンダーな技です。モデルはマルコです。

『火小星』……読み方は「ひこぼし」です。これはどんな技からも派生かのうであり、テニスボールくらいの大きさで大量につくれますが、威力は弱く、飛ばしたら真っすぐにしか飛びません。

## 更新が滞ります

突然ですが謝罪しなければなりません……

実はストックを放出するといったのですが、日常の話は凄く時間もかかってしまったので一話しか投稿できません……しかも内容も中途半端となっています……

この日まではストックを作る予定だったのですが、やっぱり本編と日常は違うと感じました……こんな口だけの作者ですが、１０月が終われば目一杯書くのでどうか見捨てないでください

心からお詫び申し上げます

もう一つの作品は出来上がっているのでそっちを排出していきます

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3553q/

火拳は眠らない

2011年10月1日11時16分発行